

市道遺跡Ⅲ
辻遺跡
儘田遺跡Ⅱ
西裏遺跡

沖積地に営まれた古墳時代から中世の集落址調査

2008.3

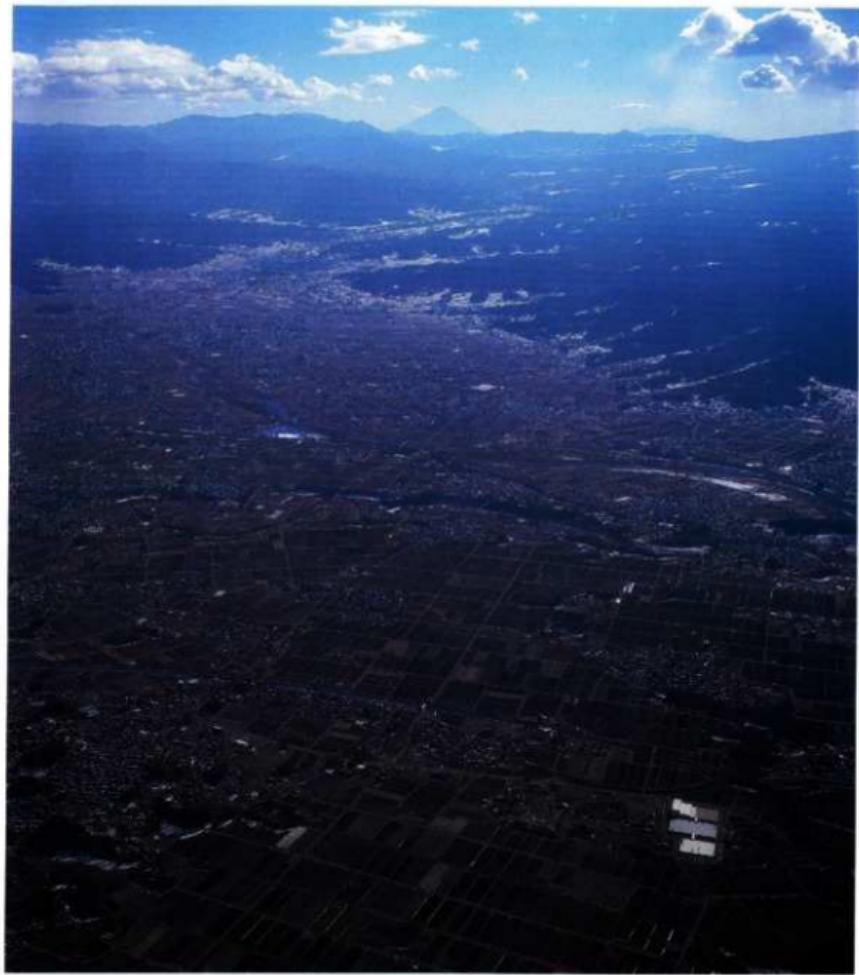
佐久建設事務所
佐久市教育委員会

市道遺跡Ⅲ
辻 遺 跡
儘田遺跡Ⅱ
西 裏 遺 跡

沖積地に営まれた古墳時代から中世の集落址調査

2008.3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会



北方より佐久平を望む

中央部に流れるのが千曲川、写真上部中央にそびえるのが富士山である。右側からせり出しているのは蓼科山麓の山裾である。国道18号より分かれ佐久平を南北に貫き山梨に至るのが今回の調査対象遺跡である国道141号である。近世には佐久甲州街道とも呼ばれた。



今回の調査においては古墳時代住居址を中心にカマドの残存状況が良い資料に恵まれた。特に煙道部が崩れずにトンネル状に検出された遺構があった。写真は煙道部の断ち割り写真であり、カマド火床部より水平に煙道が掘られ地表より垂直に掘られたピットと交わる。この垂直の穴は煙道部よりも深く掘り込まれており、煙道部への雨水流入防止などが考えられる。ピット内に落ち込んだ状態で出土した大型甌と円錐は煙り出し部の構築材であろう。

また、下の完掘状態の写真からカマド火床部を除けば被熱し赤化しているのは燃焼部と煙道部の側面及び天井部のみで、特に煙道部は側面下部や底面はほとんど被熱の痕跡が確認できない。この事から煙道部底面の焼土は天井や側面の崩落土であり構築時の姿ではない事がわかる。





市道遺跡Ⅲ H54号住居址（南壁に張り出しひびを持つ）



市道遺跡Ⅲ H54号住居址カマド（煙道部が方形に掘り込まれている）



腰帶金具「丸洞」

H6-21



刀装具「鞘金具」 H9-15



「袋状鉄斧」

H9-14



「袋状鉄斧」 H19-5

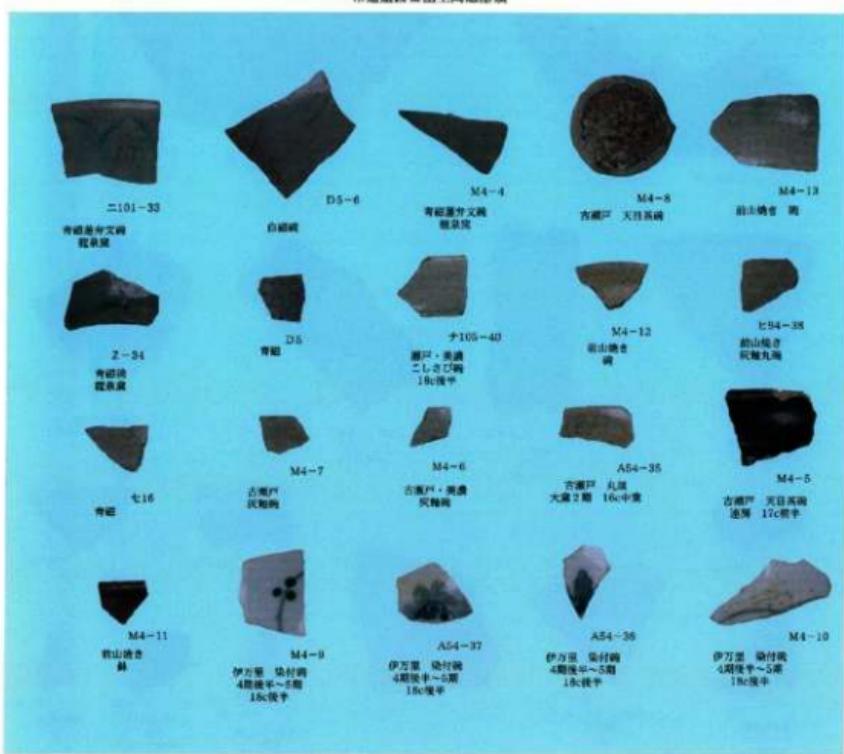
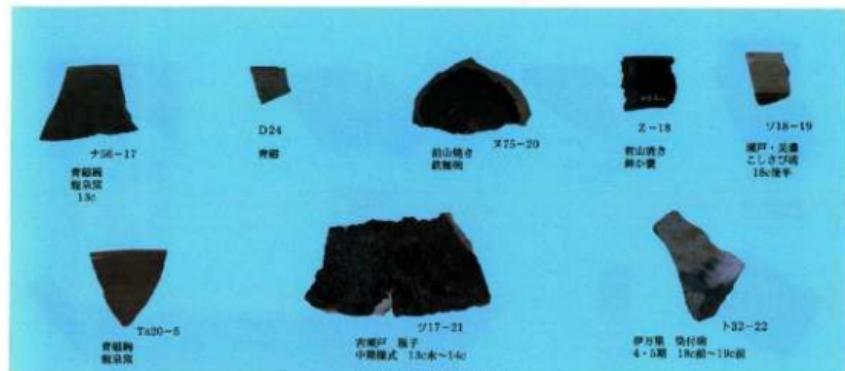


「二重の有規式円頭風字鏡」

H5-5



信田遺跡Ⅱ出土遺物





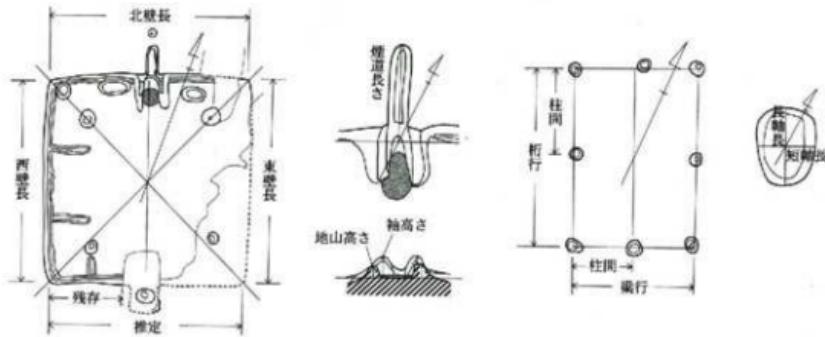
江瀬跡出土陶磁器類

例　　言

1. 本書は、佐久建設事務所が行う国道141号改良工事に伴う市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査原因者　　佐久建設事務所
3. 調査主体者　　佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び所在地
三千束遺跡群　市道遺跡Ⅲ　（IM III）佐久市跡部字市道
中道遺跡群　　辻遺跡　　（NT J）佐久市野沢字辻
儘田遺跡Ⅱ　　（Ma II）佐久市野沢字儘田
西裏遺跡群　　西裏遺跡　　（HNU）佐久市本新町字西浦
5. 調査期間及び面積
発掘調査　平成16年9月9日～平成17年12月1日
整理作業　平成17年12月2日～平成20年3月19日
開発面積　約38,000m²
調査面積　11,081m²
市道遺跡Ⅲ　5,195m²
辻遺跡　　2,911m²
儘田遺跡Ⅱ　2,319m²
西裏遺跡　　656m²
6. 本遺跡の航空写真・出土遺物の鑑定・保存処理・実測等の委託は以下の通りである。
航空写真撮影　日本空間情報技術株式会社
金属製品保存処理　株式会社 東都文化財研究所
樹種・種子鑑定　株式会社 バレオ・ラボ
獸骨鑑定　株式会社 バレオ・ラボ
7. 調査員と担当者は以下の通りである。
市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ　富沢一明　佐々木宗昭
西裏遺跡　　出澤　力
市道遺跡Ⅲ（平成17年度分）　富沢一明　出澤　力　佐々木宗昭
8. 本遺跡の整理作業は富沢と佐々木が行った。また、石材鑑定は羽毛田、縄文土器については小林が分類を行った。原稿は文頃か文末に文責を記載した。その他記載のないものは編集・執筆を富沢が行った。
なお、陶磁器類は（財）長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に、石製模造品は（財）長野県埋蔵文化財センター 桜井秀雄氏に、縄文土器は北相木村考古博物館 藤森英二氏に、風字礫については國學院大学教授 吉田恵二氏にそれぞれご教示頂いた。記して感謝申し上げる。
9. 調査から報告書作成に至る過程で以下のの方々並びに各機関のご指導・ご協力を頂いた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる。（順不同・敬称略）
(財)長野県埋蔵文化財センター　長野県考古学会　佐久考古学会　地元跡部・野沢・本新町区の皆さん
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所　冀　淳一郎　川越　俊一　小林　謙一　平野　修
飯島　哲也　風間　栄一　内堀　団　直井　雅尚
10. 本書及び市道Ⅲ・辻・儘田Ⅱ・西裏遺跡からの出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

- 4道跡は各章立てにより記載したが凡例は以下をもって共通とする。
1. 遺構の略記号は、住居址（H）・掘立柱建物址（F）・土坑（D）・溝状遺構（M）・堅穴状遺構（T a）特殊遺構（T）である。
 2. 掘図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については掘図中にスケールを示す。
竪穴住居址・掘立柱建物址1/80 カマド1/40 土坑1/80
土器1/4 石器1/4・1/3 金屬製品・土製品1/2 石製模造品1/1
 3. 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」として示した。
 4. 土層・遺物胎土の色調は、1988年版「新版 標準土色版」に基づいた。
 5. 遺物押図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
 6. 調査区グリッドは各遺跡での区割りに従い、間隔は4×4mに設定した。
 7. 住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、火床部は面積に含め計測してある。
 8. 遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。
 9. 各遺構の計測は下の凡例に従つた。



10. 掘図中のスクリーントーンは以下のことを示す。その他の指定については本文中で個々に示す。



11. 出土遺物の観察表は下記項目で記載した。

土器・土質品

No.	器種	法量			成形・調整・文様			備考	出土位置
		口径	底径	高さ	外面	内面			

石器・鐵製品・石製模造品

No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
-----	----	----	-----	-----	-----	-----	----	----	------

①Noは遺構平面図での出土位置及び写真図版番号と一致する。

②出土位置の数値は床面より何cm浮いていたかを示す。Zは検出時の表探を示す。

③出土位置の区割りは住居址を四分割して北東角のマスよりI区で時計と逆周りでIV区までとする。

④器形の名称「ワツ」については「碗」「壺」「碗」の各字があり、陶磁器種別により使い別けがあるが、本報告書では「碗」で統一使用する。

目 次

卷頭カラー図版
例 言・凡 例

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
第1節 自然的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 基本層序	7
第4節 検出遺構と遺物の概要	8
第Ⅲ章 市道遺跡Ⅲ	
第1節 竪穴住居址	11
第2節 掘立柱建物址	131
第3節 土 坑	147
第4節 竪穴状遺構	161
第5節 溝状遺構	165
第6節 ピット群	167
第7節 遺構外出土遺物	178
写真図版	181
第Ⅳ章 辻遺跡	
第1節 竪穴住居址	285
第2節 掘立柱建物址	318
第3節 土 坑	324
第4節 溝状遺構	331
第5節 特殊遺構	337
第6節 ピット群	341
第7節 遺構外出土遺物	347
写真図版	349
第Ⅴ章 優田遺跡Ⅱ	
第1節 竪穴住居址	391
第2節 掘立柱建物址	422
第3節 土 坑	428
第4節 特殊遺構	441
第5節 溝状遺構	441
第6節 ピット群	448
第7節 遺構外出土遺物	454
写真図版	457
第VI章 西裏遺跡	
第1節 竪穴住居址	449
第2節 掘立柱建物址	501
第3節 土 坑	502
写真図版	503

付編 化学分析

1. 土器内面付着物の材質分析	509	4. 樹種同定	517
2. 種子鑑定	512	5. 放射性炭素年代測定	522
3. 獣骨鑑定	513		

挿図目次

第1図 市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡位置図 (1:100,000)	1
第2図 周辺の遺跡位置図	6
第3図 基本層序模式図	7
第4図 市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡調査全体図(折り込み) 『市道遺跡Ⅲ』	9・10
第5図 H 1号住居址実測図	12
第6図 H 1号住居址カマド及び出土遺物実測図	13
第7図 H 1号住居址出土遺物実測図	14
第8図 H 2号住居址実測図	15
第9図 H 2号住居址カマド及び出土遺物実測図	16
第10図 H 2号住居址出土遺物実測図	17
第11図 H 3号住居址及び出土遺物実測図	18
第12図 H 4号住居址及び出土遺物実測図	20
第13図 H 5号住居址及び出土遺物実測図	21
第14図 H 6号住居址及び出土遺物実測図	22
第15図 H 7号住居址実測図	23
第16図 H 7号出土遺物実測図	24
第17図 H 8号住居址実測図	25
第18図 H 8号住居址カマド及び出土遺物実測図	26
第19図 H 8号住居址出土遺物実測図	28
第20図 H 9号住居址実測図	29
第21図 H 9号住居址カマド及び出土遺物実測図	30
第22図 H 9号住居址出土遺物実測図	31
第23図 H 10号住居址及び出土遺物実測図	33
第24図 H 11号住居址及び出土遺物実測図	34
第25図 H 12号住居址及び出土遺物実測図	36
第26図 H 13号住居址実測図	36
第27図 H 14号住居址及び出土遺物実測図	37
第28図 H 15号住居址及び出土遺物実測図	38
第29図 H 15号住居址出土遺物実測図	39
第30図 H 16号住居址及び出土遺物実測図	41
第31図 H 17号住居址及び出土遺物実測図	42
第32図 H 18号住居址及び出土遺物実測図	43
第33図 H 19号住居址実測図	45
第34図 H 19号住居址出土遺物実測図	46
第35図 H 19号住居址出土遺物実測図	47
第36図 H 20号住居址及び出土遺物実測図	48
第37図 H 21・22号住居址及び出土遺物実測図	49
第38図 H 23号住居址及び出土遺物実測図	50
第39図 H 24号住居址及び出土遺物実測図	51
第40図 H 25号住居址及び出土遺物実測図	51
第41図 H 26号住居址及び出土遺物実測図	52
第42図 H 27号住居址実測図	54
第43図 H 27号住居址出土遺物実測図	55
第44図 H 28号住居址実測図	56
第45図 H 29号住居址及び出土遺物実測図	57
第46図 H 30号住居址及び出土遺物実測図	58
第47図 H 31号住居址及び出土遺物実測図	60
第48図 H 32号住居址実測図	61
第49図 H 32号住居址出土遺物実測図	62
第50図 H 33号住居址及び出土遺物実測図	63

第51図	H34号住居址及び出土遺物実測図	65
第52図	H35号住居址及び出土遺物実測図	66
第53図	H36号住居址及び出土遺物実測図	68
第54図	H37号住居址実測図	69
第55図	H37号住居址出土遺物実測図	70
第56図	H38号住居址及び出土遺物実測図	72
第57図	H39号住居址実測図	73
第58図	H39号住居址出土遺物実測図	74
第59図	H40号住居址実測図	75
第60図	H40号住居址出土遺物実測図	76
第61図	H41号住居址及び出土遺物実測図	78
第62図	H42号住居址実測図	78
第63図	H43号住居址出土遺物実測図	79
第64図	H43号住居址出土遺物実測図	80
第65図	H43号住居址実測図(折り込み)	81-82
第66図	H44号住居址及び出土遺物実測図	84
第67図	H45号住居址出土遺物実測図	85
第68図	H45号住居址実測図	86
第69図	H46号住居址実測図	88
第70図	H46号住居址出土遺物実測図	89
第71図	H47号住居址出土遺物実測図	90
第72図	H47号住居址実測図(折り込み)	91-92
第73図	H48号住居址及び出土遺物実測図	95
第74図	H49号住居址及び出土遺物実測図	96
第75図	H50号住居及び出土遺物実測図	98
第76図	H51号住居址カマド実測図	99
第77図	H51号住居址実測図	100
第78図	H51号住居址出土遺物実測図	101
第79図	H51号住居址出土遺物実測図	102
第80図	H52号住居址実測図	105
第81図	H52号住居址出土遺物実測図	106
第82図	H53号住居址カマド及び出土遺物実測図	107
第83図	H53号住居址実測図	108
第84図	H54号住居址実測図	110
第85図	H54号住居址カマド実測図	111
第86図	H54号住居址出土遺物実測図	112
第87図	H54号住居址出土遺物実測図	113
第88図	H55号住居址実測図	115
第89図	H55号住居址出土遺物実測図	116
第90図	H55号住居址出土遺物実測図	117
第91図	H56号住居址出土遺物実測図	118
第92図	H56号住居址実測図	119
第93図	H57号住居址実測図	121
第94図	H57号住居址出土遺物実測図	122
第95図	H57号住居址出土遺物実測図	123
第96図	H58号住居址実測図	126
第97図	H58号住居址カマド及び出土遺物実測図	127
第98図	H58号住居址出土遺物実測図	128
第99図	H59号住居址及び出土遺物実測図	129
第100図	H60号住居址及び出土遺物実測図	130
第101図	F 1号掘立柱建物址実測図	131
第102図	F 2・3号掘立柱建物址実測図	132
第103図	F 4号掘立柱建物址実測図	133
第104図	F 7号掘立柱建物址実測図	134
第105図	F 8号掘立柱建物址実測図	135
第106図	F 11・14号掘立柱建物址実測図	136
第107図	F 12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	137
第108図	F 13号掘立柱建物址実測図	138

第109図	F 15～17・19号掘立柱建物址実測図	140
第110図	F 18・21・25・27号掘立柱建物址実測図	142
第111図	F 22・23・24・26号掘立柱建物址実測図	144
第112図	1～3号柱列址及び出土遺物実測図	146
第113図	D 1～15号土坑実測図	149
第114図	D 16～25号土坑実測図	150
第115図	D 26～49・42号土坑実測図	153
第116図	D 41・43・45・47～57号土坑実測図	154
第117図	D 1・8・9・15・24・31・37～39・41・48号土坑出土遺物実測図	158
第118図	D 40・42号土坑出土遺物実測図	159
第119図	Ta1・20～23号竪穴状遺構実測図	161
第120図	Ta24・25号竪穴状遺構及び出土遺物実測図	163
第121図	M21～24号溝状遺構及びM23号溝状遺構出土遺物実測図	166
第122図	ピット実測図(1)	167
第123図	ピット実測図(2)	168
第124図	ピット実測図(3)	169
第125図	ピット実測図(4)	170
第126図	ピット実測図(5)及び出土遺物実測図	171
第127図	ピット実測図(6)	172
第128図	遺構外出土遺物実測図(1)	178
第129図	遺構外出土遺物実測図(2)	180
『住跡』		
第130図	H 1号住居址及び出土遺物実測図	285
第131図	H 2号住居址及び出土遺物実測図	287
第132図	H 3号住居址実測図	288
第133図	H 3号出土遺物実測図	289
第134図	H 4号住居址及び出土遺物実測図	290
第135図	H 5号住居址及び出土遺物実測図	291
第136図	H 6号住居址及び出土遺物実測図	293
第137図	H 7号住居址実測図	294
第138図	H 7号住居址出土遺物実測図	295
第139図	H 8号住居址及び出土遺物実測図	296
第140図	H 9号住居址及び出土遺物実測図	297
第141図	H10号住居址及び出土遺物実測図	299
第142図	H11号住居址及び出土遺物実測図	300
第143図	H12号住居址及び出土遺物実測図	301
第144図	H13号住居址実測図	302
第145図	H14号住居址及び出土遺物実測図	303
第146図	H14号住居址出土遺物実測図	304
第147図	H15号住居址及び出土遺物実測図	305
第148図	H16号住居址及び出土遺物実測図	306
第149図	H17号住居址実測図	307
第150図	H18号住居址及び出土遺物実測図	308
第151図	H19号住居址及び出土遺物実測図	308
第152図	H20号住居址及び出土遺物実測図	309
第153図	H21号住居址及び出土遺物実測図	310
第154図	H22号住居址実測図	311
第155図	H23号住居址及び出土遺物	311
第156図	H24号住居址及び出土遺物実測図	313
第157図	H25号住居址及び出土遺物実測図	314
第158図	H26号住居址及び出土遺物実測図	315
第159図	H27号住居址及び出土遺物実測図	316
第160図	H28号住居址及び出土遺物実測図	317
第161図	F 1～3号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	319
第162図	F 4・5・7～9号掘立柱建物址実測図	321
第163図	F 6・10～12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	323
第164図	D 2～11・13～15号土坑実測図	325
第165図	D 16・17・19～21・23～27・31・32号土坑実測図	327

第166図	D 28～30号土坑実測図及び出土遺物実測図	329
第167図	M 1～3・6・7・9号溝状遺構実測図	332
第168図	M 4・5・8号溝状遺構実測図	334
第169図	M 1・3～6・8・9号溝状遺構出土遺物実測図	335
第170図	T 1～3・5号特殊遺構及び出土遺物実測図	338
第171図	T 4号特殊遺構及び出土遺物実測図	339
第172図	ピット実測図(1)	340
第173図	ピット実測図(2)	341
第174図	ピット実測図(3)	342
第175図	ピット実測図(4)	343
第176図	ピット実測図(5)	344
第177図	遺構外出土遺物実測図(1)	347
第178図	遺構外出土遺物実測図(2)	348
《塙田遺跡II》		
第179図	H 1号住居址及び出土遺物実測図	391
第180図	H 2号住居址及び出土遺物実測図	392
第181図	H 3号住居址及び出土遺物実測図	393
第182図	H 5号住居址及び出土遺物実測図	394
第183図	H 6号住居址実測図	395
第184図	H 6号住居址出土遺物実測図	396
第185図	H 7・8号住居址及び出土遺物実測図	398
第186図	H 9号住居址実測図	399
第187図	H 9号住居址カマド実測図	400
第188図	H 9号住居址出土遺物実測図	401
第189図	H 10号住居址及び出土遺物実測図	402
第190図	H 11号住居址及び出土遺物実測図	403
第191図	H 12号住居址実測図	404
第192図	H 12号住居址カマド及び出土遺物実測図	405
第193図	H 13号住居址実測図(折り込み)	407
第194図	H 13号住居址出土遺物実測図(1)	408
第195図	H 13号住居址出土遺物実測図(2)	409
第196図	H 14号住居址実測図	410
第197図	H 14号住居址出土遺物実測図	411
第198図	H 15号住居址実測図	412
第199図	H 16号住居址及び出土遺物実測図	413
第200図	H 17号住居址及び出土遺物実測図	414
第201図	H 18号住居址実測図	415
第202図	H 19号住居址及び出土遺物実測図	416
第203図	H 20号住居址実測図	417
第204図	H 20号住居址出土遺物実測図	418
第205図	F 1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	419
第206図	F 3・5号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	420
第207図	F 4・6号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	421
第208図	F 7・8号掘立柱建物址、1・2号柱列址及び出土遺物実測図	422
第209図	D 1・2・4～6・8～15・17・19号土坑実測図	423
第210図	D 16・20～31号土坑実測図	424
第211図	D 33・36・39・42～53号土坑実測図	425
第212図	D 54～63号土坑実測図	426
第213図	土坑出土遺物実測図(1)	427
第214図	土坑出土遺物実測図(2)	428
第215図	T 1号特殊遺構及び出土遺物実測図	429
第216図	M 1・2・6・7号溝状遺構実測図	430
第217図	M 4号溝状遺構及び出土遺物実測図	431
第218図	M 5号溝状遺構及び出土遺物実測図	432
第219図	M 8号溝状遺構及び出土遺物実測図	433
第220図	ピット出土遺物実測図	434
第221図	ピット実測図(1)	435
第222図	ピット実測図(2)	436

第223図	ピット実測図(3)	450
第224図	ピット実測図(4)	451
第225図	遺構外出土遺物実測図(1)	454
第226図	遺構外出土遺物実測図(2)	455
《西裏遺跡》		
第227図	H 1号住居址及び出土遺物実測図	499
第228図	H 2号住居址及び出土遺物実測図	500
第229図	F 1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図	501
第230図	土坑及び遺構外出土遺物実測図	502
《化学分析及び調査結果》		
付編図 1	赤外吸収スペクトル図(上段) および蛍光X線スペクトル図(下段)	511
付編図 1	暦年較正結果	524

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5	
第2表	検出遺構一覧表	8	
《市道遺跡III》			
第3表	H 1号住居址出土遺物観察表	11	
第4表	H 2号住居址出土遺物観察表	17	
第5表	H 3号住居址出土遺物観察表	19	
第6表	H 4号住居址出土遺物観察表	19	
第7表	H 5号住居址出土遺物観察表	19	
第8表	H 6号住居址出土遺物観察表	21	
第9表	H 7号住居址出土遺物観察表	25	
第10表	H 8号住居址出土遺物観察表	27	
第11表	H 9号住居址出土遺物観察表	32	
第12表	H10号住居址出土遺物観察表	32	
第13表	H11号住居址出土遺物観察表	35	
第14表	H12号住居址出土遺物観察表	37	
第15表	H14号住居址出土遺物観察表	38	
第16表	H15号住居址出土遺物観察表	39	
第17表	H16号住居址出土遺物観察表	40	
第18表	H17号住居址出土遺物観察表	42	
第19表	H18号住居址出土遺物観察表	44	
第20表	H19号住居址出土遺物観察表	46	
第21表	H20号住居址出土遺物観察表	48	
第22表	H21号住居址出土遺物観察表	49	
第23表	H22号住居址出土遺物観察表	49	
第24表	H23号住居址出土遺物観察表	50	
第25表	H24号住居址出土遺物観察表	51	
第26表	H25号住居址出土遺物観察表	52	
第27表	H26号住居址出土遺物観察表	52	
第28表	H27号住居址出土遺物観察表	53	
第29表	H29号住居址出土遺物観察表	56	
第30表	H30号住居址出土遺物観察表	59	
第31表	H31号住居址出土遺物観察表	59	
第32表	H32号住居址出土遺物観察表	61	
第33表	H33号住居址出土遺物観察表	64	
第34表	H34号住居址出土遺物観察表	66	
第35表	H35号住居址出土遺物観察表	67	
第36表	H36号住居址出土遺物観察表	67	
第37表	H37号住居址出土遺物観察表	71	
第38表	H38号住居址出土遺物観察表	71	
第39表	H39号住居址出土遺物観察表	73	
第40表	H40号住居址出土遺物観察表	77	
第41表	H41号住居址出土遺物観察表	77	
第42表	H43号住居址出土遺物観察表	83	
第43表	H44号住居址出土遺物観察表	85	
		掘立柱建物址及び	
		柱列出土遺物観察表	145
		土坑出土遺物観察表	160
		竪穴状遺構出土遺物観察表	162
		溝状遺構出土遺物観察表	165
		ピット出土遺物観察表	167
		ピット計測表(1)	173
		ピット計測表(2)	174
		ピット計測表(3)	175
		ピット計測表(4)	176
		ピット計測表(5)	177
		ピット計測表(6)	178
		遺構外出土遺物観察表	179
		《辻遺跡》	
		H 1号住居址出土遺物観察表	285
		H 2号住居址出土遺物観察表	286
		H 3号住居址出土遺物観察表	290
		H 4号住居址出土遺物観察表	291
		H 5号住居址出土遺物観察表	292
		H 6号住居址出土遺物観察表	292
		H 7号住居址出土遺物観察表	294
		H 8号住居址出土遺物観察表	296
		H 9号住居址出土遺物観察表	297

第83表	H110号住居址出土遺物観察表	298	第119表	H16号住居址出土遺物観察表	415
第84表	H11号住居址出土遺物観察表	300	第120表	H17号住居址出土遺物観察表	418
第85表	H12号住居址出土遺物観察表	302	第121表	H119号住居址出土遺物観察表	420
第86表	H14号住居址出土遺物観察表	304	第122表	H20号住居址出土遺物観察表	421
第87表	H15号住居址出土遺物観察表	305	第123表	掘立柱建物址及び 柱列出土遺物観察表	427
第88表	H16号住居址出土遺物観察表	307	第124表	土坑出土遺物観察表	440
第89表	H18号住居址出土遺物観察表	307	第125表	T1号特殊造構出土遺物観察表	441
第90表	H19号住居址出土遺物観察表	309	第126表	M4号溝状造構出土遺物観察表	443
第91表	H20号住居址出土遺物観察表	310	第127表	M5号溝状造構出土遺物観察表	445
第92表	H21号住居址出土遺物観察表	310	第128表	M8号溝状造構出土遺物観察表	447
第93表	H23号住居址出土遺物観察表	312	第129表	ピット出土遺物観察表	447
第94表	H24号住居址出土遺物観察表	312	第130表	ピット計測表(1)	452
第95表	H25号住居址出土遺物観察表	314	第131表	ピット計測表(2)	453
第96表	H26号住居址出土遺物観察表	315	第132表	ピット計測表(3)	454
第97表	H27号住居址出土遺物観察表	316	第133表	遺構外出土遺物観察表	456
第98表	H28号住居址出土遺物観察表	317	《西裏遺跡》		
第99表	掘立柱建物址出土遺物観察表	318	第134表	H1号住居址出土遺物観察表	499
第100表	土坑出土遺物観察表	330	第135表	H2号住居址出土遺物観察表	501
第101表	溝状造構出土遺物観察表	336	第136表	F1号掘立柱建物址	502
第102表	特殊造構出土遺物観察表	340		出土遺物観察表	
第103表	ピット計測表(1)	345	第137表	土坑及び遺構外出土遺物観察表	502
第104表	ピット計測表(2)	346	《化学分析》		
第105表	遺構外出土遺物観察表(1)	347	付編表1	生漆の位置とその強度	509
第106表	遺構外出土遺物観察表(2)	348	付編表2	上器内面付着物の化学組成 (FP法による半定量分析結果)	510
（備註）遺跡Ⅱ					
第107表	H1号住居址出土遺物観察表	391	付編表1	市道遺跡Ⅲ検出動物遺体	513
第108表	H2号住居址出土遺物観察表	392	付編表2	市道遺跡Ⅲ検出ウマの 全歯高計測値	513
第109表	H3号住居址出土遺物観察表	393	付編表1	市道遺跡Ⅲの堅穴住居跡 出土炭化材樹種同定結果一覧	519
第110表	H5号住居址出土遺物観察表	394	付編表2	住居跡ごとの検出樹種集計	520
第111表	H6号住居址出土遺物観察表	397	付編表1	測定資料及び処理	522
第112表	H7号住居址出土遺物観察表	397	付編表2	放射性炭素年代測定及び 曆年較正の結果	523
第113表	H9号住居址出土遺物観察表	399			
第114表	H10号住居址出土遺物観察表	402			
第115表	H11号住居址出土遺物観察表	403			
第116表	H112号住居址出土遺物観察表	406			
第117表	H13号住居址出土遺物観察表	411			
第118表	H14号住居址出土遺物観察表	414			

図版目次

《市道遺跡Ⅲ》

図版一	航空写真	181
図版二	市道遺跡近景	182
図版三	H1号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	183
図版四	H2号住居址全景・掘り方全景	184
図版五	H2号住居址カマド及び遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方・遺物出土状況・ カマド構築材	185
図版六	H3号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方	186
図版七	H4号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	187
	H5号住居址全景	
	H6号住居址全景	188
図版八	H7号住居址全景・掘り方・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方	189
図版九	H9号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方	190
図版十	H8号住居址遺物出土状況・住居址全景・掘り方・カマド脇遺物出土状況 市道遺跡Ⅲ調査風景（南から）	191
図版十一	H8号住居址カマド全景・カマド全景・カマド掘り方・カマド構築材・ 埋甕出土状況	192
図版十二	H10号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	
	H12号住居址全景・掘り方全景	

図版十三	H11号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	193
	H13号住居址全景・遺物出土状況	
図版十四	H14号住居址全景・掘り方全景	194
図版十五	H14号住居址カマド全景・カマド掘り方	195
	H15号住居址掘り方全景・カマド全景・住居址全景	
図版十六	H16号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方全景	196
	H17号住居址全景	
	H18号住居址全景	
図版十七	H19号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	197
図版十八	H20号住居址全景・掘り方全景	198
	H21号住居址全景・掘り方全景	
図版十九	H22号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況	199
	H24号住居址遺物出土状況・住居址全景	
図版二十	H23号住居址全景・掘り方全景	200
図版二十一	H25号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	201
	H26号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	
図版二十二	H27号住居址全景・掘り方全景・炭化物出土状況・遺物出土状況	202
図版二十三	H27号住居址カマド全景・カマド掘り方全景	203
	カマド煙道断ち割り状況（覆土堆積状況）	
図版二十四	H29号住居址全景・掘り方全景・No.1・2カマド全景・No.2カマド掘り方全景	204
図版二十五	H30号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方・掘り方全景	205
	H28号住居址全景	
図版二十六	H31号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況	206
	H32号住居址遺物出土状況	
図版二十七	H32号住居址全景・掘り方全景	207
	H33号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況	
図版二十八	H34号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況	208
	H35号住居址全景	
	H36号住居址遺物出土状況	
図版二十九	H40号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	209
図版三十	H37号住居址全景・カマド全景	210
	H38号住居址全景	
	H39号住居址カマド全景・住居址全景	
図版三十一	H39号住居址掘り方全景・遺物出土状況	211
図版三十二	H41号住居址全景・遺物出土状況	212
	H42号住居址全景	
	H43号住居址全景	
図版三十三	H43号住居址No.1カマド全景・掘り方全景・No.2カマド全景	213
	H44号住居址カマド全景・カマド掘り方全景	
図版三十四	H45号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方全景・遺物出土状況	214
	H47号住居址遺物出土状況	
図版三十五	H47号住居址全景・掘り方	215
図版三十六	H46号住居址全景・掘り方全景	216
図版三十七	H46号住居址カマド全景・カマド煙道部・カマド煙道確認状況・カマド掘り方・カマド断ち割り状況・礫出土状況・遺物出土状況	217
図版三十八	H48号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	218
	H49号住居址全景・カマド全景	
	H50号住居址全景・掘り方全景	
図版三十九	H52号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・カマド袖検出状況・カマド掘り方全景	219
図版四十	H51号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況・カマド掘り方全景	220
図版四十一	H51号住居址炭化材検出状況・炭化材堆積状況	221
図版四十二	H53号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況	222
図版四十三	H54号住居址全景・掘り方全景	223
図版四十四	H54号住居址カマド全景・遺物出土状況・焼土検出状況	224
図版四十五	H54号住居址カマド掘り方全景・カマド煙道完掘状況・入り口張り出しピット遺物出土状況	225
図版四十六	H55号住居址全景・遺物出土状況・掘り方全景	226
図版四十七	H56号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	227

図版四十八	H57号住居址全景（拡張後）・住居址全景（拡張前）	228
図版四十九	H57号住居址掘り方全景・プラン確認状況・カマド全景・遺物出土状況 入り口張り出しピット	229
図版五十	H58号住居址全景・掘り方全景	230
図版五十一	H58号住居址カマド周辺遺物出土状況・カマド全景・カマド構築材検出状況 カマド掘り方全景・遺物出土状況	231
図版五十二	H59号住居址全景・掘り方検出状況 H60号住居址全景・掘り方全景 市道遺跡Ⅲ調査区全景（中央部から南部分を北より望む）	232
図版五十三	F 1・2号掘立柱建物址全景	233
図版五十四	F 3・4号掘立柱建物址全景	234
図版五十五	F 7・8号掘立柱建物址全景	235
図版五十六	F 12・13号掘立柱建物址全景	236
図版五十七	F 12・13号掘立柱建物址全景（南より跡部交差点を望む） F 14・15号掘立柱建物址全景 3号柱列址全景 F 21号掘建柱建物址全景	237
図版五十八	F 11・15号掘立柱建物址全景	238
図版五十九	D 1・2・4・5・6・7・8・9号土坑	239
図版六十	D 10・12・13・14・15・16・18号土坑 D 15号土坑遺物出土状況	240
図版六十一	D 20・21・22・23・24・25号土坑 D 24号土坑セクション D 25号土坑獸骨検出状況	241
図版六十二	D 26・27・28・29・30・31・32・33号土坑	242
図版六十三	D 34・35・36・39・40・41・43号土坑 D 39号土坑遺物出土状況	243
図版六十四	D 42・45・48・49・50・51・52号土坑 D 42号土坑遺物出土状況	244
図版六十五	D 53・54・56・57号土坑 市道遺跡Ⅲ（跡部交差点より南を望む）	245
図版六十六	Ta 1・20・21・22・23・24・25号豎穴状遺構 Ta23号豎穴状遺構遺物出土状況	246
図版六十七	M21・23号溝状遺構	247
図版六十八	市道遺跡Ⅲ H 1・2号住居址出土遺物	248
図版六十九	市道遺跡Ⅲ H 2・3・4・5号住居址出土遺物	249
図版七十	市道遺跡Ⅲ H 4・5・6・7・8号住居址出土遺物	250
図版七十一	市道遺跡Ⅲ H 7・8号住居址出土遺物	251
図版七十二	市道遺跡Ⅲ H 8・9号住居址出土遺物	252
図版七十三	市道遺跡Ⅲ H 9・10・11・14・15号住居址出土遺物	253
図版七十四	市道遺跡Ⅲ H 15・16号住居址出土遺物	254
図版七十五	市道遺跡Ⅲ H 16・17・18・19号住居址出土遺物	255
図版七十六	市道遺跡Ⅲ H 19・20・21・22・23号住居址出土遺物	256
図版七十七	市道遺跡Ⅲ H 24・25・26・27・29号住居址出土遺物	257
図版七十八	市道遺跡Ⅲ H 27・29・30・31号住居址出土遺物	258
図版七十九	市道遺跡Ⅲ H 32・33・34号住居址出土遺物	259
図版八十	市道遺跡Ⅲ H 34・35・36・37号住居址出土遺物	260
図版八十一	市道遺跡Ⅲ H 37・38・39・40号住居址出土遺物	261
図版八十二	市道遺跡Ⅲ H 39・40・41・43・44・45号住居址出土遺物	262
図版八十三	市道遺跡Ⅲ H 45・46・47号住居址出土遺物	263
図版八十四	市道遺跡Ⅲ H 47・48・49号住居址出土遺物	264
図版八十五	市道遺跡Ⅲ H 50・51号住居址出土遺物	265
図版八十六	市道遺跡Ⅲ H 51・52号住居址出土遺物	266
図版八十七	市道遺跡Ⅲ H 52・53・54・55号住居址出土遺物	267
図版八十八	市道遺跡Ⅲ H 54・55号住居址出土遺物	268
図版八十九	市道遺跡Ⅲ H 55・56・57号住居址出土遺物	269
図版九十	市道遺跡Ⅲ H 57・58号住居址出土遺物	270
図版九十一	市道遺跡Ⅲ H 58・60号住居址出土遺物及びD 1・8・15・37・38号土坑出土遺物	271

図版九十二	市道遺跡Ⅲ土坑・竪穴状遺構・溝状遺構出土遺物	272
図版九十三	市道遺跡Ⅲピット出土遺物及び遺構外出土遺物及びH1号住居址石製品	273
図版九十四	市道遺跡ⅢH1・7・8・9・11・12号住居址石製品	274
図版九十五	市道遺跡ⅢH14・15・19・23・27・29・30・31・32・35・37号住居址石製品	275
図版九十六	市道遺跡ⅢH39・40・43・46・47・48号住居址石製品	276
図版九十七	市道遺跡ⅢH51・52・53・54号住居址石製品	277
図版九十八	市道遺跡ⅢH55・56・57・58号住居址・掘立柱建物址・土坑石製品	278
図版九十九	市道遺跡Ⅲ石器製品及び土製品	279
図版百	市道遺跡Ⅲ鉄製品	280
図版百一	市道遺跡Ⅲ石製模造品(1)	281
図版百二	市道遺跡Ⅲ石製模造品(2)	282
図版百三	市道遺跡Ⅲ石製模造品(3)	283
図版百四	市道遺跡Ⅲ石器類	284
《辻遺跡》		
図版一	辻遺跡A地点より噴火した浅間山を望む 辻遺跡A地点調査区全景（北より南佐久方向を望む）	349
図版二	辻遺跡B地点調査区全景 辻遺跡B地点調査区近景	350
図版三	H1号住居址全景・遺物出土状況 H2号住居址遺物出土状況・住居址全景	351
図版四	H3号住居址全景・カマド全景・遺物出土状況・カマド掘り方全景・掘り方全景	352
図版五	H4号住居址全景 H5号住居址全景	353
図版六	H7号住居址全景・掘り方	354
図版七	H7号住居址遺物出土状況・カマド全景・カマド付近遺物出土状況・カマド掘り方	355
図版八	H6号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	356
図版九	H8号住居址全景・遺物出土状況 H11号住居址全景・掘り方全景	357
図版十	H9号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・カマド掘り方全景 辻遺跡遺構検出状況	358
図版十一	H10号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	359
図版十二	H12号住居址全景・掘り方全景	360
図版十三	H12号住居址カマド全景 H13号住居址セクション・掘り方全景・カマド全景・住居址全景	361
図版十四	H14号住居址全景・No.1・2カマド全景・掘り方全景 H16号住居址カマド全景	362
図版十五	H16号住居址全景 H17号住居址全景	363
図版十六	H15号住居址全景・掘り方全景 H19号住居址掘り方全景・住居址全景	364
図版十七	H18号住居址全景・掘り方全景	365
図版十八	H20号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	366
図版十九	H21号住居址全景・掘り方全景	367
図版二十	H22号住居址全景・掘り方全景	368
図版二十一	H23号住居址全景・掘り方全景・カマド全景 H25号住居址全景・掘り方全景・カマド全景 H26号住居址全景 辻遺跡調査風景	369
図版二十二	H24号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況 H28号住居址遺物出土状況	370
図版二十三	H28号住居址全景・掘り方全景	371
図版二十四	H27号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	372
図版二十五	F1・2・3・4・5・6・7号掘立柱建物址全景 F3号掘立柱建物址遺物出土状況	373
図版二十六	F8・9・10・11号掘立柱建物址全景 辻遺跡調査風景（南端）	374
図版二十七	D2・3・4・5・7・9・10・11号土坑	375
図版二十八	D16・19・20・21・23・24・26・27号土坑	376

図版二十九	D 28・29・30・31・32号土坑	377
	D 29号土坑焼土・炭化物検出状況及び焼土・遺物出土状況	
図版三十一	M 1・2・3・4・5・6・7・9溝状遺構	378
	M 8号溝状遺構	379
	T 1号特殊遺構掘り方・焼土検出範囲・焼土半裁状況	
	T 2・3・5号特殊遺構	
	T 3号特殊遺構セクション	
図版三十二	T 4号特殊遺構・遺構範囲・焼土完掘状況・焼土セクション	380
図版三十三	辻遺跡 H 1・2号住居址出土遺物	381
図版三十四	辻遺跡 H 2・3・4号住居址出土遺物	382
図版三十五	辻遺跡 H 3・4・5・6・7号住居址出土遺物	383
図版三十六	辻遺跡 H 7・8・9・10・11・12号住居址出土遺物	384
図版三十七	辻遺跡 H 12・14・15・16・18号住居址出土遺物	385
図版三十八	辻遺跡 H 18・19・20・21・23・24・25号住居址出土遺物	386
図版三十九	辻遺跡 H 25・26・27・28号住居址及び掘立柱建物址及びD 9・10・15号土坑出土	387
図版四十一	辻遺跡 D 19・21・28号土坑及び溝状遺構及びT 3・4号特殊遺構出土遺物	388
図版四十二	辻遺跡特殊遺構・遺構外出土遺物及び土製品及び鉄製品及び石製模造品及び石製品	389
	《儘田遺跡 II》	390
図版一	儘田遺跡 II 航空写真（上が南）	457
図版二	儘田遺跡調査 A 区	458
	儘田遺跡調査 B 区	
	儘田遺跡調査 C 区	
図版三	H 1号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	459
	H 2号住居址全景・掘り方全景	
図版四	H 3号住居址全景	460
	H 5号住居址全景・掘り方全景	
	H 7号住居址全景・掘り方全景	
図版五	H 6号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	461
図版六	H 8号住居址全景・掘り方全景	462
	H 9号住居址 No.1・2カマド全景・掘り方全景・床検出状況	
図版七	H 9号住居址全景・掘り方全景	463
図版八	H 10号住居址全景	464
	H 11号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況	
図版九	H 12号住居址全景・掘り方全景・遺物出土状況・カマド全景・カマド掘り方全景	465
図版十	H 13号住居址全景・掘り方全景	466
図版十一	H 13号住居址遺物出土状況・住居址内土坑・壁ピット検出状況	467
図版十二	H 14号住居址全景・掘り方全景	468
図版十三	H 14号住居址遺物出土状況・No.1・2カマド全景・No.1・2カマド掘り方全景	469
図版十四	H 15号住居址全景・掘り方全景	470
図版十五	H 16号住居址全景・カマド全景・カマド掘り方全景・掘り方全景	471
	儘田遺跡 II 調査風景	
図版十六	H 17号住居址全景・覆土堆積状況・掘り方全景・カマド全景	472
図版十七	H 20号住居址全景・覆土堆積状況・掘り方全景・カマド全景・遺物出土状況	473
図版十八	H 18号住居址全景・掘り方全景・カマド全景・焼土検出状況	474
	H 19号住居址カマド全景	
図版十九	H 19号住居址全景・掘り方全景	475
図版二十	F 1・3号掘立柱建物址全景	476
図版二十一	F 4・6・7・8号掘立柱建物址全景	477
	儘田遺跡 II より野沢中学校方面を望む	
図版二十二	D 1・2・4・5・6・8号土坑	478
	D 6号土坑遺物出土状況	
図版二十三	D 10・11・12・13・14・15・17号土坑	479
	D 14号土坑焼土検出状況	
図版二十四	D 21・22・23・24・25・26・28・29号土坑	480
図版二十五	D 30・33・36・39・42・44・45・46号土坑	481
図版二十六	D 47・48・50・51・52・53・54・55号土坑	482

図版二十七	D 56・57・58・59・60・61・62・63号土坑	483
図版二十八	M1・4・5・6・7・8号溝状遺構	484
	M 5 号溝状遺構遺物出土状況	
図版二十九	T 1 号特殊遺構・焼土検出状況	485
	儘田遺跡 II 調査状況	
	H13号住居址壁柱検出状況	
図版三十一	儘田遺跡 II H1・2・3・5・6号住居址出土遺物	486
図版三十二	儘田遺跡 II H6・7・9・10・11・12号住居址出土遺物	487
図版三十三	儘田遺跡 II H12・13号住居址出土遺物	488
図版三十四	儘田遺跡 II H13・14号住居址出土遺物	489
図版三十五	儘田遺跡 II H14・16・17・19・20住居址出土遺物	490
図版三十六	儘田遺跡 II H17・20号住居址・掘立柱建物址・柱列・土坑出土遺物	491
図版三十七	儘田遺跡 II 土坑出土遺物及び溝状遺構出土遺物	492
図版三十八	儘田遺跡 II ピット出土遺物及び遺構外出土遺物	493
図版三十九	儘田遺跡 II 遺構外出土遺物及び土製品及び石製品(1)	494
図版四十	儘田遺跡 II 石製品(2)	495
図版四十一	儘田遺跡 II 鉄製品	496
図版四十二	儘田遺跡 II X線写真	497
	『西裏遺跡』	
図版一	西裏遺跡遺構検出状況	498
	西裏遺跡全景	
	H 1 号住居址覆土堆積状況	
	西裏遺跡調査風景	
図版二	H 1 号住居址全景・掘り方全景・カマド全景	503
	H 2 号住居址カマド全景・カマド掘り方全景	
図版三	H 2 号住居址全景	504
	F 1 号掘立柱建物址全景	
図版四	D 1・2号土坑	505
図版五	西裏遺跡出土遺物	506
図版六	整理作業風景	507
	『化学分析』	
付編図版 1	出土した炭化種実	508
付編図版 1	市道遺跡 III D 25 遺構出土ウマ	512
付編図版 2	市道遺跡 III 出土骨片	515
付編図版 1	佐久市市道遺跡 III の堅穴住居跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真	516
		521

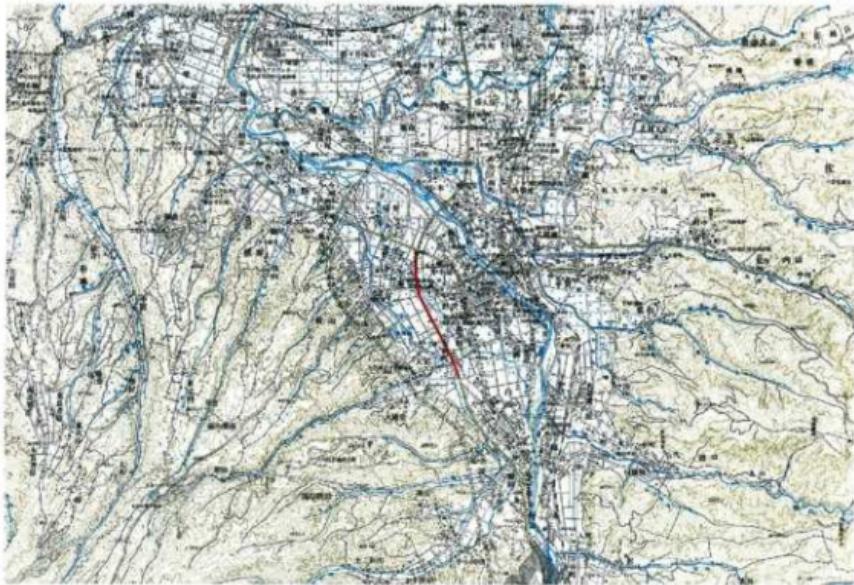
第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯

市道遺跡Ⅲ、辻遺跡、儘田遺跡Ⅱ、西裏遺跡が所在する佐久市は長野県の東端に位置し、北に浅間山、南に八ヶ岳連峰、東に荒船山塊などの山並みに抱かれた海拔700m前後に広がる高原都市である。

佐久市においては、平成17年4月1日に旧佐久市・浅科村・望月町・白田町の1市2町1村が合併した。これにより市域の広さは東西32.1km、南北23.1kmで、面積は423.99km²、人口は10万を擁し、佐久平の中核都市としての新生「佐久市」が誕生した。合併後の新佐久市の重点課題の一つとして4地域の融合が上げられ、地域間の基幹連絡道路の整備が急務となっている。市内における基幹道としては東西に走る国道254号と142号、南北に貫く国道141号がある。折しも『中部横断自動車道』の建設が始まり、佐久平の南玄関口として「佐久南インターチェンジ」が計画された。これらのことから今後、国道142号及び141号の交通量の増大が予想されるに至り、佐久建設事務所により国道141号の佐久市跡部交差点から南の旧佐久市分3kmについて複線化工事が計画された。

佐久建設事務所は、平成16年に佐久市教育委員会へ当地籍の遺跡有無についての照会を行った。教育委員会では予定地に市道遺跡、辻遺跡が存在することを回答した。よって、佐久建設事務所と当教育委員会で保護協議を行った結果、平成16年7月より試掘調査を行い遺跡の存在する部分については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成16年9月から辻遺跡より開始され市道遺跡の一部を行い、続く平成17年には儘田遺跡Ⅱ、西裏遺跡が調査され、同年晚秋に発掘調査は終了した。整理作業は平成17年冬から始められ、平成18年度に主だった作業を行い、平成19年度に原稿執筆を行い報告書を刊行した。



第1図 市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡位置図 (1:100,000)

第2節 調査組織

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長	高柳 勉(平成17年5月就任)
			三石昌彦(平成17年5月就任)
			木内 清(平成19年4月就任)
事務局	教育次長	赤羽根寿文(平成16年度)	柳沢健一(平成17年度)
	社会教育部長	柳沢義春(平成18年度より組織改正)	
	社会教育部次長	山崎明敏(平成19年度より組織改正)	
	文化財課長	小林正斬(平成16年度)	中山 悟(平成17年度～19年6月)
		森角吉晴(平成19年7月～)	
	文化財係長	高村博文(平成16年度)	
	文化財調査係長	高柳正人(平成17年より組織改正)	三石宗一(平成19年度～)
	文化財調査係	林 幸彦 須藤隆司 小林眞寿 羽毛田卓也 富沢一明 上原 学 赤羽根太郎(17年度10月移勤) 神津 格(平成17年度10月～) 出澤 力 並木節子(平成19年度10月～)	

調査体制

調査担当者	富沢一明	出澤 力(平成17年度)			
調査主任	佐々木宗昭	森泉かよ子			
調査副主任	堺 益子	武者幸彦			
調査員	阿部和人	浅沼ノブ江 市川 昭	臼田真杉 江原富子	碓冰知子	
	岩崎重子	小幡弘子 岡部憲裕	岡部恵美子 有賀晴美	井出哲夫	
	柏木貞夫	柏木義雄 菊池喜重	小林よしみ 上原幸子	小林百合子	
	小林東喜和	小林妙子 小林幸子	小林喜久子 小山 功	金森治代	
	島田幹子	佐藤志げ子 清水美恵	清水澄生 副島充子	田中ひさこ	
	高見沢綾	高橋好春 東城武夫	大工原達江 中嶋フクジ	橋詰勝子	
	橋詰信子	中条悦子 細萱ミスズ	萩原宮子 比田井久美子	細谷秀子	
	羽田貴恵	花岡美津子 堀籠滋子	広瀬梨恵子 森角雅子	柳沢孝子	
	柳沢千賀子	山浦豊子 百瀬秋男	山田和子 宮川百合子	依田三男	
	渡邊久美子	渡辺長子 佐藤瑞希	齊藤恵李 井出孝子	柳田晴美	
	清水律子				



平成16年秋 市道遺跡にて

第3節 調査日誌

平成16年度

- 7月 5日 国道141号試掘開始
8月 3日 本新町手前まで試掘終了
9月13日 辻遺跡より本調査開始
10月 7日 市道遺跡Ⅲ本調査開始
10月22日 H27号住居址で良好なカマド発見
11月 6日 野沢中学遺跡見学
11月26日 中央公民館遺跡見学
平成17年1月11日 本年度の現場作業を終了
2月28日 本年度の室内整理作業を終了
平成17年度

- 6月13日 辻遺跡発掘調査再開
8月 5日 辻遺跡調査終了
8月 8日 優田遺跡Ⅱ調査開始
8月22日 H5号住居址より風字硯出土
8月19日 西裏遺跡調査開始
9月30日 優田遺跡Ⅱ調査終了
10月 3日 市道遺跡Ⅲ調査再開
11月 2日 市道遺跡Ⅲ現場見学会
11月24日 市道遺跡Ⅲ調査終了
12月 1日 すべての調査を終了し機材撤収する。
12月～ 調査区埋め戻し

平成18年1月6日 風字硯新聞報道する。

平成18年度

- 4月～3月 報告書作成業務開始
土器復元・図面修正
遺物実測・写真撮影・トレス
図版作成

平成19年度

- 6月～3月 写真図版作成・表作成
原稿執筆をして報告書を刊行する。



市道遺跡Ⅲ表土剥ぎ状況



野沢西交差点調査状況



築穴住居址調査状況



野沢小学校生遺跡見学風景



遺跡説明会風景

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

佐久平は長野県内を流れる大河千曲川の上流部に位置し、浅間山・八ヶ岳・荒船山などの山々に囲まれた海拔700mを平均とする盆地である。この盆地の中央部には南から千曲川が先の山々から流れ出た湯川・滑津川・片貝川などの中小河川を集め北流している。佐久平の地形は大きく北と南で異なる。北側は浅間山の火山活動により形成された火山灰台地が浅間山麓より広がり、特に佐久市長土呂・小諸市耳取付近では火山灰台地特有の「田切り」地形が発達している。これとは趣を異にして、南側は蓼科・八ヶ岳山麓から筋状に延びる尾根とそれら尾根の谷筋より流れ出る小河川が造り出す小規模な扇状地と千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積低地が広がり、どのかな水田風景が広がっている。

市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡はこの千曲川左岸の跡部・野沢・本新町に所在する。各遺跡は千曲川や片貝川の氾濫により形成された沖積微高地に位置すると考えられるが、今回調査対象となった国道141号周辺部は大規模な圃場整備田となっており旧来の微地形は推測し得ない。遺跡の海拔は北側の市道遺跡Ⅲ付近で667m南側の西裏遺跡付近で689mであり、約3km区間の比高差は22mを測る。

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する跡部・野沢地区およびその周辺地区には、西より傾斜する山地や山裾、また沖積低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡北西方向5kmの八ヶ岳北東山麓中に立科F遺跡がある。本遺跡からは211点からなる石器群が検出され、検出層位より31200年±900年前の年代が与えられている。また、同じく蓼科山麓の丘陵先端に位置する榛名平遺跡からは定型化したナイフ形石器2点を含む19点の石器が出土している。なお当遺跡からは14cm以上の御子柴型槍先形尖頭器1点が既出資料としてある。続く縄文時代の遺跡としては、同じく榛名平遺跡から縄文前期12軒、中期8軒の集落址が検出された。また、埋没谷からはおびただしい量の土器・石器が出土した。これらの中には佐久市で希少な出土例となる花積下層・塚田・中道・神ノ木・閑山・有尾・諸磯A~Cなどの各土器型式が含まれており、塚田から中道、神ノ木から有尾といった変遷を推測しうる資料が含まれていた。この他の縄文遺跡としては前期前半の住居址6軒が調査された後沢遺跡、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡、筒村B・山法師B遺跡などがある。また、前山地籍の瀧の下遺跡からは、後期の敷石住居址2軒が検出され、そのうち1号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山地沿いの谷間か、水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、まず、氷II式を含む弥生前期土器群を出土した東五里田遺跡がある。これらの遺物はいずれも円形の土坑からの出土で、土器群には変形工字文の浅鉢や細密条痕が施された甕などがあり、土器群に伴い大型の打製石鋤や黒曜石製石鎌・石錐なども出土した。なお、土坑出土の炭化物により年代測定を行い2370年±40年の数値結果が出ている。次ぎに中期・後期になると丘陵地で遺跡が多く発見されている。まず、水田面を見下ろす丘陵上に位置する榛名平遺跡で後期箱清水期の住居址29軒、同じく後沢遺跡で中期栗林期3軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓3基が調査されている。また、当遺跡と同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡からは中期栗林期9軒、後期箱清水期5軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され壺内より胎兒骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。また、当遺跡からは、円形周溝墓と考えられる遺構も確認されており、後沢遺跡も含め小地域での墓制の多様性を考える上で貴重な資料となっている。また、近年沖積地においても中道遺跡付近で後期箱清水期の集落と考えられる遺跡が発見されている。試掘調査のため詳細は不明であるが、今回本調査を行った隣接する辻遺跡においても箱清水期の甕が低地部分より出土し

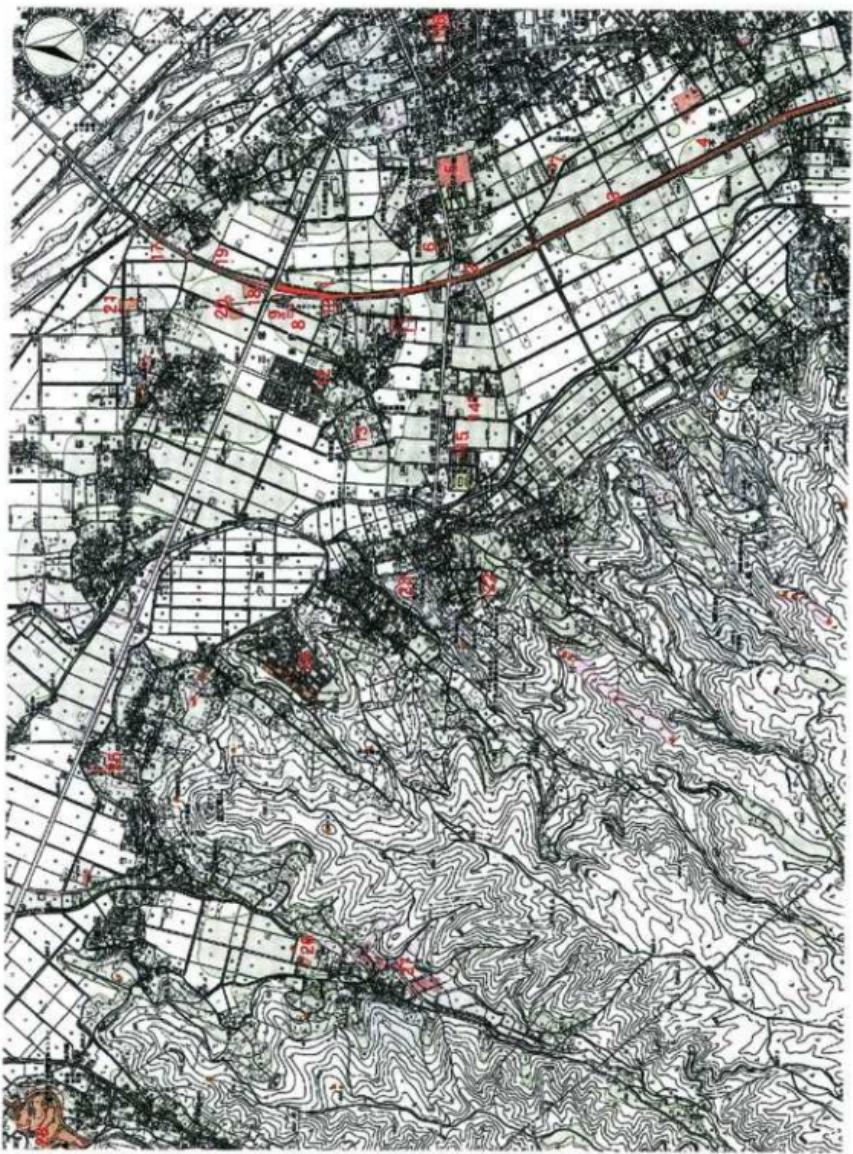
名	地名	所 在 地	開 勘 年 度	検出遺跡・出土遺物等
1 佐治遺跡Ⅱ	神明字市道	平成16·17年度	住居址60、廻立柱遺物址25、土坑54、溝址4	
2 佐治遺跡	野尻字市辻	平成16·17年度	住居址28、廻立柱遺物址12、土坑28、溝址7	
3 三塚田遺跡Ⅱ	野尻字櫛田	平成17年度	住居址19、廻立柱遺物址9、土坑52、溝址7	
4 西東遺跡	野尻字西裏	平成17年度	住居址2、廻立柱遺物址1、土坑3	
5 両五城田遺跡	野尻字丘吉田	平成14年度	住居址2、廻立柱遺物址、土坑、溝址	
6 鶴岡遺跡Ⅰ・Ⅲ	野尻字鹿井	昭和62年度	住居址6、土坑4	
7 鶴岡遺跡	野尻字禪田	昭和43年度	住居址4、土坑9	
8 市道遺跡	三塚字市道	昭和49年度	住居址10、特異遺構5	
9 市道遺跡Ⅱ	三塚字市道	平成10年度	住居址5、廻立柱遺物址4、土坑10、溝址3	
10 三木水道跡群(市道遺跡)	三塚字市道	平成11年度	住居址4、廻立柱構築2、廻立柱遺物址3、土坑3、ビット39	
11 三木水道跡群(市道遺跡)	三塚字寺原	平成6年度	住居址29、廻立柱遺物址6、井戸址1、土坑3、周溝址1	
12 三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	昭和50年度	住居址4、土坑3	
13 熊谷小学校後遺跡	三塚字・町田	昭和40年度		
14 中道遺跡	前山字中道	昭和46年度	住居址7、奉典(彩)1(基)	
15 中道遺跡Ⅱ	前山字小塗	平成9·11·13年度	住居址17	
16 野尻遺跡	野尻字后栗原	平成14年度		
17 鶴岡遺跡(市道)	鶴岡字鶴岡	平成11年度	No.19の跡部町田遺跡Ⅱと合わせて社民址86	
18 鶴岡字四瀬遺跡	鶴岡字町田	昭和50年度	住居址5、土坑2、溝	
19 跡部町田遺跡Ⅱ	跡部字下孫原・反田	平成11年度		
20 三塚町田遺跡	一塚字山並	昭和49年度	住居址6、窓穴状遺構1、土坑、溝	
21 上松井北遺跡	松井字櫛田	昭和52年度	住居址18、特殊遺構10	
22 鶴岡下遺跡	鶴岡字山並の下	平成24年度	住居址3	
23 鶴岡山道跡	小宮山字山並・伴野城原	中世		
24 佐久平遺跡	小宮山字山並	昭和51·52年度	住居址50	
25 西側・竹田半遺跡	伴野字西側・伴野字竹田	昭和60年度	住居址26、特殊遺構4、窓穴26、土坑26、溝7、ビット	
26 中村半・櫛田半	櫛田字中村	昭和77年度	住居址16、土坑5、溝1	
27 向日D・山・山法師B・山遺跡	櫛田字平向	平成3·4年度	住居址5、廻立柱遺物址4、廻穴状遺構2、土坑10、溝址	
28 櫛田半・櫛田内遺跡(櫛田半・櫛田内)	櫛田字櫛田・平・櫛田内	平成5·6年度	住居址122、廻立柱遺物址30、土坑、古墳2基、ほか	
29 枕・佐野遺跡	佐野字石休	昭和33年度	火葬場	
30 横山半遺跡	横山字平山田	昭和56年度	住居址60、廻立柱遺物址4、土坑15	
31 金平遺跡	横山字金平	昭和56年度	住居址3、土坑	
32 仁和遺跡	横山字立石	昭和50年度	土坑	
33 仁和遺跡Ⅰ・Ⅱ	板井字4丁目	昭和55年度	須恵器窯址16、灰窯窯址4、方形陶製4、廻穴状遺構2、土坑1	
34 野尻新跡Ⅱ	宇字野尻	平成13年度	土坑31、柱址152、特異遺構1	
35 野尻立遺跡	宇字造敷	平成11年度	寺院本立遺跡、瓦礫	

第1表 四周遺跡一覧表

ている。この事から今後調査事例が増せば、沖積高地上に弥生時代の集落が発見される可能性は十分にある。

古墳時代になると集落・生産・墳墓等の遺跡が調査されている。古墳時代集落は沖積低地まで広がり始める。圃場整備などで調査された遺跡も多く、中道遺跡・市道遺跡Ⅰ、Ⅱ・三塚町田遺跡・跡部町田遺跡・三塚鶴田遺跡・上松井北遺跡・寺添遺跡などが挙げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており中期後半から後期におよぶ集落址である。また、近年沖積地において空白であった前期土器群が宮添遺跡で出土し、今後は周辺域で集落発見の期待がかかる。古墳址は調査されたものは少ないが、まず瀧の峯古墳群が上げられる。市志編纂事業の一環として学術調査が行われ、2基の前方後方型の壇丘墓が検出された。規模は2号墳が全長18m、1号墳が約13mを測り、2号墳からは後方部中央に主体部として土塙墓が確認されている。また2号墳の周溝内からは壺・小型壺・甕・鉢・高杯・器台が出土し、これら土器群をもって4世紀後半の位置づけがなされている。次に後期古墳としては調査されたものは少なく権名平1号墳と坪の内占塗にとどまっているが、火の雨塗古墳からは円筒・杓などの埴輪片が出土している。なお、佐久平においては千曲川西岸の低地や山地には古墳址が少なく、千曲川東岸の山裾に群集墳が集中して存在する極めて対照的な様相を示している。次に生産遺跡として石附窯址群が挙げられる。数次の調査が行われ現在迄に2基の須恵器窯と5基の木炭窯が検出されている。これら窯址の年代は出土須恵器より7世紀後半~末の実年代が与えられている。

次に、奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し山裾には小規模な集落址が、沖積地においては舞台場遺跡の29軒や跡部儘田遺跡の古墳時代も含め約70軒等集落規模が大きくなる。特に跡部儘田遺跡からは砂層に埋没した住居址や畠状遺構、そして砂層上に構築された竪穴住居址等が発見され、それら遺構の帰属時期がいわゆる「仁和の水害」に関連するようであり今後の本報告が待たれる。また墓址としては休石遺跡があり、大甕3個の中に長頸壺・甕の蔵骨器が入って発見され、時期は10~12



第2図 周辺の遺跡位置図 (1 : 22,000)

世紀の火葬墓群と考えられている。出土遺物としては中道遺跡と櫛名平遺跡からは奈良三彩の蓋が後沢遺跡からは綠釉陶器が出土しており注目される。

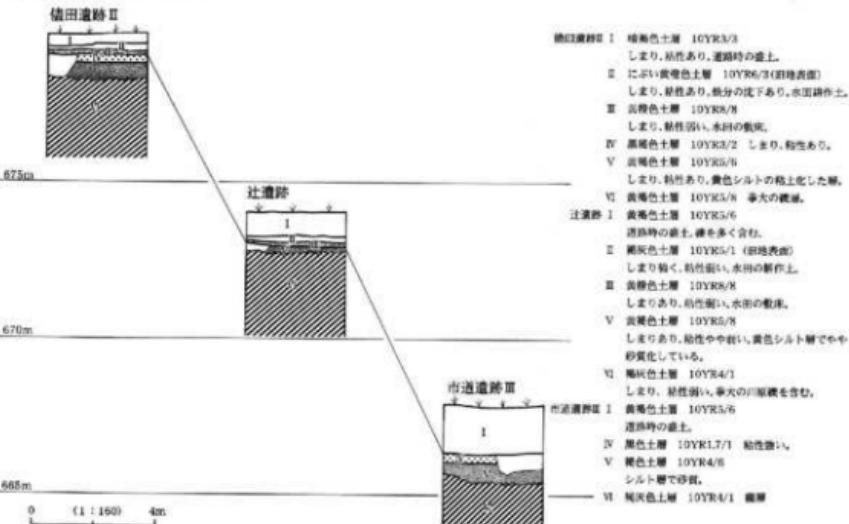
鎌倉時代以降になると当地域では伴野氏の活躍が始まる。伴野氏関連の遺跡としては方形の区画を持つ野沢館跡が平成14年度に整備に伴う発掘調査が行われ、石積みを伴う土壘や館出入り口と考えられる土橋が発見され、規模も南北100m・東西80mの長方形プランであることが判明した。また、館跡周辺部の調査も行われ、城域の外郭と考えられる堀跡も発見されつつあり、今後「野沢館」の縄張り解明に向けた資料が蓄積されつつある。山城としては良好な保存状態を保つ前山城跡があり、伴野氏によって築かれたものとされている。また、絵画資料として中世伴野庄の様子は「一遍上人絵伝」にも当時の市の活況な様子が描かれている。遺物としては小金平遺跡から常滑の甕に入った備蓄錢約14,400枚が出土している。また、櫛名平遺跡からは中世の屋敷地と墓域がまとまって検出されている。特に墓域には火葬墓・土壙墓・集石土壙墓等様々な形態が確認され、一部には地形を改変してテラス状の部分に五輪塔も建てられていた痕跡があった。近世の調査事例としては野沢原の薬師寺遺跡が調査され、近世前期よりの寺院址が調査されている。

以上、野沢地域周辺の遺跡を時代を追って概観してみた。

第3節 基本層序

市道遺跡Ⅲ・辻遺跡・儘田遺跡Ⅱ・西裏遺跡はいずれも千曲川の左岸、片貝川と千曲川に挟まれた中間地点に位置している。調査区の標高は北端の市道遺跡Ⅲで667m、中間地点の辻遺跡で674m、南端の西裏遺跡で681mを測る。今回の調査区間全長2800mで確認面の標高差は14mあり、北西に緩やかに傾斜する現地形に沿うようなかたちである。

各遺跡の構造検出面は基本的に黄色シルト層である。残存状況の良い場所では暗褐色土層の堆積も見られ、構造検出面として掘り込み線も検出できたが、不確定な部分が多く見えずらかった。また、調査地点によっては黄色シルト層の堆積のないま円礫層となる部分もあり、この円礫層を掘り込んで構築が構築されていた。



第3図 基本層序模式図

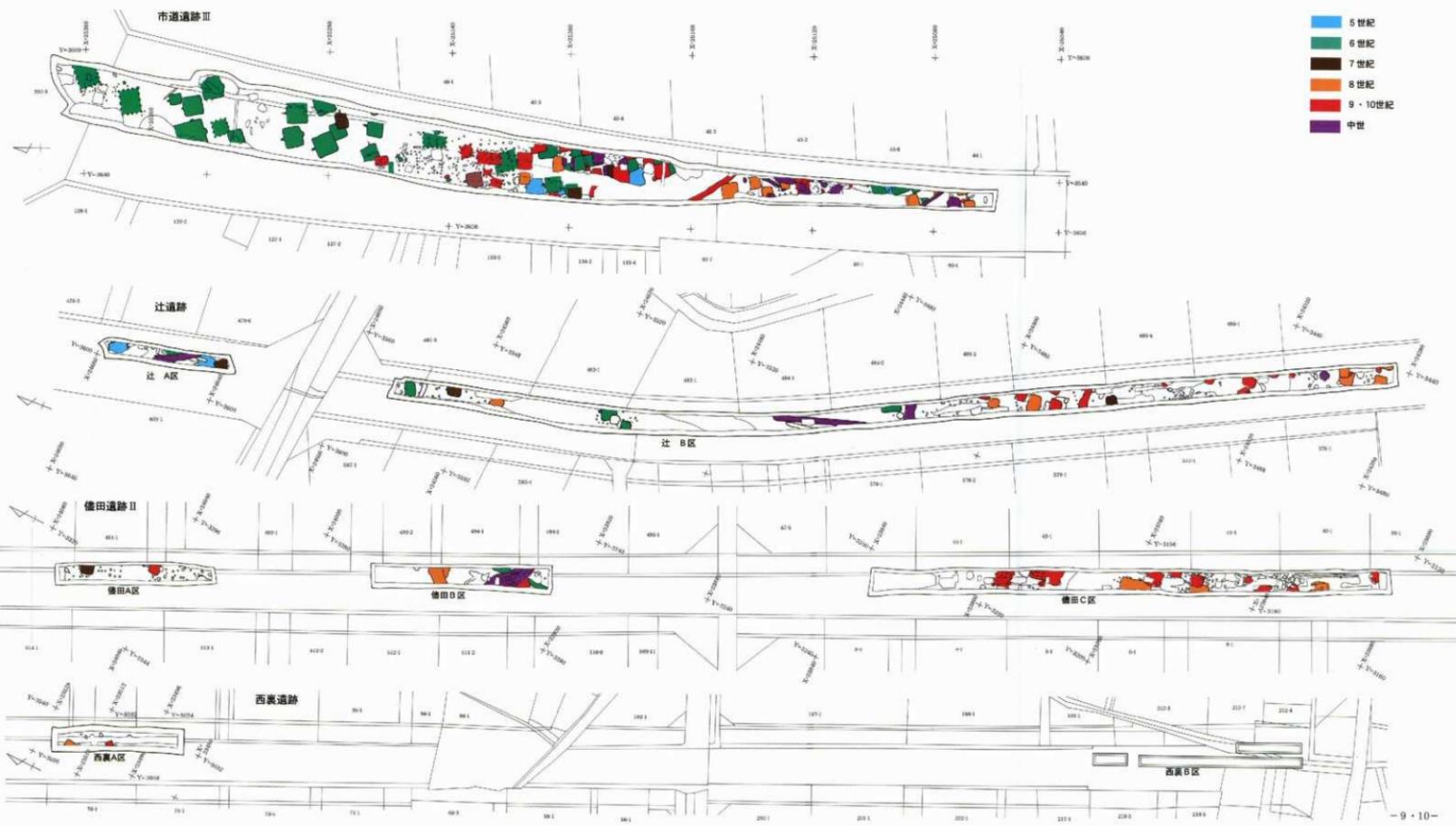
第4節 検出遺構と遺物の概要

今回の発掘調査は、まさしく野沢平を南北に大きく貫くようにトレンチを入れた状態となった。その結果、今まで不明確であった野沢平の遺跡の分布状況がおぼろげながら把握できた事が今回の調査成果の第1と考えられる。遺跡範囲は旧来より考えられていた範囲と大きく異なり、国道沿線は遺跡包蔵地であり、また周辺部にも広がりがあることが予想された。また、発見された遺跡も時代的に偏りがあり、市道遺跡側は古墳時代後期を主体とする集落であるが奈良・平安時代と続き、一部中世に及ぶ複合遺跡。これに対して辻遺跡・儘田遺跡Ⅱは古墳時代の住居址が少なく、主に奈良・平安時代の集落が主体であることが判明した。また、儘田遺跡Ⅱからは奈良時代前半と考えられる超大型の竪穴住居址や総柱掘立柱建物址が検出され、特殊遺物として青銅製品の鞘尻金具や丸瓶、大型の鉄斧、また平安時代の所産と考えられるが佐久平で初めての風字硯の出土などがあり、儘田遺跡Ⅱ周辺が単なる農村集落とは考えずらい調査成果も得られた。

以下が今回の検出遺構及び出土遺物の概要である。

検出遺構	出土遺物
市道遺跡Ⅲ	縄文時代 加曾利E IV式土器 石鏃 打製石斧
竪穴住居址 掘立柱建物址 土 坑 溝状遺構 竪穴状遺構 ピット	弥生時代 箱清水式土器 石鍬
辻遺跡	古墳時代 土師器 須恵器 鉄製品 砥石 編物石 ニチヤ土器 石製模造品 (臼玉・劍・有孔)
竪穴住居址 掘立柱建物址 土 坑 溝状遺構 特殊遺構 ピット	奈良・平安時代 土師器 須恵器 墨書き土器 灰釉陶器 緑釉陶器 円面鏡 風字硯 鉄製品 (鉄斧・刀子・鎌) 青銅製品 (鞘尻金具・丸瓶)
儘田遺跡Ⅱ	中世 龍泉窯系青磁 白磁 常滑 (壺・こね鉢) 古瀬戸 (碗・皿・こね鉢・瓶子) 東濃系山茶碗
西裏遺跡	近世 陶磁器類 (伊万里・瀬戸・美濃 唐津・前山焼) 炭化材・馬骨
竪穴住居址 掘立柱建物址 土 坑 ピット	2軒 (平安2) 1棟 3基 1個

第2表 検出遺構一覧表



第4図 市道跡III・汗道路・倭田道路II・西裏道路調査全体図 (1 : 1,000)

市道遺跡Ⅲ

第III章 市道遺跡III

第1節 積穴住居址

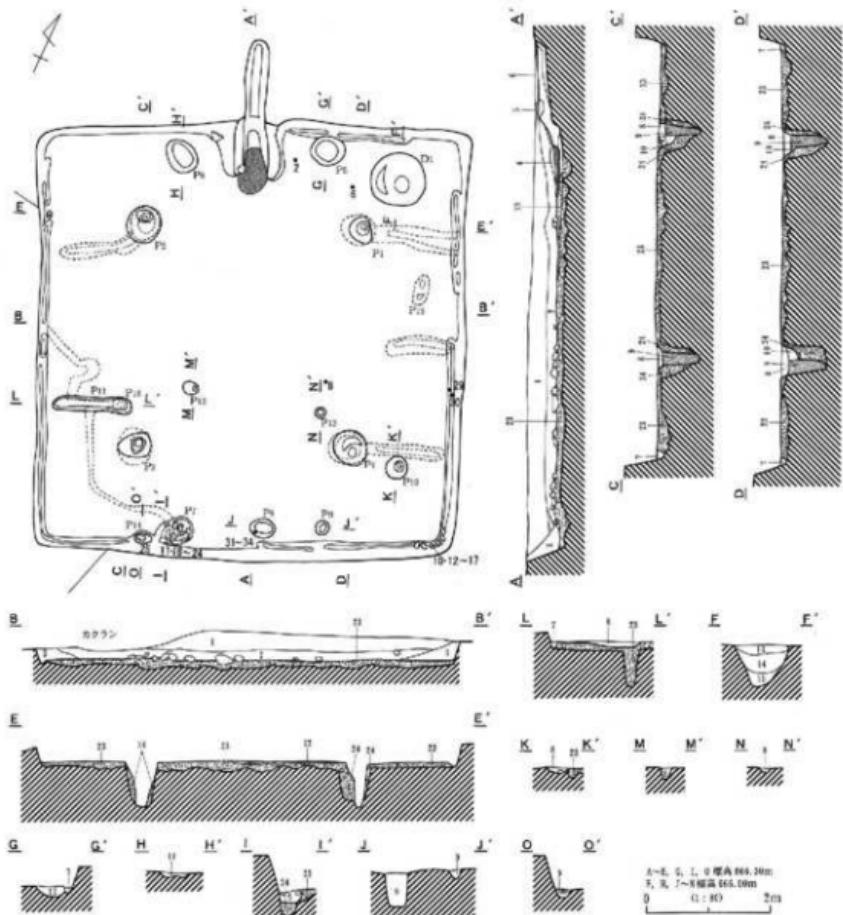
(1) 1号住居址 (第5-6-7図、写真図版三)

本住居址は、調査区北側であるツ-26.27.28、テ-26.27.28、ト-27.28Grに位置する。残存状態は西壁が一部カクランにより壊されている他は良好である。H51号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁6.89m・南壁6.52m・西壁6.50m・東壁6.56mで、壁高さは南壁中央で最大54cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-23°-Wを示す。住居址の床面積は43.716m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれるが、2層中と床面上に多量の河原石が検出された(写真図版参照)。これら礫は拳大から人頭大の大きさが含まれ、小石や砂を含まない事から、人為的な投棄と考えられる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に3~22cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁と南壁の一部分に検出された。断面形はU字形で、幅は約12~32cm・深さ2~11cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め16ヵ所確認され、P1~4が主柱穴、P8が入り口梯子穴と考えられる。規模はP1が径43cm・深さ71cm、P2が径58cm・深さ72

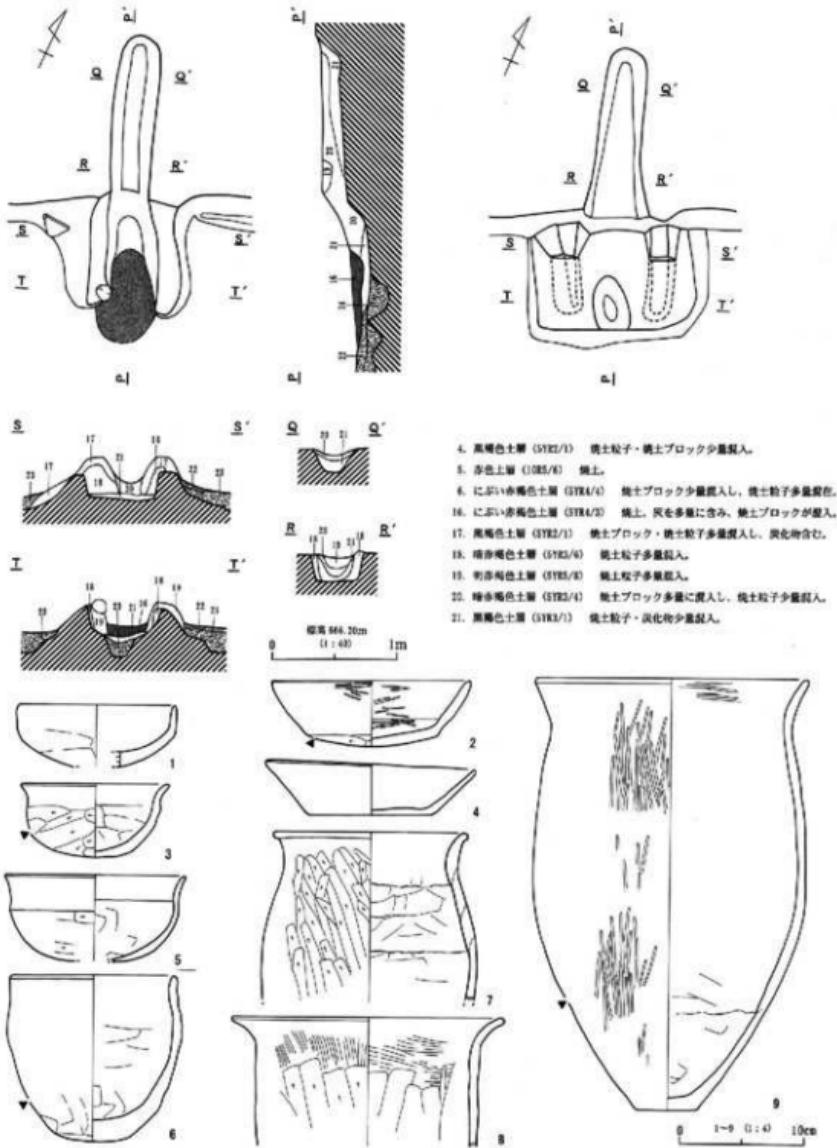
No.	種別	記号	法	施	成形・調整・文様		備考	出土位置
					内	外		
1	土師器	环	13.0	-	ナデ	ヘラケズリ→ナデ ロヨコナヂ	回転実測	1/2残存 I 区
2	土師器	环	16.0	10.4	5.3	ミガキ	底部ヘラケズリ ロヨコナヂ	完全実測 3/4残存 6.5cm
3	土師器	环	12.0	-	5.9	ヘラナデ	ロヨコナヂ→ヘラケズリ	回転実測 2/1残存
4	土師器	环	16.9	10.2	4.1	ナデ	ナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 2/3残存 P4 II区
5	土師器	环	14.6	13.7	(0.9)	ヘラナデ	体輪ヘラケズリ→ロヨコナヂ	回転実測 1/4残存 IV 区
6	土師器	小型器	13.6	6.0	13.4	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 底部実測
7	土師器	環	15.8	-	-	ヘラナデ	ロヨコナヂ→ヘラケズリ	回転実測 1/3残存 I - IV 区
8	土師器	環	22.0	-	-	ヨコナヂ→ハケ付→ヘラナデ	ヨコナヂ→ハケ付→ヘラケズリ	回転実測 1/1残存 3cm P4 II区
9	土師器	環	22.0	5.1	34.6	ヘラナデ ロヨコナヂ	ミガキ	完全実測 通底光形 P5 H1 ホリ方
28	土質品	円盤	縦3.6	横3.7	0.8			重量9.80g 上部表面軽用
30	漆 庫	木 材	推存寸	極大長 約大船 高 大厚	底 重		所見	出土位置
10	織み物石	磨石安山岩	完形	12.4	7.1	6.7	820.00	1cm
11	織み物石	ホルンフェルス	完形	13.3	5.8	5.3	610.00	下端部の剥離は使用痕か
12	織み物石	花崗岩	完形	11.2	6.4	4.4	415.00	1cm
13	織み物石	安山岩	完形	10.8	5.6	3.8	310.00	1cm
14	織み物石	安山岩	完形	10.0	5.3	4.4	315.00	1cm
15	織み物石	磨石安山岩	完形	11.6	7.4	2.8	350.00	1cm
16	織み物石	ホルンフェルス	完形	10.5	5.8	3.8	310.00	1cm
17	織み物石	砂岩	完形	12.5	6.1	4.7	462.00	上・下端部に浅い敲打痕
18	織み物石	磨石安山岩	完形	11.9	6.3	3.7	690.00	1cm
19	織み物石	砂岩	完形	10.0	5.6	3.7	423.00	両側に抉りのための剥離
20	織み物石	磨石安山岩	完形	13.7	6.5	4.9	670.00	下端部に砸打痕
21	織み物石	石英安山岩	完形	15.2	6.5	4.7	610.00	1cm
22	織み物石	磨石安山岩	完形	16.1	9.4	6.8	1350.00	下端部に浅い敲打痕
23	織み物石	砂岩	完形	14.2	8.4	4.7	620.00	下端部に砸打痕 番面はすり面か
24	織み物石	花崗岩	完形	14.8	7.7	4.6	630.00	下端部に砸打痕
25	織み物石	ホルンフェルス	完形	13.5	6.8	5.0	750.00	1cm
26	織	麻反着		8.0	4.5	4.1	162.77	I 区
27	石器	安山岩		6.0	5.9	3.9	169.14	I 区
29	臼玉	磨石		0.6	0.96	0.26	0.78	
30	臼玉	滑石	完形	0.76	0.98	0.24	1.06	
31	臼玉	滑石	完形	0.67	0.77	0.26	0.57	-21cm
32	臼玉	滑石	完形	0.82	0.82	0.26	0.86	-21cm
33	臼玉	滑石	完形	0.83	0.8	0.27	0.82	-21cm
34	臼玉	滑石	完形	0.31	0.77	0.24	0.44	-21cm
35	臼玉	滑石	完形	0.44	0.77	0.25	0.35	P8-1
36	臼玉	滑石	完形	0.6	0.74	0.26	0.52	P8-2
37	臼玉	滑石		0.99	0.72	0.25	0.22	P8-3
38	臼玉	滑石		0.64	0.74	0.23	0.4	P8-4
39	臼玉	滑石		0.13	0.95	0.26	0.14	II 区

第3表 H1号住居址出土遺物観察表

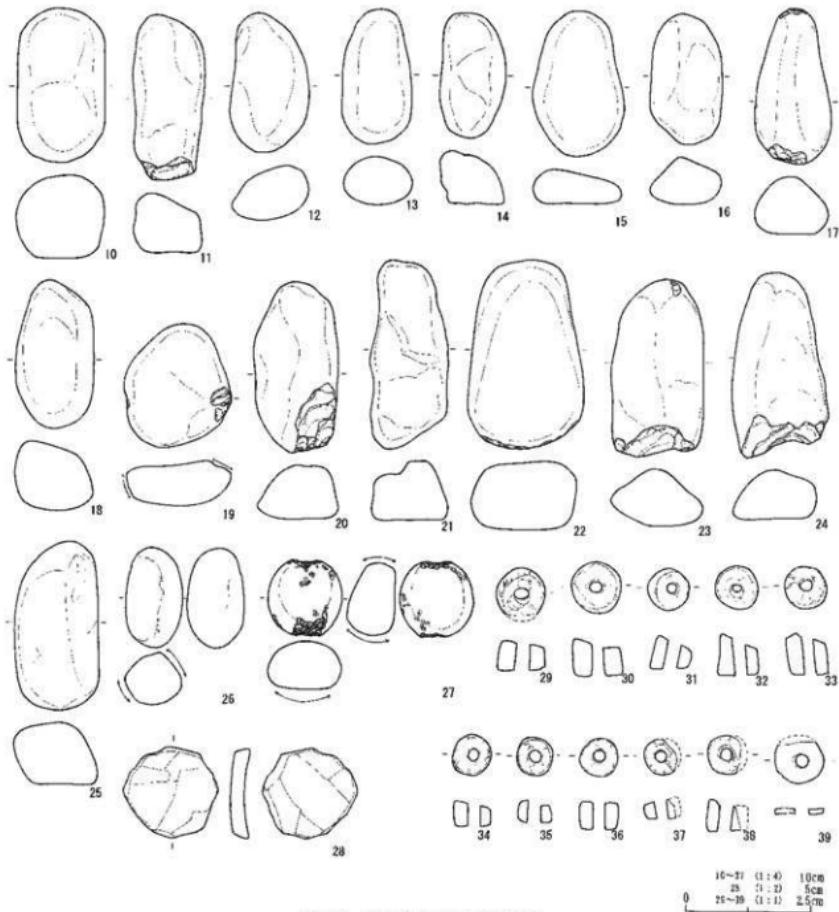


1. 黒色土層 (10TR2/1) 焼化粒子微量混入。
 2. 出褐色上層 (10TR2/2) 黄色ローム粒子 (砂質) 少量混入。人頭大の石が埋在。
 3. 黑褐色土層 (10TR2/3) 黄色ローム粒子 (砂質) 多量混入。
 4. 黑色土層 (10TR1.7/1) ローム粒子微量混入。
 5. 黑色土層 (10TR2/1) 焼化粒子 + ローム粒子微量混入。
 6. 黑褐色土層 (10TR3/1) ローム粒子少量混入。
 7. 黑褐色土層 (10TR2/2) ロームブロック・ローム粒子多量混入。
11. 墓形褐色土層 (10TR3/4) 燃土ブロック・焼土粒子多量混入。(灰だらか?)
 12. 出褐色土層 (10TR2/2) 燃土ブロック・ロームブロック混入。
 13. 黑色土層 (10TR2/1) ロームブロック・ローム粒子混入。
 14. 黑褐色土層 (10TR2/2) ロームブロック・ローム粒子混入。
 15. 黑色土層 (10TR1.7/2) ローム粒子多量混入。(床の厚さ部分でカチ声)。
 22. 墓形褐色土層 (10TR2/3) ローム粒子・ロームブロック多量混入。
 23. 墓形褐色土層 (10TR2/4) 黑色ブロック・ロームブロック多量混入。

第5図 H1号住居址実測図



第6図 H1号住居址カマド及び出土遺物実測図



第7図 H1号住居址出土遺物実測図

cm、P3が径52cm・深さ69cm、P4が径57cm・深さ70cm、P5が径53cm・深さ15cm、P6が径58cm・深さ8cm、P7が径61cm・深さ43cm、P8が径40cm・深さ53cm、P9が径22cm・深さ18cm、P10が径36cm・深さ11cm、P11が径26cm・深さ9cm、P12が径24cm・深さ20cm、P13が径17cm・深さ7cm、P14が径39cm・深さ17cm、P15が径48cm・深さ26.5cm、P16が径28cm・深さ63cmを測る。住居址掘り方は南西コーナー部が一段掘り下がっていた。またP1とP2、P4、P16から壁に向かって間仕切り溝が検出された。貯蔵穴はカマド右脇に検出され、規模は長軸87cm・短軸84cm・深さ71cmを測る。

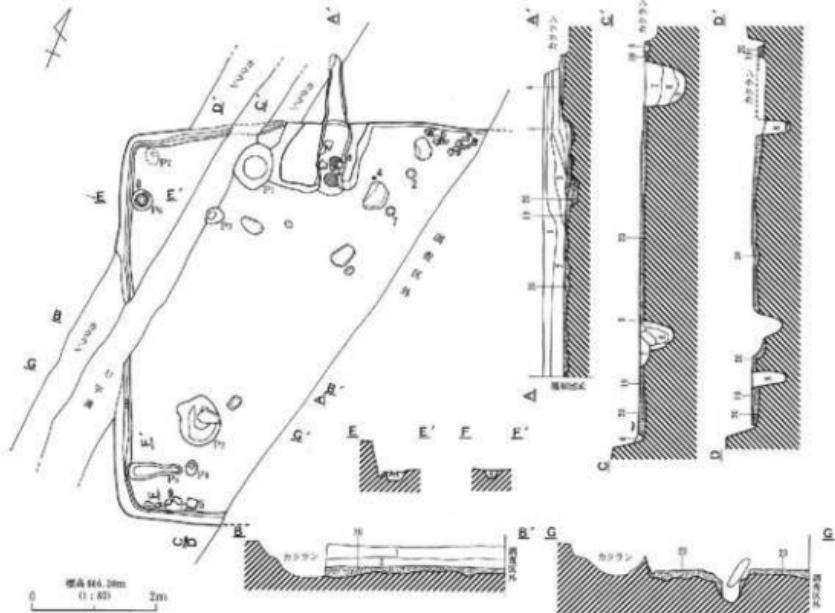
カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。火床面の焼土厚みは9cmを測り、良く焼け硬質化していた。カマド袖は左右両方ともに地山を掘り残し芯材とし、粘性土で構築していた。煙道部の長さは151cmを測り、底面を黒褐色土で構築していた。カマド主軸方位はN-24°-Wを測る。

出土遺物は覆土中のものが多かったが、編み物石は住居址南壁西よりのP7より、また白玉はP8よりまとまって出土した。図示した遺物の内、1~5は土師器壺であり、1と2はいわゆる須恵器模倣壺である。7~9は土師器甕、27は両端に窪みを付けた石錘と考えられる。29~39は石製模造品の白玉で、形態は39のみ扁平である。これら遺物より本址は6世紀後半に位置づけられる。

(2) 2号住居址 (第8・9・10図、写真図版四・五)

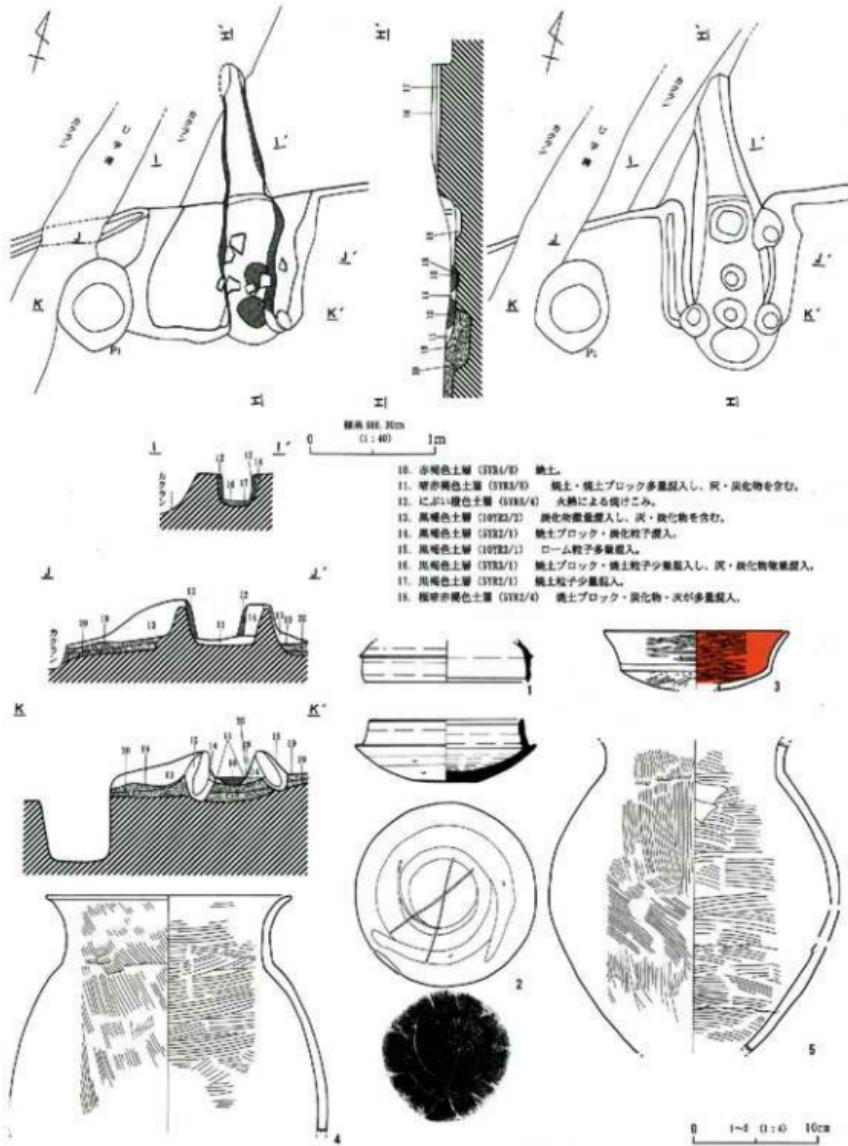
本住居址は、調査区北側であるゾ-26.27、タ-26.27.28、チ-27Grに位置する。残存状態は住居址南東側1/3が調査区外に、またカマド西側から西壁にかけて一部カクランにより埋されている他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁残存5.71m・南壁残存1.50m・西壁6.00mで、壁高さは北西コーナー部で最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-21°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で22.864m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に3~14cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁の一部と西壁の全体、南壁に検出された。断面形はU字形で、幅は約14~34cm・深さ3~11cmを測る。ビッ

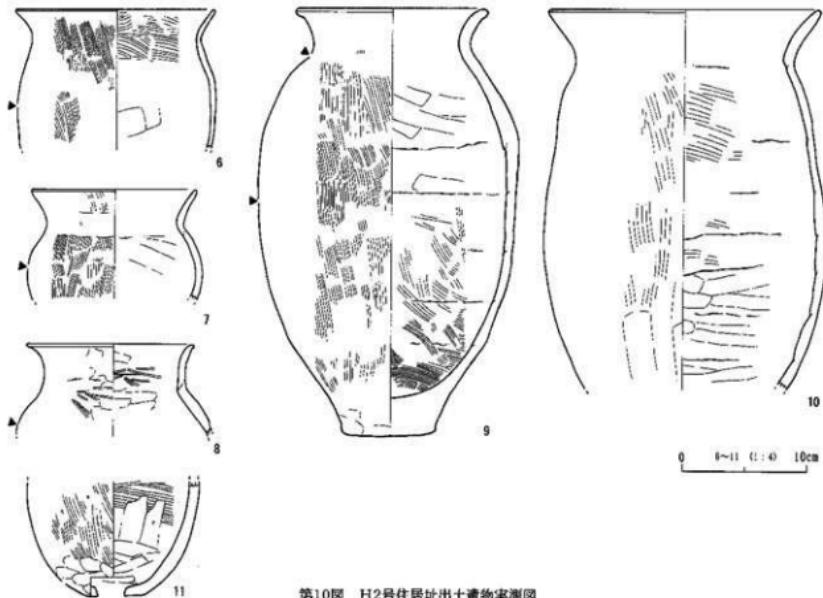


1. 黒褐色土層 (10T2/1) 硬化物塊混入し、ロームブロック幾箇含む。
2. 黒褐色土層 (10T2/2) 硬化物塊混入し、ロームブロック多量含む。
3. 黑褐色土層 (10T2/1) 硬化物塊、灰や少量粘土含む。焼土ブロックを多く含む。
4. 黑褐色土層 (10T2/2) 硬化粒子、灰、焼土粒子、焼土ブロック多量混入。
5. 黑褐色土層 (10T2/4) 焼土ブロック、焼土粒子多量混入。
6. 黑褐色土層 (10T2/4) 灰、炭化粒子多量混入。
7. 硬化物土層 (10T2/3) ローム粒子・ロームブロックが複数混入し、焼土粒子を少量含む。
8. 黑褐色土層 (10T2/1) ローム粒子多量混入。
9. 黑褐色土層 (10T2/2) ローム粒子少量混入。
10. 烧褐色土層 (10T2/3) ロームブロック、ローム粒子多量混入。
11. 黑褐色土層 (10T2/3) ローム粒子多量混入し、ロームブロック少量混入。

第8図 H2号住居址実測図



第9図 H2号住居跡カマド及び出土遺物実測図



第10図 H2号住居出土遺物実測図

トは掘り方検出時も含め7カ所確認され、P2・3が主柱穴と考えられる。規模はP1が径74cm・深さ74cm、P2が径80cm・深さ53cm、P3が径30cm・深さ51cm、P4が径23cm・深さ56cm、P5が径86cm・深さ15cm、P6が径34cm・深さ15cm、P7が径28cm・深さ15cmを測る。P5は形態より間仕切り溝とも考えられる。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。火床面の焼土厚みは6cmを測り、良く焼け硬質化していた。カマド袖は左右両方ともに地山を掘り残し芯材とし、焚口部分は川原石を構築材としていた。また本址は左袖が右袖に比べて異様に大きく貯蔵穴と考えられるP1脇までテラス状に伸びていた。煙道部の長さは116cmを測り、底面を黒褐色土で構築していた。カマド主軸方位はN-20°-Wを測る。

出土遺物は覆土中とカマドから多かった。2は須恵器坏身でほぼ完形であり、底部付近に焼成前のヘラ記号が施されている。壺類は成形に刷毛目の残るナデのものが主体である。11は単孔の瓶である。これら遺物より本址は6世紀前半に位置づけられる。

名	種別	器種	法 規	成形・調 整・文 様		備 考	出土位置
				内 面	外 面		
1 漆器盤	板	13.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転支面 口縁1/8残存	IV区
2 須恵器	坏身	12.5	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ→回転ヘラケズリ ヘラ記号	完全実測	4ca
3 土師器	杯	16.0	12.2 (4.8)	ミガキ 小色墨彩	山腹ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	回転支面	カマド
4 上部器	食	19.8	-	ハケ目	ハケ目	四輪実測 口縁1/3残存	12cm カマド
5 土師器	食	-	-	ハケ目	ハケ目	回転支面	5cm カマド
6 土師器	食	16.1	-	口縁ハケ目 ヘラナデ	ハケ目	完全実測	カマド
7 土師器	小型食	13.3	-	ヘラナデ	ハケ目→ナデ	完全実測 口縁実測	0cm
8 上部器	小型食	13.5	-	ヘラナデ 指添圧痕→ミガキ	指添圧痕→ミガキ	完全実測 口縁実測	9cm
9 土師器	食	15.4	7.5 34.5	ハケ目 ヘラナデ	ハケ目→口縁ヨコナデ	四輪実測 口縁1/2残	4~18cm
10 土師器	食	21.8	-	ハケ目	ハケ目→ハケナデ→口縁ヨコナデ	回転支面	I区トレンチ
11 土師器	瓶	-	4.8	ハケ目→ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ→ハケ目→ヘラナデ	完全実測 底部実形	II・IV区

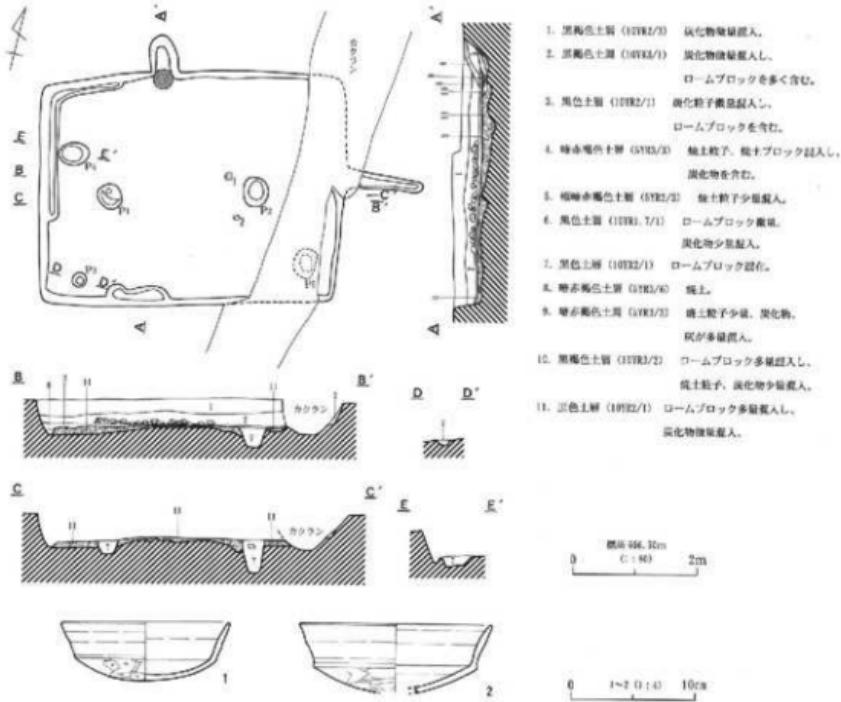
第4表 H2号住居出土遺物観察表

(3) H3号住居址 (第11図、写真図版六)

本住居址は、調査区北側であるタ-28.29、チ-28.29、ツ-28.29Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されている他は良好である。H51号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は東西に長い長方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央と北壁西よりの2箇所に造られている。規模は北壁4.23m (残存) 4.75m (推定)・南壁4.60m・西壁3.36m・東壁1.65m (残存) 3.50m (推定)で、壁高さは西壁中央で最大43cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Wを示す。住居址の床面積は15.84m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれるが、2層中と床面上にH1号住居址と同じく多量の河原石が検出された (写真図版参照)。これら礫は拳大から人頭大の大きさが含まれ、小石や砂を含まない事から、人為的な投棄と考えられる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に5~26cmの厚さで貼られていた。壁溝は北西コーナーの一部分に検出された。断面形はU字形で、幅は約23~34cm・深さ4~17cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め5個所確認され、P1とP2が主柱穴と考えられる。規模はP1が径42cm・深さ56cm、P2が径48cm・深さ52cm、P3が径23cm・深さ10cm、P4が径48cm・深さ15cm、P5が径48cm・深さ12cmを測る。

カマドは2箇所検出され、まず北壁中央のカマドは煙道部と火床部のみの検出で袖部は残存していなかった。また、東壁のカマドは燃焼部をカクランにより削平されているため煙道部しか残存しておらず、煙道長さは102cmを測る。北壁カマドが袖部等が残存していないことから、本址の最終的な使用カマドは東壁のカマドと考えられる。



第11図 H3号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中からが多かった。1と2は上師器坏で、いわゆる「有段口縁坏」である。いずれも底部へラケズリで口縁部に段を有する。これらの出土遺物より本址は6世紀後半～7世紀前半に位置づけられる。

No.	種別	基盤	法 線		成 形・調 整・文様		備 考	出土地
			内 面	外 面	内 面	外 面		
1	上師器	片	13.6	—	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ 花邊ヘラケズリ	完全実測 完形
2	土師器	片	15.1	(0.5)	11.4	ロクロナデ	ロクロナデ 花邊ヘラケズリ	同上, 実測

第5表 H3号住居址出土遺物観察表

(4) H4号住居址 (第12図, 写真図版七)

本住居址は、調査区北側であるチ-30.31.32、ツ-31.32Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されている他は良好である。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁4.25m(残存)・南壁4.53m(残存)・西壁4.82mで、壁高さは西壁中央で最大25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-11°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で22.0m²を測る。覆土はおむね自然堆積で単層であるが、床面上にH1号住居址と同じく少量の河原石が検出された。床は全体的に硬質であったが、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「鍛き床」であった。壁溝はカマド東側に一部検出された。断面形はU字形で、幅は約14~17cm、深さ4~9cmを測る。ピットは6カ所確認され、P1~P4が主柱穴、P5が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径30cm・深さ55cm、P2が径35cm・深さ37cm、P3が径21cm・深さ42cm、P4が径33cm・深さ53cm、P5が径64cm・深さ30cm、P6が径38cm・深さ9cmを測る。

カマドは北壁中央に検出され、煙道部と袖部は残存していたが、火床部は良好な形で確認されなかった。煙道部の規模は長さ148cmで、煙道部には黒褐色土の構築上が観察された。袖の規模は高さが最大19cmを測る。袖は粘土の構築であり、カマド掘り方検出時に焚口部で径16cm・深さ7cm程のピット2箇所が検出された。検出位置より焚口部構築の石掘り込み跡と考えられる。

出土遺物は覆土中からが多く、図示したものもいすれも覆土中からの出土である。1は上師器坏である。2は須恵器ハソウの模倣品と考えられ、胴部に焼成前と考えられる穿孔がある。3は小型鉢である。他の鉢に比べ器厚が厚く、外面にあらい刷毛日の残るナデを施す。4も小型鉢と考えられるが、底部が非常に厚く、或いは台状に使われる土器とも考えられる。5と6は土師器の妻で底部と口縁部である。

本址はこれらの中出遺物より6世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	基盤	法 線		成 形・調 整・文様		備 考	出土地
			内 面	外 面	内 面	外 面		
1	上師器	片	15.1	10.5	ナデ	ナデ	完全実測 口径1/4残存	単区
2	上師器	ハソウ	—	—	ナデ	ナデ	同上, 実測 1/4残存	単区
3	上師器	小鉢	11.1	6.2	6.7	ヘラナデ	ロヨコナデ ハケ日	田舎実測 1/3残存
4	土師器	小鉢	12.0	6.0	(0.0)	ハナナデ	ヘラケズリ→ナデ	門松実測 1/6残存
5	土師器	鉢	—	6.5	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部完形
6	土師器	鉢	17.0	—	—	ヘラナデ	ロヨコナデ ヘラケズリ	田舎実測 3/4残存

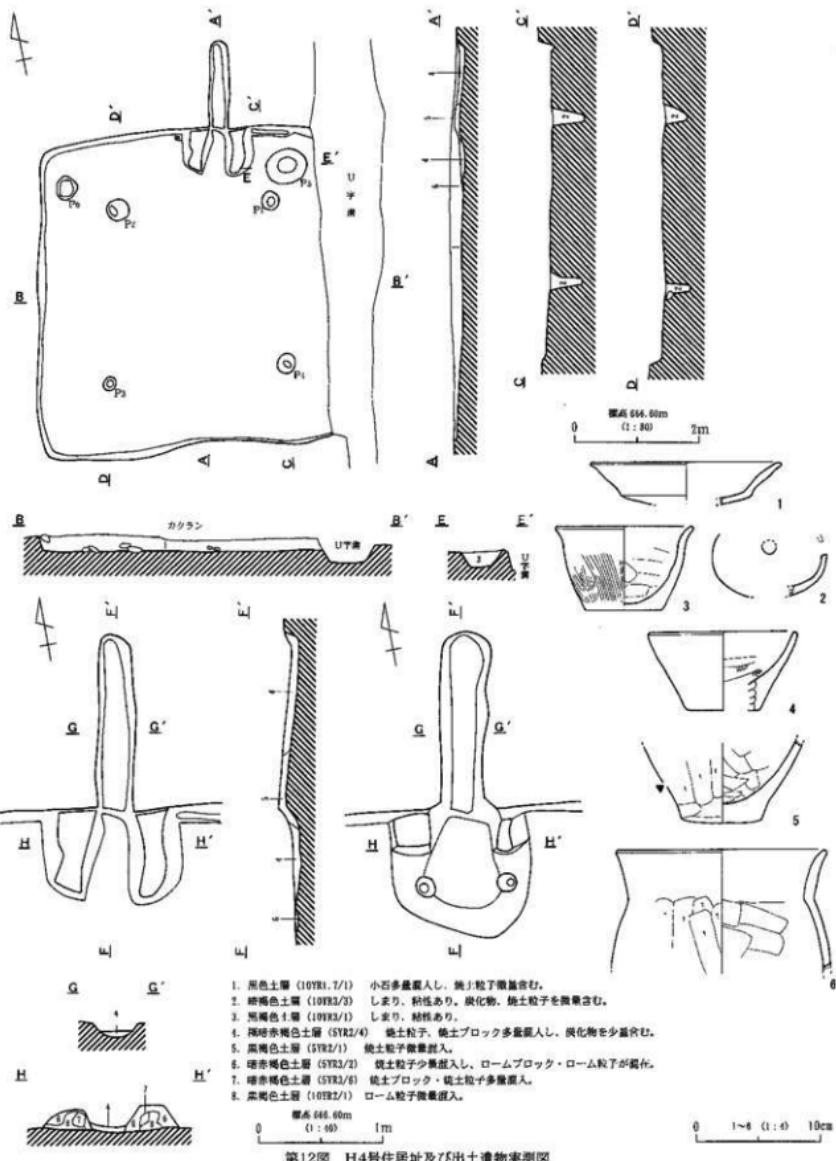
第6表 H4号住居址出土遺物観察表

(5) H5号住居址 (第13図, 写真図版七)

本住居址は、調査区北側であるチ-31、ツ-31Grに位置する。残存状態は住居址のほとんどが調査区域外となり住居址北西コーナーの一部が検出されたのみである。

No.	種別	基盤	法 線		成 形・調 整・文様		備 考	出土地
			内 面	外 面	内 面	外 面		
1	上師器	片	20.2	—	—	ロヨコナデ→ハケ日→ヘナナデ	ロヨコナデ→ハケ日→ヘラケズリ	田舎実測 口径1/5残存
2	上師器	鉢	22.8	—	—	ロヨコナデ→ヘナナデ	ロヨコナデ→ヘラケズリ	田舎実測 1/5残存

第7表 H5号住居址出土遺物観察表



第12図 H4号住居址及び出土遺物実測図

形態は不明であり、規模は北壁0.58m（残存）・西壁1.93m（残存）で、壁高さは西壁側で最大45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で0.32m²を測る。覆土はおむね自然堆積で2層に分かれるが、1層中には川原石が多く混入していた。床は軟質であったが、貼床は4~16cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁に一部検出された。断面形はU字形で、幅は約20~29cm・深さ7cmを測る。ピットは確認されなかった。

出土遺物は覆土中から少量出土した。図示した2点はいずれも土師器甕である。調整等はともに共通するが、土器の胎土が大きく異なり、1は良く精錬されており不純物はあまり含まれない粘土であるが、2は2~3mmの長石と考えられる鉱物が多量に含まれ、器面が荒れたような状態である。

本址からの出土遺物は少なく所産時期は不確定であるが、図示した甕の形態より7世紀代に位置づけられると考えられる。

（6）H 6号住居址（第14図、写真図版七）

本住居址は、調査区北側であるト-31.32、ナ-31.32Grに位置する。残存状態は西側と一部床面もカクランにより大きく壊されている。

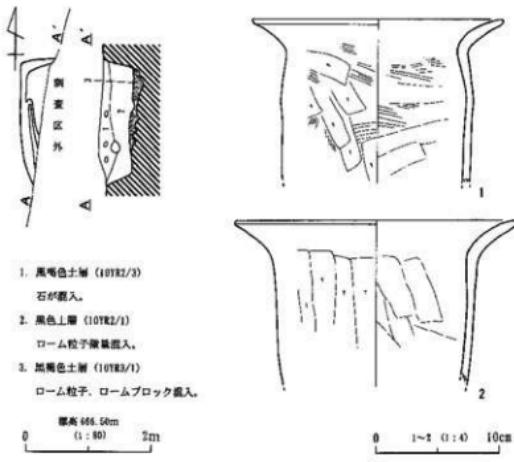
形態は正方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.56m（残存）・南壁3.52m（残存）・東壁4.30mで、壁高さは南壁中央で最大7cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部部分で11.36m²を測る。覆土はおむね自然堆積で単層である。床は全体的に硬質であったが、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「敲き床」であった。ピットは14カ所確認され、P1~P3が主柱穴と考えられる。規模はP1が径45cm・深さ35cm、P2が径37cm・深さ11cm、P3が径56cm・深さ29cm、P4が径25cm・深さ10cm、P5が径35cm・深さ9cm、P6が径43cm・深さ31cm、P7が径63cm・深さ25cm、P8が径37cm・深さ51cm、P9が径45cm・深さ18cm、P10が径30cm・深さ10cm、P11が径22cm・深さ5cm、P12が径16cm・深さ4cm、P13が径30cm・深さ10cm、P14が径41cm・深さ7cmを測る。

出土遺物は覆土中からが多く、図示したものもいずれも覆土中からの出土である。1は須恵器壺、2は須恵器甕の底部部分で、3は土師器の羽釜である。4は土師器の底部であるが、形状から3と同一個体と考えられる。

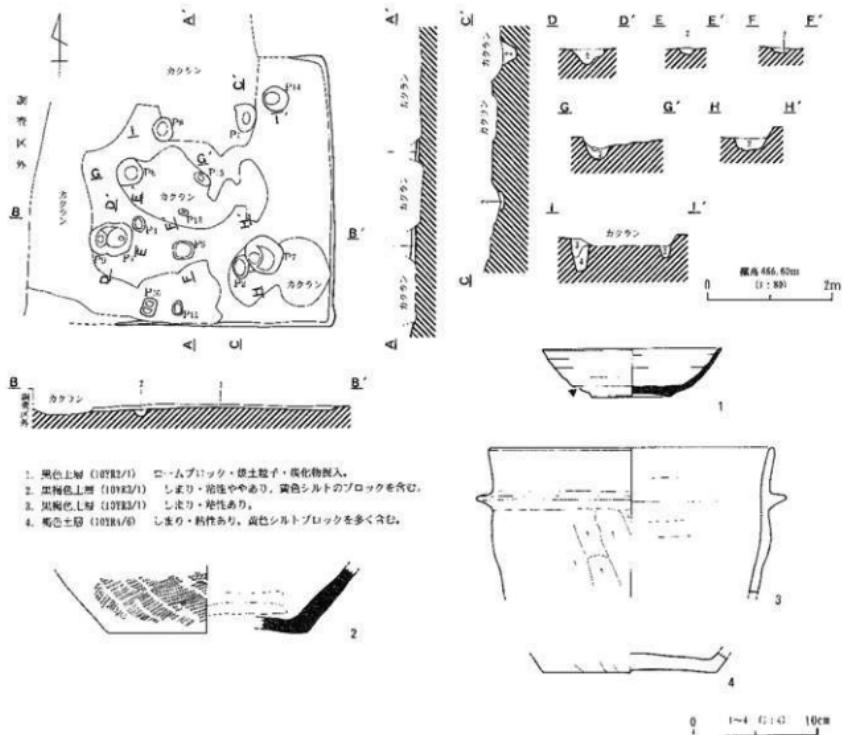
本址はこれらの出土遺物より、不確定であるが9世紀代と考えられる。

No.	種別	部種	法量			成形・調整・文様		圖考	出土位置
			口径(外)	底径(内)	高さ(中)	内面	外面		
1	須恵器	壺	14.3	6.5	3.9	クロナナギ 火漆	ロクロナナギ 底部有凹輪糸切り 火漆	完全実測	口径1/4残存 II・Ⅲ区
2	須恵器	甕	-	18.0	-	クロロナナナナナ	クロロナナナタキ 底部切口縫しツナギ	部分実測	底径1/4残存 IV区
3	土師器	羽釜	23.0	-	-	ナゲ	脚付一孔鍵孔ナナナゲ 伸脚ヘラケツリ	部分実測	口径1/4残存 I・II・III区
4	土師器	羽釜	-	14.0	-	ナナナ	伸脚ヘラナナナナ	部分実測	底部1/2残存 II区

第8表 H 6号住居址出土遺物観察表



第13図 H 5号住居址及び出土遺物実測図

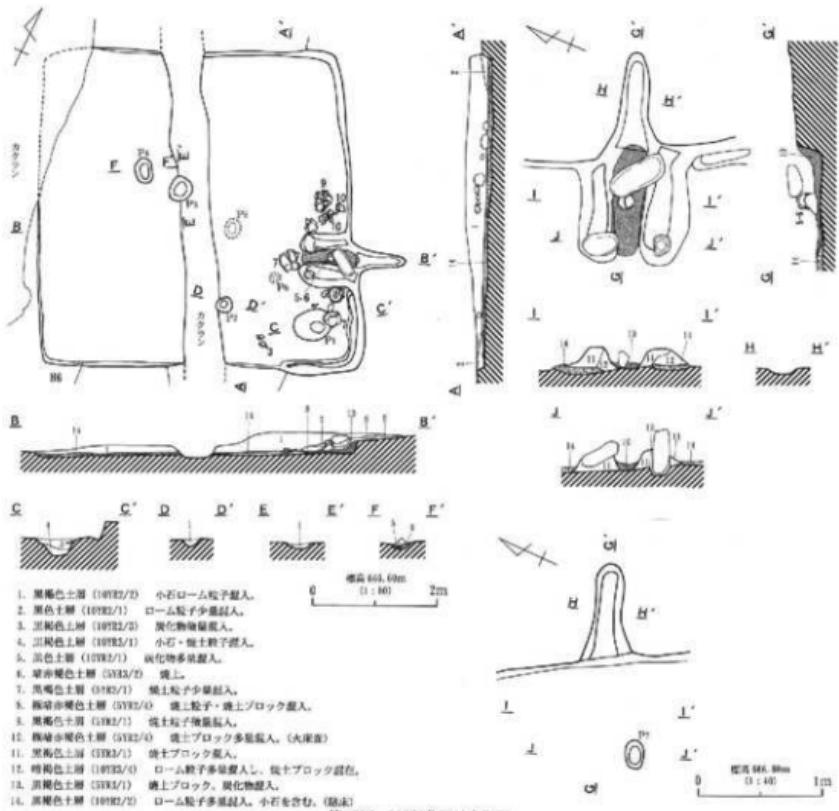


第14図 116号住居址及び出土遺物実測図

(7) H 7号住居址 (第15・16図、写真図版八)

本住居址は、調査区北側であるテ-30.31、ト-30.31.32Grに位置する。残存状態は住居址中央部分と北西コーナー端がカクランにより壊されている他は良好である。重複関係はH6号住居址より本址の方が古い。

形態は正方形を呈する。カマドは東壁や南よりに造られている。規模は北壁3.89m(残存) 4.62m(推定)・南壁4.84m・西壁2.59m(残存) 4.82m(推定)・東壁5.00mで、壁高さはカマド脇で最大34cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-68°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で20.8m²・推定で24.1m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心し硬質であり、貼床は0~8cmの厚さで貼られていた。壁溝は南東コーナー部に検出された。断面形はU字形で、幅は約18~29cm・深さ2~4cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認された。主柱穴は確定できなかったが、P1は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径62cm・深さ28cm、P2が径25cm・深さ15cm、P3が径40cm・深さ10cm、P4が径40cm・深さ11cm、P5が径30cm・深さ11cmを測る。

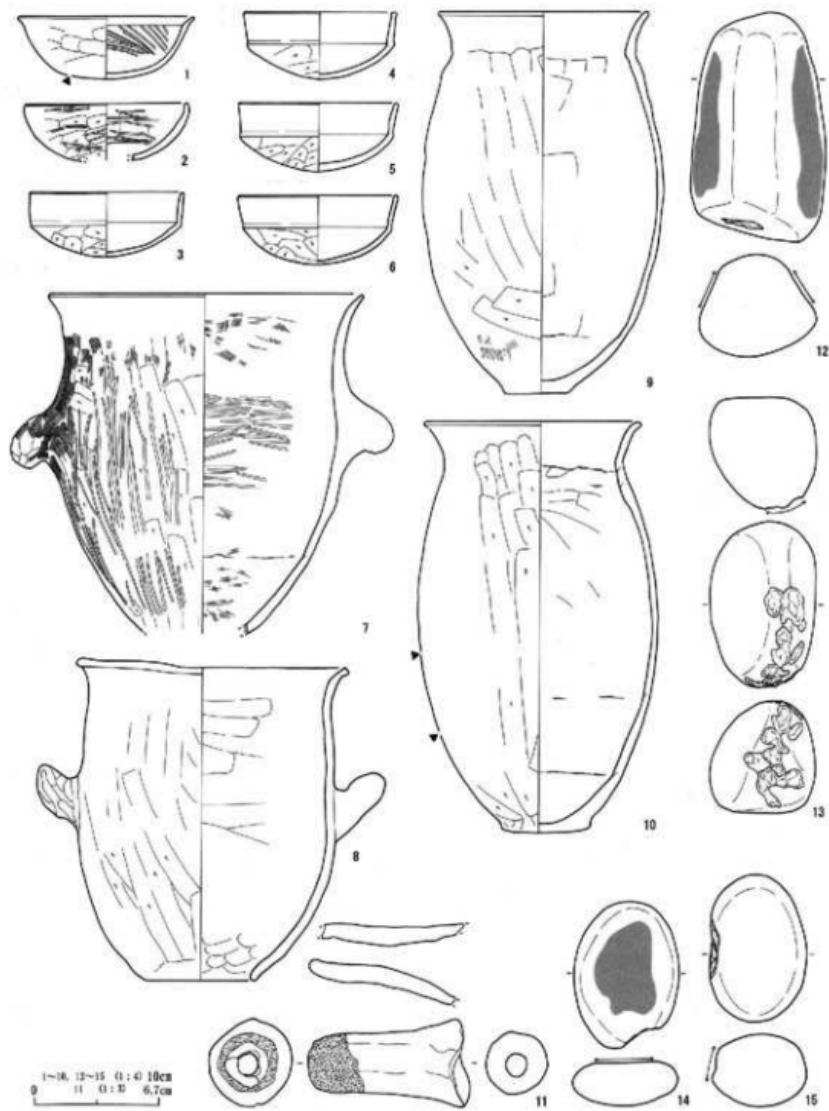


第15図 H7号住居址実測図

カマドは東壁南よりに検出された。主軸方位はN-69°-Eを示し、住居址長辺とほぼ同一であった。残存状況は煙道部と袖部とともに良好に残存しており、焚口部の天井石は原位置から動いていたが、焚口部の構築石は残存していた。規模は煙道部長さ89cm・幅23cm、袖部高さ17~20cmで、火床部は焚口部よりカマド奥まで広がり、焼土の厚さは5cmであった。燃焼部の中央には支脚石があり、石上部には図示した5と6の土器器壺が重ねて載せられていた。また袖部は貼床を施した後、粘土で構築されていることが断面観察で解った。

出土遺物は覆土中とカマド周辺からの出土が多く、特にカマド周辺のものは床面上のものが多く、破棄された時の原位置を保っていると考えられるもの多かった。

1~6は土器器壺であるがタイプはそれぞれ異なる。1はいわゆる「外斜口縁壺」、2は「内屈口縁壺」、3~6は須恵器壺蓋模倣の土器器壺である。また3~6は口径や底部ヘラケズリの技法また胎土ともに非常に似通っている。7と8は把手付の大型壺であるが、把手の向きが7と8で異なっている。8は単孔であり7も单孔と考えられる。9と10は土器器壺であり、カマド北側で並んで出土した。11は土製の羽口であり、端部が欠損しているが全容は把握できる。先端に鉄分の付着が見られる。12~



第16圖 H7號住居址出土遺物實測圖

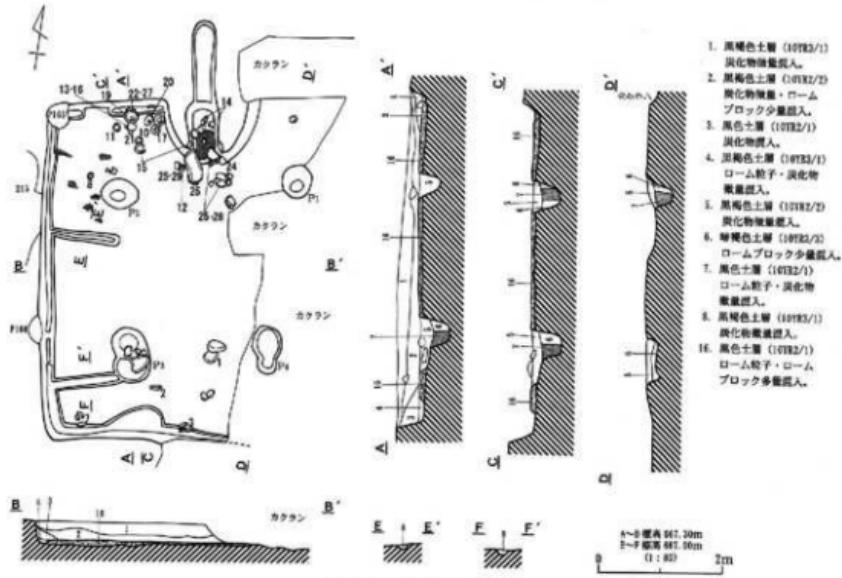
15は敲石と磨石で両方の機能を備えたものもある。本址はこれらの出土遺物より6世紀前半でも初頭に近い段階に位置づけられる。

No.	種別	基面	法面	成形・調整・文様			備考	出土位置
				内面	外面	底面		
1	土師器	坪	14.2	—	5.0	略文	口縁ヨコナデ ヘラケズリ→ナデ	倒転実測 1/4残存 I区
2	土師器	坪	13.3	—	(4.0)	ヘラナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ヨガキ	完全実測 1/2残存
3	土師器	坪	12.4	12.2	5.2	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 3/4残存 0cm I区
4	土師器	坪	12.3	11.9	5.4	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 2/3残存 I区
5	土師器	坪	12.8	12.4	5.5	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完存 6cm
6	土師器	坪	12.9	12.0	5.6	ナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完存 11cm
7	土師器	底	25.4	—	—	ハケ日→ミガキ	ハケ日→ヘラケズリ→ミガキ	完全実測 0~1cm
8	土師器	底	21.9	8.8	25.0	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	完全実測 完形 0cm II区
9	土師器	底	16.9	5.2	30.6	ヘラナデ	口縁ヨコナデ ハケ日→ヘラケズリ→ナデ	完全実測 ほぼ完形 0cm
10	土師器	底	17.4	7.3	33.0	ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測 4/6残存 0~2cm
11	土器山	頂面	外径2.8~5.2 内径1.4			ナデ	先端部断面付着	2V区
No.	探査	基面	現存高	最大長	最大幅	最大厚	基面	所見
12	漆・鐵石	鐵石安山岩	完形	18.3	10.9	8.6	257.0cm	内側にすり面 下端部に敲打痕
13	鐵石	鐵石安山岩	完形	13.3	8.5	9.0	156.0cm	上端部から正面にかけて敲打痕
14	漆・鐵石	鐵石安山岩	完形	11.7	8.4	3.7	51.0cm	三面にすり面 下端部に敲打痕
15	鐵石	鐵石安山岩	完形	11.8	7.8	5.9	71.0cm	左側に敲打痕

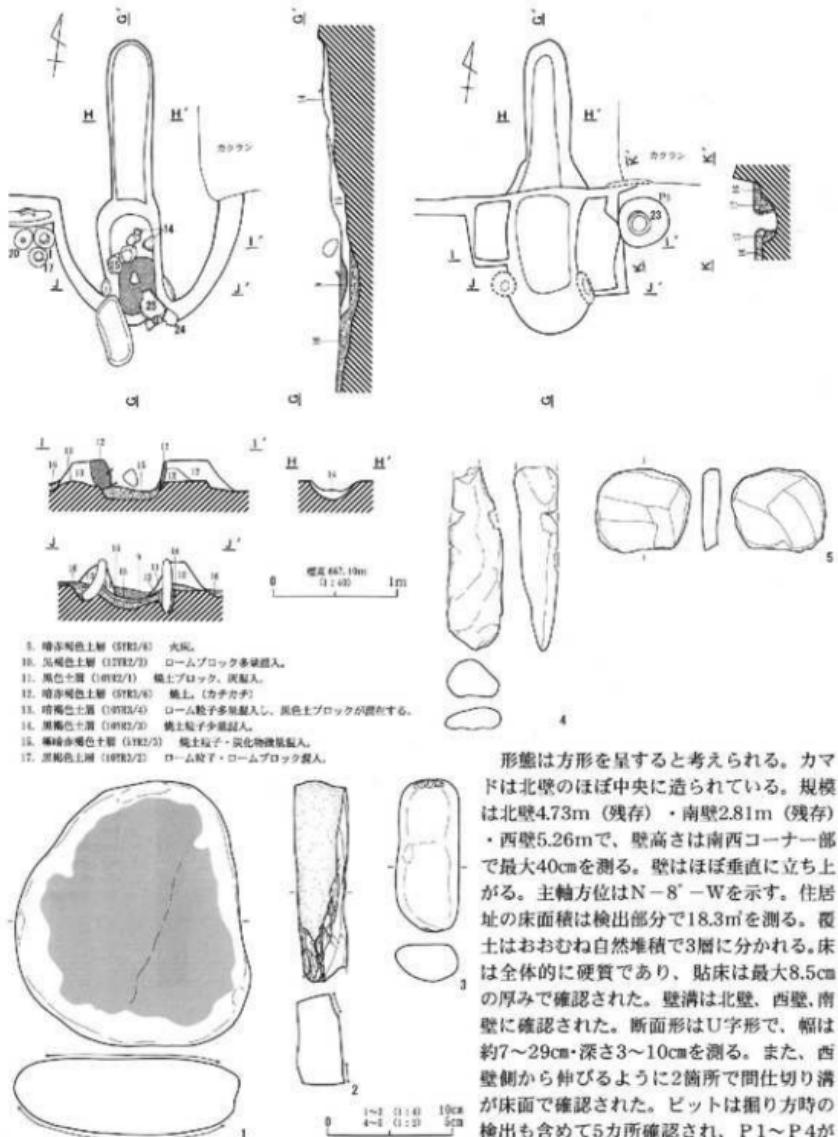
第9表 H7号住居址出土遺物観察表

(8) H8号住居址 (第17-18・19図、写真図版十・十一)

本住居址は、調査区北側である二-45.46.47、ヌ-45.46.47Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されている他は良好である。重複関係はD15より本址の方が古い。



第17図 H8号住居址実測図



第18図 H8号住居跡カマド及び出土遺物実測図

形態は方形を呈すると考えられる。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁4.73m(残存)・南壁2.81m(残存)・西壁5.26mで、壁高さは南北コーナー部で最大40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-8°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で18.3m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であり、貼床は最大8.5cmの厚みで確認された。壁溝は北壁、西壁、南壁に確認された。断面形はU字形で、幅は約7~29cm、深さ3~10cmを測る。また、西壁側から伸びるように2箇所で間仕切り溝が床面で確認された。ピットは掘り方時の検出も含めて5カ所確認され、P1~P4が

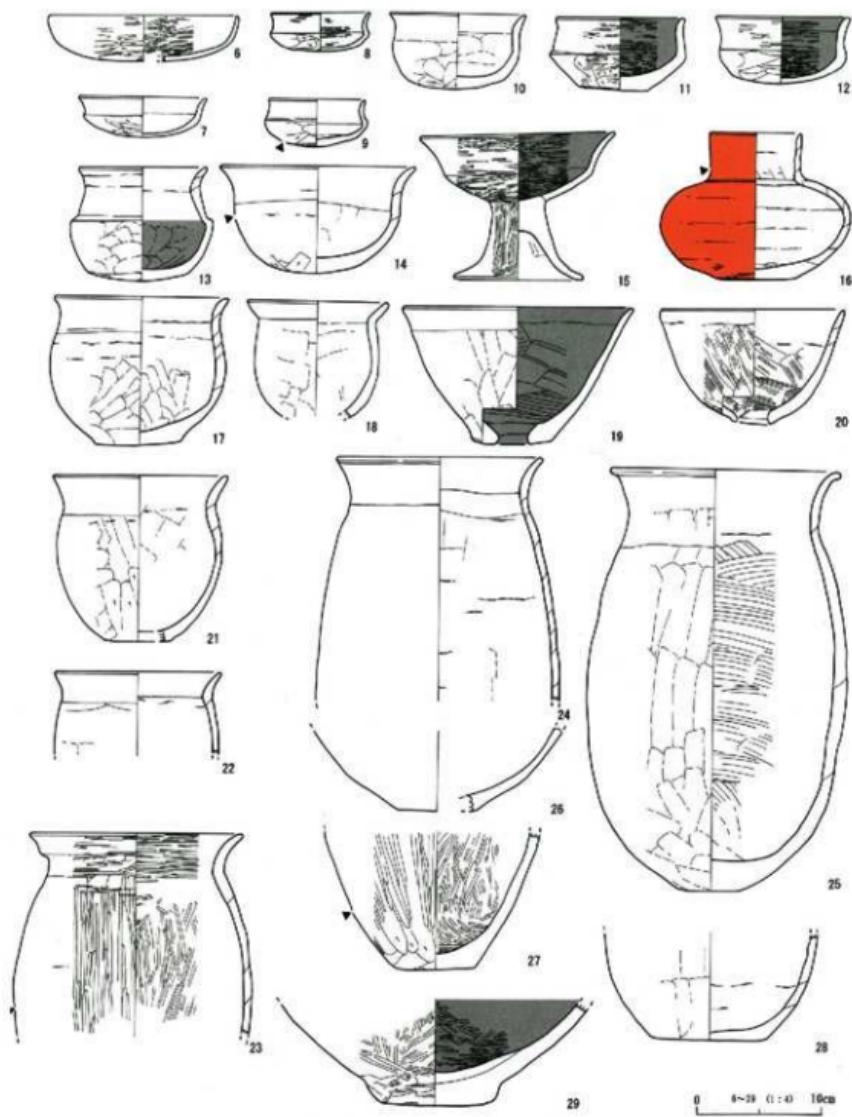
主柱穴と考えられる。規模はP1が径50cm・深さ39cm、P2が径58cm・深さ44cm、P3が径90cm・深さ48cm、P4が径76cm・深さ20cm、P5が径40cm・深さ16cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。残存状況は良好で焚口部の構築材と天井石が検出された。規模は煙道部長さ132cm・幅32~37cm、袖高さは掘り方面より32cmを測る。袖は住居址掘り方時に僅かに高く地山を掘り残し、その上に暗褐色土で構築している。火床部は円形で良く焼けており、焼上の厚みは8cmを測る。煙道部の主軸方位はN-7°-Wを示す。火床部及び煙道部も構築上有る。

出土遺物はカマド周辺の床面上からまとめて出土した(写真図版十・十一参照)。1~3は石製品で1は磨石で台としての使用が考えられ、両面磨りが観察された。4と5は土製品で、4はカマド煙道部から出土し、形態はヘラ状を呈している。用途は不明である。5は土製円盤で土師器蓋片の転用品と考えられる。6~12までは土師器壺である。6は胎上も精緻され他の壺とは形態が異なる。7~9は須恵器壺蓋模倣タイプの壺と考えられ、いずれも小壺である。13と14は鉢としたがいずれもタイプの異なるもので13は小型甕のような形態を呈する。15は高壺である。ほぼ完形であり外部は黒色処理されている。16は直口壺で口縁部が短いタイプのものである。外面に赤彩が施されている。17.18.21~22は小型甕である。19と20は単孔の小型の甕であり、19は内面黒色処理を行っていた。23~28は土師器甕である。23はカマド東脇のピットより底部を欠いた状態で出土した。このP5は貯蔵穴的な性格が考えられるが、右袖が大きくなっていたため、掘り方時の検出となつた。29は甕の底

種 別	器 像	法 算	成 形・調 整・文 样		備 考	出土位置
			内 面	外 面		
4 土製品	不明	7.3 2.2 1.8				完全19.51g カマド煙道部
5 土製品	円盤	33.3 3.8 0.7				完全120.1g II区
6 土師壺	片	15.2 —	(4.6) ミガキ	口縁ミガキ 体部ヘラケズリ	回転実測 1/4残存	II・Ⅲ区
7 土師器	片	10.3 —	3.2 ミガキ	体部ヘラケズリ 口縁ミコナデ	完全実測 完形	8cm
8 土師器	片	8.0 —	3.1 ミガキ	体部ミラケズリ	完全ミコナデ・ミガキ 完全実測 完形	0cm
9 土師器	片	7.8 —	3.8 ミガキ	底面ヨコナダ→口縁ヨコナダ 底面ヘラケズリ→口縁ヨコナダ	完全実測 完形	P5
10 土師器	片	10.9 —	6.2 ミガキ	ハケナデ・ナゲ・口縁ヨコナダ	完全実測 完形	0cm
11 土師器	片	10.1 —	5.9 ミガキ	底面ナゲ 下半部ヘラケズリ・ミガキ 上半部ヨコナダ・ミガキ	完全実測 完形	0cm
12 土師器	片	10.8 —	5.4 ミガキ・黑色磨漆	下半部ヘラケズリ→口縁ヨコナダ・ミガキ	完全実測 完形	0cm
13 土師器	片	10.3 8.0 9.1	9.1 ミガキ	下半部ヘラナダ 出色處理 上半部ヨコナダ	完全実測 完形	2cm
14 土師器	片	13.7 —	8.5 ミガキ	ハラナデヨコナダヨコナダ 底部ミガキ・黑色磨漆	ナゲ→口縁ヨコナダ 底部ヘラケズリ 完全実測 1/3残存	0~1cm
15 土師器	高杯	15.7 10.3	11.6 ミガキ	底部ミガキ 頂部ヘラナダ	完全実測 残存多	0~3cm
16 土師器	直口壺	7.4 6.5	11.8 ミガキ	トネルヘラケズリ→口縁ヨコナダ・ミガキ 底部ナゲ 底部ヘラケズリ	完全実測 断面見れている	0cm
17 土師器	直口壺	14.0 6.9	11.9 (9.3)	上半部ヨコナダ 下半部ヘラナダ 口縁ヨコナダ	下半部ヘラナダ・トネル 完全実測 完形	0cm
18 土師器	甕	11.3 —	11.1 ミガキ	口縁ヨコナダ 腹部ヘラケズリ→ナゲ ハケナデ 口縁ヨコナダ	回転実測 1/4残存	II区
19 土師器	甕	18.5 6.3	11.1 ミガキ	ハケナデ 口縁ヨコナダ 孔ヨコナダ 黑色磨漆	完全実測 完形 孔径2.3	2cm
20 土師器	甕	14.8 —	9.1 ミガキ	口縁ヨコナダ→ヘラケズリ 腹部ヘラケズリ→ナゲ	完全実測 完形 孔径2.4	0cm
21 土師器	甕	14.1 5.5	13.3 (6.7)	腹部ヘラケズリ→ナゲ 口縁ヨコナダ 回転見れていて不明	腹部ヘラケズリ→口縁ヨコナダ	0cm
22 土師器	甕	13.4 —	10.7 (16.3)	回転見れていて不明 ヨコナデ・ミガキ	ヘラケズリ・ミガキ	回転実測 5cm IV区
23 土師器	甕	17.1 —	16.6 (19.5)	回転見ヘラケズリ→ナゲ 口縁ヨコナダ 底部ナゲ	ヘラケズリ・ミガキ 完全実測 1/2残存	0cm P5
24 土師器	甕	16.6 —	18.5 5.2	口縁ヨコナダ 腹部ヘラケナナ 底部ヘラケズリ	底部ヘラケズリ・口縁ヨコナダ 底部ヘラケズリ	回転実測 1.5cm カマド
25 土師器	甕	18.5 —	53.7 ミガキ	口縁ヨコナダ 腹部ヘラケナナ 底部ヘラケズリ	底部ヘラケズリ・口縁ヨコナダ 底部ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形 I区
26 土師器	甕	— 6.4	(6.8) ミガキ	断面見れていて不明 底部ヘラケズリ	回転見れていて不明	I・IV区
27 土師器	甕	6.1 (11.1)	ミガキ	底部・高脚付近ヘラケズリ 腹部ミガキ	完全実測	5cm P5
28 土師器	甕	— 9.2	(8.5)	断面見れていて不明 ミガキ	ヘラナデ 腹部ヘラケズリ	回転実測 0cm カマド
29 土師器	甕	— 9.3	(8.3)	ミガキ・黑色磨漆	高脚付近ヘラケズリ・ミガキ	回転実測 0cm カマド IV区
30 瓦	瓦 材	残存率 高大部 最大幅 最大厚	承量		济 見	出土位置
1	唐瓦(合瓦)	需給割合 承重 21.2	18.8 6.2	3590.00	承・重に寸り重	3cm Ⅲ
2	破瓦?	需給割合 一式欠	(16.0) 4.4	7.7 (800.00)	止面下部に織打の剥離 正・裏面自然面 下端薄欠損	8cm
3	破瓦	砂瓦 瓦片	12.0 5.0	312.00	上・下部間に浅い織打痕	3cm

第10表 H18号住居址出土遺物観察表



第19圖 H8號住居址出土遺物實測圖

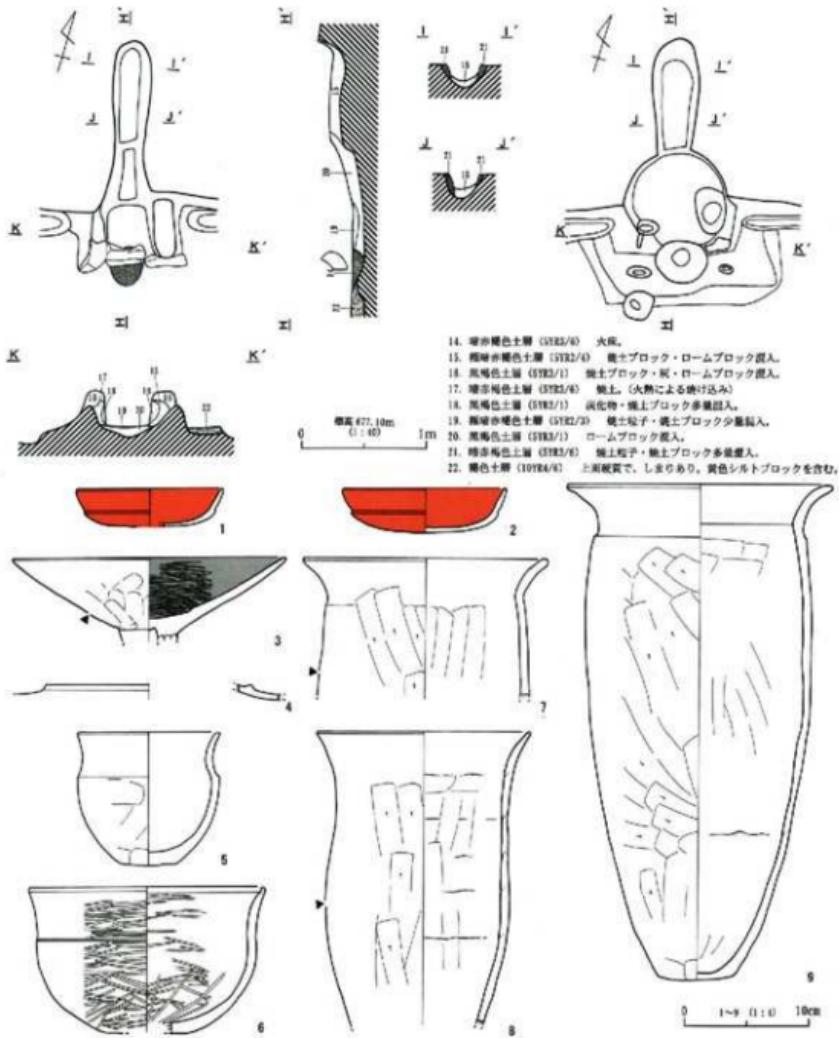
部付近と考えられる。内面黒色処理が行われている。本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

(9) H 9号住居址 (第20・21・22図、写真図版九)

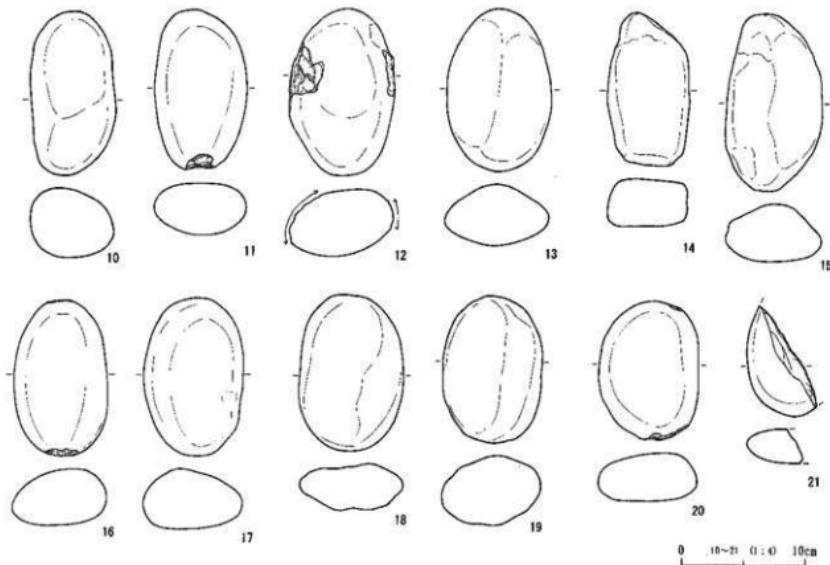


本住居址は、調査区北側であるナ-39.40、ニ-39.40Grに位置する。残存状態は住居址北西コーナー端がカクランにより壊されている他は良好である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.96m(残存) 4.78m(推定)・南壁4.23m・西壁2.96m(残存) 4.60m(推定)・東壁4.50mで、壁高さは西壁中央で最大37cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-13°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で19.5m²・推定で20.1m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は3~13cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁と東壁の全体、西壁と南壁の一部に確認された。断面形はU字形で、幅は約8~26cm・深さ3~10cmを測る。



第21図 H9号住居址カマド及び出土遺物実測図



第22図 H9号住居址出土遺物実測図

また、P2とP3に向かって壁より間仕切り溝が伸びていた。ピットは掘り方検出時も含め12カ所確認された。P1～P4が主柱穴、P11とP12は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径23cm・深さ39cm、P2が径33cm・深さ23cm、P3が径23cm・深さ31cm、P4が径50cm・深さ31cm、P5が径33cm・深さ9cm、P6が径32cm・深さ10cm、P7が径66cm・深さ24cm、P8が径30cm・深さ7cm、P9が径34cm・深さ17cm、P10が径47cm・深さ17cm、P11が長軸82cm・短軸55cm・深さ35cm、P12が長軸53cm・短軸52cm・深さ16cmを測る。

住居掘り方はカマド前と東西壁前が一部高くなる「コ」字状の掘り方で、掘り方検出時に主柱穴から間仕切り溝が伸びている状態が確認された。

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN-17°-Wを示す。残存状況は良好であり、煙道部の長さは149cm・幅23～37cmを測り、極暗赤褐色土で構築していた。袖は地山掘り残しの部分を芯材として黒褐色土で補強している。袖の高さは残存部で35cmを測る。焚口部は大型の礫を3つ使用し、袖と天井を構築していた。火床部は焚口部付近にあり、良く焼けており焼土の厚みは9cmを測る。

出土遺物は覆土中とカマド周辺から多く出土した。1と2は土師器坏でいずれも内外面赤彩が施されている。本土器の色彩は橙色ではなく、いわゆる弥生箱清水式土器の様な赤色である。3は高坏坏部で内面黑色処理を施す。4は高坏脚部の破片か、或いはいわゆる二重口縁壺の口縁部とも考えられる。いずれにしても本址に伴う遺物ではなく古墳前期の所産遺物と考えられる。5は小型壺、6は鉢である。見込み部に放射状の暗文的なミガキが施されている。7～9は土師器壺である。9はほぼ完形でカマド東側の貯蔵穴脇から出土した。10～21は編み物石と考えられる。住居址南東コーナー部よりまとまって出土した。11.16.20等は敲打の跡があり、12は両側に抉りのような敲打が確認できる。

本址はこれらの出土遺物より7世紀前半に位置づけられると考えられる。

No	種別	器種	法 墓		成 形・調 整・文 横				備 考	出土位置
			内 面	外 面	内 面	外 面				
1	土師器	杯	13.8	10.5 (3.0)	ナデ	全面赤色彫	口縁ヨコナデ	底部ヘラケズリ	円柱実測 1/2残存	0cm
2	土師器	杯	13.1	11.8 3.5	ナデ	全面赤色彫	口縁ヨコナデ	底部ヘラケズリ	完全実測 4/5残存	0cm
3	土師器	高杯	23.0	—	ミダリ	赤色彫	ナデ	ナデ	圓柱実測 空洞残存	5cm
4	土師器	高杯	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	圓柱実測 頂部1/3残存	IV区北竜方
5	土師器	小鉢	11.4	4.2	10.7 ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	完全実測 完形	11cm
6	土師器	鉢	19.8	6.6 11.6	吉字型 横文?	ミダリ	ミダリ	ミダリ	圓柱実測 1/4残存	カマド IIIK
7	土師器	壺	19.7	—	ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測 1/3残存	0cm
8	土師器	壺	17.2	—	ミダリ	口縁ヨコナデ-ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測 圓柱実測	0cm
9	土師器	壺	21.4	6.1 39.7	ヘラナデ	ヘラケズリ-口縁ヨコナデ	ヘラケズリ-口縁ヨコナデ	ヘラケズリ-口縁ヨコナデ	完全実測 完形	0cm
10	陶 瓦	瓦 材	瓦舟輪軸瓦	新井社	大島粘	豊大島	希 亂	希 亂	希 亂	出土位置
11	陶 瓦	瓦 片	滑面瓦	実測	12.1	6.9	5.8	630.00		0~1cm
12	陶 瓦	瓦 片	瓦舟輪軸瓦	鹿港	12.7	7.4	4.2	450.00	ド壇部に瓦片	0~1cm
13	陶 瓦	瓦 片	滑面瓦	実測	13.1	8.6	5.3	820.00	両側に挿りとせられる瓦片	0~14cm
14	陶 瓦	瓦 片	瓦舟輪軸瓦	実測	12.3	6.5	4.5	350.00		0~1cm
15	陶 瓦	瓦 片	角舟輪軸瓦	実測	14.2	7.8	4.7	660.00		0~1cm
16	陶 瓦	瓦 片	舞弓女山瓦	実測	12.5	8.5	4.6	460.00	上・下端部に破打痕	0~1cm
17	陶 瓦	瓦 片	角舟輪軸瓦	実測	12.6	8.7	5.0	680.00		0~1cm
18	陶 瓦	瓦 片	滑面瓦	実測	12.5	8.5	3.8	435.00		0~1cm
19	陶 瓦	瓦 片	瓦舟輪軸瓦	実測	11.7	8.0	5.7	680.00		0~1cm
20	陶 瓦	瓦 片	舞弓女山瓦	実測	11.3	8.0	4.0	580.00	上・下端部に深い破打痕	0~1cm
21	陶 瓦	瓦 片	角舟輪軸瓦	1/2残	(6.9)	(5.6)	(2.0)	(136.00)	瓦半分欠損	0~1cm

第11表 H9号住居址出土遺物観察表

(10) H10号住居址 (第23図、写真図版十二)

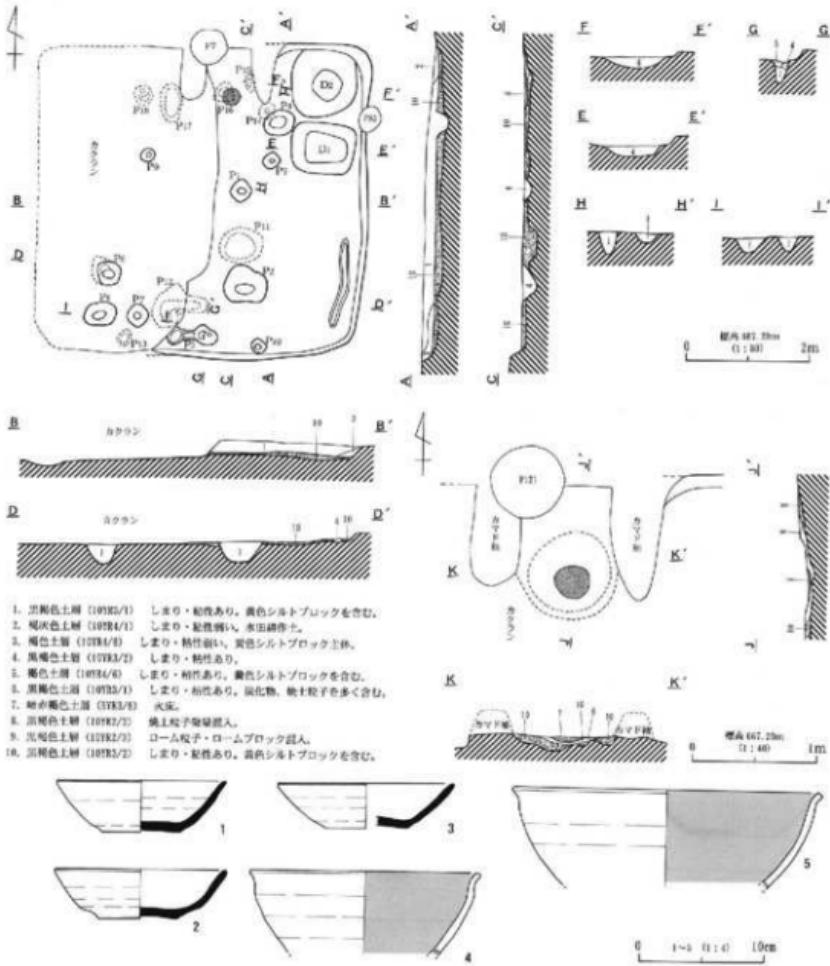
本住居址は、調査区北側であるト-43.44、ナ-43.44Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより大きく壊されている。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.60m(残存) 5.20m(推定)・南壁3.15m(残存) 4.87m(推定)・西壁4.53m(推定)・東壁4.60mで、壁高さは南壁中央で最大18cmを測る。礎はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で12.04m²・推定で24.7m²を測る。住居址の主軸方位はNを示す。覆上はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~11cmで貼られていた。壁溝は東壁南よりに壁から離れた状態で一部検出され、規模は幅10~15cm・深さ3~8cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め18力所確認された。P3は入り口施設の柱穴と考えられる。1規模はP1が径37cm・深さ9cm、P2が径72cm・深さ33cm、P3が径81cm・深さ38cm、P4が径51cm・深さ16cm、P5が径30cm・深さ30cm、P6が径42cm・深さ31cm、P7が径37cm・深さ21cm、P8が径51cm・深さ19cm、P9が径24cm・深さ22cm、P10が径25cm・深さ26cmを測る。P11からが掘り方検出時のピットで、規模がP11が径68cm・深さ17cm、P12が径73cm・深さ25cm、P13が径28cm・深さ21cm、P14が径28cm・深さ21cm、P15が径27cm・深さ7cm、P16が径30cm・深さ10cm、P17が径59cm・深さ11cm、P18が径32cm・深さ16cmを測る。また、本址にはカマド東脇に2つの貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認された。規模はD1が長軸101cm・短軸79cm・深さ20cm、D2が長軸107cm・短軸104cm・深さ18cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていて、上面をカクランにより削平され傾道部等は確認されず火床部のみの検出にとどまった。カマドは貼床の上に構築され、火床部の焼土厚みは3cmを測る。

No	種別	器種	法 墓		成 形・調 整・文 横				備 考	出土位置
			内 面	外 面	内 面	外 面				
1	須恵器	杯	13.6	6.2 4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	圓柱実測 1/3残存	II区
2	須恵器	杯	13.9	6.4 4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 底部完存	II区
3	須恵器	杯	14.2	6.6 (3.6)	ロクロナデ	コクロナデ	コクロナデ	コクロナデ	圓柱実測 1/3残存	Ⅲ区
4	土師器	鉢	15.6	—	ロクロナデ	黒色彫	ロクロナデ	ロクロナデ	圓柱実測 日経1/2残存	I区
5	土師器	鉢	23.0	—	ロクロナデ	黒色彫	ロクロナデ	ロクロナデ	圓柱実測 口経1/3残存	Ⅲ区(ホリ方)

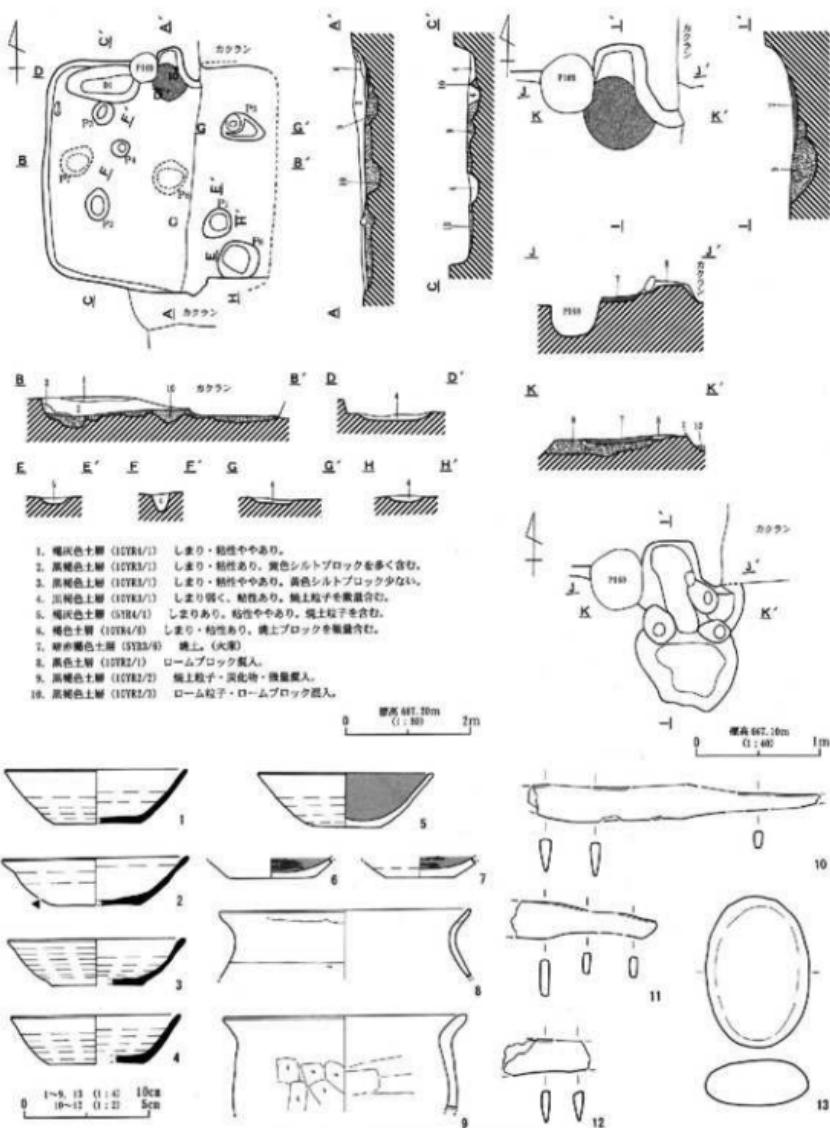
第12表 H10号住居址出土遺物観察表



第23図 H10号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中からが多く、図示したものもいざれも覆土中からの出土である。1～3は須恵器甌であり、2は底部右回転糸切り離し。3は底部ヘラケズリを施している。4と5は土師器鉢でいざれも内面黒色処理されている。

本址はこれらの出土遺物より9世紀前半に位置づけられる。



第24図 H11号住居址及び出土遺物実測図

(11) 11号住居址 (第24図、写真図版十三)

本住居址は、調査区北側であるナ-43.44、ニ-43.44Grに位置する。残存状態は東側がカクランにより壊されていたが掘り方部分が一部残存していた。新旧関係はH19号住居址より本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.45m・南壁2.06m(残存)3.38m(推定)・西壁3.17m・東壁3.36m(推定)で、壁高さは南壁中央で最大29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-3°-Eを示す。住居址の床面積は7.61m²(残存)・12.33m²(推定)を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~12cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め8カ所が確認され、P1~3・P5が主柱穴、と考えられる。規模はP1が径51cm・深さ13cm、P2が径51cm・深さ16cm、P3が径35cm・深さ21cm、P4が径30cm・深さ30cm、P5が径71cm・深さ19cm、P6が径68cm・深さ11cm、P7が径56cm・深さ14cm、P8が径57cm・深さ19cmを測る。また、住居址カマド西脇には貯蔵穴と考えられる掘り込みがあり、規模は長軸117cm・短軸58cm・深さ13cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は左側袖がピットに、東側袖がカクランにより削平されていた。煙道部は長く伸びないタイプで、火床部は貼床の上に構築されていた。

出土遺物は覆土中のものが多く、図示した遺物も覆土中やカマド内、掘り方検出時のものである。1~4は須恵器壺で、底部はいずれも回転糸切り離してある。5~7は土師器壺で、いずれも内面黒色処理されている。8と9は土師器壺で、8はいわゆる「武藏甕」のタイプに含まれる。10~12は鉄製品で、いずれも刀子の一部と考えられる。13は梢円形の川原石で顕著な磨りあと等はなかったが、遺構内への持ち込みと考え図示した。

これら遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	目	法量	成形・調製・文様				調査	出土位置
				内面					
1	須恵器	壺	14.6 7.0 (4.3)	クロナダ	ロクロナダ	底部右回転糸切り(方向不明)	回転束縛	1/4残存	IV区
2	須恵器	壺	13.0 6.9 (3.8)	クロナダ	ロクロナダ	底部右回転糸切り	完全束縛	2/3残存	カマド
3	須恵器	壺	14.4 7.2 (3.7)	クロナダ 大輪	ロクロナダ	底部右回転糸切り 火槽	回転束縛	1/4残存	Ⅳ-IVBホリカ
4	須恵器	壺	13.6 7.4 (3.9)	クロナダ	ロクロナダ	底部右回転糸切り(方向不明)	回転束縛	1/4残存	IV区
5	土師器	壺	14.2 5.6 (4.3)	クロナダ 黒色施釉	ロクロナダ	底部右回転糸切り	完全束縛	残存	Ⅴ
6	土師器	壺	— 7.2	— ミガキ一黑色處理	ロクロナダ	—	回転束縛	1/3残存	I区ホリカ
7	土師器	壺	— 5.4	— ミガキ一黑色處理	ロクロナダ	—	回転束縛	3/4残存	壁面
8	土師器	壺	20.2 —	— ナダ	ヘラケズリ	口縁ヨコナダ	回転束縛	1/6残存	カマド
9	土師器	壺	19.6 —	— ナダ	ヘラケズリ	口縁ヨコナダ	回転束縛	口縁1/7残存	壁面
No.	種類	材	残存寸 底面長 最大幅 高	人頭	底大厚	底	所見		出土位置
10	刀子	鉄	(11.7)	1.4	(0.4)	—			0cm
11	刀子	鉄	(5.9)	1.5	(0.4)	—			カマドホリカ
12	刀子	鉄	(3.6)	(1.3)	(0.4)	—			カマドホリカ
13	不明	溶結凝灰岩 充填	12.0	8.3	3.6	494.00	顯著な使用痕なし		Ⅴ区

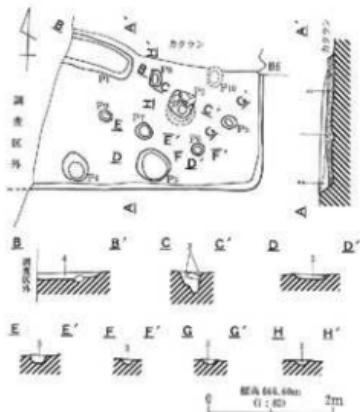
第13表 H11号住居址出土遺物観察表

(12) 12号住居址 (第25図、写真図版十二)

本住居址は、調査区北側であるト-32.33、ナ-32.33Grに位置する。残存状態は住居址西側が調査区外、北側がカクランによって削平されている。新旧関係は本址の方がH6号住居址より古い。

形態は全容は不明であるが、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は南壁3.64m(残存)、東壁2.85m(残存)で、壁高さは南東コーナー部で最大16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.98m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~14cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め10カ所が確認された。規模はP1が径108cm・深さ16cm、P2が径47cm・深さ33cm、P3が径56cm・深さ8cm、P4が径45cm・深さ17cm、P5が径22cm・深さ8cm、P6が径20cm・深さ9cm、P7が径28cm・深さ11cm、P8が径25cm・深さ9cm、P9が径22cm・深さ6cm、P10が径33cm・深さ41cmを測る。

出土遺物は覆土中から古墳時代の甕片と図示した編み物石が出土した。1~6の編み物石はP4よりもとて出土した。これら遺物より不確実ではあるが本址は古墳時代後期に位置づけられると考える。



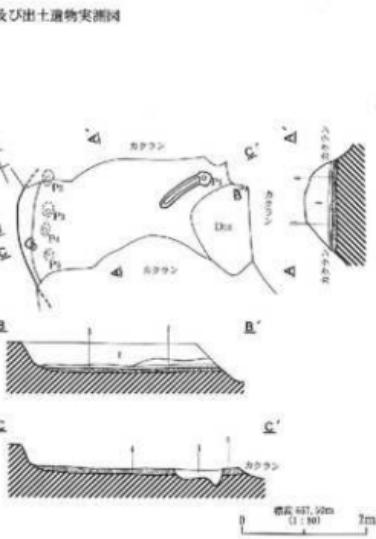
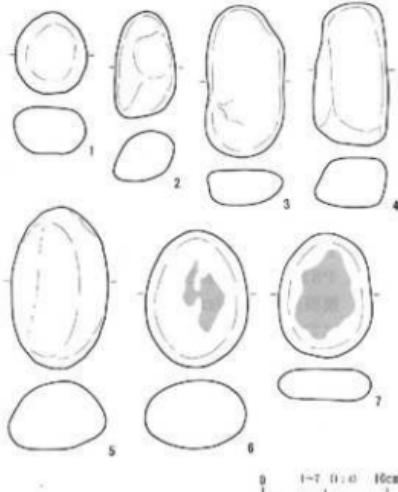
1. 黒色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。炭化物を微量含む。
2. 黒褐色土層 (10YR5/1) しまり・粘性あり。
3. 黑褐色土層 (10YR5/1) 黄色シルトブロックを多量含む。
4. 黑褐色土層 (10YR5/1) ロームブロック多量混入。
5. 黑褐色土層 (10YR5/1) 小石を多量含む。
6. 黑褐色土層 (10YR5/1) ロームブロック・ローム段子多量混入。

第25図 H12号住居址及び出土遺物実測図

(13) H13号住居址 (第26図、写真図版十三)

本住居址は、調査区北側である二-49.50、ヌ-49Grに位置する。残存状態は南北側と東壁側がカクランにより壊されており住居址の全容は不明である。重複関係はH14号住居址とD16号土坑があり、古い方よりH14号住居址→本址→D16号土坑である。

形態は不明であり、規模は西壁1.70m(残存)で、壁高さは西壁中央で最大43cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.92m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれ、床面上の3層中に炭化物が検出された。床は全体的に硬質で、貼床は全体に3~12cmの厚さで貼られていた。壁溝は部分的に検出された。断面形はU字形で、幅は約14~16cm・深さ8cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認された。規模はP1が径24cm・深さ29cm、P2が径25cm・深さ11cm、P3が径23cm・深さ12cm、P4が径22cm・深さ6cm、P5が径17cm・深さ6cmを測る。



1. 塗褐色土層 (10YR3/3) 粘質、ロームブロック微量混入。
2. 黒褐色土層 (10YR3/1) 粘質、ロームブロック微量混入。炭化物含む。
3. 黑褐色土層 (10YR5/2) 粘質、炭化物微量混入。
4. 黑色土層 (10YR2/1) 粘質、ローム段子少量混入。

第26図 H13号住居址実測図

出土遺物は覆土中からが多く図示可能なものはなかったが、土師器高台壺や内面黒色処理された壺等の出土から平安時代の所産と考えられる。

No.	品種	素材	残存率	最大径	最小径	最大厚	重 量	出 見	出土状況
1	圓み物石	安山岩	完形	6.6	5.8	3.7	173.00		P-4
2	圓み物石	カルシフューラス	完形	8.6	4.9	4.3	247.00		P-4
3	圓み物石	輝石安山岩	完形	12.0	6.3	3.1	356.00		P-4
4	圓み物石	石英安山岩	完形	11.4	5.8	3.9	452.00		P-4
5	圓み物石	角閃石安山岩	完形	12.9	7.8	5.5	620.00		P-4
6	圓み物石	田原湖灰岩	完形	10.0	6.3	3.5	610.00	正面にすり面	P-4
7	鉢	田原湖灰岩	完形	9.9	7.6	2.5	286.00	正面にすり面	P-10

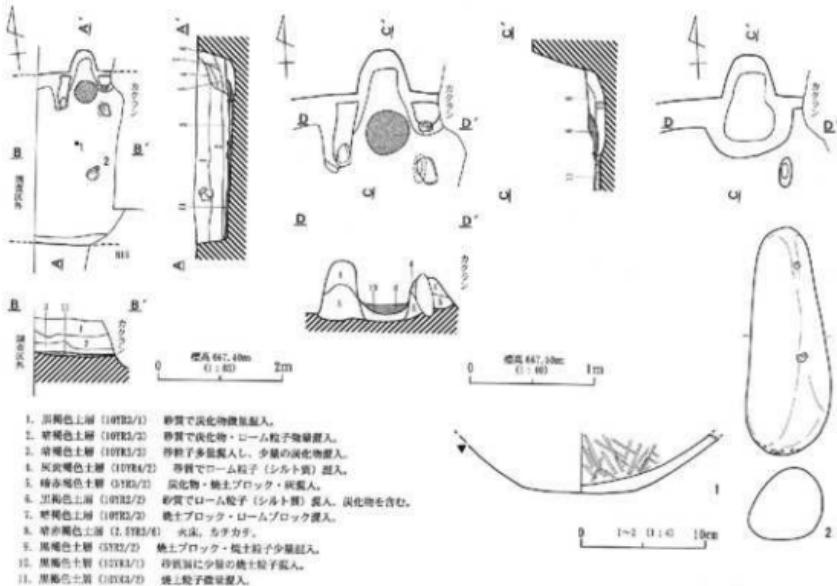
第14表 H12号住居址出土遺物観察表

(14) H 14号住居址 (第27図、写真図版十四・十五)

本住居址は、調査区北よりである又~18.49Grに位置する。残存状態は東壁側がカクラン、西側が調査区域外となる。新旧関係は古い方より本址→H13号住居址である。

形態は方形を呈すると考えられる。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.17m(残存)・南壁1.17m(残存)で、壁高さは北壁カマド脇で最大53cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.18m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であり、床は1~5cmの厚さで貼られていた。

カマドは北壁中央に検出され、ほぼ良好な形で確認された。煙道部は外に煙道が伸びないタイプで、規模は長さ60cm・幅23cmを測る。袖は川原石を芯材として、褐色土で被覆していた。規模は高さが34~48cmを測る。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは7cmを測る。



第27図 H14号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法 量						備 考	出土状況
			内 面		外 面					
1	土師器	壺	—	9.0	—	ナデーミ刃手	—	不明	完全完形 底部完形	Dca I区
2	磨石	安山岩	丸形	16.2	6.9	最大長 最大幅	5.5	重 量	所 在	出土位置
2	磨石	安山岩	完形	16.2	6.9	5.5	960.00	下底面に浅い敲打痕 上面が荒っぽい。	—	Dca II

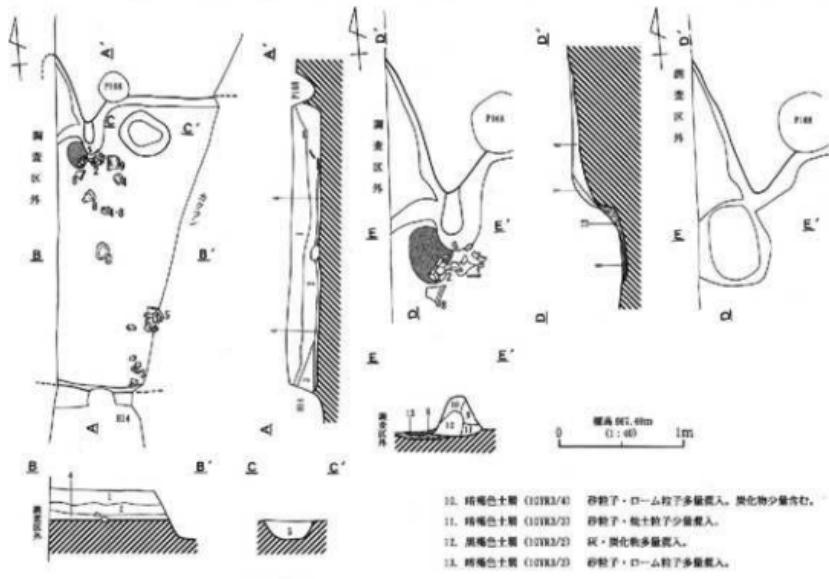
第15表 H14号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中からが多かった。1は土師器壺か壺の底部であり、内面にあらいミガキが施されている。2は敲き石で側面と先端に敲打の跡が確認できた。

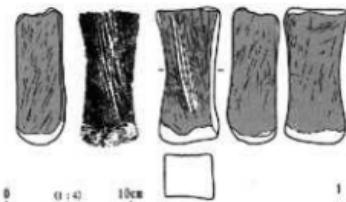
本址は出土遺物が少なく、所産時期は不確実である。

(15) H15号住居址 (第28・29図、写真図版十五)

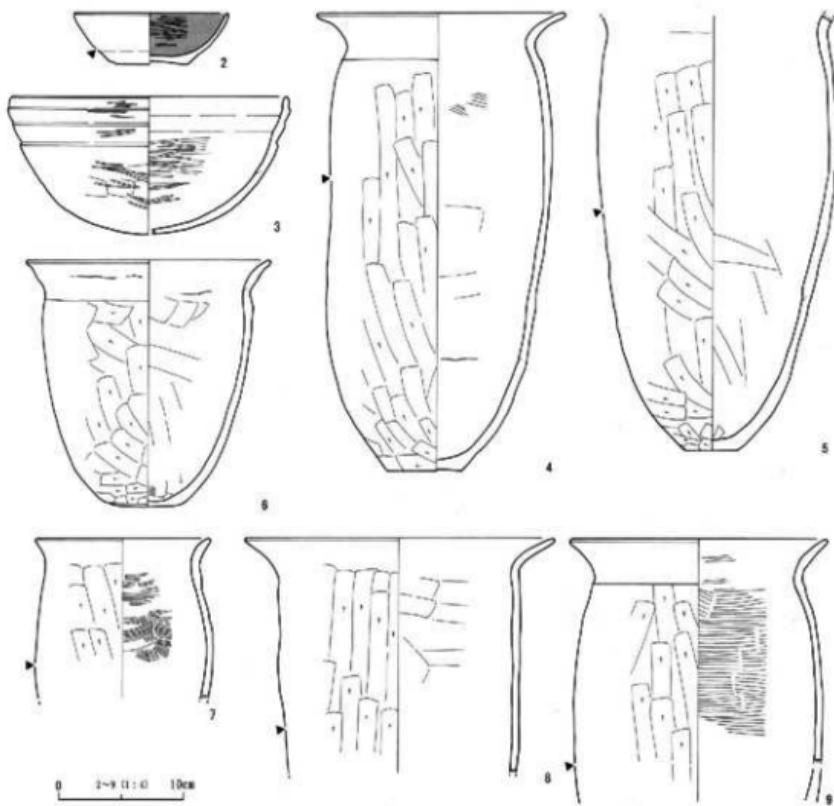
本住居址は、調査区北よりある二-47.48、又-47.48.49Grに位置する。残存状態は住居址東側がカクランにより壊され、西側が調査区域外となる。遺構の新旧関係は新しい方よりH14号住居址→本



10. 淡褐色土壁 (15TR3/4) 砂粒子・ローム粒子多量混入。炭化物少量混入。
 11. 淡褐色土壁 (15TR3/3) 砂粒子・焼土粒子少量混入。
 12. 黑褐色土壁 (15TR3/2) 灰・炭化物多量混入。
 13. 淡褐色土壁 (15TR3/3) 砂粒子・ローム粒子多量混入。



第28図 H15号住居址及び出土遺物実測図



第29図 H15号住居址出土遺物実測図

No.	種別	器種	法規 日本考古学会規範	成形・調量・文様			備考	出土位置
				内面	外面	裏面		
2	土師器	坪	12.4 (10.8)	5.7 (5.1)	4.1 (4.2)	ミガキ 深色底墨 ハケ付→ミガキ	ロクロナデ ハラナデミガキ	完全実測 底部定形 1/4残存
3	土師器	鉢	22.4 (21.0)	— (1.10)	— (0.8)	ミガキ 深色底墨 ハラナデミガキ	ロクロナデ ハラナデミガキ	完全実測 底部定形 1/4残存
4	土師器	甕	20.0 (19.6)	5.8 (6.3)	36.7 (19.7)	ミガキ 深色底墨 ハラナデ (ハケナデ)	ロクロナデ ハラケズリ ミコナデ	完全実測 口縁1/3残存 0~8cm カマド
5	土師器	甕	— (1.41)	— (—)	— (—)	ミガキ 深色底墨 ハラナデ	ロクロナデ ハラケズリ	完全実測 底部定形 0cm
6	土師器	甕	19.6 (14.1)	6.3 (—)	19.7 (—)	ミガキ 深色底墨 ハラナデ	ロクロナデ ハラケズリ ミコナデ	完全実測 底部定形 カマド
7	土師器	甕	— (24.9)	— (—)	— (—)	ミガキ 深色底墨 ハラナデ	ロクロナデ ハラケズリ	完全実測 口縁2/3残存 0~4cm カマド
8	土師器	甕	— (26.5)	— (—)	— (—)	ミガキ 深色底墨 ハラナデ	ロクロナデ ハラケズリ ミコナデ	完全実測 口縁1/3残存 6.5cm カマド
No.	器種	実材	推存重	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見
1	磁石	炭化物	充てん	(10.8)	5.1	4.2	348.00	上部大瓶 四脚とも底面 新本有り 里土灰質

第16表 H15号住居址出土遺物観察表

址→H44号住居址である。

形態は不明である。規模は北壁2.62m(残存)・南壁1.38m(残存)で、壁高さは南壁側で最大48

cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.32m²を測る。覆土はおむね自然堆積で3層に分かれる。床は軟質であり、カマド側で一部貼床が確認された。また、カマド東脇に貯蔵穴が検出された。規模は長軸82cm・短軸64cm・深さ33cmを測る。カマドは北壁側に検出された。煙道部は外に煙道が伸びるタイプで、規模は長さ127cmを測る。袖は暗褐色土で被覆していた。規模は高さが34cmを測る。火床部はよく焼けており、焼上の厚みは3cmを測る。

出土遺物はカマド周辺及び南壁付近からまとめて出土した。特にカマド周辺のものは床面上のものが多く、破棄された時の原位置を保っていると考えられるもの多かった。1は砥石であり、覆土中からの出土である。刃物傷の様な鋭い傷跡あり。2は土師器坏で内面黒色処理されている。カマド前面の床面上から出土しているが、他の床面上の遺物が古墳時代後期（7世紀代）を示しているため、2は重複構造の未確認などによる混入と考えられる。3は鉢であり、いわゆる「有段口縁坏」の口縁部と酷似する形態を示す。胎土はよく精錬されており、粗いミガキが施されている。6と7は上師器小型甕であり、7は内面に刷毛目の残るナデが施されている。4と5・8と9は土師器甕で外面ヘラケズリで頭部が「く」の字に曲がるタイプのものである。

本址はこれらの出土遺物より7世紀代の所産と考えられる。

(16) H 16号住居址 （第30図、写真図版十六）

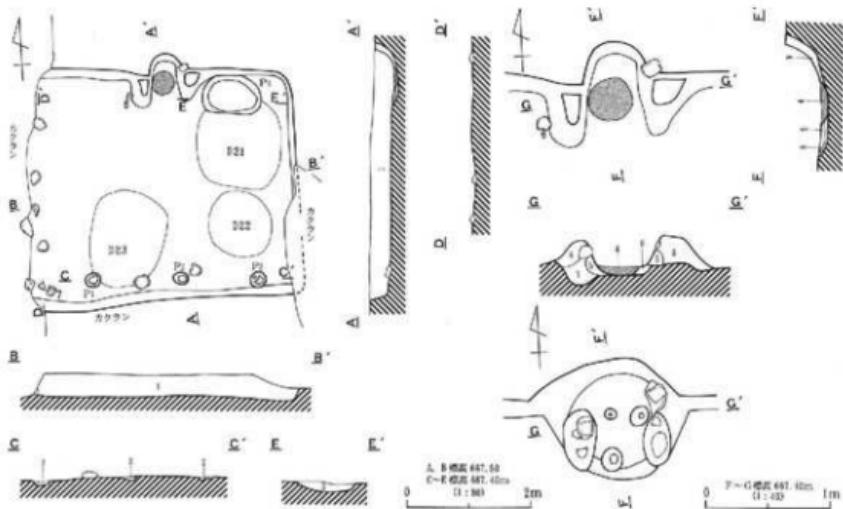
本住居址は、調査区北よりであるト-46.47、ナ-46.47Grに位置する。残存状況は西側と東壁南よりがカクランにより削平されている。重複関係は占い方よりH17号住居址→H45号住居址→本址→D 21～23号土坑である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.91m（残存）・南壁4.20m（残存）・西壁3.53m（残存）・東壁3.42mで、壁高さは南壁西よりで最大37cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で14.19m²を測る。住居址主軸方位はN-3° - Eを示す。覆土はおむね自然堆積で単層である。床は全体的に軟質で、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「敲き床」であった。ピットは3ヵ所確認された。規模はP1が径27cm・深さ10cm、P2が径25cm・深さ6cm、P3が径25cm・深さ10cmを測る。本址は主柱穴は確認されなかったが、P1～3は壁柱穴、西側カクラン脇で検出された礫群は柱礎的な使用が考えられる。貯蔵穴はカマド東脇で検出された。規模は長軸95cm・短軸63cm・深さ20cmを測る。

カマドは北壁中央部で検出された。残存状況は良好である。煙道部は煙道が長く伸びないタイプで、規模は長さ40cmを測る。袖は小型の川原石と暗褐色土の混合土で構築されており、高さは27cm前後を測る。火床部は良く焼けており硬質化していた。

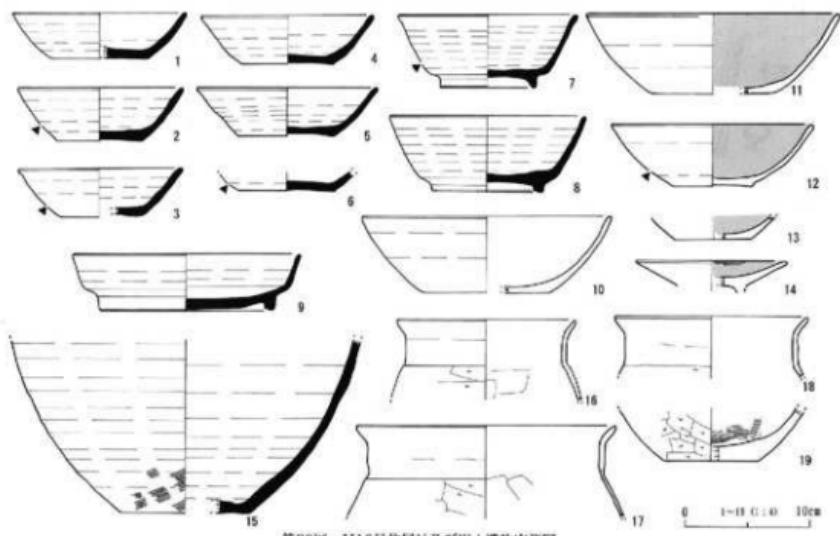
No.	種別	基盤	法 庫 (1/50倍)	成 型・側 壁・文 程	偏 差		出土位置		
					内 面	外 面			
1	須留器	坪	14.0	7.7 (3.7)	クロナデ 火床	ロクロナデ 底部右回転角切り 火床	回転光面 1/2残存	IV区	
2	須留器	坪	13.3	6.9 (4.3)	クロナデ	ロクロナデ 底部左回転角切り 火床	完全光面 底部光面	IV区	
3	須留器	坪	13.2	6.5 (3.9)	クロナデ 火床	ロクロナデ 追加凹角切り 火床	完全光面 3/4残存	I 区	
4	須留器	坪	14.5	7.6 (3.9)	クロナデ 火床	ロクロナデ 底部左回転角切り 火床	完全光面 3/4残存	I - IV区 カマド	
5	須留器	坪	13.8	7.2 (3.6)	クロナデ 火床	ロクロナデ 追加凹角切り 火床	回転光面 1/3残存	IV区	
6	須留器	坪	-	7.8	一	ロクロナデ 火床	ロクロナデ 底部右回転角切り 火床	完全光面 痕跡光面	III区
7	須留器	高台坪	14.4	7.8 (5.8)	クロナデ	ロクロナデ 底部右回転角切り・付高台	完全光面 追加光面	III区	
8	須留器	高台坪	15.8	9.0 (6.0)	クロナデ	ロクロナデ 底部右回転角切り・付高台	回転光面 2/3残存	I - IV区	
9	須留器	高台坪	18.4	14.0 (4.5)	クロナデ	ロクロナデ 追加凹角切りヘラケズリ・付高台	回転光面 1/2残存	I 区 D 1 D 22	
10	土師器	坪	20.4	10.0 (6.4)	ロクロナデ 玄瓦ギヤ	ロクロナデ 追加ヘラケズリ	回転光面 1/4残存	カマド IV区	
11	土師器	坪	20.0	10.0 (6.2)	ロクロナデ 黒色處理	ロクロナデ 追加ヘラケズリ	回転光面 1/4残存	I 区	
12	土師器	坪	16.2	6.3 (5.0)	玄ガキ・黑色處理	ロクロナデ 追加右回転角切り	完全光面 痕跡光面	II - III区	
13	土師器	坪	-	6.0	-	ミガキ・黑色處理	ロクロナデ	回転光面 追加1/4残存	
14	土師器	高台坪	12.2	-	ミガキ・黑色處理	ロクロナデ 高台欠損	回転光面 回転1/4残存	H17-S 区	
15	須留器	坪	-	10.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ ミガキタキ	四輪光面 底部1/4残存	
16	土師器	坪	14.4	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	回転光面 1/3残存 Ⅲ区	
17	土師器	坪	20.8	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	回転光面 口縁1/4残存 H17-S 区	
18	土師器	坪	15.6	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	四輪光面 口縁1/5残存 H17-S 区	
19	土師器	坪	-	7.6	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転光面 1/3残存 I区	

第17表 H16号住居址出土遺物観察表



1. 黒褐色土層 (10F2/2) ロームブロック・ローム板子少量置入。
2. 黒褐色土層 (10F2/2) ローム板子・ロームブロック少量置入。
3. 黒褐色土層 (10F2/2) ローム板子・ロームブロック置入。
4. 黑褐色土層 (10F2/2) 大床。
5. 黑褐色土層 (10F2/2) ローム板子多量置入し、炭化物含む。

6. にじみ黄褐色土層 (10F1/2) ローム板子・炭化物・埴土板子微量置入。
7. 黄褐色土層 (10F2/2) 燃上ブロック・炭化物置入。
8. 黑褐色土層 (10F2/2) 土・埴土板子多量置入。
9. 塗刷黒褐色土層 (10F2/4) 壱土ブロック置入。



第30図 H16号住居址及び出土遺物実態図

出土遺物は覆土中からのものが多く、図示したものも多くが覆土中からの出土である。1~6は須恵器坏でいずれもクロコ成形、底部回転糸切り離しである。7~9は須恵器高台坏である。7と8は底部回転糸切り離しの後、高台貼付。9は底部ヘラケズリの後、高台を貼付している。10~13は土師器坏で11~13は内面黒色処理されている。14は土師器高台付皿で、内面黒色処理されている。16~19は土師器甕で、16~18はいわゆる「武藏甕」と呼ばれるタイプのものである。

本址はこれらの出土遺物より8世紀前半に位置づけられる。

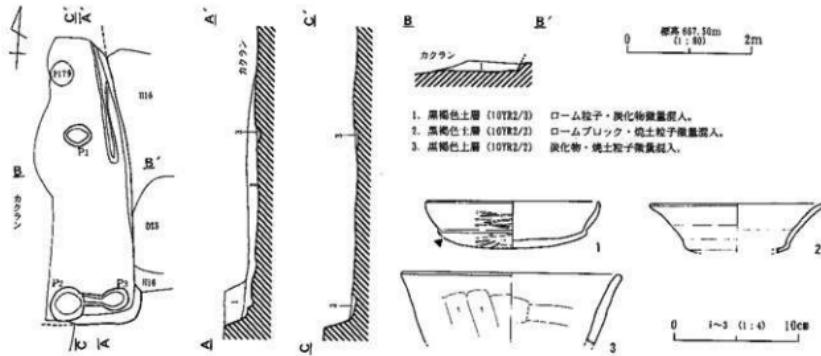
(17) H17号住居址 (第31図、写真図版十六)

本住居址は、調査区北よりもあるナ-46.47Grに位置する。残存状態は住居址西側がカクランにより、東側がH16号住居址に壊されている。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.81m(残存)・南壁1.42m(残存)・東壁4.48m(残存)で、壁高さは南壁側で最大42cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で5.42m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は軟質であり、地山を直に使う「敲き床」のような状態であった。壁溝は東壁北よりに検出された。断面形はU字形で、幅は約10~22cm・深さ1~4cmを測る。ピットは3ヵ所確認された。規模はP1が径44cm・深さ7cm、P2が径55cm・深さ11cm、P3が径44cm・深さ3cmを測る。

出土遺物は少なかったが3点を図示した。1は土師器坏で外面に粗いミガキを施す。形態は口縁部が肥厚し、口唇部が僅かに内湾するタイプである。在地の須恵器模倣坏とは形態が異なり、いわゆる「甲型」土師器坏と呼ばれるものに似ている。2は土師器坏としたが、その形態より高台付坏の可能性もある。口縁部が大きく外反するタイプのものである。3は土師器鉢としたが不確実である。

本址は周辺部で他の構造との重複も多く、出土遺物にも時期の異なる物の混在が見られた。しかし、図示した出土遺物と重複関係から、古墳時代後期の所産と考えられる。



第31図 H17号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法 量			成 形 ・ 製 作 ・ 文 様		考 察	出 土 位 置
			直径(φ) 横径(φ) 高さ(H)	底径(φ) 横径(φ) 高さ(H)	内 面	外 面			
1	土師器	坏	14.0	12.0	3.8	ナデ	口縁ヨコナデ・底部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	H16-1区 2/3残存
2	土師器	坏	14.0	-	-	ナデ	ナデ	回転実測	口縁1/4残存 H17-N区
3	土師器	鉢	17.6	-	-	ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	回転実測	口縁1/4残存 H17-N区

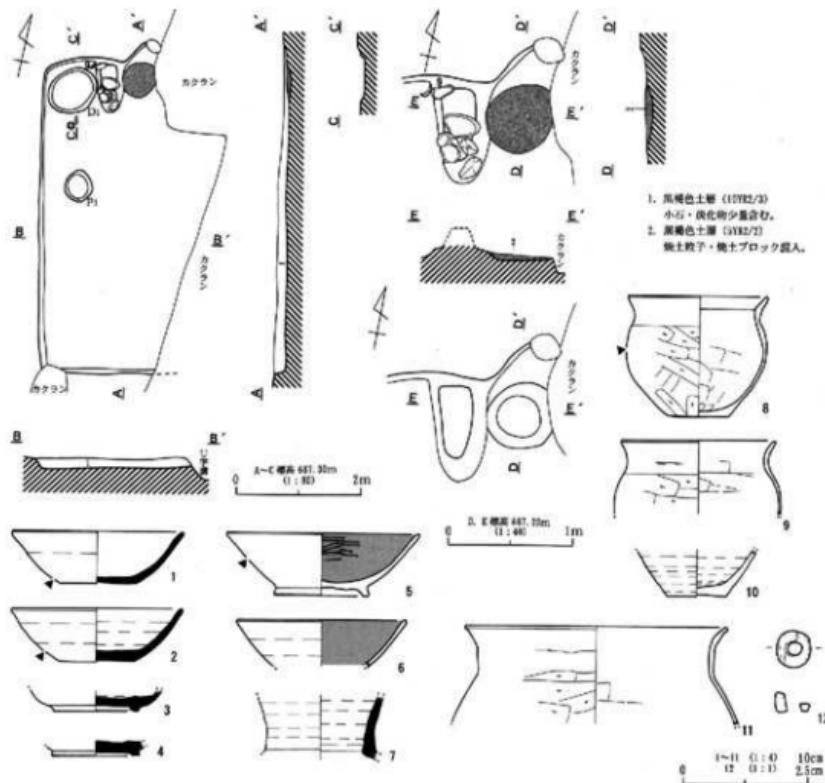
第18表 H17号住居址出土遺物観察表

(18) H 18号住居址 (第32図、写真図版十六)

本住居址は、調査区北側であるテ-44.45、ト-44.45Grに位置する。残存状態は東壁側がカクランにより壊されており、住居址全体の半分ほどの検出にとどまった。重複関係はH45号住居址より本址のはうが新しい。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.80m(残存)・南壁1.83m(残存)・西壁4.83mで、壁高さは南西コーナーで最大20cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で11.06m²を測る。覆土はおおむね自然堆積の单層である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は施されておらず、地山を直に踏みしめる「敲き床」と考えられる。ピットは1カ所確認された。ピットの規模はP1が径50cm・深さ9cmを測る。またカマド西脇には貯蔵穴と考えられる掘り込みが検出された。規模は長軸82cm・短軸70cm・深さ9cmを測る。

本址のカマドは北壁西よりに造られていた。煙道部は煙道が伸びないタイプで、煙道長さは35cmを測る。袖は川原石と褐色土で構築されており、袖芯部分は地山を掘り残していた。火床部は良く焼けており、焼土の厚みは4cmを測る。



第32図 H 18号住居址及び出土遺物実測図

No.	種 別	器 形	法 量 (底面積×厚さ)	成 形・開 型・文 種			備 考	出土位置
				内 面	外 面			
1	須恵器	环	13.8 6.0 4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 底盤完存	IV区	
2	須恵器	环	13.9 6.2 4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転角切り(方向不明)	完全実測 底盤完存	IV区
3	須恵器	高台环	- 6.8 -	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転角切り(方向不明)	完全実測 底盤完存	IV区
4	須恵器	高台环	- 7.0 -	ロクロナデ	ロクロナデ	底部右回転角切り(付高台)	完全実測 底盤2/4残存	IV区
5	土師器	附	15.6 7.6 5.0	ロクロナデ ミガキ+黒色處理	ロクロナデ 付高台	完全実測 底盤完存	D1	
6	土師器	环	13.6 - -	ロクロナデ 黒色處理	ロクロナデ	完全実測 底盤1/4残存	IV区	
7	須恵器	壺	- - -	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 底盤1/4残存	IV区	
8	土師器	壺	11.2 4.9 9.7	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 底盤1/4残存	IV区	
9	土師器	壺	12.1 - -	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 底盤1/4残存	IV区	
10	土師器	壺	- 4.8 -	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 底盤2/4残存	IV区	
11	土師器	壺	21.2 - -	ヘラナデ	ヘラナデ	完全実測 底盤1/4残存	IV区	
12	器 壓	米 材	残存率 厚大径 最大幅 厚 幅	所 显				出土位置
		青石	完形 0.41 6.70 0.29 0.20					

第19表 H18号住居址出土遺物観察表

本址からの出土遺物は覆土中からの物多かった。1と2は須恵器环で、いずれもロクロ成形である。3と4は須恵器高台环でどちらも底部のみの残存である。5は上師器高台碗で内面黒色処理されている。6は土師器环である。7は須恵器壺の頸部と考えられる。8~10は土師器小型壺であり、10はロクロ成形である。11は土師器壺でいわゆる「武藏壺」であり、口縁部から頸部の「コ」の字化が始まっている。12は滑石製の白玉であり混入遺物と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀前半の所産時期と考えられる。

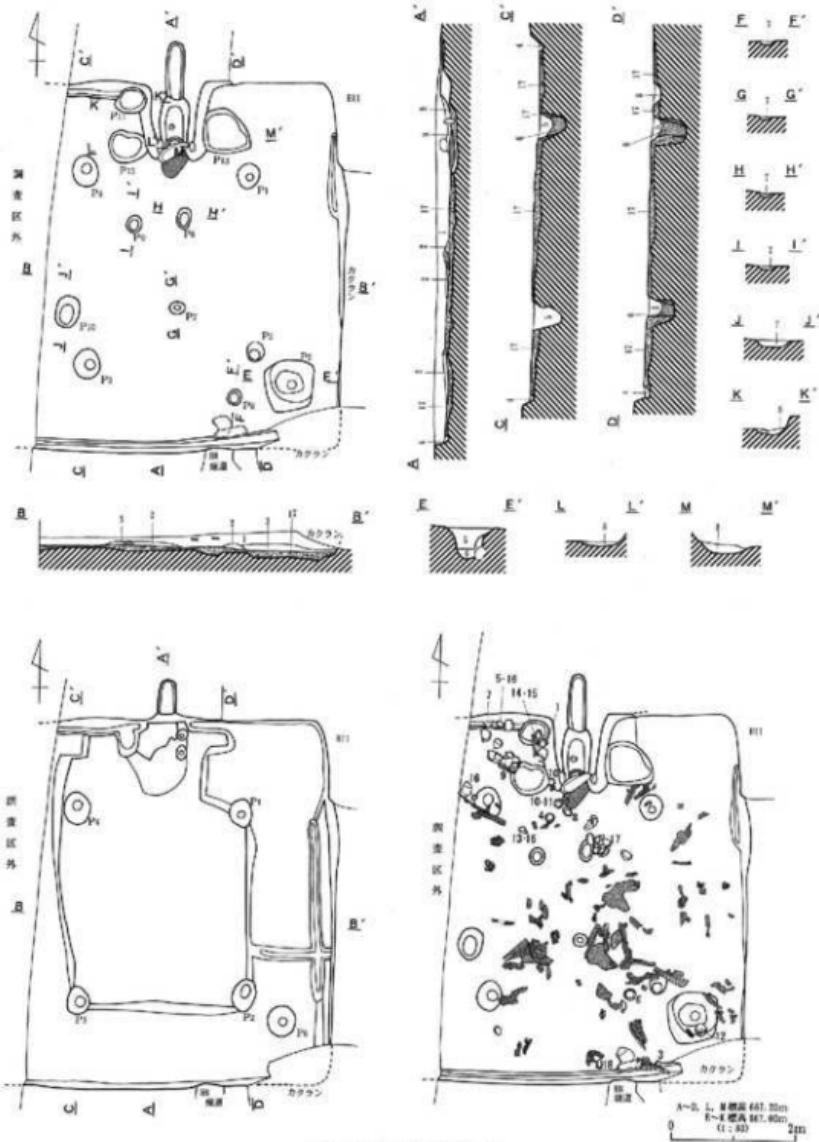
(19) H19号住居址 (第33・34・35図、写真図版十七)

本住居址は、調査区中央である二-44.45、ヌ-44.45Grに位置する。残存状態は西側1/4が調査区域外となるほかは良好である。重複関係は古い方より本址→H8号住居址→H11号住居址である。

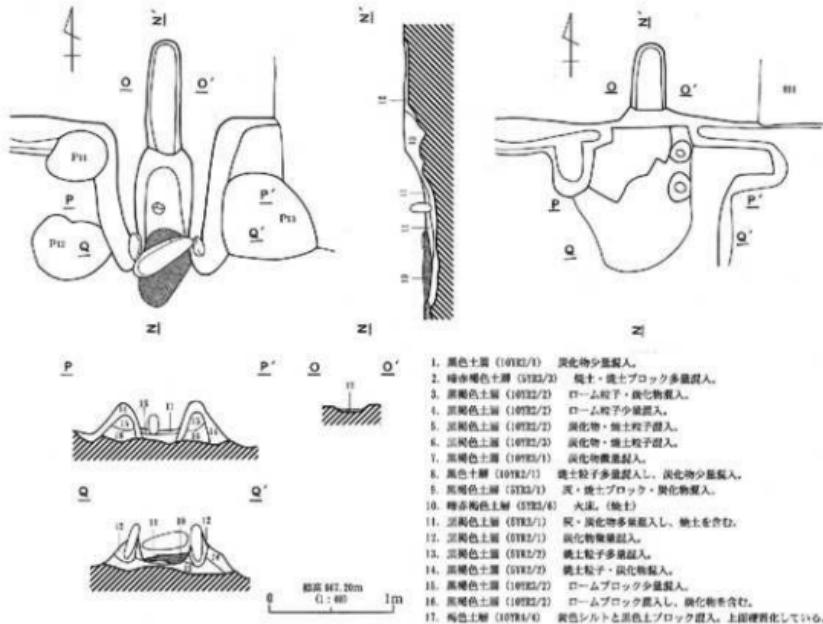
形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁4.17m(残存)・南壁4.85m(残存)・東壁5.77m(残存)で、壁高さは南壁側で最大22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で25.98m²を測る。住居址の主軸方位はN-2°-Wを示す。覆土はおむね自然堆積であるが、床面全体に炭化材及び焼土が検出された(写真図版十七・樹種同定についてはP517参照)。全体の形態は住居壁側より中央に向かって炭化材は伸びており、屋根の構築材が焼失したと考えられる。床は全体的に硬質であり、カマド前面にかけては特に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~13cmで貼られていた。壁溝は南壁と東壁の一部に検出され、規模は幅8~30cm・深さ3~10cmを測る。ピットは13カ所確認された。P1~4が柱穴、P5とP12・P13は貯蔵穴の可能性がある。各ピットの規模はP1が径41cm・深さ56cm、P2が径31cm・深さ44cm、P3が径47cm・深さ42cm、P4が径50cm・深さ47cm、P5が径81cm・深さ53cm、P6が径25cm・深さ7cm、P7が径25cm・深さ8cm、P8が径34cm・深さ12cm、P9が径28cm・深さ8cm、P10が径52cm・深さ11cm、P11が径50cm・深さ8.5cm、P12が径61cm・深さ9.5cm、P13が径75cm・深さ16cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。残存状況は良好であり、焚口部分の構築石や支脚石が原位置で検出された。煙道部は長く伸びるタイプで、長さ79cmを測る。袖部分は地山の上に黄色の粘土を盛り上げて造られており、焚口部は楕円の川原石を門構え状に構築していた。火床部は良く焼けており硬質化し、焼土の厚みは6cmを測る。また、火床部下と煙道部分は黒褐色土によって構築されていた。

本址からの出土遺物はカマド西脇やカマド前面からまとめて出土した。特にカマド西側から出土した土器類は本址が焼失住居址とすると、使用時の原位置を保っているような状況であった。1~3は上師器环である。1と3は口唇部がやや内湾するタイプであり、2は口縁部にやや稜があり須恵器环蓋模倣のタイプとも捉えられる。4は高环で、环部はいわゆる「内斜口縁环」を載せたタイプである。5と6は鉢である。5は环とすべきか迷うところであるが、器高があるため今回は鉢とした。7と8は単孔の小型の瓶では円錐形、8は頸部が「く」の字に曲がるタイプである。9は大型の単孔の瓶で、内



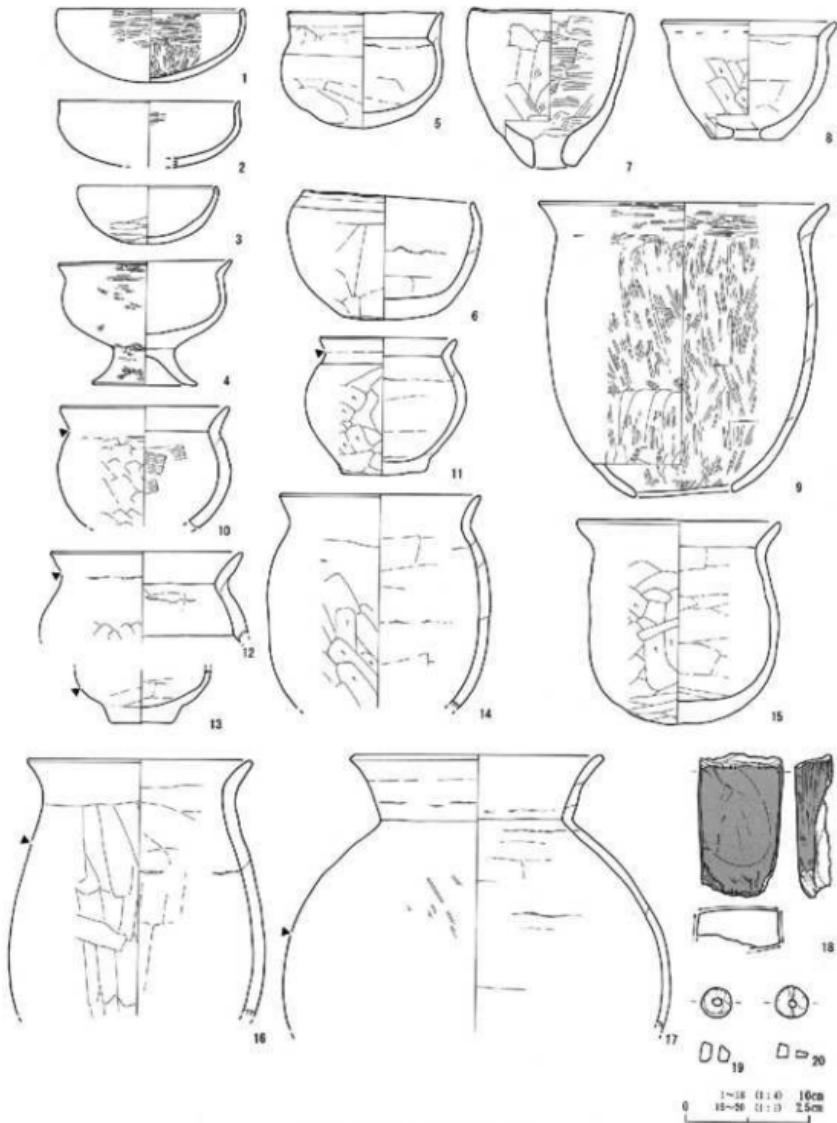
第33図 H119号住居址実測図



第34図 H19号住居址カマド実測図

No.	種別	基準	法 蘭	成形・調 整・文 様			備 考	出土位置
				口縁部 底面積 底面積	内 曲	外 面		
1	土器部	杯	14.9	—	5.9	丸ガリ	1万年	完全実測 一様欠損 3cm カマド
2	土器部	杯	14.5	(5.3)	3.9ガリ		断面削りていて不明	回転実測 1/3%左 14cm
3	土器部	杯	11.1	—	4.6	ナガナ	ナダ→底部附近ハラケズリ	回転実測 1/2%左 13cm
4	土器部	盃	13.9	8.5	9.9	呼吸ヘルラギキ	ヘラギガリ	完全実測 一様欠損 9cm
5	土器部	杯	12.5	—	9.3	ナデ	ロ縁ヨコナナデ	ナデ ロ縁ヘルラケズリ→ヨコナデ 完全実測 8cm
6	土器部	杯	13.7	7.8	9.9	ヨコナデ	口縁ヨコナデ	ロ縁ヨコナデ→ヘラナデ 截部ヘルラケズリ 完全実測 2cm
7	土器部	瓶	12.8	3.7	12.6	ハケナデ	ロ縁ヨコナデ 丸ナデ	ロ縁ヨコナデ→ハラナデ 截部ヘルラケズリ 完全実測 丸径2.1 3cm
8	土器部	瓶	14.1	8.6	9.5	口縁ヨコナデ	ヘラナデ	ロ縁ヨコナデ ヘラナデ 完全実測 完形 丸径2.1 9cm
9	土器部	瓶	23.4	8.1	23.3	ミガリ	ミガリ 下部ヘルラケズリ→ミガリ	完全実測 完形 丸径7.5 3.5cm
10	土器部	甕	13.6	—	(9.7)	口縁ヨコナデ	ハケナデ	ロ縁ヨコナデ→ヘラケズリ→ナデ 完全実測 9~6.5cm 1・N区 カマドホリガ
11	土器部	甕	11.0	11.0	6.8	ナデ	ロ縁ヨコナデ	ヘラケズリ ロ縁ヨコナデ 截部ナデ 完全実測 延ば実測 9cm
12	土器部	甕	15.4	—	(7.0)	口縁ヨコナデ	ヘラナデ	ロ縁ナデ ヘラケズリ 完全実測 軸用の可能性有り 9cm
13	土器部	甕	—	5.1	(4.3)	ヘルナデ	ヘルナデ	完全実測 5cm
14	土器部	甕	16.2	—	(17.0)	ロ縁ヨコナデ	ヘルナデ	ロ縁ヨコナデ ナデ 截部ヘルラケズリ 回転実測 3.5cm ± 1.5cm
15	土器部	甕	16.3	—	16.3	ロ縁ヨコナデ	ヘルナデ	ロ縁ヨコナデ ヘラケズリ 完全実測 完形 3.5cm
16	土器部	甕	18.1	—	(26.5)	ナデ	ロ縁ヨコナデ	ヘルケズリ ロ縁ヨコナデ 回転実測 5~10cm
17	土器部	甕	20.4	—	(22.2)	ロ縁ヨコナデ	ナデ	ロ縁ヨコナデ ミガリ 完全実測 9cm
No.	器種	素材	陶石	陶石	陶石	陶石	陶石	出土位置
18	磁石	陶石岩		(11.4)	(6.8)	(3.0)	(250.0)	火炎台(黒っぽくなっている) 崩壊欠損 磁石数4(正・裏・内側) 右側の条痕観察 上・下端部は真材の面
19	目玉	骨石	完形	0.4	0.6	0.2	0.20	
20	目玉	骨石	完形	0.3	0.6	0.17	0.14	

第20表 H19号住居址出土上遺物観察表



第35图 H19号住居址出土遗物实测图

外面丁寧に磨いてある。10~15は小型の壺である。16は甕、17は壺と考えられる。18は磁石で火熱の跡がある。19と20は白玉である。

本址は先に述べたように焼失の可能性があり、出土遺物も一括性が高い。図示した出土遺物の年代感より、所産時期は5世紀後半と考えられる。

(20) H20号住居址 (第36図、写真図版十八)

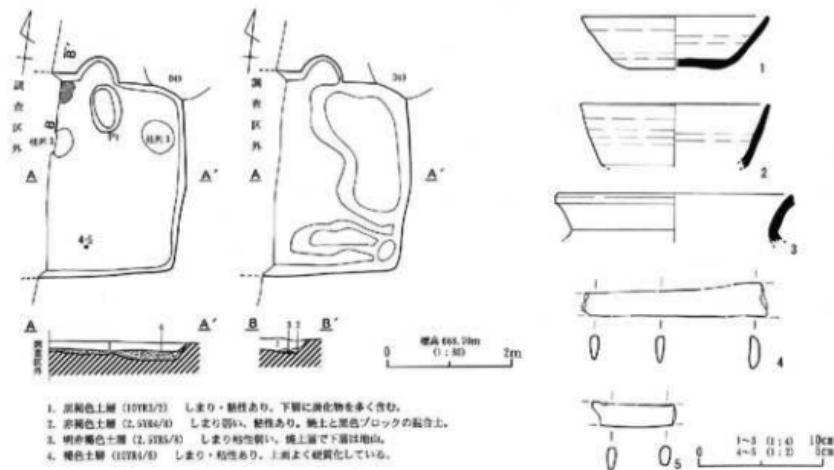
本住居址は、調査区南端であるヌ-80.81、ヌ-80.81Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外となる。重複関係は古い方より本址→柱列3→D49号土坑である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.05m(検出)・南壁2.14m(検出)・東壁2.74mで、壁高さは西壁中央で最大17cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で5.79m²を測る。住居址の主軸方位はN-8°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~16cmで貼られていた。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径76cm・深さ19cmを測る。住居址掘り方は住居址北東コーナー部と南東コーナー部が一段低くなり4~15cmの段差が確認された。

本址のカマドは北壁中央に煙道部と火床部のような焼土のみを確認したが、煙道部と火床部は軸線が合わず、また袖等は検出できなかった。

出土遺物は覆土中からが多かった。1と2は須恵器壺、3は甕である。4と5は鉄製の刀子と考えられる物で、床面上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より8世紀後半に位置づけられる。



第36図 H20号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	基準	法 線		成 形		調 査	文 種	備 考	出土位置
			(1)壁面(表面)/壁面(裏面)	内 面	外 面					
1	須恵器	耳	15.2	7.3 (4.2)	ロクロナデ		ロクロナデ	底部右斜面系切り	回転炎窯	底部1/2残存
2	須恵器	耳	15.2	— (5.1)	ロクロナデ	火拂	ロクロナデ	火拂	回転窯底	1/8残存
3	須恵器	甕	18.8	— (3.9)	ロクロナデ		ロクロナデ		回転炎窯	口縁3/16残存
No.	器 物	基 準	内 面	外 面	調 査	文 種				
4	刀子	基	内介形	最大幅	最大幅	最大幅	直 線			出土位置
				(7.4)	(1.2)	(0.4)				5cm
5	刀子	基	内介形	最大幅	最大幅	最大幅	直 線			5cm

第21表 H20号住居址出土遺物観察表

(21) H21号住居址 (第37図、写真図版十八)

本住居址は、調査区南端である二-79.80、ヌ-79.80Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる為、住居址北西コーナー及び南西コーナーのみの検出にとどまった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.85m（検出）・南壁0.27m（検出）・西壁3.47mで、壁高さは西壁中央で最大19cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.61m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~12cmで貼られていた。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径113cm・深さ19cmを測る。P1は形態から床下土坑であるが、ピット上面には床は確認されなかった。

出土遺物は少なく、図化可能なものは1の土師器壺のみであった。器厚は薄く、いわゆる「武藏壺」と呼ばれるタイプの壺である。

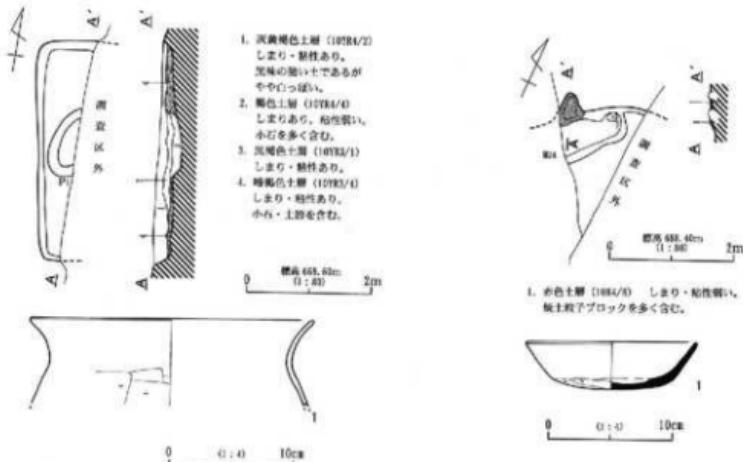
本址の所産時期は出土遺物も少なく不確実であるが、おおむね8世紀代と考えられる。

(22) H22号住居址 (第37図、写真図版十九)

本住居址は、調査区南端である二-77.78、ヌ-77.78Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、西側が近世の溝状造構であるM24号溝上造構により削平されている。

形態は不明で、規模は北壁1.42m（検出）で、壁高さはカマド脇で最大10cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.26m²を測る。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。本址のカマドは北壁側で確認したが、火床部のみであった。

出土遺物は図示した須恵器壺のみで、本址の所産時期は8世紀後半に位置づけられると考える。



第37図 H21・22号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	形様	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置
			口徑	底面	内面	外面		
1	土師器 壺	22.8	-	6.93	ナデ	口縁ナデ 底部ハラケズリ	口縁実形 口縁1/6埋存	

第22表 H21号住居址出土遺物観察表

No.	種別	形様	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置
			口徑	底面	内面	外面		
1	須恵器 壺	13.8	9.7	3.8	クロナデ	クロナデー底部手持ちハラケズリ	完全実形 3/4残存	2cm

第23表 H22号住居址出土遺物観察表

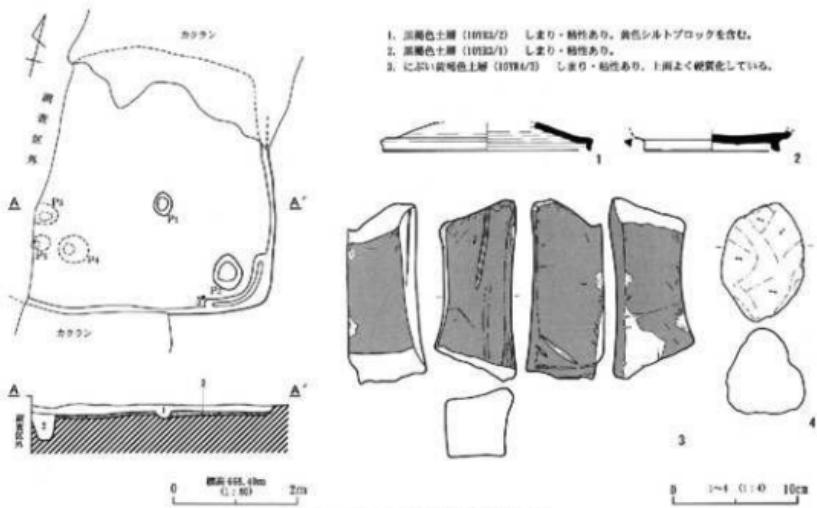
(23) H23号住居址 (第38図、写真図版二十)

本住居址は、調査区南端であるニ-76、ヌ-75.76Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外、北側がカクランにより削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.87m (推定)・南壁3.85m (検出)・東壁2.56m (残存) 3.60m (推定)で、壁高さは南東コーナーで18cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で11.78m²を測る。住居址の主軸方位はN-15°-Eを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~10cmで貼られていた。ピットは掘り方時検出も含め、5カ所確認された。規模はP1が径35cm・深さ10cm、P2が径55cm・深さ9cm、P3が径38cm・深さ31cm、P4が径50cm・深さ26cm、P5が径30cm・深さ19cmを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1は須恵器蓋でありロクロ成形で、蓋端部が屈曲する。2は須恵器高台环であり、底部回転糸切り離しの後ヘラケズリを行う。3は砥石で四面の砥面がある。4は矢印方向に磨り面の様な突起がある。

本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから8世紀後半に位置づけられると考える。



第38図 H23号住居址及び出土遺物実物図

No.	種別	規格	法量		成形・調整・文様			備考	出土位置
			口径(内径)×底径(外径)	高さ	内面	外面			
1	須恵器蓋	蓋	16.1	—	(2.2)	ロクロナヂ	ロクロナヂ	回転丸削 1/6残存 蓋ねじ合	B区
2	須恵器	高台环	—	10.8	(1.7)	ロクロナヂ	ロクロナヂ	完全丸削 細路残存	P3
No.	器種	素 材	内径	外径	最大高	最大幅	最大幅	所見	出土位置
3	砥石	砂岩	完形	14.4	6.8	5.5	668.63		出土位置 E区
4	不明	白色軟石	完形	9.4	6.7	6.8	92.18		カリ方

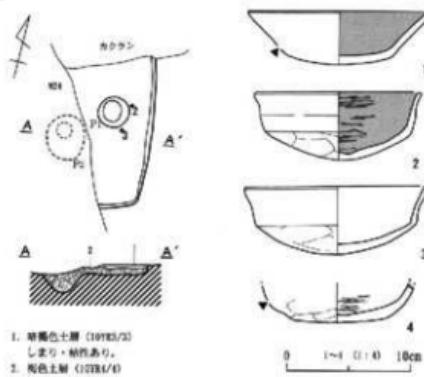
第24表 H23号住居址出土遺物観察表

(24) H24号住居址 (第39図、写真図版十九)

本住居址は、調査区南端であるヌ-76.77Grに位置する。残存状態は北側がカクラン、西側が近世の溝状遺構であるM24号溝状遺構により削平されている。

形態は不明で、規模は南壁0.60m(残存)・東壁2.35m(残存)で、壁高さは東壁側で8cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.21m²を測る。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3~17cmで貼られていた。ピットは掘り方時検出も含め2カ所確認された。規模はP1が径48cm・深さ34cm、P2が径70cm・深さ27cmを測る。

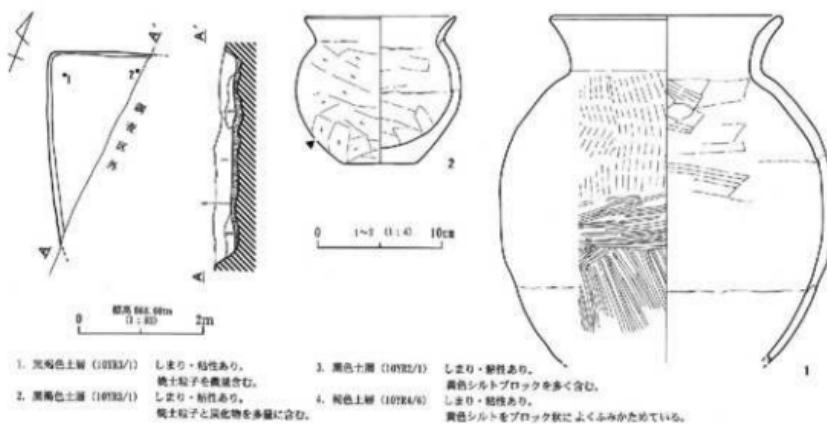
本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。図示したものはいずれも土器師壊である。4以外は全容が解る土器で、2と3はいわゆる模倣壊であるが、口縁部に段を有し「有段口縁壊」の要素も見られる。1は口縁部が直線的に開くタイプである。1と2は内面に黒色処理されている。本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから6世紀後半に位置づけられると考える。



第39図 H24号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器 品	法 線 寸(田馬鹿原町西面)	成 形・調 整・文 鑄		考	出土地域
				内 面	外 面		
1. 土師器	杯	14.8 8.5 4.3	ナデ 黒色處理	11種コナデ 脱脂ハラケズリ→ナデ	安全実測 1/2残存		
2. 土師器	杯	13.5 11.8 5.4	ナデ→ミガキ 黒色處理	11種コナデ 脱脂ハラケズリ→ナデ	安全実測 2/3残存	4cm	
3. 土師器	杯	14.7 12.9 5.4	ナデ	11種コナデ 脱脂ハラケズリ→ナデ	安全実測 4/5残存	10cm	
4. 土師器	杯	- - -	ミガキ	ハラケズリ→ナデ	安全実測 脱脂実測		

第25表 H24号住居址出土遺物観察表



第40図 H25号住居址及び出土遺物実測図

(25) H25号住居址 (第40図、写真図版二十一)

本住居址は、調査区南端である二-76Grに位置する。残存状態は住居址のほとんどが調査区外となり、住居址の北西コーナーのみの検出となった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.63m (検出)・西壁3.06m (検出)で、壁高さは西壁側で15cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.27m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは4~13cmで貼られていた。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1は土師器甕であり、住居址北西コーナー部の床面より7cm浮いた状態で出土した。2は小型甕であり、床面上より出土した。

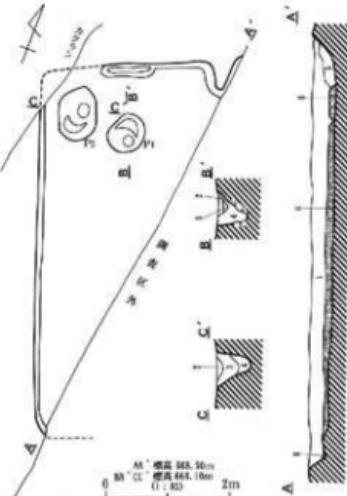
本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから古墳時代後期に位置づけられると考えられる。

(26) H26号住居址 (第41図、写真図版二十一)

本住居址は、調査区南端である二-74.75、ヌ-74.75Grに位置する。残存状態は住居址の東側のほとんどが調査区外となり、住居址の西半分のみの検出となった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.15m (検出)・西壁5.82m (推定)で、壁高さは西壁側で22cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.97m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~16cmで貼られていた。壁溝は北壁の一部に検出され、規模は幅22~23cm・深さ4~7cmを測る。ピットは2箇所検出された。規模はP1が径64cm・深さ48cm、P2が径83cm・深さ55cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1は土師器甕である。本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから古墳時代後期に位置づけられると考えられる。



- 1. 黒褐色土層 (10TK3/1) しまり・粘性あり。
黒色の炭化物を含む。
- 2. 正純色土層 (10TK3/2) しまり・粘性やや弱い。
- 3. 純白色土層 (10TK3/3) しまり弱く・粘性あり。
黄土と白色土の混合土。
- 4. 鮎色土層 (10TK4/4) しまり・粘性ややあり。
- 5. 黑褐色土層 (10TK5/1) しまりあり・粘性ややあり。
焼土ブロック・炭化物を多く含む。
- 6. 黄褐色土層 (10TK4/5) しまり・粘性あり。
上面硬炭化ブロックがたい。



第41図 H26号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様		参考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	土師器	甕	18.8	-	ヘラナデ (ハケ目が残る) 口縁ヨコナデ	ハケナデ→ナデ→半部ニギキ 口縁ヨコナデ	回転実測 1/2残存	7cm
2	土師器	小型甕	12.1	6.1	11.8 ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ 口縁ヨコナデ	完全実測 3/5残存	10cm

第26表 H26号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様		参考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	土師器	甕	18.8	-	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ 口縁ヨコナデ	回転実測 1/2残存	

第27表 H26号住居址出土遺物観察表

(27) 27号住居址 (第42・43図、写真図版二十二・二十三)

本住居址は、調査区南側であるニ-72.73、ヌ-73Grに位置する。残存状態は東壁がカクランにより壊されており、また西壁は調査区域外となる。H28号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.08m(残存)・南壁2.55m(残存)で、壁高さは北壁で最大40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-17°-Wを示す。住居址の床面積は検出部分で10.78m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれるが、床面上に多量の炭化物と焼土が検出された。床は全体的に硬質で、貼床は4~18cmの厚さで貼られていた。溝溝は西壁側と南壁の一部分に検出された。断面形はU字形で、幅は約18~32cm、深さ1~6cmを測る。特に西側部分は幅が広くなっている。溝溝ではなかった。ピットは掘り方検出時も含め5ヵ所確認され、P1とP2が主柱穴、P4.5が入り口梯子穴と考えられる。規模はP1が径33cm・深さ39cm、P2が径30cm・深さ33cm、P3が径21cm・深さ20cm、P4が径19cm・深さ14cm、P5が径19cm・深さ11cmを測る。住居址掘り方は住居中央部がやや高くなっていた。貯蔵穴はP6の名称で示した地点で、カマド東脇で検出された。規模は長軸78cm・短軸77cm・深さ54cmを測る。

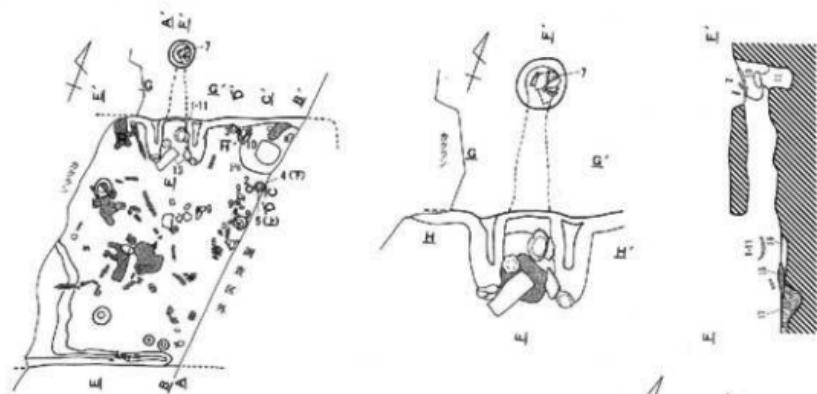
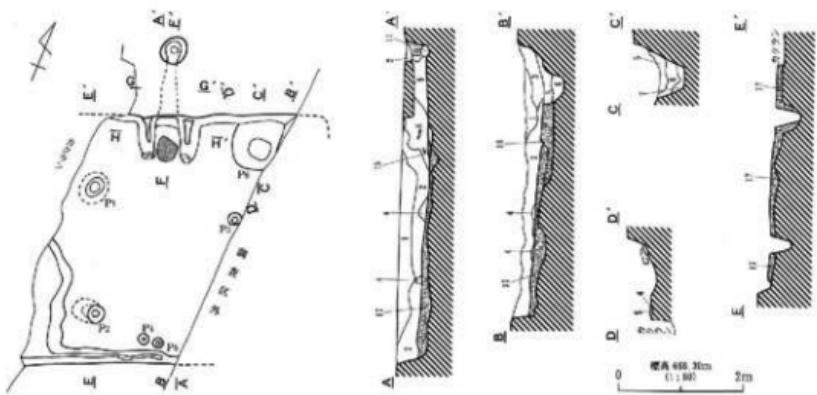
カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。特に煙道部はトンネル部分が崩落しておらず、覆土が詰まった状態で検出できた。カマド形態は煙道部が長く伸びるタイプである。煙道部は先端で竪穴とながっており図示した7の瓶が出土したが、地上部の構造物として使用されていたと考えられる。また図示した12の円筒も瓶と重なるように出土した。煙道部の規模はトンネル部分が長さ96cm、竪穴は径42cm・深さ50cmを測る。この竪穴は煙道部よりも深く掘られており、雨水などの処理のための機能と考えられる。袖部は地山掘り残しの上に粘性のある黄褐色上で構築していた。袖の高さは最大46cmを測る。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは6cmを測る。焚口部は袖口に川原石を縦方向に置き、図示した13の礫を天井用に使用していたと考えられるが、この礫は中央部から意図的におられた状態で出土した。

出土遺物は床面上とカマド内からのものが多かった。1~6は土師器壺である。1は内面黒色処理を施す。3と4はいわゆる「有段口縁壺」で口径も等しく規格品の様相を示す。5と6は須恵器壺身模倣の土師器壺である。4と5は重ねられた状態で出土した。7は把手付の大型瓶である。8は胴部が大きく張った壺でいわゆる「胴張甌」として捉えられる物である。10は貯蔵穴脇の床面から6cm浮いた状態で出土した土師器壺で外面に刷毛目を残す。11は頸部がくびれないタイプの土師器壺である。

これら遺物より本址は6世紀後半に位置づけられる。

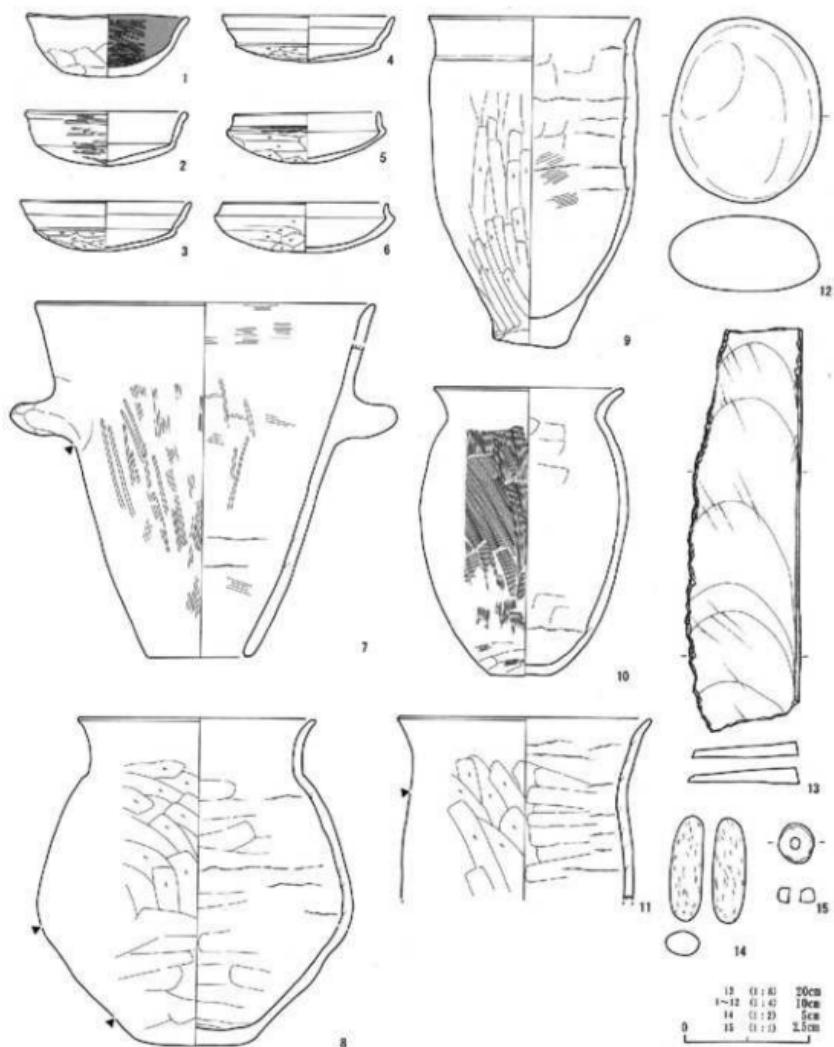
種別	類別	法	規	成形・調節・文様			備考	出土位置
				内面	背面	外側		
1	土師壺	壺	13.1	6.0	3.0	ミガキ・黑色處理	口縁ヨコナギ 底部ヘラケツリーナギ	完全実測 完成品 11cm
2	土師器	壺	13.1	11.1	4.4	ヘラケツリ・ナデ	口縁ヨコナギ ヘラケツリ・ナデ	完全実測 完成品 0cm
3	土師器	壺	13.8	11.5	4.0	ナデ	口縁ヨコナギ ヘラケツリ	完全実測 既述完商品 3cm
4	土師器	壺	17.8	11.8	3.7	ナデ	口縁ヨコナギ ヘラケツリ	完全実測 完成品 4cm
5	土師器	壺	11.8	12.6	4.0	ナデ	口縁ヨコナギ・ミガキ 底部ヘラケツリ	完全実測 完成品 0cm
6	土師壺	壺	13.2	14.4	4.0	ナデ	口縁ヨコナギ 底部ヘラケツリ	完全実測 既述完商品 0cm
7	土師器	壺	27.2	8.4	28.3	ハケ目-ミガキ	ハケ目-ミガキ 把手貼付	完全実測 I区 カマド
8	土師器	甌	19.2	9.4	(26.2)	ヘラナデ	ヘラケツリ ヘラナデ	完全実測 武部発見 4cm カマド 口縁1/3残存 II区トレンチ
9	土師器	甌	17.0	6.0	26.3	ヘラナデ 下半部ハケナデ	ヘラケツリ	完全実測 既述完商品 0~4cm
10	土師器	小型甌	15.3	4.9	23.0	ヘラナデ	ハケ目	完全実測 II区2/3残存 6cm
11	土師壺	甌	20.4	-	-	ヘラナデ	口縁ヨコナギ ヘラケツリ	完全実測 口縁完形 11cm
12	石器	素材	安山岩	墨田長	越人標	越人標	所見	出土位置
				14.8	12.0	6.3	1430.00	塊状
13	カマド瓦片	漆器	漆器	64.5	18.7	2.7	3980.00	火熱有り(正・墨)。No.33と重複。薄い板状の素材を作山、上部に自然巻。下部に形成のための洞隙
14	磨き石	安山岩	安山岩	42	1.3	1.0	8.34	ホリ方
15	臼石	滑石	滑石	0.29	0.72	0.21	0.26	II区底面

第28表 H27号住居址出土遺物観察表



1. 黒褐色土層 (D1018/4) しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土質 (D1032/2) しまり・粘性あり。
褐色シルトブロック・炭化物・炭土を多量に含む。
3. 深褐色土層 (D1032/2) しまり・粘性あり。褐色シルトブロックを多く含む。
4. 黑褐色土層 (D1032/1) 炭化物層。
5. 黑褐色土層 (D1032/1) しまり・粘性あり。炭化物・炭土を多く含む。
6. 黑褐色土層 (D1032/1) しまり・粘性強い。炭化物・炭土を含む。
7. 黑褐色土層 (D1032/1) しまり・粘性強い。
8. 黑褐色土層 (L1014/3) しまり・粘性あり。粘土ブロックと炭化物を多量に含む。
9. 黑褐色土層 (D1032/1) しまり・粘性あり。黒土のようなブロックを含む。
10. 黑褐色土層 (D1032/1) しまりやや弱く、粘性あり。土質にくらべもろい。
11. 黄褐色土層 (D1018/6) しまり・粘性ややあり。塊状よりやわらかい。
12. 黑褐色土層 (D1032/2) 上面よく焼成している。
13. 黑褐色土層 (D1032/2) 上面に焦るが、粘性はやや弱い。
14. 黑褐色土層 (D1032/1) 13層がよく焼成して焼化している。
15. 黑褐色土質 (D1032/1) 大深度。
16. 黑褐色土層 (D1032/2) しまり弱く、粘性ややあり。粘土ブロックを少含む。
17. 黄褐色土層 (D1032/3) しまり・粘性あり。黒色土ブロックを多く含む。硬質化ブロックを含む。
18. 増褐色土層 (D1032/4) しまり・粘性強い。褐色土ブロックを多く含む。

第42図 H27号住居址実測図



第43图 H127号住居址出土遗物实测图

(28) H28号住居址 (第44図、写真図版二十五)

本住居址は、調査区南側である二-73.74、ヌ-74Grに位置する。残存状態は住居址北側をH27号住居址に、南側をH26号住居址に、また東側は調査区外、西側はカクランによりそれぞれ削平されている。新旧関係は本址が一番古い。

形態は不明である。壁規模はいずれも検出されず不明であるが、貼床は全面に施されており、厚さは5~21cmを測る。住居址の床面積は検出部分で4.77m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。ピットは掘り方検出時も含め2カ所確認され、規模はP1が径77cm・深さ18cm、P2が径33cm・深さ17cmを測る。

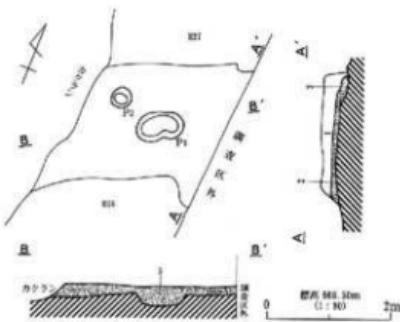
出土遺物は覆土中からの小片がほとんどで、いわゆる赤彩された内斜口縁壺や古墳中期末の特徴をもつ土師器表片などが出土したが、図示可能な物はなかった。これらの遺物より不確実ではあるが、本址は5世紀後半に位置づけられると考える。

(29) H29号住居址 (第45図、写真図版二十四)

本住居址は、調査区南側である二-63.64、ヌ-63.64Grに位置する。残存状態は西壁側がカクランにより壊されている他は良好である。D 30.31号土坑と重複関係にあり本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央と北壁東よりの2箇所に造られている。規模は北壁2.98m・南壁2.44m(残存)3.17m(推定)・西壁1.48m(残存)2.88m(推定)・東壁2.88mで、壁高さは北東コーナー付近で36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-2°-Wを示す。住居址の床面積は7.08m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質で、3~11cmの厚さで貼られていた。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径18cm・深さ4cmを測る。住居址掘り方は東壁に造られたカマド前面から住居址北東コーナーに向かって、一段低く掘り込まれていた。掘り方時の段差は最大9cmを測る。

カマドは2箇所検出され、まず北壁中央のカマドは煙道部と火床部のみの検出で袖部は残存していなかった。煙道部の主軸方位は住居址と同じN-2°-Wを示す。煙道部の規模は長さ44cmを測る。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは5cmを測る。次に東壁のカマドは短い煙道部と袖部及び火床部が残存していた。カマド主軸方位はN-87°-Eを示す。煙道部の規模は長さ26cmを測る。袖部は川

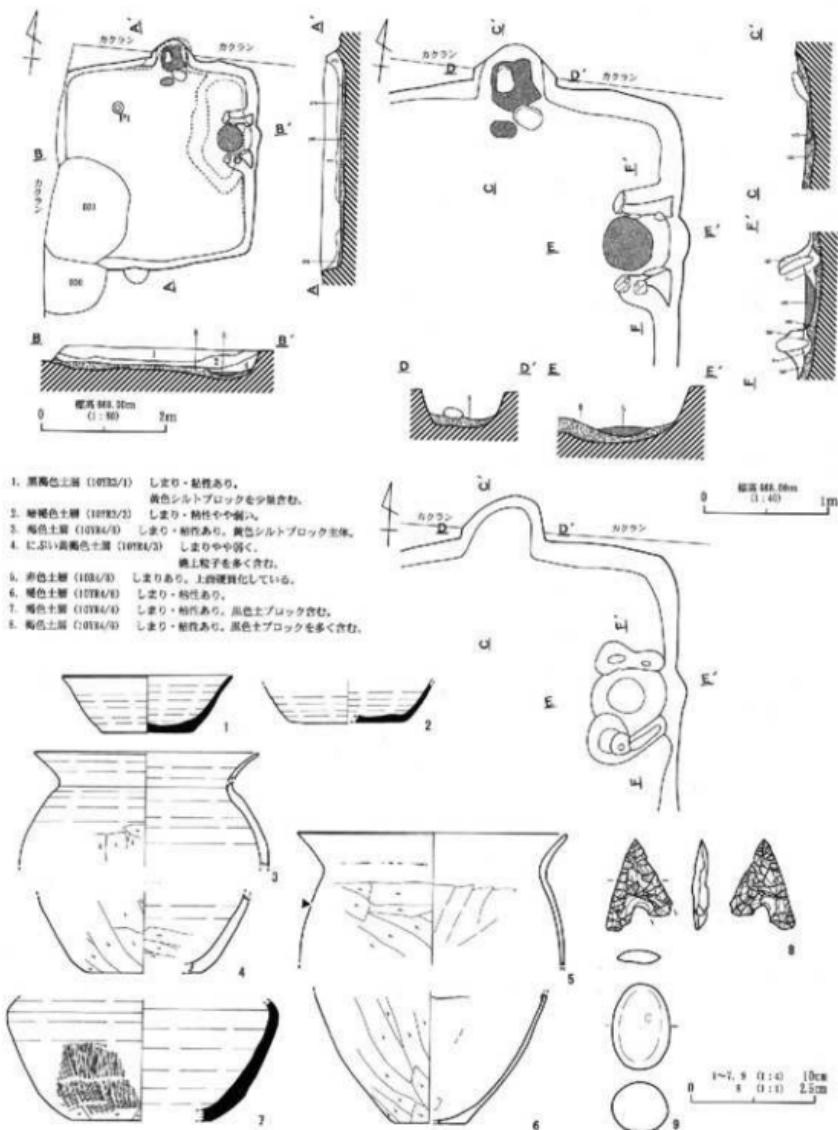


1. 増毛色土解 (10TK3/2) しまり・粘性あり。炭化物・埴土粒子を多く含む。
2. 黄褐色土解 (10TK4/8) しまり・粘性強く、上部純化ブロック。
3. 黄褐色土解 (10TK3/2) しまり・弱く粘性あり。

第44図 H28号住居址実測図

No.	種別	基標	法量	成形・面積・文様		備考	出土位置	
				内面	外面			
1	須由路	村	13.7	7.5 4.6	ロクロナデ 火搏	ロクロナデ 裕部ヘラケズリ 火搏	回転尖削 1/4残存	Ⅱ区
2	須由路	村	—	9.2 —	ロクロナデ 火搏	ロクロナデ 裕部ヘラケズリ	回転尖削 残存 1/2残存	Ⅱ区
3	土陣柱	裏	18.0	—	ロクロナデ	ロクロナデ 裕下部ヘラケズリ	回転尖削 体部1/4残存	10cm カマド
4	土陣柱	裏	—	9.4	ロクロナデ 脱落下部ヘラケズリ	ロクロナデ 脱落下部ヘラケズリ	回転尖削 1/3残存	カマド
5	土陣柱	裏	21.5	—	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全尖削 口縁1/3残存	カマド Ⅰ区
6	土陣柱	裏	—	15.7	ヘラナデ	脱落部ヘラケズリ	回転尖削 残存 1/3残存	カマド
7	須由路	小型壺	—	11.2	ロクロナデ	ロクロナデ 体下部脱落部ヘラケズリ→タタキ	回転尖削 1/8残存	Ⅱ区
No.	基標	材質	保存率	最大径 最大幅	最小径 最小幅	面積	備考	
8	石器	風化石	1.8	1.2	0.3	0.18		
9	石器	風化石	完形	6.9	4.6	4.0	160.00 搬入(山梨から持回り)	

第29表 H29号住居址出土遺物観察表



第45図 H29号住居址及び出土遺物実測図

原石と褐色の粘土により構築されていた。袖高さは33cmを測る。火床部は良く焼けており、焼土の厚さは7cmを測る。これら2箇所のカマドは袖部等の残存状況より、東壁のカマドが本址の最終使用カマドと考えられる。

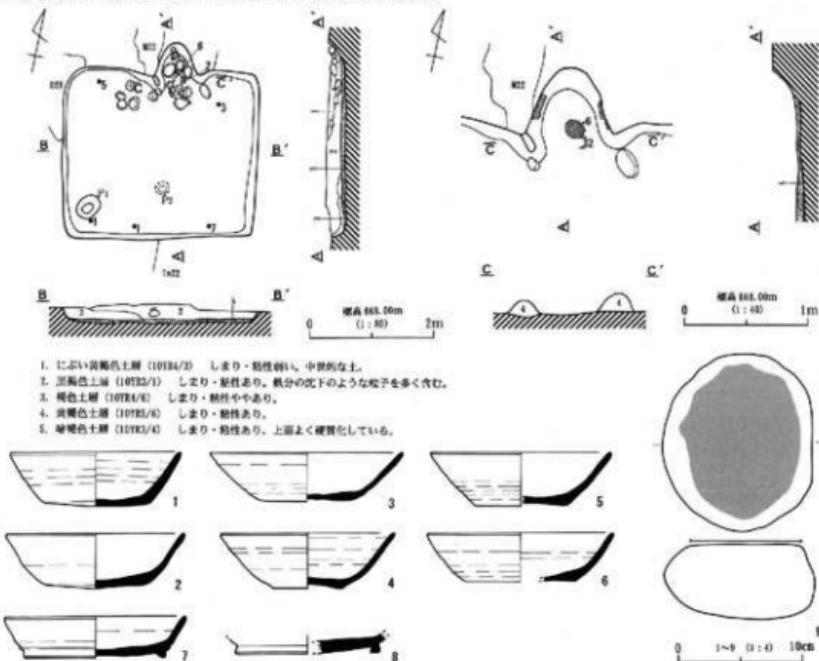
出土遺物は櫻土中から多かった。1と2は須恵器壺である。いずれも底部ヘラケズリが施され、火燐痕が確認できる。3~6は土師器甕であり、3は口クロ成形がなされている。5と6はいわゆる「武藏甕」と呼ばれるタイプであり、同一個体と考えられる。7は須恵器甕で、頸部が短く口径が広いタイプの甕と考えられる。8は石縄、9は磨石と考えられる。

これらの出土遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

(30) H30号住居址 (第46図、写真図版二十五)

本住居址は、調査区南側であるナ-65、ニ-65.66Grに位置する。残存状態は良好である。重複関係はD28号土坑、Ta22号竪穴状遺構、M22号溝状遺構等と重複しているが、いずれも本址の方が古い。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.90m・南壁2.91m・西壁2.59m・東壁2.51mで、壁高さは南壁中央で最大28cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。主軸方位はN-12°-Wを示す。住居址の床面積は7.38mを測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれるが、北壁カマド側では1層下に拳大の川原石が投げ込まれたような状態で検出された。床は全体的に硬質で、1~4cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め2カ所確認された。規模はP1が径39cm・深さ11cm、P2が径23cm・深さ8cmを測る。



第46図 H30号住居址及び出土遺物実測図

カマドは北壁中央に検出された。先にも述べたがカマド内からは礫が投げ込まれたような状態で多数検出されたが、いずれも火床面からは浮いた状態であり、本址の廃絶後に入れられた物と考えられる。煙道部はやや外側に張り出すタイプで、規模は長さ56cmを測る。袖は粘性のある黄褐色土で構築されており、袖の規模は高さが最大15cmを測る。火床部は小さく、又あまり硬質化していなかった。

遺物は覆土中やカマドから、多く出土した。1~6は須恵器壺である。1は底部手持ちヘラケズリ、2・3・5・6は回転ヘラ切りが施されている。1と2と5はほぼ床面直上で出土した。7と8は須恵器高台壺である。7は床面より6cm浮いた状態で出土した。9は磨石の台石と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法 基 (口幅(口) 横幅(横) 高さ(高))			成形・調整・文様		備考	出土位置
			内 面	外 面					
1	須恵器	壺	13.7 (8.6)	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	底部手持ちヘラケズリ	完全実測 3/4残存	0~6cm
2	須恵器	壺	14.4 (8.2)	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り	回転実測 1/2残存	0cm
3	須恵器	壺	13.5 (7.1)	3.9	ロクロナデ 火槽	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り 火槽	回転実測 5/12残存	4cm I区1層
4	須恵器	壺	14.0 (5.6)	4.4	ロクロナデ 火槽	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り 火槽	回転実測 1/5残存	IV层
5	須恵器	壺	14.6 (7.2)	4.2	ロクロナデ 火槽	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り 火槽	回転実測 3/8残存	0cm
6	須恵器	壺	15.0 (8.8)	3.9	ロクロナデ 火槽	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り 火槽	回転実測 3/8残存	1.5cm カマド
7	須恵器	高台壺	14.6 (11.3)	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ	回転実測 1/3残存	6cm
8	須恵器	高台壺	-	10.6 (1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転ヘラケズリ 付高台 ナデ	回転実測 5/16残存	出土位置
No.	器種	高 木 材	疗 行 手 柄 大 長	最 大 幅	最 大 厚	重 量	所見		
9	磨石	砂輪製灰盤	完形	14.2	12.1	6.1	1340.00	正面に磨り面	

第30表 H30号住居址出土遺物観察表

(31) H31号住居址 (第47図、写真図版二十六)

本住居址は、調査区南側であるナ-62.63Grに位置する。残存状態は南東コーナーがカクランにより壊されている。重複関係では本址が一番古い。

形態はやや歪な方形を呈すると考えられる。カマドは東壁北よりに造られている。住居址規模は北壁3.25m（残存）3.56m（推定）・南壁2.75m（残存）3.53m（推定）・西壁3.38m（残存）3.59m（推定）・東壁2.38m（残存）3.22m（推定）で、壁高さは南西コーナーで最大31cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で11.23m²、推定で11.65m²を測る。覆土はおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的にやや軟質であったが、貼床は1~9cmの厚さで貼られていた。

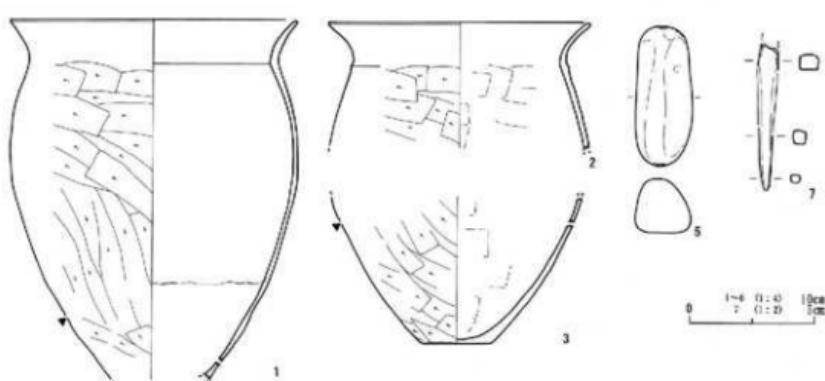
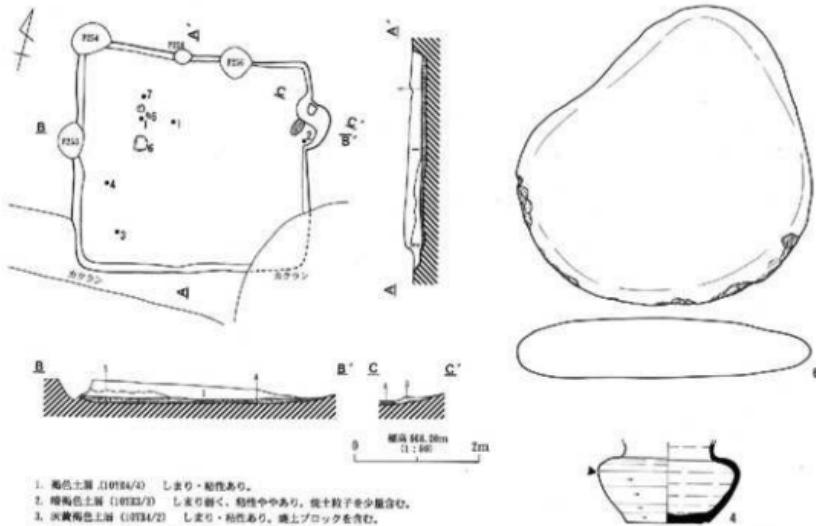
カマドは東壁北よりに造られており、煙道部と火床部及び一部袖部が検出された。煙道部はあまり伸びないタイプのもので、袖部も左側しか検出できなかった。

出土遺物は覆土中からが多く、図示したものも2と3の土師器甕以外は住居址床面より浮いた状態で出土した。1~3は土師器甕で、いわゆる武蔵甕と呼ばれるタイプのものである。4は須恵器短頸壺である。底部回転ヘラケズリを施す。5と6は敲打痕がある敲き石で、特に6は縁辺部に顕著である。7は鉄製品の釘と考えられるが、床面より14cm浮いた状態で出土した。

本址はこれらの出土遺物より8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法 基 (口幅(口) 横幅(横) 高さ(高))			成形・調整・文様		備考	出土位置	
			内 面	外 面						
1	土師器	甕	23.0 (14.2)	-	-	ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実測	6~15cm
2	土師器	甕	21.0 (11.6)	-	-	口縁ヨコナデ	ヘラケズリ	口縁ヨコナデ	回転実測 1/3残存 剥離2/3残存	II~IV区
3	土師器	甕	-	5.6	-	ヘラナデ	剥離～底部ヘラケズリ	剥離実測 底～底部1/2残存	0cm	II区
4	須恵器	短頸壺	-	6.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ 肩から下左侧回転ヘラケズリ 左侧回転ヘラケズリ	完全実測 3/4残存	3cm	
No.	器種	高 木 材	西 南 中	最 大 長	最 大 幅	最 大 厚	重 量	所見	出土位置	
5	敲打石	ホルンフェルス	完形	11.2	4.5	4.6	338.00	上・南端に古い敲打痕	6cm	
6	敲打石	安山岩	完形	24.0	23.6	5.2	3720.00	縁辺に敲打痕	10cm	
7	釘	鉄	-	(5.9)	(0.8)	(0.6)	-	-	14cm	

第31表 H31号住居址出土遺物観察表



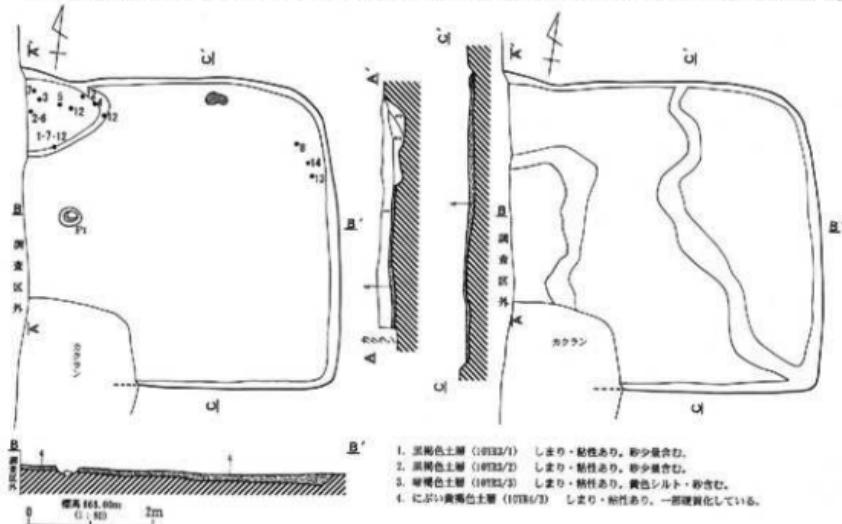
第47図 H31号住居址及び出土遺物実測図

(32) H32号住居址 (第48-49図、写真図版二十七)

本住居址は、調査区中央であるニ-60.61、ヌ-60.61Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外に、南側の一部がカクランにより大きく壊されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁4.62m(残存)・南壁3.14m(残存)・東壁4.50mで、壁高さは北壁で最大15cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で20.50m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であったが、特に西側半分が硬質であった。貼床は1~15cmの厚さで貼られていた。ピットは1方所のみ確認された。規模はP1が径35cm・深さ7cmを測る。住居址掘り方は東に向かって段状に掘り込まれており、いずれの段も12cmほどの段差があった。カマドは検出されなかったが、北壁側に焼土塊が見られ、やや火床部の様相を呈していた。

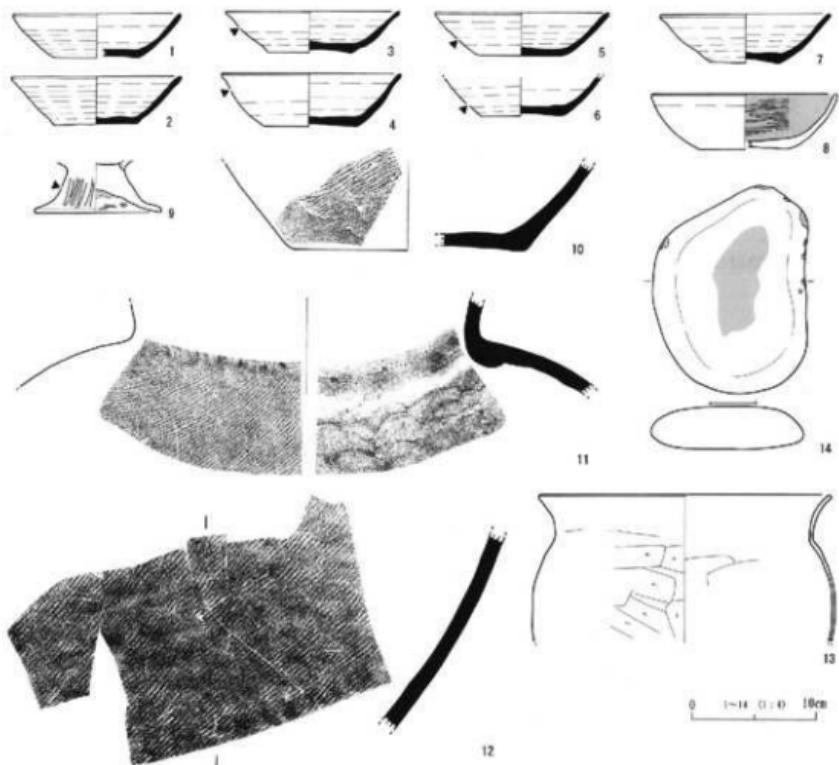
出土遺物はほとんどが北壁西寄りの土坑内から出土した。特に図示した11と12の須恵器大甕は破



第48図 H32号住居址及び掘り方実測図

No.	種別	断面	成形・開窓・文様		参考	出土位置
			内 面	外 面		
1	石造壁	片	13.6 0.8 (3.5) ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 破壊石垣み切り 大拂	回転火拂 1/4残存	0cm
2	石造壁	片	13.8 0.7 3.8 ロクロナデ	ロクロナデ 破壊石垣み切り	完全実測 完形	14cm
3	石造壁	片	14.6 0.7 3.8 ロクロナデ	ロクロナデ 破壊石垣み切り	完全実測 完形	0cm
4	須恵器	片	14.5 7.3 4.2 ロクロナデ	ロクロナデ 破部火転角切り	完全実測 破部火転	0cm
5	須恵器	片	14.0 6.8 3.6 ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 破部石垣み切り 火拂	完全実測 2/3残存	3cm
6	須恵器	片	- 0.8 - ロクロナデ	ロクロナデ 破部石垣み切り	完全実測 破部火転	14cm
7	須恵器	片	13.8 5.8 3.9 ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 破部石垣み切り	完全実測 1/2残存	0cm
8	土器部	片	15.0 7.2 (4.4) ミヅキ一色色刷	ロクロナデ	回転実測 1/4残存	0cm
9	土器部	高片	- 19.2 - ハケナデ	ミヅキ	回転実測	北
10	須恵器	壁	- 19.2 - ナデ	平行タタキ→ハケナデ	回転実測 破部1/4残存	北
11	須恵器	壁	- - - ロクロナデ 当具組	ロクロナデ 平行タタキ	回転実測 破部1/4残存	北
12	須恵器	壁	- - - 当具組	平行タタキ	断面実測	0~6cm 北
13	土器部	壁	23.6 - - ハケナデ	ハケナデ ロクロナデ	回転実測 口縁1/5残存	-10cm
No.	種別	素材	生存率 最大高 最大幅 最大厚	重 量	周 長	出土位置
14	磨石	角閃石岩	完存 16.7 12.6 3.6 1170.00	正円中央にすり面 端辺に輪打痕		0cm

第32表 H32号住居址出土遺物観察表



第49図 H32号住居址出土遺物実測図

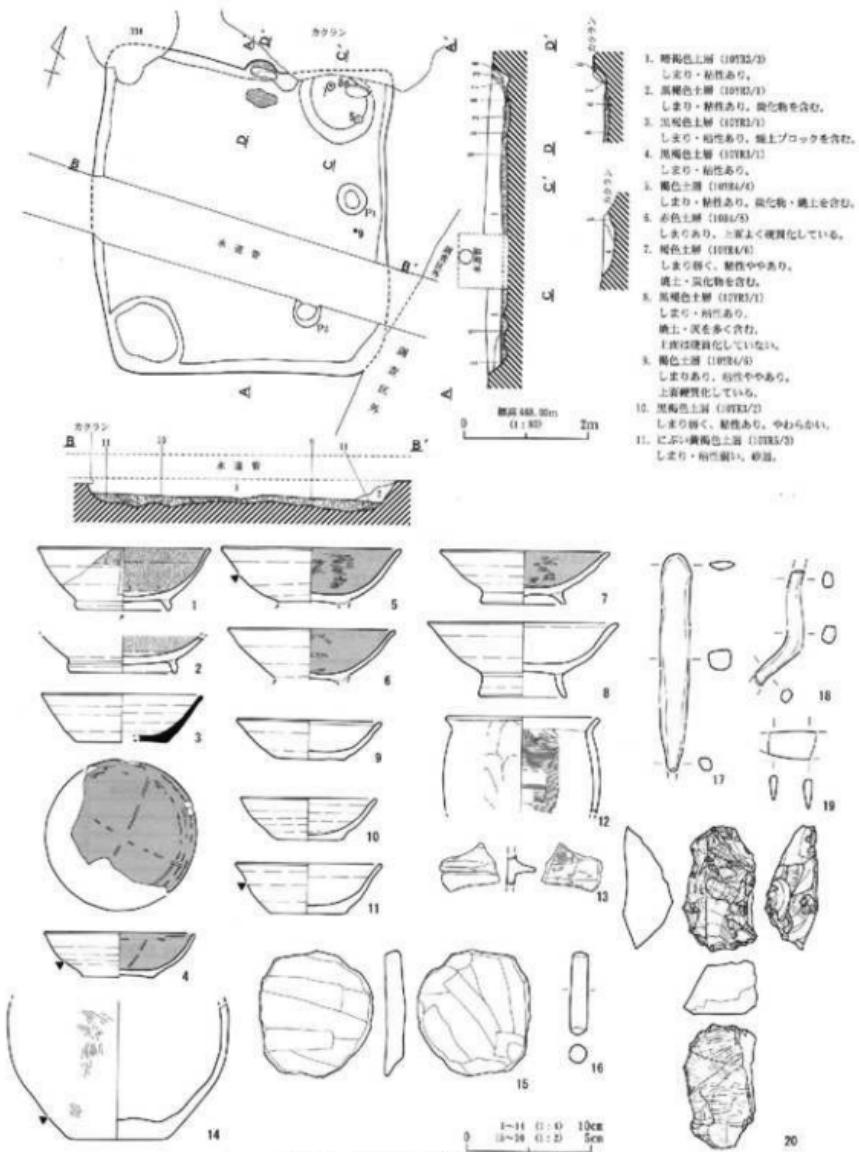
碎した状態の小片が多数出土した。1～7は須恵器壺であり、いずれも底部回転糸切りである。出土位置は2と6以外はいずれも床面上からである。8は土師器壺であり内面黒色処理されている。9は土師器高壺脚である。10～12は須恵器壺の頸部と胴部と底部である。13は土師器壺である。14は磨石で中央に磨面、縁辺部に敲打痕がある。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられる。

(33) H33号住居址 (第50図、写真図版二十七)

本住居址は、調査区中央であるト-54.55.56、ナ-54.55.56、ニ-55Grに位置する。残存状態は住居址中央部分に水道管が、住居址北東側がカクランにより削平されている。新旧関係は古い方より、H36号住居址→H35号住居址→F24号掘立柱建物址→本址→D34号土坑である。

形態は正方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁2.25m（残存）4.42m（推定）・南壁3.95m（残存）4.06m（推定）・西壁4.78m（残存）5.11m（推定）・東壁2.92m（残存）4.58m（推定）で、壁高さは西壁で最大27cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-



第50図 H33号住居址及び出土遺物実測図

15' -Wを示す。住居址の床面積は検出部分で19.76m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は1~21cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、2カ所確認された。規模はP1が径52cm・深さ12cm、P2が径45cm・深さ10cmを測る。また、本址はカマド東脇と住居址南西コーナー部に貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。カマド脇の貯蔵穴はほぼ円形で、規模は長軸130cm・短軸110cm・深さ22cmを測る。住居址南西コーナーの土坑もほぼ円形で、規模は長軸136cm・短軸100cm・深さ15cmを測る。住居址の掘り方は住居中央がやや高く、壁際が低くなる掘り方であった。

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN-4° -Wを示す。残存状況は煙道部と一部袖部、及び火床部が残存していたのみである。煙道部は住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプであり、規模は32cmを測る。火床部はあまり硬化しておらず、焼土の厚みも5cmであった。

本址からの出土遺物はカマド、及びカマド脇の貯蔵穴周辺から多く出土した。5と9は床面直上からの出土、6と11はカマド東脇の貯蔵穴から、その他のものは住居址覆土中からの出土である。1と2は灰釉陶器碗である。1の施釉は内外面ハケ塗りが施され、見込み部は転用窓のように磨れていた。いずれも高台が三日月である事と軸がハケ塗りであることなどから、光が丘1号窯式にあたると考えられる。3は須恵器壺であり、底部回転糸切り離しである。4は土師器壺で内面黒色処理を施されている。内面見込み部に十文字の暗文風のミガキが施されている。5~8は土師器碗で、8のみ黒色処理が施されていない。9~11は土師器壺である。12は土師器の小型壺で、外面ヘラナデ、内面は細かなハケ目の残るナデが施されている。また口唇部が面取りされたような状態である。13は羽釜であり羽の部分が残存する。内面に細かなハケ目の残るナデが施されている。14は形態と調整から土師器壺としたが確証を得ない。或いは周辺部に広がる古墳時代住居址からの混入品とも考えられる。15は土師器壺を利用した土製円盤である。16は柱状の土製品で使用目的は不明である。17~19は鉄製品で、17は鎌、18は釘、19が刀子と考えられるがいずれも残存部分が少なく、また鋲びにより詳細は不明である。20は黒曜石の石核である。

これらの遺物から、本址の所産時期は9世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	基準	法量			成形・調整・文様	備考	出土位置	
			内面	外面	底面(底面凹凸有無)				
1	灰釉陶器	碗	13.9	7.3	5.0	ロクロナデ 薄ねねき底有り	ロクロナデ 付高台	回転実測	
2	灰釉陶器	碗	-	8.5	(3.0)	ロクロナデ 通ねねき底有り	ロクロナデ 付高台	I・IV区	
3	須恵器	壺	12.9	7.4	3.8	ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 底部回転糸切り 大擦	回転実測	
4	土師器	壺	12.1	5.5	3.6	黒色施釉 晴文	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測	
5	土師器	壺	14.5	-	(4.5)	ミガキ-黒色處理	ロクロナデ 底部右回転糸切り→付高台	完全実測	
6	土師器	碗	13.4	-	(4.1)	ミガキ-黒色處理	ロクロナデ 底部右回転糸切り→付高台	完全実測	
7	土師器	碗	13.7	6.9	4.3	ミガキ-黒色處理	ロクロナデ 底部右回転糸切り→付高台	完全実測	
8	土師器	碗	15.3	7.1	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ 武部右回転糸切り→付高台	回転実測	
9	土師器	壺	11.6	5.6	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	
10	土師器	壺	10.9	5.4	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	
11	土師器	壺	11.7	5.9	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り	完全実測	
12	土師器	壺	12.5	-	(7.7)	ハナナデ	ハナナデ→縫ヨコナデ	I区ホリ方	
13	土師器	羽釜	-	-	-	ハナナデ	縫ヨコナデ	縫片実測	
14	土師器	壺	-	8.1	(11.0)	ナデ	ミガキ	完全実測	
15	土師器	円盤	縦5.0	横4.5	0.8		重量22.9g 土師器使用	I区	
16	土製品		3.3	延0.7	-		重量1.88g		
No.	種別	素材	保存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
17	鐵劍?	鐵	(8.7)	1.2	0.8				I区
18	釘?	鐵	(5.1)	(0.8)	(0.6)				
19	刀子	鐵	(1.9)	(1.1)	(0.3)				IV区
20	石核	黒曜石	2.9	5.0	2.1	29.54			III区

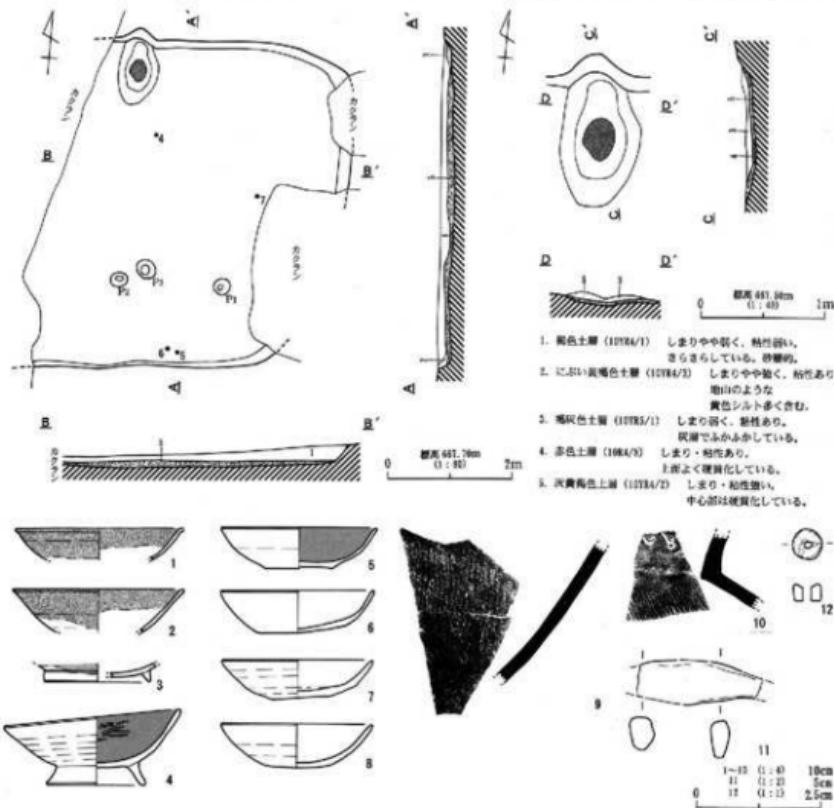
第33表 H33号住居址出土遺物観察表

(34) H34号住居址 (第51図、写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央であるナ-51.52、ニ-51.52Grに位置する。残存状態は西側半分がカランにより大きく壊されている。重複関係は本址が一番新しい。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.75m(残存)・南壁3.78m(残存)・東壁0.75m(残存)4.50m(推定)で、壁高さは東壁中央で最大29cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で18.7m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床はカマド前面から住居中央部分が硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~11cmで貼られていた。ピットは3カ所確認された。規模はP1が径25cm・深さ23cm、P2が径28cm・深さ19cm、P3が径33cm・深さ13cmを測る。本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部と火床部のみの検出であり、煙道部の規模長さ28cm、火床部の焼土厚みは3cmを測る。

出土遺物はカマド周辺及び覆土中から出土した。1~3は灰釉陶器碗である。1と2は釉がハケ塗りである。4は土師器碗で内面黒色処理されている。5~8は土師器杯であり、5のみ内面黒色処理され



第51図 H34号住居址及び出土遺物実測図

ている。9と10は須恵器甕の胴部と頸部であり、10の頸部は口縁部の波状文が一部観察できる。11は鉄製品であるが、銘により品種は不明である。12は滑石製の白玉である。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀後半から10世紀前半に位置づけられる。

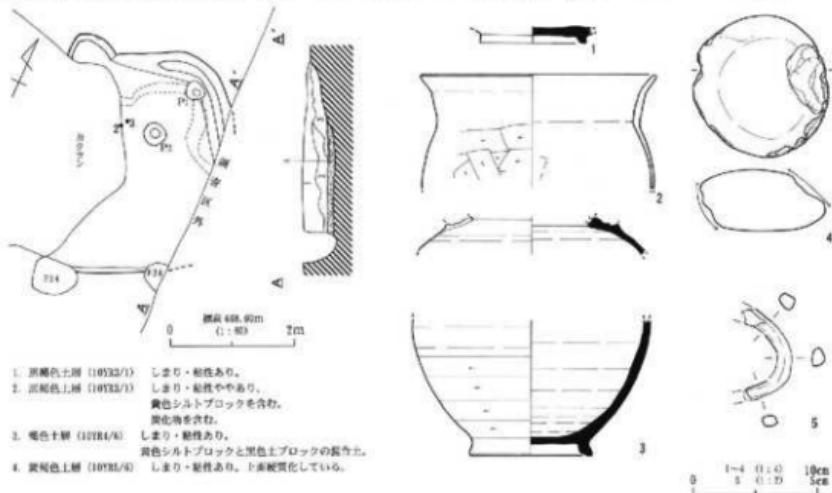
No.	種別	器種	法面		成形・調節・文様		備考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	灰陶器	甕	13.6	-	ロクロナデ 調節 つけかけ	ロクロナデ 調節 つけかけ	円軌実筋 口縁1/2残存	I区
2	灰陶器	甕	13.8	-	ロクロナデ 調節 つけかけ	ロクロナデ 調節 つけかけ	円軌実筋 口縁1/2残存	II区
3	灰陶器	甕	-	8.6	ロクロナデ 調節 つけかけ	ロクロナデ 調節 つけかけ	円軌実筋 底部1/4残存	III区
4	土器	甕	14.1	7.9	5.4	ロクロナデ ミヨリ黒色處理	ロクロナデ 椅高台	完全実筋 25cm
5	土器	甕	10.6	5.4	3.2	ロクロナデ 黒色處理	ロクロナデ 頂部右側軌筋切り	円軌実筋 1/2残存 25cm
6	土器	甕	12.4	6.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ 成形軌筋切り(方向不明)	完全実筋 完形 20cm
7	土器	甕	12.2	4.7	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ 頂部右側軌筋切り	完全実筋 2/3残存 20cm
8	土器	甕	12.3	5.6	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 成形軌筋切り(方向不明)	円軌実筋 2/3残存 20cm
9	須恵器	甕	-	-	-	平行タキ	唐瓶実筋 車本	カマド 置区
10	須恵器	甕	-	-	ロクロナデ	平行タキ	唐瓶実筋 車本	日区
11	不明	鉄	6.33	1.80	0.00			出土位置
12	白玉	滑石	定形	0.34	0.57	0.18	0.19	日区

第34表 H34号住居址出土遺物観察表

(35) H35号住居址 (第52図、写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央であるト-53.54、ナ-54Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより、住居址南東コーナーは調査区域外となる。重複関係は古い方よりH36号住居址→本址→F24号掘立柱建物址→H33号住居址である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.72m（残存）・南壁1.28m（残存）・東壁0.90m（残存）で、壁高さは北西コーナーで最大29cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で5.30m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは5~13cmで貼られていた。壁溝は確認されなかったが、北東コーナー



第52図 H35号住居址及び出土遺物実測図

一から東壁にかけて一段高いテラス状の平坦部が確認できた。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径32cm・深さ26cm、P2が径37cm・深さ12cmを測る。

本址のカマドは確認できなかったが、北壁中央に一部焼土を伴う掘り込みが検出された。焼土は壁部分に僅かに残るのみで、礎土中にも焼土・炭化物は確認されなかつた為、カマドとしては確証が得られなかつた。

出土遺物は礎土中からで、少量であった。1は須恵器高台壺で底部のみであった。底部は回転糸切り離しである。2は土師器甕で床面上から出土した。いわゆる「武藏甕」であり、頸部が「コ」の字状に曲がっている。3は須恵器壺であり、肩部に把手の付くタイプと考えられる。底部から胴部のもので接合関係はなかつたが、同一地点からの出土であり、胎土・焼成も酷似することから、同一個体として扱つた。4は般ぎ石であり側面に敲打痕が残る。5は鉄製品の釘と考えられるが大きく山がつてゐる。

本址はこれらの出土遺物より9世紀後半に位置づけられると考えられる。

No.	種別	器種	法量		成形・構造・文様		備考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	須恵器	高台壺	—	8.5	—	ロクロナデ 火押	ロクロナデ 武藏甕底部 窓口付肩付 火押	完全実測 直径1/2残存
2	土師器	甕	20.0	—	—	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ ヨコヨコナデ	完全実測 口縁1/3残存
3	須恵器	壺	—	9.6	—	ロクロナデ 自然無釉	ロクロナデ 剥離下半部輪ヘラケズリ	完全実測
4	般ぎ石	塊	—	—	—	把手・窓口・足跡 丘陵斜面	把手・窓口・足跡 丘陵斜面	完全実測
5	釘	鉄	(6.8)	(6.8)	(0.2)	(0.6)	—	—

第35表 H35号住居址出土遺物観察表

(36) H36号住居址 (第53図、写真図版二十八)

本住居址は、調査区中央であるト-54.55.56、ナ-56Grに位置する。残存状態は西側半分がH33号住居址に、東側が調査区外となる。重複関係は本址が一番古い。

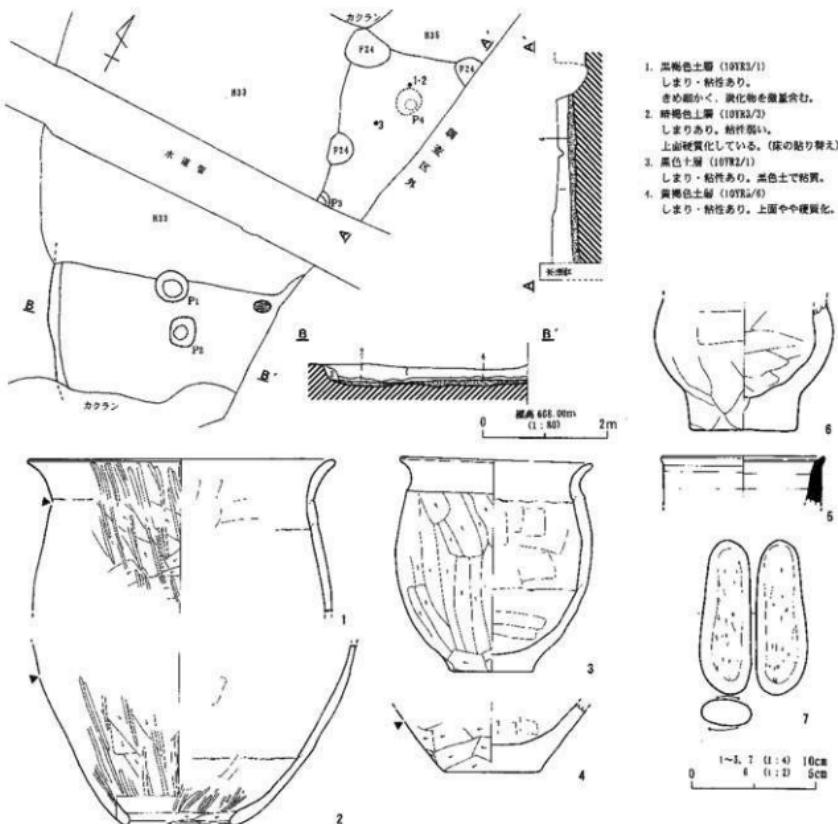
形態は方形を呈すると考えられる。規模は西壁2.02m(残存)で、壁高さは西壁で最大25cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で9.34m²を測る。礎土はおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~15cmで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、4カ所確認された。規模はP1が径53cm・深さ9cm、P2が径46cm・深さ15.5cm、P3が径20cm・深さ11cm、P4が径41cm・深さ26cmを測る。カマドは確認されなかつたが、一部南側で焼上の範囲が確認され、火床部のような硬化が観察できた。

出土遺物は礎土中から多く出土した。1と2は單孔の大型瓶で同一個体と考えられるが、1と2は接合関係がなかつた。1と2のいずれも床面より4cmほど浮いた状態で出土し、内面は黒ずんでいる。3は上師器の小型甕であり、ほぼ完形である。4も土師器甕の底部である。5は須恵器の短頸瓶の口縁部と考えられるが、口唇部内面に沈線状の窪みがある。6はミニチュア土器で甕と考えられる。7は磨石である。

本址はこれらの出土遺物より、6世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量		成形・構造・文様		備考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	土師器	甕	24.8	—	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ+ミガキ 口縁ヨコナデ+ミガキ	完全実測 口縁1/3残存	0.5cm
2	土師器	甕	8.7	—	ヘラナデ +ミガキ 輪部ヘラケズリ+ミガキ	ヘラケズリ+ミガキ	完全実測	0.5cm I区
3	土師器	甕	15.5	6.8	17.0	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	ヘラケズリ+ミガキ 口縁ヨコナデ	完全実測 4/5残存 1.5cm
4	土師器	甕	—	7.8	—	ヘラナデ	ヘラケズリ 底部ヘラケズリ+ミガキ	完全実測 底部完全 1区
5	須恵器	短頸瓶	13.2	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 口縁1/3残存 1区
6	土師器	子母器	—	4.4	—	ナデ	ナデ 未检测	完全実測 1~底辺1/2残存 0.5cm
7	磨石	砂岩	—	—	—	—	—	IV区
			内面	外面	内面	外面		
			12.8	4.1	22	156.86		

第36表 H36号住居址出土遺物観察表

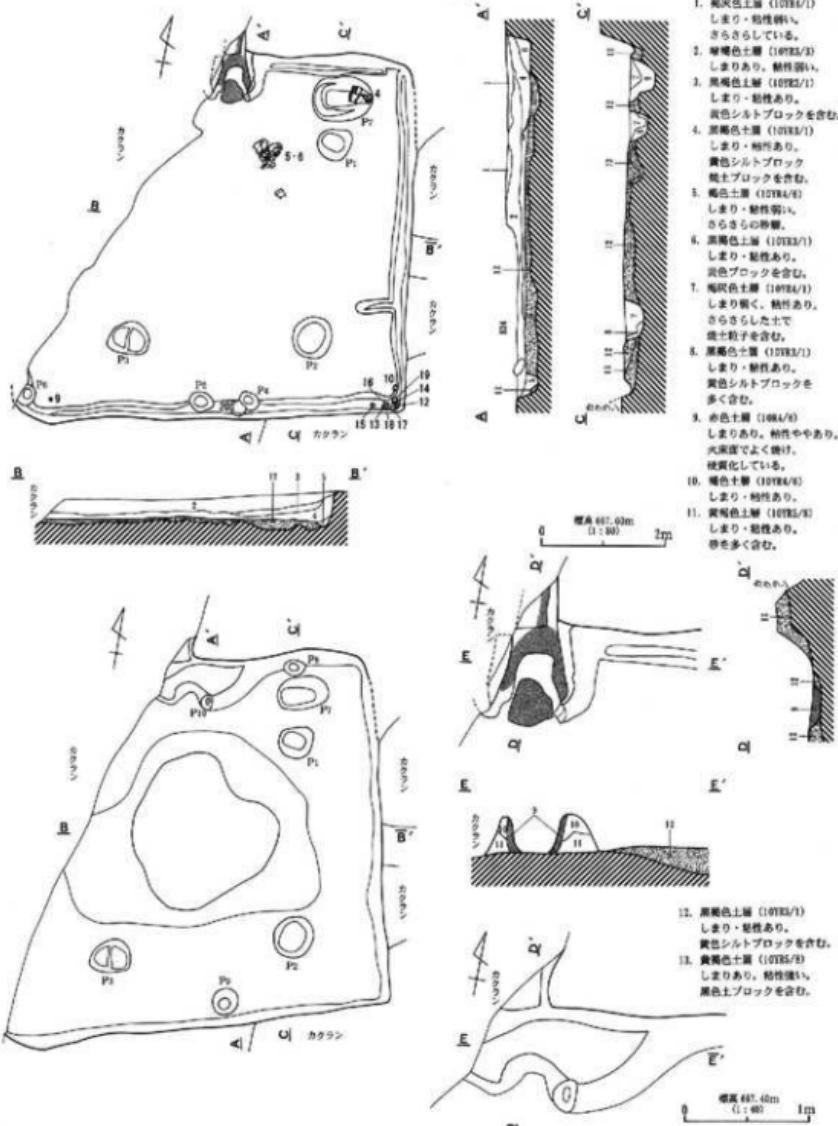


第53図 H36号住居址及び出土遺物実測図

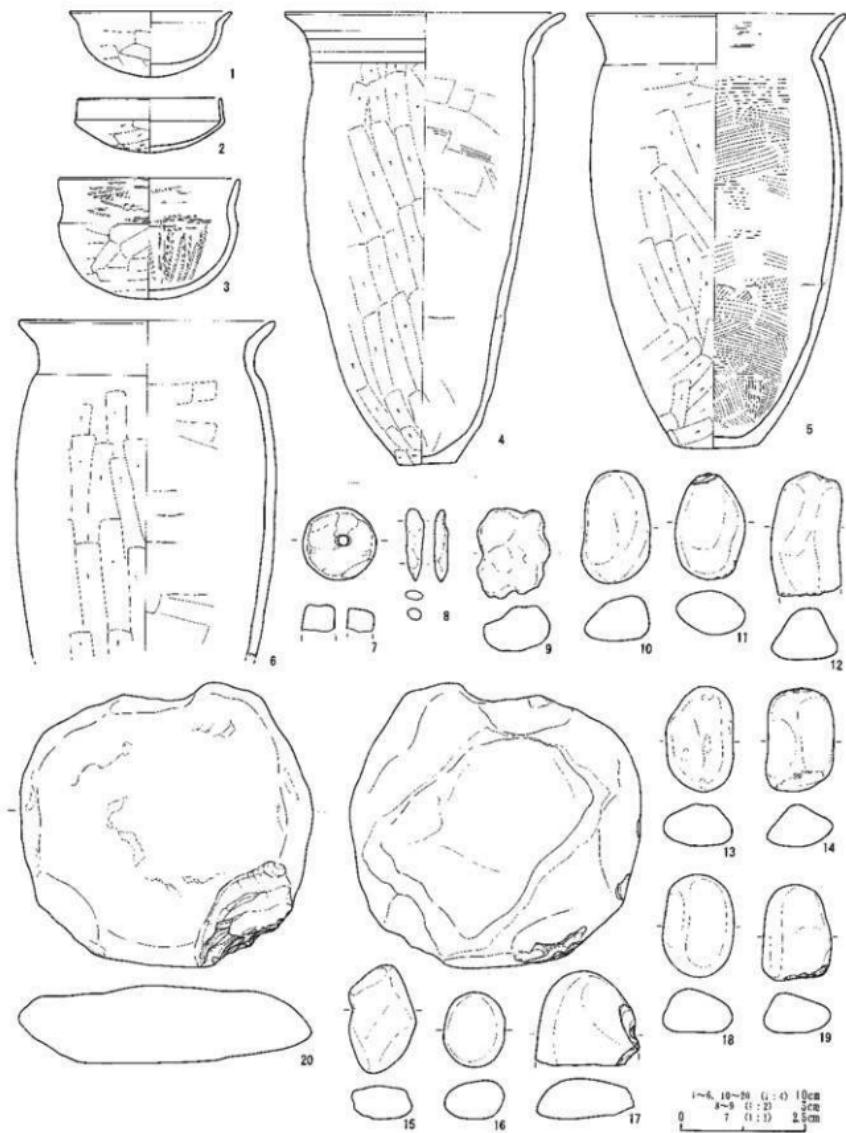
(37) H37号住居址 (第54-55図、写真図版三十)

本住居址は、調査区中央であるト-50.51.52、ナ-50.51.52、ニ-51.52Grに位置する。残存状態は西側1/3がカクランにより削平されている。重複関係は古い方より、H40号住居址→本址→H34号住居址→D35.36号土坑である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.96m(残存)・南壁6.00m・西壁0.72m(残存)・東壁5.48mで、壁高さは北壁東寄りで最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は残存部分で25.76m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~25cmで貼られていた。壁溝は北東コーナーを除き、ほぼ全周している。規模は幅14~35cm・深さ1~13cmで、断面はU字形である。また、P2に向かつて間仕切り溝状態で伸びている。ピットは掘り方検出時も含め、9カ所確認された。P1~3が主柱穴、



第54図 H37号住居址実測図



第55圖 H37号住居址出土遺物素描圖

P4と5が入り口施設の穴、P7が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径57cm・深さ33cm、P2が径66cm・深さ30cm、P3が径66cm・深さ31cm、P4が径34cm・深さ21cm、P5が径40cm・深さ26cm、P6が径35cm・深さ13cm、P7が長軸95cm・短軸72cm・深さ42cm、P8が径35cm・深さ23cm、P9が径42cm・深さ39cmを測る。住居址掘り方は住居址中央部分が一段高くなる掘り方で、段の高さは最大11cmを測る。

カマドは北壁の中央部に造られていた。カクランにより煙道部と左袖が壊されていた。煙道部は長く伸びるタイプで、規模は残存で長さ50cmを測る。袖部は地山の上に粘性のある褐色と黄褐色の粘土を交互に積み、造られていた。また焚口部から内側の袖内面は非常に焼け込んでおり、硬化していた。火床部は焚口部にあり、良く焼けていた。焼土の厚みは7cmを測る。カマド掘り方は焚口部前面部分のみ一段高くなっている、掘り方時にP10が検出された。P10は焚口部に立てられた袖構築材の掘り込み穴と考えられる。

本址からの出土遺物は多く、特に完形に近いもののが多かった。1はいわゆる「内斜口縁杯」と呼ばれるタイプの土師器壺で、重複している5世紀代のH40号住居址からの混入品と考えられる。2は須恵器壺蓋模倣の土師器壺である。底部はヘラケズリを施す。3は土師器鉢で、内面に暗風のミガキが施されている。4~6は土師器甕である。4はほぼ完形で、貯蔵穴と考えられるP7内に倒れ込むように出土した。ただ、土坑底よりは12cm浮いた状態であった。5と6はカマド前からまとめて出土した。いずれも床面直上である。5は内面ハケ目の残るナデが施されている。7は滑石製のF型でやや大型のタイプである。8は土製品であるが品種は不明であり、ミニチュア的なものとも思われる。9は鉄製品であるが品種は不明である。10~19は編み物石と考えられる。住居址南東コーナーの壁溝上でまとめて出土した。20は台石で、P4と5のあいだの壁溝上から出土した。一部に敲打のためと考えられる剥離痕がある。

これらの遺物より、本址の所産時期は7世紀代と考えられる。

No.	種別	器種	法量		底形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(cm)	底径(cm)	内面	外面		
1	土師器	杯	13.0	-	5.3 ミガキ?	口縁ヨコイズレヘラケズリーナデ	四輪実輪 1/3残存	IV区 II区ホリガ
2	土師器	甕	11.8	12.0	4.4 ミガキ?	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	四輪実輪 1/4残存	III区 II区ホリガ
3	土師器	鉢	14.6	14.1	9.7 ミガキ 唐文	口縁ヘラミガキ 重ねヘラケズリーナデ	四輪実輪 1/3残存	III区
4	土師器	甕	22.4	17.4	8.6 ヘラケズリ (ハケナデ)	ヘラケズリ 1/3縁ヨコナデ	完全実輪 邪形	-23cm 肝歛六
5	土師器	甕	20.8	6.8	35.0 ハケ目	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実輪	0cm
6	土師器	甕	20.5	-	- ヘラナデ	ヘラケズリ 口縁ヨコナデ	完全実輪 1/4残存	0cm
8	土製品	不明	2.9	0.7	0.6		素面 1.1kg	III区
%	常 稀	石 材 残存率	残大長	残大幅	残大厚	車 盆	所 見	出土位置
7	石 玉	滑石	完全	0.54	1.48	0.23	1.45	
9	小 明	鉄	-	3.0	3.6	2.8		
10	編み物石	海石安山岩	完形	3.0	5.5	4.0	293.00	
11	編み物石	砂岩	完形	8.5	5.6	3.8	230.00	上・下底部に敲打痕
12	編み物石	花崗岩	-	(5.9)	(5.6)	(4.3)	(336.00)	下縁欠損 (破壊?)
13	編み物石	玄武岩	完全	8.5	5.5	3.5	198.00	
14	編み物石	ホルンフェルス	完形	8.3	3.4	3.7	244.00	上・下端部に浅い敲打痕
15	編み物石	結晶質閃长岩	完形	8.7	3.1	2.7	169.00	
16	編み物石	凝灰岩	完形	6.1	4.9	3.1	112.00	
17	編み物石	砂岩	-	(7.5)	(8.3)	(3.5)	(288.00)	下縁欠損 (破壊?)
18	編み物石	輝石安山岩	完形	8.2	5.7	3.4	240.00	
19	編み物石	ホルンフェルス	完形	7.7	5.5	3.5	195.00	下端部に使用のためと思われる剥離
20	台 石	黒色斑岩安山岩	22.8	-	23.4	6.3	5060.00	全体に崩らか 正面下部に剥離

第37表 H37号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量		底形・調整・文様		備考	出土位置
			口径(cm)	底径(cm)	内面	外面		
1	須恵器	甕	-	(5.6)	- ロクロナデ	ロクロナデ	四輪実輪 也浦1/4残存	I区
2	須恵器	甕	-	-	- ロクロナデ	ロクロナデ 平行タキ	四輪実輪 也浦1/2残存	I区
3	土師器	甕	21.0	-	- ヘラナデ	ロクロナデ ヘラケズリ	四輪実輪 也浦1/3残存	I区

第38表 H38号住居址出土遺物観察表

(38) 38号住居址 (第56図、写真図版三十)

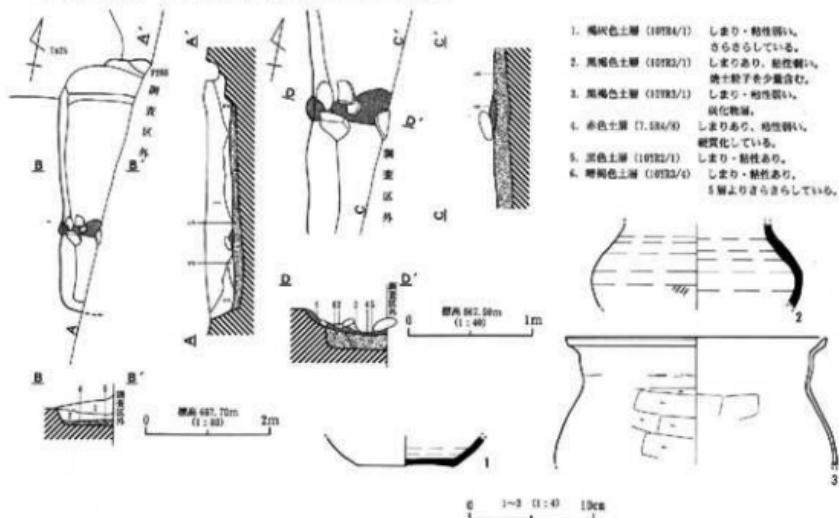
本住居址は、調査区中央であるト-52.53Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となり、全体の1/4ほどの検出にとどまった。新旧関係は古い方より、H39号住居址→本址→T-25号竪穴造構→P266である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは西壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.28m (検出)・南壁0.25m (検出)・西壁3.56mで、壁高さは西壁北よりで最大35cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は2.51m² (検出)を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれれる。床は全体的に軟質で、貼床は全体に1~15cmの厚さで貼られていた。また本址は北壁側にテラス状の段が検出された。いわゆる棚上造構と考えられ、規模は幅40cm・高さ15cmを測る。

カマドは西壁中央にあり、検出状況は構築材と考えられる礫と、火床部が検出されたのみである。カマドの主軸方位はN-80°-Eを示す。

出土遺物は覆土中のものが多く、図示した遺物も覆土中からの出土である。1は須恵器壺、2は須恵器壺と考えられる。3は土師器甕で頸部が「コ」の字となる武藏甕のタイプである。

これら遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

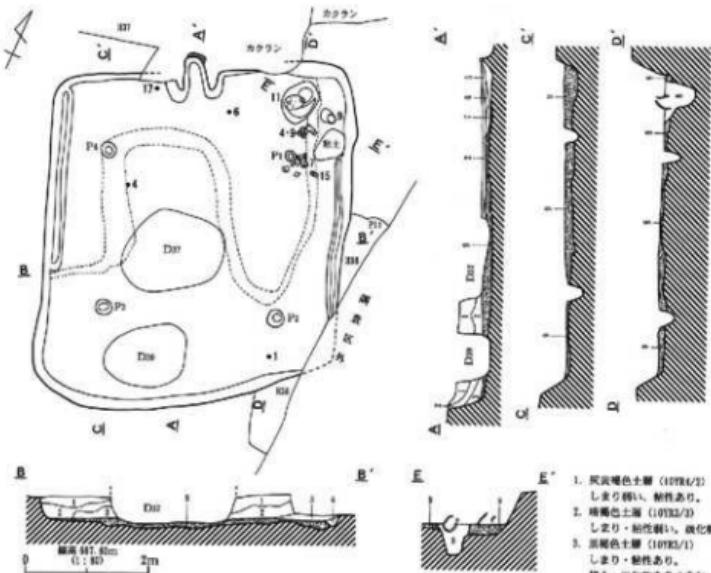


第56図 H38号住居址及び出土遺物実測図

(39) 39号住居址 (第57-58図、写真図版三十一)

本住居址は、調査区中央であるト-52.53、ナ-52.53Grに位置する。残存状態は住居址南東コーナーが調査区域外、北側はカクランによって削平されている。新旧関係は古い方から、H40号住居址→本址→H37号住居址→H38号住居址・D37.39号土坑→Ta25号竪穴造構である。

形態は角がやや丸い方形である。規模は北壁4.51m・南壁4.21m (検出)・西壁4.73m・東壁3.97m (検出)で、壁高さは北東コーナー部で最大55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で22.37m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は1~16cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁と西壁の一部にそれぞれ検出された。規模は幅15~30cm・



4. 黒色土層 (10TR4/6) しまり・韌性あり。黄色ブロックを含む。
 5. 黑褐色土層 (10TR2/1) しまりなし。砂土や多量灰土。
 6. 黑褐色土層 (10TR2/2) しまりなし。黄色砂や粒子・炭化物少量混入。

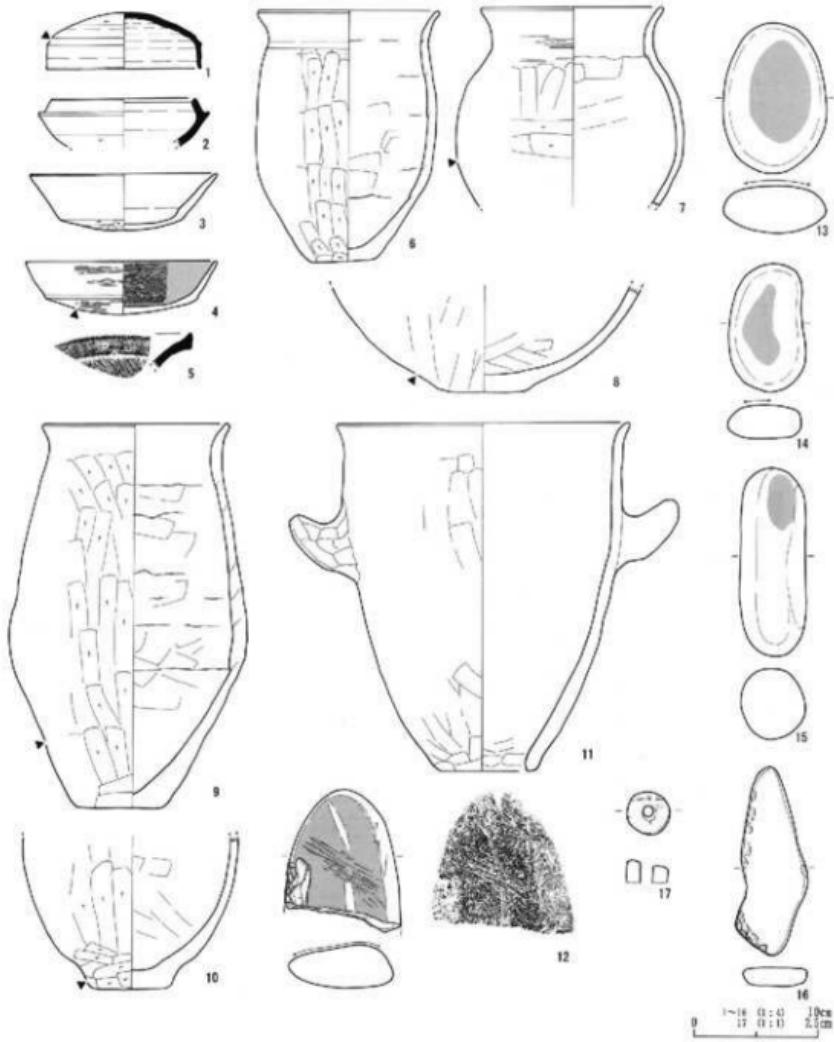
7. 黑褐色土層 (10TR3/2) しまりなし。黄色彩・小石・黒色ブロック少量混入。
 8. 黑褐色土層 (10TR3/3) しまりなし。砂粒子多量混入、小石を含む。
 9. 黑褐色土層 (10TR3/4) しまりなし。黄色砂・小石混入。

第57図 H39号住居址実測図

No.	種別	形 種	成 形・調 整・又 様				考	出土位置	
			内	外	西	東			
1	須志器	坪壠	12.4	—	4.5	ロクロナダ	ロクロナダ、天井部回転ヘラケズリ	完全実施 2/3残存 8cm	
2	須志器	坪壠	11.4	—	—	ロクロナダ	ロクロナダ、底面回転ヘラケズリ	回転実施 1段上1/10残存 1.5cm	
3	土師器	坪	15.2	9.9	4.5	ナダ	ロクロナダ 地盤ヘラケズリ	完全実施 4/5残存 1.5cm	
4	土師器	便	15.4	12.1	4.3	ミガキ・黒色斑跡	ミガキ	完全実施 3/4残存 0~2cm	
5	須志器	便	—	—	—	ロクロナダ	ロクロナダ、導播施設	部分実施 1区	
6	土師器	便	14.6	8.1	20.1	ヘラナダ	ヘラケズリ	完全実施 3/4残存 0cm	
7	土師器	便	14.7	—	—	ヘラナダ	ヘラケズリ ロクロナダ→ヘラミガキ	完全実施 口縁3/4残存 0cm	
8	土師器	便	—	7.1	—	ヘラナダ	ヘラケズリ→ナダ	完全実施 瓶形充填 0cm	
9	土師器	便	15.0	9.7	20.8	ヘラナダ	ヘラケズリ→ナダ	完全実施 2/3残存 0~1cm	
10	土師器	便	—	6.6	—	ヘラナダ	ヘラケズリ	完全実施 底部2/3残存 0.5cm	
11	土師器	瓶	23.6	2.2	27.8	ヘラナダ	ヘラケズリ→ナダ	完全実施 完形 -16cm P1	
No.	形 種	資 材	残 長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置	
12	砾石	安山岩	(11.4)	(9.3)	(2.5)	(695.00)	下部欠損 2側に輪打痕 正面が傾斜(全板残る)	1.5cm	
13	磨石	安山岩	完形	12.0	8.3	3.9	320.00	正面にすり面	0cm
14	磨石	安山岩	完形	10.3	6.2	3.1	278.00	正・裏にすり面	1.5cm
15	磨石	輝石安山岩	完形	15.6	5.4	3.6	710.00	正面にすり面	1cm
16	磨石	辉绿岩	完形	15.0	5.8	1.6	198.00	下腹部の剥離は使用痕か	0cm
17	白玉	滑石	完形	0.47	0.85	0.23	0.50		0cm

第39表 H39号住居址出土遺物観察表

深さ3~10cmで、断面は「U」字形である。ピットは4カ所確認された。P1~4は主柱穴と考えられ、規模はP1が径19cm・深さ27cm、P2が径28cm・深さ22cm、P3が径26cm・深さ25cm、P4が径25cm・深さ15cmを測る。

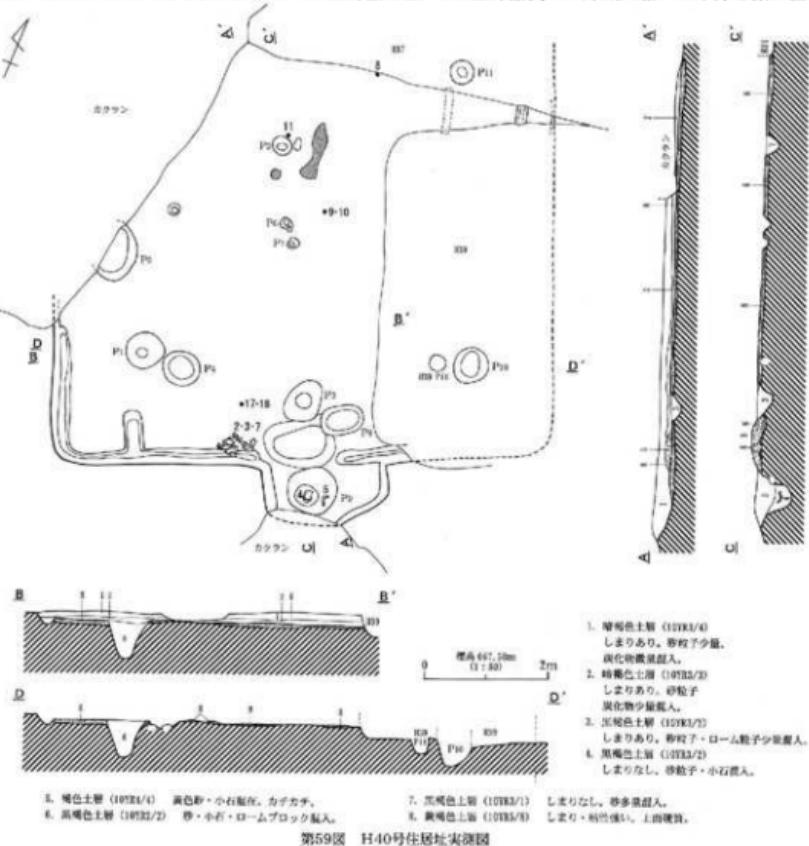


第58圖 1139號住居址出土遺物示意圖

また、本址はカマド東脇に貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内からは図示した11の大型把付瓶が口縁部を下にして完形で出土した（写真図版八十二参照）。規模は長軸70cm・短軸52cm・深さ51cmを測る。住居址の掘り方はカマド側を中心に、挿図で示した範囲が一段高くなる掘り方であった。段差は2~8cmを測る。

カマドは北壁中央に造られていたが、カクランにより上部がほとんど削平され、煙道と一部袖が検出されたのみである。煙道部の長さは36cmである。袖部も高さは5cmほど残存していた。また、本址の貯蔵穴南には図に示した範囲で、白色粘土が床面上に置かれていた。

出土物は覆土中や貯蔵穴周辺から多く出土した。1は須恵器壺蓋で、床面より6cm浮いた状態で出土した。天井部は回転ヘラケズリを施す。2は須恵器壺身で覆土中の出土である。これら2点の須恵器はその特徴から、MT15~TK10型式の範疇で捉えられると考える。3と4は土師器壺で、4は内面黒色処理されている。5は須恵器甕の口縁部で、柳描波状文が施されている。6と7は土師器の小型甕で、2点とも床面直上からの出土である。8は土師器盤、9は土師器甕で、貯蔵穴脇に上半分を据え置く



第59図 H40号住居址実測図

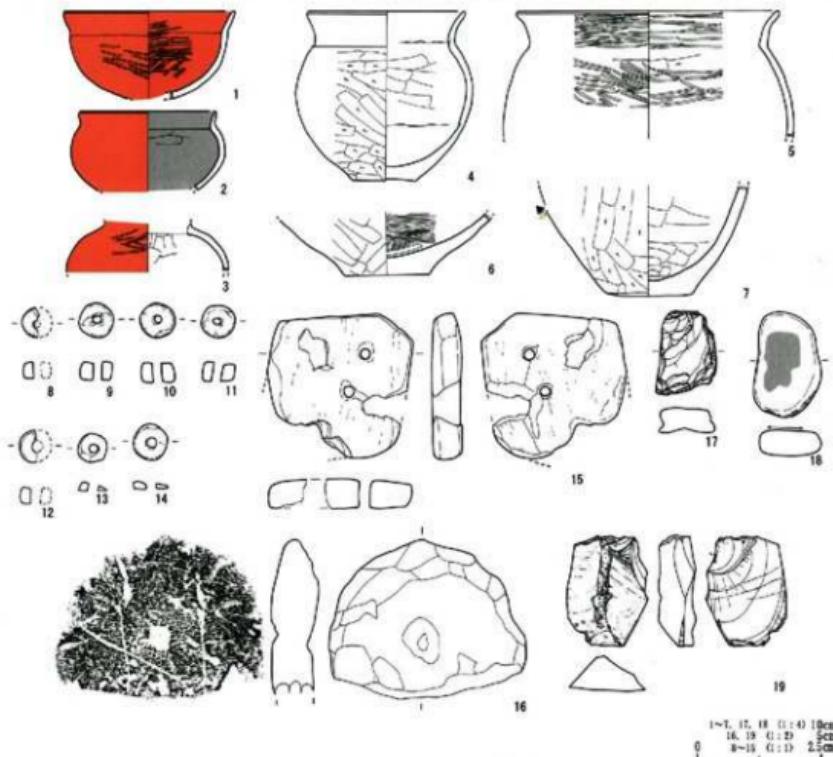
のような形で出土した（写真図版三十一参照）。底部はその脇より床面に潰れたような状態で出土した。10は土師器底である。11は大型の把手付瓶で完形である。12は砥石のような刃物傷がある石で、傷周辺は磨かれている。13～15は磨石、16は蔽石と考えられる。17は滑石製の白玉である。

これら遺物より、本址は6世紀前半に位置づけられると考える。

(40) H40号住居址 （第59・60図、写真図版二十九）

本住居址は、調査区中央であるナ-52.53.54、ニ-52.53.54Grに位置する。残存状態は西壁側がカラン、北壁側がH37号住居址により削平されている。新旧関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁5.54m（残存）7.66m（推定）・西壁2.26m（残存）・東壁0.15m（残存）で、壁高さは南壁で最大27cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で29.75m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、貼床は1～21cmの厚さで貼られていた。壁溝は南壁と西壁の一部にめぐっていた。また、南壁からは間仕切り溝的な壁溝も伸びていた。規模は幅18～30cm・深さ2～8cmを測る。ピットは11カ所確認された。P4.10.11が主柱穴、P9が入り口部の貯蔵穴の可能性がある。各ピットの規模はP1が径64cm・



第60図 H40号住居址出土遺物実測図

深さ59cm、P2が径32cm・深さ22cm、P3が径73cm・深さ26cm、P4が径60cm・深さ15cm、P5が径95cm・深さ17cm、P6が径24cm・深さ9cm、P7が径18cm・深さ8cm、P8が径69cm・深さ10cm、P9が径81cm・深さ57cm、P10が径56cm・深さ39cm、P11が径38cm・深さ38cmを測る。本址は南壁中央にいわゆる張り出しふィットを持つ。規模は長軸200cm・短軸100cmで中央にP9が掘られていた。また、このフィットを跨ぐ状態で床面上に出っ張る円形の硬質部が確認された。この硬質部分は踏み固められたように硬く、この硬質を取り除いた下層には、また硬質化した貼床が存在した。

カマドは北壁側が削平されていたため検出できなかったが、住居址中央部に焼土塊が検出され、硬質化はしていないかったが、地床炉の可能性がある。

本址からの出土遺物は床面上のもののが多かった。1は土師器壺である。口縁部が外反しながら伸びるタイプで、外面ともに赤彩が施されている。2は土師器壺で口縁部が短く外反しながら伸びるタイプのものである。外面が赤彩、内面黒色処理されている。3は土師器壺と考えられ、口縁部が直線的に伸びる、いわゆる直口壺と呼ばれるものと考えられる。外面赤彩が施されている。4は一部胴部が欠損するがほぼ完形で、P9内から出土した。5~7は土師器壺である。8~15は滑石の石製模造品である。8~14は白玉である。15は厚み6mmほどの模造品で、各面は面取りが行われている。中央に不規則な2つの孔が明けてある、いわゆる石製円盤とも考えられる。16は土師器の底部転用の土製品で中心部に両側から穿孔途中的跡があるため、土製紡錘車の未製品と考えられる。片面に木葉痕が確認できる。18は敲打痕と磨り面が確認できる石器である。19は黒曜石の石核である。

本址はこれらの出土遺物より、5世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置
			内	外	面	面				
1	土師器	壺	13.8	-	ミガキ 赤色塗彩	ミガキ 春色塗彩	回転高台	1/4残存	P3 IV区	
2	土師器	壺	11.1	-	ヘラナデ 黒色処理	赤色塗彩	回転実測	1/2残存	0cm	
3	土師器	壺	-	-	ヘラナデ	ミガキ 赤色塗彩	回転実測	1/2残存	0cm	
4	土師器	壺	12.6	5.1	13.6	ヘラナデ	ヘラケズリ ヨコナデ	完全実測	-33cm P9	
5	土師器	壺	21.2	-	ヘラケズリ→ミガキ	ミガキ	回転実測	口縁1/3残存	0cm	
6	土師器	壺	-	6.8	八ヶ日	ヘラケズリ→ ナデ	回転実測	底座1/2残存	0cm	
7	土師器	壺	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	光合実測	底部完形	0cm	
16	土製品	紡錘車	7.9	6.3	2.1			重量93.15g	木葉痕	IV区
No.	器種	材質	残存長	最大幅	最大幅	最大厚	重 量	所見		出土位置
8	白玉	滑石	0.32	(0.68)	-	0.08				出土位置
9	白玉	滑石	0.38	0.67	0.17	0.27				0cm
10	白玉	滑石	0.42	0.70	0.68	0.36				0cm
11	白玉	滑石	0.40	0.65	0.18	0.27				0cm
12	白玉	滑石	0.34	(0.63)	-	0.09				IV区
13	白玉	滑石	0.19	0.55	0.20	0.06				IV区
14	白玉	滑石	0.19	0.68	0.19	1.10				IV区
15	石製模造品	滑石	2.9	2.9	0.6	5.49	有孔円盤(双孔) 孔径0.2cm			IV区
17	原石	滑石	6.7	-4.9	1.9	88.00				0cm
18	帶・磨石	安山岩	8.6	5.5	2.2	164.00	正面にすり面 下端部に敲打痕			0cm
19	石核	黑曜石	4.4	3.2	1.5	19.04				P9

第40表 H40号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量		成形・調整・文様				備考	出土位置	
			内	外	面	面					
1	灰陶陶器	壺	16.2	9.0	5.6	クロロナデ 施釉	クロロナデ 施釉	威脅凹凸ヘラケズリ→付高台	完全実測	2/3残存	8cm
2	土師器	壺	12.3	5.7	3.4	クロロナデ	クロロナデ	底部右側転糸切り	完全実測	2/3残存	0cm
3	土師器	壺	-	7.1	-	クロロナデ	クロロナデ	底部右側転糸切り→付高台	完全実測		
4	土師器	壺	-	6.4	-	クロロナデ 黒色処理	クロロナデ	底部右側転糸切り	完全実測	底部光形	
5	土師器	壺	-	-	-		かご状施釉		拓本		

第41表 H41号住居址出土遺物観察表

(41) H41号住居址 (第61図、写真図版三十二)

本住居址は、調査区中央であるテ-48.49、ト-48.49Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、南側はTa1号竪穴状遺構により削平されている。新旧関係は古い方より、H43.49号住居址→本址→Ta1号竪穴状遺構である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.59m (検出)・西壁3.40m (残存)で、壁高さは西壁で最大20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.84m²を測る。覆土はおむね自然堆積であるが、第2層は焼土ブロックが大量に混入し、樹木の根のように入っていた。床は全体的に硬質であったが、貼床は施されておらず敲き床的な状態であった。

出土遺物は全体に少なかった。1は灰釉陶器碗で、床面より6cmほど浮いた状態で出土した。2/3程が残存しており、釉はハケ塗りである。見込み部は良く磨かれている。釉薬の塗り方や三日月高台の特徴から、光ヶ丘1号窯式～大原2号窯式にあたると考えられる。2は土師器壺であり、床面直上からの出土である。3は土師器碗、4はやや大型であるが土師器壺とした。内面黒色処理されている。5は籠目のついた土師器壺の底部付近である。覆土中からの出土と所産時期は古墳時代と考えられるが、本址に伴うものではないと考えられるが、ここで記載する。

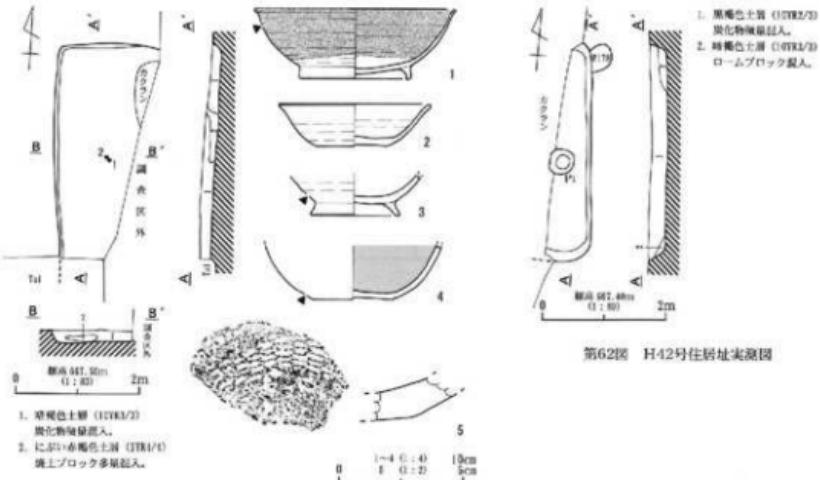
本址これらの出土遺物より、9世紀後半～10世紀前半の所産と考えられる。

(42) H42号住居址 (第62図、写真図版三十二)

本住居址は、調査区北よりであるナ-48.49Grに位置する。残存状態は住居址西側がカクランにより削平されている。遺構の新旧関係は古い方より、D48号土坑→本址→P178である。

形態は不明である。規模は北壁0.22m (残存)・南壁0.60m (残存)・東壁3.37mで、壁高さは南東コーナーで最大26cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.54m²を測る。覆土はおむね自然堆積で2層に分かれる。床は軟質であり、貼床は施されていなかった。ピットは1箇所検出され、規模はP1が径44cm・深さ23cmを測る。

本址からの出土遺物は無く、所産時期は不明である。



第61図H41号住居址及び出土遺物実測図

(43) H43号住居址 (第63・64・65図、写真図版三十二・三十三)

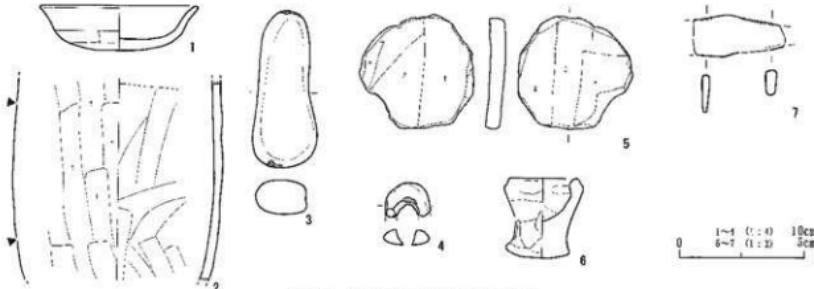
本住居址は、調査区中央であるテ-49、ト-49.50、ナ-49Grに位置する。残存状態は東側1/3が調査区域外となる。重複関係は古い方より、H50号住居址→本址→H41号住居址→Ta1号竪穴状遺構である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央やや東よりに造られていた。規模は北壁5.14m(検出)・南壁3.25m(検出)・西壁5.02mで、壁高さは南西コーナーで最大60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で21.62m²を測る。住居址主軸方位はN-10°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は1~14cmの厚みで貼られていた。壁溝は北壁側と南西コーナーを中心に検出された。規模は幅19~38cm・深さ1~9cmで、断面はU字形を呈する。ピットは掘り方時も含め、7箇所確認された。P1と2は主柱穴、P6は入り口施設関連のピットと考えられる。規模はP1が径47cm・深さ51cm、P2が径71cm・深さ46cm、P3が径46cm・深さ20cm、P4が径28cm・深さ10cm、P5が径40cm・深さ9cm、P6が径84cm・深さ22cm、P7が径50cm・深さ50cmを測る。また、本址はカマド東脇に貯藏穴と考えられる掘り込みが検出された。形態は一段のテラスを持つ方形で、規模は長軸74cm・短軸65cm・深さ42cmを測る。住居址掘り方は、中央部分が一段テラス状に高くなり、段差は6~11cmを測る。

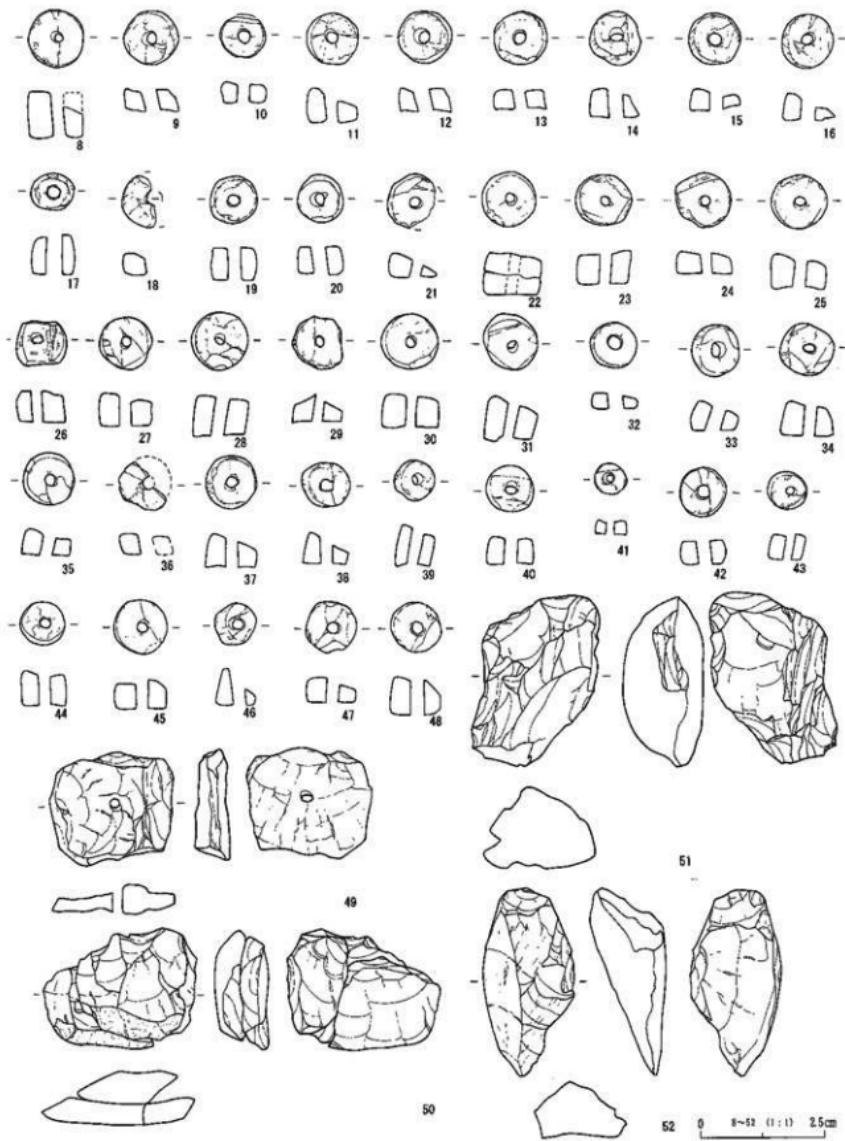
カマドは北壁東よりで検出された。煙道・袖・焚口・火床部が検出され、煙道部先端はII46号住居址に切られていた。煙道部は長く伸びるタイプであり、長さは92cmを測る。袖部は貼床上に黄褐色の粘土により構築されていた。高さは16cmを測る。焚口部は大型の川原石を袖先端部に立てて、構築していた。火床部はよく焼けており焼上は硬質化して、焼上厚みは6cmを測る。また、本址は掘り方検出時に、このカマド西脇に煙道部の掘り込みが検出された。この煙道部跡の前面は、住居址掘り方が一段高くなっていることから、この煙道部が本址の最初のカマド位置であり、図に示したカマド西脇の焼土範囲がその火床部と考えられる。よって本址はカマドの作り替えが行われたと考えられる。

本址からの出土遺物は上器類は少なかったが、滑行の石製模造品が多く出土した。1は土師器坏である。2は土師器壺で覆土中からの出土である。3は敲石で両側の先端に敲き痕が確認できる。4は不明石器で中心部を故意に穿孔していると考えられるが、使用目的は不明である。5は土師器壺片を転用した土製円盤である。6は土製品でいわゆる手捏土器である。小型の白形と考えられる。7は鉄製品で刀子の一部と思われる。8~48は滑石製の臼玉である。41は小型の玉であるが、その他は径が大きいタイプの玉である。21~32の12点は西壁壁溝中よりまとめて出土した。また38~41は掘り方検出時に貼床内より出土した。49は中央部に穿孔があり方形を呈する。有孔円盤と考えられる。50~52は滑石の石核で石製模造品の原材料と考えられる。

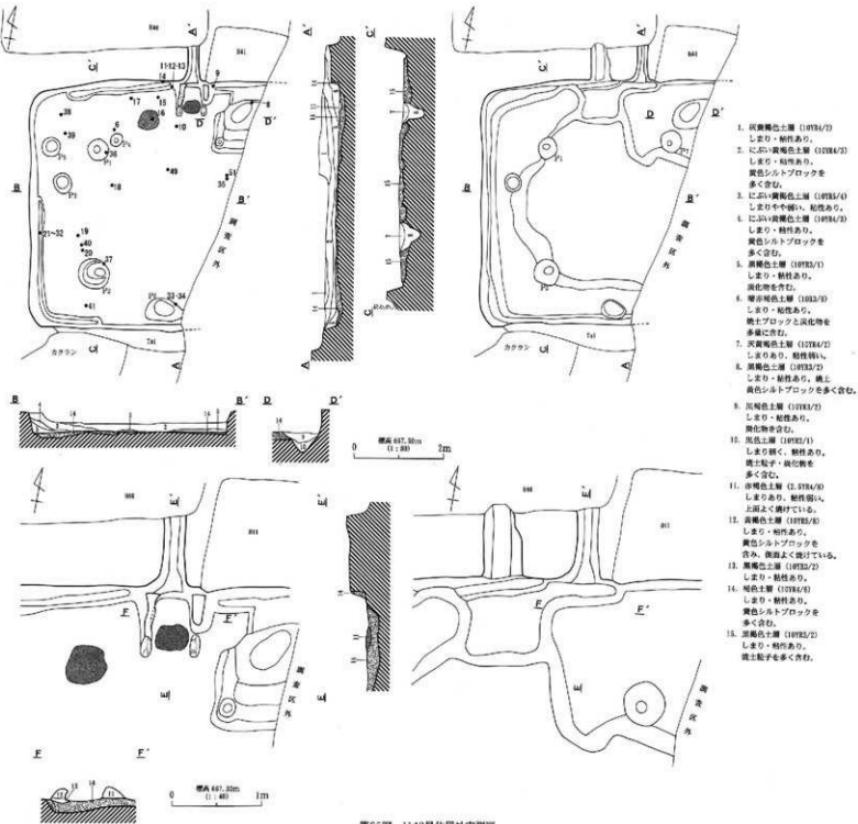
本址からは土器類の出土が少なく所産時期は不確実であるが、1の上器器坏や白玉の大型化等により、6世紀代でも後半の位置づけが考えられる。



第63図 H43号住居址出土遺物実測図



第64图 H43号住居址出土遗物实测图



第65図 1143号住居址実測図

No.	種別	器種	法 規	成形・調整・文様				備 考	出土位置
				内 面		外 面			
1	土師器	鉢	12.6	—	3.6	ナデ	ヘラナデ 口縁ヨコナデ	回転尖端 I/2残存	I 区
2	土師器	甕	—	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転尖端 陶器残存	I 区
5	土製品	円盤	縦4.5 横4.6	0.7	—	ロクロナデ	—	重量:16.23g 土師器便用	IV区
6	土師器	手鉢	3.2	2.5	3.2	ナデ	ナデ	—	0cm
No.	器種	素材	保存率	最大径	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土地點
3	滑石	無定形	完形	12.6	5.2	3.2	296.00	上・下端部に敲打痕	II 区
4	不明	凝灰岩	—	(2.8)	(3.7)	(1.3)	(13.00)	下半分欠損	IV区
7	刀丁	鉛	—	(3.7)	1.7	(0.6)	—	—	I 区
8	白玉	滑石	—	0.94	1.09	0.21	1.81	—	13cm
9	白玉	滑石	完形	0.45	1.05	0.28	0.82	—	0cm
10	白玉	滑石	—	0.44	0.90	0.27	0.51	—	0cm
11	白玉	滑石	完形	0.71	1.03	0.22	1.01	—	8.5cm
12	白玉	滑石	完形	0.48	1.04	0.30	0.52	—	8.5cm
13	白玉	滑石	完形	0.39	1.07	0.25	0.70	—	8.5cm
14	白玉	滑石	完形	0.58	1.04	0.26	0.90	—	8cm
15	白玉	滑石	完形	0.43	1.00	0.26	0.58	—	3cm
16	白玉	滑石	完形	0.54	1.06	0.24	0.83	—	1.5cm
17	白玉	滑石	完形	0.80	0.85	0.30	0.85	—	12cm
18	白玉	滑石	—	0.44	—	—	0.43	—	0cm
19	白玉	滑石	完形	0.67	0.96	0.27	1.00	—	0cm
20	白玉	滑石	完形	0.60	0.92	0.30	0.80	—	0cm
21	白玉	滑石	—	0.50	(1.08)	0.22	0.58	—	4cm
22	白玉	滑石	完形	0.85	1.07	0.22	1.69	—	4cm
23	白玉	滑石	完形	0.70	1.08	0.22	1.41	—	4cm
24	白玉	滑石	完形	0.46	1.10	0.22	0.88	—	4cm
25	白玉	滑石	完形	0.72	1.10	0.23	1.29	—	4cm
26	白玉	滑石	完形	0.64	1.00	0.22	1.07	—	4cm
27	白玉	滑石	完形	0.65	1.07	0.23	1.22	—	4cm
28	白玉	滑石	完形	0.81	1.12	0.27	1.60	—	4cm
29	白玉	滑石	完形	0.54	1.06	0.23	0.71	—	4cm
30	白玉	滑石	完形	0.68	1.12	0.23	1.47	—	4cm
31	白玉	滑石	完形	0.89	1.10	0.25	1.47	—	4cm
32	白玉	滑石	完形	0.33	0.92	0.29	0.38	—	4cm
33	白玉	滑石	完形	0.60	1.00	0.32	0.79	—	-16.5cm P6
34	白玉	滑石	完形	0.71	1.05	0.26	1.18	—	-16.5cm P6
35	白玉	滑石	完形	0.52	1.00	0.28	0.77	—	14cm
36	白玉	滑石	—	0.40	—	—	0.30	—	0cm
37	白玉	滑石	完形	0.69	1.05	0.27	1.08	—	0cm
38	白玉	滑石	完形	0.63	0.92	0.26	0.59	—	-2.5cm
39	白玉	滑石	完形	0.82	0.80	0.24	0.53	—	-11cm
40	白玉	滑石	完形	0.56	0.95	0.30	0.74	—	-16cm
41	白玉	滑石	完形	0.30	0.63	0.19	0.18	—	-12cm
42	白玉	滑石	完形	0.48	0.95	0.29	0.63	—	III区中層
43	白玉	滑石	完形	0.51	0.75	0.20	0.53	—	III区下層
44	白玉	滑石	完形	0.72	0.89	0.24	0.90	—	IV区下層
45	白玉	滑石	完形	0.59	1.10	0.22	1.20	—	IV区上層
46	白玉	滑石	完形	0.77	0.78	0.24	0.56	—	IV区下層
47	白玉	滑石	完形	0.51	1.03	0.23	0.73	—	下層
48	白玉	滑石	完形	0.78	1.02	0.27	1.26	—	—
49	石製機造器	滑石	—	2.3	2.5	0.7	4.05	孔径:0.3cm	2cm
50	石鏡	滑石	—	2.4	3.0	1.1	8.79	—	IV区 P1
51	石核	滑石	—	3.4	2.6	1.6	15.11	—	0cm
52	石核	滑石	—	3.8	1.8	1.5	8.63	—	IV区

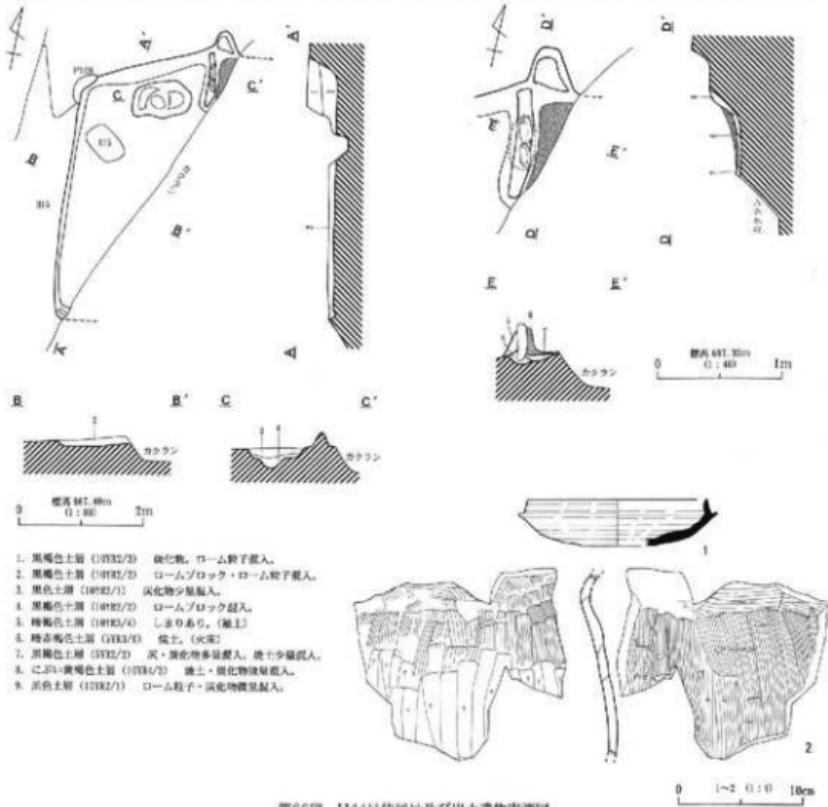
第42表 H43号住居址出土遺物観察表

(44) H44号住居址 (第66図、写真図版三十三)

本住居址は、調査区中央である二-47.48、又-47.48Grに位置する。残存状態は住居址東側がカクランにより壊されている。重複関係は古い方よりH47号住居址→本址→H15号住居址→P168である。

形態は方形を呈すると考えられるが、北壁と西壁の角度が開いており、住居址全体では五角形のような状況になる可能性がある。カマド北壁中央に造られていた。規模は北壁2.50m(残存)・南壁0.10m(残存)・西壁3.66mで、壁高さは北西コーナーで最大50cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.84m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床は軟質であり、地山を直に使う「敲き床」のような状態であった。壁溝は住居址南西コーナーで検出された。規模は幅15~20cm・深さ3cmを測る。また、本址からはカマド西脇に貯蔵穴と考えられる土坑が確認された。規模は長軸94cm・短軸60cm・深さ37cmを測る。中央部が一段低くなる掘り方であった。

カマドは北壁中央部に造られていたが、東側はカクランにより削平されており、煙道部と左袖の検出のみであった。煙道部は長く伸びないタイプで、煙道の長さは49cmを測る。袖部は川原石を構築の芯材として、しまりの強い暗褐色土により造られていた。火床部はよく焼けており硬質化していた。



第66図 H44号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は少なかったが、2点を図示した。1は須恵器壊身であり、底部に回転ヘラケズリを施す。返り部は貼付である。特徴からMT15～TK10型式に含まれると考えられる。2は土師器甕であり、内外面にハケ目の残るナデを施す。

本址の所産時期は出土遺物は少なく不確実ではあるが、6世紀代と考えられる。

No.	種別	形種	成形・調整・文様		備考	出土位置
			内面	外面		
1	須恵器	片	14.4 5.8 3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 軸回転ヘラケズリ	回転穴附
2	土師器	甕	- - -	ハケナデ (工具)	ヘラナデ (工具) → ヘラケズリ	破片実物

第43表 H44号住居址出土遺物観察表

(45) H45号住居址 (第67-68図、写真図版三十四)

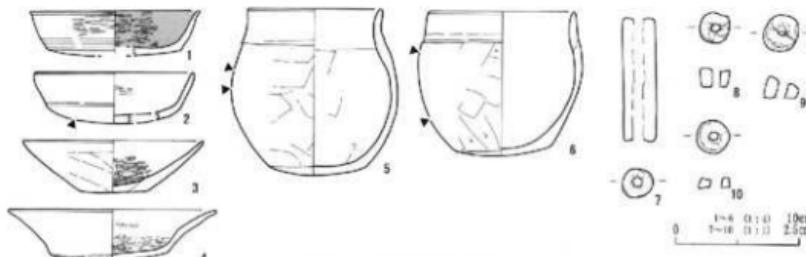
本住居址は、調査区中央であるテ-45.46、ト-45.46Grに位置する。残存状態は東壁側が調査区域外となり、住居址全体の2/3ほどの検出に止まった。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁4.61m(検出)、南壁3.03m(検出)、西壁4.73m(残存) 5.85m(推定)で、壁高さは西壁南より最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で23.41m²を測る。覆土はおおむね自然堆積の單層である。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、貼床の厚みは2~13cmを測る。壁溝は北壁と西壁の一部、及び南壁で検出された。規模は幅12~27cm・深さ4~8cmで、断面はU字形を呈する。また、P2とP3からは西壁に向かって間仕切り溝が確認された。ピットは掘り方検出時も含め、10カ所確認された。P2~4と掘り方時に検出されたが、P9が主柱穴。また、P8が入り口施設ピットと考えられる。ピットの規模はP1が径56cm・深さ11cm、P2が径54cm・深さ25cm、P3が径48cm・深さ36cm、P4が径43cm・深さ16cm、P5が径39cm・深さ55cm、P6が径49cm・深さ35cm、P7が径40cm・深さ29cm、P8が径41cm・深さ24cm、P9が径42cm・深さ20cm、P10が径62cm・深さ29cmを測る。またカマド東脇から貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。規模は長軸68cm・短軸64cm・深さ10cmを測る。住居址掘り方は南側が一段高く掘られており、P7の部分に段差が見られた。この事からP6をP3に対応する主柱穴、P7が入り口施設のピットと仮定すると、本址は南側への拡張が推定でき、拡張後の主柱穴としてP2とP6とP9が対応すると考えられる。

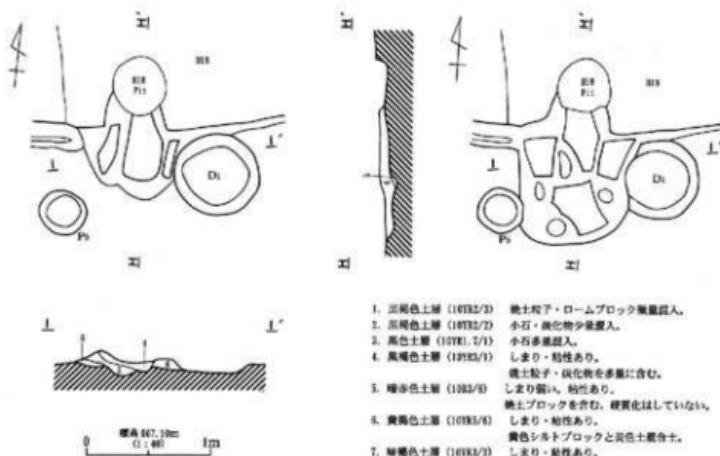
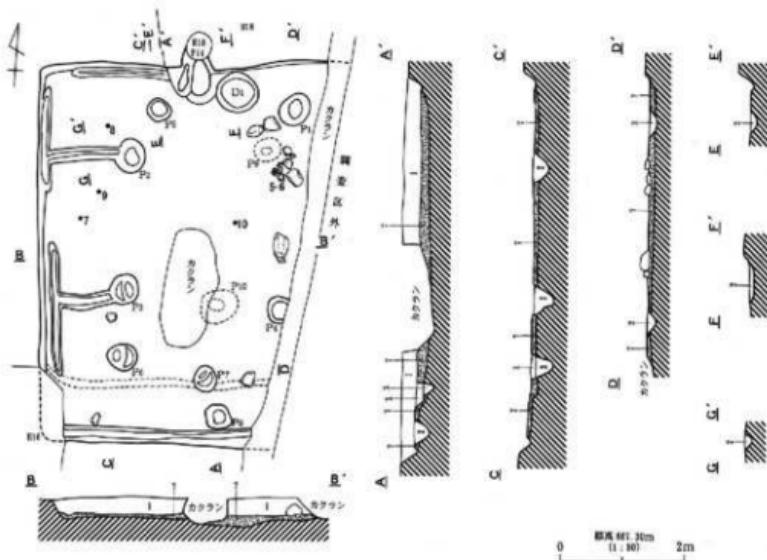
本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部はH18号住居址のピットによって削平されていたが、煙道が伸びないタイプと考えられる。袖は黄褐色土で構築されており、顯著な火床部は確認されなかった。

本址からの出土遺物は覆土中からが多かった。1~4は土師器壊である。1は内面黒色処理されている。5と6は土師器の短頸の小型甕である。7は滑石製の管玉で、床面より19cm浮いた状態で出土した。8~10は白玉で、9と10はほぼ床面上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より6世紀後半の所産時期と考えられる。



第67図 H45号住居址出土遺物実測図



第68図 1145号住居実測図

1. 淡褐色土層 (10YR2/3) 土質粘子・ロームブロック微量混入。
小石・鐵化物少量混入。
2. 深褐色土層 (10YR2/2) 小石多量混入。
3. 黑色土層 (10YR1/1) しまり・粘性あり。
4. 黑褐色土層 (10YR2/1) 土質粘子・鐵化物を多量に含む。
しまり弱い。粉性あり。
5. 紫赤色土層 (10R3/3) 地上ブロックを含む。硬塑化はしていない。
6. 黄褐色土層 (10YR3/6) しまり・粘性あり。
7. 紅褐色土層 (10YR3/3) 黄色シルトブロックと黃色土混合土。
しまり・粘性あり。

No.	種別	器種	法量		成形・調飾・文様			備考	出土位置
			内	外	内	外	内		
1	土師器	坪	13.6	10.8 (3.6)	ミガキ→黒色處理	ミガキ	底面付近不明	回転実測	Ⅲ区
2	土師器	坪	12.9	10.9 (4.0)	ミガキ?	跡面焼れていて不明		回転実測	Ⅱ・Ⅲ区
3	土師器	坪	14.5	5.4 (4.2)	ミガキ?	ヘラケズリ		回転実測	P6
4	土師器	坪	16.7	9.4 (4.2)	口縁ヨコナデ みこみ部ヘラナデ→ミガキ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ→ミガキ?	完全実測 内面擦耗	P5	
5	土師器	便	10.9	7.7 (3.2)	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測	1cm Ⅰ区	
6	土師器	便	11.9	7.7 (3.5)	口縁ヨコナデ ヘラナデ	口縁ヨコナデ ヘラケズリ	完全実測	1cm Ⅰ区	
No.	種別	器種	素 材	残存率	最大径	最大幅	最 大	所 見	出土地質
7	雪玉	滑石	完形	2.50	0.60	0.20	1.67		18.5cm
8	臼玉	滑石	完形	0.40	0.60	0.17	0.21		22cm
9	臼玉	滑石	完形	0.45	0.70	0.19	0.34		15cm
10	臼玉	滑石	完形	0.20	0.65	0.18	0.15		0cm

第44表 H45号住居址出土遺物観察表

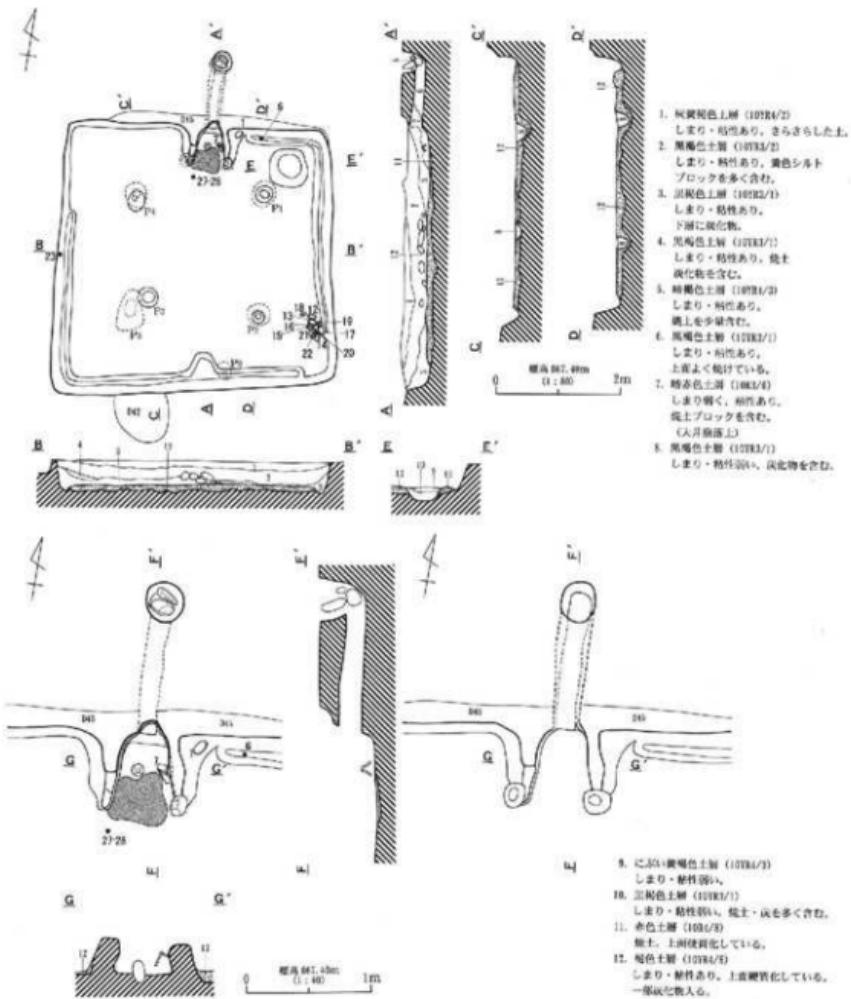
(46) H46号住居址 (第69-70図, 写真図版三十六・三十七)

本住居址は、調査区中央であるト-48.49、ナ-48.49Grに位置する。残存状態は良好である。重複関係は古い方より、H50号住居址→H49号住居址→本址→D45号土坑である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央に確認された。規模は北壁4.10m、南壁4.40m、西壁4.26m、東壁3.90mで、壁高さは南西コーナーで最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は17.46m²を測る。住居址の主軸方位はN-9°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積であるが、床面上に拳大から人頭大の河原礫が検出された(写真図版三十七参照)。これらの礫は床面上より僅かに浮いた状態で、特に住居址中央部からまとまって出土した。床は全体的に硬質であり、カマド前面にかけては特に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~16cmで貼られていた。壁溝は東壁と北壁東側と南壁と西壁南側の一部に検出された。規模は幅19~32cm・深さ2~10cmを測る。断面はU字形である。ピットは6カ所確認された。P1~4が主柱穴、掘り方時の検出であるがP6

No.	種別	器種	法量		成形・調飾・文様			備考	出土位置
			内	外	内	外	内		
1	土師器	坪	13.3	11.9 (2.7)	ナデ	ヨコナデ	底部ヘラケズリ→ナデ	完全実測 完形	0cm
2	土師器	坪	13.2	13.3 (5.4)	ミガキ→ 黒色處理	口縁ミガキ	底面ヘラケズリ	完全実測 1/5残存	Ⅰ底ホリ方
3	土師器	鉢	9.6	5.4 (6.0)	ヘラナデ	ハケナデ	ヘラケズリ	回転実測 1/4残存	Ⅱ底ホリ方
4	土師器	鉢	-	12.6	-	ヘラナデ	ヘラナデ	回転実測 鉢脚1/4残存	Ⅱ区
5	土師器	鉢	16.4	-	ミガキ→ 黑色處理	口縁ミガキ	体部ヘラナデ	回転実測 1/3残存	Ⅰ区
6	土師器	便	13.9	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヨコヨコナデ	完全実測 1/5残存	6cm Ⅳ区ホリ方
7	土師器	便	18.7	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測 1/3残/4残存	7cm カマド
8	土師器	便	23.6	5.7 (37.2)	ヘラナデ	ヘラケズリ		完全実測 1/3残存	カマド 2段
9	土師器	便	-	5.4	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部完形	Ⅰ区
10	土師器	便	-	5.2	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部2/3残存	IV底ホリ方
11	土師器	便	-	8.7	-	ヘラナデ→ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	完全実測 底部4/5残存	IV区ホリ方
23	上質品	筋織糸	4.2	0.6 (2.4)	-	ミガキ		重量30.89g	0cm
No.	種別	器種	素 材	残存率	最大長	最大幅	最 大	所 見	出土地質
12	織物物	ホルソニルス	完形	13.3	0.4	0.5	600.00	上・下端部に浅い縫打痕	2cm
13	織物物	角四石安山岩	完形	13.0	9.2	4.3	650.00		2.5cm
14	織物物	かんらん岩	完形	12.6	6.6	4.3	480.00	下端部に縫打痕	7cm
15	織物物	帶状麻灰岩	完形	11.8	6.9	4.8	530.00	正面にすり面	2.5cm
16	織物物	安山岩	完形	12.8	5.6	4.2	390.00		3cm
17	織物物	帶状麻灰岩	完形	14.2	7.0	5.2	550.00	上・下端部に縫打痕	3cm
18	織物物	安山岩	(12.3)	(4.8)	(3.1)	(302.00)	下部欠損 上端部に浅い縫打痕	1cm	
19	織物物	安山岩	-	(8.7)	(7.3)	(5.4)	(480.00)	上部に縫打による剥離 下部欠損(欠損後も縫打有り)	3cm
20	織物物	輝石安山岩	完形	9.6	6.2	4.7	400.00		2.5cm
21	織物物	輝石安山岩	完形	9.8	8.0	3.5	430.00	正面にすり面	2.5cm
22	織物物	輝石安山岩	完形	8.2	5.7	2.3	178.00	正面中央にすり面	2cm
24	堅石	滑石	-	2.4	1.7	0.5	3.12		2.5cm
25	臼玉	滑石	完形	0.68	0.83	0.24	0.64		Ⅱ区中層
26	臼玉	滑石	完形	0.52	1.04	0.27	0.84		Ⅱ区下層
27	臼玉	滑石	完形	0.52	1.42	0.30	1.75		0cm
28	臼玉	滑石	完形	0.80	1.42	0.30	2.27		0cm

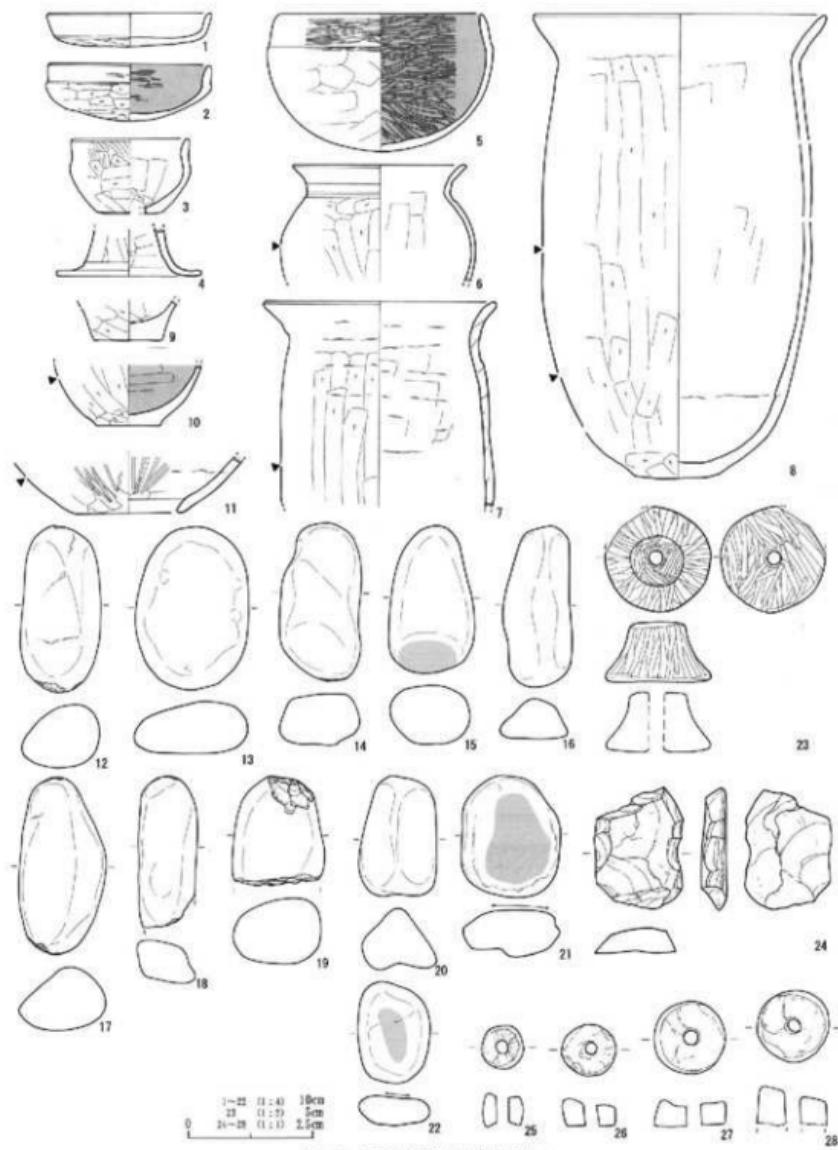
第45表 H46号住居址出土遺物観察表



第69図 1146号住居址実測図

が入り口施設のピットと考えられる。各ピットの規模はP1が径28cm・深さ20cm、P2が径20cm・深さ21cm、P3が径32cm・深さ10cm、P4が径32cm・深さ22cm、P5が径68cm・深さ20cm、P6が径28cm・深さ25cmを測る。また、本址はカマド東脇に貯蔵穴が確認された。規模は径60cm・深さ22cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。残存状況は良好であり、煙道部が潰れずにトンネル状になつて検出された。煙道部は長く伸びるタイプで、規模は長さ130cm・高さ18cmを測る。煙道部先端

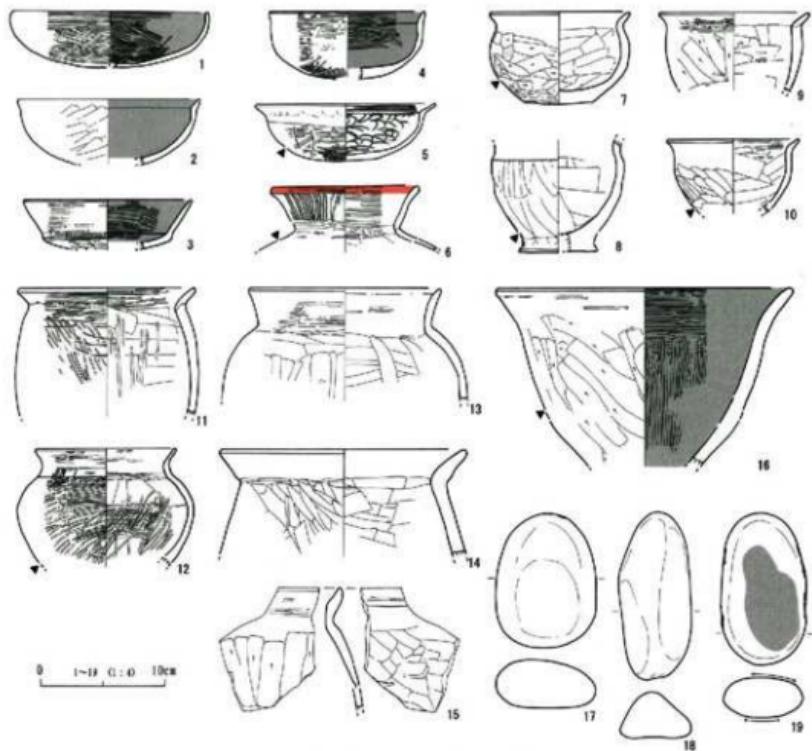


第70图 H146号住居址出土遗物实测图

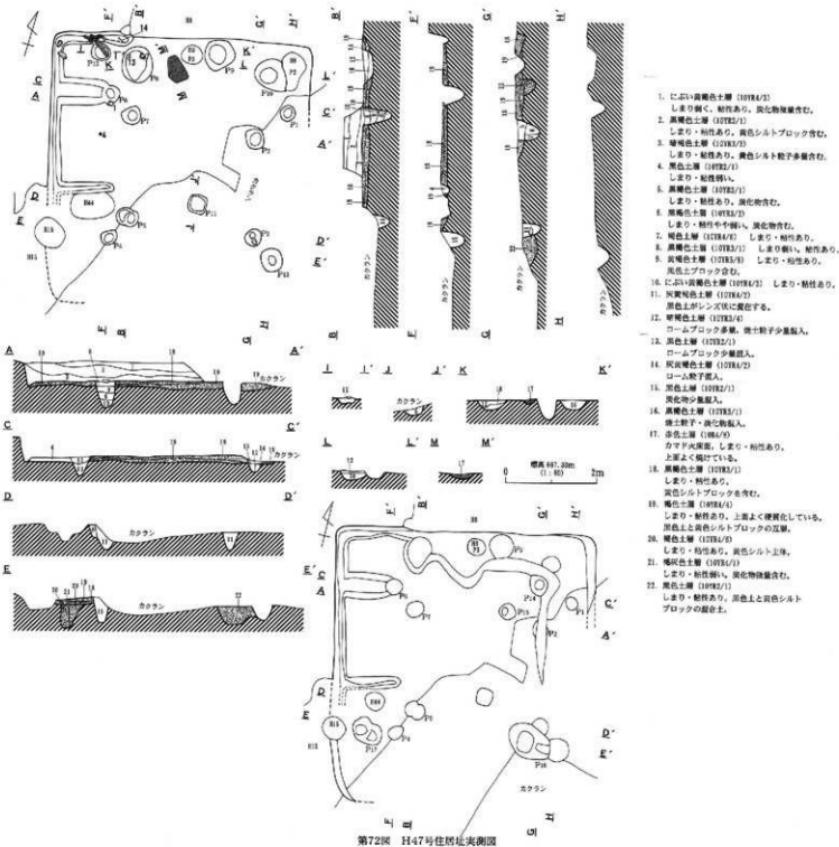
はH27号住居址と同じくピットが掘られており、川原石3点が出土した。ピットの規模は径32cm・深さ38cmを測る。また、煙道部の天井部は焚口部分のみ良く焼けており、煙道先端や側面は焼土化していないかった。袖部分は地山削りだしで造られており、高さの残存値は29cmを測る。焚口部は精円の川原石を門構え状に構築していた。火床部は良く焼けており硬質化し、焼土の厚みは3cmを測る。

本址からの出土遺物はカマド及び掘り方からが多く、図示した土器類の多くが掘り方内より出土した物である。1と2は土師器壊であり、2は内面が黒色処理されている。3は土師器鉢である。4は土師器高杯脚である。5は土師器の大型の鉢で、内面が黒色処理されている。6～10は土師器の甕類で、6は口縁部が有段状になっている。11は土師器甕の孔部分である。12～22は編み物石と考えられ、住居址南東コーナー付近からまとめて出土した。上下先端に敲打或いは磨り面が存在するものがある。23は土製の紡錘車であり、ほぼ完形である。表面よく磨かれている。24は滑石製品の未製品か原石と考えられるが、一部に加工痕がある。25～28は白玉であり、27・28はやや大型品でカマド前面の床面上から出土した。

本址は図示した出土遺物の年代感より、所産時期は6世紀後半から7世紀前半と考えられる。



第71図 H47号住居址出土遺物実測図



第72図 H47号住居跡実測図

(47) H47号住居址 (第71-72図、写真図版三十四・三十五)

本住居址は、調査区中央であるナ-47、ニ-46.47.48、ヌ-46.47.48Grに位置する。残存状態は南東コーナー側がカクランにより削平されている。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁5.53m・西壁5.91m(掘り方)・東壁1.64m(残存)で、壁高さは西壁中央で最大50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は掘り方検出部分で23.13m²を測る。住居址の主軸方位はN-15°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であり、特に中央部分にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、2面の床が確認できた。厚みは2~25cmで貼られていた。壁溝は西壁側で確認され、2箇所で間仕切り溝も検出された。壁溝の規模は幅22~61cm・深さ4~11cmを測る。ピットは掘り方時も含め、17カ所確認された。規模はP1が径34cm・深さ31cm、P2が径48cm・深さ47cm、P3が径39cm・深さ41cm、P4が径39cm・深さ53cm、P5が径41cm・深さ29cm、P6が径40cm・深さ46cm、P7が径43cm・深さ56cm、P8が径79cm・深さ21cm、P9が径67cm・深さ22cm、P10が径81cm・深さ28cm、P11が径41cm・深さ20cm、P12が径43cm・深さ12cm、P13が径52cm・深さ38cm、P14が径48cm・深さ32cm、P15が径37cm・深さ33cm、P16が径103cm・深さ37cm、P17が径70cm・深さ49cmを測る。主柱穴は2組考えられ、まずP5・P7・P15の組み合わせ、次にP3・P4・P6・P14の組み合わせがある。本址は先に触れたが床が2面確認できた事と、主柱穴が2組確認できることから柱穴の移動に伴う床の張り替えか或いは住居拡張も考えられるが、掘り方時に壁等が広がっている様子は観察できず拡張の確証は得られなかった。住居址の掘り方は中央部が一段高くなり、壁周辺が下がり、7cmの段差が確認された。

本址のカマドは確認されなかつたが、北壁中央より火床部のような焼土範囲が検出できた。北壁側がH8号住居址に削平されていることから、本来はここにカマドが存在したと考えられる。

本址からの出土遺物は比較的多く、ピット内からの出土が多かった。1~5は土師器坏である。いずれもタイプが異なる物で、1は口縁部が内湾するタイプ、2.4.5はいわゆる「内斜口縁坏」と呼ばれるタイプのものである。5は内面に「コ」の字を重ねたような螺旋状の暗文が施されている。3は須恵器模倣タイプの坏で、内面が黒色処理されている。6は壺の口縁部から頸部の部分で、口唇部に僅かに

No.	器種	器種	法面	成形・調整・文様			備考	出土位置	
				内面	外面	裏面			
1	土師器	壺	16.0	—	4.4 ミガキ+黒色處理	ミガキ	回転実測	0cm	
2	土師器	壺	14.5	(5.2)	黒色處理	口縁ヨコナデ→底部ヘナダ	回転実測	P6	
3	土師器	鉢	13.5	5.4 (4.0)	ミガキ+黒色處理	口縁ヨコナデ→底面ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	P2	
4	土師器	壺	12.5	—	5.4 ミガキ+黒色處理	ミガキ	回転実測 外面摩耗	-5.5cm	
5	土師器	壺	14.5	—	4.6 ミガキ(螺旋旋文)	口縁ヨコナデ 体へ底面ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	P8・16	
6	土師器	壺	11.9	(5.3)	脚部ヘナダ→口縁ヨコナデ→口辺一部赤色彩绘	ミガキ→口辺部赤色處理	完全実測	IV区	
7	土師器	鉢	11.3	5.5	7.3 口縁ヨコナデ→脚部へ底面ヘナダ	口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ→底面ヘラケズリ	完全実測	-2cm P8 Ⅲ区	
8	土師器	鉢	—	6.3 (9.0)	口縁ヨコナデ→脚部へ底面ヘナダ	脚部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	P6	
9	土師器	鉢	12.1	—	(6.3) 口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ→ミガキ	口縁ヨコナデ→脚部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測 摩耗	IV区	
10	土師器	鉢	10.7	—	(5.9) 口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ→ミガキ	口縁ヨコナデ→脚部ヘラナダ	回転実測	IV区	
11	土師器	壺	14.3	(10.2)	口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ→ミガキ	口縁ヨコナデ→脚部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	IV区	
12	土師器	壺	11.4	(9.4)	口縁ヨコナデ→脚部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ヨコナデ→脚部ヘラケズリ→ミガキ	回転実測	P7-1	
13	土師器	壺	15.4	(9.1)	口縁ヨコナデ→ミガキ→脚部ヘナダ	口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ→ミガキ	回転実測	-8cm P8	
14	土師器	壺	20.0	—	(8.6) 口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ	口縁ヘラナダ→脚部ヘナダ	回転実測	-2cm 壁溝	
15	土師器	壺	—	—	口縁ヨコナデ→脚部ヘナダ	口縁ヨコナデ→脚部ヘラケズリ→一帯ミガキ	板片実測	Ⅲ・IV区	
16	土師器	鉢	23.9	—	(14.3) ミガキ+黒色處理	口縁ヨコナデ→脚部ヘラケズリ→一帯ミガキ	回転実測	II・III区	
No.	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	量	所見	出土位置
17	礫み物石	麻石安山岩	完形	10.7	8.0	3.8	500.00	上端部に敲打痕	P7-1
18	礫み物石	麻石安山岩	完形	13.3	5.9	3.9	390.00		P7-2
19	礫み物石	麻石安山岩	完形	12.1	5.9	3.3	460.00	正・裏にすり面 背側に研磨様の使用痕	P7-3

第46表 H47号住居址出土上遺物觀察表

赤彩の跡が残る。7~10・16は土師器の鉢とした。11~15は土師器の甕の破片で、12は良くミガキが施されており壺とすべきか。17~19は編み物石でP7からまとまって出土した。19は表裏に磨り面、側面に擦痕のような傷がある。

本址はこれらの出土遺物より、5世紀後半から6世紀初頭に位置づけられる。

(48) H48号住居址 (第73図、写真図版三十八)

本住居址は、調査区中央であるト-47.48Grに位置する。残存状態は東側が調査区外となる為、住居址北西コーナー及び南西コーナーのみの検出にとどまった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.65m(検出)・南壁0.30m(検出)・西壁4.97mで、壁高さは西壁北よりで最大42cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.69m²を測る。覆上はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3~14cmで貼られていた。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径62cm・深さ10cm、P2が径50cm・深さ51cmを測る。

出土遺物は検出された面積からすると多く、特に北西コーナー付近の床面上からは図示した遺物が多く出土した。1は灰釉陶器の碗であり、釉はハケ塗りと考えられる。2~4は須恵器壺で、いずれも右回転の糸切り離しを行う。5~7は内面黒色処理した土師器壺である。8~10は内面黒色処理を施した土師器碗である。11は土師器の大型高杯脚と考えられる。脚部には3箇所の穿孔があり、孔の形は円形にC字がついたような異形である。12は土師器高杯の脚部で、形態より古墳時代の高杯と考えられ混入品である。13は土師器甕で、頸部がコの字状を呈するいわゆる「武藏甕」である。14は大型の砥石で西壁に沿うように出土した。15は敲打と磨り面が確認される河原礫で、カマドの構築材とも考えられる。17は臼玉で覆上中の出土である。

本址の所産時期はこれらの出土遺物より、9世紀後半と考えられる。

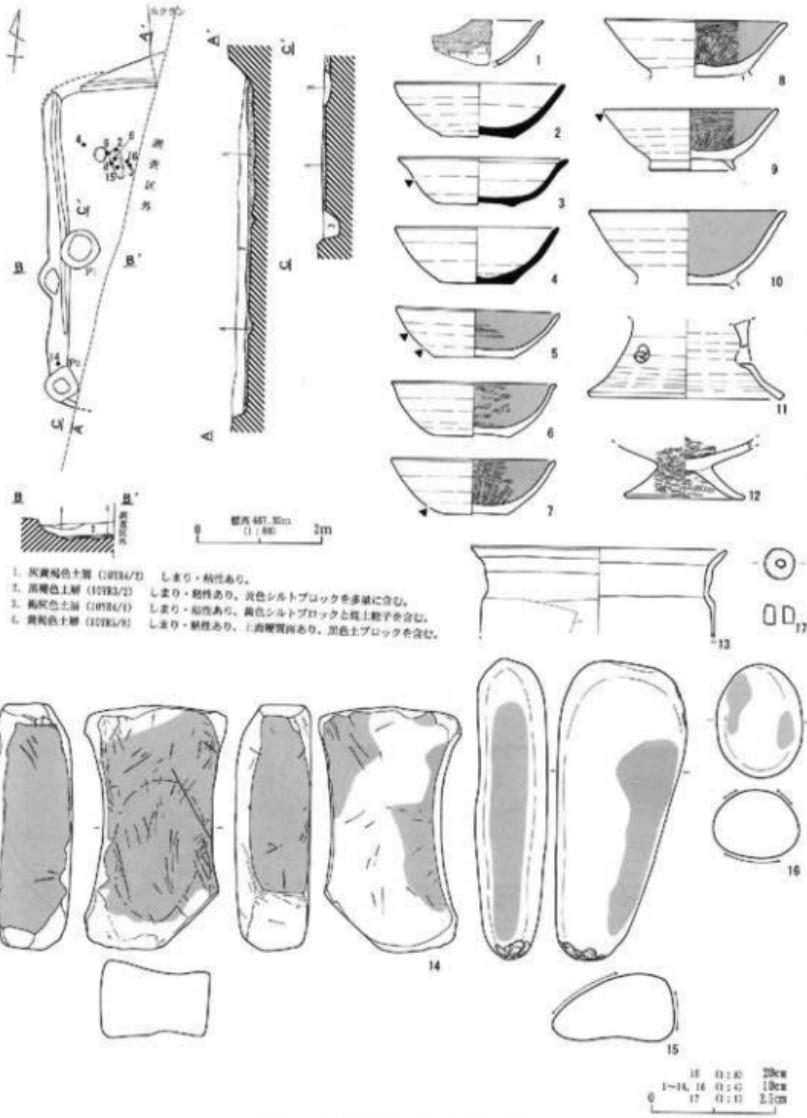
No.	種別	器種	法量 (容積) 内(外) 容積(m ³)	成形・表面・文様		備考	出土位置	
				内面	外面			
1	灰釉陶器	碗	—	(3.6)	内面無施釉 ハケ塗?	内クレーラー・底施釉 ハケ塗?	破片(裏面) 窓～口縁部 1区	
2	須恵器	壺	1.37	5.9 4.2	ロクロナギ	ロクロナギ 黒漆面回転糸切り	PS全表面 口縁～瓶欠損 8cm	
3	須恵器	壺	1.37	6.6 3.7	ロクロナギ	ロクロナギ 黑漆面回転糸切り	PS全表面 1/3残存 12cm	
4	須恵器	壺	1.37	6.0 4.5	ロクロナギ	ロクロナギ 須恵器回転糸切り	PS全表面 1/4～1/5欠損 6.5cm	
5	土師器	壺	1.32	6.4 3.8	ミガキ・黒色處理	ロクロナギ 黑漆面回転糸切り	PS全表面 2/3残存 11cm	
6	土師器	壺	1.32	6.2 4.3	ミガキ・黒色處理	ロクロナギ 黑漆面回転糸切り	PS全表面 ほぼ完存 6cm	
7	土師器	壺	1.38	5.7 4.4	ミガキ・黒色處理	ロクロナギ 黑漆面回転糸切り	PS全表面 1/6残存 1区	
8	土師器	碗	1.49	—	(4.6)	ロクロナギ 西日本近畿系ヘラケシリ 底無施釉り・内面白ナゲ	PS全表面 1/1縁～瓶欠損 9cm	
9	土師器	碗	1.42	8.9	6.0	ミガキ・黒色處理	ロクロナギ 実形無切り・口窓台 ナゲ	PS全表面 2/3残存 9cm
10	土師器	甕	15.9	—	(6.9)	ミガキ・黒色處理	ロクロナギ 実形無切り・付窓台 ナゲ	PS全表面 1/4縁部 1区
11	土師器	高杯脚	—	18.9	(0.30)	ロクロナギ	ロクロナギ 上部の孔、竹管で下に外向りあわせられる 庫合3.3所に孔有り	PS全表面 孔の径1.5cm 1区
12	土師器	高杯	—	9.7	(4.9)	ミガキ・素面漆?	ミガキ 漆無跡?	PS全表面 窓～瓶欠損部 11cm
13	土師器	甕	20.6	(7.0)	口縁ヨコナギ・脚部ヘラケシリ	ロクロナギ ヨコナギ・脚部ナギ	PS全表面 窓～瓶欠損部 1区	
%	新材	土	—	—	—	—	所見	出土位置
14	瓦	瓦	—	—	理形状 瓦面に 施大厚	—	—	—
15	磨石?	磨石?	—	—	—	—	—	—
16	磨石	磨石?	—	—	—	—	—	—
17	臼玉	臼玉	—	—	—	—	—	—

第47表 H48号住居址出土遺物観察表

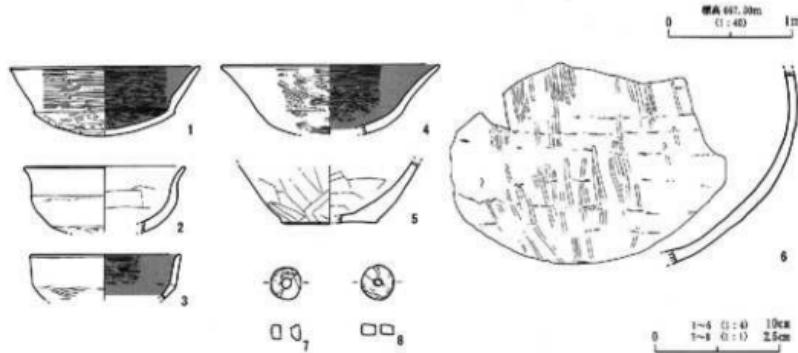
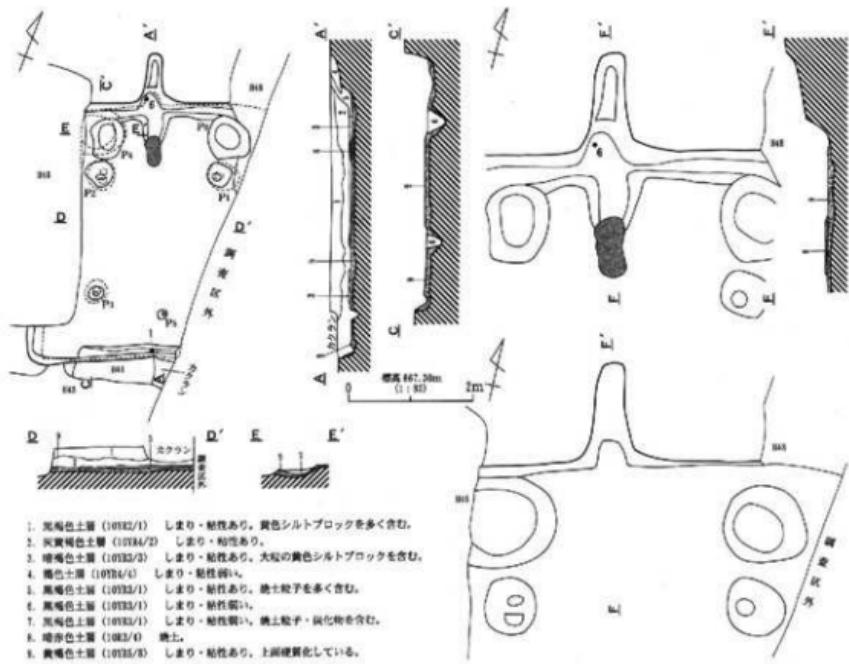
(49) H49号住居址 (第74図、写真図版三十八)

本住居址は、調査区中央であるト-48.49、ト-48.49Grに位置する。残存状態は東側が調査区外、西側がH46号住居址により削平されている。新旧関係は古い方より、本址→H46号住居址→H48号住居址→H41号住居址→D45号土坑である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.39m(残存)・南壁2.42m(検出)・西壁0.54m(残存)で、壁高さはカマド西脇で最大38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は



第73図 H148号住居址及び出土遺物実測図



第74図 H49号住居址及び出土遺物実測図

検出部分で8.94m²を測る。床は全体的に硬質であり、貼り床は1~9cmの厚みで貼られていた。

壁溝は北壁と南壁に巡っていた。規模は幅が18~27cm・深さ2~10cmを測る。ピットは6箇所検出され、P1~P3は主柱穴、P4とP6は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径38cm・深さ32cm、P2が径45cm・深さ30cm、P3が径25cm・深さ26cm、P4が径64cm・深さ15cm、P5が径18cm・深さ13cm、P6が長軸74cm・短軸66cm・深さ48cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られている。煙道部と火床面のみの検出で、袖部は確認されなかった。煙道は長く伸びるタイプで、長さ90cmを測る。火床部上面は良好硬質化しており、焼土の厚みは2cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中からのものが多い。6の土師器壺のみがカマド中から出土した他は、覆土中からの出土である。1~4は土師器壺である。1と3は須恵器蓋模倣タイプの壺であり、いずれも内面黒色処理されていた。5は土師器壺の底部である。7と8は白玉でいずれも覆土中からの出土である。

本址の所産時期は覆土中からの出土遺物が多く、不確実であるが6世紀後半に位置づけられると考える。

No.	種別	器種	法 規 (口徑(高さ)底座(厚さ))	成形・調整・文様			備考	出土位置
				内 面	外 面	圖		
1	土師器	壺	15.4 (11.3)	5.5 (5.3)	ミガキ→黒色処理 口縁ヨコナダ→体部ヘラケツリ→ミガキ	口縁ヨコナダ→底部ヘラケツリ→ミガキ	回転実測	6cm 壁溝
2	土師器	壺	13.0 (11.2)	— (11.3)	ミガキ→黒色処理 口縁ヨコナダ→体部ヘラケツリ	口縁ヨコナダ→底部ヘラケツリ (工具跡)	回転実測	E区
3	土師器	壺	11.2 (17.4)	5.6 (5.0)	ミガキ→黒色処理 口縁ヨコナダ→底部ヘラケツリ→ミガキ	口縁ヨコナダ→底部ヘラケツリ→ミガキ	回転実測	IV区
4	土師器	壺	— (7.8)	— (5.0)	ヘラケツリ	口縁ヨコナダ→底部ヘラケツリ→ミガキ	回転実測	I区
5	土師器	蓋	— (—)	— (—)	ヘラケツリ	口縁ヘラケツリ→底部ヘラケツリ	回転実測	IV区
6	土師器	壺	— (—)	— (—)	ミガキ	ヘラケツリ→ミガキ	鏡行実測	0cm カマド
No.	器種	素材	西平手 赤土	最高径 最大幅 最大幅 最高径 底座 底座	最大幅 最大幅 最大幅 最高径 底座 底座	厚さ 厚さ 厚さ 厚さ 厚さ 厚さ	所見	出土位置
7	臼玉	滑石	青石	0.30	0.60	0.22	0.18	II区
8	臼玉	滑石	青石	0.20	0.65	0.15	0.18	IV区

第48表 H49号住居址出土遺物観察表

(50) H50号住居址 (第75図、写真図版三十八)

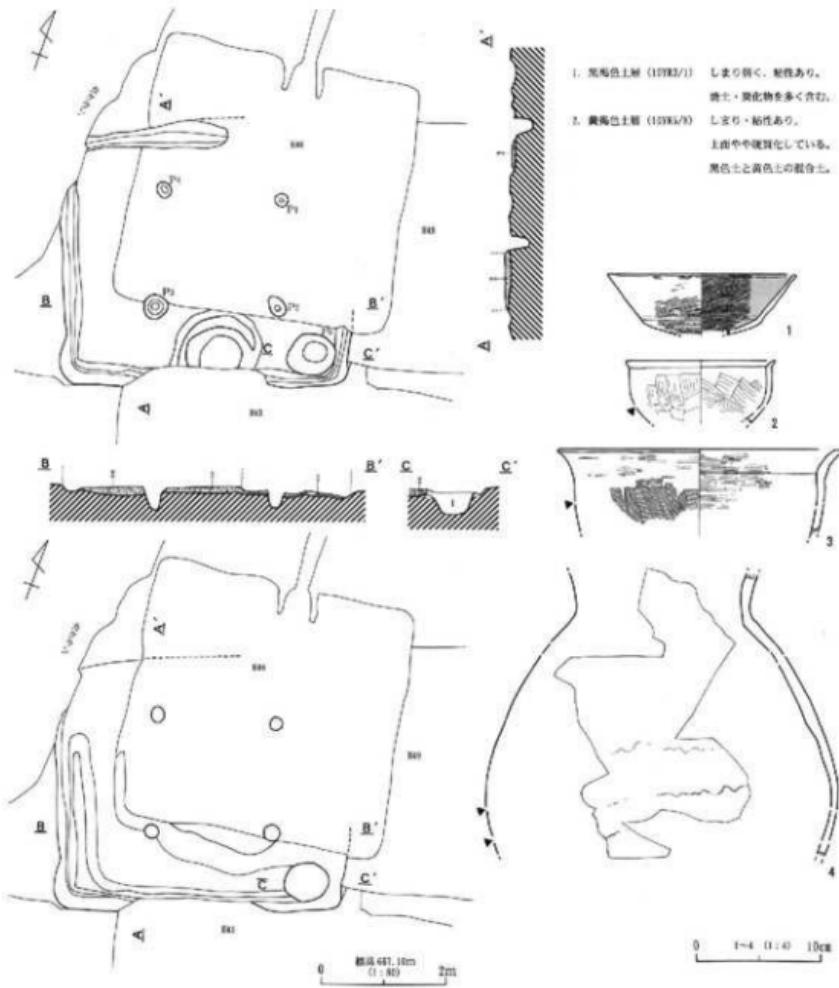
本住居址は、調査区南端であるト-48.49、ナ-48.49Grに位置する。残存状態は重複する住居址群とカクランにより、覆土のほとんどと北東コーナーは検出できなかった。重複関係は古い方より、本址→H43.49号住居址→H46号住居址→D 20.45号土坑→P178である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.30m (残存)・南壁4.52m・東壁0.75m (残存)・西壁3.19m (残存)で、壁高さは南西コーナーで46cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.67m²を測る。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~13cmで貼られていた。壁溝は検出された壁全体に巡るように検出され、規模は幅13~44cm・深さ2~11cmを測る。ピットは5カ所確認された。P1~P4は主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径21cm・深さ34cm、P2が径35cm・深さ29cm、P3が径39cm・深さ36cm、P4が径27cm・深さ36cm、P5が径78cm・深さ45cmを測る。また、南壁の入り口部分と考えられる床面上には円形の周堤帯のような盛り上がりが検出され、段差は8cmを測る。この堤の上部は硬質化していた。住居址掘り方は中央部が一段高く、壁際が低くなる掘り方であった。

本址からの出土遺物は覆土中から少量出土した。1と2は土師器壺であり、1は口縁部が大きく外反するタイプの壺で、内面黒色処理が施されている。2はいわゆる内斜口縁壺であり、体部外面は粗い

No.	種別	器種	法 規 (口徑(高さ)底座(厚さ))	成形・調整・文様			備考	出土位置
				内 面	外 面	圖		
1	土師器	壺	15.2 (9.5) (4.9)	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナダ→底部ヘラケツリ→ヘラケツリ→ミガキ	回転実測 麻耗	野路(?)	
2	土師器	壺	12.0 (5.0)	ミガキ→黒色処理	口縁ヨコナダ→体部ヘラケツリ	回転実測		
3	土師器	壺	22.8 (7.1)	ミガキ	口縁ヨコナダ→	回転実測		
4	土師器	蓋	— (—)	— (—)	ヘラケツリ	口縁ヨコナダ 体部ヘラケツリ 残割(?)	回転実測	

第49表 H50号住居址出土遺物観察表



第75図 H50号住居址及び出土遺物実測図

ナデが施されている。3は大型の鉢である。内面に丁寧なミガキが施されている。4は土師器の壺か或いは胸張甕である。外面に橙色の塗彩が行われているようであるが、不確実である。

本址は出土遺物も少なく不確実であるが、図示した遺物などから5世紀後半に位置づけられると考える。

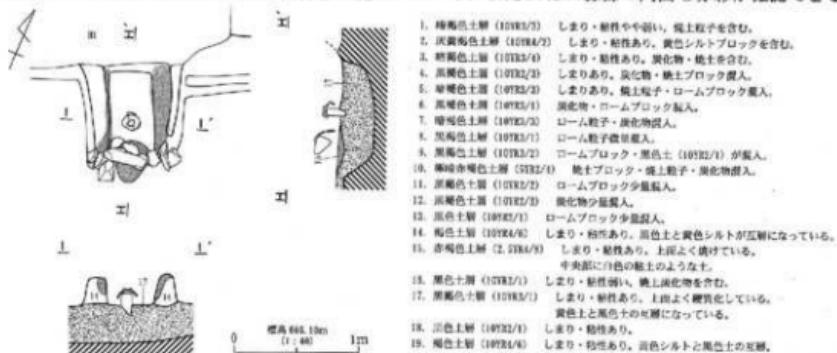
(51) H51号住居址 (第76~79図、写真図版四十・四十一)

本住居址は、調査区北側であるチ-28.29、ツ-27.28.29、テ-28Grに位置する。残存状態は北壁がH1号住居址に、南西側がH3号住居址によって削平されている。重複関係は本址が一番古い。

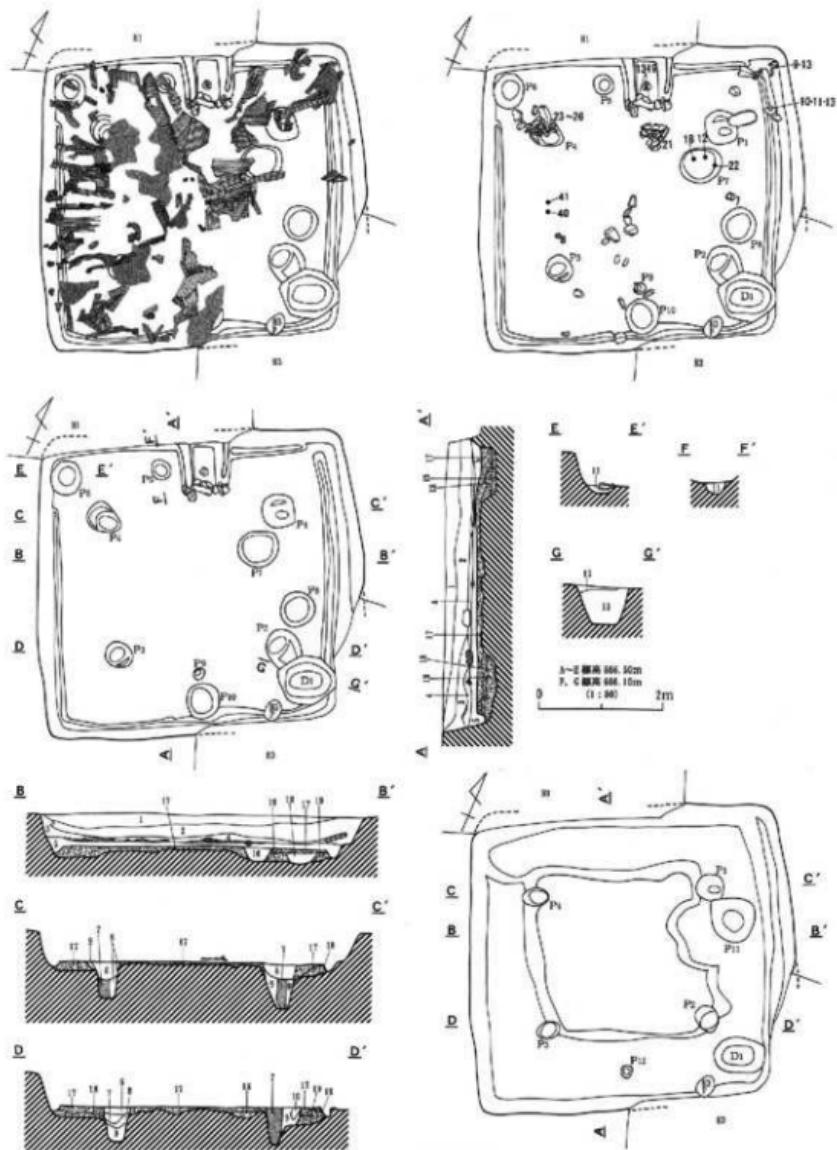
形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁4.76m・南壁4.47m・西壁4.42m・東壁4.36mで、壁高さは南壁中央で最大58cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-22°-Wを示す。住居址の床面積は20.14m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で5層に分かれるが、4層と5層の間に多量の炭化材と焼土が検出された（写真図版四十一参照）。これら炭化材は床面より浮いた状態であったが、焼上は炭化材の上にかかるように検出され、尚かつ被熱していることから、当初屋根上を覆ういわゆる「土屋根」の痕跡とも考えたが、床面との間に間層を持つことから、住居廃絶後に屋根材が崩落、土が覆ったところで床材を火により消却した可能性もある。床は全体的に硬質で、カマド前面と住居址中央部分は特に硬かった。貼床は全体に8~31cmの厚さで貼られていた。壁溝は東壁・南壁・西壁と北壁の一部分に検出された。断面形はU字形で、幅は約16~39cm・深さ2~15cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め、12カ所確認された。P1~4が主柱穴、P10が入り口施設ピットと考えられる。規模はP1が径54cm・深さ68cm、P2が径57cm・深さ60cm、P3が径44cm・深さ55cm、P4が径56cm・深さ60cm、P5が径33cm・深さ22cm、P6が径55cm・深さ14cm、P7が径66cm・深さ31cm、P8が径57cm・深さ22cm、P9が径20cm・深さ19cm、P10が径56cm・深さ17cm、P11が径81cm・深さ12cm、P12が径20cm・深さ26cmを測る。また本址は住居址南東コーナーに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。形態は梢円形で、規模は長軸93cm・短軸77cm・深さ66cmを測る。住居址掘り方は中央部が一段高くなる掘り方で、特にカマド側の北壁寄りは深かった。段差は最大22cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は煙道部をH1号住居址によって削平されている他は良好である。袖部は最大26cmの高さがあり、貼床の上に褐色土で構築されていた。焚口部は川原石によって門構え状に造られており、天井石が崩落した状態で出土した。また、燃焼部の中央には支脚石が検出され、石上部には土師器壺が載せられていた。火床部は良く焼けしており、焼土の厚みは4cmを測る。

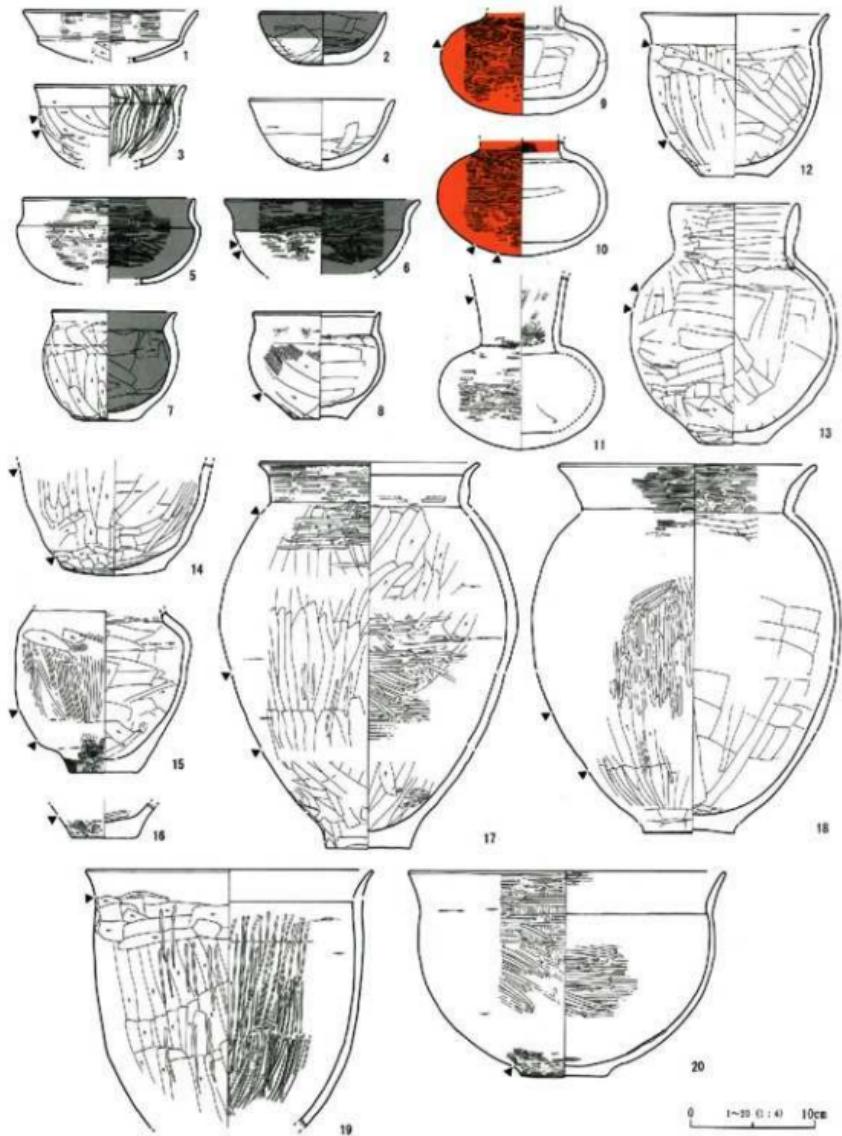
出土遺物は覆土中やカマド、床面上から多く出土したが、床面直上といえるものは21の大型壺と2点の臼玉のみで、その他の物は4~6cm浮いた状態で出土している。1~6は土師器壺であるが、5と6はやや口径が大きくなり鉢とした方が良いかもしれない。1は須恵器壺蓋模倣タイプで、3は内斜口縁壺と呼ばれるタイプである。7と8は土師器鉢でいずれもほぼ完形である。7は内面黒色処理が施されている。9~11は直口壺で9と10は外面赤彩が施されている。また10は口縁部の内面も赤彩が確認できる。



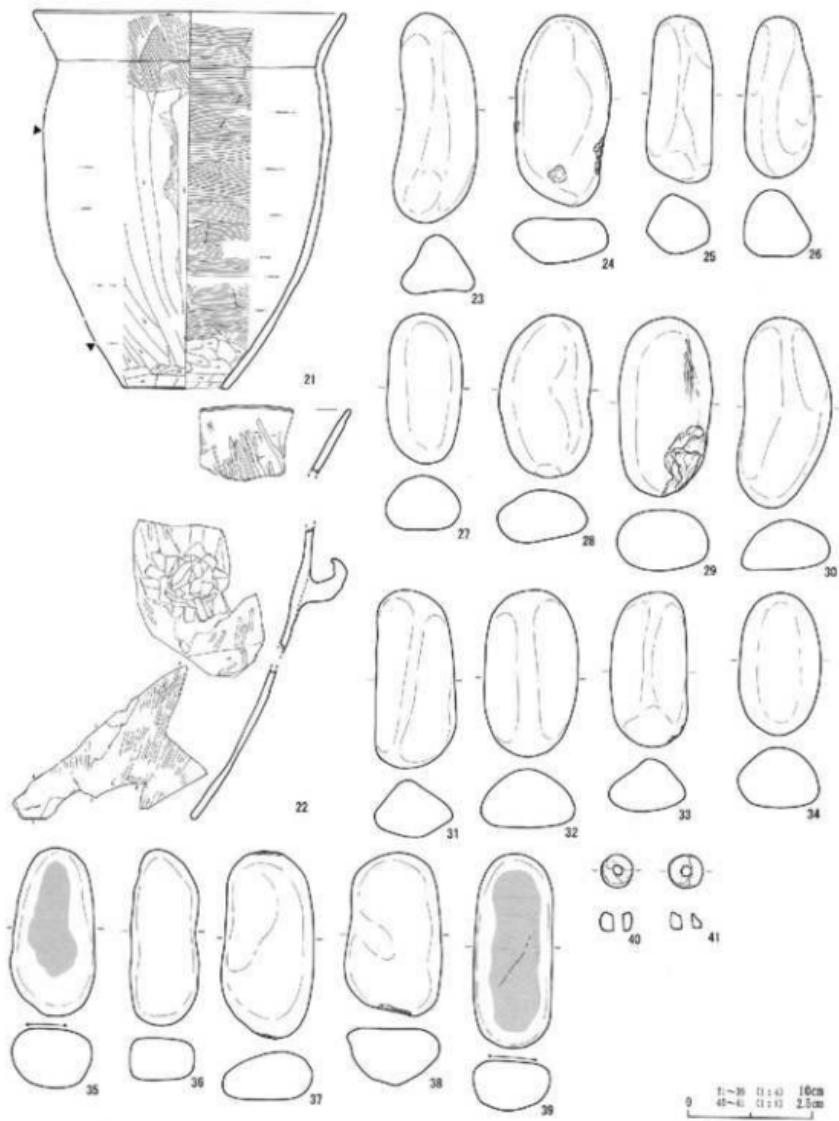
第76図 H51号住居址カマド実測図



第77图 H51号居住址实测图



第78图 H51号住居址出土遗物实测图



第79图 H51号住居址出土遗物整理图

No.	種別	基盤	地質	成形・調整・文様			備考	出土位置
				内面	外面			
1	土師器	坪	14.0	11.6	4.1	ミガキ	ミガキ	口縁光面 常死者しい H1床
2	土師器	坪	10.2	7.0	1.3	口縁コナデーし縁へみこぼヘラ ナデー黒色處理	口縁ヨコナデー・口縁・底部ヘラナデー ヨコナデー黒色處理	口縁光面 H4軒側 I+II区
3	土師器	坪	12.2	-	(6.5)	縁文	体部ヘラケズリ・口縁ヨコナデー・ミガキ?	口縁光面 P11
4	土師器	坪	11.7	-	5.6	みこぼヘラナデー・口縁ヨコナデ	体部ナデー・底部ヨナデー・口縁ヨコナデ	口縁光面 H1床
5	土師器	坪	13.8	14.0	(6.8)	ミガキ・黒色處理	口縁ヨコナデー・体部ヘラケズリ・ミガキ	口縁光面 H4軒 I区
6	土師器	坪	15.6	14.2	(6.0)	ミガキ・黒色處理	口縁ヨコナデー・体部ヘラケズリ・ミガキ 口辺部黒色處理	口縁光面 I区
7	土師器	鉢	10.0	5.7	8.8	口縁ヨコナデー脚へ底部ヘラナデー 黒色處理	口縁ヨコナデー・脚部ヘラナデー ヘラケズリ 底部ヨナデー	完全表面 H2軒 I区
8	土師器	鉢	10.2	4.3	8.5	口縁ヨコナデー脚へ底部ヘラナデー	口縁ヨコナデー・底部ヘラケズリ ハケリ→ 脚部ヘラケズリ ハケ日	完全表面 5cm II区床
9	土師器	両口巻	-	-	(8.1)	脚へみこぼヘラナデ	ミガキ 素色光面	完全表面 12cm I区床
10	土師器	両口巻	-	-	(9.4)	1輪ミガキ 亜食器容四・底部ヘラナデ	ミガキ・素色光面	完全表面 12cm I+IV区床
11	土師器	直口巻	-	-	(13.9)	口縁ミガキ 脚へみこぼヘラナデ	ミガキ	完全表面 口縁外周面削減 I区
12	土師器	小折腹	15.1	5.3	13.0	口縁ヨコナデー脚へ底部ヘラナデ	口縁ヨコナデー・脚部ヘラケズリ 底部ヨナデ	完全表面 20cm P7 P11 I区
13	土師器	直	10.2	5.1	19.0	口縁ヘラナデ 脚へ底部ヘラナデ	口縁ヘラナデ 脚部ヘラナデ ヘラケズリ 底部ヨナデ	完全表面 4~12cm I区 床 カマド
14	土師器	直	-	8.1	(9.1)	ヘラナデ	脚部ヘラケズリ 部部ヘラケズリ	完全表面 II区 カマド
15	土師器	直	-	5.6	(12.9)	1輪ハケ日	口縁ヨコナデー・脚部ヘラナデ ハケ日	完全表面 9cm カマド 素色斜面付着
16	土師器	小型直	-	5.1	(2.0)	ヘラナデ	脚部ヘラケズリ・ミガキ 基底ヘラケズリ	完全表面 II区
17	土師器	直	17.7	6.8	30.8	口縁ヨコナデー・ミガキ 脚へラナデ ヘラケズリ・部分的にミガキ	口縁ヨコナデー・ミガキ 脚部ヨナデー・部分的にミガキ	完全表面 P6
18	土師器	直	20.7	7.2	29.4	1輪ミガキ 脚へ底部ヘラナデ	口縁ヨコナデー・脚部ヘラケズリ ヨナデー 部分的にミガキ 脚部ヘラケズリ	完全表面 -18cm P7・8 H3-D1 カマド
19	土師器	直	-	(20.6)	脚部ヘラケズリ・口縁ヨコナデー・ミガキ	口縁ヨコナデー・脚部ヘラケズリ	完全表面 H3-D1 カマド	
20	土師器	鉢	25.0	6.8	16.4	ミガキ	口縁・脚部ヘラケズリ・ミガキ 底部ヨナデ	完全表面 4cm I区 カマド
21	土師器	直	25.1	8.4	30.1	ハケ日・側部下半ヘラケズリ	ハケ日・脚部ヘラケズリ	完全表面 21cm カマド
22	土師器	直	-	-	-	ミガキ	ミガキ	完全表面 9cm
23	縞模物石	素 材	塊状剥離岩質	16.7	6.3	5.3	780.00	出土地面
24	縞模物石	角石	鰐石安山岩	16.7	6.3	5.3	被燃	4~12cm
25	縞模物石	角	鰐石安山岩	15.1	7.6	4.3	670.00	被燃 底面と側面に崩打痕
26	縞模物石	角	鰐石安山岩	13.0	5.3	4.7	520.00	被燃
27	縞模物石	角	鰐石安山岩	12.8	5.7	5.3	320.00	被燃
28	縞模物石	角	鰐石安山岩	11.9	6.0	4.5	480.00	被燃
29	縞模物石	角	鰐石安山岩	13.0	7.5	4.5	550.00	被燃
30	縞模物石	角	鰐石安山岩	14.4	7.5	4.8	700.00	被燃 右下部に縦打と荒われる剥離 正面に条痕
31	縞模物石	角	鰐石安山岩	15.1	7.5	4.1	600.00	被燃
32	縞模物石	角	鰐石安山岩	14.2	6.6	4.7	560.00	被燃
33	縞模物石	角	鰐石安山岩	13.4	7.5	4.7	660.00	被燃
34	縞模物石	角	鰐石安山岩	12.3	6.2	4.3	480.00	被燃 上端部に縦打痕
35	縞模物石	角	安山岩	11.4	6.5	3.0	530.00	被燃
36	縞模物石	角	鰐石安山岩	13.5	6.8	4.8	630.00	被燃 正面にすり面
37	縞模物石	角	鰐石安山岩	14.0	5.5	3.7	520.00	被燃
38	縞模物石	角	鰐石安山岩	13.0	7.5	3.9	670.00	被燃 上・下端部に崩打痕
39	縞模物石	角	鰐石安山岩	13.0	7.8	4.6	740.00	被燃 下端部に崩打痕
40	石玉	滑石	安山岩	15.5	6.3	4.0	630.00	被燃 正面にすり面
41	石玉	滑石	完形	0.31	0.04	0.22	0.19	1cm
				0.38	0.05	0.25	0.24	1cm

第50表 H51号作居出土遺物観察表

ことから、短い口縁のタイプとも考えられる。12は土師器の小型甌、13は甌とした。14~18は土師器の甌であるが、17は口縁部に特徴があり、コの字状に屈曲するものである。19は器形から単孔の甌と考えられる。20は大型の甌とした。内外面丁寧なミガキが施されている。21は大型の甌ではば完形である。22は把手付の瓶破片で、口縁部・胴部・孔部の同一個体と考えられる破片があるが、接合関係が見いだせなかつた。本遺跡の中では他の土師器大型甌に比べ器厚が薄く、丁寧な作り方である。23~39は縞模物石で、多くはP4脇から出土した。40と41はP1カドである。

本址はこれら遺物より6世紀前半に位置づけられる。

(52) 52号住居址 (第80・81図、写真図版三十九)

本住居址は、調査区北側であるタ-24.25.26、チ-24.25.26Grに位置する。残存状態は東壁から南壁東側にかけてカクランにより壊されている他は、良好である。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁6.32m・南壁2.31m(残存) 6.14m(推定)・西壁6.50m・東壁0.90m(残存) 6.46m(推定)で、壁高さは南壁西寄りで最大51cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-2°-Wを示す。住居址の床面積は残存部分で33.90m²、推定で42.72m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~27cmの厚さで貼られていた。壁溝は北壁と西壁の全体と、南壁に検出された。断面形はU字形で、幅は約17~38cmを測る。また、西壁より2箇所、南壁より1箇所の間仕切り溝が検出された。ピットは8カ所確認され、P1~P4が主柱穴、P6とP7が貯蔵穴、P8が入り口の張り出し土坑施設のピットと考えられる。規模はP1が径58cm・深さ44cm、P2が径57cm・深さ44cm、P3が径47cm・深さ45cm、P4が径42cm・深さ30cm、P5が径50cm・深さ11cm、P6が長軸77cm・短軸51cm・深さ53cm、P7が長軸101cm・短軸50cm・深さ15cm、P8が径62cm・深さ36cmを測る。住居址掘り方はほぼ平坦であったが、東側に床下土坑が検出された。規模は長軸168cm・短軸72cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、検出状況は良好であった。煙道部は長く伸びるタイプのもので、煙道の規模は長さ157cmを測る。H27号住居址と同じく、先端にピットが検出された。ピットの規模は径28cm・深さ7cmを測る。袖部は地山を芯材として、黒色土で構築されていた。火床部はよく焼けており、硬質化していた。焼土の厚みは6cmを測る。カマド掘り方は袖先端に径24~30cm・深さ9~12cmのピットが検出され、焚口部の礫を立てた痕跡と考えられる。また、本カマドは煙道部と火床部下に構築土があり、煙道部は一本の溝状の掘り込みとなった。

出土遺物は覆土中からが多くかった。1は須恵器高杯の坏部である。2と3は土師器坏であり、2は口縁部が直立するタイプで、3は口縁部が大きく外反するタイプのものである。4と5は小型の土師器壺であり、4は頸部が不明瞭で口縁部に至るタイプの物である。6と7も土師器の壺であるが、7は4と同じく頸部が不明瞭で、尚かつ非常にゆがんだ器形である。8は上師器壺の胸部である。内外面丁寧なミガキが施されている。9はやや大型であるが土師器壺とした。内面黒色処理されている。10は磨石。11は敲石で側面に敲打痕がある。12は白玉であり、床面直上から出土した。

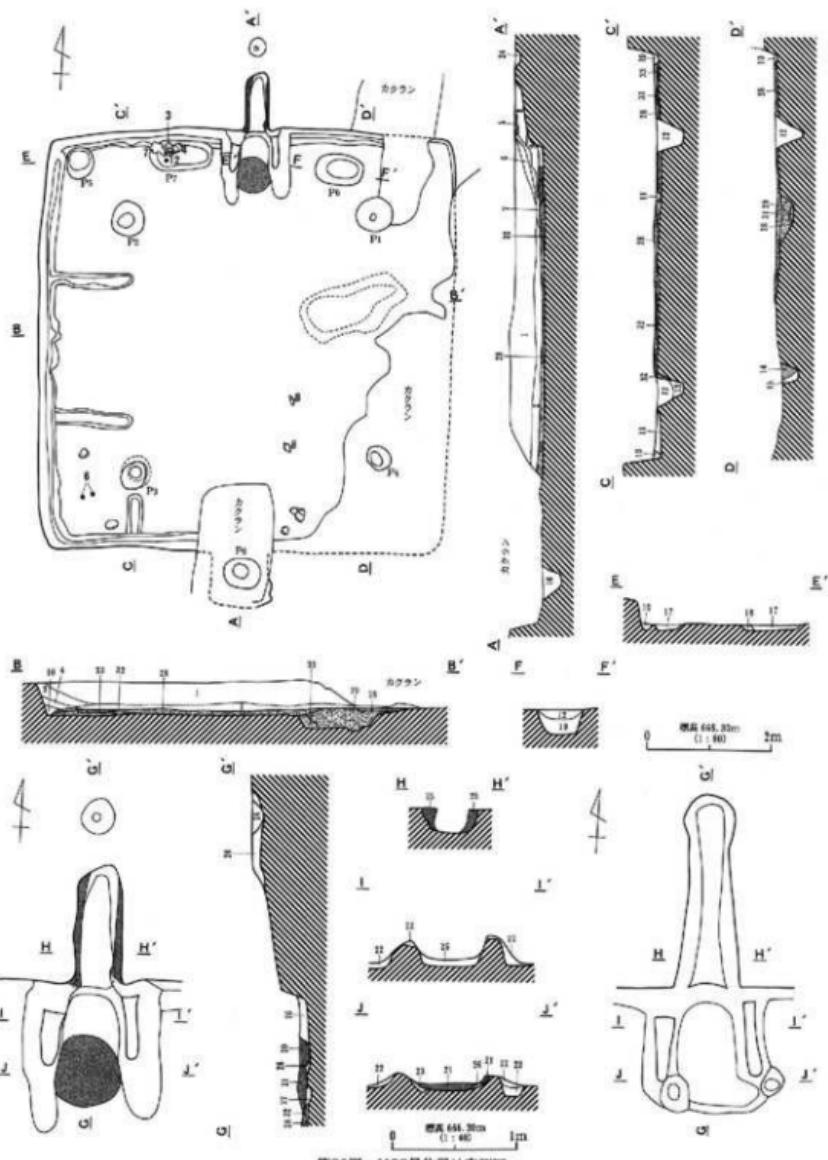
本址はこれら遺物より6世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	器種	法量			成形・調整・文様		備考	出土位置
			内 面	外 面	裏 面	底面	腹面		
1	土師器	高杯	12.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 □縁1/3残存	IVK床
2	土師器	壺	13.0	13.2	4.1	ナデ	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ→ナデ	回転実測 1/2残存	IVK1層
3	土師器	壺	15.8	12.6	4.5	ナデ	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形	-3cm P7
4	土師器	甕	12.0	5.8	14.4	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部実形	-2.5cm P7
5	土師器	甕	12.5	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 □縁1/3残存	P7
6	土師器	甕	18.2	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 1/3残存	-19cm P1 IVK
7	土師器	甕	13.8	6.6	21.0	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 ほぼ完形	-2cm
8	土師器	壺	-	10.4	-	ミガキ	ヘラケズリ→ミガキ	回転実測 1/3残存	2cm
9	土師器	壺	21.0	14.4	-	ミガキ→黒色処理	ミガキ	回転実測 □縁1/3残存	
No.	器種	素 材	内径	最大幅	最大厚	重 量	所 見		出土位置
10	磨石	脚石安山岩	先底	12.9	5.4	5.0	540.00	正面にすり面	壁灰床塗
11	敲石	城灰岩	先底	14.3	(8.4)	(5.5)	(670.00)	背面は剥落か 左側敲打による剝離	IVK1層
12	白玉	青石	先底	0.50	0.82	0.28	0.60		-8cm P7

第51表 H52号住居址出土遺物観察表

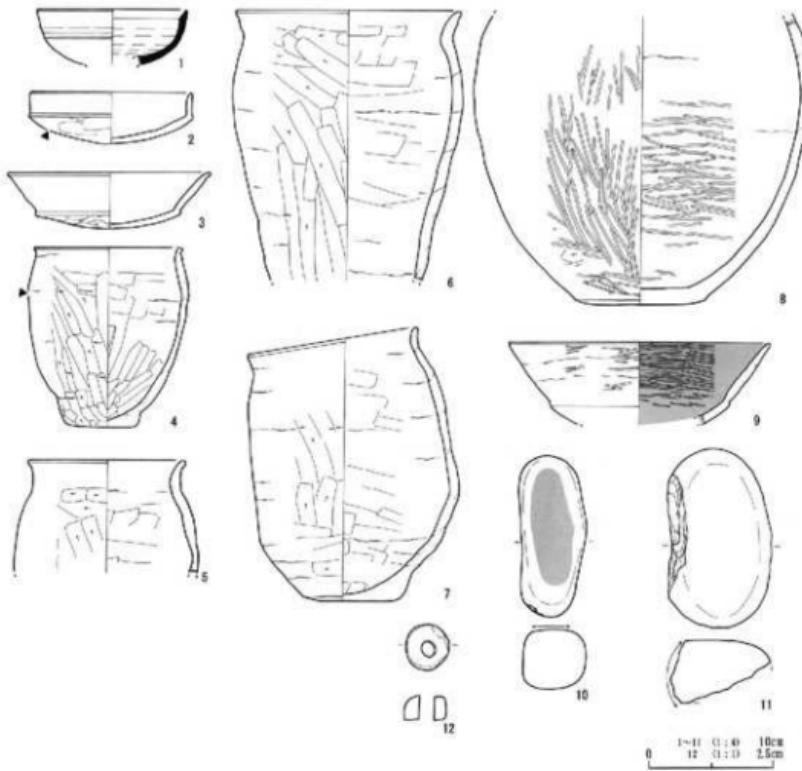
(53) H53号住居址 (第82・83図、写真図版四十二)

本住居址は、調査区北側であるタ-19.20.21、チ-19.20.21Grに位置する。残存状態は西側と住居址中央部分がカクランにより壊されている。重複はF14号掘立柱建物址と新旧関係にあり、本址の方が新しい。



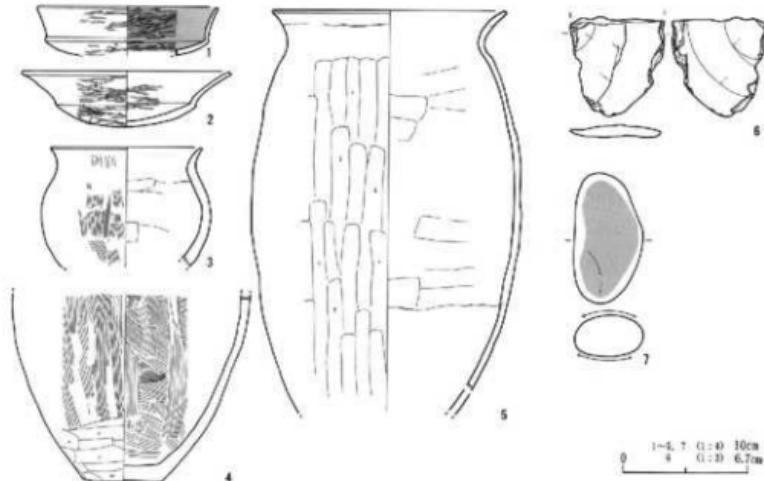
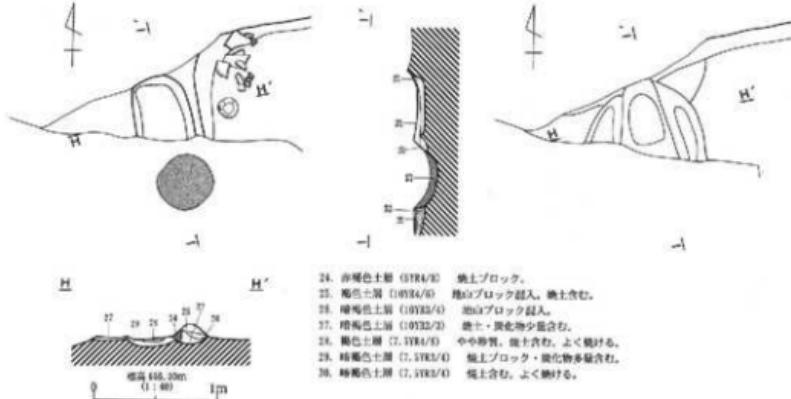
第80図 H52号住居址実測図

1. 暗褐色土層 (10783/1) 小塊・赤色土ブロックを含む。
 2. 暗褐色土層 (10783/2) 地山ブロック・鐵土を多量に含む。
 3. 褐褐色土層 (10784/4) 地山ブロックを多量に含む。(根茎層)
 4. 黑褐色土層 (10782/3) 地山ブロックを少量含む。(根茎層)
 5. 深褐色土層 (5781/3) よく傾けてる。
 6. 光褐色土層 (10782/3) 稀褐色土のブロック含む。鐵土を含む。
 カマド跡痕跡。
 7. 暗褐色土層 (10783/3) 鐵土・鐵を多く含む。(カマド跡痕跡)
 8. 暗褐色土層 (7.5783/3) 鐵土ブロック・鐵を含む。
 9. 黑褐色土層 (10782/1) 黒・灰・カマド跡痕跡地山ブロックを多量に含む。
 カマド跡痕跡。
 10. 深褐色土層 (10782/2)
 11. 暗褐色土層 (10782/3) 地山褐色土ブロックを含み、鐵土・鐵微量に含む。
 12. 黑褐色土層 (10782/3) 小塊・地山褐色土ブロックを少し含む。
 13. 黑褐色土層 (10782/3) 鐵土を含む。
 14. 黑褐色土層 (10782/2) 松脂
 15. 褐色土層 (10784/6) 地山多く含む。
 16. 黑褐色土層 (10782/1) 鐵・鐵土混入。粘性あり。入口施設底土。
 17. 暗褐色土層 (10782/4) 鐵土・鐵多量に含む。

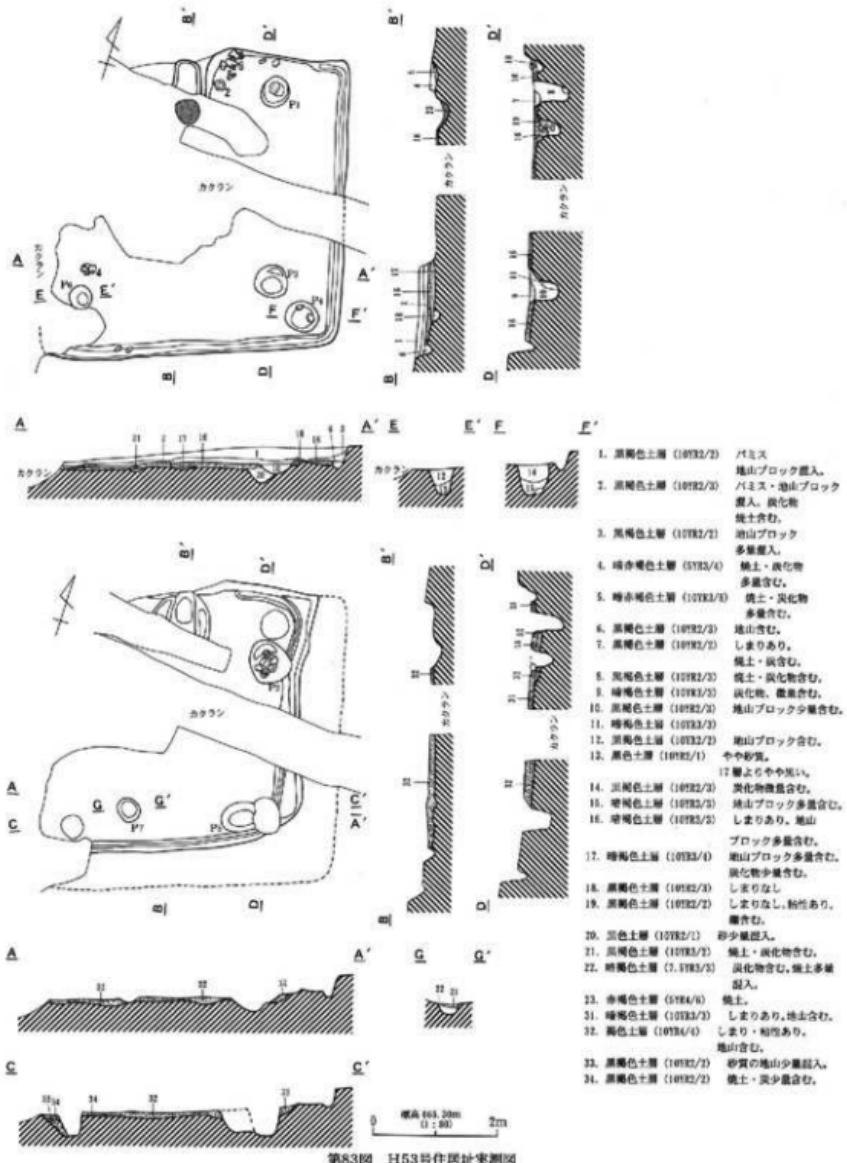


第81図 1152号住居址出土遺物実測図

形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.50m(残存)・南壁4.54m(残存)・東壁4.44mで、壁高さは南壁中央で最大32cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-14°-Wを示す。住居址の床面積は、残存部分で11.71m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~10cmの厚さで貼られていた。壁溝は北東コーナーから北壁を除く全体で検出された。断面はU字形で、幅は約15~25cm・深さ4~10cmを測る。ピットは6カ所確認され、P1とP3とP6が主柱穴と考えられる。規模はP1が径48cm・深さ56cm、P2が径70cm・深さ54cm、P3が径54cm・深さ48cm、P4が径53cm・深さ53cm、P5が径52cm・深さ28cm、P6が径38cm・



第82図 1153号住居址カマド及び出土遺物実測図



第83図 H53号住居址実測図

深さ38cmを測る。

カマドは北壁中央に造られており、火床部と袖部が残存していた。袖は褐色土で構築されており、火床部はカクランにより上面が削平されていたが、よく焼けていた。

また、本址は掘り方時に東壁と南壁をひとまわり小さくした範囲で新たな貼床が検出され、住居址を拡張していることが確認された。拡張前後の住居址は北壁と西壁を共有する形で、北西コーナーを起点に拡張したことが考えられる。拡張前の住居址の形態は方形で、規模は北壁3.08m(残存)・南壁3.30m(残存)・東壁3.50mを測る。住居址の床面積は8.99m²を測る。貼床は全体に張られており、厚さは2~20cmを測る。壁溝は北壁の一部も含め全体に巡っており、規模は幅10~27cm・深さ3~9cmを測る。カマドは拡張後の位置と同じと考えられる。P2・5・7は拡張前の床に伴うものである。

出土遺物は覆土中からが多かったが、拡張前と拡張後の遺物に関しては出土層位から分離できなかつた。1と2は土師器壺で、1はいわゆる須恵器模倣壺、2は須恵器模倣壺であるが大きく口縁部が外反するタイプのものである。3~5は土師器壺である。5はカマド東脇から出土した。底部を欠損する他は良好に残存する。外縁は綫方向のヘラケズリが施されている。6は打製石斧で覆土中からの出土である。7は磨石で両面にすり面が認められた。

これらの出土遺物より本址は6世紀後半~7世紀前半に位置づけられる。

№	種別	計 算	法 面			底 面		外 面		調 考	出 土 位 置
			口幅(角)	底面(角)	面面(角)	内 面	外 面	内 面	外 面		
1	土師器	壺	14.6	13.2	-	ミガキ一黑色地麁		ヨコナデミガキ ヘラケズリミガキ		回転実測 口縁1/8残存	P7
2	土師器	壺	16.8	11.2	4.5	ミガキ		ヨコナデミガキ ヘラケズリミガキ		完全実測 光面品	0cm
3	土師器	壺	12.2	-	-	ヘラナデ		ハケ目		四輪実測 口縁1/2残存	カマド
4	土師器	壺	-	6.3	-	ハケ目		ハケ目→ヘラケズリ		完全実測 底部凹凸	0cm
5	土師器	壺	18.5	-	-	ヘラナデ		口縁ヨコナデ→ヘラケズリ		光全実測 3/4残存	0cm カマド
性 質			真 材 残存率			底大長	底大深	重 量		所 見	出 土 位 置
6	石 斧		輝石安山岩	(5.9)	3.6	0.8	(27.40)				1区
7	磨 石		輝石安山岩	10.4	5.6	3.4	338.00	正・裏面にすり面			IIK

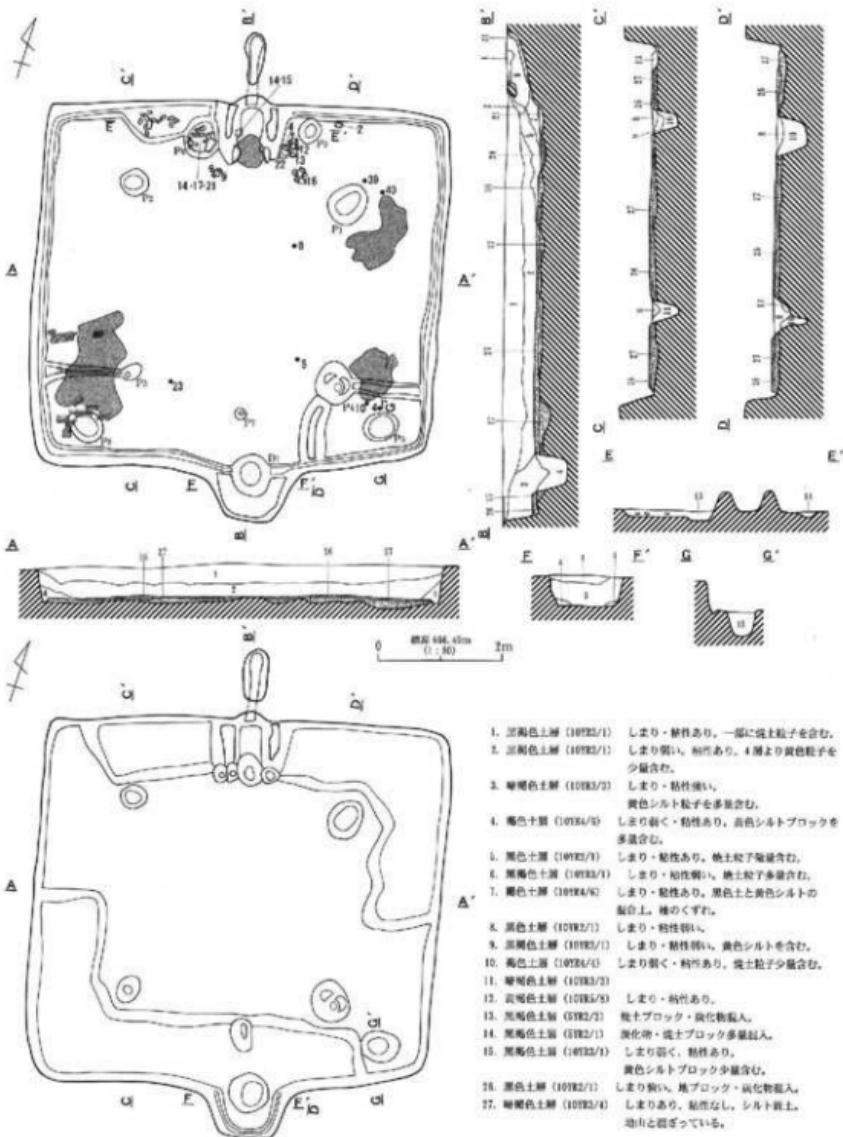
第52表 H54号住居址出土遺物観察表

(54) H54号住居址 (第84~87図、写真図版四十三~四十五)

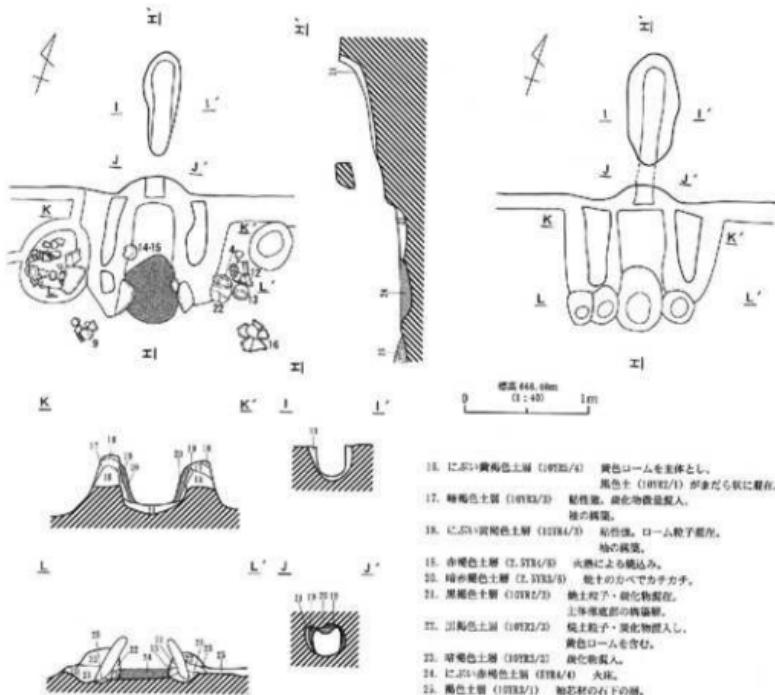
本住居址は、調査区北側であるツ-24.25、テ-24.25Grに位置する。残存状態はいずれの壁もカクランを受けておらず、本遺跡にあって極めて良好である。

形態はほぼ正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁6.34m・南壁6.10m・西壁5.64m・東壁5.20mで、壁高さは北東コーナーで最大60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-16°-Wを示す。住居址の床面積は35.68m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、カマド前面と住居址中央部分は特に硬質であった。貼床は住居址全体で確認され、貼床の厚みは2~13cmを測る。壁溝は住居址壁全体で確認され、特にカマド西側に関しては幅広く広がっていた。ピットは9カ所確認され、P1~P4が主柱穴、P5とP6とP8が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径69cm・深さ51cm、P2が径45cm・深さ53cm、P3が径33cm・深さ40cm、P4が径70cm・深さ55cm、P5が径57cm・深さ45cm、P6が径61cm・深さ8cm、P7が径20cm・深さ19cm、P8が径70cm・深さ15cm、P9が径41cm・深さ9cmを測る。貯蔵穴と考えられるP5の周りには、僅かに盛り上がる周堤帯のような土手が検出できた。また、本址の南壁中央にはいわゆる「張り出し土坑」と呼ばれる掘り込みが検出された。土坑は住居址壁ラインと直行して方形に掘りこまれ、床面の高さから円形にもう一段深く掘り込まれている。この円形の掘り込みは住居址の壁溝がつながり、掘り込みの規模は長軸67cm・短軸61cm・深さ57cmを測る。

住居址の掘り方は図に示したように中央部と東壁北寄りと西壁北寄りが一段高くなる掘り方で、南壁中央の張り出し土坑にはU字形の壁溝のような掘り込みも検出された。



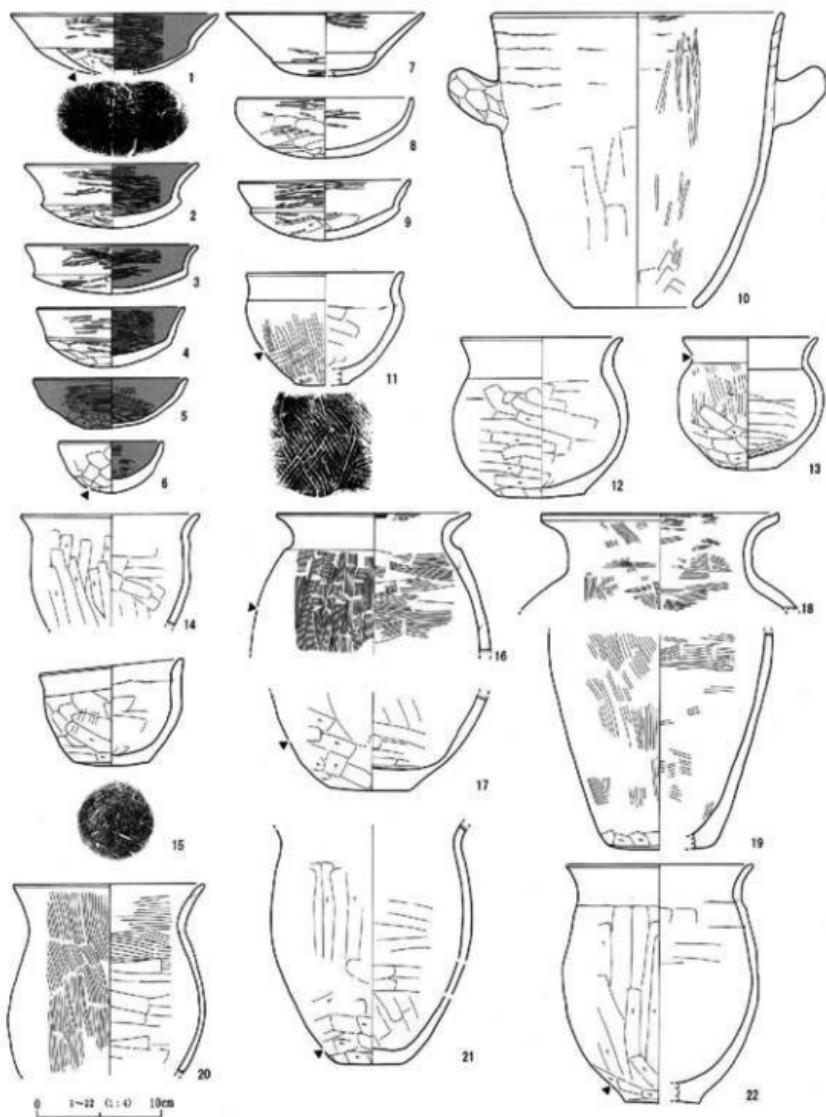
第84図 H154号住居付実測図



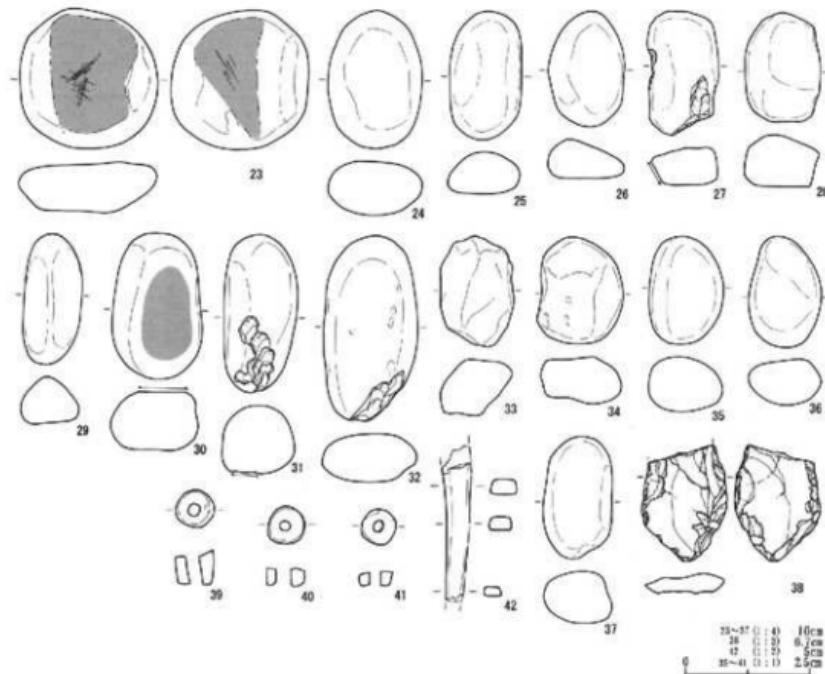
第85図 H54号住居址カマド実測図

カマドは北壁中央に検出された。煙道部や袖部は良好に残存していた。煙道部は一部トンネル状の掘り込みが残存しており、形態は長く伸びるタイプで、住居址外側に向かって斜めに上っていた。規模は長さ130cmを測る。また、煙道部には黒褐色土の構築土が観察された。袖の規模は高さが最大46cmを測る。袖部は粘土を構築材として、袖芯部分は地山掘り残しによって構築していた。焚口部は2枚の大型の川原石を立て、門柱状の形態を取っていた。火床部は良く焼けており上面硬質化していた。焼土の厚みは7cmを測る。

出土遺物は覆土中及びカマド周辺部からまとめて出土した。特にカマド周辺から出土した遺物は床面直上からの物が多く、小型甕の中に壺が入れ込んであるような状態（写真図版四十四参照）など、住居使用時の様子を推測しうるような資料も出土した。1~9は土器壺である。いずれも須恵器模倣タイプの壺であるが、8は口縁部が内湾するタイプの壺、6は通常の壺に比べ口径がやや小型でミニチュアの様相を呈する。また、5は口縁部と体部の縫が明瞭でないタイプで、内外面黒色処理されている。出土時に壺部内面に皮膜状の物質が付着しており、科学分析の結果は漆であることが判明した。なお詳細については第VII章の化学分析結果報告書を参照とする。1~6は内面黒色処理が施されている。1は底部付近に1本の焼成前の刻線が確認できる。10は把手付の大型甕である。住居址南東側の貯蔵穴脇より出土した。11~15までは小型甕で、口縁部がくの字状に曲がる物と、15のように屈折しないタイプの物がある。11は外面の調整が粗いハケ目の残るナデであり、蔽きのような模様目である。



第86图 H54号居住址出土遗物实测图



第87図 H54号住居址出土遺物実測図

No.	器種	材質	保存状況	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴	出土地點
23	破石	花崗岩	完形	11.1	11.0	4.3	270.00	正・裏に先端有り	1.5cm 裏区東直
24	縞み物石	安山岩	完形	11.0	7.6	4.3	420.00		目区
25	縞み物石	砂岩	完形	19.2	5.8	3.2	360.00	被熱者り(全体に赤褐色)	カマド
26	縞み物石	輝石安山岩	完形	9.2	6.1	3.2	243.00		-6cm PB
27	縞み物石	安山岩	完形	9.9	5.8	3.2	250.00	左側、下端部に崩打と思われる剥離	-6cm PB
28	縞み物石	石英斑岩	完形	8.7	6.0	4.3	338.00		-8cm PB
29	縞み物石	砂岩	完形	16.4	4.6	4.1	283.00		-6cm PB
30	縞み物石	赤銅岩	完形	11.6	7.2	5.0	650.00	被熱者り? 正面にすり面	-7cm PB
31	縞み物石	安山岩	完形	12.6	5.8	3.7	390.00	下端部 正面と裏面に崩打痕	-7cm PB
32	縞み物石	輝石安山岩	完形	14.7	7.5	4.0	610.00	下端部に崩打痕	-7cm PB
33	縞み物石	黒風化チャート	完形	8.9	6.0	4.7	316.00		-7cm PB
34	縞み物石	斑紋岩	完形	8.5	6.8	3.8	302.00		-7cm PB
35	縞み物石	輝石安山岩	完形	9.0	6.0	4.5	332.00		-7cm PB
36	縞み物石	安山岩	完形	8.8	5.8	3.7	256.00		-7cm PB
37	縞み物石	輝石安山岩	完形	9.7	6.5	4.2	329.00		-9cm PB
38	石斧	輝石安山岩	(7.0)	5.1	0.8		48.22		裏区
39	臼玉	砂岩	完形	0.66	0.75	0.25	0.63		-12.0cm 水り方
40	臼玉	砂岩	完形	0.35	0.75	0.30	0.30		0cm
41	臼玉	砂岩	完形	0.20	0.70	0.20	0.24		-6.5cm 水り方
42	不明	砂岩	(6.3)	(1.2)	(0.6)				Ⅱ区上層

第53表 H54号住居址出土遺物観察表

No.	種別	器種	法 番		成 形・調 球・文 標			備 考	出土位置
			口径(㎝)	底面(㎝)	内 面	外 面			
1	土師器	坏	16.7	12.7	-	ミガキ→黑色處理	口縁ミガキ 底部へラケズリ→ナデ	完全実測 4/5残存 馬木 斜傾(廻成前)	カマド
2	土師器	坏	14.1	11.2	5.2	ミガキ→黑色處理	口縁ミガキ 武部へラケズリ→ミガキ	完全実測 4/5残存	13.5cm
3	土師器	坏	14.0	12.5	3.9	ミガキ→黑色處理	口縁ミガキ 底部へラケズリ→ミガキ	完全実測 4/5残存	カマド
4	土師器	坏	12.6	10.1	4.8	ミガキ→黑色處理	口縁ミガキ 武部へラケズリ→ミガキ	完全実測 ほぼ完形	6cm
5	土師器	坏	12.5	-	4.0	ミガキ→黑色處理	ヘラケズリ→ミガキ→黑色處理	完全実測 ほぼ完形 直付窓	1cm
6	土師器	坏	8.6	-	4.2	ハケ目 黑色處理	ヘラケズリ→ナデ	回転実測 1/3残存	II区
7	土師器	坏	16.0	8.4	(5.1)	ミガキ	ミガキ	回転実測 1/3残存	I・II区
8	土師器	坏	14.2	-	4.8	ミガキ	ヘラナデ→ミガキ	完全実測 ほぼ完形	0cm
9	土師器	坏	14.0	12.1	4.8	ヘラナデ→ミガキ	口縁ミガキ 武部へラケズリ→ミガキ	完全実測 3/4残存	0cm
10	土師器	灰	23.6	16.2	(23.0)	ヘラナデ→ミガキ	ヘラケズリ→ナデ	回転実測 1/3残存	0cm
11	土師器	灰	12.7	4.4	(9.0)	ヘラナデ	ハケ目(新木)	完全実測 3/4残存	II・裏区
12	土師器	灰	13.0	7.0	12.8	ヘラナデ	ヘラケズリ ヨコナデ	完全実測	0cm
13	土師器	灰	10.8	4.6	10.0	口縁ハケ目 ヘラナデ	ハケ目→ヘラケズリ	完全実測 4/5残存	0cm
14	土師器	灰	14.4	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 1/3残存	7.5~11cm
15	土師器	灰	11.6	5.4	8.0	ヘラナデ	ハケ目→ヘラケズリ 木葉痕(花木)	完全実測 ほぼ完形	7.5cm
16	土師器	灰	15.7	-	-	ハケ目	ハケ目	完全実測	2cm
17	土師器	灰	-	6.5	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部充填	-11cm P8
18	土師器	灰	19.2	-	-	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	回転実測 口縁1/3残存	I・II区
19	土師器	灰	-	8.4	-	ハケ目	ハケ目 休部下端へラケズリ	回転実測 底部1/3残存	カマド II区
20	土師器	灰	15.4	-	-	ハケ目→ヘラナデ	ハケ目	完全実測 底部充填	I・II区
21	土師器	灰	-	5.4	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測 底部1/3残存	-11cm P8
22	土師器	灰	15.0	6.0	(19.0)	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	0cm

第54表 II54号住居址出土遺物觀察表

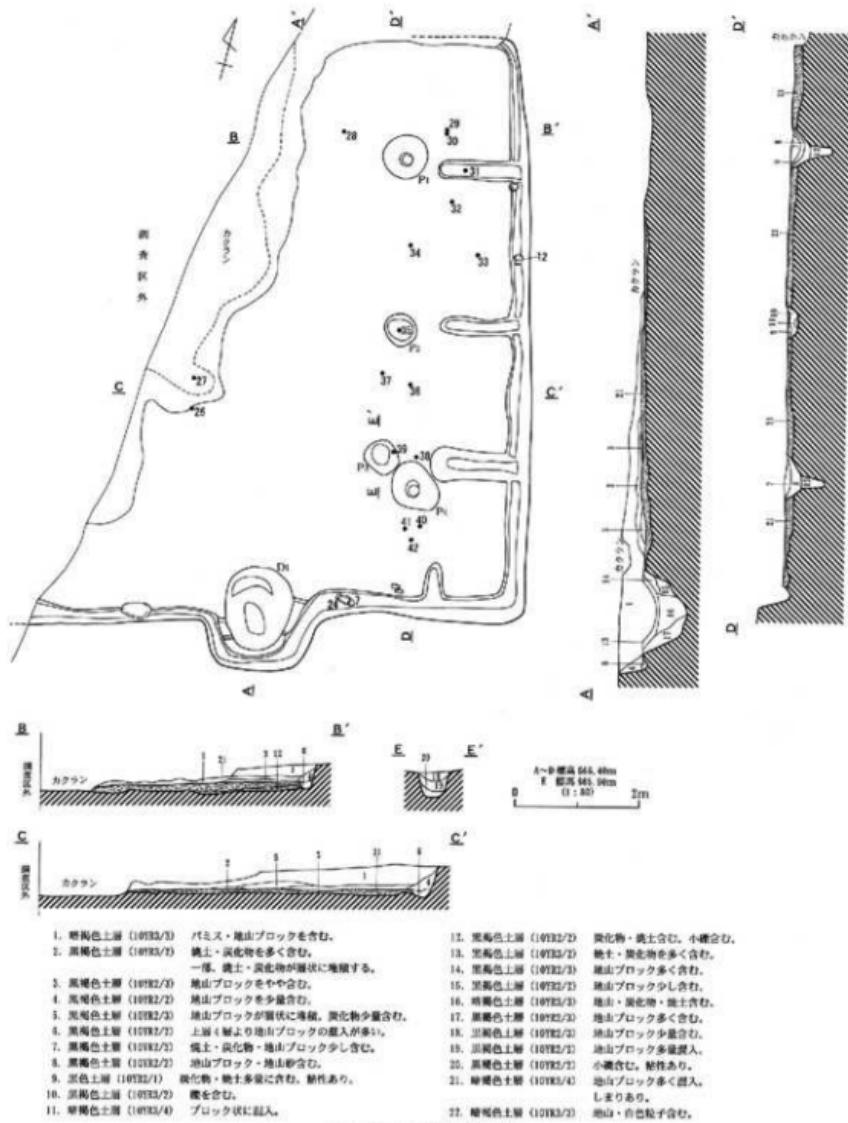
16~22は土師器甕である。外面調整がハケ目の残るナデのタイプと縱方向のヘラケズリを施す物があり、18は口唇部の面取りが行われている。石製品は砥石や編み物石が出土した。23は砥石で、表裏の中央部分が磨れていた。また擦痕のような傷が無数確認できる。24~37は編み物石でP8からまとまって出土した。38は石斧の欠損品であり混入品と考えられる。39~41は白玉で貼床内より出土した。42は鉄製品であるが品種は不明である。

本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

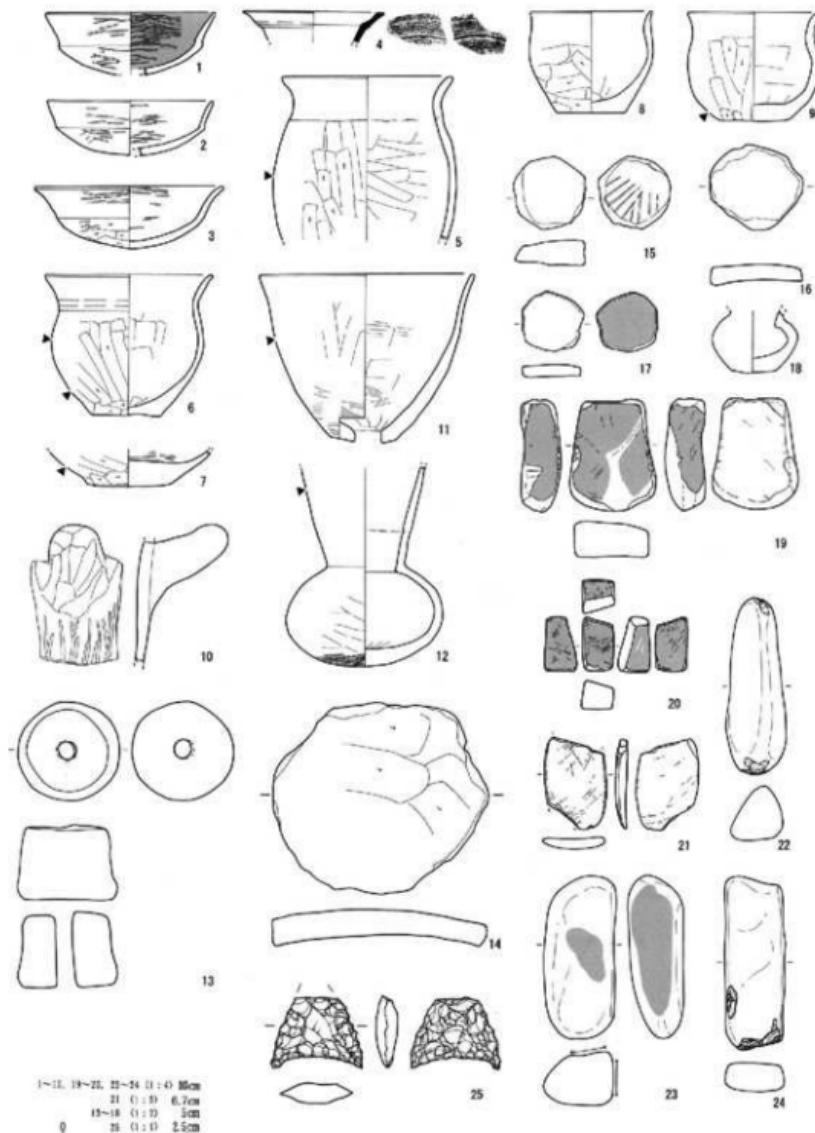
(55) H55号住居址 (第88・89・90図、写真図版四十六)

本住居址は、調査区北側であるチ-15.16.17、ツ-15.16.17、テ-15.16.17Grに位置する。残存状態は北壁側から西壁にかけて、カクランと調査区域外により削平されていた。

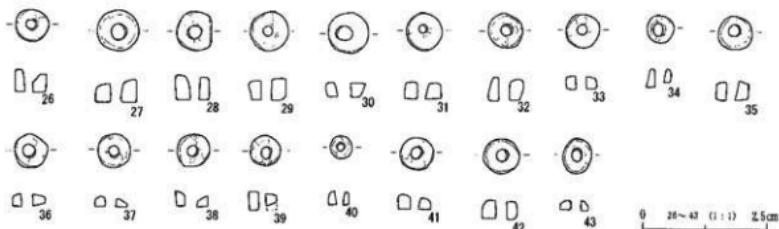
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁3.48m(残存)・南壁7.88m(残存)・東壁9.21mで、壁高さは南東コーナーで最大47cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-15°-Wを示す。住居址の床面積は残存部分で45.54m²、推定で75.68m²を測る。本址はカクランを受けているが、本遺跡の中では最も大型の住居址と考えられる。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、住居址中央部分とD1号土坑の北脇は特に硬質であった。貼床は住居址全体で確認され、貼床の厚みは1~18cmを測る。壁溝は住居址壁全体で確認され、特に東壁からはピットに向けて間仕切り溝が確認された。壁溝規模は幅17~47cm・深さ2~11cmを測る。ピットは4カ所確認され、P1~P3が主柱穴と考えられ、本址は6本の主柱穴である事が推定出来る。規模はP1が径73cm・深さ68cm、P2が径53cm・深さ18cm、P3が径57cm・深さ37cm、P4が径85cm・深さ64cmを測る。また、本址は南壁中央に張り出しを伴う貯蔵穴と考えられるD1号土坑が検出された。形態は梢円形で、規模は長軸133cm・短軸106cm・深さ74cmを測る。土坑内の覆土は炭化物や焼土が混ざっていた。住居址の掘り方はほぼ平坦な掘り方であった。



第88図 H155号住居址実測図



第89图 H55号住宅址出土遗物实测图



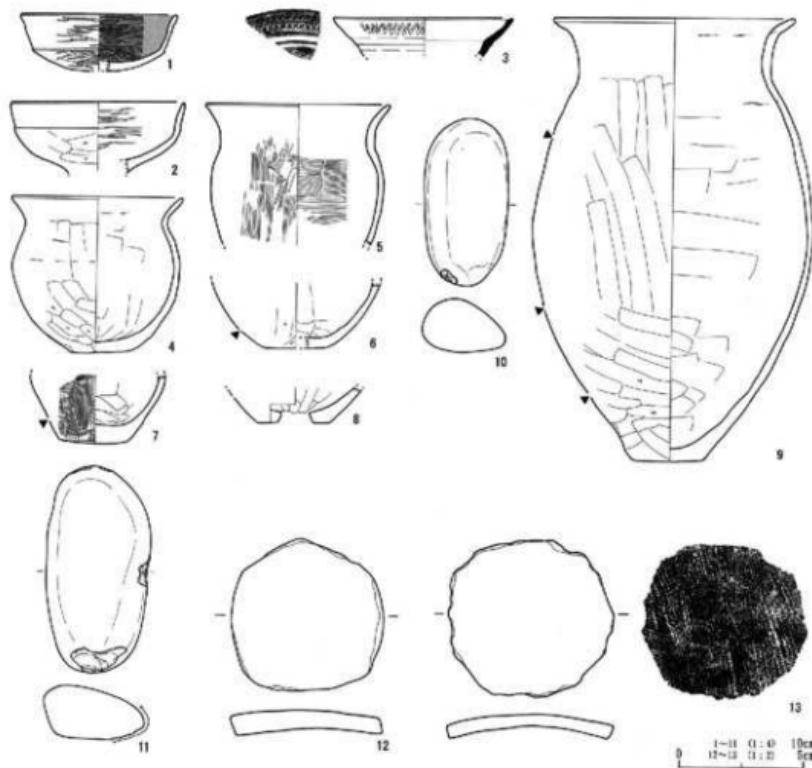
第90図 H55号住居出土遺物実測図

No.	種別	器種	法 集 合 内 面			成 形 調 修 外 面			備 考	出土位置	
			口部(左側面)直角	底部(右側面)直角	内 面	外 面	内 面	外 面			
1	土師器	环	13.6	11.6	—	ミガキ→褐色略變	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 1/6残存	V区 周溝
2	土師器	环	13.4	12.0	(4.4)	ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 1/3残存	D1 IV区
3	土師器	环	15.2	11.8	5.0	ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 濃部ヘラケズリ→ミガキ	口縁ミガキ 3/4残存	IV - VIK
4	土師器	ハツク	11.4	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ 口縁1/4残存	VIK
5	土師器	環	13.8	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 2/3残存	IV区
6	土師器	環	13.5	5.5	11.3	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 4/5残存	VIK
7	土師器	環	—	6.6	—	ハケナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 宽部完形	6.5cm 出溝
8	土師器	環	9.8	3.4	8.1	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 1/2残存	IV区
9	土師器	環	10.6	5.5	8.7	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ 1/2残存	V区
10	土師器	環?	—	—	—	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ (E)	IV区
11	土師器	瓶	17.1	5.3	13.4	ハケナデ	ヘラナデ ハケド	ヘラナデ ハケド	ヘラナデ ハケド	ヘラナデ 2/3残存	II区
12	土師器	瓶	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ 口縁欠損	2cm 周溝
13	土製品	新規有	径4.1	底径0.7	3.0	—	—	—	—	重量52.0g	II区
14	土製品	円盤	径8.0	—	6.1	ヘラナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	VI区
15	土製品	円盤	径2.8	—	1.0	—	—	—	—	重量8.49g	D1
16	土製品	円盤	径3.7	—	0.7	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	周溝
17	土製品	円盤	径2.4	—	0.55	褐色略變	—	—	—	重量3.9g	IV区
18	土師器	手捏	—	1.8	(2.0)	—	—	—	—	ミニチュア 重量13.9g	0cm IV区
19	器種	馬	骨	骨粉	馬人頭	馬人頭	馬人頭	馬人頭	馬人頭	所見	出土位置
20	器種	砂岩	砂岩	完形	8.9	7.0	3.4	306.26	—	—	IV区
21	器種	砂岩	砂岩	完形	4.3	2.6	2.7	43.73	—	—	IV区
22	器種	砂岩	砂岩	完形	(5.4)	3.8	0.7	17.76	—	—	II区
23	器種	砂岩	砂岩	完形	14.0	4.9	4.5	378.00	I・下端部に斜打痕	—	VII区
24	器種	砂岩	砂岩	完形	13.0	5.6	4.4	520.00	正面と右側にすり面	—	V区
25	器種	砂岩	砂岩	完形	13.8	6.0	2.4	326.00	下端部と左側に斜打痕	—	5.5cm
26	器種	石	黑色色トナード	完形	(1.4)	(1.8)	(0.4)	(1.08)	上部欠損	—	II区 I層
27	口	磨石	磨石	完形	0.42	0.65	0.25	0.27	—	—	1cm
28	臼玉	磨石	磨石	完形	0.50	0.84	0.32	0.48	—	—	0cm
29	臼玉	磨石	磨石	完形	0.49	0.70	0.29	0.48	—	—	0cm
30	臼玉	磨石	磨石	完形	0.45	0.75	0.29	0.45	—	—	0cm
31	臼玉	磨石	磨石	完形	0.32	0.72	0.18	0.34	—	—	0cm
32	臼玉	磨石	磨石	完形	0.47	0.70	0.21	0.32	—	—	0cm
33	臼玉	磨石	磨石	完形	0.28	0.70	0.20	0.22	—	—	0cm
34	臼玉	磨石	磨石	完形	0.38	0.51	0.24	0.16	—	—	0cm
35	臼玉	磨石	磨石	完形	0.40	0.63	0.20	0.28	—	—	>17cm P2
36	臼玉	磨石	磨石	完形	0.31	0.65	0.30	0.17	—	—	0cm
37	臼玉	磨石	磨石	完形	0.25	0.64	0.21	0.16	—	—	0cm
38	臼玉	磨石	磨石	完形	0.30	0.65	0.20	0.16	—	—	2cm
39	臼玉	磨石	磨石	完形	0.36	0.60	0.20	(0.18)	—	—	0cm
40	臼玉	磨石	磨石	完形	0.29	0.41	0.11	0.10	—	—	1cm
41	臼玉	磨石	磨石	完形	0.30	0.66	0.22	0.21	—	—	0cm
42	臼玉	磨石	磨石	完形	0.38	0.74	0.23	0.34	—	—	0cm
43	臼玉	磨石	磨石	完形	0.22	0.67	0.26	0.14	—	—	1cmホリカ

第55表 H55号住居出土遺物観察表

出土遺物は覆土中を中心に出土したが、白玉等はピット付近の床面上から多く出土した。1～3は土師器壺である。いずれも須恵器模倣壺のタイプで、1は内面黒色処理されている。4は須恵器ハソウの口縁部と考えられる。胎土に白色粒子を多く含み、内面に自然釉が付着している。5～9は土師器甕で、いずれも小型のタイプである。11は小型の單孔瓶である。10は大型の把手付甕の把手部分と考えられ、丁寧に磨かれている。12は直口壺であり、東壁の壁溝内より出土した。口縁部を欠損しているが、ほぼ完形である。13は土製の筋轆車で覆土中からの出土である。14～17は土製円盤であり、大小はあるが、いずれも土師器の壺甕片を再利用したものである。18は土製ミニチュアの壺と考えられるもので、口縁部が欠損している。19と20は砥石である。21は砥石とも考えたが、石材が粘板岩のため砥石とは考えにくく、磨製石斧的なものとして報告する。22～24は磨り石や敲き石である。25は石鎌で先端部を欠損する。26～43は白玉で、いずれも小型のタイプである。先に述べたが、ピット脇の床面上から広がって出土した。

これらの出土遺物より、本址は6世紀前半に位置づけられると考えられる。

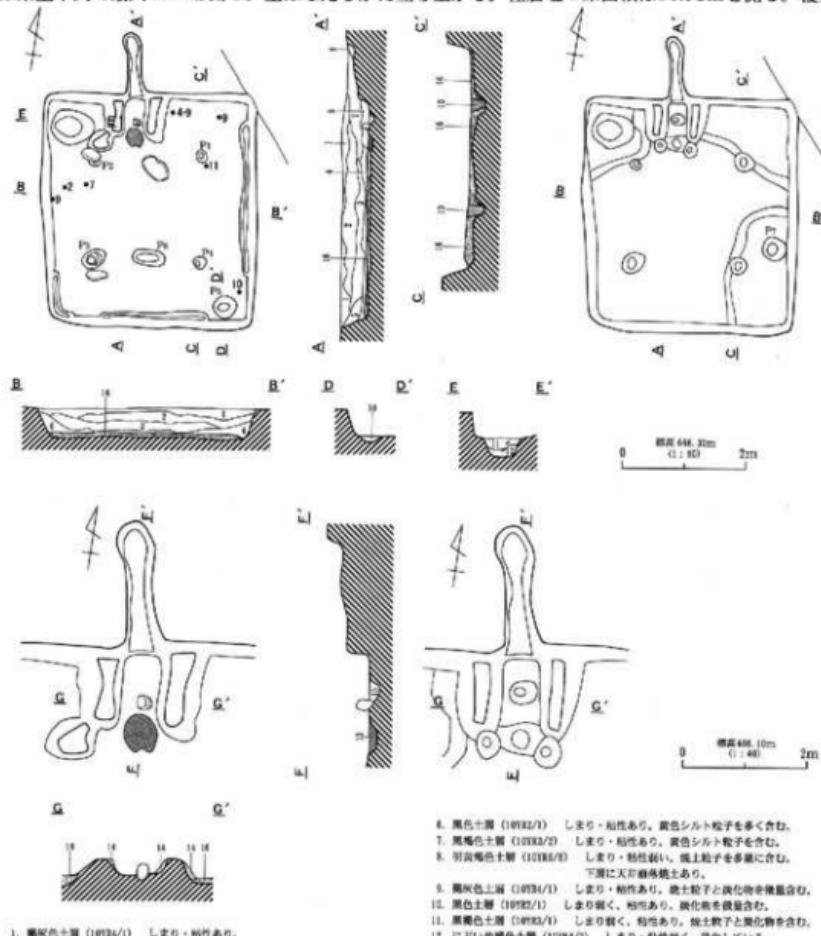


第91図 H56号住居址出土遺物実測図

(56) H56号住居址 (第91-92図、写真図版四十七)

本住居址は、調査区北側であるゾー14.15、タ-14.15Grに位置する。残存状態は住居址北東コーナーの一部が削平されている他は、良好である。

形態はほぼ正方形を呈する。規模は北壁3.30m・南壁3.14m・西壁3.52m・東壁3.60mで、壁高さは東壁中央で最大43cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は10.93m²を測る。覆土



6. 黒色土層 (10YR2/1) しまり・粘性あり。黄色シルト粒子を多く含む。

7. 黒褐色土層 (10YR2/2) しまり・粘性あり。黄色シルト粒子を含む。

8. 白黒褐色土層 (10YR8/1) しまり・粘性弱い。白色粒子を多量に含む。

下層に灰青色粘土あり。

9. 灰灰黑色土層 (10YR4/1) しまり・粘性あり。鐵・鉄粒子と炭化物を微量含む。

10. 黑灰色土層 (10YR2/1) しまり最も強く・粘性あり。炭化物を微量含む。

11. 黑褐色土層 (10YR2/2) しまり最も弱く・粘性あり。鐵・鉄粒子と炭化物を含む。

12. にじみ灰褐色土層 (10YR4/2) しまり・粘性弱く・砂化している。

13. 赤色土層 (10R4/3) しまりあり・粘性弱い。上層軟化している。

14. 開闢色土層 (10YR3/3) しまり・粘性あり。

15. 暗赤褐色土層 (5YR2/3) 淡化物・鐵・鉄粒子少量混入。

16. 黄褐色土層 (10YR6/6) しまり・粘性あり。上層軟化している。

第92図 H56号住居址実測図

No.	種別	器種	法 算			成 形・調 整・文様			商 奈	出土位置
			口縁部	底面	断面	内 面	外 面			
1	土器器	壺	12.6	10.6	(4.5)	王字ギー黒色処理	口縁さきガリ 武部ヘラケズリ・ミ打本	円板実測 口縁1/3残存	Ⅱ区 背裏六	
2	L師器	高杯	14.0	—	—	王字ギー	ヘラケズリ	圓板実測 口縁1/2残存	4cm Ⅱ区	
3	須恵器	ハソウ	14.4	—	—	ロクロナゲ	波状文	圓板実測 口縁1/7残存	Ⅱ区	
4	L師器	甕	13.8	1.9	12.5	ヘラナゲ	ヘラケズリ	完全実測 底部完形	0cm カマド 前穴	
5	L師器	甕	14.8	—	—	ハケ目	ハケ目	圓板実測 口縁1/3残存	Ⅱ区 カマド	
6	土師器	甕	—	5.4	—	ヘラナゲ	ヘラケズリ	完全実測 武部2/3残存	1区 前方	
7	L師器	甕	—	5.5	—	ヘラナゲ	ハケ目	完全実測 底部完形	0cm 1区	
8	L師器	甕	—	5.7	—	背開口底	ナゲ	完全実測 底部完形	1区	
9	L師器	甕	19.4	5.6	35.5	ヘラナゲ	ヘラケズリ	完全実測 2/3残存	0~15cm P1	
12	土製品	円盤	6.1	—	0.8	ナゲ	ナゲ	破片実測	Ⅱ区	
13	土製品	円盤	6.7	—	0.6	ナゲ	ハケ目	破片実測	Ⅲ区	
16	器種	芯材	残存部	最大長	最大幅	最大厚	重 盛	所 見		出土位置
10	敲石	礫石安山岩	完形	13.3	6.8	4.3	630.00	下輪廻に鐵行窓		1cm
11	敲石	礫石安山岩	完形	16.5	8.4	4.6	900.00	上・下通部と右側に鐵打板		1cm

第56表 1156号住居址出土遺物観察表

はおむね自然堆積で4層に分かれる。床は全体的に硬質であり、特にカマド前面と住居址中央部分が非常に硬かった。貼床は2~10cmの厚みで貼られていた。壁溝は東壁と南壁・南西コーナーで検出された。規模は17~30cm・深さ1~5cmを測る。断面はU字形である。ピットは7ヵ所確認され、P1~P4が主柱穴と考えられる。規模はP1が径21cm・深さ24cm、P2が径18cm・深さ29cm、P3が径40cm・深さ26cm、P4が径22cm・深さ26cm、P5が径36cm・深さ12cm、P6が径52cm・深さ5cm、P7が径38cm・深さ12cmを測る。また、本址は住居址の北西コーナー角に貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認された。形態は橢円形で、規模は長軸68cm・短軸56cm・深さ34cmを測る。

カマドは北壁中央やや西よりで検出された。残存状況は良好で、煙道部は長く伸びるタイプである。煙道の規模は長さ109cmで、やや先端がピット状に丸まっている。袖部は地山を芯材としており、今回の調査では被覆した土はあまり見られなかった。高さは20cmを測る。燃焼部には支脚石が原位置を保って出土した。火床部は良く焼けており硬質化していた。焼土の厚みは6cmを測る。また、カマド掘り方時に焚口部に2個のピットが検出され、焚口に立てられた川原石の埋め込み穴と考えられる。

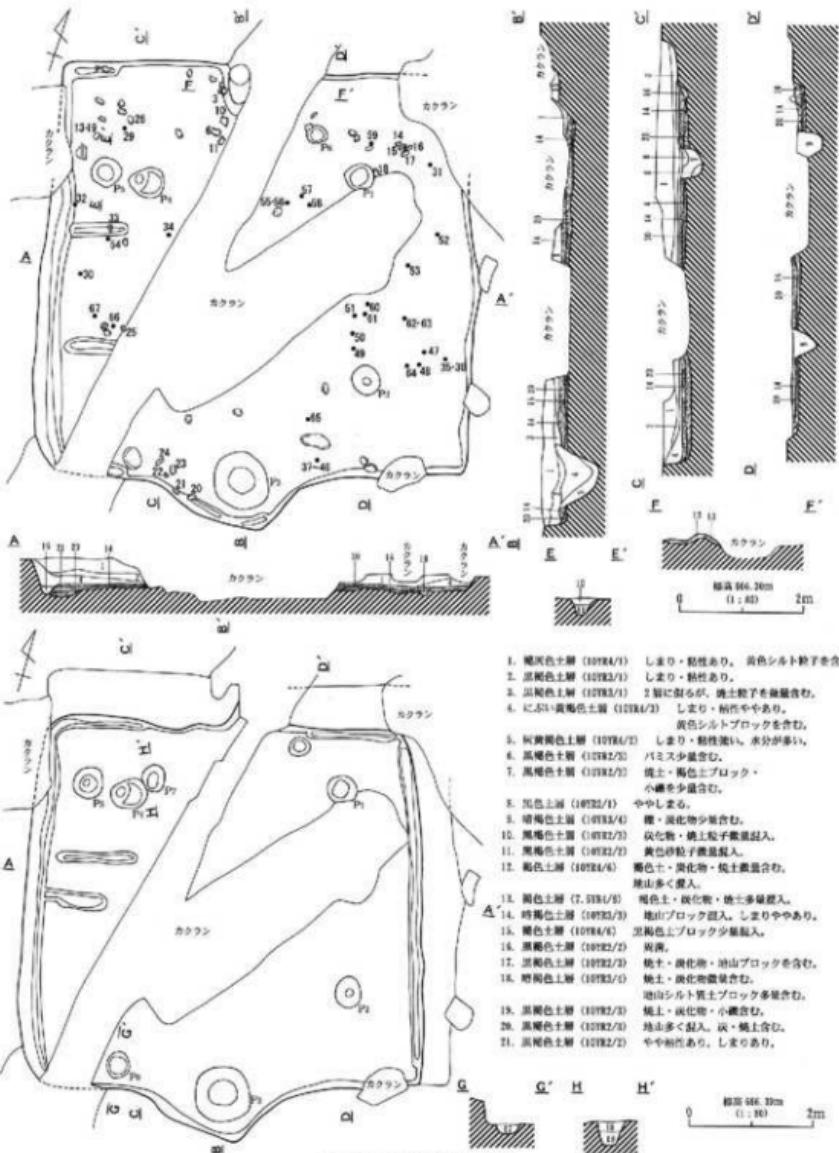
出土遺物は礫土中からが多く、特にカマド西脇の覆土から出土した。1は土師器壺であり、内面黒色処理されている。2は土師器高杯である。3は須恵器ハソウの口縁部であり、口唇部下に波状文が描かれている。胎土はよく精錬されている。4~7と9は土師器甕である。10と11は敲石である。12と13は土製円盤で、土師器甕片の転用品である。

本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

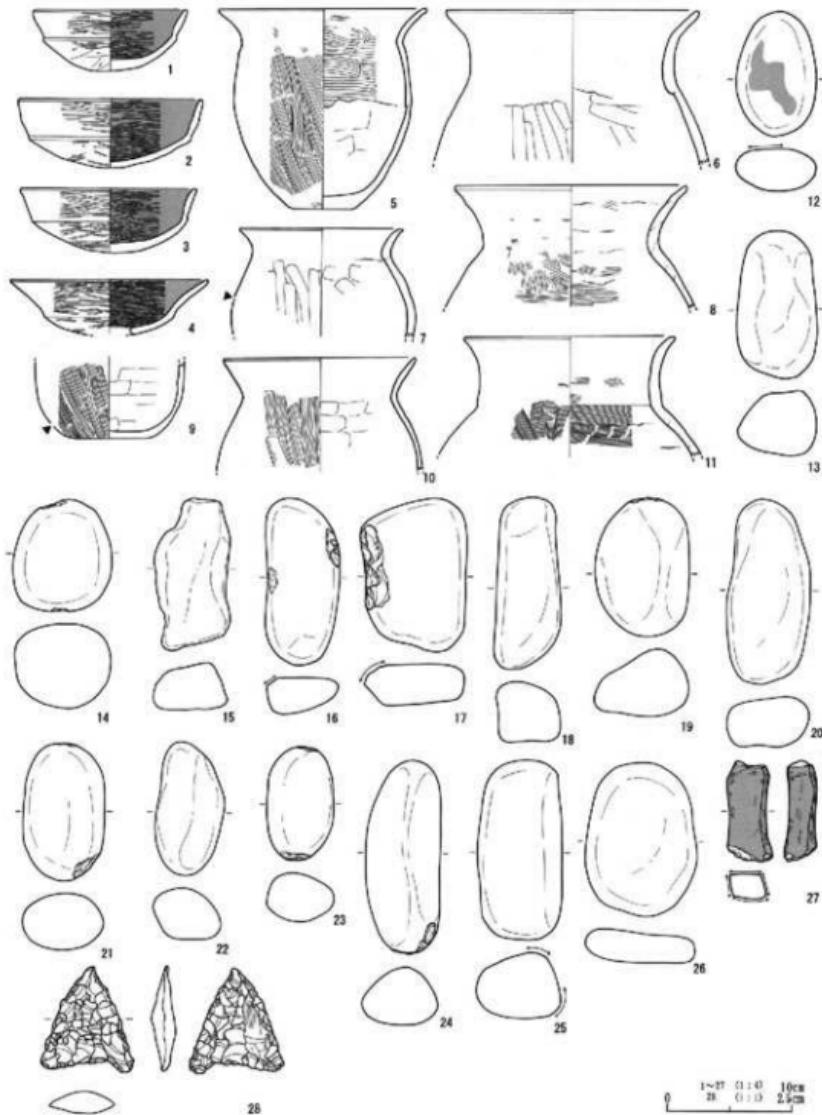
(57) H57号住居址 (第93~95図、写真図版四十八・四十九)

木住居址は、調査区北側であるセ-17.18.19、ゾ-17.18.19Grに位置する。残存状態は住居址中央部分と北東コーナー端がカクランにより壊されている。

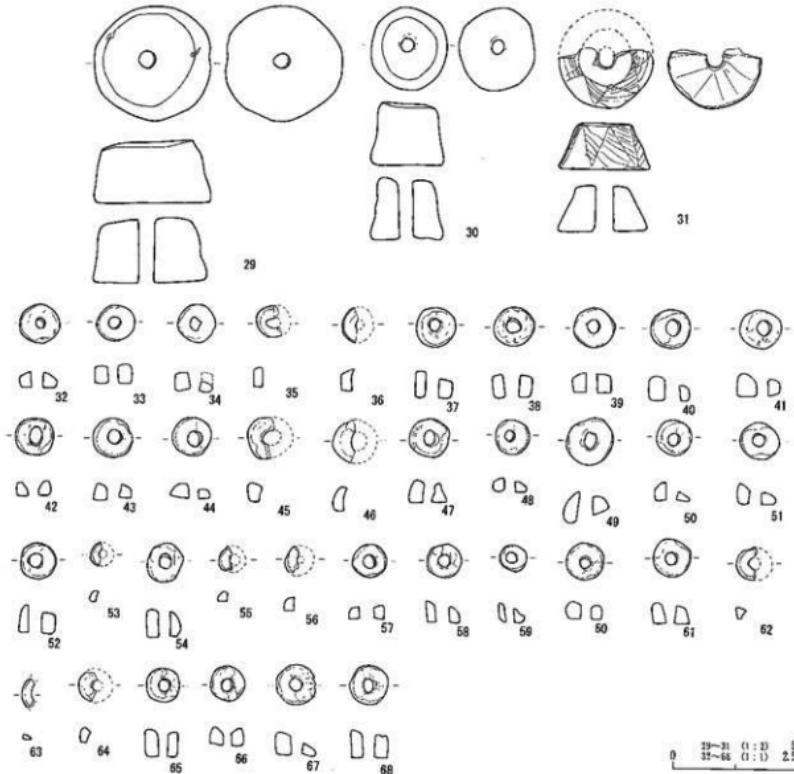
形態は方形を呈する。カマドは北壁中央に造られていたと考えられるがカクランにあたり、ほとんど削平されていた。規模は北壁5.37m(残存)・南壁5.74m(残存)・西壁6.42m・東壁4.50m(残存)で、壁高さは西壁南寄りで最大46cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる部分と、垂直に立ち上がる部分がある。主軸方位はN-16°-Wを示す。住居址の床面積は、床を削平したカクラン部分も含めて42.00m²を測る。覆土はおむね自然堆積であった。床はカマド周辺を中心に硬質であった。壁溝は西壁に検出された。断面はU字形で、幅は約14~45cm・深さ3~14cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め、8箇所確認された。主柱穴はP1とP2とP4と考えられる。また、P3は南壁に拡張部を持つ貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径48cm・深さ42cm、P2が径48cm・深さ37cm、P3が長軸94cm・短軸88cm・深さ62cm、P4が径58cm・深さ51cm、P5が径50cm・深さ29cm、P6が径35cm・深さ15cm、P7が径43cm・深さ44cm、P8が径42cm・深さ14cmを測る。



第93図 H57号住居址実測図



第94圖 H57號住居址出土遺物素描圖



第95図 H57号住居址出土遺物実測図

號	種別	目録	法 單 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	成形・調整・文様		圖 考	出土位置
				内 面	外 面		
1	土師器	环	12.1 10.8 4.9 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	ミガキ一黑色處理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	円盤火窯 1/3残存	I区
2	土師器	环	18.0 13.0 8.5 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	ミガキ一黑色處理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	円盤火窯 1/6残存	I区
3	土師器	环	14.2 12.5 5.2 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	ミガキ一黑色處理	ミガキ	完全失焼 4/5残存	0cm
4	土師器	环	16.0 10.4 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	ミガキ一黑色處理	口縁ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	円盤火窯 1/7残存	II层床
5	土師器	環	16.8 5.4 16.0 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	ハケ口 ヘラナデ	ハケ口	円盤火窯 1/2残存	I区 II区床
6	土師器	環	20.0 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	— ヘラナデ	ヘラケズリ	円盤火窯 口縁1/3残存	0cm
7	土師器	環	13.2 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	— ヘラナデ	ヘラナデ	完全失焼 口縁3/4残存	II区
8	土師器	環	18.8 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	— ハケ口	ハケ口	円盤火窯 口縁1/4残存	II区床 III区
9	土師器	環	7.2 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	— ヘラナデ	ハケ口	完全失焼 底部完焼	II层
10	土師器	環	13.6 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	— ヘラナデ	ハケ口	円盤火窯 口縁1/3残存	1.5cm
11	土師器	環	17.0 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	— ハケ口	ハケ口	圓盤火窯 口縁1/2残存	1cm II区
29	土製品	筋繩車	絆4.6 孔径0.7 2.6 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	—	—	重量64.87g	18cm
30	土製品	筋繩車	絆3.3 孔径0.6 2.5 <small>上部表面 下部表面 側面 底面</small>	—	—	重量24.1g	0cm

第57表 H57号住居址出土遺物觀察表

No.	層 級	基 材	理学率	最大径	最大幅	最大厚	重 量	所 見	用土位置
12	虚石	輝石安山岩	充填	9.9	6.4	3.1	314.00	正面にすり面	
13	礫み物石	花崗岩	充填	11.8	6.5	5.6	600.00		0cm
14	礫み物石	輝石安山岩	充填	9.0	7.9	6.8	610.00	上・下端部に敲打痕	0cm
15	礫み物石	黒炭色チャート	充填	12.2	6.1	3.9	450.00		0cm
16	礫み物石	砂岩	充填	13.3	5.9	3.0	370.00	両側に敲打痕(左側の例は崩壊している)	0cm
17	礫み物石	輝石安山岩	充填	12.2	8.4	3.5	660.00	左側に敲打痕	0cm
18	礫み物石	ホルンフェルス	充填	13.7	5.4	5.1	590.00		0cm
19	礫み物石	輝石安山岩	充填	11.0	7.6	5.5	630.00	上端部に敲打痕	0cm
20	礫み物石	ホルンフェルス	充填	14.8	6.7	4.2	680.00		11cm
21	礫み物石	輝石安山岩	充填	10.9	6.5	4.2	470.00	上・下端部に敲打痕	15cm
22	礫み物石	花崗岩	充填	10.2	5.5	4.2	320.00		7cm
23	礫み物石	輝石安山岩	充填	9.0	5.4	4.0	270.00	上・下端部に敲打痕	0cm
24	礫み物石	砂岩	充填	15.5	6.1	4.8	640.00	被熱より(下部分が黒炭色になっている) 下端部に敲打痕	1cm
25	礫み物石	角閃安山岩	充填	14.1	6.3	5.4	850.00	被熱より(右側が複数に崩くなっている)	7cm
26	礫み物石	輝石安山岩	充填	12.3	9.0	2.7	470.00		2cm
27	灰石	花崗岩	充填	8.0	3.7	2.3	94.45	破壊面4(正・裏・両側) 上・下は石材の面	0cm
28	白雲石	馬鹿石		2.2	1.8	0.48	1.08		0cm
31	石質粉本	漂石	充填	18.7	5.8	1.8	197.3	不規則な断面がほどこされている	0cm
32	白玉	透石	充填	0.32	0.75	0.20	0.27		0cm
33	白玉	漂石	充填	0.39	0.74	0.22	0.31		0cm
34	白玉	透石	充填	0.40	0.79	(0.20)	(0.26)		1cm
35	白玉	透石	充填	0.41	0.209	0.21	(0.16)	破片	0cm
36	白玉	漂石	充填	0.40	—	—	0.09	破片	0cm
37	白玉	透石	充填	0.51	0.80	0.30	0.45		0cm
38	白玉	漂石	充填	0.49	0.80	0.29	0.47		0cm
39	白玉	透石	充填	0.40	0.82	0.29	0.39		0cm
40	白玉	透石	充填	0.46	0.80	0.30	0.36		0cm
41	白玉	漂石	充填	0.45	0.82	0.25	0.34		0cm
42	白玉	漂石	充填	0.31	0.79	0.33	0.25		0cm
43	白玉	漂石	充填	0.32	0.77	0.28	0.23		0cm
44	白玉	透石	充填	0.28	0.90	0.28	0.20		0cm
45	白玉	漂石	充填	0.44	—	—	(0.20)	破片	0cm
46	白玉	漂石	充填	0.50	—	—	(0.20)	破片	0cm
47	白玉	漂石	充填	0.45	0.80	0.20	0.13		0cm
48	白玉	漂石	充填	0.30	0.68	0.18	0.21		0cm
49	白玉	上質	充填	0.65	0.96	0.33	(0.42)	黑色	0cm
50	白玉	漂石	充填	0.39	0.70	0.28	0.24		0cm
51	白玉	透石	充填	0.39	0.79	0.24	0.32		0cm
52	白玉	透石	充填	0.58	0.70	0.30	0.38		0cm
53	白玉	漂石	(0.20)	—	—	(0.03)	破片		0cm
54	白玉	透石	充填	0.52	0.73	0.25	0.48		0cm
55	白玉	透石		0.19	—	(0.04)	破片		-11.5cm
56	白玉	透石		0.29	—	(0.08)	破片		-11.5cm
57	白玉	透石	充填	0.33	0.68	0.26	0.20		-9cm
58	白玉	漂石	充填	0.42	0.66	0.26	0.25		-10.5cm
59	白玉	透石	充填	0.40	0.51	0.20	(0.16)	欠損有り	8cm
60	白玉	透石	充填	0.35	0.72	0.20	0.28		-7.5cm
61	白玉	漂石	充填	0.40	0.76	0.28	0.34		-6cm
62	白玉	透石	(0.21)	—	—	(0.08)	破片		3.5cm
63	白玉	透石	(0.11)	—	—	(0.02)	破片		3.5cm
64	白玉	透石		0.30	—	(0.08)	破片		-6cm
65	白玉	透石	充填	0.37	0.66	0.23	0.40		9.5cm
66	白玉	透石	充填	0.38	0.70	0.22	0.29		-2cm
67	白玉	透石	充填	0.48	0.80	0.25	0.34		-1cm
68	白玉	透石	充填	0.60	0.76	0.30	0.53		II区

第58表 H57号住居址出土遺物観察表

カマドは詳細が不明であるが、一部左袖の残存のような部分とカクラン内に焼土が一部確認されたことから、北壁中央に存在したと考えられる。

また、本址は掘り方検出時に2枚目の貼床である、第20層が確認された。それに伴って、北壁側と東壁側で住居址の内側に壁溝を伴う立ち上がりが確認された。よって本址は拡張を行った事が考えられる。拡張前の住居址は形態が方形で、規模は北壁5.60m、南壁5.25m、西壁5.71m、東壁5.62mを測る。住居址の床面積は35.41m²で、住居址規模を比べると約120%の拡張である。壁溝は北壁と東壁、西壁で確認され、規模は幅15~38cm・深さ1~10cmを測る。また、西壁からは間仕切り溝が伸び

ていた。

柱穴と考えられるピットは拡張後の位置と変わらず、柱の移動はなかったようである。カマドに関しては、同じく位置は不明であったが、掘り方時に北壁中央が焚口部のように曲線的に掘り込まれていたことから、北壁中央にあったと考えられる。

出土遺物は拡張後の住居址床面を中心に出土した。特に白玉が多く出土したのが特徴的である。1~4は土師器壺である。1~3は須恵器模倣タイプの壺で、4は口縁部が大きく外反するタイプである。いずれも内面黒色処理され、丁寧なミガキが施されている。5~11は土師器甕であり、5.7.9.10は小型甕である。ハケ目の残るナデを施すものと、ヘラケズリを行われたものがある。12は磨石である。片面中央に磨り面が確認できた。13~26は編み物石と考えられ、住居址の北西コーナーと北東コーナー及び南壁際西寄りからまとめて出土した。27は砥石であり4面の砥面がある。28は石鎌である。29~31は紡錘車で29と30は土製品、31は滑石製の石製紡錘車で、表面に刻線による粗い不規則な鋸歯文が描かれている。32~68は白玉であり、37点出土した。32~54は拡張後の床面上から出土した。55~68は出土層位から、拡張前の床面上に伴うものと考えられる。

本址はこれらの出土遺物より6世紀前半に位置づけられる。

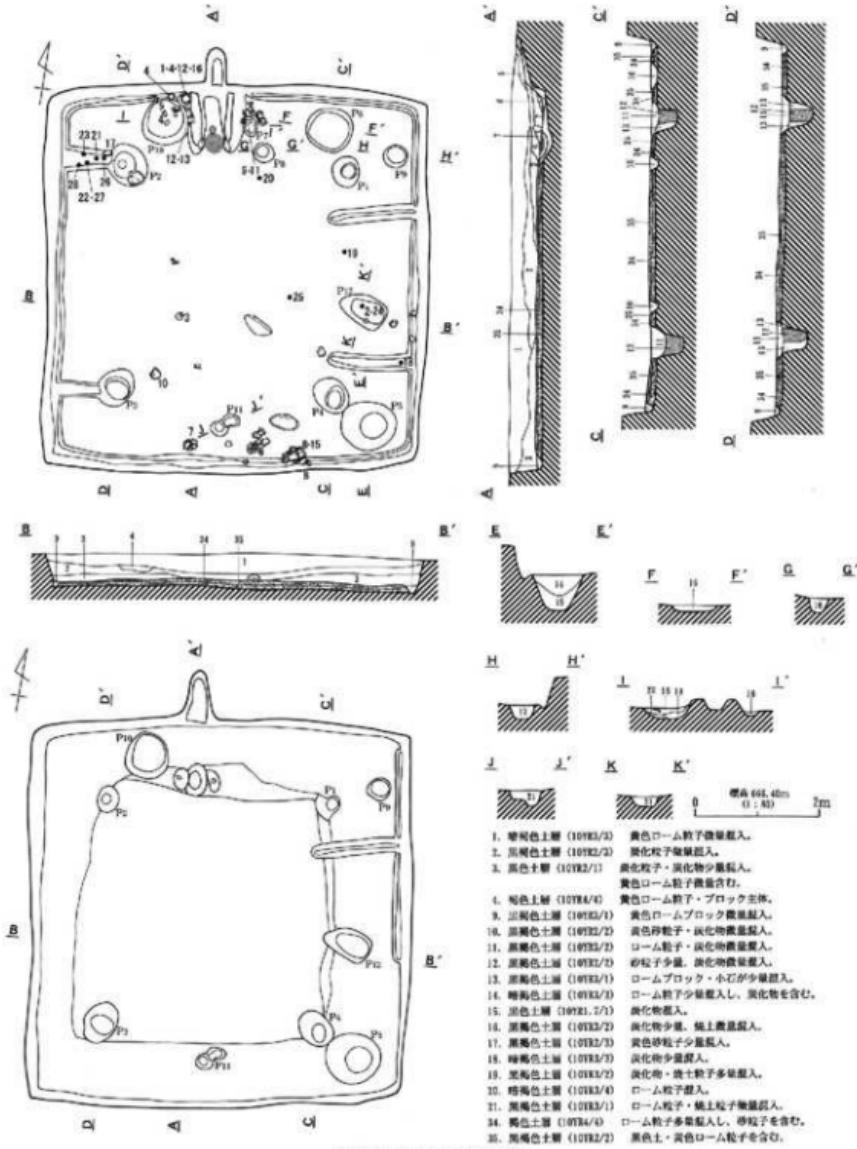
(58) H58号住居址 (第96~98図、写真図版五十・五十一)

本住居址は、調査区北側であるゾ-16.17、タ-16.17、チ-16.17Grに位置する。残存状態は重複関係も無く、非常に良好である。

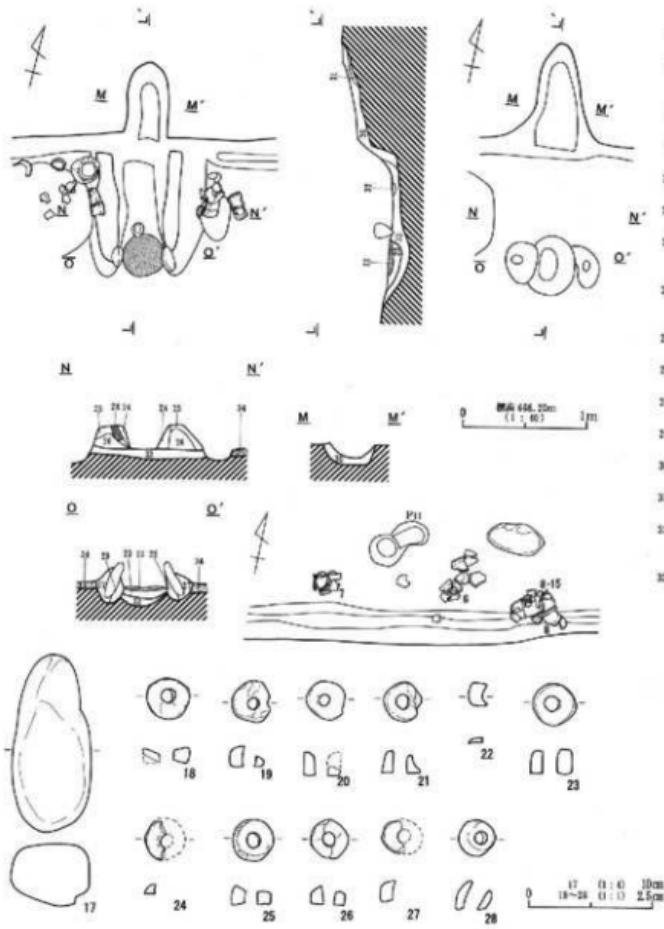
形態は正方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁5.98m・南壁5.90m・西壁5.86m・東壁5.66m、壁高さは北壁カマド西脇寄りで、最大49cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-10°-Wを示す。住居址の床面積は33.73m²を測る。櫛土はおおむね自然堆積であり、

No.	種別	器種	法量 (口徑(高さ) 底面(所持面) 横面(所持面))	成形・調整・文様		備考	出土位置
				内面	外面		
1	土師器	甕	17.0 10.8 (3.4)	ミガキ 黒色處理	内面ミガキ 旋部ヘラケズリ→ミガキ	回転支刷 1/4段付	1.5cm I・II区
2	土師器	甕	11.6 6.8 11.2	ヘラナデ 黒色處理	ヘラケズリ	回転支刷 1/3段付	0cm II・IV区
3	土師器	甕	11.7 8.4 11.6	ハケ目 黒色處理	ヘラケズリ	完全支刷 ほぼてん形	8cm III区
4	土師器	甕	11.5 5.3 10.7	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷 旋部充満	-5~8.5cm
5	土師器	甕	14.8 -	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転支刷 口縁1/3段付	0cm
6	土師器	甕	12.9 7.4 17.9	ハケ目	ハケ目 黒部木挽底	完全支刷 2/3段付	0cm II・IV区
7	土師器	甕	14.3 6.8 15.8	ハケ目	ヘラケズリ	完全支刷 ほぼてん形	2cm II・IV区
8	土師器	甕	14.2 -	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷 黒部欠損	6.5cm IV区
9	土師器	甕	14.2 5.0 (18.0)	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷	2cm P7
10	土師器	甕	- 7.6	ハケ目	ハケ目 ハラナデ	完全支刷 旋部充満	7cm
11	土師器	甕	13.5 -	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷 黒部欠損	2cm P7 カマド
12	土師器	甕	13.0 -	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転支刷 回転支刷	0cm II・IV区
13	土師器	甕	19.1 -	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷 口縁2/3段付	3cm
14	土師器	甕	17.0 6.4 27.9	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転支刷 残底充満	0cm II・IV区
15	土師器	甕	16.9 7.4 35.0	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷	8.5cm
16	土師器	甕	18.8 6.9 33.9	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全支刷 完形品	1cm
No.	器種	材質	残存部	最大長	最大幅	所見	出土位置
17	編み物石?	輝石安山岩	光形	14.1	6.4	5.0	69.00 破壊有り(黒くなっている)
18	白玉	滑石	光形	0.33	0.85	0.29	(0.32) 4.5cm 間仕切り
19	白玉	滑石	光形	0.40	0.70	0.25	0.30 0cm
20	白玉	滑石	光形	0.50	0.75	0.22	(0.37) 0cm
21	白玉	滑石	光形	0.45	0.76	0.27	0.38 2cm 間仕切り
22	白玉	滑石	(0.10)	-	0.03	破片 1cm 間仕切り	
23	白玉	滑石	光形	0.49	0.85	0.31	0.56 1.5cm 間仕切り
24	白玉	滑石	光形	0.20	-	(0.08)	0cm 間仕切り
25	白玉	滑石	光形	0.38	0.90	0.28	0.36 1.5cm
26	白玉	滑石	光形	0.40	0.72	0.21	0.30 0cm 間仕切り
27	白玉	滑石	光形	0.44	-	(0.14)	破片 1cm 間仕切り
28	白玉	滑石	光形	0.49	0.71	0.25	0.31 0cm 間仕切り

第59表 H58号住居址出土遺物観察表



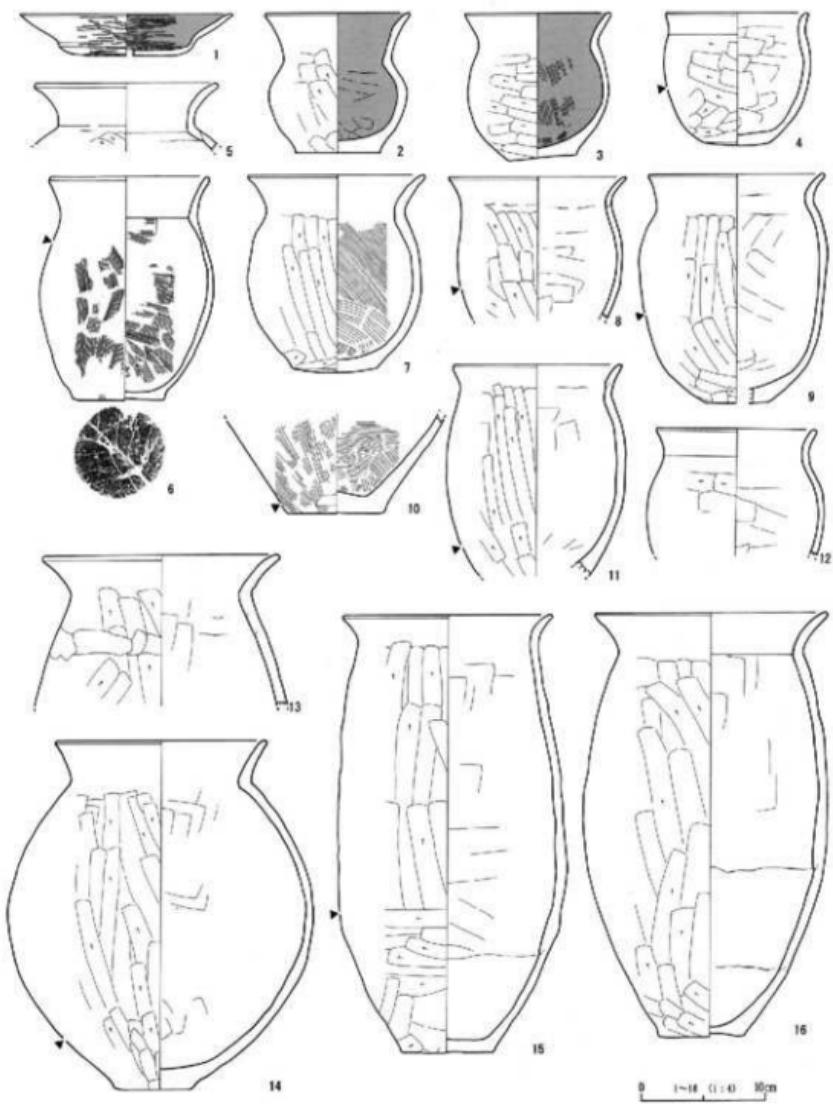
第96図 H58号住居址実測図



第97図 H58号住居址カマド及び出土遺物実測図

3層に分かれる。床はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床の厚みは2~14cmを測る。壁溝は住居址を全周し、東壁と西壁にそれぞれ2箇所間仕切り溝が検出された。壁溝の形態はU字形で、幅は約18~38cm・深さ1~9cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め、12箇所確認された。主柱穴はP1~P4、P5とP6とP10は貯蔵穴、P11が入り口施設と考えられる。規模はP1が径50cm・深さ45cm、P2が径70cm・深さ53cm、P3が径67cm・深さ50cm、P4が径62cm・深さ50cm、P5が径88cm・深さ62cm、P6が径74cm・深さ11cm、P7が径36cm・深さ11cm、P8が径33cm・深さ27cm、P9が径36cm・深さ24cm、P10が径76cm・深さ17cm、P11が径49cm・深さ28cm、P12が径77cm・深さ20cmを測る。住居址の掘り方は中央部分が方形に一段高くなる形態で、高さは4~7cmの段差がある。

3. 布時褐色土層 (T.EII2/2)
炭化物・燒土粒子・灰斑。
6. 黒褐色土層 (T.IV2/2)
黒色ローム・焼土・灰斑混入。
7. 楊柳褐色土層 (T.IV2/2)
灰土・ブロック・炭化物混入。
8. 布時褐色土層 (T.IV2/2)
燒土・ブロック多量混入。
11. にじみ赤褐色土層 (T.IV2/4)
火事でカラチ。
22. 細土褐色土層 (T.IV2/4)
燒土。
24. 細土褐色土層 (T.IV2/4)
燒土・ブロック・燒土粒子・炭化物混入。
25. 布時褐色土層 (T.IV2/2)
炭化物・焼土・灰斑混入。
26. 布時褐色土層 (T.IV2/4)
黒色ローム・ブロック混入。
27. 黑褐色土層 (T.IV2/2)
燒土・粒子・灰斑混入。
31. 黑褐色土層 (T.IV2/1)
ローム・粒子・炭化物。
32. 黑褐色土層 (T.IV2/2)
ローム・粒子・炭化物・燒土・ブロック多量混入。
33. にじみ黒褐色土層 (T.IV2/2)
黒褐色土・ブロック多量混入・ローム粒子・移動土混入。



第98图 H558号住宅出土遗物素描图

カマドは北壁中央に検出された。残存状況は良好で、焚口部や袖部が検出された。規模は煙道部長さ73cm、袖高さは右袖が27cm、左袖が23cmを測る。袖はロームブロックを混入した褐色土で構築されていた。焚口部は梢円の川原石を2本立てた状態で検出された。火床部は良く焼けており、上面は硬質化していた。焼土の厚みは11cmを測る。また火床部奥には支脚石が立った状態で検出された。火床部及び煙道部も構築土がある。

出土遺物はカマド周辺の床面上や、入り口付近と考えられる南壁中央寄りから、まとめて出土した（写真図版五十一参照）。1は土師器壺であり、内面黒処理されていた。床面より1.5cm浮いた状態でカマド西脇より出土した。2～12は土師器甕でいずれも小型のタイプである。2と3は形態的に良く似ており、内面も共に黒色処理されていた。6は住居址中央部の床面上から出土し、胴部は細かなハケ目の残るナデが施され、底部に木葉痕が残る。7はほぼ完形で、南壁寄りの床面から出土した。胴部外側は縱方向のヘラケズリ、内面はハケ目の残るナデが施されている。13～16は土師器甕で、13.15.16は胴が長いタイプのいわゆる「長胴甕」であり、14は壺的な要素が残る器形の胴張甕である。14は覆土中からの出土であり、10も含めて混入品の可能性がある。17は形態より編み物石と考えられるが、本址からは1点のみの出土であり不確実である。一部に被熱の痕跡がある。18～28は滑石製の臼玉で、多くが西壁北寄りの間仕切り溝内より出土した。

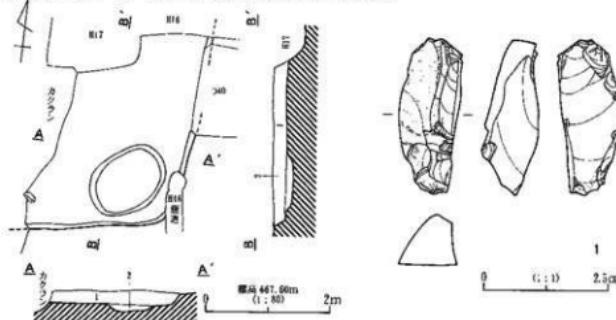
本址はこれらの出土遺物より、6世紀後半に位置づけられる。

(59) H59号住居址（第99図、写真図版五十二）

本住居址は、調査区中央であるト-47.48、ナ-47.48Grに位置する。残存状態は住居址西側をカラン、北側をH16.17号住居址により削平されている。新旧関係は、本址が一番古い。

形態は不明で、規模は南壁2.23m（残存）、東壁2.91m（残存）、壁高さは南壁で最大21cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は、検出部分で5.74m²を測る。覆土はおむね自然堆積であった。床はやや軟質であり、貼床は検出されなかった。南東コーナー部に貯蔵穴と考えられる円形の土坑が検出された。規模は長軸133cm・短軸99cm・深さ9.5cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した黒曜石核の他に、小片で須恵器壺片や土師器甕片が出土したのみである。よって、本址の帰属時期は不明である。



1. 黒褐色土器（Iwakiwa/2）砂質。ロームブロック微量混入。
2. 黒色土器（Iwakiwa/1）ロームブロック微量混入。

第99図 H59号住居址及び出土遺物実測図

No.	器種	素材	残存状	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土地點
1	石器	黒曜石	3.1	1.3	1.1		3.72		I区

第60表 H59号住居址出土遺物観察表

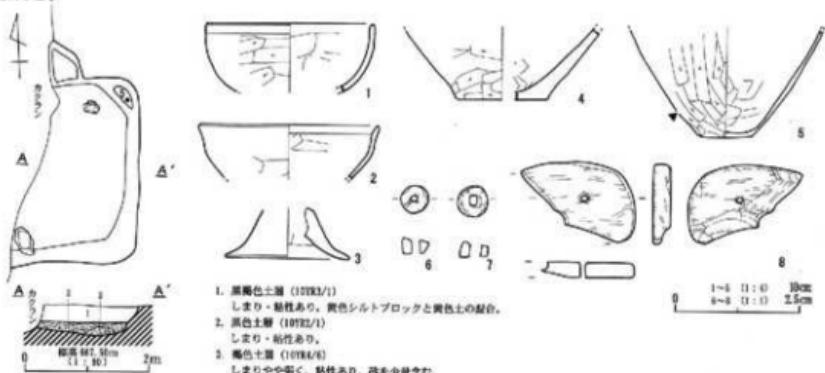
(60) H60号住居址 (第100図、写真図版五十二)

本住居址は、調査区中央であるナ-49.50Grに位置する。残存状態は西側半分がカクランにより大きく壊されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.28m(残存)・南壁1.88m(残存)・東壁2.78mで、壁高さは東壁南寄りで最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は、検出部分で3.79m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは17~30cmで貼られていた。また、本址には北壁側に張り出しのような掘り込みが検出された。

本址からの遺物は覆土中から多く出土したが、5のみは床面上から出土した。1と2は土師器壺でいずれも古墳時代中期後半の所産と考えられる特徴を持つ。3は土師器高杯脚部である。4は土師器壺の底部である。5も土師器壺の胴部から底部の破片であり、特徴からいわゆる「武藏壺」と呼ばれるタイプのものである。6と7は白玉、8は欠損しているがその形態から、剣形の石製模造品と考えられる。

本址は出土遺物が少なく時期の確定は不確実であるが、5の土師器壺の出土層位から9世紀代と考えられる。



第100図 H60号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	持種	法算 〔直径×底径×高さ〕	成形・調整・文様				場所	出土位置
				内面	外面	成形	調整・文様		
1	土師器	壺	13.0	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	日輪尖削	口縁1/3残存
2	土師器	壺	14.6	—	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	日輪尖削	口縁1/4残存
3	土師器	高杯	—	10.0	—	ヘラナデ	テヅ	日輪尖削	脚部1/3残存
4	土師器	壺	—	7.4	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	日輪尖削	脚部1/3残存
5	土師器	壺	—	4.2	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測	底部完形
No.	種別	持種	法算 〔底径×底径×高さ〕	残存部	最大長	最大幅	最大厚	法算	測定
6	白玉	鏡石	完形	0.34	0.53	0.15	0.13		
7	白玉	鏡石	完形	0.30	0.60	0.22	0.17		
8	剣形石製模造品	磨石	—	1.6	2.3	0.3	1.70		

第61表 H60号住居址出土遺物観察表

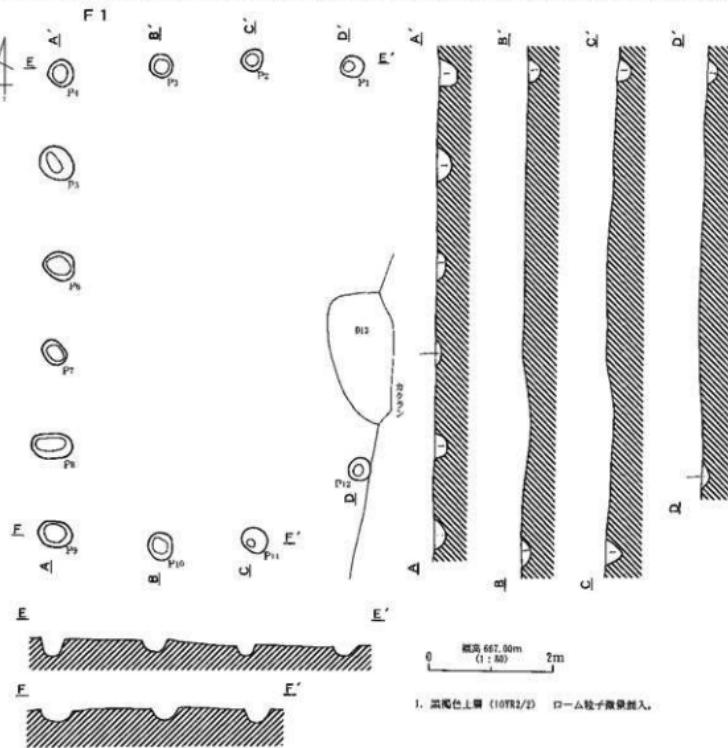
第2節 挖立柱建物址

(1) F 1号掘立柱建物址 (第101図、写真図版五十三)

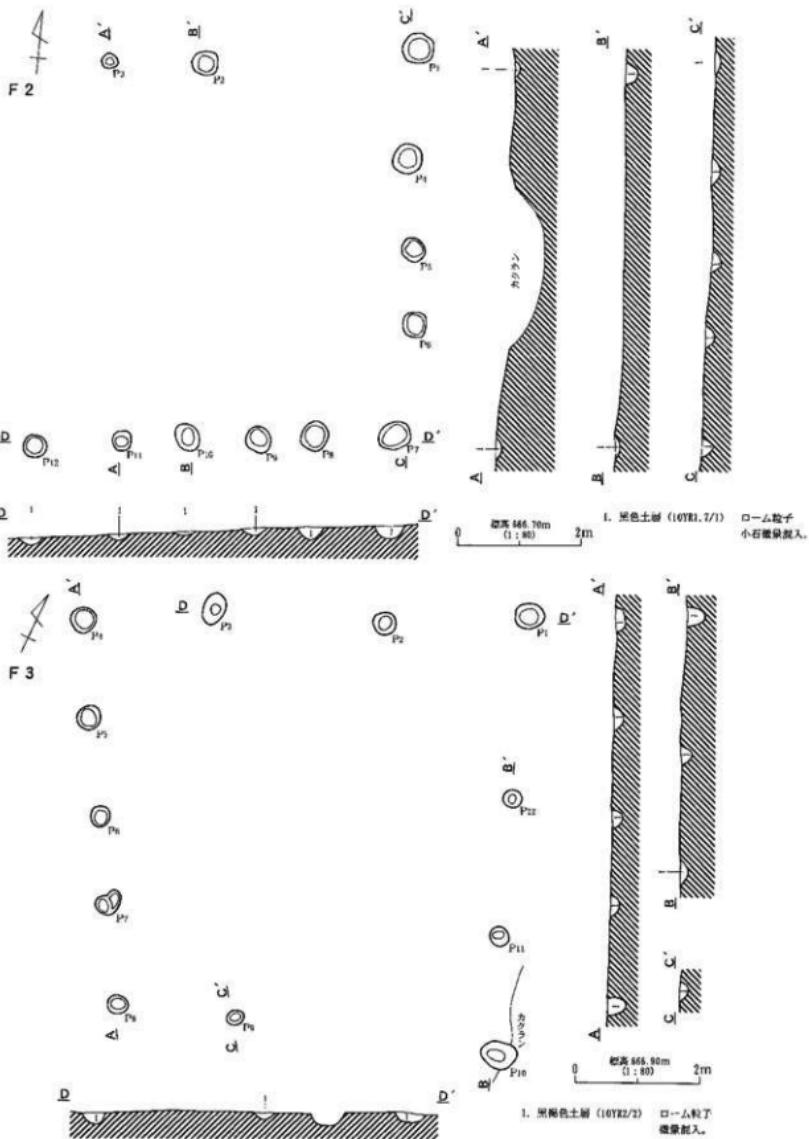
本址は、調査区中央部であるツ-35.36.37、テ-35.36.37Grに位置する。残存状態は東側がカクランにより削平され、柱列が確認できなかった。

形態は南北方向に長い、3間×5間の側柱式建物址である。軸方位はN°を示す。規模は桁行7.50m (P4～P9)・梁行4.63m (P1～P4)で、桁行柱間は1.40～1.62m・梁間柱間は1.47～1.62mを測る。ピット間に囲まれた面積は36.05m²を測る。柱穴の形態はいずれもほぼ円形である。ピットの規模はP1が径39cm・深さ18cm、P2が径37cm・深さ21cm、P3が径38cm・深さ22cm、P4が径45cm・深さ30cm、P5が径61cm・深さ24cm、P6が径51cm・深さ16cm、P7が径42cm・深さ12cm、P8が径66cm・深さ23cm、P9が径57cm・深さ19cm、P10が径46cm・深さ19cm、P11が径44cm・深さ27cm、P12が径37cm・深さ9cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物はなかったが、P3～P5、P8、P10～P12より土師器甕・壺が出土した。これら土師器の特徴は古墳時代後期のものであり、本址の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。



第101図 F 1号掘立柱建物址実測図



第102図 F 2.3号掘立柱物址実測図

(2) F 2号掘立柱建物址 (第102図、写真図版五十三)

本址は、調査区中央部であるト-33.34.35、ナ-33.34.35Grに位置する。残存状態は良好であったが、西側の柱列は確認できなかった。

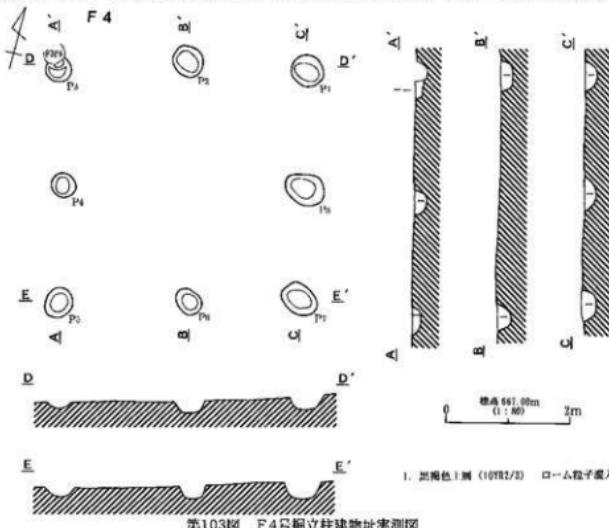
形態は南北方向に長い、4間×5間以上の側柱式建物址である。軸方位はN-4°-Wを示す。規模は桁行5.78m (P7～P12)・梁行6.22m (P1～P7)で、桁行柱間は0.91～1.41m・梁行柱間は1.20～1.82mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ8cm、P2が径45cm・深さ21cm、P3が径27cm・深さ7cm、P4が径48cm・深さ15cm、P5が径40cm・深さ17cm、P6が径41cm・深さ18cm、P7が径56cm・深さ21cm、P8が径49cm・深さ21cm、P9が径45cm・深さ13cm、P10が径48cm・深さ8cm、P11が径32cm・深さ10cm、P12が径36cm・深さ7cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物はなかったが、P1、P2、P4、P10より土師器甕や須恵器片が出土した。特にP4からは土師器甕のいわゆる「武藏甕」が出土している。これらの遺物より本址の帰属時期は平安時代以降と考えられるが、不確実である。

(3) F 3号掘立柱建物址 (第102図、写真図版五十四)

本址は、調査区中央部であるツ-38.39、テ-37.38.39、ト-37.38.39Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は整っていない。

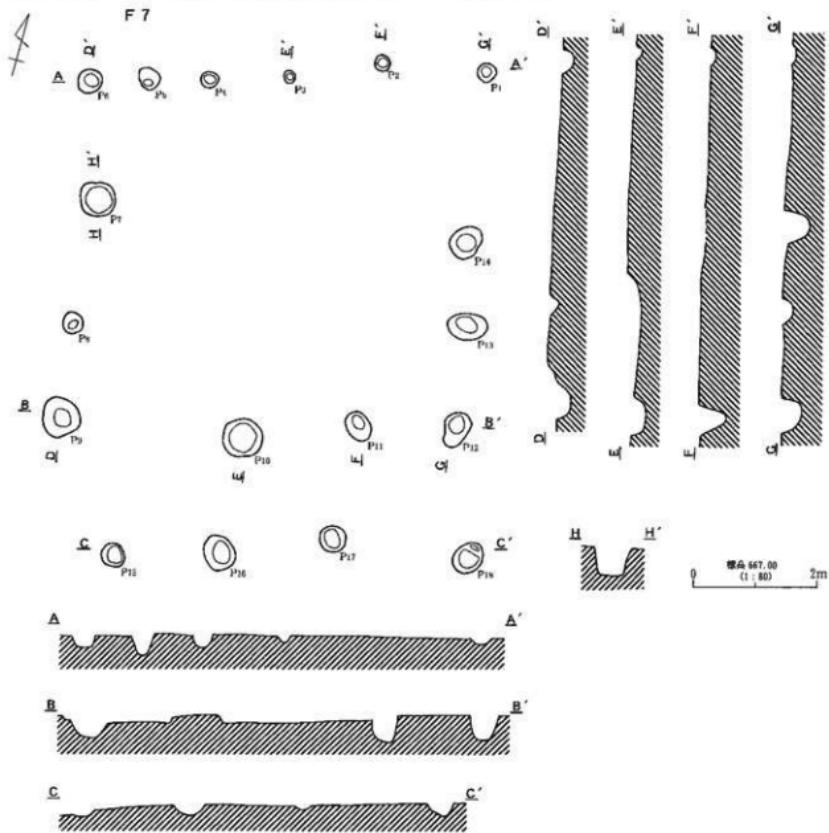
形態はほぼ方形で、3間×4間の側柱式建物址である。軸方位はN-26°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は48.86m²を測る。規模は桁行7.16m (P1～P4)・梁行7.04m (P1～P10)で、桁行柱間は2.08～2.75m・梁行柱間は1.94～2.94mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径48cm・深さ20cm、P2が径38cm・深さ12cm、P3が径54cm・深さ25cm、P4が径42cm・深さ16cm、P5が径40cm・深さ17cm、P6が径35cm・深さ20cm、P7が径48cm・深さ18cm、P8が径32cm・深さ29cm、P9が径31cm・深さ14cm、P10が径58cm・深さ15cm、P11が径32cm・深さ19cm、P12が径31cm・深さ32cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より出土遺物はなかった。



(4) F 4号掘立柱建物址 (第103図、写真図版五十四)

本址は、調査区中央部であるテ-38.39、ト-38.39Grに位置する。残存状態は良好であった。形態はほぼ方形で、2間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-8°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は14.83m²を測る。規模は桁行3.96m (P1～P3)・梁行3.82m (P3～P5)で、桁行柱間は1.86～2.10m・梁行柱間は1.88～1.94mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径55cm・深さ22cm、P2が径53cm・深さ21cm、P3が径43cm・深さ14cm、P4が径41cm・深さ26cm、P5が径49cm・深さ16cm、P6が径46cm・深さ24cm、P7が径60cm・深さ29cm、P8が径67cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物は無かったが、P1、P3、P6より土師器甕・壺片が出土した。しかし、いずれも小片であり、遺構の帰属時期を確定できるものは無かった。



第104図 F 7号掘立柱建物址実測図

(5) F 7号掘立柱建物址 (第104図、写真図版五十五)

本址は、調査区中央部であるテ-42.43、ト-41.42.43、ナ-41.42.43Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は一定していない。

形態は東西方向に長い3間×5間の側柱式建物址で、南側に庇と考えられる柱列を持つ。軸方位はN-18°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は35.06m²・底部分を含めると47.78m²を測る。規模は桁行6.34m (P1～P6)・梁行5.68m (P1～P12)で、桁行柱間は0.92～1.67m・梁行柱間は1.31～2.74mを測る。底部分の規模は長辺が5.78m、短辺が2.02mである。柱穴の形態はいずれも円形であるが、北側の柱列は全体に比べて径が小さく、掘り込みも浅い。ピットの規模はP1が径32cm・深さ7cm、P2が径29cm・深さ9cm、P3が径21cm・深さ11cm、P4が径30cm・深さ9cm、P5が径38cm・深さ33cm、P6が径40cm・深さ21cm、P7が径62cm・深さ46cm、P8が径35cm・深さ18cm、P9が径62cm・深さ27cm、P10が径66cm・深さ31cm、P11が径49cm・深さ42cm、P12が径61cm・深さ25cm、P13が径62cm・深さ18cm、P14が径58cm・深さ37cm、P15が径42cm・深さ10cm、P16が径56cm・深さ18cm、P17が径45cm・深さ7cm、P18が径55cm・深さ25cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

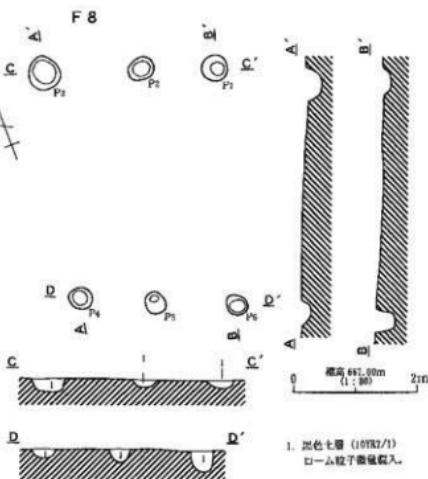
本址より図示できる出土遺物は無かったが、P7、P13、P15より土師器甕片が出土した。しかし、いずれも小片であり、遺構の帰属時期を確定できるものはなかった。

(6) F 8号掘立柱建物址 (第105図、写真図版五十五)

本址は、調査区中央部であるナ-41.42、ニ-41.42Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は一定していない。

形態は南北方向に長い、1間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-16°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は10.03m²を測る。規模は桁行2.82m (P1～P3)・梁行3.80m (P1～P6)で、桁行柱間は1.24～1.58m・梁行柱間は3.66～3.80mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径41cm・深さ11cm、P2が径43cm・深さ13cm、P3が径54cm・深さ27cm、P4が径36cm・深さ16cm、P5が径36cm・深さ21cm、P6が径38cm・深さ32cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物は図示できるものは無かったが、P3、P4より土師器甕片が出土した。特にP4からの甕はいわゆる「武藏甕」の特徴を有するものである。

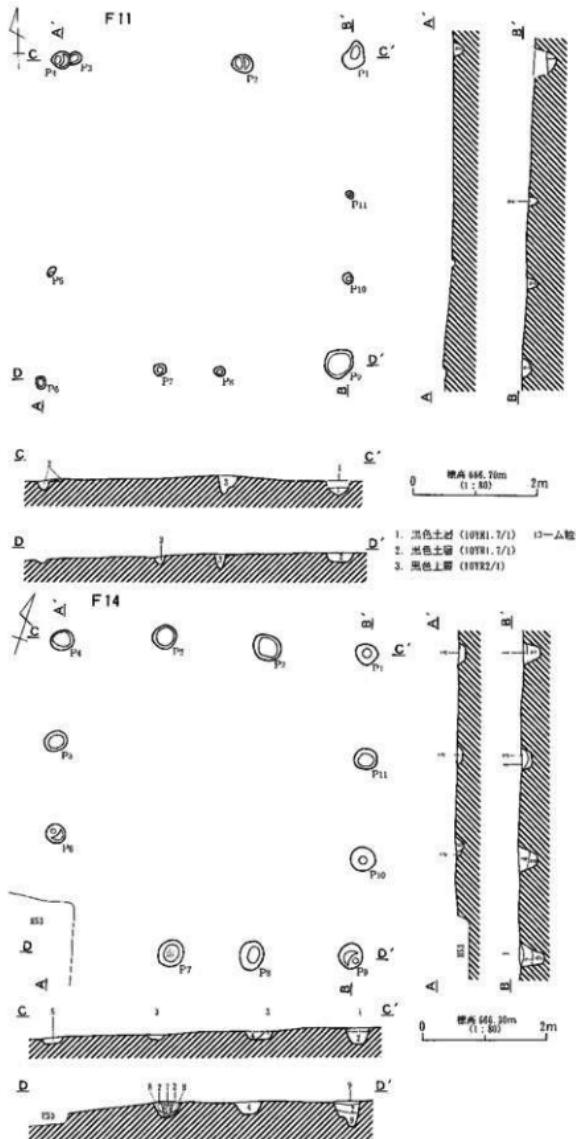


第105図 F 8号掘立柱建物址実測図

(7) F 11号掘立柱建物址 (第106図、写真図版五十八)

本址は、調査区中央部であるテ-34.35、ト-34.35、ナ-34.35Grに位置する。残存状態は良好であったが、柱列間は一定していない。

形態は南北方向に長い、3間×3間の側柱式建物址である。軸方位はN-3°-Eを示す。ピット間に囲まれた面積は24.24m²を測る。規模は桁行5.14m (P4～P6)・梁行4.90m (P6～P9)で、桁行柱間は1.36～3.44m・梁行柱間は0.96～2.90mを測る。柱穴の形態はいずれも円形であるが、規模の大小に



第106図 F11.14号掘立建柱建物址実測図

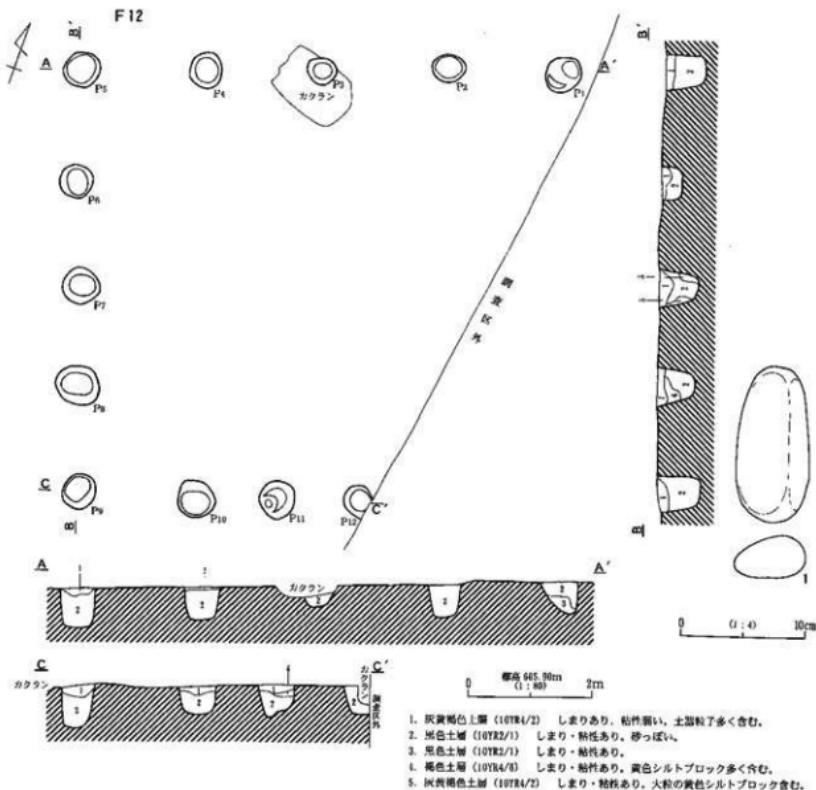
ばらつきがある。ピットの規模はP1が径46cm・深さ14cm、P2が径33cm・深さ29cm、P3が径26cm・深さ2cm、P4が径28cm・深さ17cm、P5が径18cm・深さ11cm、P6が径18cm・深さ3cm、P7が径19cm・深さ16cm、P8が径18cm・深さ24cm、P9が径49cm・深さ18cm、P10が径18cm・深さ22cm、P11が径14cm・深さ20cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より図示できる出土遺物は無かったが、P3より土師器坏片が出土した。しかし、小片であり遺構の帰属時期を確定できるものではなかった。

(8) F 12号掘立柱建物址 (第107図、写真図版五十六)

本址は、調査区北側であるス-6.7、セ-7.8、ソ-7.8Grに位置する。残存状態は良好であったが、東側が調査区域外となり、全体は検出できなかった。

形態は東西方向に長い、4間×4間以上の倒柱式建物址である。軸方位はN-19°-Wを示す。規模は桁行7.83m (P1~P5)・梁行6.87m (P5~P9)で、桁行柱間は1.85~2.02m・梁行柱間は1.60~1.91mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径64cm・深さ49cm、P2が径56cm・



第107図 F 12号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

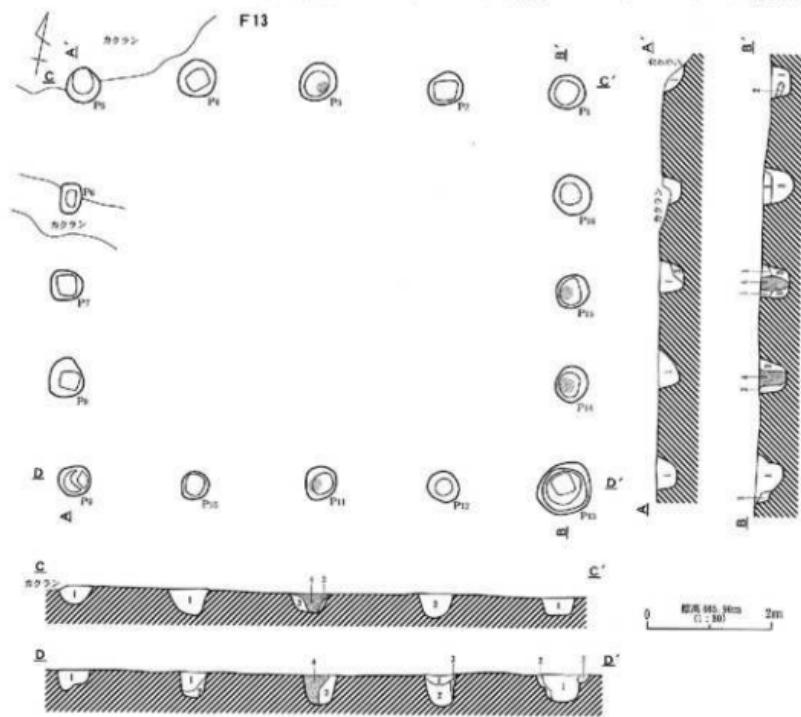
深さ53cm、P3が径48cm・深さ28cm、P4が径58cm・深さ52cm、P5が径61cm・深さ66cm、P6が径53cm・深さ34cm、P7が径60cm・深さ64cm、P8が径74cm・深さ64cm、P9が径58cm・深さ72cm、P10が径61cm・深さ50cm、P11が径61cm・深さ56cm、P12が径47cm・深さ52cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP7の第2層があたるが、他のピットは顯著な堆積状況を示していない。

本址からの出土遺物は、図示した編み物石がP10より出土した。この他にはP2、P4~10、P12より土師器甕・坏片や把手付瓶などが出土した。これらは小片であるがいずれも古墳時代後期の所産を示す形態の土器であるため、本址は古墳時代後期に属すると考えられる。

(9) F 13号掘立柱建物址 (第108図、写真図版五十六・五十七)

本址は、調査区北側であるセ-12、ゾ-10.11.12、タ-10.11.12、チ-10.11.12Grに位置する。残存状態は良好であり、本遺跡の中では数少ない全体が検出できた掘立柱建物址の一つである。

形態は東西方向に長い、4間×4間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は50.35m²を測る。軸方位はN-10°-Wを示す。規模は桁行7.94m (P1~P5)・梁行6.34m (P5~P9)で、桁行柱間は



1. 黄褐色土層 (10II3/1) しまり・粘性あり。黄色シルト粒子を多く含む。炭化物微量に含む。
2. 黄色土層 (10II3/0) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含む。
3. 黑褐色土層 (10II3/1) しまりあり。粘性高い。
4. 黑褐色土層 (10II3/2) しまり弱い。堅性あり。1,3層にくらべて薄い。

第108図 F 13号掘立柱建物址実測図

1.92～2.05m・梁行柱間は1.40～1.80mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径58cm・深さ32cm、P2が径58cm・深さ41cm、P3が径63cm・深さ34cm、P4が径60cm・深さ45cm、P5が径55cm・深さ29cm、P6が径58cm・深さ33cm、P7が径50cm・深さ41cm、P8が径63cm・深さ36cm、P9が径53cm・深さ34cm、P10が径47cm・深さ40cm、P11が径57cm・深さ49cm、P12が径52cm・深さ49cm、P13が径90cm・深さ47cm、P14が径60cm・深さ48cm、P15が径58cm・深さ49cm、P16が径67cm・深さ49cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP3、P11、P14、P15の第4層がある。

本址より図示できる出土遺物はなかったが、P1～4、P6～8、P11～13、P15～16より土師器壺・壺片などが出土した。これらは小片であるがいずれも古墳時代後期の所産を示す形態の土器であるため、本址は古墳時代後期に属すると考えられる。

(10) F 14号掘立柱建物址 (第106図、写真図版五十七)

本址は、調査区北側であるチ-18.19、ツ-18.19Grに位置する。残存状態は良好であり、H53号住居址と重複関係にある。新旧関係は、本址の方が古い。

形態はほぼ方形の3間×3間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は24.50m²を測る。輪方位はN-17°-Wを示す。規模は桁行4.98m (P1～P9)・梁行4.92m (P1～P4)で、桁行柱間は1.61～1.75m・梁行柱間は1.60～1.68mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径38cm・深さ32cm、P2が径47cm・深さ13cm、P3が径39cm・深さ8cm、P4が径37cm・深さ12cm、P5が径37cm・深さ7cm、P6が径31cm・深さ14cm、P7が径43cm・深さ20cm、P8が径48cm・深さ20cm、P9が径40cm・深さ44cm、P10が径41cm・深さ29cm、P11が径37cm・深さ16cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP7の第7層がある。

本址より出土遺物は図示できるものは無かったが、P1、P3、P6～10より土師器壺・壺片などが出土した。これらは小片であるがいずれも古墳時代後期の所産を示す形態の土器であるため、本址は古墳時代後期に属すると考えられる。

(11) F 15号掘立柱建物址 (第109図、写真図版五十八)

本址は、調査区中央であるセ-7.8.9、ゾ-8Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は13.31m²を測る。輪方位はN-30°-Wを示す。規模は桁行4.37m (P3～P5)・梁行3.07m (P1～P3)で、桁行柱間は2.10～2.27m・梁行柱間は1.35～1.72mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径38cm・深さ44cm、P2が径33cm・深さ51cm、P3が径34cm・深さ37cm、P4が径31cm・深さ16cm、P5が径41cm・深さ26cm、P6が径39cm・深さ42cm、P7が径39cm・深さ35cm、P8が径29cm・深さ36cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

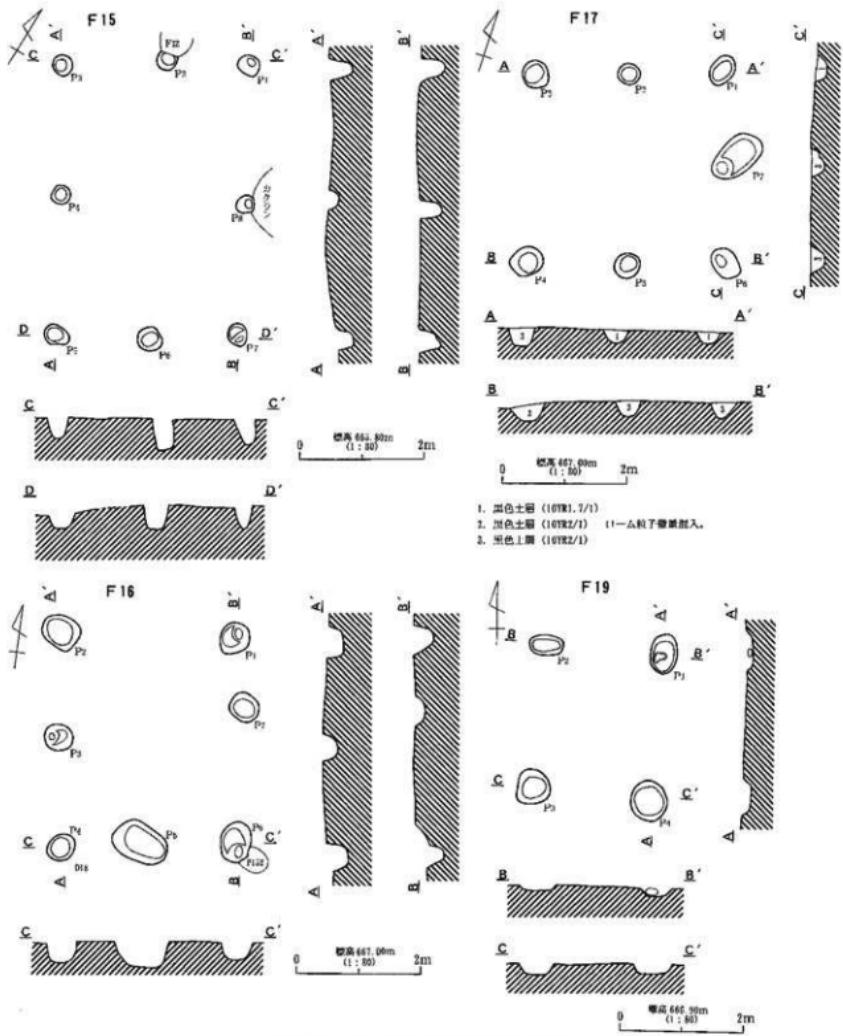
本址より出土遺物は無く、遺構の附属時期は不明である。

(12) F 16号掘立柱建物址 (第109図)

本址は、調査区中央であるナ-42.43、ニ-43Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は9.93m²を測る。輪方位はN-7°-Wを示す。規模は桁行3.52m (P1～P6)・梁行2.88m (P4～P6)で、桁行柱間は1.21～2.31m・梁行柱間は1.42～1.46mを測る。柱穴の形態は梢円形と円形である。ピットの規模はP1が径53cm・深さ36cm、P2が径62cm・深さ23cm、P3が径46cm・深さ29cm、P4が径48cm・深さ37cm、P5が径92cm・深さ48cm、P6が径62cm・深さ50cm、P7が径50cm・深さ19cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物はP2より土師器壺と赤彩された土師器壺片、P3及びP4より土師器壺片がそれ



第109圖 F15~17.19號圓柱建物址測剖面圖

それ出土している。これらの土器片はいずれも古墳時代後期の所産であり、よって本址の帰属時期は不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(13) F 17号掘立柱建物址 (第109図)

本址は、調査区中央であるテ-41.42、ト-41.42Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態はほぼ方形の2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は9.22m²を測る。軸方位はN-15°-Wを示す。規模は桁行3.06m (P1～P6)・梁行3.05m (P4～P6)で、桁行柱間は1.52～1.54m・梁行柱間は1.50～1.55mを測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ19cm、P2が径36cm・深さ23cm、P3が径44cm・深さ34cm、P4が径44cm・深さ29cm、P5が径40cm・深さ25cm、P6が径56cm・深さ28cm、P7が径91cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物はP1より土師器甕、P3から土師器甕・壺、P4からいわゆる「武藏甕」と呼ばれる土師器甕片がそれぞれ出土している。他のピットの出土土器は古墳時代後期の物である。これらから本址の帰属時期は不確実ではあるが、奈良・平安時代以降と考えられる。

(14) F 18号掘立柱建物址 (第110図)

本址は、調査区中央であるテ-40、ト-40.41.42、ナ-42Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態は南北方向に長い、2間×3間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は29.86m²を測る。軸方位はN-4°-Eを示す。規模は桁行7.81m (P1～P9)・梁行4.00m (P1～P3)で、桁行柱間は2.17～4.37m・梁行柱間は1.88～2.12mを測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径81cm・深さ16cm、P2が径99cm・深さ10cm、P3が径60cm・深さ14cm、P4が径67cm・深さ14cm、P5が径59cm・深さ7cm、P6が径93cm・深さ17cm、P7が径68cm・深さ24cm、P8が径57cm・深さ34cm、P9が径52cm・深さ25cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P7より内面黒色処理された土師器壺や武藏甕と呼ばれる土師器甕片が出土したのみである。これらから本址の帰属時期は不確実ではあるが、奈良・平安時代以降と考えられる。

(15) F 19号掘立柱建物址 (第109図)

本址は、調査区中央であるナ-40、41Grに位置する。残存状態は良好である。

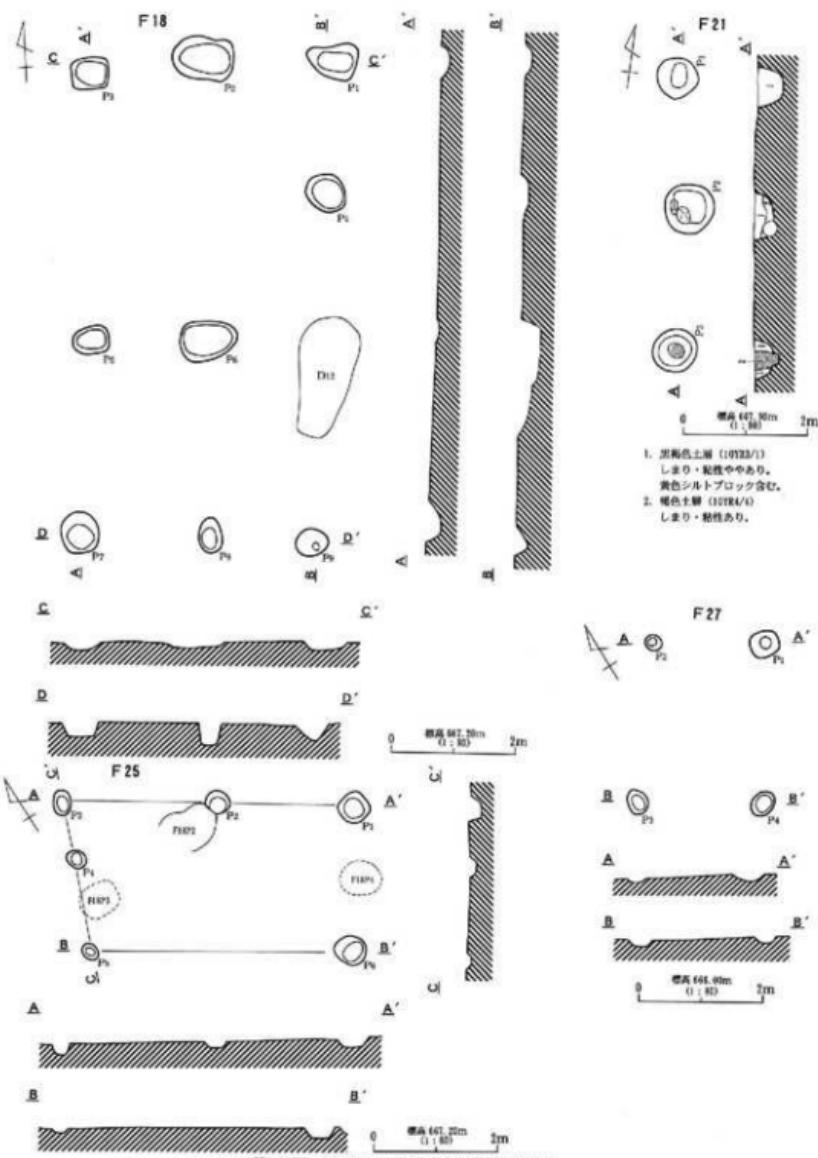
形態は方形に近い1間×1間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は4.58m²を測る。軸方位はN-4°-Eを示す。規模は桁行2.38m (P1～P4)・梁行2.00m (P3～P4)を測る。柱穴の形態は楕円形と円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ13cm、P2が径54cm・深さ13cm、P3が径57cm・深さ15cm、P4が径65cm・深さ15cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはないが、P1内に根石となるような礫が1点検出された。本址より出土遺物は無い。

(16) F 21号掘立柱建物址 (第110図、写真図版五十七)

本址は、調査区南側であるナ-67、ニ-66.67Grに位置する。残存状態は良好であるが、東側が調査区外となるため、南北の柱穴しか検出できなかった。

形態は東西方向に広がる側柱式建物址と考えられる。規模は桁行4.43m (P1～P3)、桁行柱間は2.08～2.35mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径66cm・深さ44cm、P2が径80cm・深さ32cm、P3が径73cm・深さ43cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP3である。

本址からの出土遺物は、P1より須恵器壺、土師器壺・甕、P2より須恵器壺、土師器甕、P3より土師器甕、須恵器壺がそれぞれ小片で出土している。これらから本址の帰属時期は不確実ではあるが、



第110図 F 18.21.25.27号掘立柱遺跡実測図

奈良・平安時代以降と考えられる。

(17) F 22号掘立柱建物址 (第111図)

本址は、調査区南側であるニ-66.67、ヌ-66.67Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は13.86m²を測る。軸方位はN-10°-Wを示す。規模は桁行4.03m (P3～P5)・梁行3.47m (P1～P3)で、桁行柱間は1.70～2.33m・梁行柱間は1.56～1.88mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径41cm・深さ18cm、P2が径40cm・深さ40cm、P3が径33cm・深さ19cm、P4が径42cm・深さ15cm、P5が径47cm・深さ23cm、P6が径45cm・深さ14cm、P7が径33cm・深さ11cm、P8が径45cm・深さ30cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P1とP8より土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(18) F 23号掘立柱建物址 (第111図)

本址は、調査区南側であるニ-65、ヌ-65.66Grに位置する。残存状態は東側と南側の柱穴が検出できなかった。

形態は南北方向に長い、2間×2間の側柱式建物址と考えられる。軸方位はN-7°-Wを示す。規模は桁行3.78m (P3～P5)・梁行3.33m (P1～P3)で、桁行柱間は1.88～1.90m・梁行柱間は1.43～1.90mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ12cm、P2が径47cm・深さ11cm、P3が径44cm・深さ23cm、P4が径43cm・深さ18cm、P5が径50cm・深さ24cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P5より土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(19) F 24号掘立柱建物址 (第111図)

本址は、調査区中央であるト-54.55Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となるため、東側と南側の柱穴が検出できなかった。H35.36号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

形態は不明で、規模は桁行1.82m (P1～P2)・梁行1.74m (P2～P3)を測る。ピットの規模はP1が径57cm・深さ55cm、P2が径70cm・深さ22cm、P3が径52cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

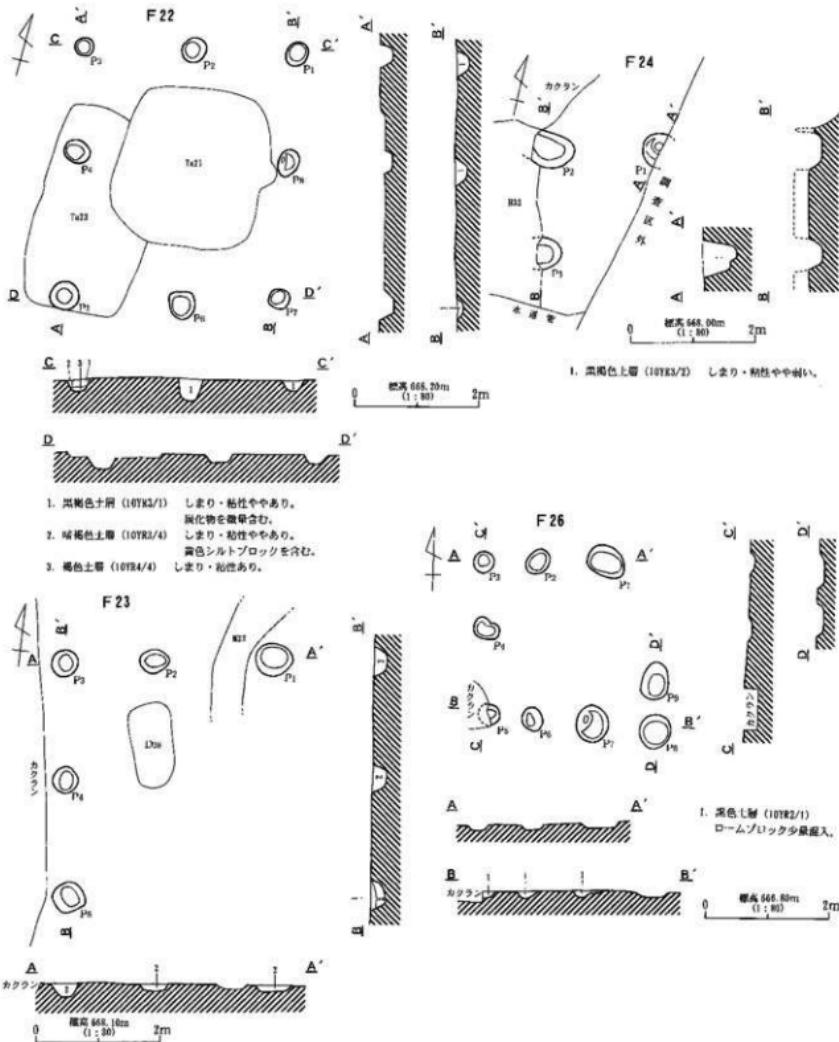
本址より出土遺物はP1とP2から土師器甕片が出土したのみで、その内のP1からの甕は武藏甕と呼ばれる形態の物である。よって本址の帰属時期は不明である。

(20) F 25号掘立柱建物址 (第110図)

本址は、調査区中央であるト-40、ト-39.40、ナ-40Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態は東西方向に長い、2間×2間の側柱式建物址である。ピットに囲まれた面積は10.59m²を測る。軸方位はN-35°-Wを示す。規模は桁行4.68m (P1～P3)・梁行2.47m (P3～P5)で、桁行柱間は2.20～2.48m・梁行柱間は0.97～1.50mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ17cm、P2が径40cm・深さ10cm、P3が径40cm・深さ17cm、P4が径30cm・深さ11cm、P5が径30cm・深さ7cm、P6が径50cm・深さ15cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P4より土師器甕片が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



第111図 F 22~24.26号柱立柱建物址及び3号柱列址実測図

(21) F 26号掘立柱建物址 (第111図)

本址は調査区中央であるナ-36.37.38Grに位置する。残存状態は良好であるが、柱穴間は一定しない。

形態は東西方向に長い、2間×3間の側柱式建物址である。規模は桁行2.72m (P5～P8)・梁行2.44m (P3～P5)で、桁行柱間は0.70～1.04m・梁行柱間は1.10～1.34mを測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径64cm・深さ11cm、P2が径43cm・深さ8cm、P3が径34cm・深さ8cm、P4が径43cm・深さ8cm、P5が径34cm・深さ12cm、P6が径40cm・深さ13cm、P7が径60cm・深さ12cm、P8が径54cm・深さ10cm、P9が径60cm・深さ5cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址よりの出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(22) F 27号掘立柱建物址 (第110図)

本址は、調査区中央であるト-35、ト-35.36Grに位置する。残存状態は良好である。

形態は南北方向に長い、1間×1間の側柱式建物址である。ピットに開まれた面積は4.85m²を測る。軸方位はN-36°-Eを示す。規模は桁行2.56m (P1～P4)・梁行2.01m (P3～P4)を測る。柱穴の形態は円形である。ピットの規模はP1が径48cm・深さ13cm、P2が径26cm・深さ6cm、P3が径41cm・深さ11cm、P4が径43cm・深さ10cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址よりの出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(23) 1号柱列址 (第112図)

本址は、調査区中央であるト-40、ナ-39.40Grに位置する。形態は東西方向に伸びる柱列で、ピットの形態は小型で規則的な様相を示す。ピットの間隔は0.93～1.95mを測る。ピットの規模はP1が径30cm・深さ11cm、P2が径20cm・深さ7cm、P3が径20cm・深さ8cm、P4が径35cm・深さ17cmを測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

本址からの出土遺物は、P1より土師器壺片2点が出土しているが、遺構の帰属時期は不明である。

(24) 2号柱列址 (第112図)

本址は、調査区中央であるテ-40.41.42Grに位置する。形態は南北方向に伸びる柱列で、ピットの形態は円形である。ピットの規模がやや大きいことから、掘立柱建物址の可能性もある。ピットの間隔は2.08～2.64mを測る。ピットの規模はP1が径50cm・深さ21cm、P2が径48cm・深さ19cm、P3が径46cm・深さ16cm、P4が径42cm・深さ22cmを測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。出土遺物は、P1とP4より土師器壺、P2より土師器壺が出土しているが、遺構の帰属時期は不明である。

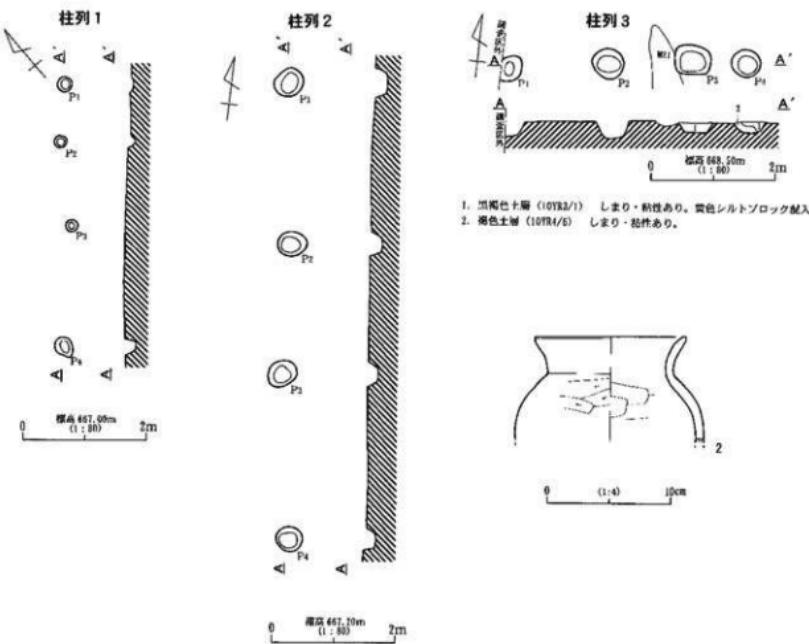
(25) 3号柱列址 (第112図、写真図版五十七)

本址は、調査区南側であるニ-80、ヌ-80Grに位置する。形態は東西方向に伸びる柱列で、ピットの形態は円形で、規模は大きく掘立柱建物址の様相がある。ピットの間隔は0.90～1.60mを測る。ピットの規模はP1が径45cm・深さ15cm、P2が径53cm・深さ16cm、P3が径57cm・深さ17cm、P4が径49cm・深さ19cmを測る。ピット内で柱痕を確認できたものはない。

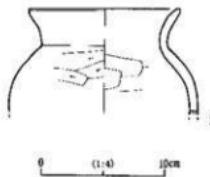
本址よりの出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

No.	種別	基準	法 量		或 形・調 種・文 様				備 考	出土位置
			内 容	外 容	内 容		外 容			
2	土師器	便	12.2	-	-	ヘラナダ	ヘラケヅリ	地表・実測 1.0m 1/3段付	柱跡2 P1	
No.	基 標	素 材	残存高	最大高	最大幅	最大厚	性 質	所 見	出上位置	
1	礎石	安山岩	実測	12.5	5.9	3.5	335.00		P12-P10	

第62表 掘立柱建物址及び柱列出土遺物観察表



1. 黒褐色土層 (10TR2/1) しまり・粒性あり。黒色シルトロック鉢入。
2. 褐色土層 (10TR4/6) しまり・粒性あり。



第112図 1~3号柱列址及び出土遺物実測図

第3節 土坑

(1) D 1号土坑 (第113・117図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-33.34Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。D 7号土坑と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-7°-Wを示す。規模は長軸1.48m・短軸1.15m・深さ13cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器壺と甕がある。1の土師器壺は内面黒色処理を施す。2は口縁部が直立気味に立ち上がるタイプの甕で、丁寧なミガキが施されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、古墳時代後期と考えられる。

(2) D 2号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-34Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-61°-Wを示す。規模は長軸1.04m・短軸0.78m・深さ6cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) D 3号土坑 (第113図)

本址は、調査区中央部のテ-34、ト-34Grに位置する。残存状態は中央部分をカクランにより削平されている。F 11号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は不整形で、長軸方位はN-79°-Wを示す。規模は長軸3.38m・短軸0.88m・深さ24cmを測る。また、本址の東側底面にはピットが検出され、規模は径41cm・深さ11cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(4) D 4号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-34Grに位置する。残存状態は良好である。F 2号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は円形で、長軸方位はN-10°-Wを示す。規模は長軸0.78m・短軸0.67m・深さ15cmを測る。本址より出土遺物は無く、帰属時期も不明である。

(5) D 5号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-39.40Grに位置する。残存状態は良好である。F 4号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は不整形で、長軸方位はN-72°-Wを示す。規模は長軸1.37m・短軸0.92m・深さ14cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(6) D 6号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のテ-42Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-3°-Wを示す。規模は長軸1.19m・短軸0.98m・深さ30cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(7) D 7号土坑 (第113図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のト-33Grに位置する。残存状態は北側をカクラン、西側をD 1号土坑により削平されている。形態は不整形である。規模は長軸1.37m(残存)・深さ6cmを測る。本址からの出土遺物は、武藏甕と呼ばれるタイプの土師器甕片や須恵器甕片が出土しており、遺構の帰属時期は奈良・平安時代と考えられる。

(8) D 8号土坑 (第113・117図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部のナ-37.ニ-37Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-14°-Wを示す。規模は長軸1.77m・短軸1.08m・深さ6cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した須恵器壺がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(9) D 9号土坑 (第113・117図, 写真図版五十九)

本址は、調査区中央部の二-37.38Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-46°-Wを示す。規模は長軸1.45m・短軸1.28m・深さ27cmを測る。

本址の出土遺物は図示した打製石斧の他に、須恵器壺片と土師器壺片がある。土師器壺は古墳時代後期に帰属する形態の物であるので、本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(10) D 10号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部の二-43、ヌ-43Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外になり、全容は検出できなかった。形態は不整形で、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸1.51m・短軸1.00m・深さ31cmを測る。

本址からの出土遺物は土師器壺・壺片が少量ある。これらはいずれも古墳時代後期の帰属と考えられる形態の土器であることから、本址の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。

(11) D 12号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のテ-41、ト-41Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸1.95m・短軸0.85m・深さ28cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(12) D 13号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のツ-36.37Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は不整形である。規模は長軸2.14m・短軸0.95m・深さ37cmを測る。また、本址の底面にはピットが検出され、規模は径46cm・深さ20cmを測る。本址からの出土遺物は上師器壺片2点があるが、帰属時期は不明である。

(13) D 14号土坑 (第113図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部のツ-36、テ-36Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長椭円形で、長軸方位はN-80°-Eを示す。規模は長軸1.25m・短軸0.72m・深さ17cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

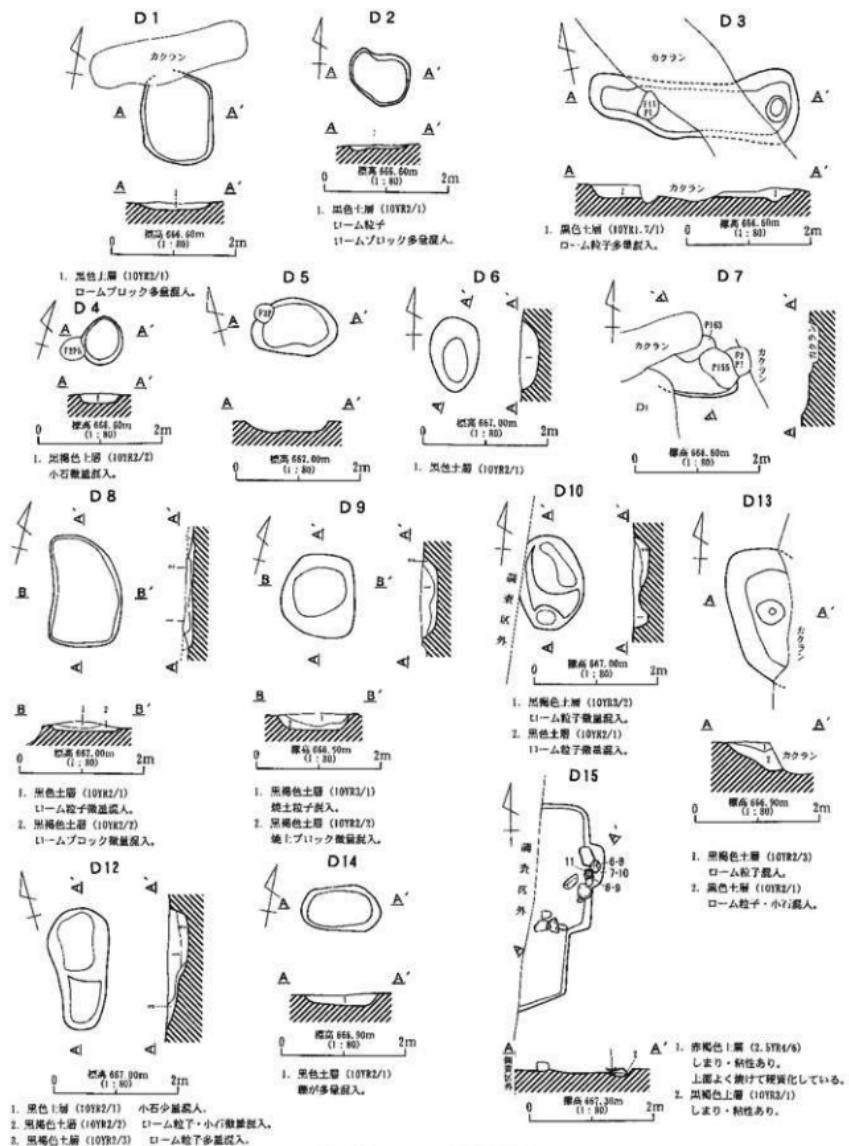
(14) D 15号土坑 (第113-117図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部の二-46Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となるため、全容は検出できなかった。形態は不整形であるが、コーナー部分があり、方形を基調としている。規模は長軸3.36m・短軸0.95m・深さ11cmを測る。また、本址は図示した土器と拳大の砾と共に、土坑底面に一部焼土が確認できた。これらの形態は住居址カマドの崩落破棄状態に似る。

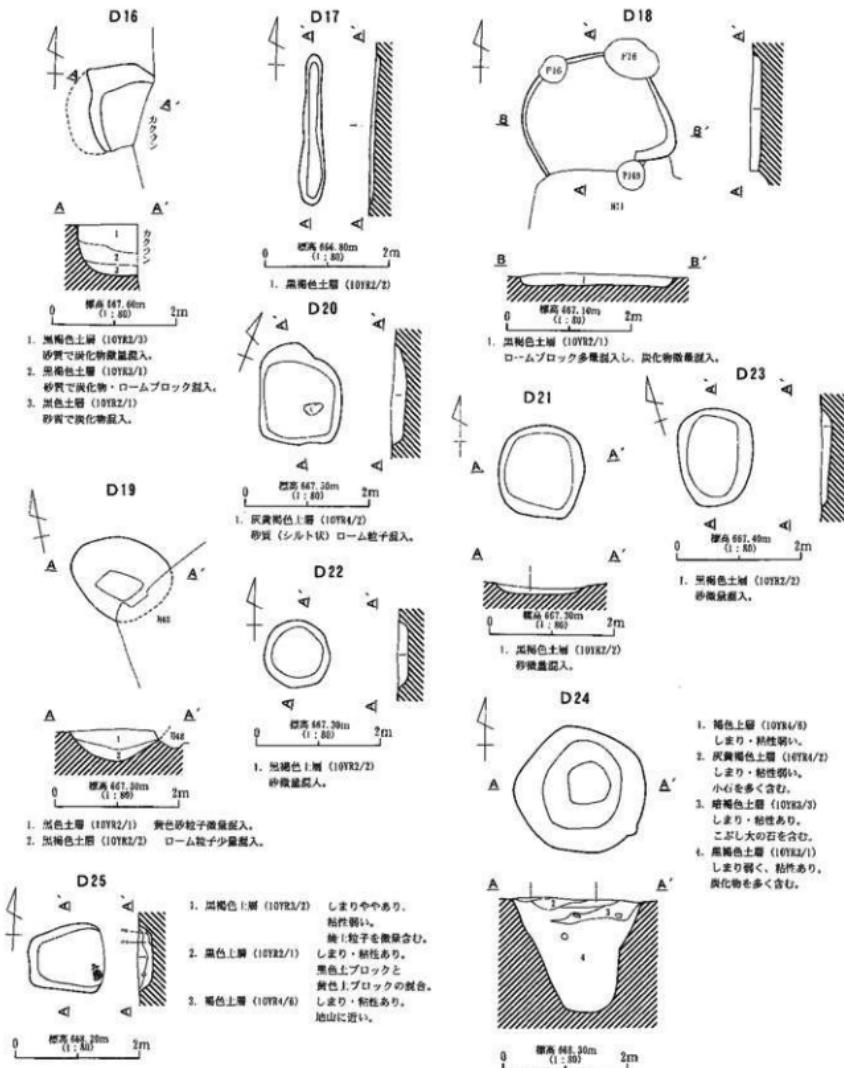
本址より出土遺物は、7点を図示した。いずれも上師器杯であり、砾とまとまって出土した（写真図版六十参照）。6~8が内面黒色処理されている。特に6と7は見込み部に放射状の暗文風のミガキが施されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(15) D 16号土坑 (第114図, 写真図版六十)

本址は、調査区中央部の二-49.50Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-81°-Eを示す。規模は長軸1.28m・短軸1.35m・深さ83cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



第113図 D 1～15号土坑実測図



第114図 D16~25号上坑実測図

(16) D 17号土坑 (第114図)

本址は、調査区中央部のテ-34.35Grに位置する。残存状態は良好である。形態は細長い溝状遺構のような形態で、長軸方位はN-1°-Eを示す。規模は長軸2.40m・短軸0.28m・深さ11cmを測る。本址より出土遺物は土師器壺片があったが、帰属時期は不明である。

(17) D 18号土坑 (第114図、写真図版六十)

本址は、調査区中央部のナ-43、ニ-43Grに位置する。残存状態は南側をH11号住居址により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-72°-Wを示す。規模は長軸2.53m・短軸2.10m・深さ16cmを測る。

本址からの出土遺物は内面黒色処理した土師器壺片や、古墳時代後期帰属の土師器壺片が出土しているが、本址の帰属時期は不明である。

(18) D 19号土坑 (第114図)

本址は、調査区中央部のテ-46.47、ト-46.47Grに位置する。残存状態は南側をH48号住居址により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-43°-Wを示す。規模は長軸1.55m・短軸1.30m・深さ54cmを測る。

本址からの出土遺物は、古墳時代後期帰属の土師器壺片20片と土師器壺片がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(19) D 20号土坑 (第114図、写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のナ-49Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はN-21°-Wを示す。規模は長軸1.63m・短軸1.31m・深さ21cmを測る。

本址からの出土遺物は内面黒色処理した土師器壺片、須恵器壺・壺片がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実であるが、平安時代と考えられる。

(20) D 21号土坑 (第114図、写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のト-46Grに位置する。残存状態は上面をH16号住居址によって削平されている。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-1°-Wを示す。規模は長軸1.93m・短軸1.36m・深さ17cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器壺片、武藏甕と呼ばれる土師器壺片などがあるが、本址の帰属時期は不明である。

(21) D 22号土坑 (第114図、写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のト-46.47Grに位置する。残存状態は上面をH16号住居址により削平されている。形態は円形で、長軸方位は北を示す。規模は長軸1.06m・短軸1.04m・深さ13cmを測る。

本址より出土遺物は、須恵器壺・壺片と武藏甕と呼ばれる土師器壺片があるが、本址の帰属時期は不明である。

(22) D 23号土坑 (第114図、写真図版六十一)

本址は、調査区中央部のト-46.47、ナ-46.47Grに位置する。残存状態は上面をH16号住居址によって削平されている。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-17°-Eを示す。規模は長軸1.56m・短軸1.17m・深さ21cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器壺・壺片が少量あるのみで、本址の帰属時期は不明である。

(23) D24号土坑 (第114・117図, 写真図版六十一)

本址は、調査区南側の二-68.69Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、底面はすり鉢状を呈する。長軸方位はN-55°-Wを示す。規模は長軸2.08m・短軸1.97m・深さ181cmを測る。本址の覆土は土が交互に堆積したような状態で、特に第4層は細部に観察すると砂などが混ざる間層が確認でき、人為的な埋め戻しのような状態であった。本址からの出土遺物は図示した石鐵の他に、須恵器壺・蓋、土師器壺片等もあったが、土坑底面より青磁の口縁部小破片が出上したため、本址の帰属時期は中世と考えられる。

(24) D25号土坑 (第114図, 写真図版六十一)

本址は、調査区南側の二-70.71Grに位置する。残存状態は良好である。形態は隅丸の方形で、長軸方位はN-86°-Eを示す。規模は長軸1.21m・短軸1.03m・深さ17cmを測る。本址より平面図に示した獸骨の歯が出土した（獸骨の詳細は第VII章参照）が、その他の出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

(25) D26号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のナ-68、ニ-68Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸1.82m・短軸0.40m・深さ53cmを測る。本址からの出土遺物は、古墳時代後期の土師器壺片が1点のみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(26) D27号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のナ-67、ニ-67.68Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸0.91m・短軸0.70m・深さ22cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器壺片、土師器壺片があるのみで、本址の帰属時期は不明である。

(27) D28号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側の二-65Grに位置する。残存状態は良好で、F23号掘立柱建物とH30号住居址と重複関係にあり、いずれも本址の方が新しい。形態は長方形で、長軸方位はN-14°-Wを示す。規模は長軸1.35m・短軸0.69m・深さ12cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器壺・壺片、武藏窯と呼ばれる土師器壺片があるのみで、本址の帰属時期は不明である。

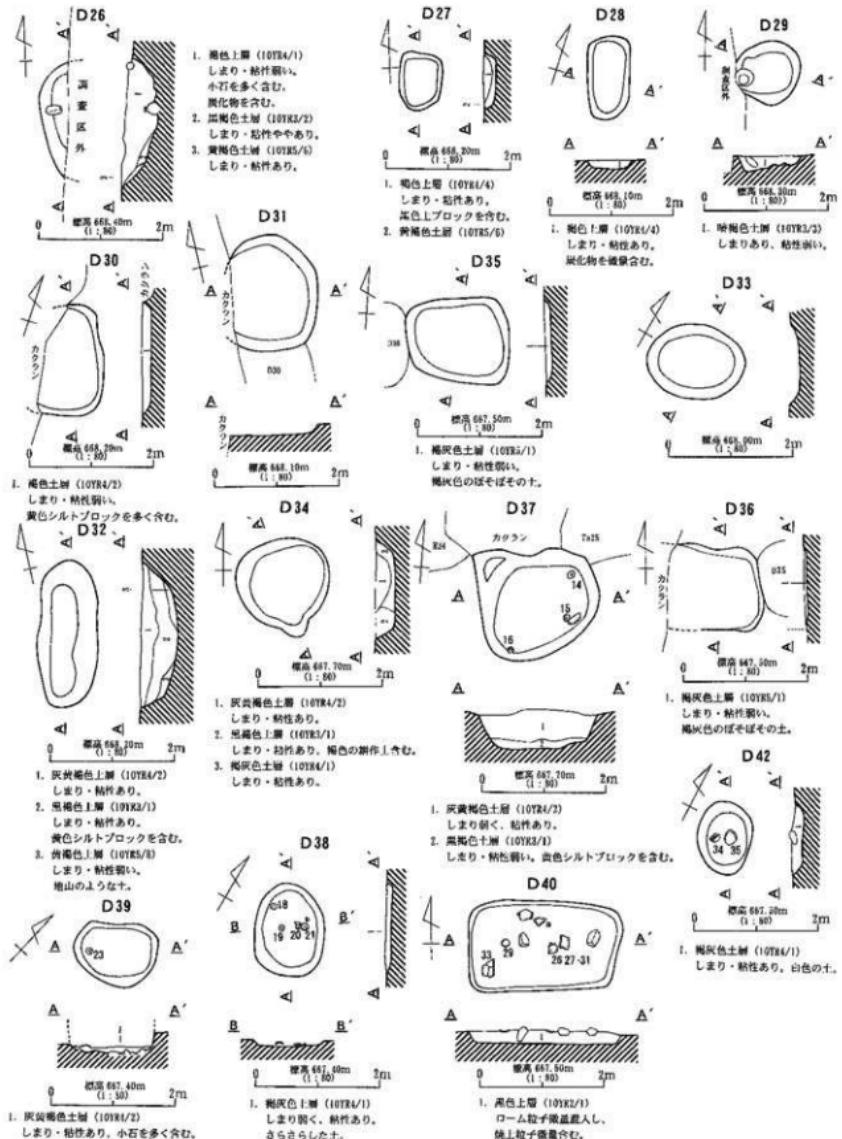
(28) D29号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側の二-68Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-70°-Eを示す。規模は長軸1.09m・短軸1.00m・深さ25cmを測る。また、本址は底面にピットが検出され、規模は径30cm・深さ20cmを測る。

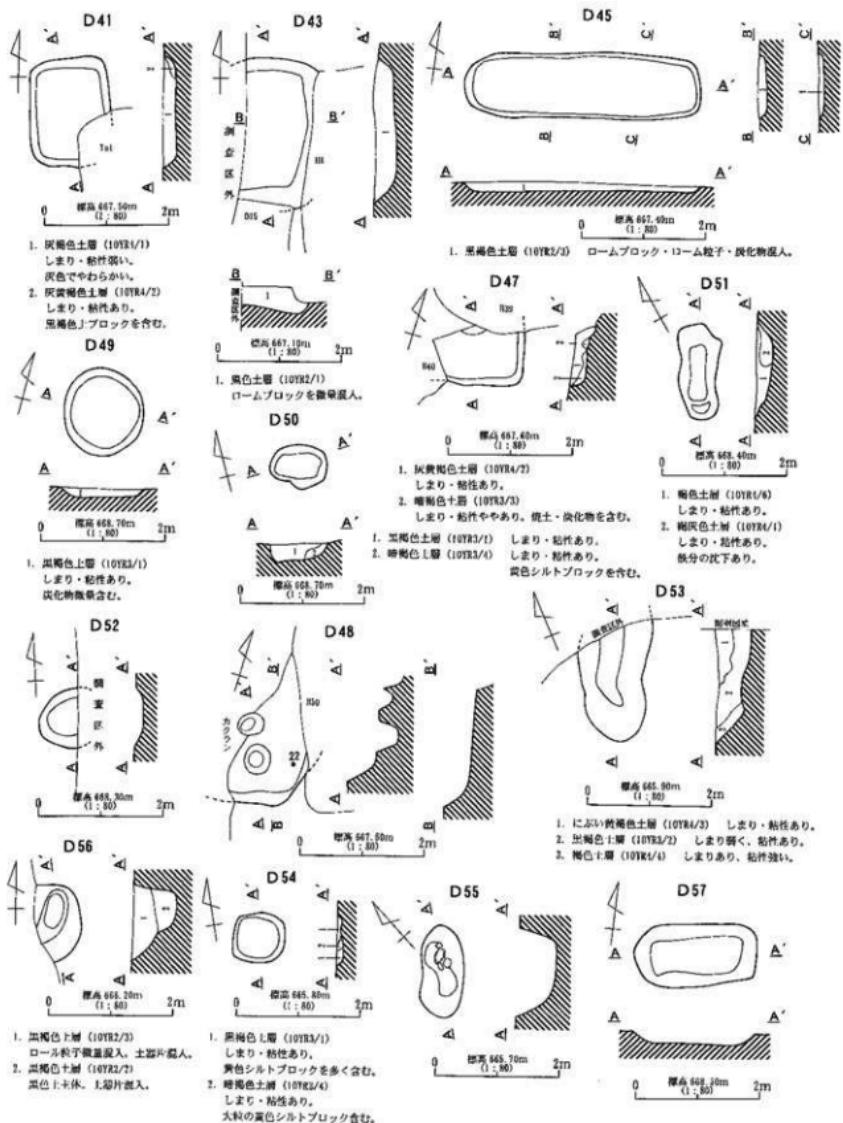
本址からの出土遺物は灰釉陶器皿片1点、須恵器壺片1点、古墳時代後期の土師器壺片のみであり、本址の帰属時期は不確実であるが、平安時代と考えられる。

(29) D30号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のヌ-64Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は方形で、長軸方位はN-17°-Wを示す。規模は長軸1.78m・短軸0.95m・深さ12cmを測る。本址より出土遺物は須恵器壺片、土師器壺片があるが、本址の帰属時期は不明である。



第115図 D26~40.42号土坑実測図



第116図 D41.43.45.47~57号土坑実測図

(30) D 31号土坑 (第115・117図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のヌ-64Grに位置する。残存状態は西側がカクランにより削平されている。H 29号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は円形で、長軸方位はN-11°-Eを示す。規模は長軸1.86m・短軸1.39m・深さ24cmを測る。出土遺物は、敲石及び武藏甕と呼ばれる土師器甕片と須恵器坏片が出土しているのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(31) D 32号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側の二-62、ヌ-62.63Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長梢円形で、長軸方位はN-12°-Eを示す。規模は長軸2.37m・短軸0.97m・深さ61cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(32) D 33号土坑 (第115図, 写真図版六十二)

本址は、調査区南側のナ-62、ニ-62Grに位置する。残存状態は良好である。形態は梢円形で、長軸方位はN-27°-Wを示す。規模は長軸1.57m・短軸1.22m・深さ16cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(33) D 34号土坑 (第115図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のナ-54.55、ニ-54.55Grに位置する。残存状態は良好で、H 33号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は不整形で、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は長軸1.60m・短軸1.47m・深さ31cmを測る。本址からの出土遺物は、底部回転糸切り離しの土師器坏片が1点出土しているのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(34) D 35号土坑 (第115図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のナ-50.51Grに位置する。残存状態は良好である。H 37号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形で、長軸方位はWを示す。規模は長軸1.66m・短軸1.33m・深さ10cmを測る。本址からの出土遺物は、古墳時代後期所産と考えられる土師器甕片13点程であるが、覆土が中世を特徴づける褐色土であるため、本址の帰属時期は不確実ではあるが、中世と考えられる。

(35) D 36号土坑 (第115図, 写真図版六十三)

本址は、調査区南側のナ-50.51Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。H 37号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形で、長軸方位はN-87°-Wを示す。規模は長軸1.49m（残存）・短軸1.28m・深さ4cmを測る。本址からの出土遺物は、古墳時代後期所産と考えられる土師器甕片10点程であるが、覆土が中世を特徴づける褐色土であるため、本址の帰属時期は不確実ではあるが、中世と考えられる。

(36) D 37号土坑 (第115・117図)

本址は、調査区南側のト-52.53、ナ-52.53Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。竪穴状造構と竪穴住居址と重複関係にあり、新旧関係は新しい方より、Ta25号竪穴状造構→本址→H 39号住居址である。形態は不整形で、長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸2.03m・短軸1.83m（残存）・深さ53cmを測る。本址より出土遺物は、図示した土師器坏と被然した礎がある。14~16は土師器坏で、いずれも底部回転糸切り離しを行っている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(37) D 38号土坑 (第115・117図)

本址は、調査区南側のナ-53、ニ-53Grに位置する。残存状態は良好である。H40号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は円形で、長軸方位はN-28°-Wを示す。規模は長軸1.48m・短軸1.10m・深さ11cmを測る。本址よりの出土遺物は図示した土師器壺がある。20と21は内面黒色処理が施されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(38) D 39号土坑 (第115・117図、写真図版六十三)

本址は、調査区南側のト-53、ナ-53Grに位置する。残存状態は良好である。H39号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は楕円形で、長軸方位はN-53°-Eを示す。規模は長軸1.34m・短軸0.96m・深さ20cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器壺がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(39) D 40号土坑 (第115・118図、写真図版六十三)

本址は、調査区南側のト-47Grに位置する。残存状態は良好である。H59号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は長方形で、長軸方位は西を示す。規模は長軸2.43m・短軸1.42m・深さ24cmを測る。

本址からの出土遺物は多く、図示したように砾と共に覆土中より出土した。25は土師器皿である。26~30は土師器壺で、28~30は内面黒色処理を施している。なお、30は高台を意識したような造りとなっている。31はロクロ成形の土師器甕である。32は須恵器の横瓶で、自然釉の付着が見られる。33は須恵器甕の口縁部であり、敲き痕が残る。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、平安時代と考えられる。

(40) D 41号土坑 (第116・117図、写真図版六十三)

本址は、調査区南側のト-49.50Grに位置する。残存状態は南東側をTa1号竪穴状構造に削平されている。H43号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は方形で、長軸方位はN-5°-Wを示す。規模は長軸1.73m・短軸1.31m・深さ19cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器壺がある。内面見込み部に放射状の暗文があり、内面黒色処理されている。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実であるが、平安時代と考えられる。

(41) D 42号土坑 (第115・118図、写真図版六十四)

本址は、調査区南側のト-49、ナ-49Grに位置する。残存状態は良好である。H46.50号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は円形で、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は長軸1.17m・短軸0.86m・深さ24cmを測る。本址からの出土遺物は、覆土中より図示した砾石と台石がある。砾石は表裏に切り離しの為と考えられる溝が切り込まれている。本址の帰属時期は不明である。

(42) D 43号土坑 (第116図、写真図版六十三)

本址は、調査区中央部のヌ-45.46Grに位置する。残存状態は東側をH8号住居址により削平されている。形態は方形で、長軸方位はN-2°-Eを示す。規模は長軸2.06m・短軸1.08m・深さ48cmを測る。本址より出土遺物はなく、土坑の帰属時期も不明である。

(43) D 45号土坑 (第116図、写真図版六十四)

本址は、調査区中央部のト-48、ナ-48Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形で、長軸方位はN-84°-Eを示す。規模は長軸3.77m・短軸1.03m・深さ14cmを測る。本址からの出土遺物は、黒色処理を施した土師器壺片や土師器甕片があるが、土坑の帰属時期は不明である。

(44) D 47号土坑 (第116図)

本址は、調査区南側のト-53、ナ-53Grに位置する。残存状態は、北側と西側をH39.40号住居址にそれぞれ削平されている。形態は方形である。規模は長軸1.47m（残存）・短軸0.94m（残存）・深さ32cmを測る。本址からの出土遺物は古墳時代後期の土師器甕片があるが、本址の帰属時期は不明である。

(45) D 48号土坑 (第116・117図、写真図版六十四)

本址は、調査区中央部のナ-49Grに位置する。残存状態は西側をカクラン、東側をH50号住居址に削平されている。形態は不整形である。規模は長軸2.50m（残存）・短軸1.28m（残存）・深さ38cmを測る。本址からの出土遺物は図示した土師器甕がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、古墳時代後期と考えられる。

(46) D 49号土坑 (第116図、写真図版六十四)

本址は、調査区南側のヌ-80Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-16°-Wを示す。規模は長軸1.41m・短軸1.27m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は武藏甕と呼ばれる土師器甕片、須恵器甕片等があり、本址の帰属時期はこれらより不確実であるが、平安時代と考えられる。

(47) D 50号土坑 (第116図、写真図版六十四)

本址は、調査区南側のヌ-80Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-79°-Wを示す。規模は長軸0.92m・短軸0.71m・深さ30cmを測る。本址からの出土遺物は土師器甕片があるが、本址の帰属時期は不明である。

(48) D 51号土坑 (第116図、写真図版六十四)

本址は、調査区南側のニ-79、ヌ-79Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-32°-Eを示す。規模は長軸1.55m・短軸0.60m・深さ36cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

(49) D 52号土坑 (第116図、写真図版六十四)

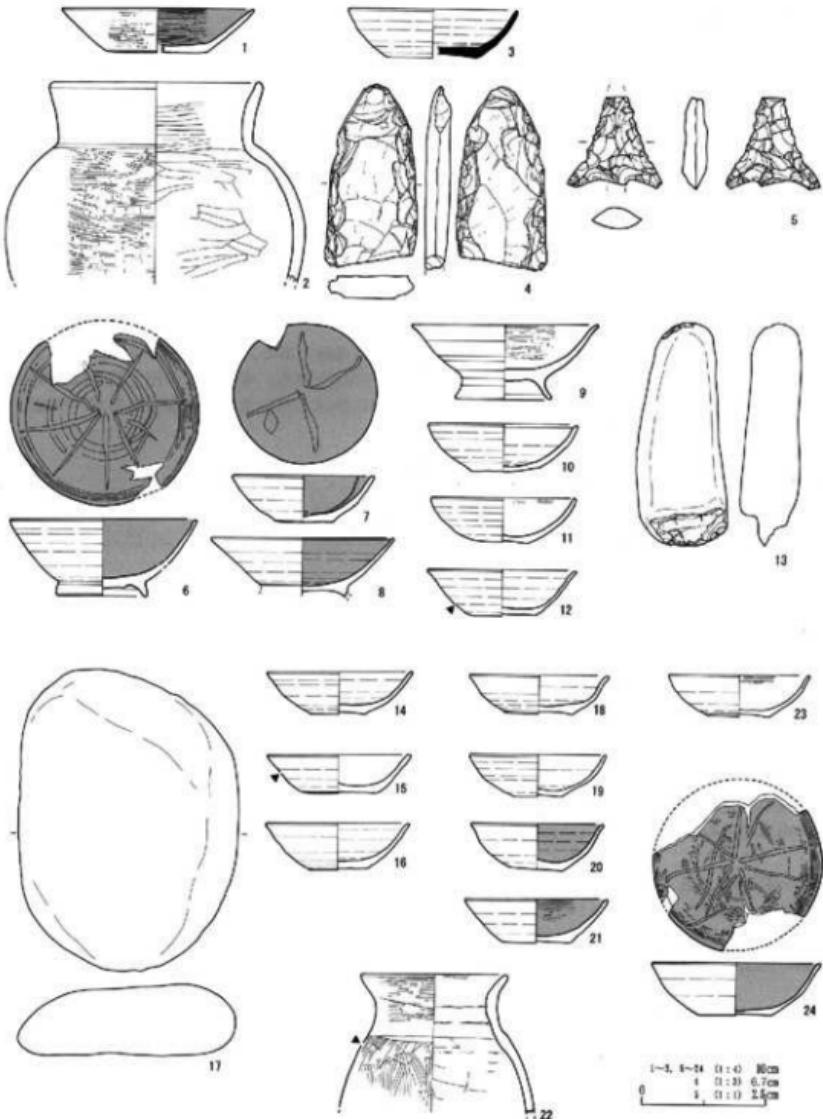
本址は、調査区南側のニ-72Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸0.96m（残存）・短軸0.62m（残存）・深さ13cmを測る。本址より出土遺物は無く、遺構の帰属時期も不明である。

(50) D 53号土坑 (第116図、写真図版六十五)

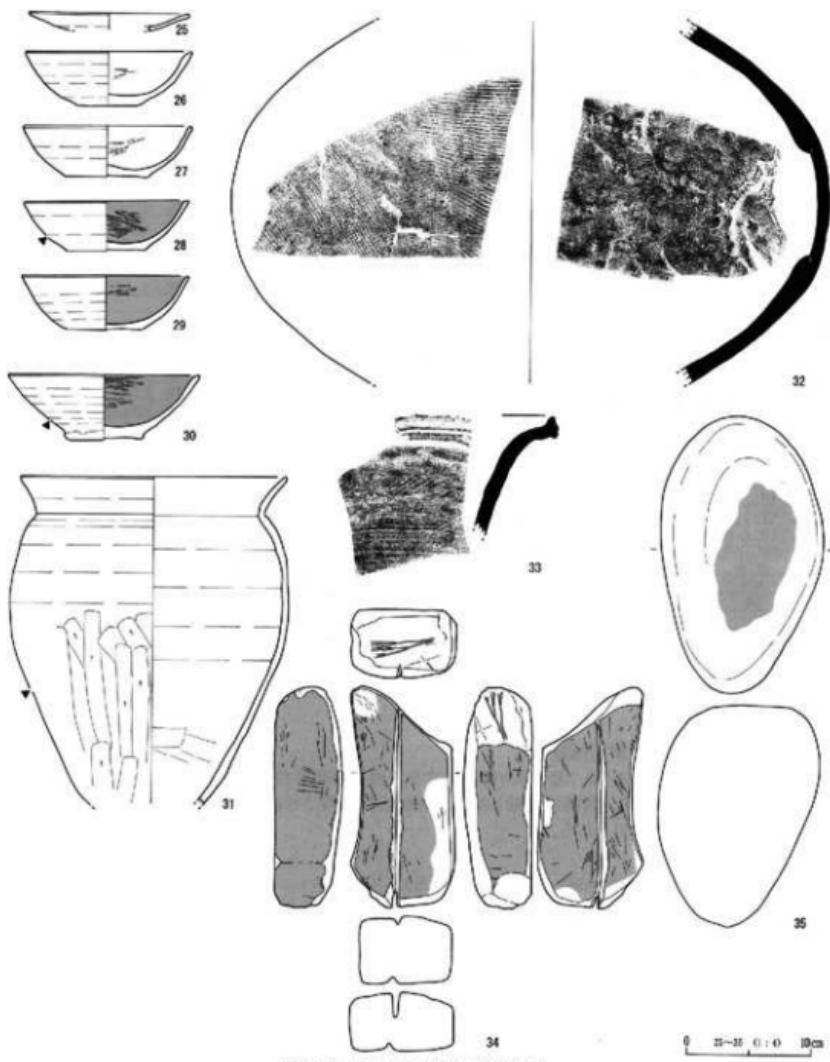
本址は、調査区北側のス-6.7Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外となる。形態は不整形である。規模は長軸1.76m（検出）・短軸1.17m（検出）・深さ62cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

(51) D 54号土坑 (第116図、写真図版六十五)

本址は、調査区北側のセ-11Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、長軸方位はN-82°-Wを示す。規模は長軸0.83m・短軸0.80m・深さ10cmを測る。本址からは古墳時代後期の土師器甕片4点が出土しているが、遺構の帰属時期は不明である。



第117图 D18.9.15.24.31.37~39.41.48号土坑出土遗物实测图



第118图 D 40.42号土坑出土遗物实测图

No	種別	器種	法量 (L) (単位:立方メートル)	成形・調型・文様			備考	出土位置	
				内面	外面				
1	土師器	壺	15.4	8.2	3.6	ミガキ-黒色退色	ミガキ	四輪実測	
2	土師器	甕	17.2	-	(16.0)	日本ヨコナデ→ミガキ-黒色ヘラナダ	底部ヘラケズリ・ミガキ・口縁ヘラナダ	四輪実測	
3	須恵器	壺	13.6	6.8	3.9	ロクロナデ・火漆	ロクロナデ-底部右回転糸切り	四輪実測	
6	土師器	甕	15.1	7.4	6.2	ロクロナデ→ミガキ・黒色處理	ロクロナデ-底部手持ちヘラケズリ→	完全実測 番文有り D15 8cm	
7	土師器	壺	11.4	4.8	3.8	ロクロナデ・黒色處理	ロクロナデ-底部左回転糸切り	完全実測 番文有り D15 8cm	
8	土師器	甕	14.6	-	(4.8)	ロクロナデ・黒色處理	ロクロナデ-底部糸切り-付高台	完全実測 D15 7~8cm	
9	土師器	甕	15.0	7.8	6.1	ロクロナデ→ミガキ	ロクロナデ-底部右回転糸切り・付高台	完全実測 D15 7cm	
10	土師器	壺	12.1	6.5	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ-底端手持ちヘラケズリ	完全実測 D15 8cm	
11	土師器	壺	11.6	4.5	3.6	ミガキ	ロクロナデ-底端右回転糸切り	完全実測 摩耗 D15 9cm	
12	土師器	甕	11.9	5.1	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ-底部右回転ヘラケズリ	完全実測 摩耗 D15	
14	土師器	壺	11.7	4.4	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ-底端右回転糸切り	完全実測 内面摩耗 D37 14cm	
15	土師器	壺	11.5	6.1	3.1	ロクロナデ→ヘラナダ	ロクロナデ-底部右回転糸切り	完全実測 D37 26cm	
16	土師器	甕	11.5	4.7	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ-底端右回転糸切り	完全実測 D37 17cm	
18	土師器	甕	11.3	5.3	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ-底端右回転糸切り	完全実測 D38 6cm	
19	土師器	壺	10.9	3.6	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ-底部右回転糸切り	完全実測 D38 0cm	
20	土師器	甕	10.7	4.1	3.8	ロクロナデ→黒色處理	ロクロナデ-底端右回転糸切り	完全実測 D38 0cm	
21	土師器	壺	11.6	5.4	3.6	ロクロナデ→ミガキ・黒色處理	ロクロナデ-底部右回転糸切り	完全実測 D38 0cm	
22	土師器	甕	11.8	-	(11.2)	脚部ヘラナダ→口縁ヨコナダ・ミガキ	脚部ヘラナダ-ロクロナデ-底部右回転糸切り・ミガキ	完全実測 D48 12.5cm	
23	土師器	甕	11.4	3.0	3.4	ロクロナデ・ミガキ	ロクロナデ-底部右回転糸切り	完全実測 内面摩耗 D39 4cm	
24	土師器	壺	13.6	5.9	4.3	ミガキ-黒色退色	ロクロナデ-底部右回転糸切り	完全実測 番文有り D41	
25	土師器	甕	13.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ-底部右回転糸切り	四輪実測 口縁1/2残存 D40	
26	土師器	甕	13.4	5.0	4.4	ミガキ	ロクロナデ-底部右回転糸切り	四輪実測 1/3残存 D40 19cm	
27	土師器	壺	13.6	6.6	4.1	ミガキ	ロクロナデ-底端右回転糸切り	四輪実測 1/4残存 D40 19cm	
28	土師器	甕	13.2	5.3	4.0	ミガキ・黒色退色	ロクロナデ-底端右回転糸切り	完全実測 3/4残存 D40	
29	土師器	甕	13.1	6.0	4.4	ミガキ-黒色退色	ロクロナデ-底部右回転糸切り	完全実測 1/2残存 D40 26cm	
30	土師器	甕	15.1	6.3	5.3	ミガキ-黒色退色	ロクロナデ	完全実測 1/2残存 D40	
31	土師器	甕	21.4	-	-	ロクロナデ→ヘラナダ	ロクロナデ-ヘラケズリ	完全実測 底部欠損 D40 19cm	
32	須恵器	瓶	-	-	-	ナヂ	平行タキヨロクロナデ	四輪実測 手本 D40 14.5cm	
33	須恵器	甕	-	-	-	ロクロナデ	平行タキヨロ	四輪実測 手本 D40	
No	器種	素材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
4	打井	輝石安山岩	10.9	5.5	1.5		126.84		D9
5	石板	チャート	1.8	1.8	0.5		0.97		D24
13	嵌石	安山岩	完形	17.7	7.4	4.8	880.00	上・縦縫に被打痕	D31
17	台石?	輝石安山岩	完形	24.0	17.2	5.8	3450.00	上縫に黄色した部分有り	D37 23cm
34	砥石	成吉岩	完形	17.7	8.4	3.4	1190.16		D42 7cm
35	台石	輝石安山岩	完形	22.2	13.0	17.8	6920.00	正面にすり面	D42 19cm

第63表 土坑出土遺物観察表

(52) D55号土坑 (第116図)

本址は、調査区北側のス-10、セ-10Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-44°-Eを示す。規模は長軸1.47m・短軸0.67m・深さ64cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

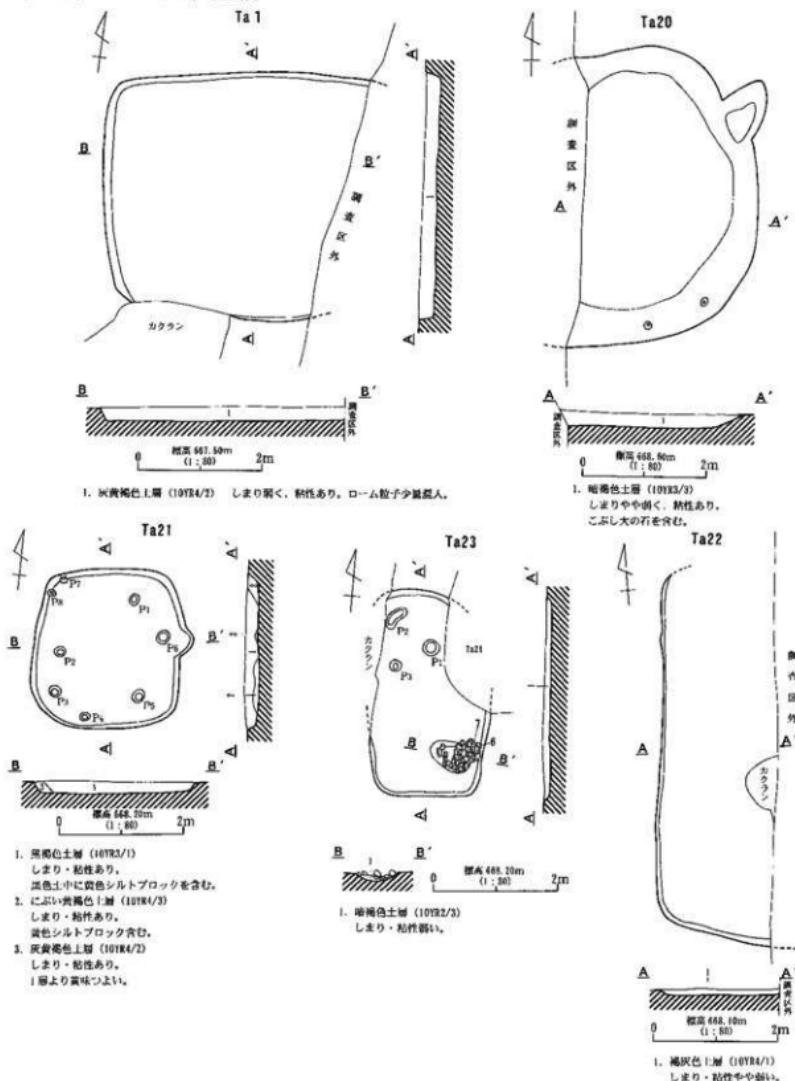
(53) D56号土坑 (第116図、写真図版六十五)

本址は、調査区北側のチ-16Grに位置する。残存状態は西側をH55号住居址に削平されている。形態は円形である。規模は長軸1.24m(残存)・短軸0.74m(残存)・深さ69cmを測る。本址より出土遺物は古墳時代後期の土師器甕があるが、遺構の帰属時期は不明である。

(54) D57号土坑 (第116図、写真図版六十五)

本址は、調査区南側のヌ-82Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形で、長軸方位はN-82°-Eを示す。規模は長軸1.97m・短軸1.01m・深さ21cmを測る。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期も不明である。

第4節 穫穴状遺構



第119図 Ta1, 20~23号竪穴状遺構実測図

(1) Ta1号竪穴状遺構 (第119図、写真図版六十六)

本址は、調査区中央部のテ-49.50、ト-49.50Grに位置する。残存状態は南西側がカクラン、東側は調査区外となる。H41.43号住居址・D41号土坑と重複関係にあり、いずれの遺構よりも本址の方が新しい。形態は長方形で、長軸方位はN-83°-Eを示す。検出部分の面積は13.17m²を測る。規模は北壁4.06m(検出)・南壁3.00m(残存)・西壁3.35mで、壁の高さは北壁中央で最大25cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した須恵器の他に、土師器甕片があった。図示した1と2は須恵器壺、3は須恵器甕の口縁部である。本址の帰属時期は覆土の状態より中世と考えられるが、不確実である。

(2) Ta20号竪穴状遺構 (第119図、写真図版六十六)

本址は、調査区南側のヌ-79.80、ヌ-79.80Grに位置する。残存状態は西側が調査区外となるため、半分ほどの検出である。形態は円形で、検出部分の面積は7.64m²を測る。規模は北壁1.02m・南壁2.66m・東壁3.71mで、壁の高さは南壁中央で最大35cmを測る。底面は平坦であり、やや硬質化していた。

本址からの出土遺物は図示した4がカワラケの底部小片であり、5が龍泉窯系の青磁口縁部の破片である。いずれも覆土中より出土した。

本址の帰属時期は出土遺物より、中世と考えられる。

(3) Ta21号竪穴状遺構 (第119図、写真図版六十六)

本址は、調査区南側のニ-66.67Grに位置する。残存状況は良好であり、重複する遺構の中では本址が一番新しい。形態は隅丸の方形で、東壁に張り出しを持つ。面積は4.98m²を測る。規模は北壁1.85m・南壁1.96m・東壁2.25m・西壁2.15mで、壁の高さは西壁中央で最大17cmを測る。長軸方位はN-4°-Wを示す。底面は平坦であり、やや硬質化していた。ピットは8箇所検出された。規模はP1が径20cm・深さ11cm、P2が径17cm・深さ8cm、P3が径19cm・深さ13cm、P4が径16cm・深さ10cm、P5が径22cm・深さ10cm、P6が径22cm・深さ12cm、P7が径13cm・深さ13cm、P8が径13cm・深さ8cmを測る。

本址は覆土中より土師器甕片が出土したのみであるが、覆土の状態は中世的であるため、不確実ではあるが本址の帰属時期は中世と考えられる。

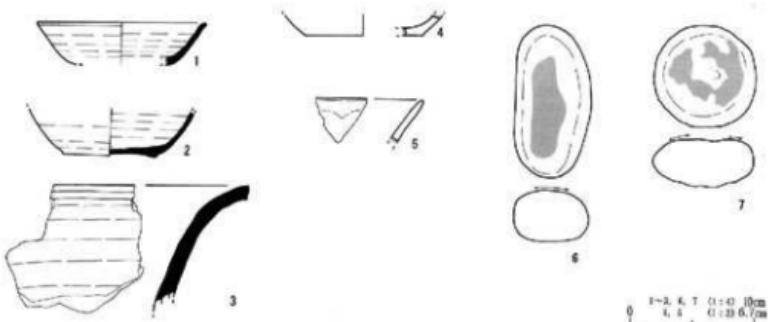
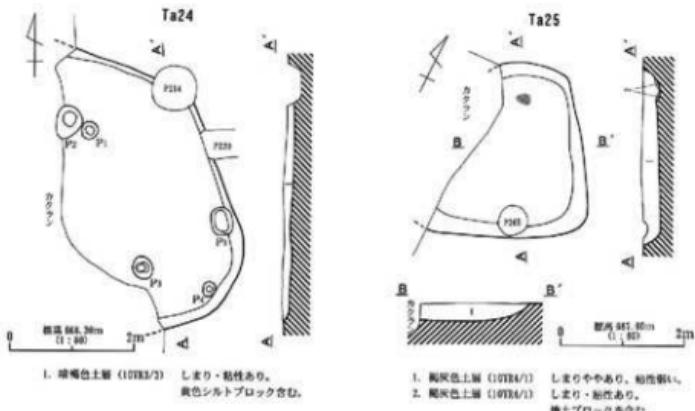
(4) Ta22号竪穴状遺構 (第119図、写真図版六十六)

本址は、調査区南側のナ-64.65.66、ニ-64.65.66Grに位置する。残存状態は東側が調査区外となる。形態は長方形で、面積は10.50m²を測る。規模は南壁1.68m(検出)・西壁5.54mで、壁の高さは西壁中央で最大9cmを測る。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。

本址は覆土中より須恵器壺・甕片や武藏甕と呼ばれる土師器甕片が出土したのみであるが、覆土の状態は中世的であるため、不確実ではあるが本址の帰属時期は中世と考えられる。

No.	種別	器種	法量	成形・調整・文様				備考	出土位置
				内面		外面			
1	須恵器	壺	13.6	-	ロクロナデ 火葬	ロクロナデ 火葬	回転火葬 口縁1.6残存	Ta1	
2	須恵器	壺	-	7.4	-	ロクロナデ 火葬	ロクロナデ 火葬	回転火葬 底部1/4残存	Ta1-I区
3	須恵器	甕	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	甕片火葬	Ta1-II区	
4	土師器	カワラケ	-	7.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転火葬 西壁1.6残存	Ta20-I区
5	須恵器	甕	-	(2.7)	感極	感極 運び文	甕片火葬 龍泉	Ta20-I区	
No.	種別	器種	法量	横径半 最大径 最小径	最大幅 最大厚	重量	所見		出土位置
6	磨石	輝石安山岩	完形	12.2	8.1	4.3	520.00	正面にすり面	Ta23 0cm
7	磨石	緑風岩	完形	8.1	8.1	3.9	238.00	正面にすり面	Ta23 0cm

第61表 竪穴状遺構出土遺物観察表



第120図 Ta24.25号竪穴状遺構及び出土遺物実測図

(5) Ta 23号竪穴状遺構 (第119図、写真版六十六)

本址は、調査区南側の二-66.67、ヌ-66.67Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、面積は4.24m²を測る。規模は北壁1.00m（残存）、南壁1.48m・西壁3.07m（推定）・東壁2.85m（推定）で、壁の高さは西壁で最大10cmを測る。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。ピットは3箇所検出された。規模はP1が径25cm・深さ7cm、P2が径41cm・深さ6cm、P3が径20cm・深さ6cm、P4が径70cm・深さ13cmを測る。またP4からは拳大の河原礫がまとまって出土した。

本址からの出土遺物はP4からまとめて出土した種群中より、磨石を2点図示した。本址の帰属時期は覆土の状態から、不確実ではあるが中世と考えられる。

(6) T a 24号竪穴状遺構 (第120図、写真図版六十六)

本址は、調査区南側のニ-69.70、又-69.70Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、面積は8.34m²を測る。規模は北壁1.90m（推定）・南壁1.36m（残存）・東壁2.75mで、壁の高さは北壁で最大16cmを測る。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。ピットは5箇所検出された。規模はP1が径29cm・深さ10cm、P2が径54cm・深さ15cm、P3が径36cm・深さ11cm、P4が径25cm・深さ23cm、P5が径47cm・深さ17cmを測る。

本址は覆土中より須恵器坏片、上師器壺片が出土したのみであるが、覆土の状態から、不確実ではあるが中世に位置づけられると考えられる。

(7) T a 25号竪穴状遺構 (第120図、写真図版六十六)

本址は、調査区中央のト-52Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。重複関係はP265よりは古く、住居址・土坑よりは新しい。形態は方形で、面積は3.58m²を測る。規模は北壁1.11m（残存）・南壁2.52m（残存）・東壁2.35mで、壁の高さは南壁で最大29cmを測る。長軸方位はN-24°-W（推定）を示す。底面は平坦であり、硬質化はしていなかった。ピットは検出されなかつたが、北壁寄りで焼土の塊が検出された。この焼土は径25cmの範囲で、あまり硬質化していなかった。

本址は覆土中より古墳時代後期の土師器壺・坏片が多数出土したが、本址の帰属時期は覆土の状態から、不確実ではあるが中世と考えられる。

第5節 溝状遺構

(1) M21号溝状遺構 (第121図、写真図版六十七)

本址は、調査区南側のヌ-80.81Grに位置する。残存状態は中央をD50号土坑により削平されている。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ3.26m(検出)・幅0.29~0.57m・深さ13cmを測る。

本址からの出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

(2) M22号溝状遺構 (第121図)

本址は、調査区南側のナ-63.64、ニ-63.64.65Grに位置する。残存状態は北側をカクランによって削平されている。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ7.23m(検出)・幅0.51~0.87m・深さ18cmを測る。溝の底面は硬質化していた。

本址は古墳時代後期の土師器壺・甕片が出土したが、覆土の状態は中世的であるため、遺構の帰属時期は不確実であるが中世と考えられる。

(3) M23号溝状遺構 (第121図、写真図版六十七)

本址は、調査区南側のナ-60.61、ニ-58~61、ヌ-57~59Grに位置する。残存状態は北側と南側は調査区域外となる。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ17.32m(検出)・幅1.54~2.00m・深さ10~29cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中より多く、図示した遺物はすべてM23号溝状遺構からである。1と2は土師器壺で、1は口縁部が屈折するタイプ、2は僅かに口唇部にナデが残るタイプのものである。いずれも内面黒色処理されている。3は須恵器蓋である。天井部は回転ヘラケズリが行われている。4は須恵器壺で、底部回転糸切り離しを施している。5は須恵器甕の口縁部である。自然釉が付着している。6は須恵器横瓶の口縁部である。7は土師器甕で、いわゆる「武藏甕」と呼ばれるタイプのものである。8は鉄製品で刀子と考えられる。

本址は古墳時代後期から平安時代までの出土遺物があったが、主体となる物は奈良・平安時代の土器類が多く、遺構の帰属時期も奈良・平安時代と考えたい。

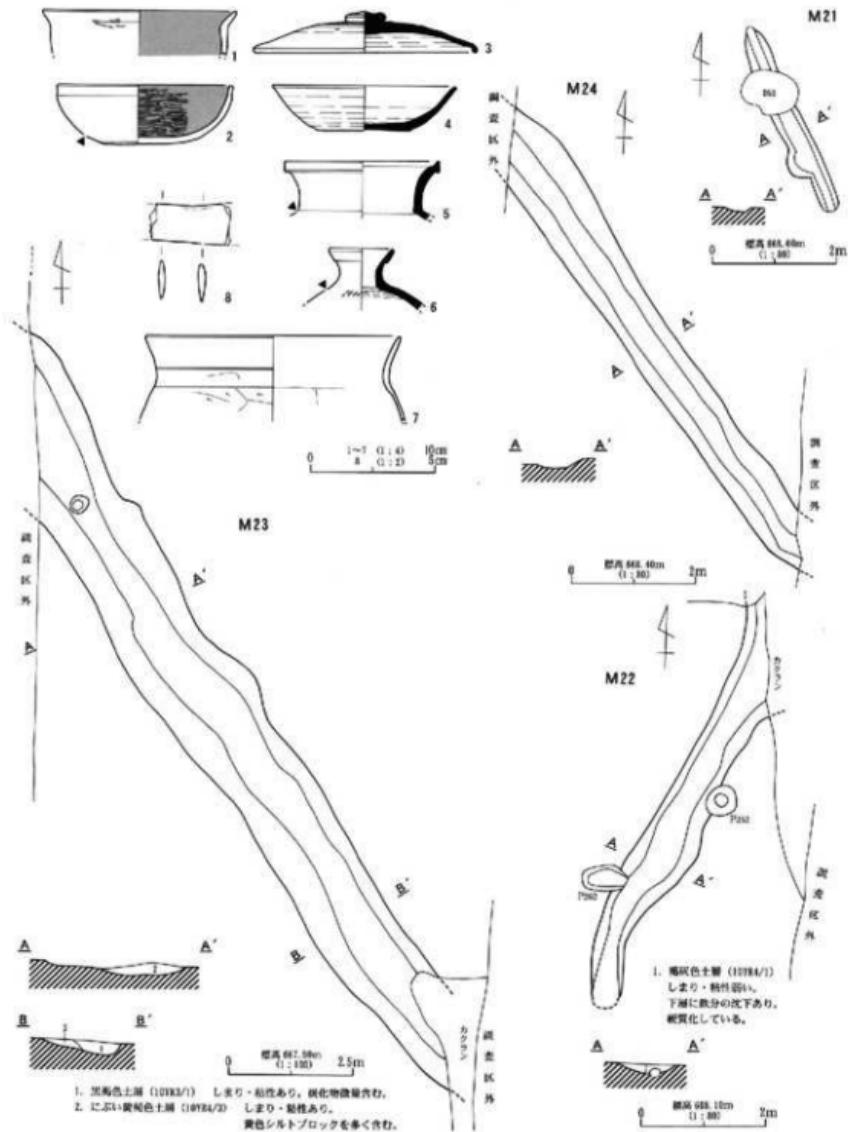
(4) M24号溝状遺構 (第121図)

本址は、調査区南側のニ-78、ヌ-76~78Grに位置する。残存状態は北側と南側は調査区域外となる。形態は南北方向にのびる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ8.70m(検出)・幅0.74~1.07m・深さ3~16cmを測る。

本址からの出土遺物は無かったが、覆土中から木片等が出土し、覆土も水田の耕作土が崩落したような土であったため、本址の帰属時期は近世から近代と考えられる。

No.	種別	器種	法規		底面・調査・文様		備考	出土位置	
			公社高	公社幅	内面	外面			
1	土師壺	壺	15.6	-	黑色地絵	ハラミガキ	回転実測 口縁1/3残存	M23-II区	
2	土師器	壺	14.1	7.2	4.8	ミガキ+黑色地絵	ナデ	完全実測 2/3残存	M23-II区
3	須恵器	蓋	17.9	-	3.3	ロクロナデ	ビクロナデ 又井筒回転ヘラケズリ	回転実測 1/4残存	M23-II区
4	須恵器	壺	14.8	7.4	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ 武部回転糸切り	回転実測 1/4残存	M23-IIK
5	須恵器	甕	12.4	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 口縁光沢	M23-III区
6	須恵器	横瓶	5.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 平行タキ	完全実測 口縫ほり空隙	M23-II区
7	土師器	甕	20.4	-	-	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 口縫1/4残存	M23-IIK
No.	器種	器材	残高	残内径	最大幅	最大厚	基盤	所見	
8	刀子	鉄	(3.2)	(1.7)	(0.3)			出土位置 M23-II区ベルト	

第65表 溝状遺構出土遺物観察表

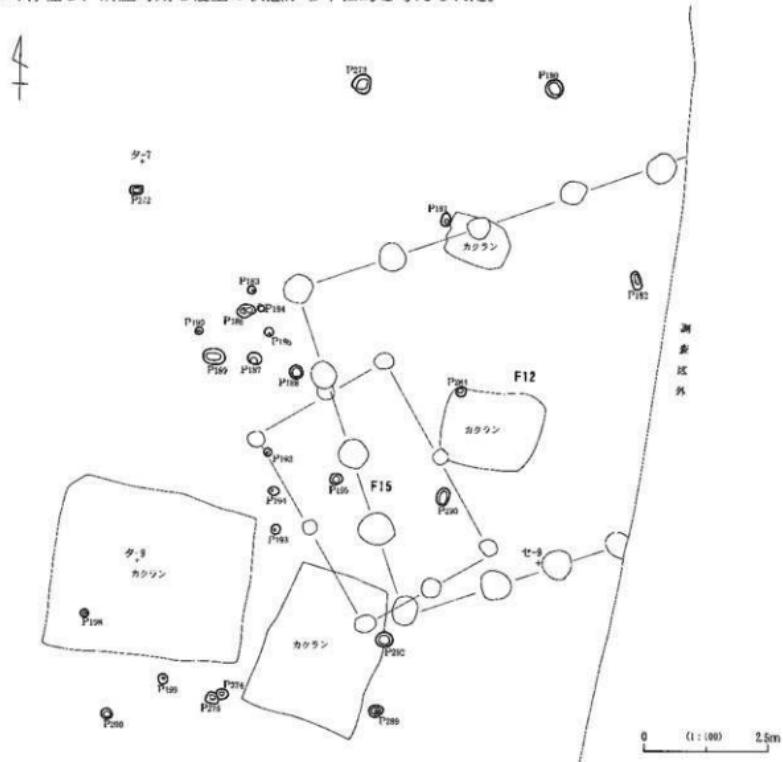


第121図 M21～24号溝状造構及び出土遺物実測図

第6節 ピット群（第122～127図）

本遺跡からは単独のピットとして、300以上検出された。これらピットの検出位置は、調査区中央部と南側に偏っている。中央部はテー33～43G r の40m間に集中する。この区間には多くの掘立柱建物址も存在し、掘立柱建物址と単独ピットが有機的に関連することが伺えた。これらのピットの所産時期は出土遺物が無く不明であるが、掘立柱建物址の所産が古墳時代後期や奈良・平安時代と考えられる事から、これらピットも同様の時期と推定できる。

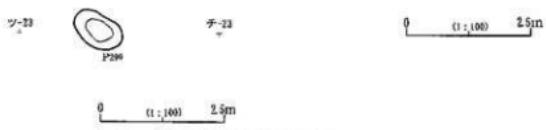
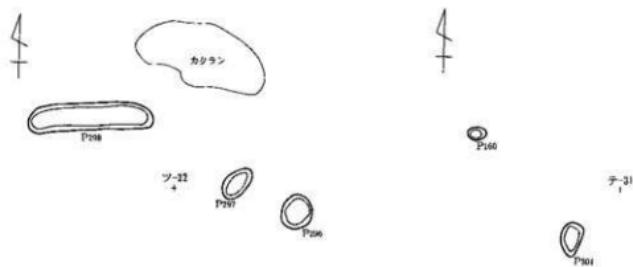
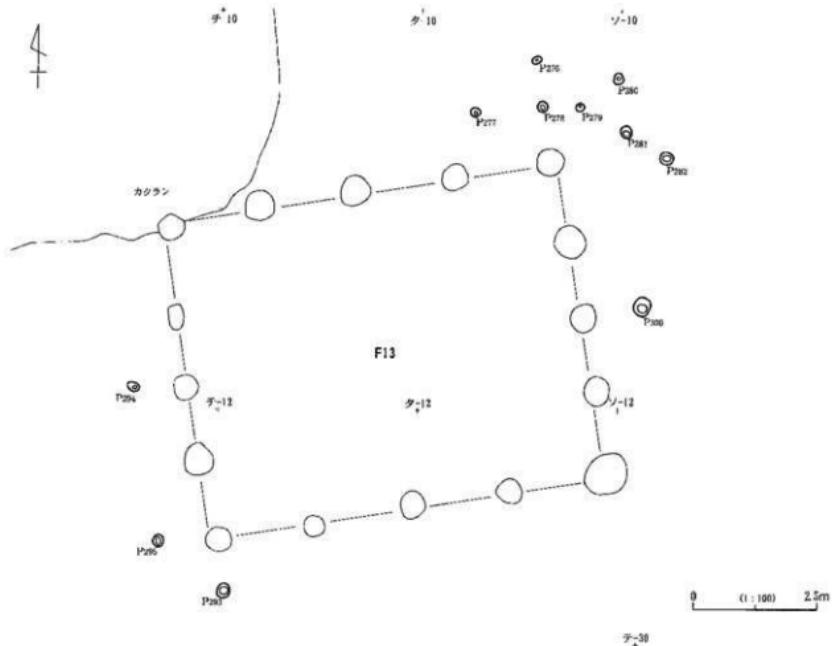
なお、調査区南側にも単独ピットの集中区が見られたが、中央部とは対照的にこちらは竪穴状遺構が多く存在し、所産時期も覆土の状態から中世的と考えられた。



第122図 ピット実測図(1)

No.	種別	規格	法標	成形・調整・文様				備考	出土位置
				内面	外面	所見			
3	須恵器	环	13.8 8.0 (4.3)	クロナデ	ロクロナデ 波彌ヘタケズリ	四輪尖端 1/4残存	P102		
4	土師器	环	13.2 5.8 5.1	リクイナデ ミガキ→黒色處理	リクイナデ 鹿鹿石圓錐角切り	完全実測 4/5残存	P153		
5	須恵器	環	— —	クロナデ	ロクロナデ 平行タクキ	四輪尖端 類似1/6残存	P102		
6	器種	素材	残存率 最大径 最小径 最大厚 高さ	我命平 横長 扇人相 扇人厚 高さ		所見		出土位置	
1	原石	麻理石	6.2 2.2 1.6 22.26				P7		
2	刀子	鐵	(2.6) (1.3) (0.4)		木質が吸る		P41		

第66表 ピット出土遺物観察表

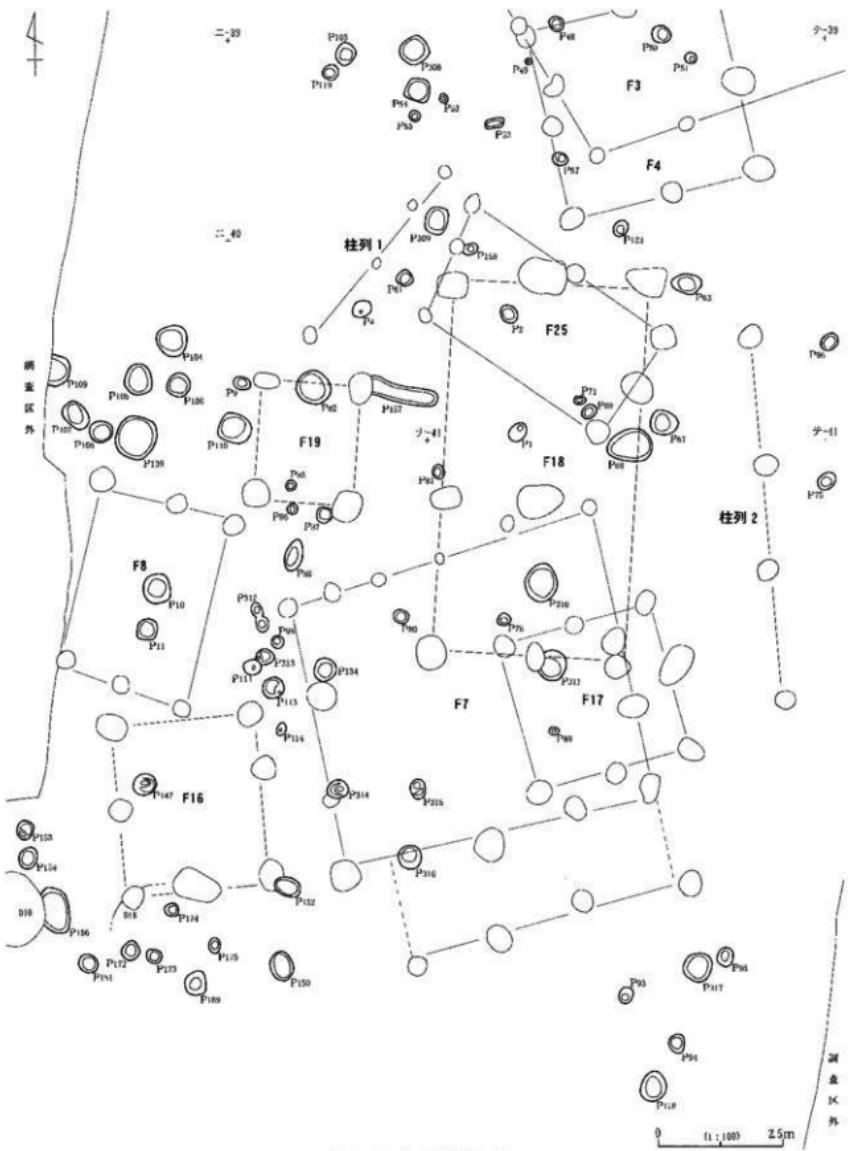


第123図 ピット実測図 (2)

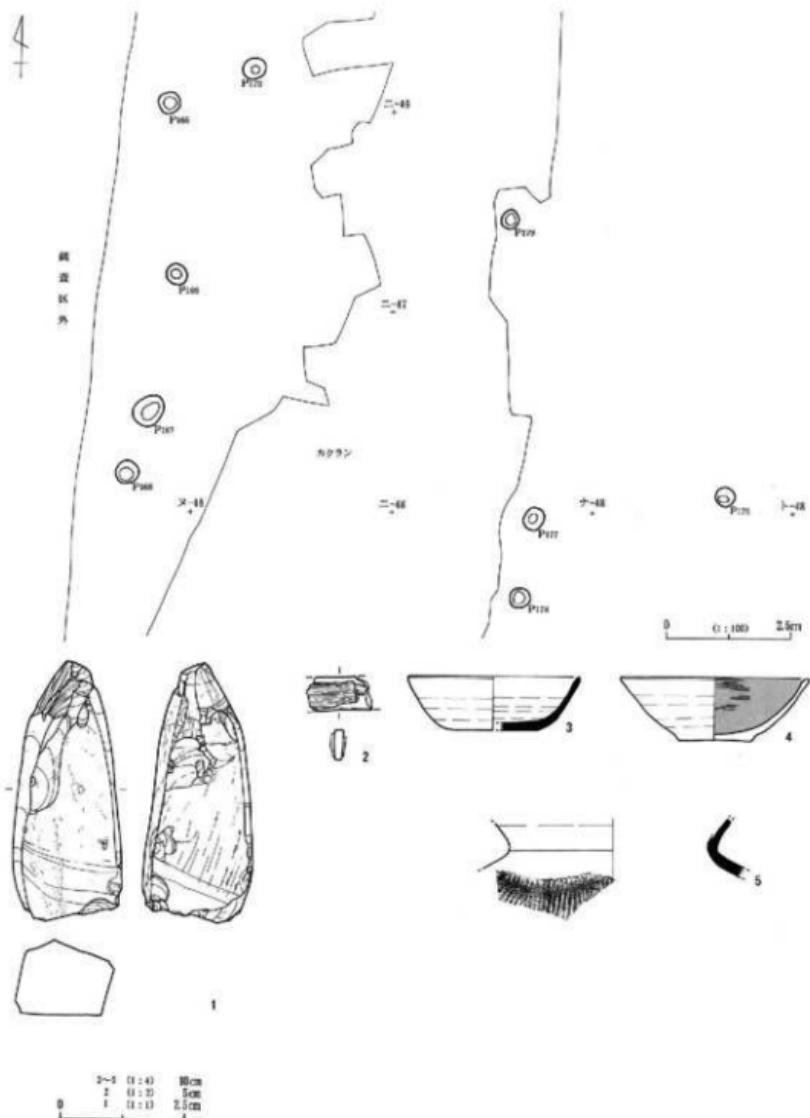
4+



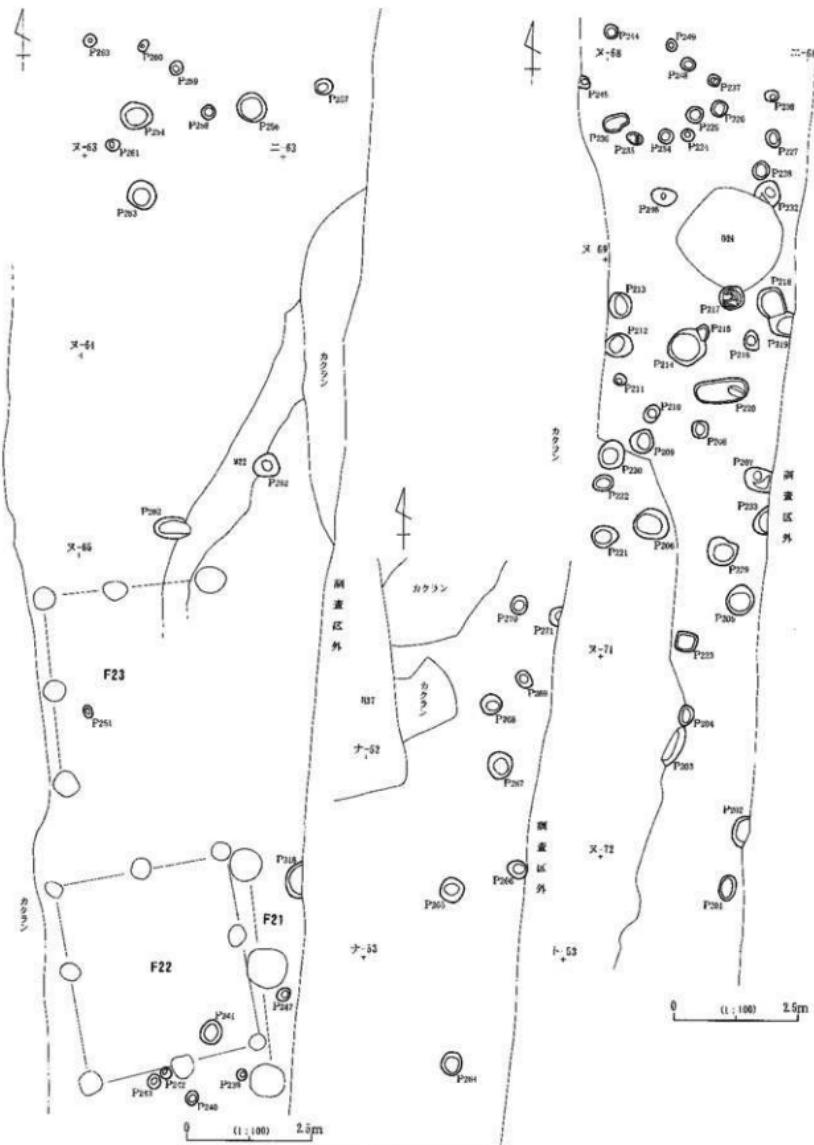
第124図 ピット実測図(3)



第125図 ピット実測図 (4)



第126図 ピット実測図(5) 及び出土遺物実測図



第127図 ピット実測図 (6)

堆積名	検出位置	長径×短径×高さ	形態	覆土	出土遺物	時代	遺物回数
P1	ト-10	38×31×9	楕円形	黒褐色土 (10YR2/3)			
P2	*	39×32×6	*	*			
P3							
P4	ナ-40	39×32×17	*	黒褐色土 (10YR2/3)			F25に変更
P5							
P6	ニ-58	38×32×4	円形	黒色土 (10YR2/1)			F19に変更
P7	*	30×24×16.5	楕円形	*	須恵器壺？(平安)、土師器壺、高麗石		
P8							
P9	ナ-40	32×24×9.5	楕円形	褐色土 (10YR2/1)	土師器壺(古物)、土師器壺(古物)	F19に変更	
P10	ニ-41	38×52×18	円形	*			
P11	*	40×38×14	四角形？	*			
P12							D17に変更
P13							F11に変更
P14	ト-34	12×10×6	円形	褐色土 (10YR2/1)			
P15	*	32×18×7.5	楕円形	*			
P16	*	34×30×3	円形	*			
P17	*	30×20×1.5	長方形	*			
P18	*	32×24×4	楕円形	*			
P19	*	24×22×3	*	*			
P20							F11に変更
P21							*
P22	ト-34	24×24×6	円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P23	ト-35	16×14×6.5	*	黒褐色土 (10YR2/1)			
P24	*	14×12×4	*	*			
P25	*	25×22×3.5	不規則形	*			
P26							F11に変更
P27							*
P28							*
P29	ト-35	30×29×10.5	四角形？	黒色土 (10YR2/1)			
P30	*	30×20×7.5	長方形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P31							F27に変更
P32							*
P33	ト-36	60×54×20	円形	黒色土 (10YR2/1)			
P34	ト-35	90×44×17.5	不規形	*			
P35	ト-36	94×65×13.5	楕円形	*			
P36	*	74×48×7	不規形	*			
P37	テ-35	42×28×30	楕円形	*	土師器壺・壺		
P38	*	40×38×1?	円形	*			
P39	ヲ-34	38×42×11.5	*	黒褐色土 (10YR1.7/1)			
P40	ヲ-36	142×63×28.5	長椭円形	黒褐色土 (10YR2/1)			
P41	ト-36	82×42×7	楕円形	*	土師器壺、鉢製品		
P42	*	62×50×6.5	円形	*			
P43							欠番
P44							F11に変更
P45							*
P46	テ-37	22×20×9	円形	黒褐色土 (10YR2/2)			
P47	ト-35	16×14×4	*	黒褐色土 (10YR2/1)			
P48	*	30×30×6	*	黒褐色土 (10YR2/2)			
P49	ト-39	14×14×13.5	*	黒褐色土 (10YR2/1)			
P50	テ-ト-39	40×34×7.5	楕円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P51	ヲ-39	24×34×10.5	円形	*			
P52	ト-39	38×20×4	椭圆形	*			
P53	*	18×15×8.5	不規形	*			
P54	テ-39	48×46×14.5	椭丸？	*			
P55	*	22×22×4	円形	*			
P56							F25に変更
P57	ト-39	34×24×8	楕円形	黒色土 (10YR1.7/1)			
P58							F25に変更
P59							*
P60	テ-37	46×44×15	円形	黒色土 (10YR2/1)			

第67表 ピット計測表(1)

P61	ナ-40	32.5×30×17	円形	黒色土 (10YR2/1)		
P62					F25に変更	
P63	ナ-40	58×40×9	楕円形	黒色土 (10YR2/1)		
P64					柱列2に変更	
P65					F25に変更	
P66					F18に変更	
P67	ナ-40	56×50×19	楕円形	黒色土 (10YR2/1)		
P68	ナ-ト-40-41	58×65×11	*	*		
P69	ト-40	30×26×15.5	円形	*		
P70					F25に変更	
P71	ト-40	22×19×19.5	円形	黒色土 (10YR1.7/1)		
P72					柱列2に変更	
P73					*	
P74					*	
P75	ナ-41	40×34×13	楕円	黒色土 (10YR1.7/1)	液状化年 (西軸系切り)	
P76					F17に変更	
P77					*	
P78	ト-41	26×24×21	円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P79					F17に変更	
P80	ナ-41	30×27×15	円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P81	ト-41	28×24×7	*	*		
P82	ナ-40	66×64×20.5	*	黑色土 (10YR2/1)	土師器裏	
P83					柱列1に変更	
P84					*	
P85	ナ-41	20×18×9	円形	黒褐色土 (10YR3/2)		
P86	*	22×20×3	*	*		
P87	*	133×28×5.5	*	褐色土 (10YR1.7/1)		
P88	*	62×32×11	楕円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P89	ト-42	18×16×33	円形	*		
P90					F17に変更	
P91					矢器	
P92					*	
P93	ト-13・41	32×28×21	楕円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P94	ナ-ト-44	38×32×10.5	*	*		H10を切る
P95	ナ-43	34×32×15	*	黑色土 (10YR1.7/3)		
P96	ナ-40・41	38×30×18	*	黑色土 (10YR2/1)		
P97					F26に変更	
P98	ナ-42	26×24×18.5	円形	黑色土 (10YR1.7/1)		
P99					F26に変更	
P100	ト-37	60×50×13.5	楕円形	黑色土 (10YR1.7/1)		
P101	*	56×(40)×10	小盤形	*		
P102	ト-36	80×62×13	楕円形	*	液状化年、液状化後、土師器裏、武藏鏡(余良)	
P103	ナ-39	42×38×11	*	*		
P104	ニ-40	60×58×32	*	黒褐色土 (10YR2/2)	液状化年、土師器裏	H19を切る
P105	*	60×56×13	円形	*		*
P106	ニ-ト-41	48×46×10.5	*	*		
P107	ニ-40	58×43×27.5	楕円形	黑色土 (10YR1.7/1)	土師器裏	
P108	*	46×42×11	円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P109	*	64×(40)	*			
P110	ナ-ニ-40	66×58×36	楕円形	黑色土 (10YR1.7/1)	土師器裏、杯(古墳)	
P111	ナ-42	34×32×24	円形?	黑色土 (10YR2/1)		
P112					F16に変更	
P113	ナ-42	42×42×27	円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P114	*	23×18×27.5	楕円形	*		
P115					F27に変更	
P116					F26に変更	
P117	ナ-36	34×30×9.5	円形	黑色土 (10YR1.7/1)		
P118	ナ-41	60×52×21	楕円形	*		
P119	ナ-39	28×28×7.5	円形	黑色土 (10YR2/1)		
P120					F7に変更	
P121					*	

第68表 ピット計測表(2)

P122						
P123	ト-39	30×28×11	円形	黒褐色土 (10YR2/2)		矢器
P124	ナ-38	36×24×8	楕円形	黑色土 (10YR2/1)		
P125						
P126						井削1に変更
P127						F26に変更
P128	ナ-35	28×28×9	円形	黑色土 (10YR2/1)		*
P129						F27に変更
P130	ナ-37	24×22×16.5	円形	黑色土 (10YR1.7/1)		F26に変更
P131						
P132	ト-37	46×40×8	不整円形	黑色土 (10YR2/1)		
P133	ナ-38	34×30×6.5	円形	*		
P134	ナ-42	48×42×10.5	楕円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P135	ナ-38	38×34×15.5	円形	黒色土 (10YR2/1) ロームブロック少含		
P136	*	34×32×10.5	*	*	*	
P137	*	48×44×11.3	*	*	*	
P138	*	60×58×17	*	*	*	
P139	ニ-40・41	86×82×18	*	黒色土 (10YR2/1)	上脚跡或底座	
P140	ト-37	20×18×5.5	四角形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P141	*	24×24×6	円形	*		
P142	ト-38	54×30×8	不整形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P143	*	94×76×10	*	*		
P144	テ-38	26×26×8.5	円形	黑色土 (10YR2/1)		
P145	ナ-36	72×40×16	楕円形	黒褐色土 (10YR2/2)		
P146						F16に変更
P147	ニ-42	76×42×28	円形	黑色土 (10YR1.7/1)	上脚跡或古墳・跡	
P148						F16に変更
P149						*
P150	ナ-43	36×44×48	楕円形	黑色土 (10YR1.7/1)	土脚跡或古墳・内窓	
P151	ニ-43	38×38×29	円形	黑色土 (10YR2/1)	土脚跡或古墳・跡	D10に切られる
P152	ナ-43	50×36×12	楕円形	*		F16を切る
P153	ニ・ト-42	38×32×16	*	黑色土 (10YR1.7/1)		
P154	ニ・ト-43	40×34×13	*	*		
P155	ト-33	70×40×22	*	黑色土 (10YR2/1)	上脚跡跡 (内窓)	D7・P163を切る F2に切られる
P156	ニ-43	90×60×16.5	*			D10に切られる
P157	ト・ナ-40	140×33×5	細長円形	暗褐色土 (10YR3/3)		F19に切られる
P158	ト-40	30×30×6.5	円形	黑色土 (10YR2/1)		F25に切られる
P159						欠損
P160	テ-30	34×26×20	楕円形	黑色土 (10YR1.7/1)		
P161						F11に変更
P162						*
P163	ト-33	60×(20)×16	楕円形	黑色土 (10YR2/1)	上脚跡跡 (半空)	D7を切る P155に切られる
P164	テ-35	54×46×15	*	暗褐色土 (10YR3/4)		
P165	ヌ・ト-16	44×42×18	円形	*		H8を切る
P166	ヌ-46	40×40×16	*	黑色土 (10YR2/1)		中脚窓*
P167	ヌ-47	66×54×21	楕円形	暗褐色土 (10YR3/4)		*
P168	*	45×41×30	円形	*		H47を切る
P169	ニ-43	47×42×24.7	楕円形		上脚跡要	H44・H15を切る
P170	ニ-45	45×44×15	円形			H11を切る
P171						F16に変更
P172	ニ-43	60×34×13	円形			D18に切られる
P173	*	28×27×10	四角形?			*
P174	*	26×26×8.5	*			*
P175	*	24×23×9	楕円形			*
P176	ト-47	40×38×23.5	円形			
P177	ナ・ニ-48	46×40×15	楕円形			
P178	ナ-48	40×40×11	円形?			H42とH46を切る
P179	ナ-46	36×34×21	四角形?		上脚跡要 (内窓)	H11を切る
P180	ヌ-6	37×36×13	円形	黑色土	上脚跡要 (古墳)	

第69表 ピット計測表(3)

P181	ツ - 7	24×22×14	円形	黒色土			
P182	ス - 7	36×20×11.5	丸形	*			
P183	ソ - 7	16×14×10.5	円形	*			
P184	*	16×13×26	*	*			
P185	*	18×16×14.5	楕円形	*			
P186	*	36×26×24(テラス16)	不整形	*			
P187	ソ・タ 8	26×23×27.5	円形	黒褐色土 黄色シルト多含			
P188	ソ - 8	26×26×13.5	*	黑色土			
P189	ソ・タ - 8	44×30×7	楕円形	深褐色土 黑色シルト多含			
P190	ソ - 7	14×14×11	円形	黑色土			
P191						F15に変更	
P192	ソ - 8	16×14×10	円形	黑色土			
P193	*	19×18×20.5	*	*			
P194	*	20×18×6.5	*	*			
P195	ソ - 8 - 9	24×24×6.5	*	黒褐色土 黄色シルト多含			
P196						F15に変更	
P197						F15に変更	
P198	タ 9	16×16×13	円形	黑色土			
P199	ソ - 9	20×20×20	*	*			
P200	タ 9	22×22×8	*	*	土師器皿(古墳)		
P201	ニ - 72	50×32×7	楕円形	褐灰色土		中世	
P202	ニ - 71	(60)×(35)×7	*	*		*	
P203	*	(84)×(30)×27	*	黑色土 土師土器子合	土師器皿(古墳)	古代	
P204	*	49×(30)×22	楕円形	*		?	
P205	ニ - 20	58×55×18	円形	褐灰色土	須恵器、土師器、武藏壹(平安)		
P206	*	68×64×36	楕円形	黑色土 土師土器子合	土師器皿(古墳)	古代	
P207	*	(52)×(50)×27.5	褐灰色土			中世	
P208	ニ - 69	34×32×15	円形	*		*	
P209	*	48×46×13	*	*	土師器皿(底部~口縁)	*	
P210	*	36×32×40	*	*	土師器皿	*	
P211	*	24×24×27.5	*	*	須恵器	*	
P212	*	53×46×32	楕円形	*		*	
P213	*	48×42×17.5	*	*	土師器皿	*	
P214	*	70×70×23	円形	*	土師器皿(古墳) - 東	T a 24を切る	
P215	*	28×(23)×11	*			*	
P216	*	34×32×32	楕円形	*		*	
P217	*	48×45×	円形	*		石が有り下部不明	
P218	*	(68)×52×14.5	楕円形	*		*	
P219	*	50×(42)×30	*	*		*	
P220	*	164×46×11	長円形	黒褐色土	須恵器皿(底部)、土師器皿(平安)	?	T a 24を切る
P221	ニ - タ - 70	54×44×11.5	楕円形	黒褐色土 地土粒子多含	土師器皿、灰(口縁)	古代	
P222	*	36×32×9	円形	黒褐色土		*	
P223	ニ - 70	49×24×40	四角形	*			
P224	ニ - 68	24×24×18.5	円形	褐灰色土		中世	
P225	*	32×30×18.5	*	*		*	
P226	*	34×22×15	*	*		*	
P227	*	32×26×15	楕円形	*		*	
P228	*	36×33×19	円形	*		*	
P229	ニ - 70	60×56×19.5	不整形	黒褐色土	須恵器皿、灰、土師器皿(平安)	古代	右有り
P230	ニ - 69-70	57×52×26.5	楕円形	*	土師器皿	*	
P231						欠番	
P232	ニ - 68	50×(40)×28.5	褐灰色土			中世	D 24に切られる
P233	ニ - 70	(60)×(26)×8	黑色土 地上粒子多含	須恵器皿、土師器皿(平安)		古代	?
P234	ニ - 68	30×28×17.5	円形	黒褐色土 黄色シルト多含		*	
P235	*	30×24×13.5	楕円形	黒褐色土		中世	右有り
P236	*	48×33×6.5	不整形	*	土師器皿(吉備)	*	
P237	*	34×34×14	四角形?	*	土師器皿(古墳) - 東		
P238	*	24×22×16	*	*			
P239	ニ - 67	22×22×24	円形	黒褐色土			
P240	ニ - 67	30×28×11.5	*	黒褐色土			
P241	*	50×46×14.5	*	*			

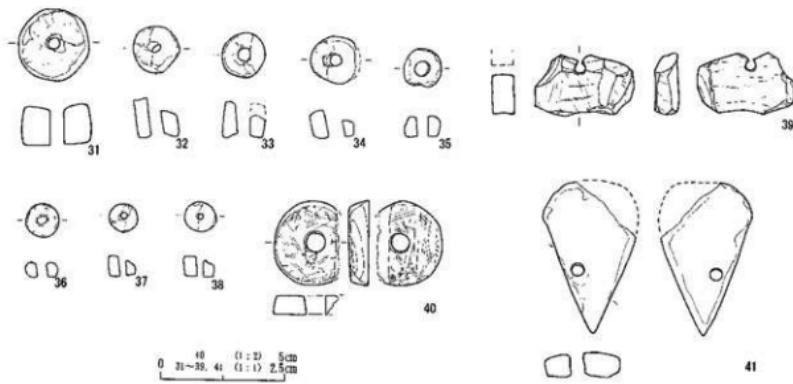
第70表 ピット剖面表(4)

P242	セ-67	24×22×11.5	円形	黒褐色土		古代?	
P243	*	28×28×12	*	*		*	
P244	*	28×28×9	*	褐灰色土		中世	
P245	セ-68	(24)×22×18	楕円形?	*			
P246	セ-68	48×38×25	*	*		中世	
P247	ナ-67	28×26×12.5	四角形?	*		*	
P248	セ-69	28×26×11.5	円形	*		*	
P249	セ-67	20×20×12.5	*	*		*	
P250						欠番	
P251	セ-65	22×18×17.5	楕円形	黒褐色土 黄色シルトブロック含			
P252	セ-64	(70)×42×17	楕円形?	褐灰色土 褐多孔		中世	
P253	セ-63	56×56×32	円形	褐灰色土	上耕跡印(六張・内深)・下耕前使	*	H31を切る
P254	セ-62	64×56×29.5	楕円形	*	上耕跡印(六張)、深色當燒痕(口輪)	*	*
P255						欠番	
P256	セ-62	60×60×22	円形	褐灰色土		中世	H31を切る
P257	ナ-62	36×30×12.5	楕円形	黒褐色土		*	
P258	セ-62	26×26×22	円形	*		*	H31を切る
P259	*	26×26×20.5	円形?	*		*	
P260	*	23×20×15	楕円形	*		*	
P261	*	26×24×12	円形	*		*	
P262	セ-64	(50)×48×20	楕円形?	*		*	
P263	セ-62	28×26×21	円形	*		*	
P264	ト-53	46×40×28	抜方形?	褐色土?	上耕跡印・集	古代	
P265	ト-52	50×50×25	円形?	*	上耕跡	*	Ta 25を切る
P266	*	40×36×18	楕円形	*	土耕跡印(内深)・武麻便(半變)	*	
P267	ト-51・52	36×48×18	*	* (白味あるが中身とは異なる)		*	
P268	ト-51	52×40×39	円形				
P269	*	38×30×19	楕円形				
P270	*	36×34×17	円形?		上耕跡		
P271	*	(40)×(18)×11					
P272	タ-7	24×20×10	四角形	黑色土			
P273	セ-6	39×38×15	円形	*			
P274	セ-9	24×20×21	*	*			
P275	*	26×26×12.5	楕円形	*			
P276	セ-10	18×16×16.5	円形	*			
P277	*	20×20×30.5	*	*			
P278	*	23×18×5.5	楕円形	*			
P279	*	16×15×17.5	円形	黒褐色土 黄色シルト多含			
P280	セ-10-11	24×18×26	楕円形?	*			
P281	*	24×24×22	円形	*			
P282	セ-10	26×24×8	*	* 淡化物含			
P283						F15に変更	
P284	セ-8	20×18×16.5	四角形?	黑色土		カクラン内	
P285						F15に変更	
P286						F15に変更	
P287						F15に変更	
P288						欠番	
P289	セ-9	26×20×6	楕円形	褐色土			
P290	セ-8	34×25×5.5	*	*			
P291						F15に変更	
P292	セ-9	30×30×13.5	円形	褐色土			
P293	チ-12-13	26×24×17	*	黑褐色土			
P294	チ-11	22×20×16	楕円形	* 黄色シルト粒子多含			
P295	チ-12	24×22×11	円形	*			
P296	チ-22	70×60×17	*	褐褐色 (10YR3/3) 黄色ロームプロ ック少含			
P297	*	70×44×12	楕円形	*			
P298	チ-21	230×54×16	*	黑色土 (10YR2/1) 黑色土主体 1) 黑褐色土 (10YR2/1) 黑色土主体 2) 黑褐色土 (10YR3/2) 黄色ローム ブロック無含			
P299	チ・ツ-23	110×66×43	*				

第71表 ピット計測表 (5)

遺物名	検出位置	長径×短径×厚さ	形状	土	出土遺物	時代	差異関係
P300 セ-11	38×34×16	円形	褐色土				
P301 テ-31	70×40×12	楕円形					
P302 ニ-37・38	32×30×6	円形	黒色土 (10YR2/1) Li-ムブロック少含				
P303 ニ-38	30×30×7	*	*	*			
P304 ナ-38	48×45×10.5	楕円形	*	*			
P305 ナ-37	36×33×13	円形	*	*			
P306 ナ-39	43×40×17	*	*	*			
P307 ナ-38・39	62×42×9.5	不整歩					
P308 ナ-39	58×56×6.5	円形					
P309 ト-39	52×48×7.5	楕円形					
P310 ト-41	74×60×18	*	黒色土 (10YR2/1) Li-ム粒子混含				
P311 ト-42	64×(48)×23	*	黒色土 (10YR2/1)				P18に切られる
P312 ナ-41	62×20×19						
P313 ナ-42	36×32×21	円形					
P314 *	37×30×18.5	楕円形	黒色土 (10YR2/1) Li-ム粒子混含				
P315 *	41×38×33	*	*	*			
P316 ナ-43	45×45×29	円形	黒色土 (10YR2/1)				
P317 ナ-43	56×54×15	円形サ	*				
P318 ナ-66	(70)×(30)×10						

第72表 ピット計測表 (6)



第128図 遺構外出土遺物実測図 (1)

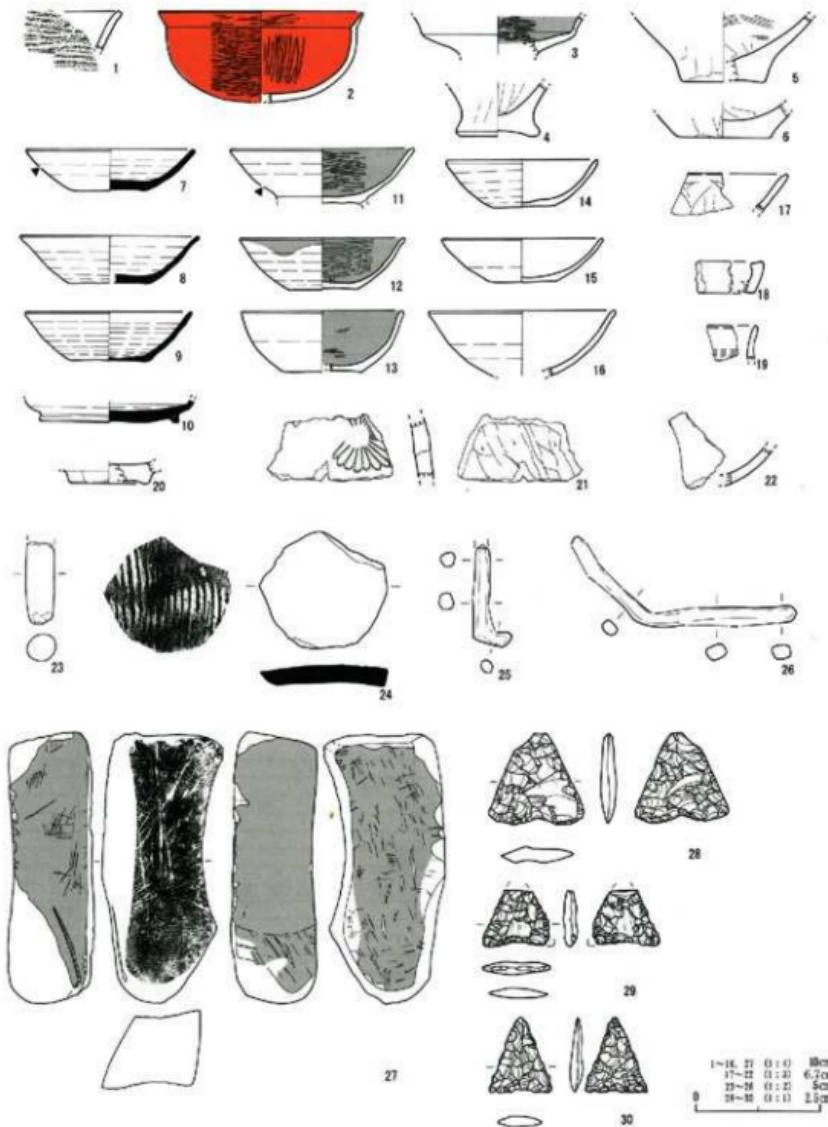
第7節 遺構外出土遺物 (第128・129図)

本遺跡からは多量の遺構外遺物が出土した。特に調査区中央部分については、遺構確認面が水田耕作上直下の黒色土中にあり、確認面を黄色のシルト層まで下げることにより多量の遺物が検出時に出土している。また、カクラン部分についても、削平された土の中には周辺部の住居址の遺物が混入した状態であった。

図示した遺物は石製品も含め、41点を示した。1は弥生前期の土器片と考えられる。外面にやや粗い細密条痕を施している。2は古墳時代中期に属する土師器壺で、やや大型の物である。内外面赤彩を施す。3は土師器高杯である。7~10は須恵器壺と高台壺で、いずれも底部回転糸切り離してある。14~16は土師器壺である。17は龍泉窯系の青磁碗の口縁部である。18は近世在地窯の前山焼と考えられる。21は古瀬戸の瓶子で、菊のスタンプが押されている。22は伊万里染付碗の底部である。23は土製品であるが孔とかはなく、用途不明である。24は須恵器壺を転用した土製円盤で、外面に敲き目が残る。25と26は鉄製品で釘と考えられる。27は砥石、28~30は石織である。31~38は臼玉、40は石製鋤錐車、39は石製模造品の劍のようだが不確実で有孔品、41は劍形と考えられる。

No.	種別	器種	法 単			成 形・調 熟・文 横		器 名	出土位置
			内 面	外 面					
1	弥生土器	洗鉢	—	—	—	上字文	横片赤陶	手 17	
2	土師器	壺	15.4	—	(7.3)	ミガキ 赤色墨彩	同上	1/2残存	又 60
3	土師器	高杯	—	—	—	ミガキ 黒色墨彩	同上	1/4残存	ト-48
4	土師器	壺	6.8	—	—	ヘラナデ	同上	—	Z
5	土師器	壺	6.8	—	—	ハラナデ	同上	1/2残存	ナ 53
6	土師器	壺	7.7	—	—	ヘラナデ	同上	底部回転糸切り	ト-48
7	須恵器	壺	13.6	5.6	3.4	ロクロナデ 外縁	ロクロナデ 底部回転糸切り 大腹	心字文	4/5残存
8	須恵器	壺	14.4	6.2	5.9	ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 底部回転糸切り 火拂	同上	1/3残存
9	須恵器	壺	13.5	6.5	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	完全実測	ナ 47
10	須恵器	高台壺	—	11.2	—	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り	同上	底部1/4残存
11	土師器	壺	14.8	—	—	ミガキ 黑色墨彩	ロクロナデ 高台火拂	完全実測	ト-48
12	土師器	壺	13.2	5.2	4.2	ロクロナデミガキ 黑色墨彩	ロクロナデ 底部回転糸切り	同上	ナ-47
13	土師器	壺	13.0	5.4	(4.9)	ミガキ 黑色墨彩	ロクロナデ 底部回転糸切り	同上	ト-48
14	土師器	壺	12.2	4.7	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	完全実測	4/3残存
15	土師器	壺	13.0	5.4	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	同上	1/3残存
16	土師器	壺	15.0	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	心字文	ト-48
17	吉備	瓶	—	—	(2.2)	施釉	施釉 通文	同上	13C後半
18	陶器	山口	—	—	(1.9)	施釉	施釉	同上	近山 世紀 1段
19	陶器	山口	—	—	(2.0)	施釉	施釉 下半部ロクロにより清 残影	同上	1段
20	陶器	鐵鉗柄	—	4.7	(1.3)	ロクロナデ 全面施釉	施釉ロクロヘラケズリ 鉗部一部施釉	同上	前山 近山 底部
21	陶器	瓶子	—	—	(3.8)	ねんどみもからドヘナデ	菊スタンプ 全面施釉	施釉	古瀬戸
22	陶器	染付罐	—	—	(2.5)	施釉	施釉	同上	小要様式 13C末~14C初
23	土製品	不明	3.2	律1.1	—	—	—	破片	18C後半
24	須恵器	円盤	延5.1	—	0.7	ナデ	平行タタキカキ印	同上	ナ-53
No.	器種	素 材	残存寸	最大幅	最大幅	重 量	所 在		
25	鉄	鉄	(4.1)	(0.7)	(0.7)	—	—	—	ニ-60
26	鉄	鉄	10.3	0.9	0.6	—	—	ト-49	
27	砂岩	砂岩	21.6	9.6	7.0	1727.53	拓本	—	ト-47
28	石織	玄武岩	1.8	1.8	0.3	0.83	—	—	ツ-28
29	石織	玄武岩	(1.1)	(1.4)	(0.3)	(0.39)	正・裏と下顎面に刻まれた山・上部・心臓部欠損	—	ツ-74
30	石織	風呂石	1.2	1.1	0.21	0.27	—	—	同上
31	臼玉	漂石	0.80	1.40	0.24	2.88	—	—	ニ-62
32	臼玉	漂石	0.80	0.90	0.25	0.86	—	—	ナ-53
33	臼玉	漂石	0.70	0.90	0.25	0.75	—	—	ト-49
34	臼玉	漂石	0.64	0.90	0.30	0.62	—	—	ニ-53
35	臼玉	漂石	0.44	0.74	0.28	0.34	—	—	ソ-16
36	臼玉	漂石	0.30	0.70	0.20	0.23	—	—	ナ-54
37	臼玉	漂石	0.40	0.55	0.12	0.16	—	—	ナ-50
38	臼玉	漂石	0.40	0.60	0.15	0.21	—	—	ナ-50
39	石製模造品	漂石	—	1.2	2.0	0.4	1.79 孔径0.2cm	—	ツ-23
40	石製模造品	漂石	延3.4	6.08	0.8	12.56	—	—	ト-49
41	石製模造品(劍)	漂石	—	3.1	(1.9)	0.35	3.36	—	同上

第73表 構造外土遺物觀察表



第129圖 遺構外出土遺物實測圖 (2)



市道遺跡Ⅲ・辻遺跡航空写真（上が北で、南北にのびるのが国道141号で、東西に交差するのは国道142号）



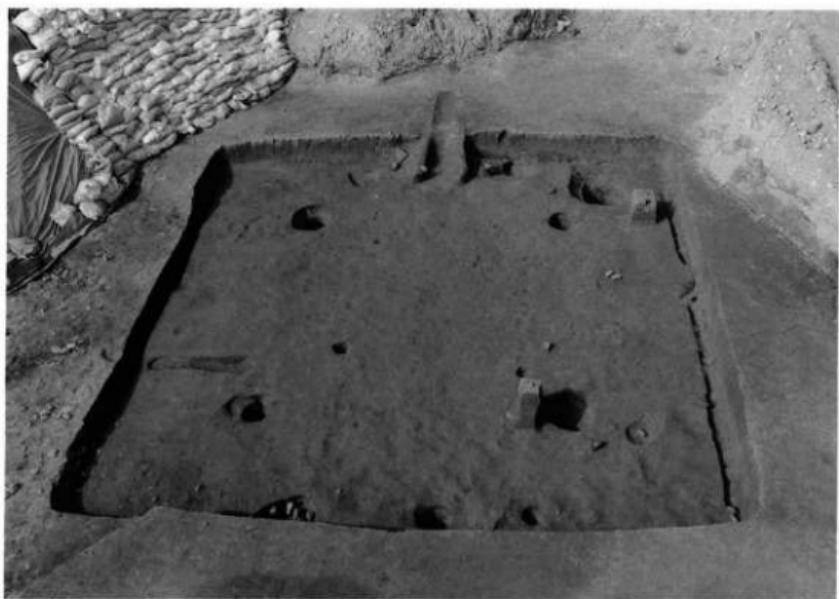
市道遺跡Ⅲ



辻遺跡 B 区



徳田遺跡Ⅱ C 区



H1号住居址全景



H1号住居址掘り方全景



H1号住居址遺物出土状況



H1号住居址カマド全景



H1号住居址カマド掘り方全景



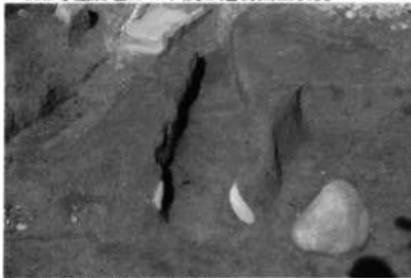
H2号住居址全景



H2号住居址掘り方全景



H2号住居址カマド及び遺物出土状況



H2号住居址カマド全景



H2号住居址カマド掘り方



H2号住居址遺物出土状況



H2号住居址カマド構築材



H3号住居址全景



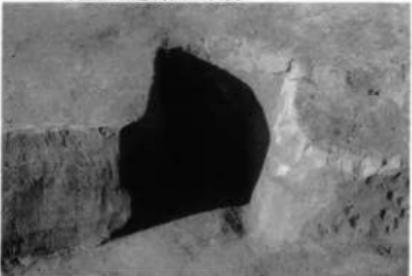
H3号住居址掘り方全景



H3号住居址遺物出土状況



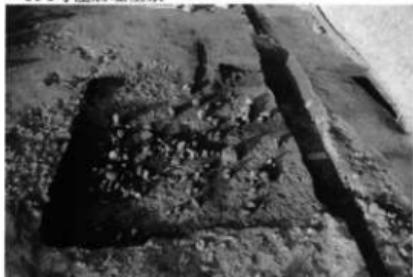
H3号住居址カマド全景



H3号住居址カマド掘り方



H4号住居址全景



H4号住居址掘り方全景



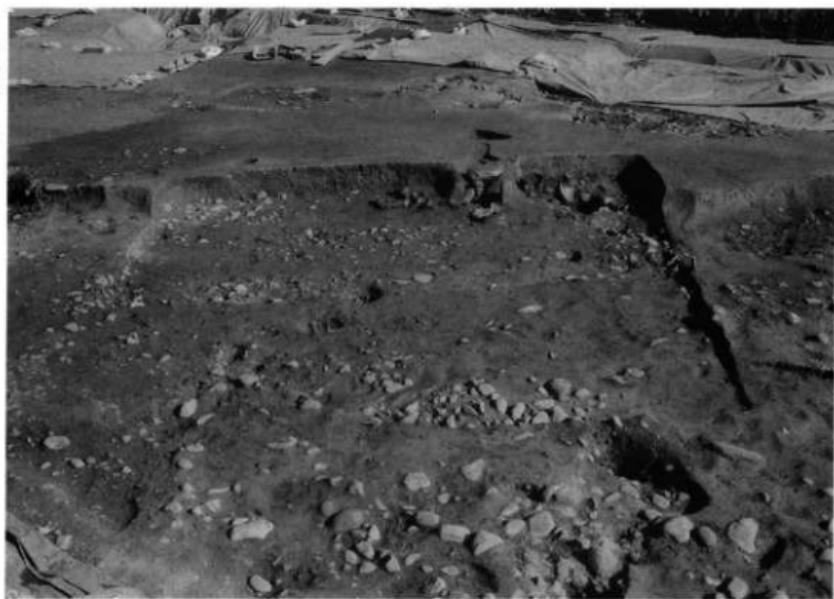
H4号住居址カマド全景



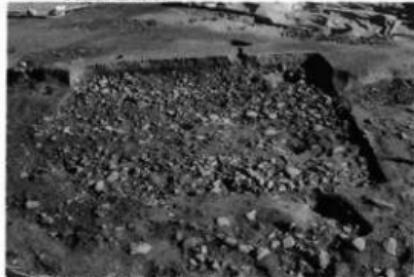
H5号住居址全景



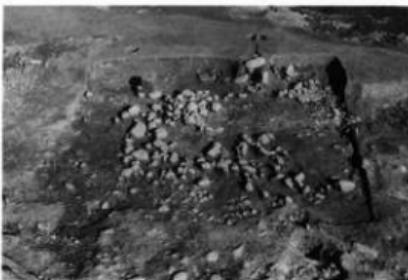
H6号住居址全景



H7号住居址全景



H7号住居址掘り方



H7号住居址遺物出土状況



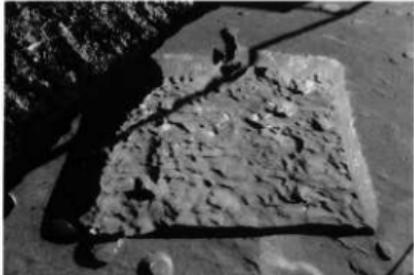
H7号住居址カマド全景



H7号住居址カマド掘り方



H9号住居址全景



H9号住居址掘り方全景



H9号住居址遺物出土状況



H9号住居址カマド全景



H9号住居址カマド掘り方



H8号住居址遺物出土状況



H8号住居址全景



H8号住居址掘り方



市道遺跡Ⅲ調査風景（南から）



H8号住居址カマド脇遺物出土状況



H8号住居址カマド全景



H8号住居址カマド全景



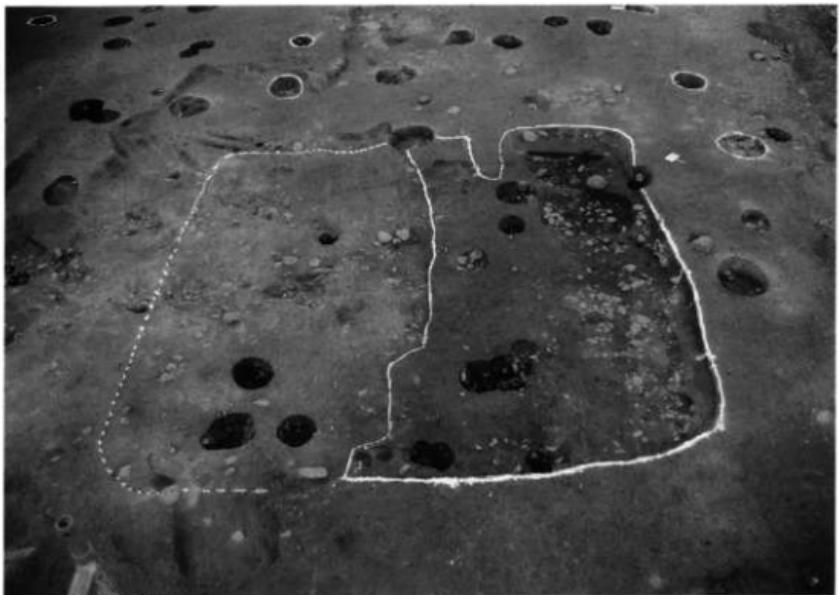
H8号住居址カマド掘り方



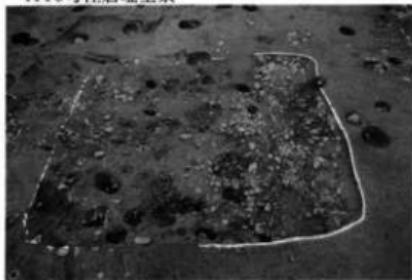
H8号住居址カマド構築材



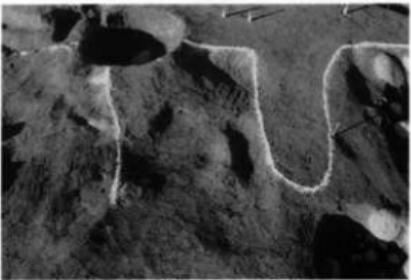
H8号住居址埋甕出土状況



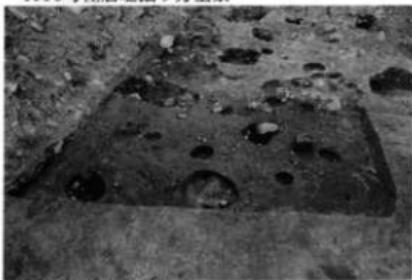
H10号住居址全景



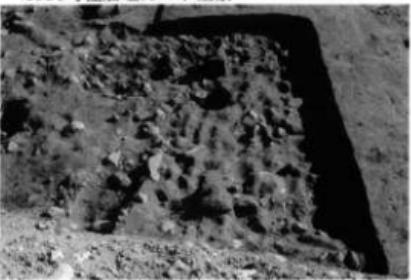
H10号住居址掘り方全景



H10号住居址カマド全景



H12号住居址全景



H12号住居址掘り方全景



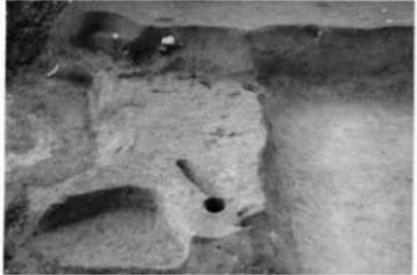
H11号住居址全景



H11号住居址掘り方全景



H11号住居址カマド全景



H13号住居址全景



H13号住居址遺物出土状況



H14号住居址全景



H14号住居址掘り方全景



H14号住居址カマド全景



H14号住居址カマド掘り方



H15号住居址掘り方全景



H15号住居址カマド全景



H15号住居址全景



H16号住居址全景



H16号住居址カマド全景



H16号住居址カマド掘り方全景



H17号住居址全景



H18号住居址全景



H19号住居址全景



H19号住居址掘り方全景



H19号住居址遺物出土状況



H19号住居址カマド全景



H19号住居址カマド掘り方全景



H20号住居址全景



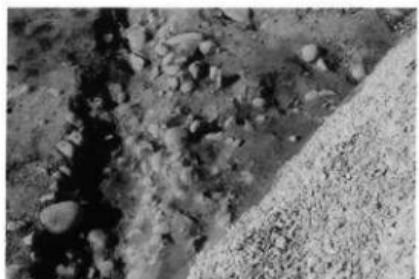
H21号住居址全景



H20号住居址掘り方全景



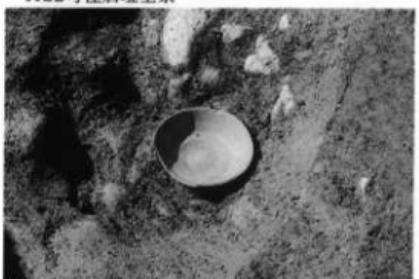
H21号住居址掘り方全景



H22号住居址全景



H22号住居址カマド全景



H22号住居址遺物出土状況



H24号住居址遺物出土状況



H24号住居址全景



H23号住居址全景



H23号住居址掘り方全景



H25号住居址全景



H25号住居址掘り方全景



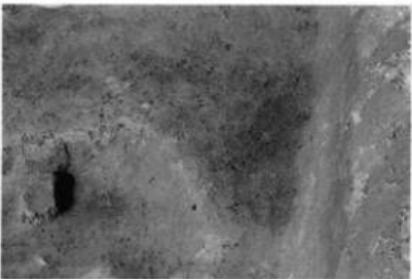
H25号住居址遺物出土状況



H26号住居址全景



H26号住居址掘り方全景



H26号住居址カマド全景



H27号住居址全景



H27号住居址掘り方全景



H27号住居址炭化物出土状況



H27号住居址遺物出土状況



H27号住居址遺物出土状況



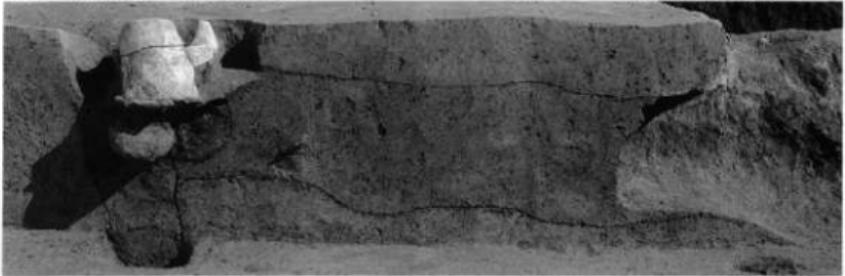
H27号住居址カマド全景



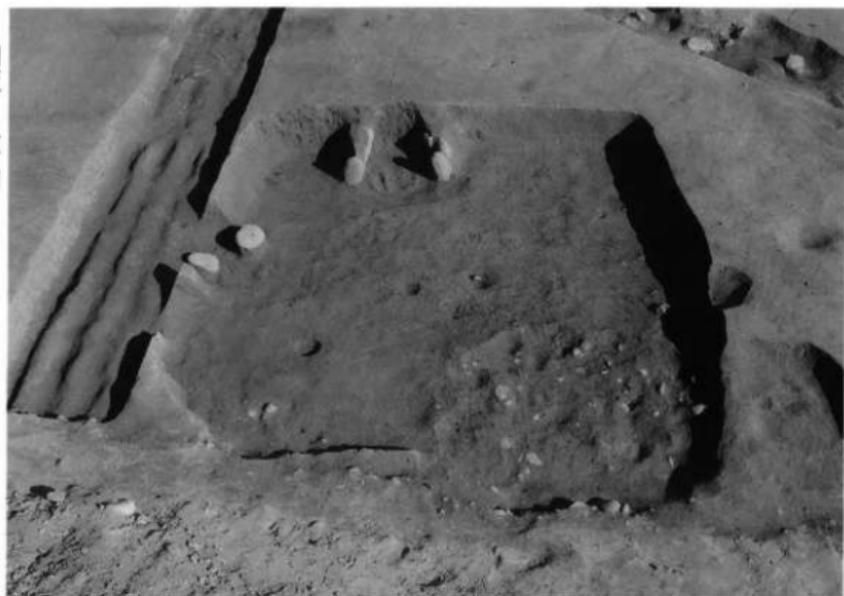
H27号住居址カマド掘り方全景



H27号住居址カマド煙道断ち割り状況



H27号住居址カマド煙道断ち割り（覆土堆積状況）



H29号住居址全景



H29号住居址掘り方全景



H29号住居址No.1カマド全景



H29号住居址No.2カマド全景



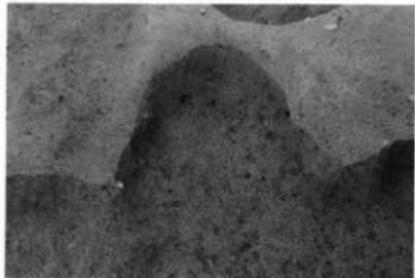
H29号住居址No.2カマド掘り方全景



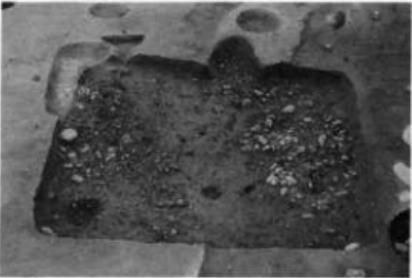
H30号住居址全景



H30号住居址カマド全景



H30号住居址カマド掘り方



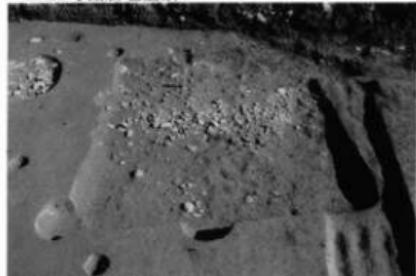
H30号住居址掘り方全景



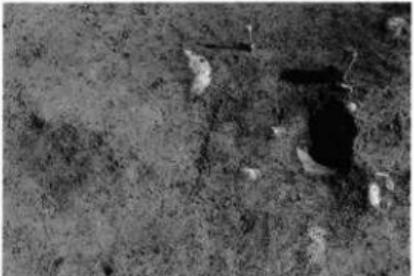
H28号住居址全景



H31号住居址全景



H31号住居址掘り方全景



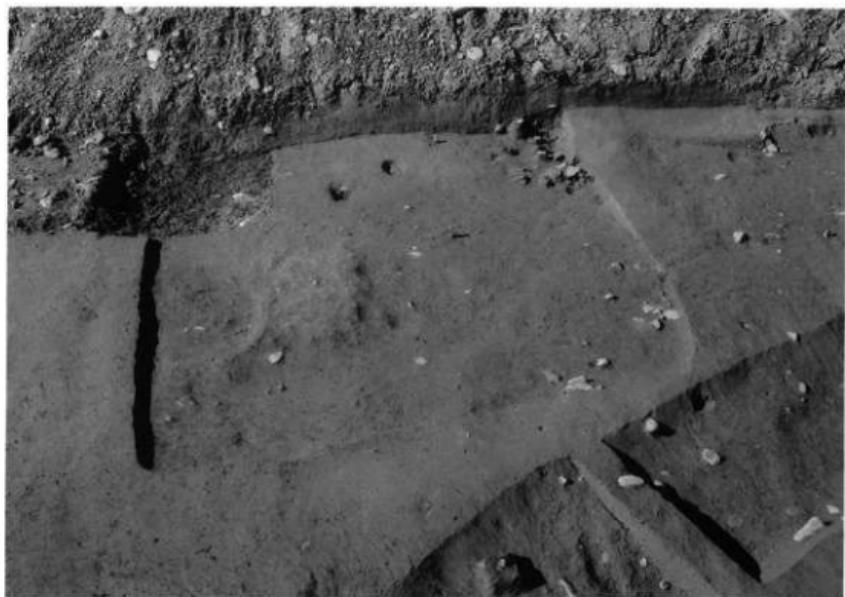
H31号住居址カマド全景



H31号住居址遺物出土状況



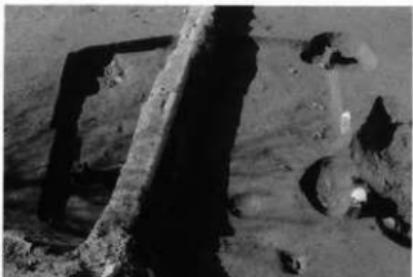
H32号住居址遺物出土状況



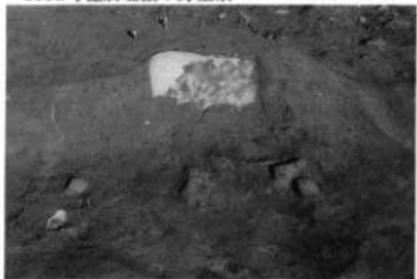
H32号住居址全景



H32号住居址掘り方全景



H33号住居址全景



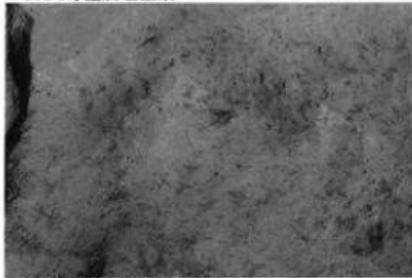
H33号住居址カマド全景



H33号住居址遺物出土状況



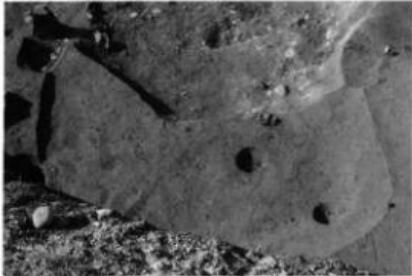
H34号住居址全景



H34号住居址カマド全景



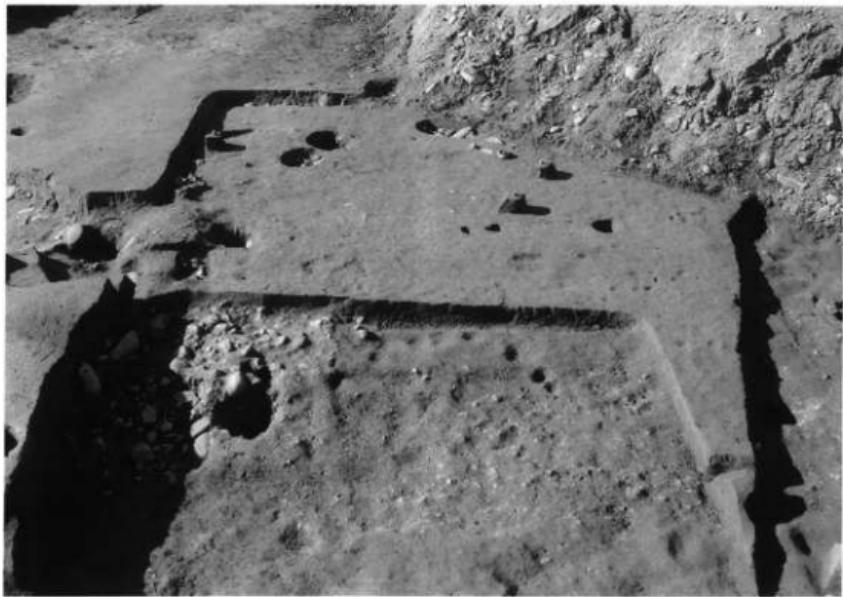
H34号住居址遺物出土状況



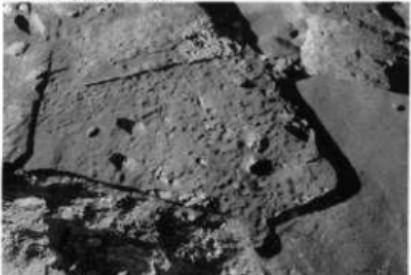
H35号住居址全景



H36号住居址遺物出土状況



H40号住居址全景



H40号住居址掘り方全景



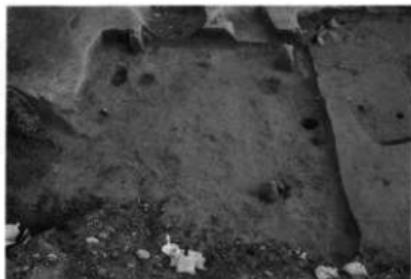
H40号住居址遺物出土状況



H40号住居址遺物出土状況



H40号住居址遺物出土状況



H37号住居址全景



H37号住居址カマド全景



H38号住居址全景



H39号住居址カマド全景



H39号住居址全景



H39号住居址掘り方全景



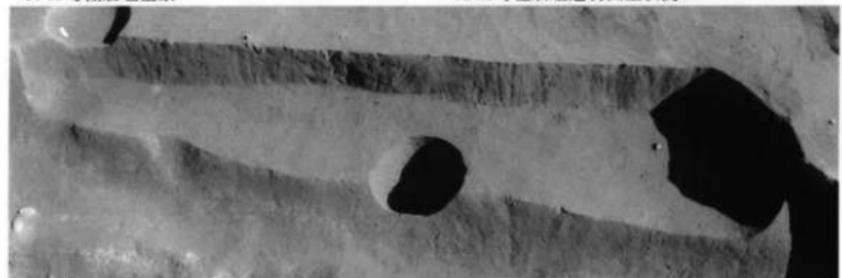
H39号住居址遺物出土状況



H41号住居址全景



H41号住居址遗物出土状况



H42号住居址全景



H43号住居址全景



H43号住居址No.1カマド全景



H43号住居址掘り方全景



H43号住居址No.2カマド全景



H44号住居址カマド全景



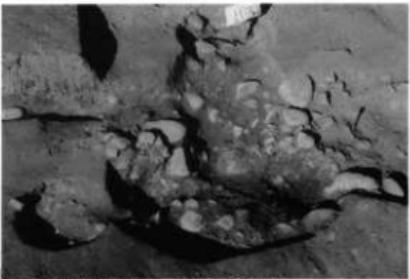
H44号住居址カマド掘り方全景



H45号住居址全景



H45号住居址カマド全景



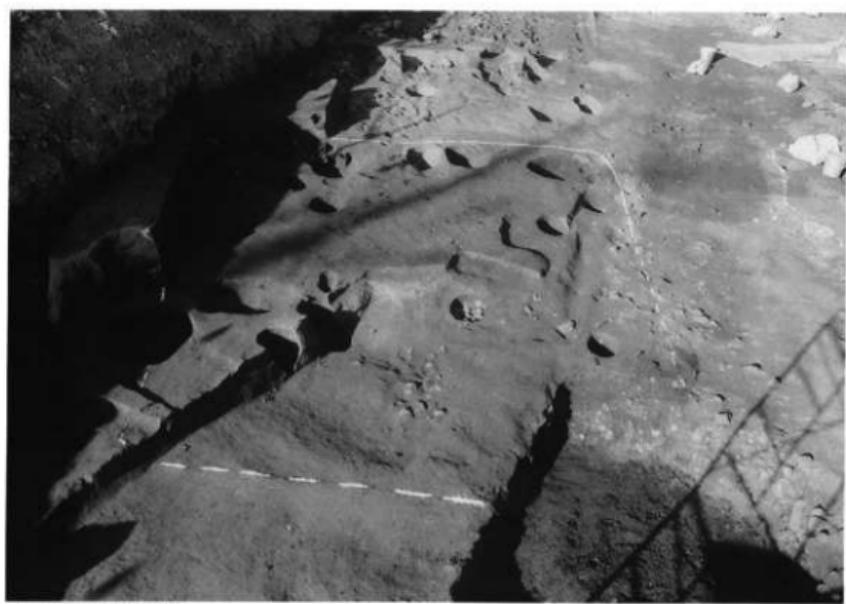
H45号住居址カマド掘り方全景



H45号住居址遺物出土状況



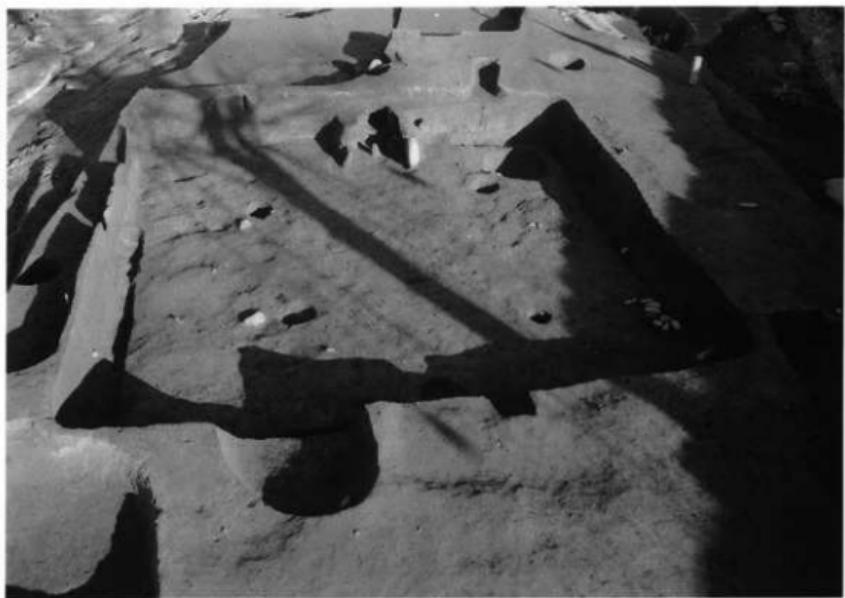
H47号住居址遺物出土状況



H47号住居址全景



H47号住居址掘り方



H46号住居址全景



H46号住居址掘り方全景



H46号住居址カマド全景



H46号住居址カマド煙道部



H46号住居址カマド煙道確認状況



H46号住居址カマド煙道確認状況



H46号住居址カマド掘り方



H46号住居址カマド断ち割り状況



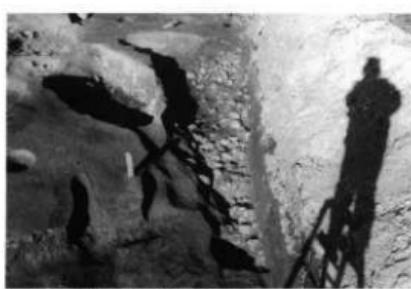
H46号住居址礫出土状況



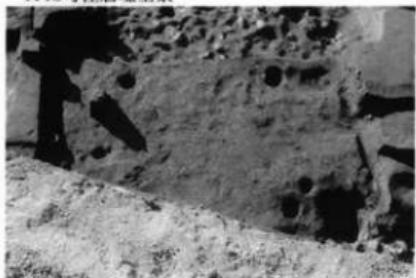
H46号住居址遺物出土状況



H48号住居址全景



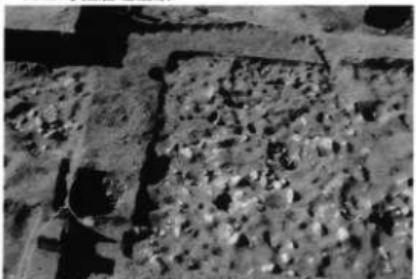
H48号住居址掘り方全景



H49号住居址全景



H49号住居址カマド全景



H50号住居址全景



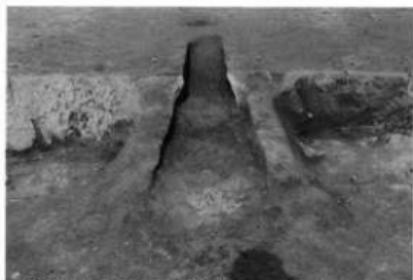
H50号住居址掘り方全景



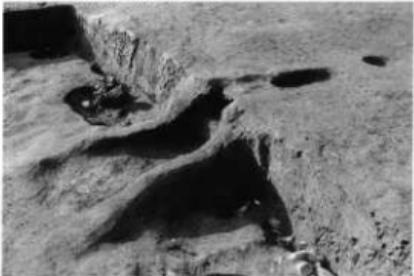
H52号住居址全景



H52号住居址掘り方全景



H52号住居址カマド全景



H52号住居址カマド袖検出状況



H52号住居址カマド掘り方全景



H51号住居址全景



H51号住居址掘り方全景



H51号住居址カマド全景



H51号住居址遺物出土状況



H51号住居址カマド掘り方全景



H51号住居址炭化材検出状況



H51号住居址炭化材検出状況



H51号住居址炭化材検出状況



H51号住居址炭化材堆積状況



H51号住居址炭化材堆積状況



H53号住居址全景



H53号住居址掘り方全景



H53号住居址カマド全景



H53号住居址遺物出土状況



H53号住居址遺物出土状況



H54号住居址全景



H54号住居址掘り方全景



H54号住居址カマド全景



H54号住居址遺物出土状況



H54号住居址遺物出土状況



H54号住居址遺物出土状況



H54号住居址焼土検出状況



H54号住居址カマド掘り方全景



H54号住居址カマド煙道完掘状況



H54号住居址カマド煙道完掘状況（外側より）



H54号住居址入り口張り出しピット



H54号住居址遺物出土状況



H55号住居址全景



H55号住居址遺物出土状況



H55号住居址掘り方全景



H55号住居址遺物出土状況



H56号住居址全景



H56号住居址掘り方全景



H56号住居址遺物出土状況



H56号住居址カマド全景



H56号住居址カマド掘り方全景



H57号住居址全景（擴張後）



H57号住居址全景（擴張前）



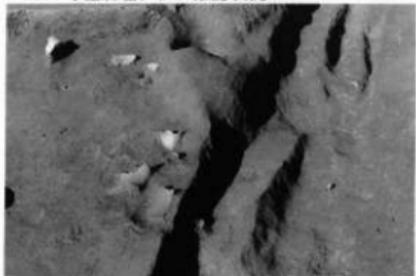
H57号住居址掘り方全景



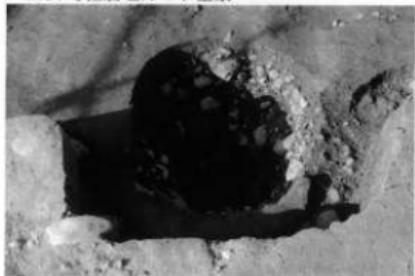
H57号住居址プラン確認状況



H57号住居址カマド全景



H57号住居址遺物出土状況



H57号住居址入り口張り出しピット



H58号住居址全景



H58号住居址掘り方全景



H58号住居址カマド周辺遺物出土状況



H58号住居址カマド全景



H58号住居址カマド構築材検出状況



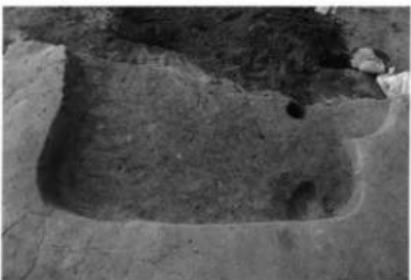
H58号住居址カマド掘り方全景



H58号住居址遺物出土状況



H59号住居址全景



H60号住居址全景



H59号住居址掘り方検出状況



H60号住居址掘り方全景



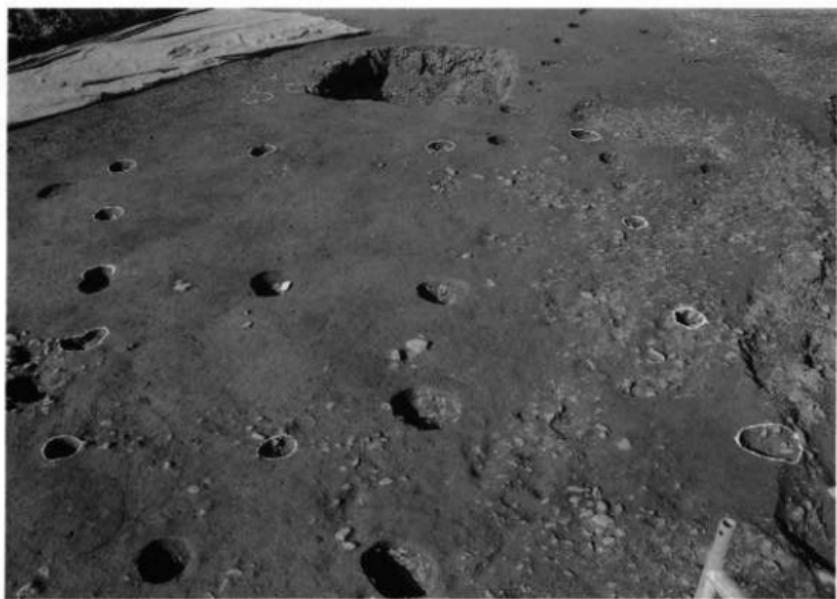
市道遺跡III調査区全景（中央部から南部分を北より望む）



F 1号掘立柱建物址全景



F 2号掘立柱建物址全景



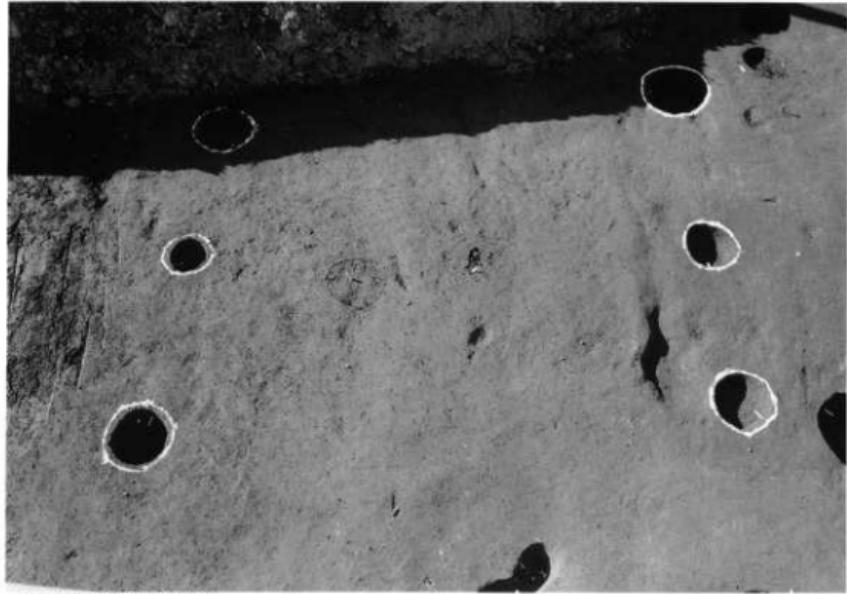
F3号掘立柱建物址全景



F4号掘立柱建物址全景



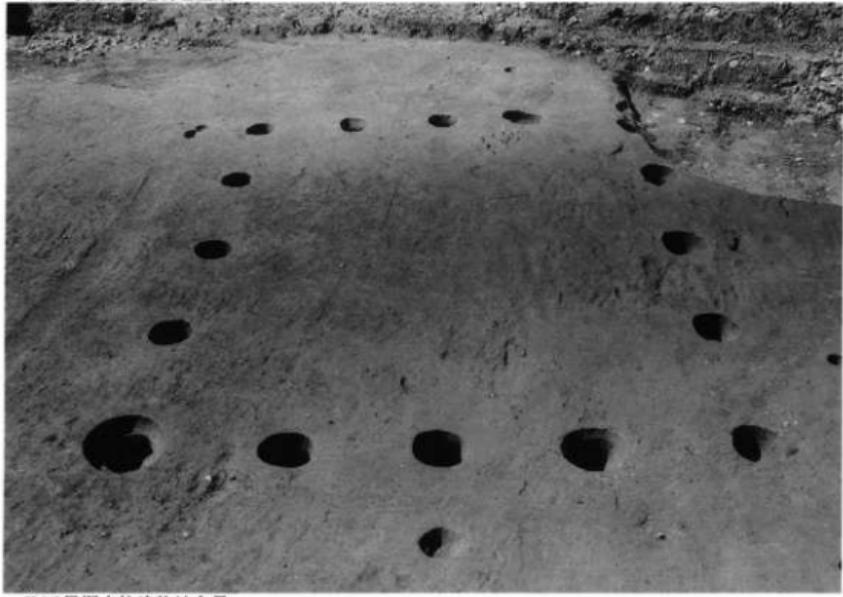
F 7号掘立柱建物址全景



F 8号掘立柱建物址全景



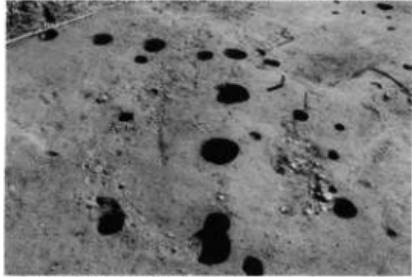
F 12号掘立柱建物址全景



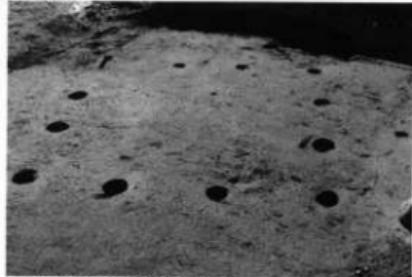
F 13号掘立柱建物址全景



F 12・13号掘立柱建物址全景（南より跡部交差点を望む）



F 15号掘立柱建物址全景



F 14号掘立柱建物址全景



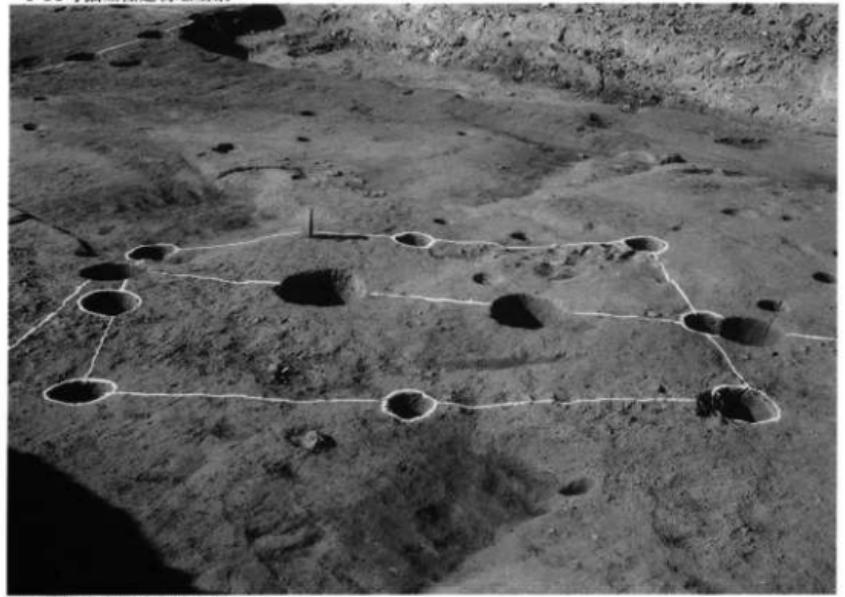
3号柱列址全景



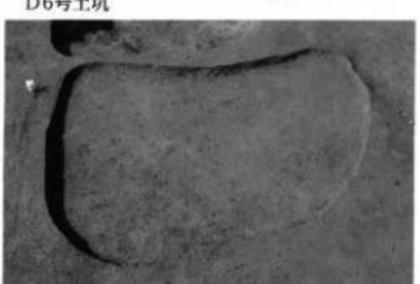
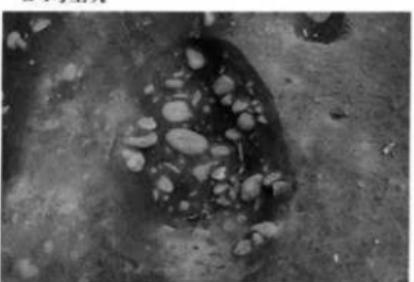
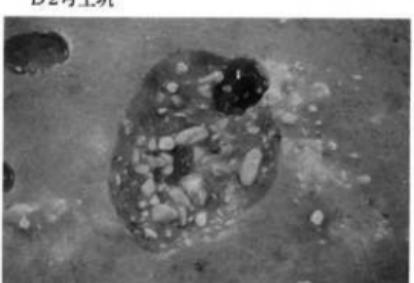
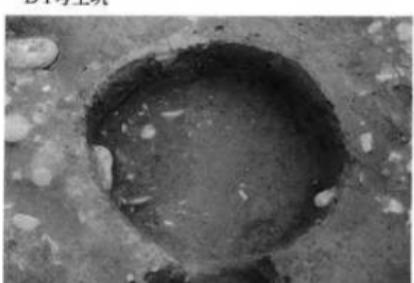
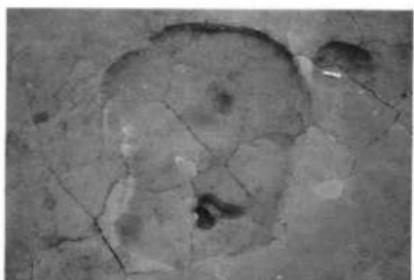
F 21号掘立柱建物址全景



F 11号掘立柱建物址全景

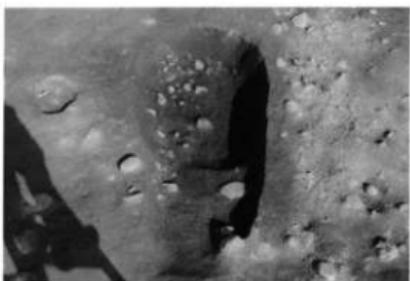


F 15号掘立柱建物址全景

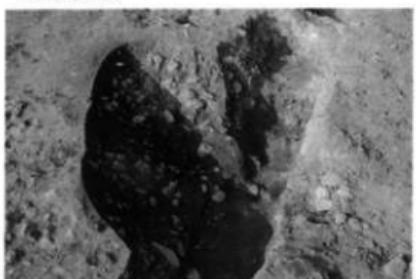




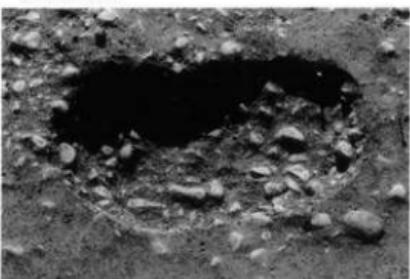
D10号土坑



D12号土坑



D13号土坑



D14号土坑



D15号土坑



D15号土坑遗物出土状况



D16号土坑



D18号土坑



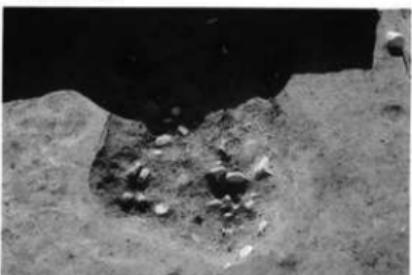
D20号土坑



D21号土坑



D22号土坑



D23号土坑



D24号土坑セクション



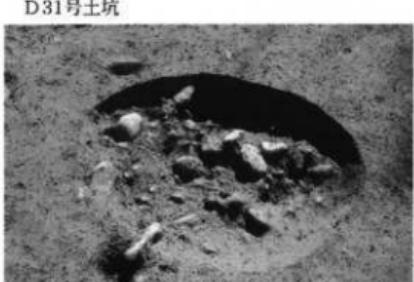
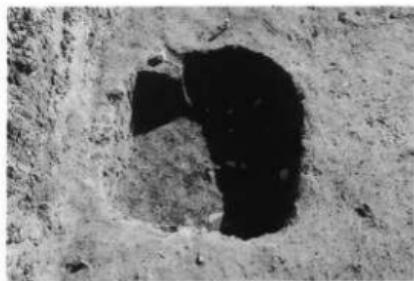
D24号土坑



D25号土坑

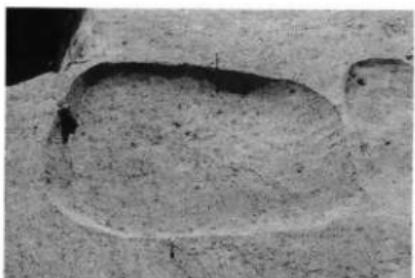


D25号土坑骸骨検出状況





D34号土坑



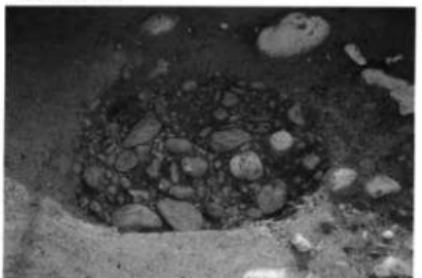
D35号土坑



D36号土坑



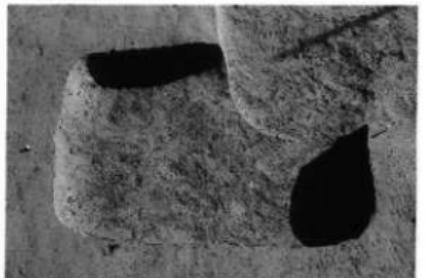
D40号土坑



D39号土坑



D39号土坑遗物出土状况



D41号土坑



D43号土坑



D42号土坑



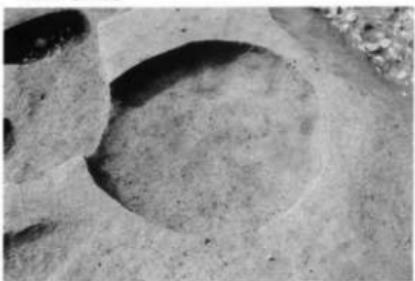
D42号土坑遺物出土狀況



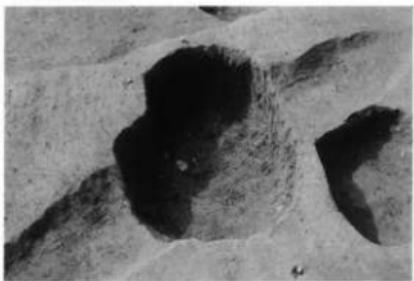
D45号土坑



D48号土坑



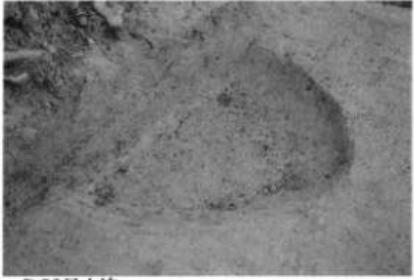
D49号土坑



D50号土坑



D51号土坑



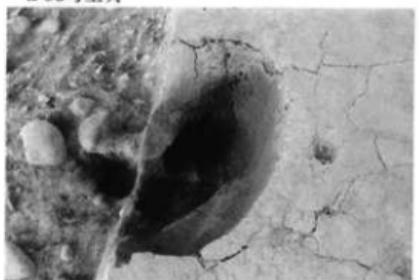
D52号土坑



D53号土坑



D54号土坑



D56号土坑



D57号土坑



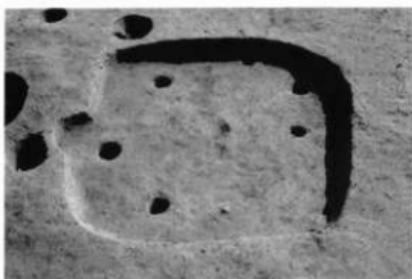
市道遺跡Ⅲ（跡部交差点より南を望む）



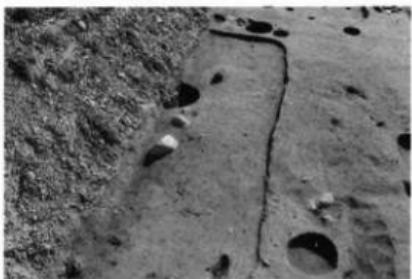
T a 1号竖穴状遗構



T a 20号竖穴状遗構



T a 21号竖穴状遗構



T a 22号竖穴状遗構



T a 23号竖穴状遗構



T a 23号竖穴状遗構遺物出土状况



T a 24号竖穴状遗構



T a 25号竖穴状遗構



M21号溝状遺構



M23号溝状遺構

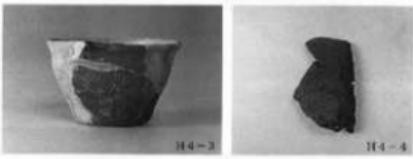




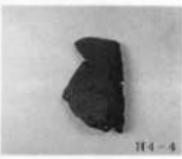
H2-9



H2-4



H4-3



H4-4



H4-5



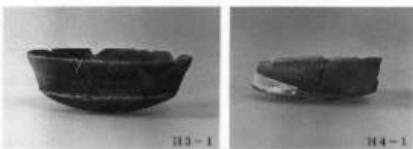
H4-6



H2-11



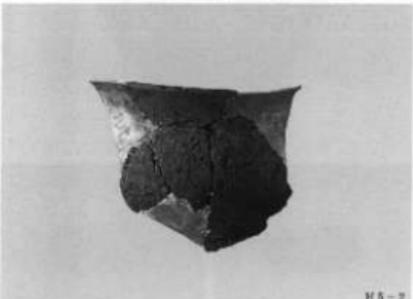
H3-2



H3-1



H4-1

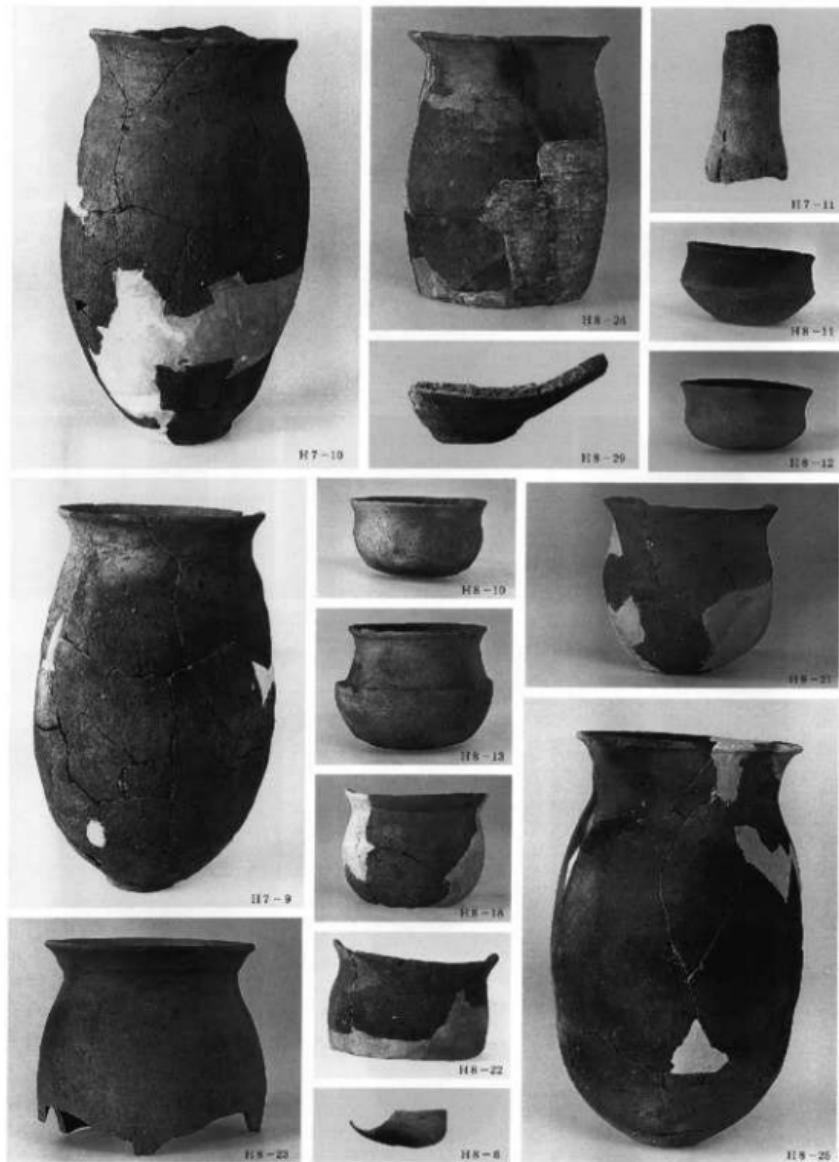


H5-2



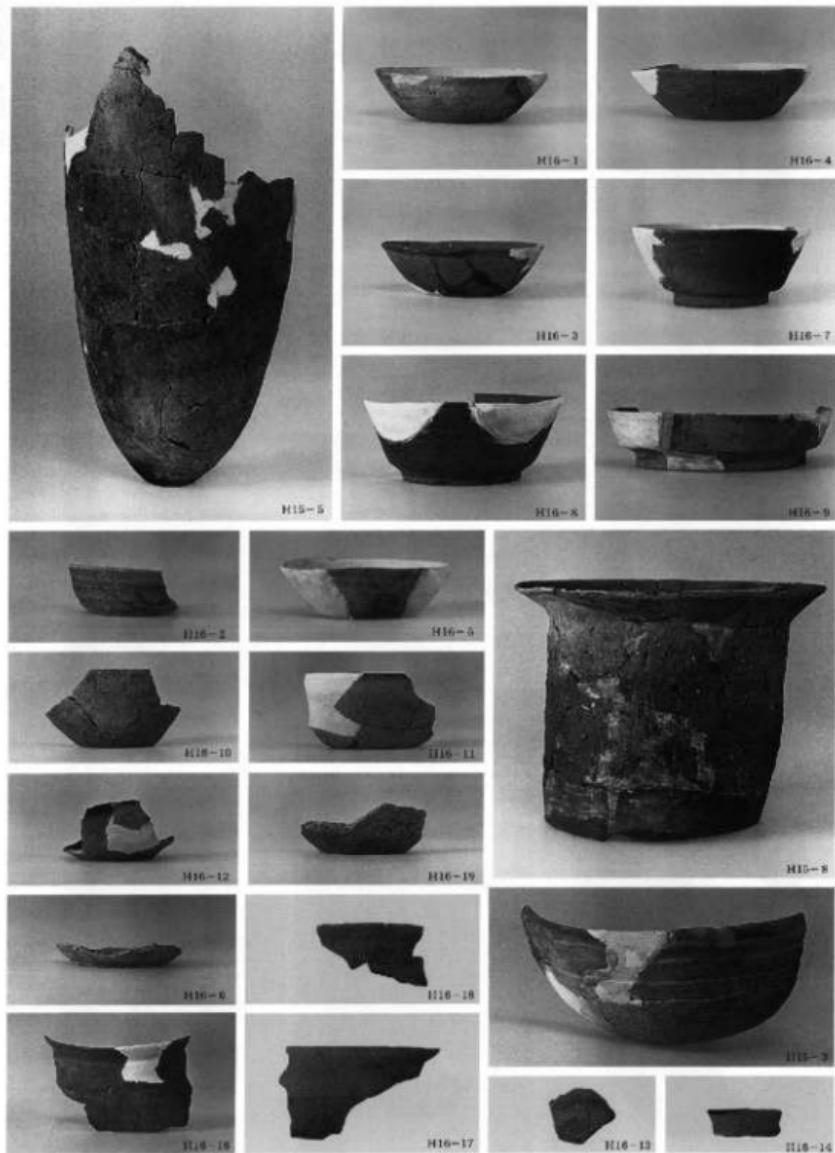
H2-10

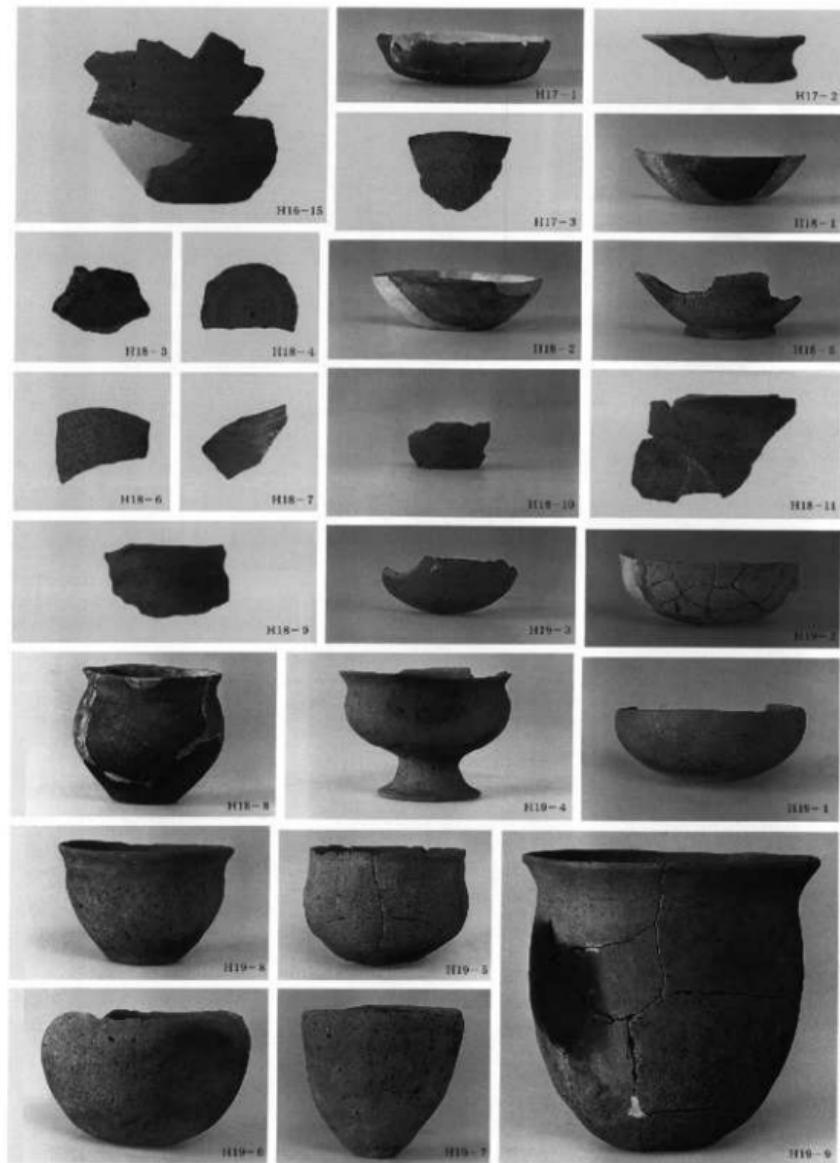














H19-10



H19-11



H19-12



H19-13



H19-14

H20-1

H20-3



H19-15



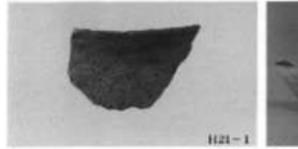
H19-16



H20-2



H19-14



H21-1



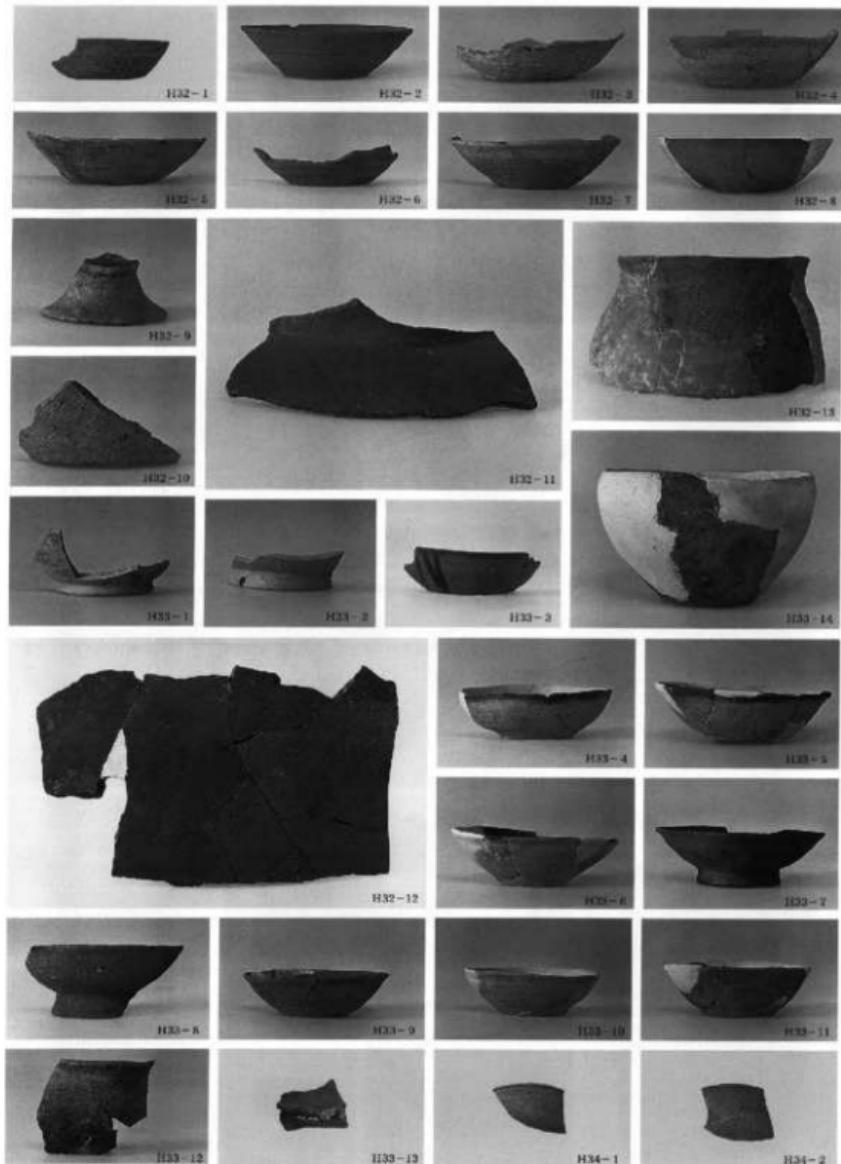
H22-1

H23-2

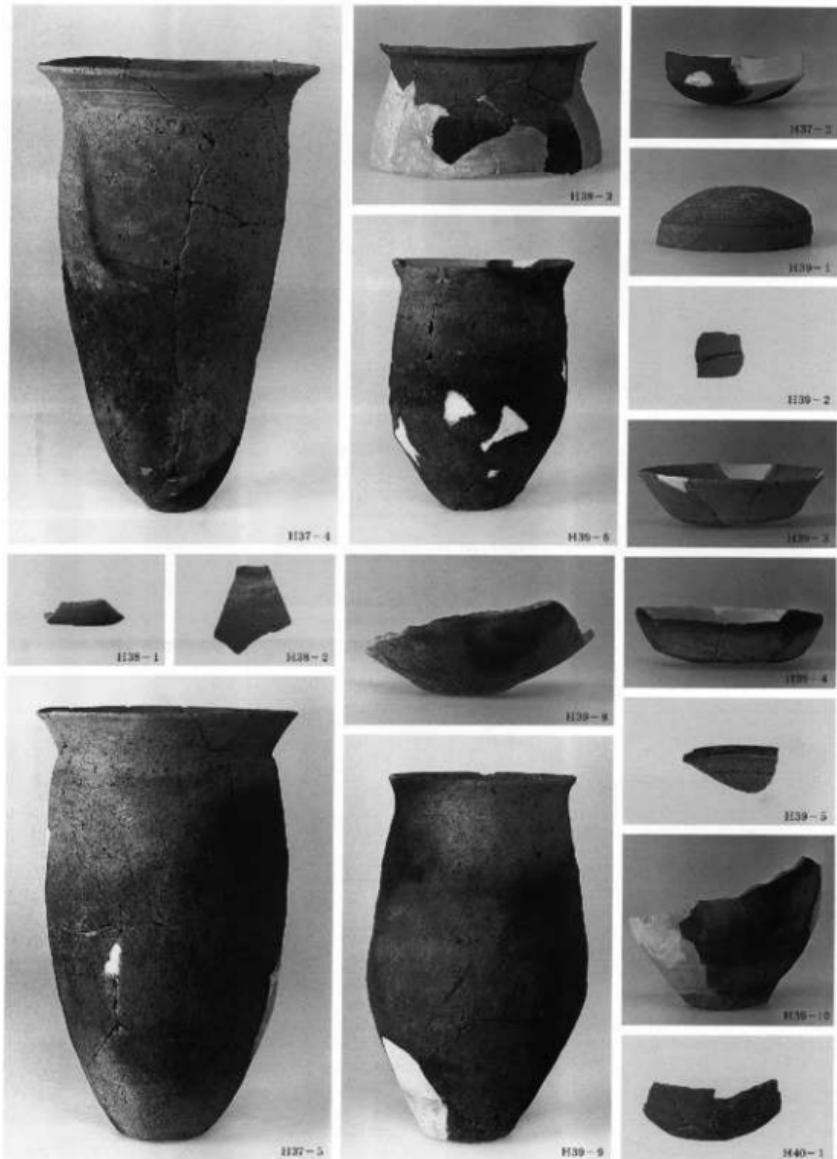
H23-3





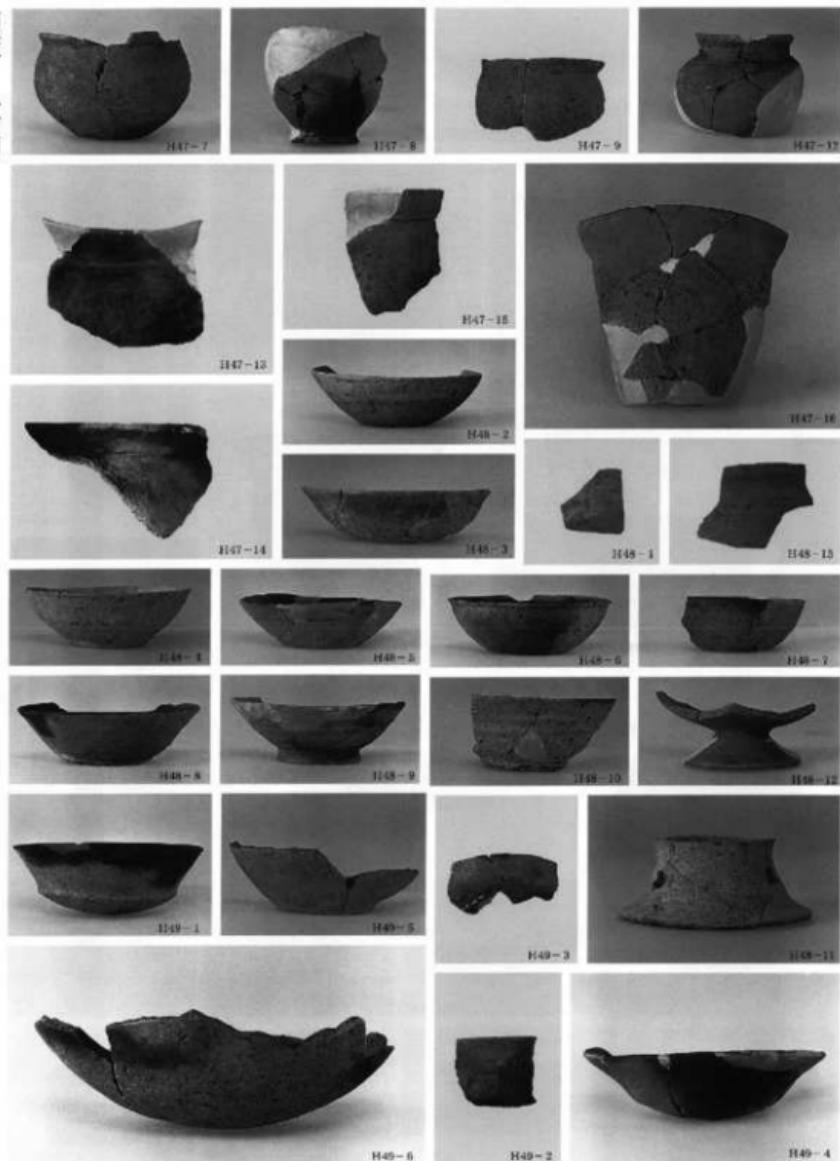


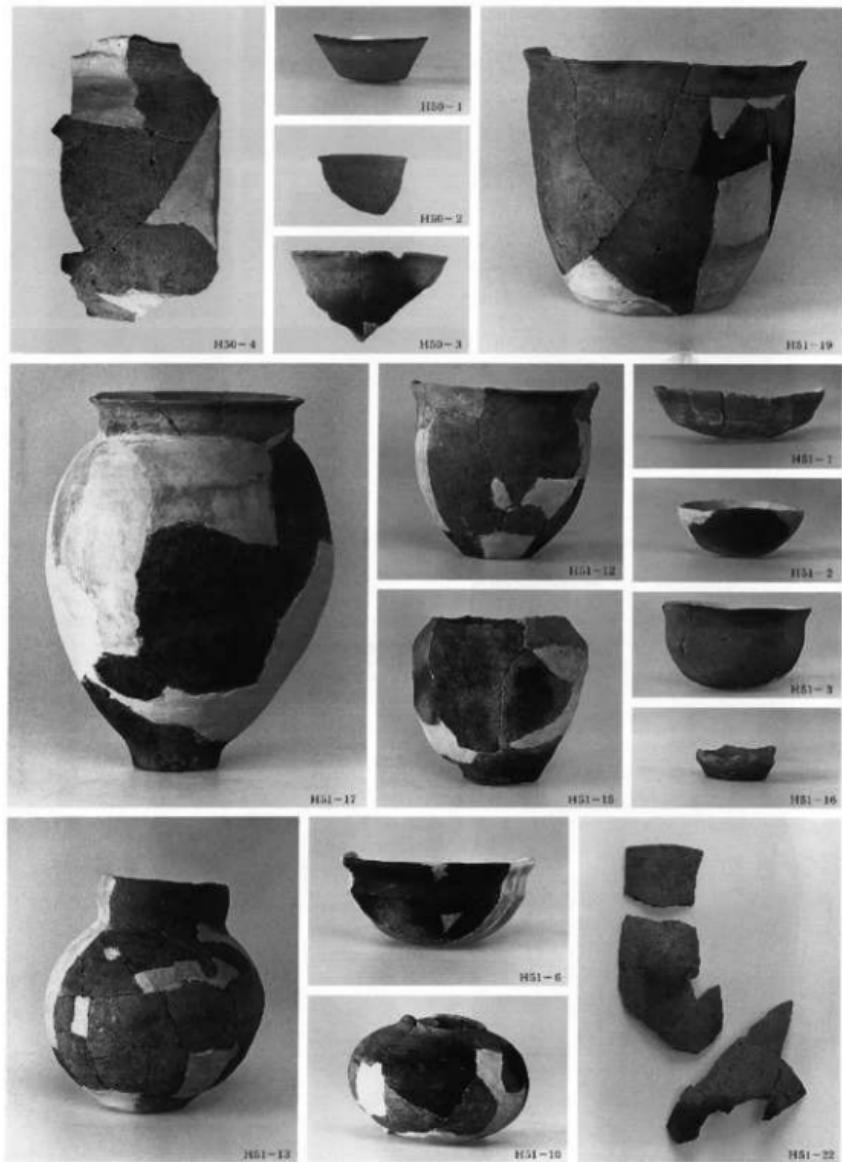












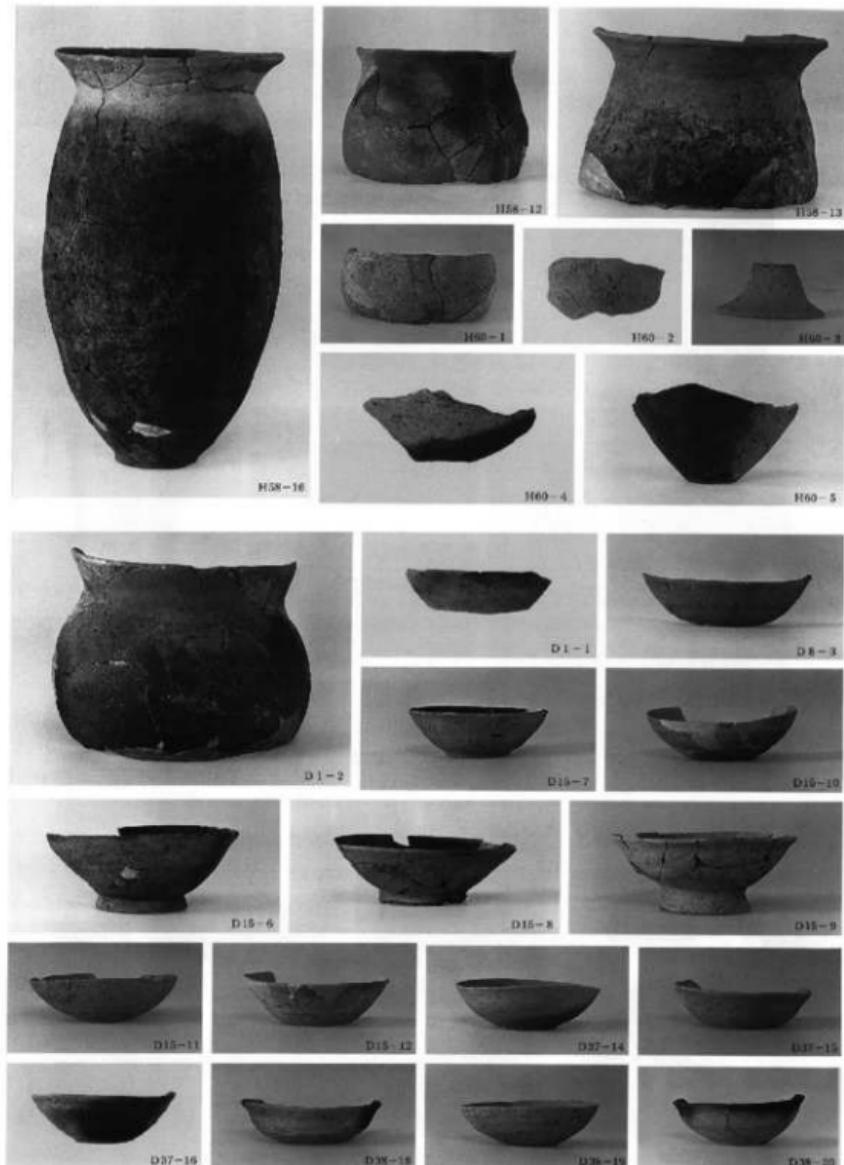


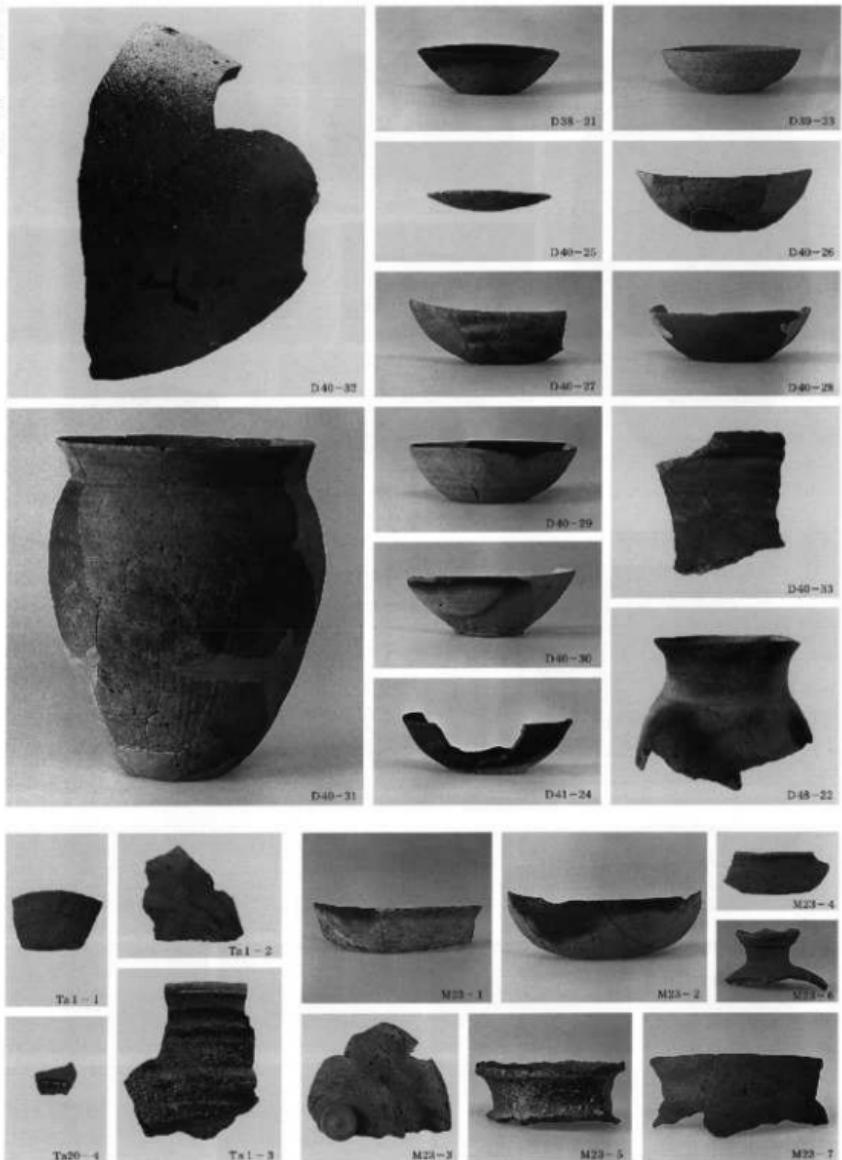


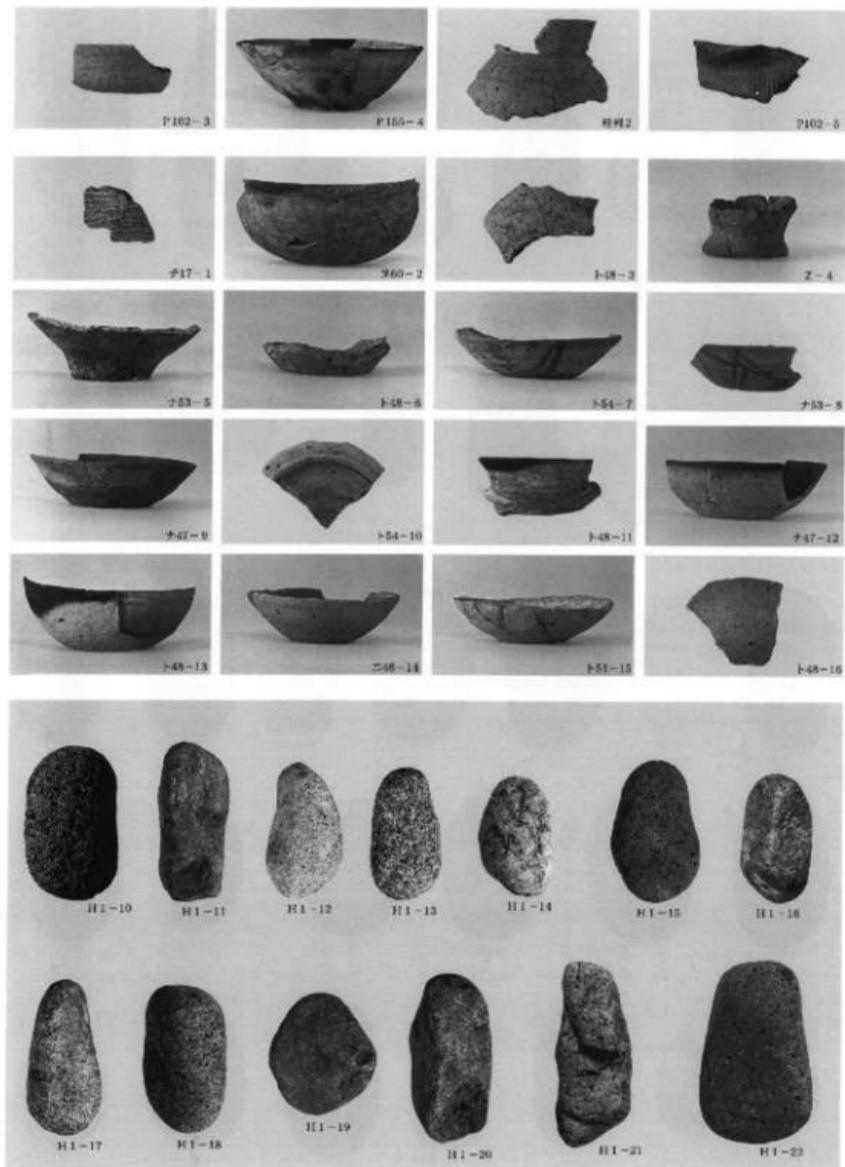


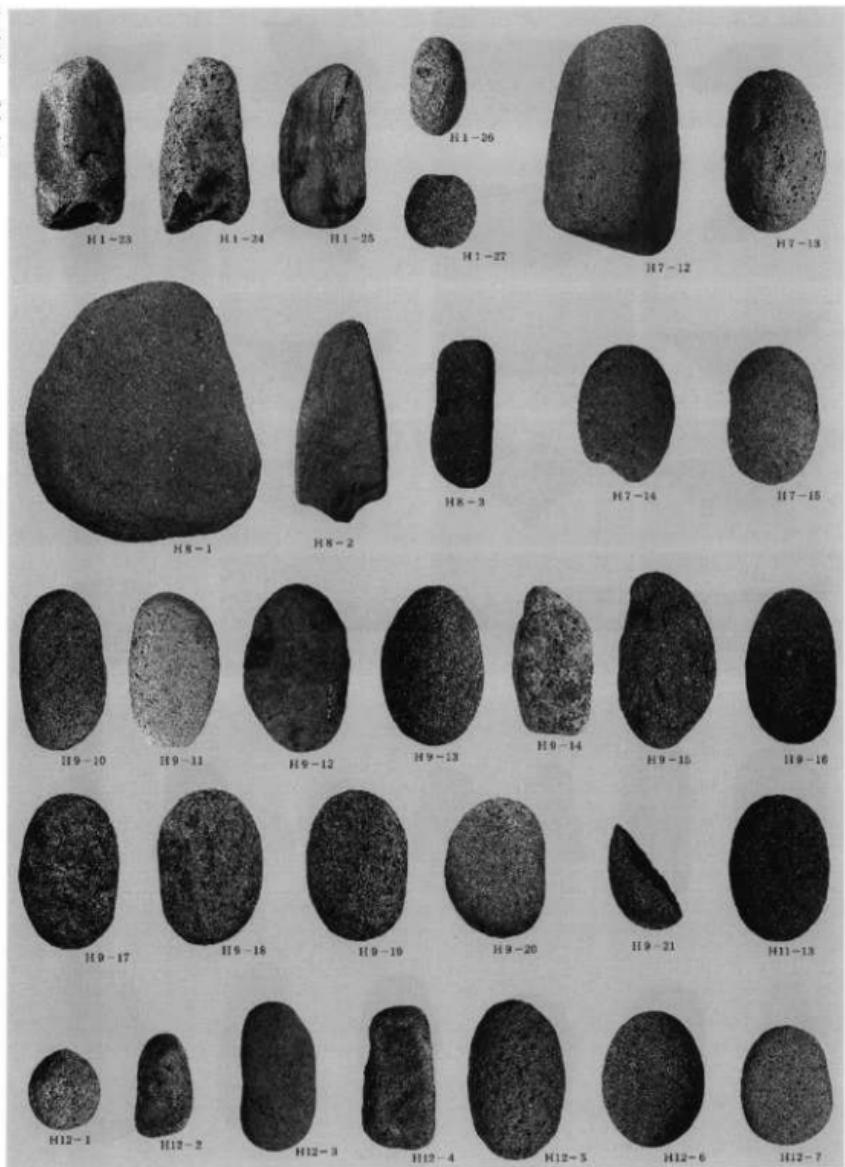


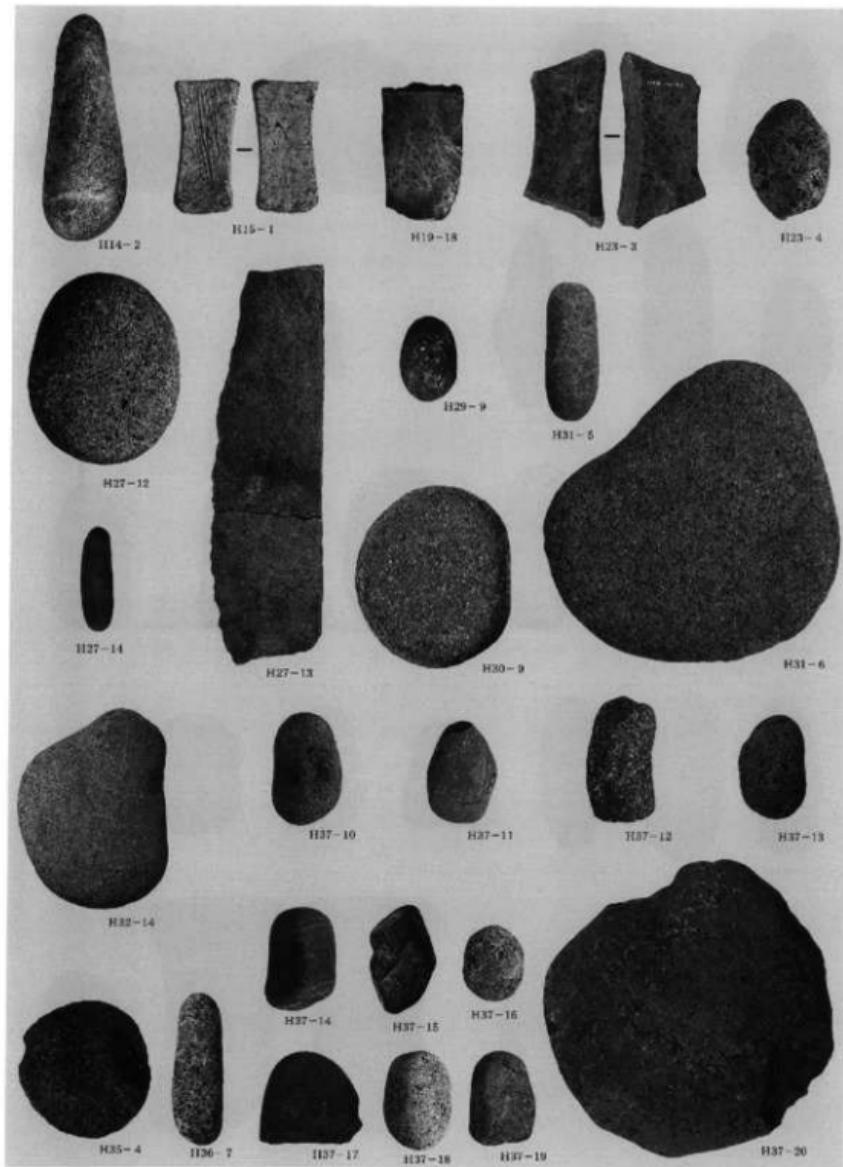


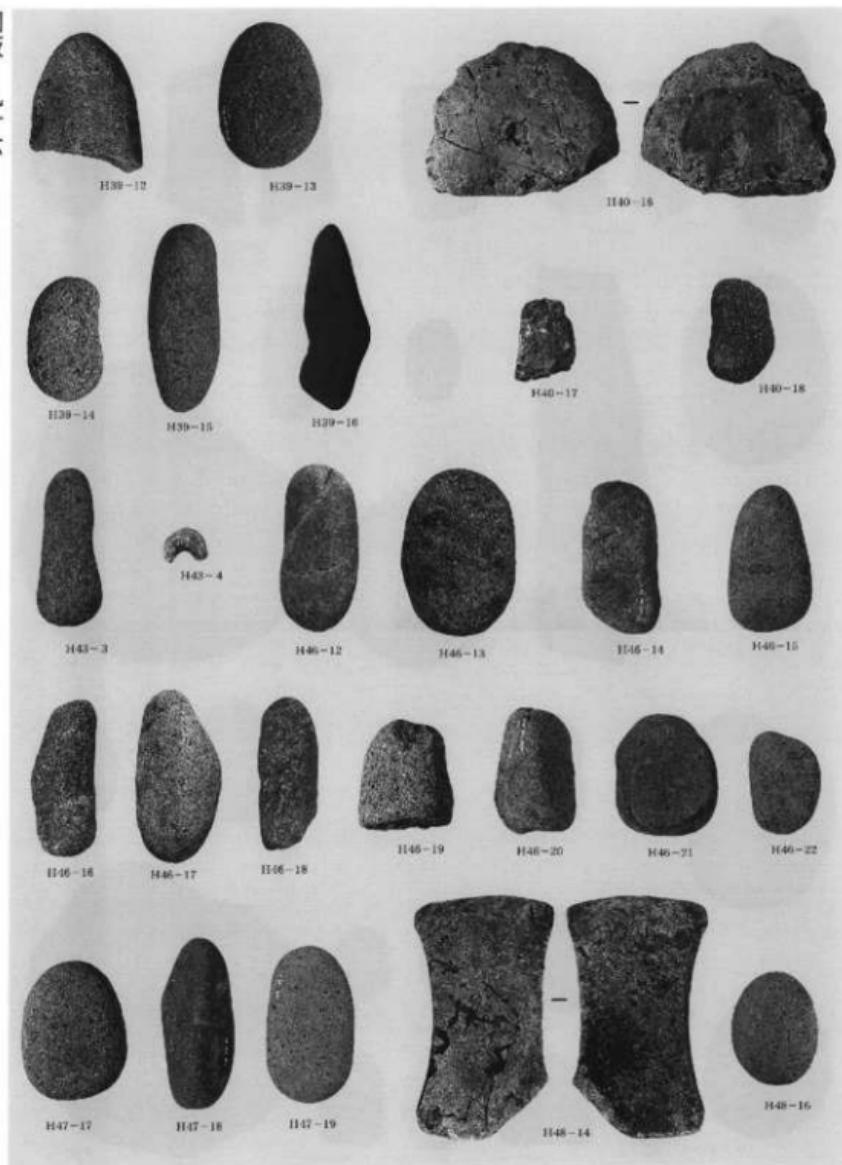


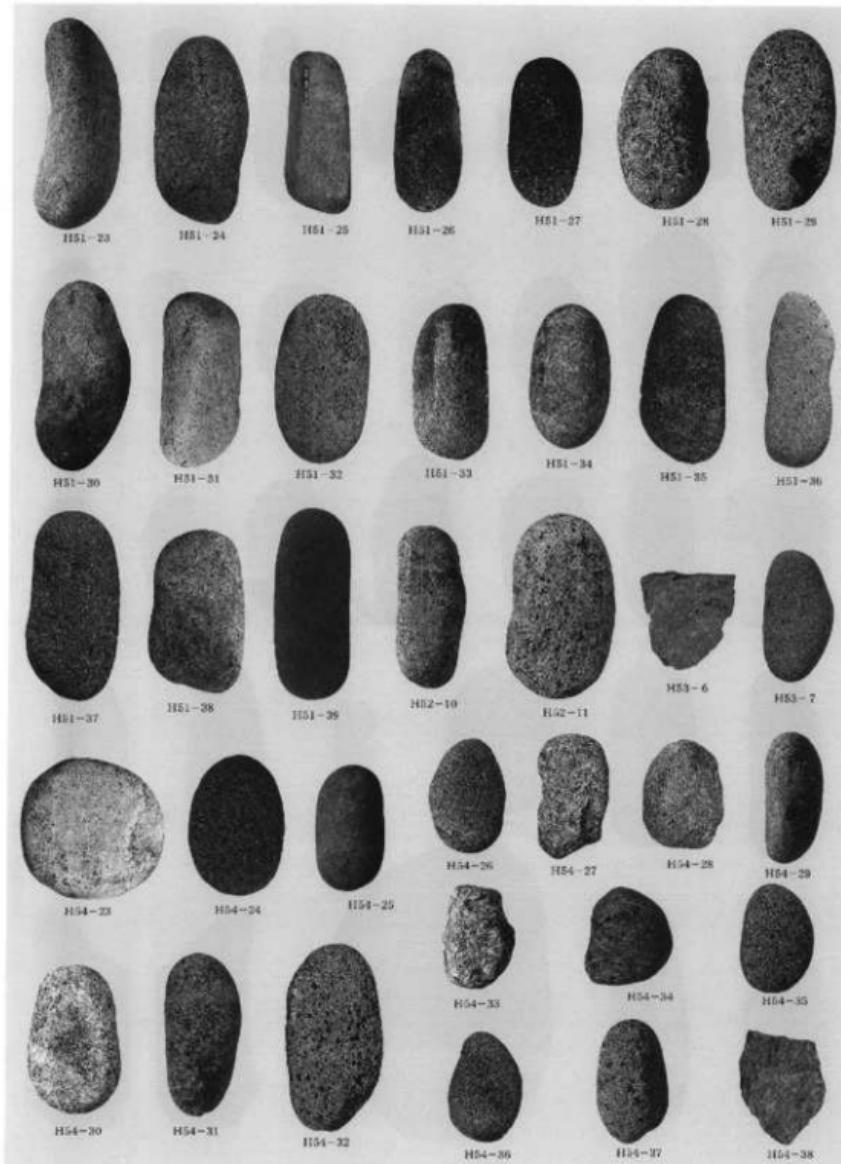


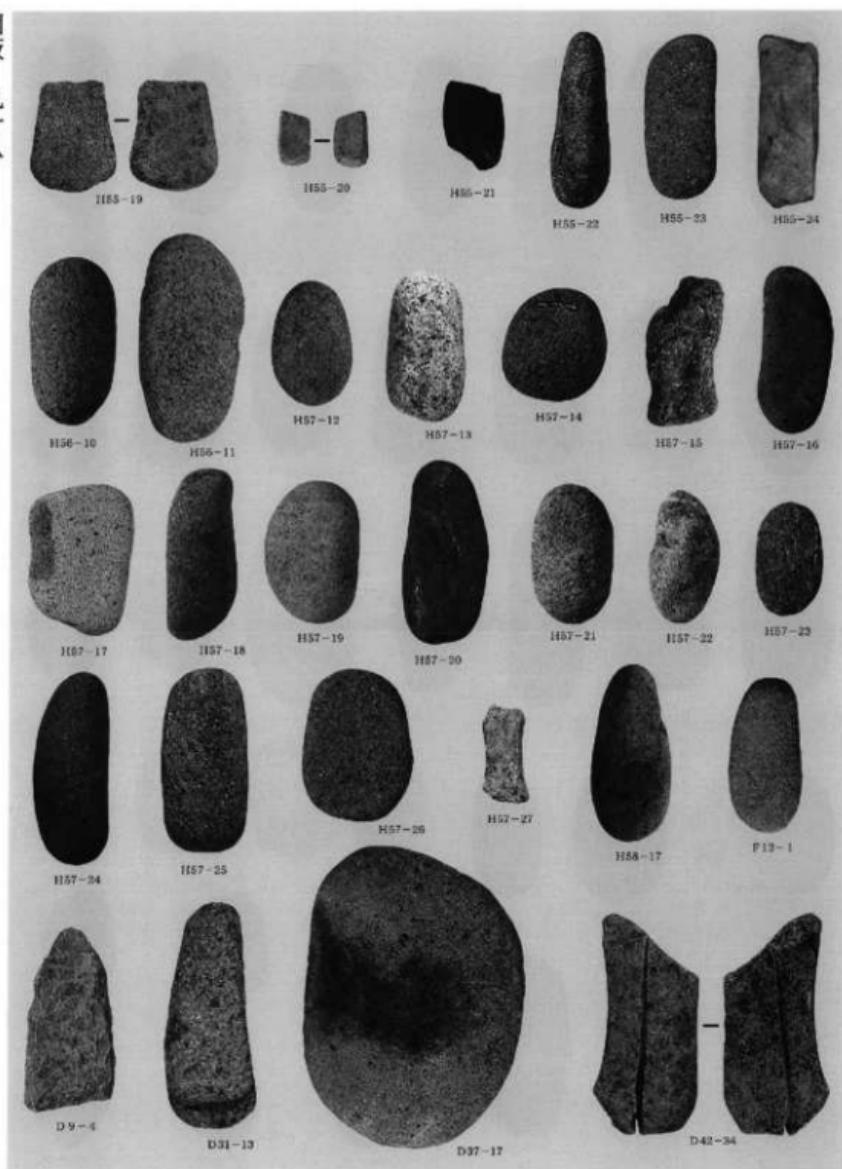


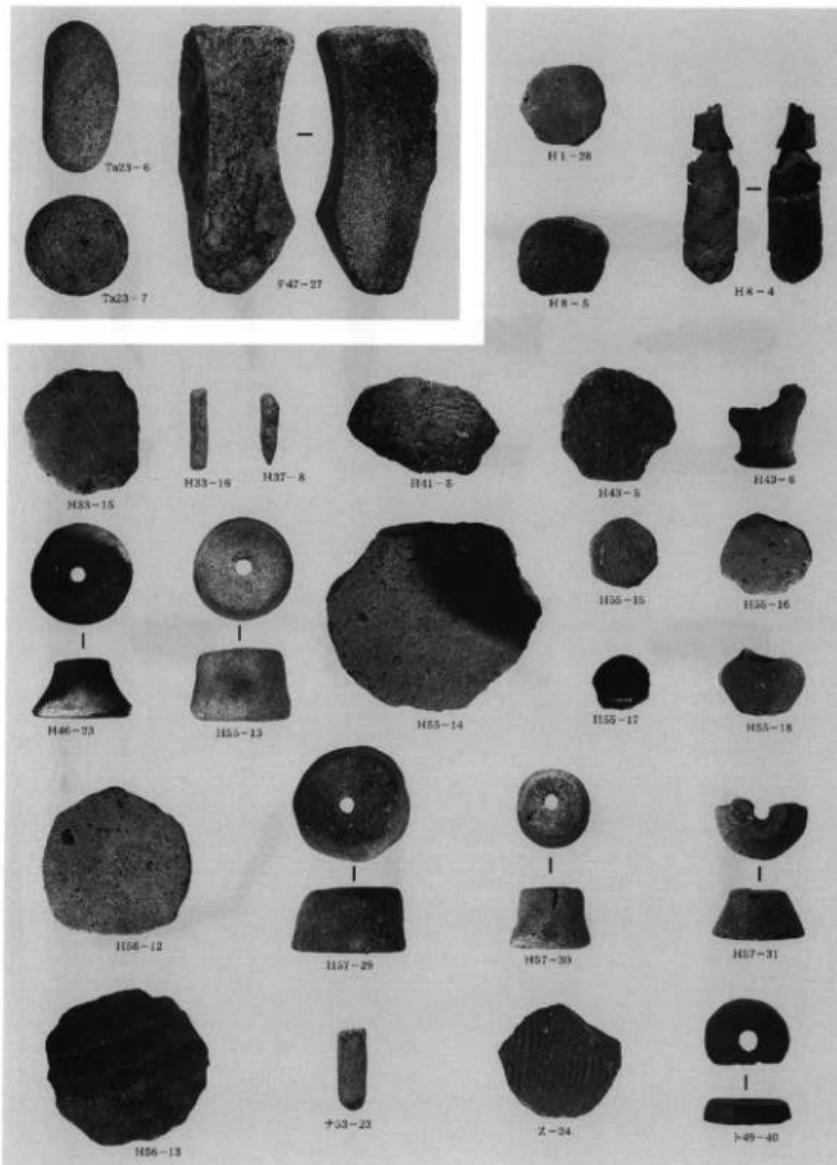


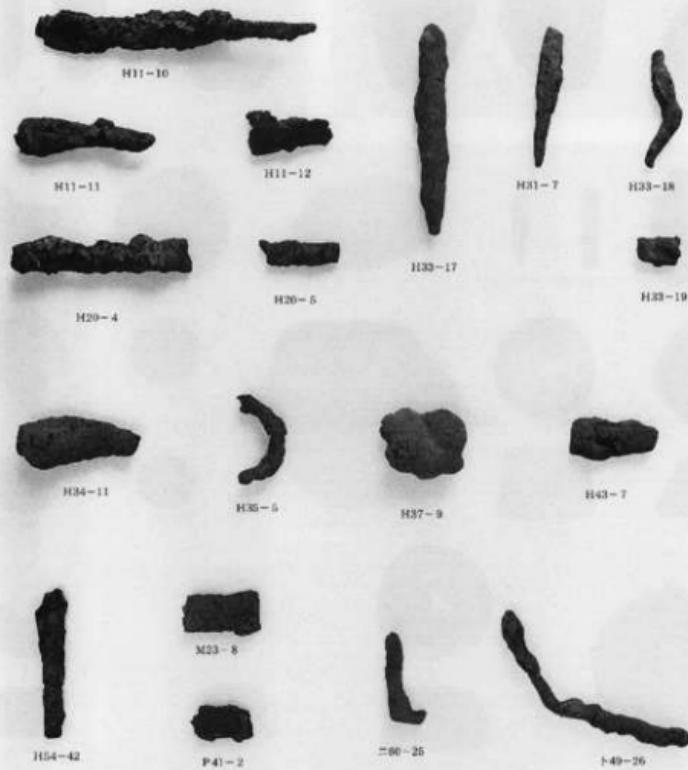


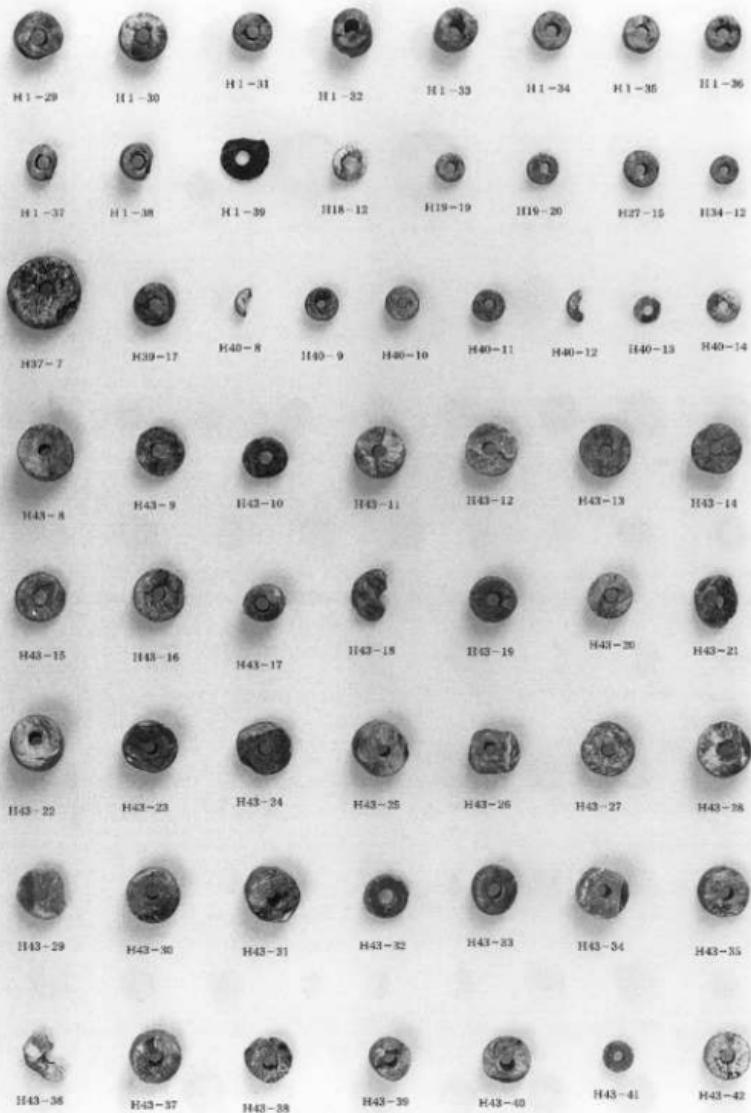


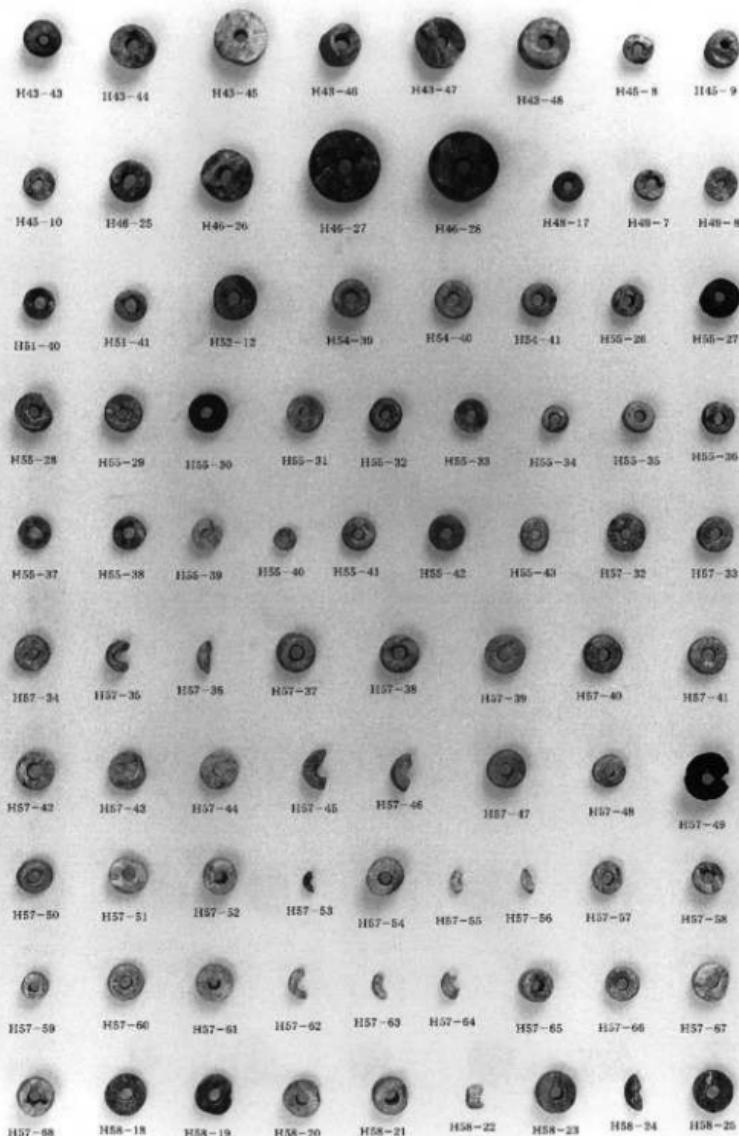


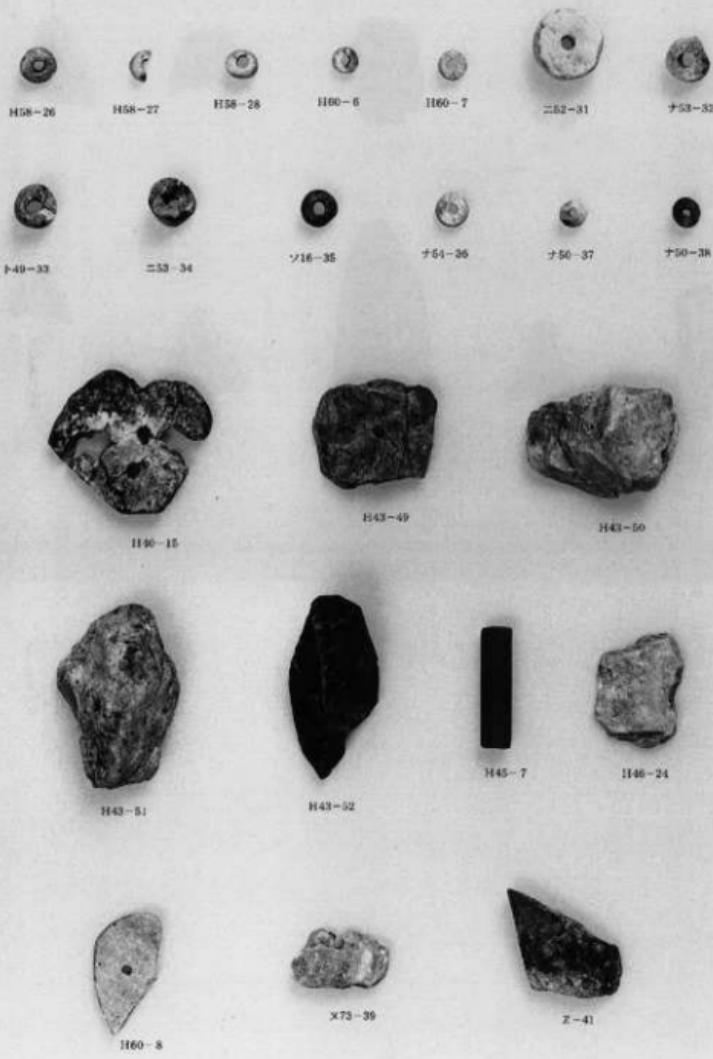


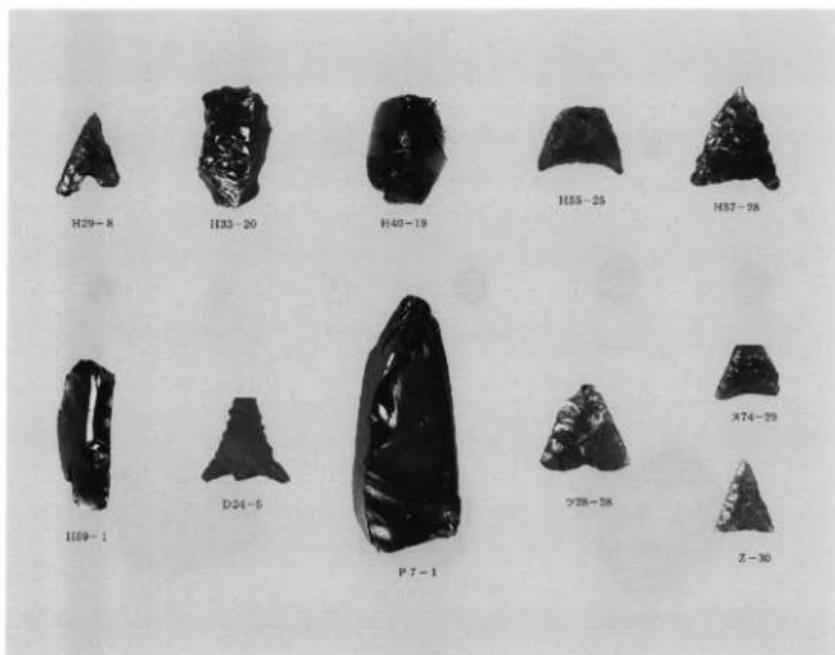












辻 遺 跡

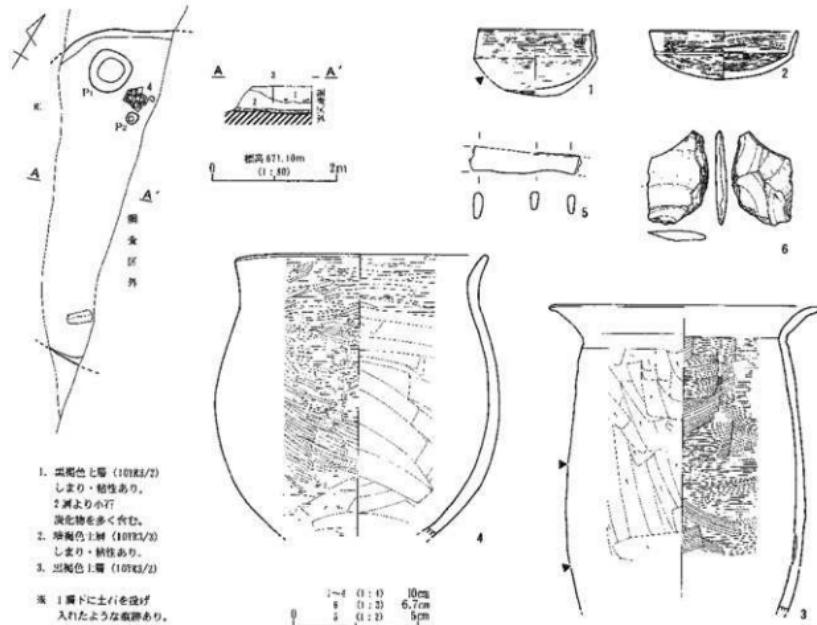
第IV章 辻遺跡

第1節 穫穴住居址

(1) 1号住居址 (第130図、写真図版三)

本住居址は、調査区A区であるD-16.17Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、西側がM1号溝状構造により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.83m(残存)・南壁0.56m(残存)で、壁高さは南壁で最大31cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址検出部分の床面積は5.89m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれ、1層下層には炭化物と土器が投棄されたような状態であった。床は全体に軟質で貼床が2~11cmの厚さで貼られていた。ピットは2カ所確認され、P1は検出位置よ



第130図 1号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	類種	法基		成形・調葉・文様			標名	出土位置
			口幅(当)	公則半径(当)	高さ(当)	内面	外面		
1	上部壁	环	9.3	4.5	3.3	内方凹	口縁コロナデ 腹部ヘラケズリ→ミガキ	完全尖端 厚純着しい	0区
2	上部壁	环	12.0	11.2	3.0	内方凹	口縁コロナデ 腹部ヘラケズリ→ミガキ	厚純着濃	I区
3	上部壁	壳	21.7	-	(22.5)	網目ハケ目→口縁コロナデ	網目ヘラケズリ→口縁コロナデ	完全尖端	II区
4	上部壁	壳	20.3	-	(22.6)	網目ヘラナデ→口縁ミガキ	網目ヘラケズリ→ミガキ	完全尖端	17cm I区
No.	器種	類種	残存半径	最大長	最大幅	最大厚	型	所見	出土位置
5	刀子	鐵	-	(1.5)	(1.0)	(0.4)	-	-	I区
6	打撲石斧	晶色燧岩	(5.6)	(3.6)	(0.7)	(13.5)	-	-	I区

第74表 H1号住居址出土遺物観察表

り貯蔵穴の可能性がある。規模はP1が径70cm・深さ19cm、P2が径21cm・深さ18cmを測る。

出土遺物は覆土中のものが多かった。1と2は土師器壺であり、いずれも須恵器蓋模倣のタイプであるが形態は異なる。3と4は土師器甕で、3は外面縦方向の削り、内面ハケ目の残るナデを施す。4は外面と口縁部内面は丁寧なミガキが施され、頸部の屈曲も少ない。5は鉄製品で刃子の柄の部分と考えられる。6は打製石斧の欠損品である。これらの遺物より本址は6世紀後半に位置づけられる。

(2) 2号住居址 (第131図、写真図版三)

本住居址は、調査区A区であるC-20.21、D-20.21Grに位置する。残存状態は住居址南東コーナーと西側が調査区外となる。H3号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。

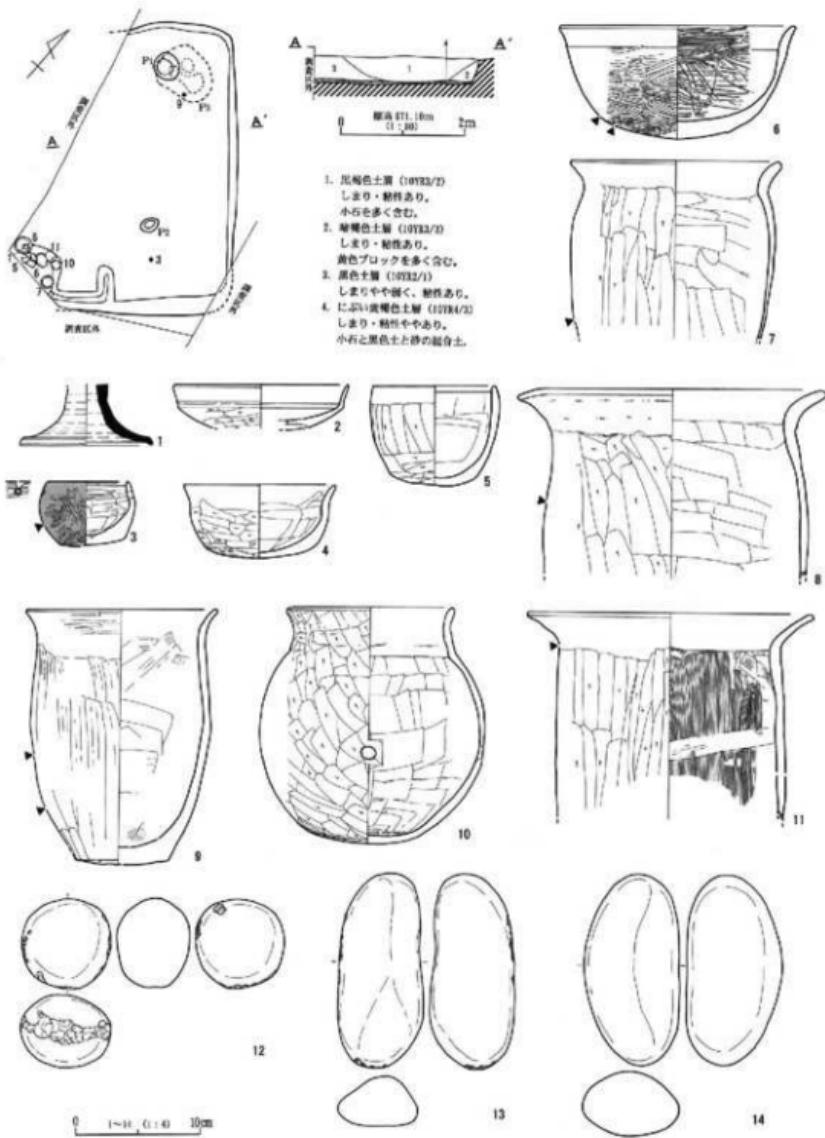
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁1.66m(検出)・南壁2.82m(検出)・東壁4.24mで、壁高さは東壁北寄りで最大36cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で11.18m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に2~5cmの厚さで貼られていた。壁溝は南壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は約28cm・深さ4~9cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め3カ所確認され、P1・2が主柱穴と考えられる。規模はP1が径43cm・深さ14cm、P2が径31cm・深さ10cm、P3が径104cm・深さ27cm。

出土遺物は覆土中と南壁寄りの壁溝が大きく広がった所からまとまって出土した(写真図版三)。1は須恵器高壺の脚部で無窓と考えられる。図示した8の土師器甕の中に入れたような状態で出土した。2は土師器壺で床面より出土した。3は小型の鉢でミニチュア品のような形態である。外面のみ黒色処理を施し、口縁部に焼成前の穿孔がある。4は土師器の壺としたが鉢としても良い形態である。5は土師器鉢で上器の密集区から出土した。6は大型の土師器鉢で丁寧なミガキが施されている。7~11は土師器甕である。7と8と11はいずれも胴部下半が欠損しているが、いずれも上器密集区に置かれたような状態で出土した。7は頸部が短いタイプの甕で口縁部が肥厚している。8と11は口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプの甕で、8は内面がナデ、11は細かなハケ目の残る縦方向のナデが施されている。9は小型の土師器甕で口縁部の屈曲が緩やかなタイプの甕である。口縁部に僅かなミガキが施されている。10は小型の土師器甕で、口縁部はあまり屈曲せず、胴部は大きく張る、いわゆる刷張り甕のタイプである。外面は斜め方向のヘラケズリを施し、内面は横方向のヘラナデを施す。また、胴部に外面より焼成後の穿孔が施されている。12~14は磨石または磨石と敲き石の両方の使用痕が確認できる石器である。

本址はこれらの出土遺物から、7世紀前半に位置づけられると考える。

No.	種別	目録	法量 （印押印）	成形・調理・文様	備考		出土位置
					内 面	外 面	
1	須恵器	高壺	—	10.6 4.9 ロクロナデ	17クリナデ	完全実測	10cm
2	土師器	壺	14.0 13.3 (3.4) みこ部→口縁ヨコナデ	口縁ヨコナデ	四輪馬頭 摩耗	未	
3	土師器	鉢	6.6 5.2 5.1 ミガキ	口縁ヨコナデ 胴部→底部へナダ 底部ヘラケズリ	完全実測 燒成前穿孔	0cm 口縁部に2孔有り	
4	土師器	甕	12.2 9.6 5.9 11輪ヨコナデ・底部へみこ部へナダ	口縁ヨコナデ 体部へ底部へラケズリ	回転実測 直ひ人き	あり方	
5	土師器	鉢	10.0 7.0 8.0 口縁ヨコナデ 胴部へみこ部へナダ	口縁ヨコナデ 胴部へラケズリ	完全実測	0cm	
6	土師器	鉢	19.0 — 9.0 ミガキ	胴部→底部へラケズリ 口縁ヨコナデ・ミガキ	完全実測	1.5cm	
7	土師器	甕	17.1 — (14.2) 11輪ヨコナデ・胴部へナダ	11輪ヨコナデ・胴部へラケズリ	完全実測	-7cm	
8	土師器	甕	24.8 — (12.1) 口縁ヨコナデ・胴部へナダ	口縁ヨコナデ・胴部へラケズリ	完全実測	-1cm	
9	土師器	甕	15.4 7.4 20.5 口縁ヨコナデ 底部へ底部へナダ→口縁ミガキ	11輪ヨコナデ・胴部へナダ(工具跡) 底部ヘラケズリ→口縁ミガキ	完全実測	0cm	
10	土師器	甕	13.5 8.8 18.9 口縁ヨコナデ・胴部へ底部へラナダ	口縁ヨコナデ 底部ヘラケズリ	完全実測 焼成後穿孔	2cm	
11	土師器	甕	23.1 — (16.5) 口縁ヨコナデ→胴部ハケ目	口縁ヨコナデ→胴部ハケ目	完全実測	-2.5~0cm 床	
No.	種別	木 材	塊 木 壁	最大長 錐大根 錐大屋 重 量	所 見		出土位置
12	磨石	腕石山砂岩	7.1 7.2 5.9 417.35				
13	磨石	腕石山砂岩	15.6 6.8 1.0 626.29				
14	磨 石	腕石山砂岩	15.3 7.8 5.2 774.14				日6

第75表 H2号住居址出土上遺物観察表



第131図 H2号住居址及び出土遺物実測図

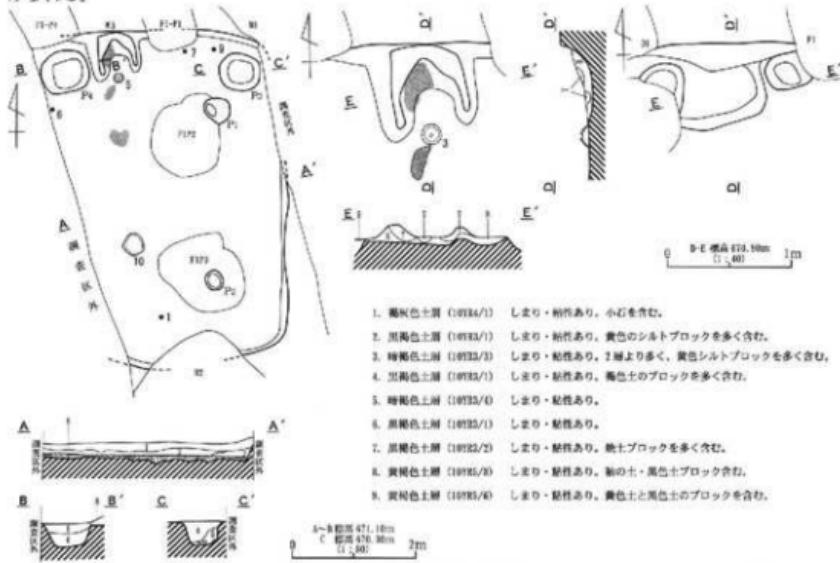
(3) H3号住居址 (第132・133図、写真図版四)

本住居址は、調査地点A区であるC-19.20、D-19.20Grに位置する。残存状態は北東コーナーと西側が調査区域外となる。H2号住居址、F1号掘立柱建物址と重複関係にあり本址の方が古い。

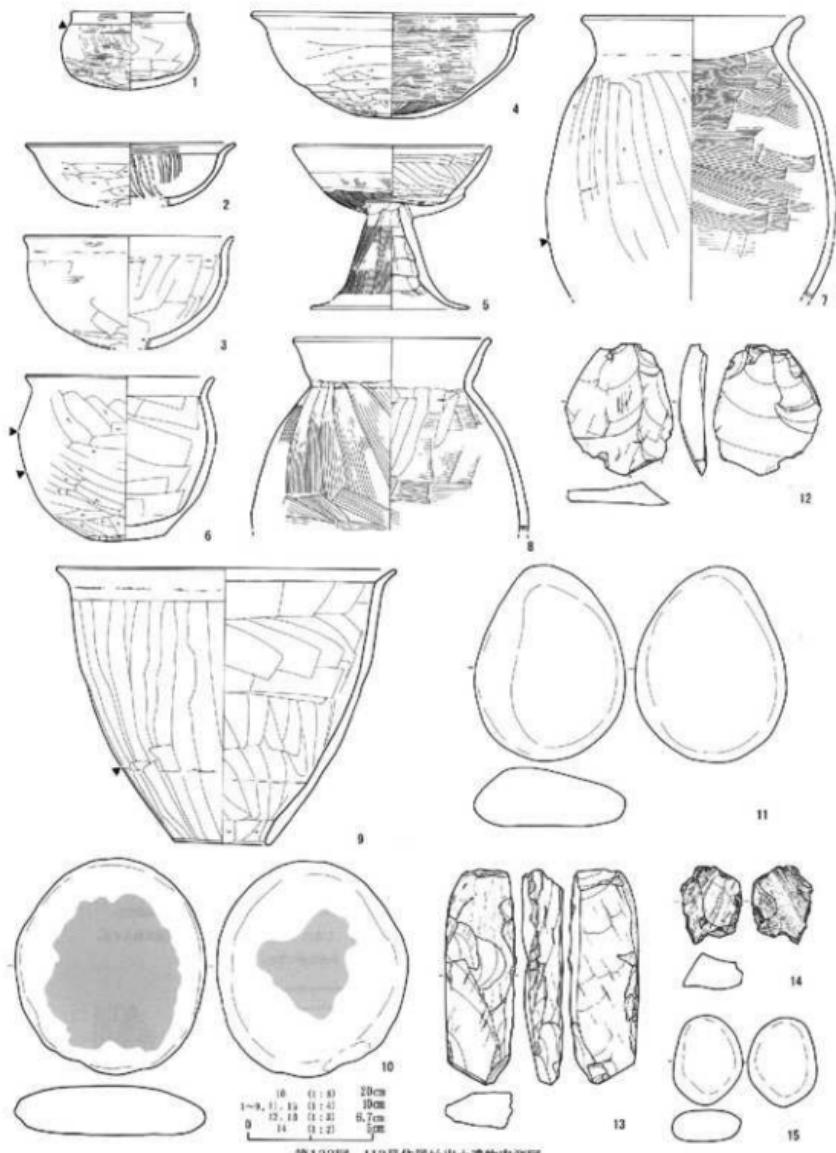
形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁3.66m(検出)・南壁2.40m(検出)・東壁4.79m(検出)で、壁高さは北壁東より最大26cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は15.84m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床はカマド前が特に硬く、貼床は全体に3~12cmの厚さで貼られていた。ピットは4カ所確認され、P1とP2が主柱穴、P3とP4は貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径45cm・深さ49cm、P2が径31cm・深さ57cm、P3が長軸65cm・短軸60cm・深さ39cm、P4が長軸78cm・短軸65cm・深さ40cmを測る。

カマドは北壁に検出され袖部等が検出された。住居址壁より飛び出すような煙道部は検出されず、顕著な火床部も確認できなかった。燃焼部には図示した3の土師器高杯の坏部が伏せた状態で検出され、遺構確認時に出土した脚部と接合しほぼ完形となつたことから、この高杯が支脚の機能をしていったと考えられる。カマドの掘り方は火床部と袖部分が一段低くなる掘り方であった。

本址からの出土遺物は比較的多く、特に床面上からの出土遺物が多かった。1は器高があることから碗とした。口縁部が直立するタイプでミガキが施されている。2は土師器杯でカマド部分から出土した。口縁部が外反するタイプで、内面に暗文風の強いミガキがある。3と4は土師器鉢である。4は大きさに比べて器厚が薄く、内面に丁寧なミガキが施されている。口縁部には面取りが施されている。5は土師器高杯でカマド燃焼部より出土した。坏部に僅かに後が残ることから「屈折脚高杯」に含まれるタイプと考えられる。脚部と坏部下半はハケ目の残るナデが施されている。6は小型の土師器甕、7と8は土師器の甕で口縁部はくの字に屈折し、尚かつ8の口縁部は中央部分が肥厚するタイプのものである。9は土師器甕で単孔のものである。床面状から出土し、内外面ヘラナデを施す。10は台石と考えられ、表裏に顕著な磨り面が残る。本址はこれらの出土遺物より、5世紀後半に位置づけられる。



第132図 H3号住居址実測図



第133图 H3号住宅址出土遗物实测图

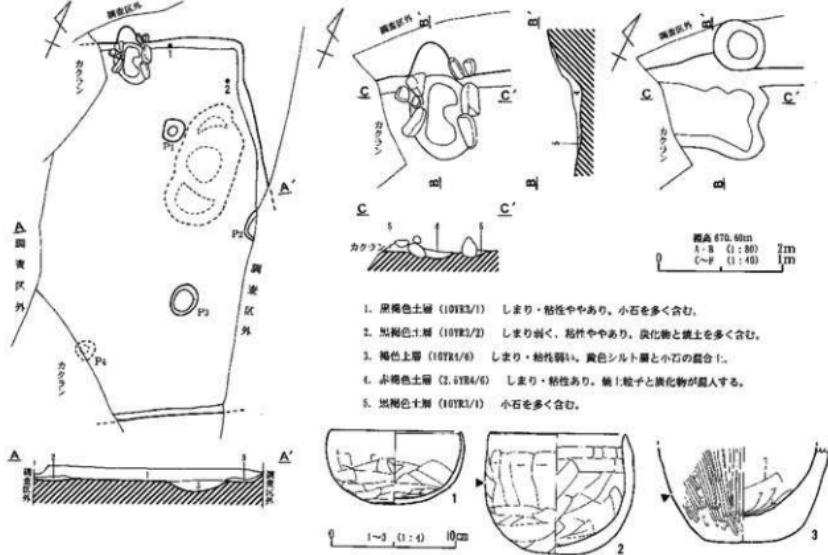
No.	種別	番号	法量	成形・調査・文様				備考	出土位置
				内面	外面	裏面			
1	土師器	碗	9.6	—	6.2	口縁ヨコナデミガキ 体盛～みこみ筋ヘラナデ	口縁ヨコナデミガキ 体部ヘラナデミガキ	完全実測	0cm
2	土師器	环	16.8	—	(5.0)	ヨコナデ～縞文	口縁ヨコナデ・体盛ヘラケズリ	回転実測	I区 カマド
3	土師器	鉢	16.8	—	9.0	口縁ヨコナデ・みこみ筋ヘラナデミガキ	ヘラナデミガキ	回転実測 厚耗	前窓六
4	土師器	鉢	22.6	4.5	8.1	ミガキ	口縁ヨコナデ・体盛ヘラケズリ	完全実測 厚耗	-3cm 肝窓六
5	土師器	高环	16.0	12.8	13.2	ヘラナデ(工具)・口縁ヨコナデ 脚部ヨコナデ・脚部ヘラナデ	脚部ヨコナデ・ヘラナデ(工具) →口縁ヨコナデ	完全実測	0cm
6	土師器	小型甌	15.2	6.3	13.2	口縁ヨコナデ・脚部～底部ヘラナデ	口縁ヨコナデ・脚部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	完全実測	0cm I区
7	土師器	甌	18.0	—	22.6	口縁ヨコナデ・脚部ヘラナデ(工具)	口縁ヨコナデ・脚部ヘラケズリ	回転実測	1cm 肝窓六 カマド I・II区
8	土師器	甌	18.0	—	15.4	口縁ヨコナデ・脚部ヘラナデ(工具)	口縁ヨコナデ・脚部ヘラナデ(工具)	回転実測	0~1cm I・II区
9	土師器	甌	27.3	8.0	22.2	脚部ヘラナデ・脚部ヘラケズリ →口縁ヨコナデ	脚部ヘラナデ・口縁ヨコナデ	完全実測	0cm II区
10	岩 磨	本材	残存者	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見	出土位置
11	石	磨石安山岩	34.5	30.8	8.0	13480.00	正・裏面にすり面	0cm	
12	石	磨石砂岩	15.8	12.2	4.9	1255.37		側面	
13	石	千枚岩	7.8	6.5	1.6	68.34	調片	II区	
14	石	千枚岩	12.8	1.3	2.4	1863.88		厚窓六	
15	石	墨岩	3.0	2.4	1.5	10.43		I区	
	石	海行安山岩	7.2	5.6	2.7	157.16		II区	

第76表 H3号住居址出土上遺物観察表

(4) H 4号住居址 (第134図、写真図版五)

本住居址は、調査地点A区であるE-11.12.13、F-11.12.13Grに位置する。残存状態は南東コーナー側と西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.33m（検出）・南壁



第134図 H4号住居址及び出土遺物実測図

1.75m（検出）・東壁5.92m（検出）で、壁高さは北壁側で最大27cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で16.35m²を測る。覆土はおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、貼床は確認されず地山を踏み固めたような、いわゆる「敲き床」であった。ピットは掘り方時を含め4カ所確認され、P1とP3が主柱穴と考えられる。規模はP1が径38cm・深さ29cm、P2が径45cm・深さ9cm、P3が径52cm・深さ11cm、P4が径30cm・深さ16cmを測る。また、本址は掘り方時に床下土坑的な掘り込みが確認された。形態は梢円形で、規模は長軸2.00m・短軸0.98m・深さ34cmを測る。

カマドは北壁中央に検出され、煙道部と袖部は残存していたが、火床部は良好な形で確認されなかつた。煙道部の規模は長さ39cmで、袖は河原石によって構築されていた。

本址からの出土遺物は少なく3点を図示した。1は土師器壺で、口縁部は内湾するタイプのものである。2は土師器鉢で口縁部は直立し、器厚が厚い。3は土師器壺の底部と考えられる。

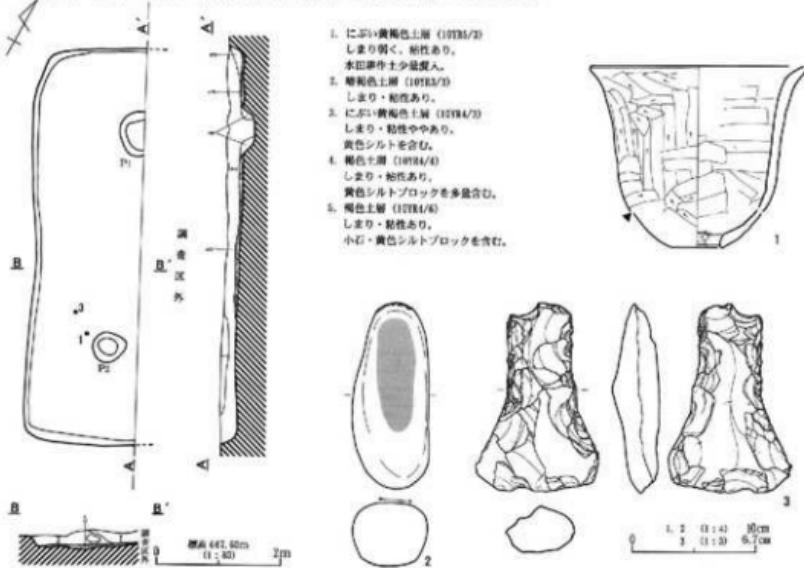
本址はこれらの出土遺物から不確実ではあるが、5世紀後半に位置づけられると考える。

No.	種別	器種	出 墓	成 形・調 炼・文 標		考 参	出土地點
				内 面	外 面		
1	土加器	壺	10.5	— 4.5	ヘラナデ	ヘラナデ	同上
2	土加器	鉢	11.0	— 9.8	口縁コロナデ・脚部ヘラナデ	口縁コロナデ・脚部ヘラナデ	完全束縛
3	土加器	鉢	—	6.3 (7.0)	ヘラナデ	丸井	完全束縛

第77表 H4号住居址出土遺物観察表

(5) H5号住居址（第135図、写真図版五）

本住居址は、調査地点B区であるノ-53、ハ-52.53Grに位置する。残存状態は住居址の東側ほとんどが調査区域外となり、住居址西壁周辺が検出されたのみである。



第135図 H5号住居址及び出土遺物実測図

形態は方形と考えられる。規模は北壁1.55m（検出）・南壁1.74m（検出）・西壁5.95mで、壁高さは南壁で最大27cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で10.18m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は軟質であったが、貼床は1~8cmの厚さで貼られていた。

ピットは2箇所確認された。P1とP2は主柱穴と考えられる。規模はP1が径73cm・深さ25cm、P2が径55cm・深さ29cmを測る。

出土遺物は覆土中から少量出土した。1は土師器壺で小型のタイプであり、単孔である。2は磨石と敲き石の両方の使用痕跡を持つ石器で、3は打製石斧である。抉りのあるタイプである。

本址からの出土遺物は少なく所産時期は不確定であるが、図示した壺の形態より占墳時代後期に位置づけられると考えられる。

No.	種別	算定 内 容	成形・調葉・文様			復元	出土位置	
			内 面	外 面	裏			
1	七輪壺	頭	17.4	4.2	14.5	口縁ヨコナデ→側部ヘラナダ	口縁ヨコナデ→側部ヘラケズリ	円柱実測 前前室孔 墓室 7cm
No.	器種	器材	残存率	器大	器小	裏	見	出土位置
2	塊石・敲石	磨石安山岩	14.9	8.2	5.5	270.00	上層部に散在、正面に散り落	II区
3	打製石斧	砂岩の岩	11.3	7.1	2.8	183.48		5cm

第78表 H5号住居址出土遺物観察表

(6) H 6号住居址（第136図、写真図版八）

本住居址は、調査地点B区北側であるヨ-18.19、ラ-18.19Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。

形態は正方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.72m（検出）・南壁2.60m（検出）・西壁3.95mで、壁高さは南壁中央で最大52cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の主軸方位はN-15°Wを測る。住居址の床面積は検出部分で10.50m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で3層に分かれる。床は全体的に硬質であった。貼床は1~12cmの厚みで貼られている。ピットは3カ所確認され、P1～P2が主柱穴と考えられる。規模はP1が径30cm・深さ20cm、P2が径27cm・深さ28cm、P3が径21cm・深さ13cmを測る。

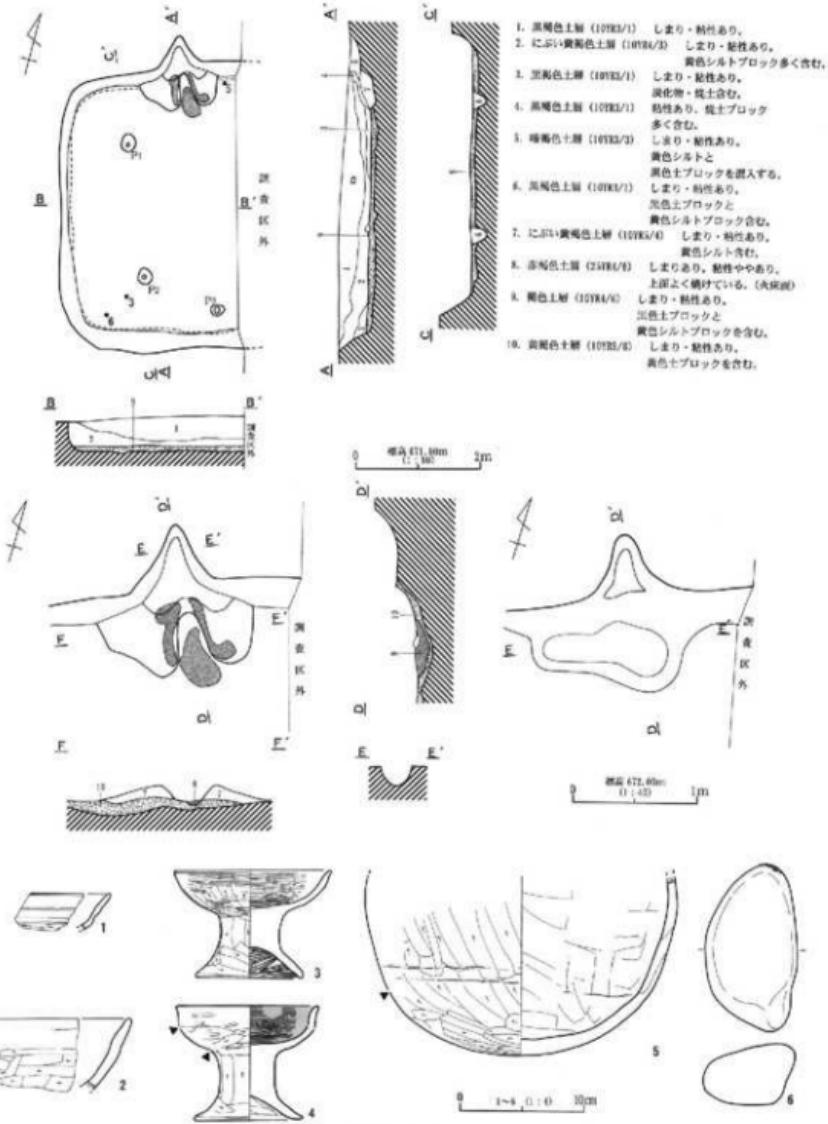
カマドは北壁側に造られており、煙道部と袖部が確認された。煙道部は住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプで、袖は黄色の粘土で構築されていた。火床部は良く焼けており、上面硬質化していた。焼上の厚みは11cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的少なく、図示した遺物も6点に止まった。1は土師器杯の口縁部で口縁部に段を有する。2は土師器鉢、3と4は土師器の高杯で、全体の部位が残っていた。4は内面黒色処理されている。この2点の高杯はいずれも使用のためか、表面の摩耗が進んでいた。5は土師器壺の底部と考えられるが、丸底である。6は敲石である。

本址はこれらの出土遺物より7世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	算定 内 容	成形・調葉・文様			復元	出土位置	
			内 面	外 面	裏			
1	土師器	杯	-	-	-	ヨコナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	板片実測 Ⅲc
2	土師器	鉢	-	-	-	口縁ヨコナデ→側部ヘラナダ(?)共成	口縁ヨコナデ→側部ヘラケズリ	板片実測 Ⅲc
3	土師器	高杯	12.6	8.6	8.6	ミガキ	側部ミガキ	丸々実測 壁底 4.5cm
4	土師器	高杯	11.1	8.8	9.2	ミガキ→黒色処理	側部ヘラナダ	丸々実測 壁底 完全実測 壁底
5	土師器	壺	-	-	(14.4)	ヘラナダ	ヘラケズリ	丸々実測 0cm
No.	器種	器材	残存率	器大	器小	貼入厚	裏	出土位置
6	敲石	磨石安山岩	13.3	7.5	3.4	810.00	上層部に散在	0cm

第79表 H6号住居址出土遺物観察表

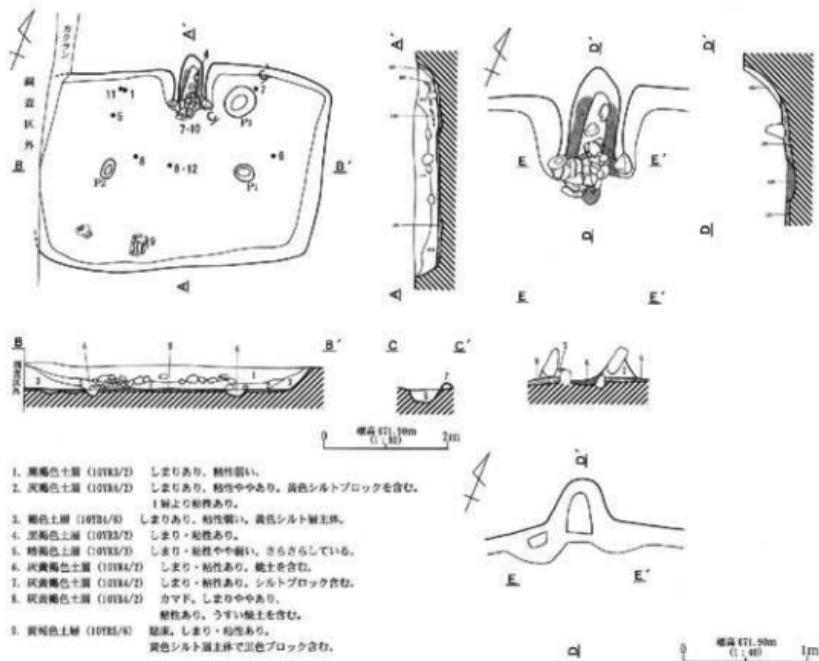


第136図 H-6号住居址及び出土遺物実測図

(7) H 7号住居址 (第137-138図、写真図版六・七)

本住居址は、調査地点B区北側であるラ-15.16、リ-15.16Grに位置する。残存状態は住居址西壁が調査区域外となる他は良好である。

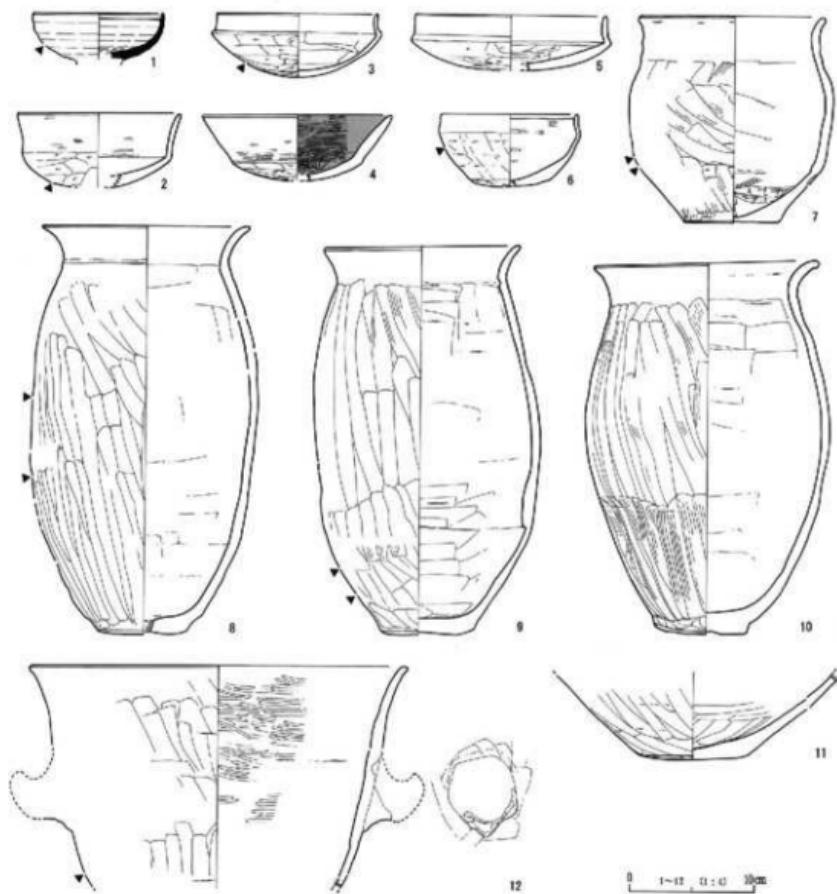
形態は東西方向に長い長方形を呈する。カマドは北壁に造られている。規模は北壁4.30m (検出)・南壁4.84m・東壁2.54mで、壁高さは南西コーナーで最大39cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の長軸方位はN-68°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で11.90m²を測る。覆土はお



第137図 H7号住居址実測図

No.	種別	基標	計量		成形・調査・文様		備考	出土品数
			日本標準式断面	内面	外	内		
1	壁基部	高さ	10.6	— (3.7)	クロクナデ	ロクロナデ	完全実測	外山自然郷村
2	土師器	坪	13.1	11.9 G56	口縁コナデ後ミガキ→底部ヘラケズリ	ミガキ	完全実測	摩耗
3	土師器	坪	12.9	13.6	ミ縁コナデ→みこみ縁ヘラチリ	口縁コナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	118.
4	土師器	坪	15.2	10.4 (G2)	ミガキ→黒色絞理	口縁コナデ後ミガキ→底部ヘラケズリ	回転実測	7cm
5	土師器	坪	15.4	16.2 (G4)	みこみ縁ナデ→口縁コナデ	底端ヘラケズリ→口縁コナデ	回転実測	82cm Ⅱ区
6	土師器	坪	11.3	6.4	5.8 ミガキ	全体ナデ→底部ナデ→口縁コナデ	完全実測	摩耗
7	土師器	甕	15.0	7.9	11縁コナデ→脚部→底部ヘラナデ	口縁コナデ→脚部ヘラナデ 底部ヘラケズリ	完全実測	摩耗 カマド
8	土師器	甕	16.5	7.3	22.6 11縁コナデ→脚部→底部ヘラナデ	口縁コナデ→脚部ヘラナデ→底部ヘラナデ	完全実測	5~13cm Ⅱ・Ⅲ区
9	土師器	甕	15.8	7.4	21.1 脚部から底部へナダ	脚部ヘナダ→底部ヘラケズリ	完全実測	4cm Ⅲ区
10	土師器	甕	18.1	7.6	29.9 口縁コナデ→脚部→底部ヘラナデ	口縁コナデ→脚部ヘラナデ→底部ヘラナデ	完全実測	6cm カマド Ⅲ区
11	土師器	甕	—	8.7	(7.20) ヘラナデ	脚部ヘナダ→底部ヘラナデ	完全実測	Scs
12	土師器	甕	20.4	— (17.7)	ミガキ	ヘラナデ	回転実測	13cm Ⅰ・Ⅲ区

第80表 H7号住居址出土遺物観察表



第138図 H7号住居址出土遺物実測図

おむね自然堆積であったが、1層と2層の間で拳大～人頭大の礫が多量に検出された（写真図版七参照）。この礫群は住居址中央部とカマド内からも検出され、間層に砂等を混入しない事から人為的な投げ込みが考えられる。床はカマド周辺を中心に硬質で、貼床は1～7cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、3カ所確認された。P1とP2が主柱穴、P3が貯蔵穴と考えられる。規模はP1が径32cm・深さ13cm、P2が径33cm・深さ12cm、P3が径52cm・深さ24cmを測る。

カマドは北壁に検出された。主軸方位はN-19°-Wを示す。残存状況は煙道部と袖部共に、良好に残存していたが、先にも述べたとおり焚口から燃焼部にかけて多量の礫が詰まっていた。規模は煙道部長さ34cm、袖部高さ7～17cmで、火床部は良く焼けていたが硬質化はしていなかった。袖は川原

石を縦方向に使って構築されていた。また燃焼部には支脚石が立った状態で検出された。

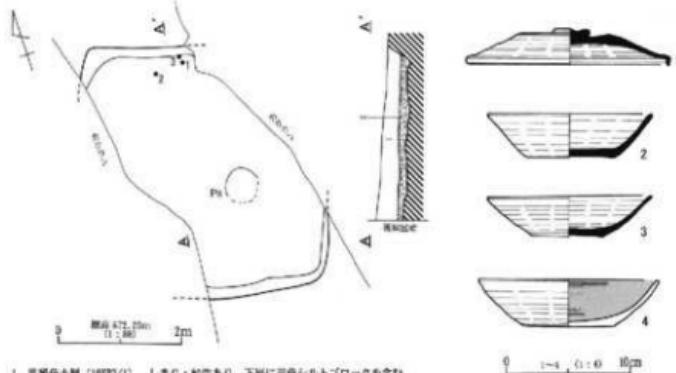
出土遺物は覆土中である罐群の間から多く出土した。1は須恵器高杯の壺部であり、外面は濃い自然釉が付着している。床面より2cm浮いて出土した。本遺構の南に存在するM6号溝状遺構から出土した破片と接合関係にある。2~6は土師器壺である。2は床面上から、その他のものは浮いた状態で出土した。2と4は口縁部が大きく外反するタイプで、3と5は須恵器壺身を模倣したタイプの壺である。7は小型の土師器壺でカマド内より出土した。8~10は土師器壺でいずれも割れてはいるが接合後ほぼ完形となる。8と9は床面より僅かに浮いた状態で、10はカマド内より出土した。11は土師器壺の底部で、底部から胴部の膨らみから、いわゆる胸張り壺の形態である。12は把手付の土師器壺で大型品である。内面にミガキを施す。

本址はこれらの出土遺物より、6世紀後半に位置づけられる。

(8) H 8号住居址 (第139図、写真版九)

本住居址は、調査地点B区北側であるユ-22.23、ヨ-22.23Grに位置する。残存状態は北東コーナーと南西コーナーがカクランにより壊されている。形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.70m(残存)・南壁1.85m(残存)・西壁0.65m(残存)・東壁1.04m(残存)で、壁高さは北西コーナー部で最大27cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.42m²を測る。覆土は自然堆積で單層である。床は全体的に硬質であり、貼床は2~20cmの厚みで確認された。

本址からの出土遺物は少なく、4点を図示した。1~3はまとめて北壁側より出土したが、覆土中の出土である。1は須恵器蓋で扁平なつまみが付く。2と3は須恵器壺であり、いずれも回転糸切り離しである。4は内面黒色処理を施した土師器壺である。本址はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、8世紀後半に位置づけられると考える。



1. 黒褐色土解 (10083/1) しまり・始性あり。下間に黄赤色シルトブロックを含む。
2. 馬鹿土解 (10083/2) しまり・始性あり。下間に灰分の底分あり。

第139図 H8号住居址及び出土遺物実物図

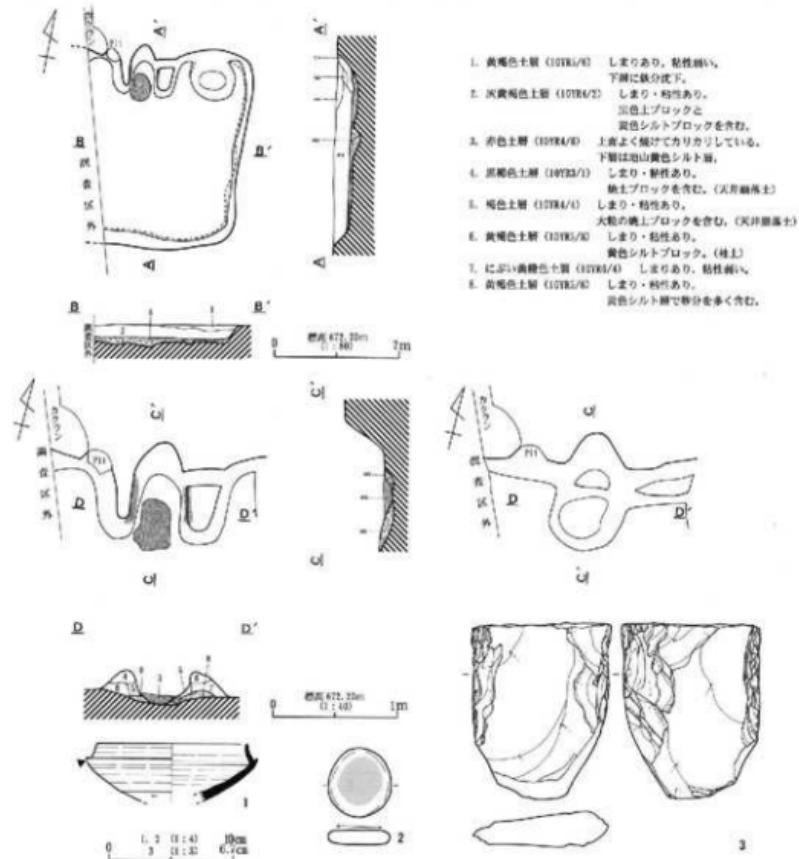
No.	種類	基調	法量		成形・調節・文様		備考	出土位置
			口幅	底径	内面	外面		
1	須恵器	蓋	16.3 2.9	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ→人井深渠切り剥削ヘラ ケズリ→つまみ點付 火摩	完全実掘 自然地付着 (内面から外道かえり)	15cm
2	須恵器	壺	13.3 7.3	3.5	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ→底部回転糸切り 火摩	完全実掘	6cm
3	須恵器	壺	13.3 5.8	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り 火摩	完全実掘	37cm 上区
4	土師器	壺	14.5 7.5	3.8	ロクロナデ+ミガキ=黒色底質	ロクロナデ→底部切り離し+ 手持ちハラケズリ	回転実掘 厚利	116

第81表 H8号住居址出土遺物観察表

(9) H9号住居址 (第140図、写真図版十)

本住居址は、調査地点B区北側であるモ-32.33、ヤ-33Grに位置する。残存状態は西側1/3が調査区域外となる他は良好である。

形態は方形を呈する。規模は北壁2.56m (検出)・南壁1.96m (検出)・東壁2.84mで、壁高さは



第140図 H9号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	測量		成形・調整・又種		備考	出土状況
			内面	外面	ロクロナデ	ロクロナデ-底凹部-軸ハラケズリ		
1	漆器皿	坪	12.0	13.6 (4.6)	ロクロナデ	ロクロナデ-底凹部-軸ハラケズリ	回転式窓	特徴されている
2	漆施	漆材	現存幅大約大約数大門	無	無	無	所見	漆施
3	打製石斧	無刃石器群	(10.0)	(6.4) (2.1)	(260.70)	基準大門 正面の刀削材背面に使用による削減度	14K	

第82表 H9号住居址出土遺物観察表

北東コーナーで最大33cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.23m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~8cmで貼られていた。ピットは検出されなかつたが、カマド東脇に貯蔵穴が検出された。形態は円形で、規模は長軸90cm・短軸73cm・深さ38cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道部は住居址よりもあり飛び出さないタイプで、長さは26cmを測る。袖はしまりのある黄色シルトで構築されていた。火床面は良く焼けており表面は硬質化していた。

本址からの出土遺物は非常に少なかった。1は覆土中から出土した須恵器坏身で、底部周辺は回転ヘラケズリを施す。2は磨石、3は欠損した打製石斧である。本址の帰属時期は出土遺物が少なく不確実であるが、古墳時代後期の所産と考えられる。

(10) H10号住居址 (第141図、写真図版十一)

本住居址は、調査地点B区北側であるモ-30.31.32、ヤ-31Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈する。規模は北壁3.84m(検出)・南壁2.34m(検出)・西壁4.76mで、壁高さは西壁中央で最大45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で14.94m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3~12cmで貼られていた。また、3層を中心床上には炭化物と焼土が広がっていた。ピットは2カ所確認された。P1とP2が主柱穴と考えられる。規模はP1が径33cm・深さ33cm、P2が径38cm・深さ12cmを測る。本址の掘り方は住居址中央部が一段高くなる掘り方で、段差は1~8cmを測る。

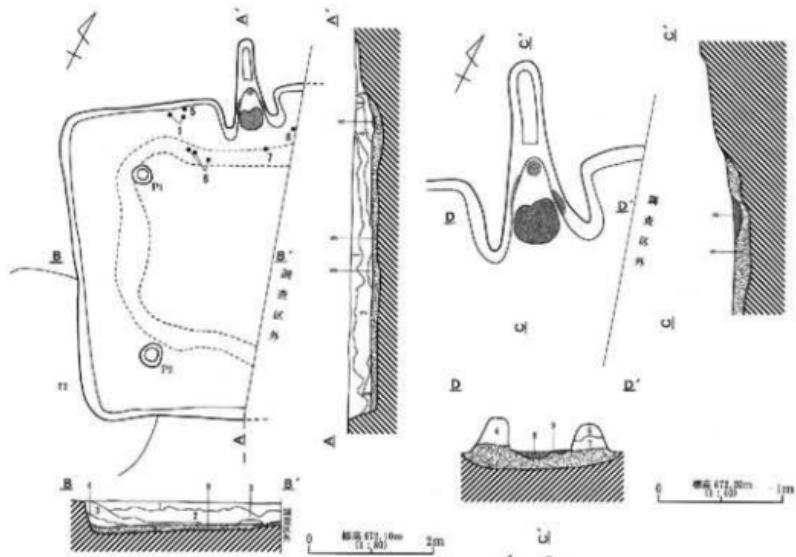
本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道の軸方位はN-31°-Wを示す。煙道部は長く伸びるタイプで、規模は長さ93cmを測る。袖部は高さ21~26cmが残存しており、しまりのある黄褐色上で構築されていた。火床部は良く焼けており上面硬質化していた。火床部の焼土厚みは7cmを測る。カマド掘り方は、北壁側が一段ベット状に高くなっている。

出土遺物は覆土中から出土したが多くなく、土器5点と石製模造品3点を図示した。1~3は土師器坏であり、1と2は内外面黒色処理と内面は丁寧なミガキが施されている。4は小型の土師器瓶で、欠損しているが多孔で、3穴が残存している。5は土師器甕の底部で、住居址掘り方に出土した。6は石製模造品の臼玉で3枚に割れていたが、接合し完形となつた。7と8も臼玉で床面上からの出土である。

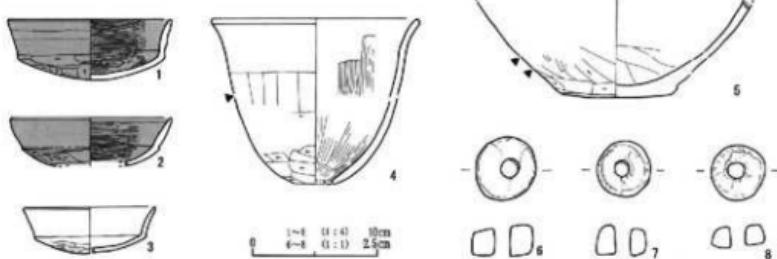
本址はこれらの出土遺物より6世紀後半に位置づけられる。

No.	類別	器種	法面		成形・調整・又種		備考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	上師器	坏	13.3 11.7	4.8 ミガキ→黒色處理	底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→黑色焰付	完全実測	0~6cm B区	
2	土師器	坏	13.0 11.0	(3.9) ミガキ→黒色處理	底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→黑色焰付	同上実測	Ⅱ区	
3	上師器	坏	10.6 9.0	3.7 ヨコナデ	口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	円錐火窓 内外共通無着しい	Ⅱ区	
4	上師器 (多孔)	瓶	16.7 3.2	13.2 11.8ヨコナデ→胴部から底部ヘラナデ	胸部ヘラナデ→胴下半部から底部 ヘラケズリ→縁ヨコナデ	回転実測 多孔(3孔残存) 焼成前空孔	I・II・K	
5	土師器	甕	-	8.9 (8.1)	ヘナナデ	胸部ヘラケズリ→ミガキ 底部ヘラケズリ→ミガキ	完全実測	-2cm P8 Ⅱ区中央
<hr/>								
No.	器種	素材	疗床半径大長	疗床大長	疗床大長	量差	所見	出土位置
6	臼玉	滑石	壳形	0.79	1.28	0.30	1/16	0ca
7	臼玉	滑石	元形	0.80	L10	0.39	1.17	0ca
8	臼玉	滑石	壳形	0.46	1.10	0.31	0.83	0ca

第83表 H10号住居址出土遺物観察表



1. 明黄色土層 (10TEL/1) しまりあり。下部に鉱分の沈下あり。
2. 黄褐色土層 (10TEL/2) しまり、粘性あり。黄色シルト主構。
3. 黑褐色土層 (10TEL/3) しまり、粘性やや弱い。鐵と炭化物を多量に含む。
4. 黄褐色土層 (10TEL/4) しまり、粘性やや弱い。
5. 黄褐色土層 (10TEL/5) しまり、粘性やや弱く。鐵土粒子を多く含む。
6. にぶい黄褐色土層 (10TEL/6) しまり、粘性あり。鐵土ブロックを微量含む。
7. 黄褐色土層 (10TEL/7) しまり、粘性あり。黄色シルトブロック多く含む。
8. 赤色土層 (10TEL/8) しまりあり、粘性弱い。よく焼けており上部硬質化している。
9. 黄褐色土層 (10TEL/9) しまり、粘性あり。黑色土ブロック混入する。地盤よりも粘性あり。



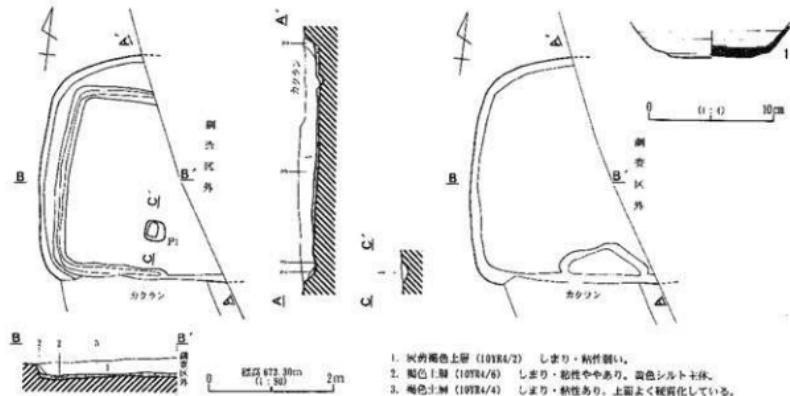
第141図 H10号住居址及び出土遺物実測図

(11) H11号住居址 (第142図、写真図版九)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-62、ナ-61.62Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。

形態は方形を呈する。規模は北壁1.24m(検出)・南壁2.92m(検出)・西壁3.06mで、壁高さは北西コーナーで最大23cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.90m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~8cmで貼られていた。壁溝は南壁中央から西壁と北壁に検出されたが、壁よりも内側で検出され、特に北壁側は壁より40cmほど離れていた。規模は幅16~23cm・深さ3~6cmを測る。ピットは検出されなかつた。本址の掘り方は住居址南壁側が一段低くなる掘り方で5cm程の段差があつた。

出土遺物は覆土上中から出土したが量的には少なく、図示し得たものは1の須恵器壺のみであった。本址は出土遺物が少なく所産時期は不確実であるが、出土遺物や小型の住居址形態より平安時代と考えられる。



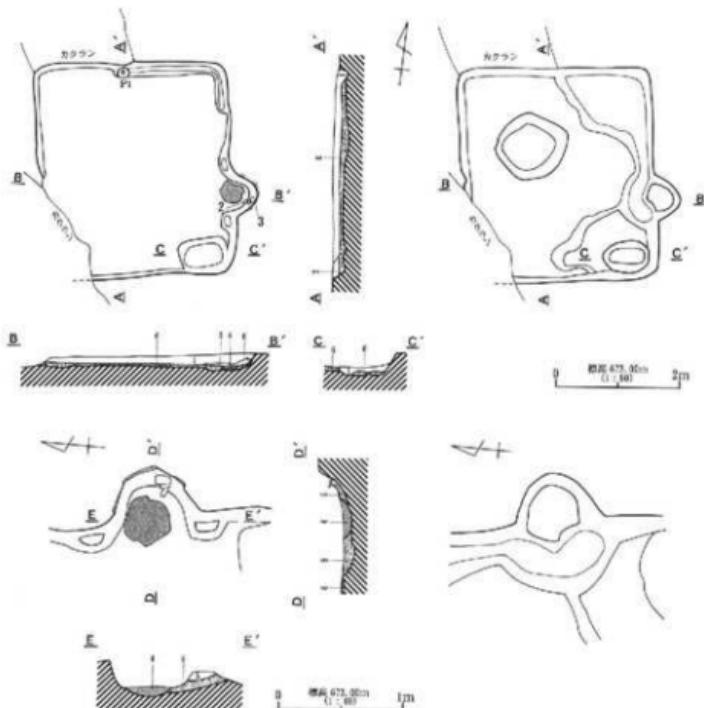
No.	付 别	沿 線	法 地	成 道・周 邊・文 墓			備 考	出 土 位 置
				内 面	外 面	面		
1	采泥跡	岸	-	6.6	-	リクロナダ	完全実施 外面未実	1区

第84表 H11号住居址出土遺物観察表

(12) H12号住居址 (第143図、写真図版十二・十三)

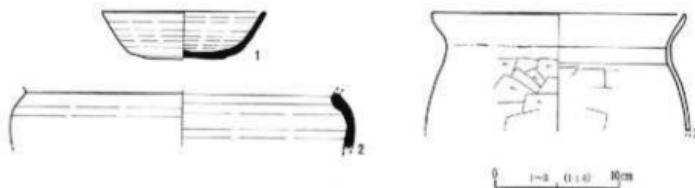
本住居址は、調査地点B区北側であるニ-60.61Grに位置する。残存状態は南西コーナーがカクランによって削平されている。

形態は方形を呈する。カマドは東壁に造られている。規模は北壁2.97m・南壁2.15m(残存)・西壁1.70m(残存)・東壁3.30mで、壁高さは南壁中央で最大19cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で9.00m²を測る。住居址の主軸方位はN-7°-Wを測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~11cmで貼られていた。壁溝は北壁から北東コーナーにかけて検出された。規模は幅18~25cm・深さ3cmを測る。ピットは1カ所確認された。P1は北壁内にあり、規模はP1が径19cm・深さ9cmを測る。また、本址はカマド南脇に貯蔵穴と考えられる掘り込みが検出された。規模は長軸78cm・短軸58cm・深さ14cmを測る。本址の掘り方は東側が一段低くなる掘り方で、11cmほ



1. 深黄色土層 (10ERA/1) しまりあり。
黄色シルト・ロームブロックを含む。
2. 深褐色土層 (10ERA/1) しまり・粘性あり。
3. 淡褐色土層 (10ERA/2) しまり・粘性あり。
地土ブロック・炭化物を含む。

4. 赤色土層 (10ERA/3) しまり・粘性あり。上面よく硬質化している。
下層地山が窺っている。
5. 深褐色土層 (10ERA/1) しまり・粘性あり。正色土と褐色土の混合土。
6. 黄褐色土層 (10ERA/5) しまり・粘性あり。上面硬質化している。



第143図 H12号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	基準	法 管		成形・調整・文様		考	出土位置
			(上)G	(下)H	内面	外面		
1	須恵器	环	13.1	9.6	3.8	クロナデ 大脚	クロナデ 瓢箪右回転尖端余切り 大脚	円軌実測 区
2	須恵器	裏	-	-	(4.7)	クロナデ	クロナデ	円軸実測 1cm 区
3	土師器	裏	26.4	-	19.0	口縁:コナデ・翼部:ヘラケズリ	口縁:コナデ・翼部:ヘラナデ	円軸実測 厚紙 8cm カマド 区

第85表 H12号住居址出土遺物観察表

どの段差ができていた。また、住居址中央に長軸120cm・短軸105cm・深さ14cmの楕円形の床下土坑が検出された。

本址のカマドは北壁中央に造られていた。煙道の軸方位はN-89°-Eを示す。煙道部は伸びないタイプで、燃焼部が住居址よりも外に張り出している。袖部は高さ11cmが残存しており、しまりのある黒褐色土で構築されていた。火床部は良く焼けており上面硬質化していた。火床部の焼土厚みは8cmを測る。カマドは貼床が貼られた後構築されていた。

出土遺物は覆土中から多く出土した。図示した遺物の内1は覆土、2と3はカマド内より出土した。1は須恵器環で内外面火漆が確認できる。2は須恵器裏で口縁部は欠損しているが広口で短頸のタイプと考えられる。3は土師器裏で頭部が「コ」の字に屈曲するいわゆる「武藏裏」と呼ばれるものである。

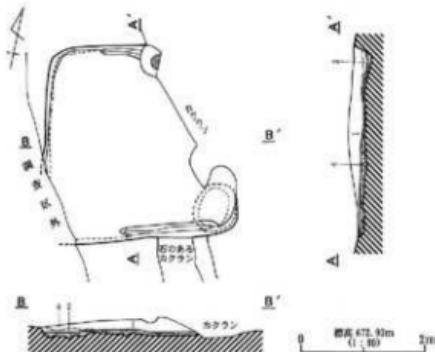
本址はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、8世紀後半に位置づけられると考える。

(13) H13号住居址 (第144図、写真図版十三)

本住居址は、調査地点B区中央であるヌ-59Grに位置する。残存状態は東側半分が力クラン、西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは北壁に造られている。規模は北壁1.46m(残存)・南壁2.54m(検出)・西壁2.00m(検出)・東壁0.39m(残存)で、壁高さは南壁で最大17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.56m²を測る。覆土はおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、カマド前面にかけては硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~10cmで貼られていた。壁溝は北壁と南壁の一部で検出された。規模は幅15~24cm・深さ2~6cmを測る。また、掘り方検出時に南西コーナーで貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。形態は楕円形で、規模は長軸80cm・短軸62cm・深さ7cmを測る。本址のカマドは北壁中央に造られていた。火床部のみの検出で、薄く焼土が検出された。

出土遺物は覆土中から出土したが少なく、図示できるものはなかった。出土した土器は須恵器裏片と土師器裏・坏片であるが、土師器坏片の中には7世紀後半から8世紀初頭の所産と考えられるものが含まれていた。本址の所産時期は不明である。



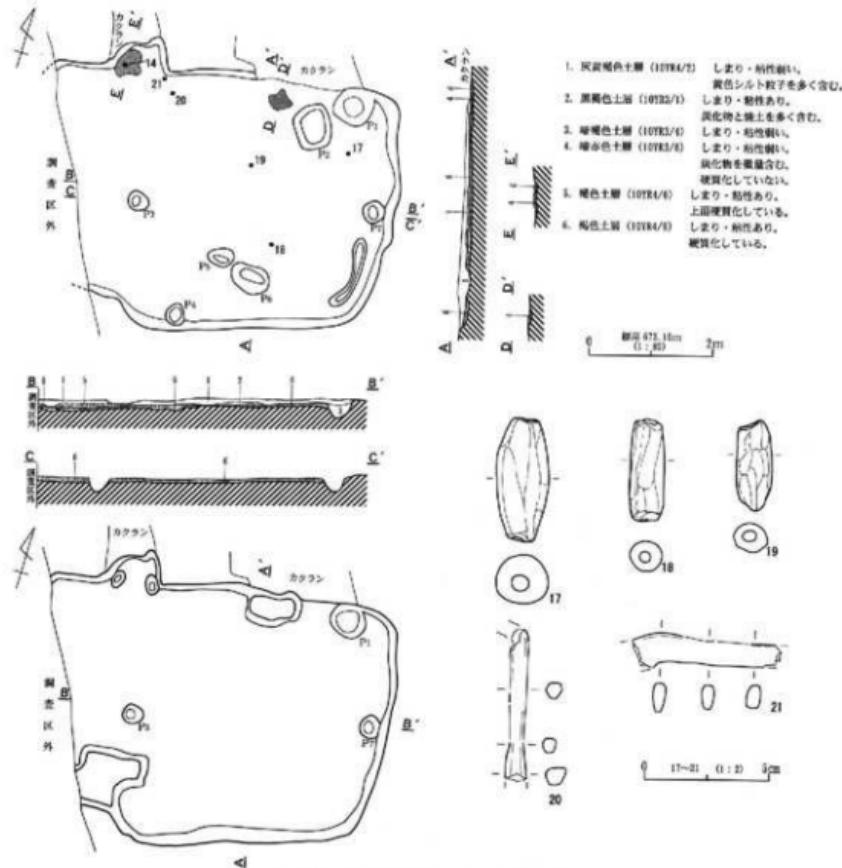
- 1. 黒褐色土壁 (10TE3/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロックを含む。
- 2. 黑褐色土壁 (10TE3/3) しまりあり。粘性やや弱い。
- 3. 黑褐色土壁 (10TE3/1) しまり・粘性あり。炭化物・焼土粒を多く含む。
- 4. 黑褐色土壁 (10TE3/2) しまり・粘性あり。上面硬質化している。黒褐色ブロックを含む。

第144図 H13号住居址実測図

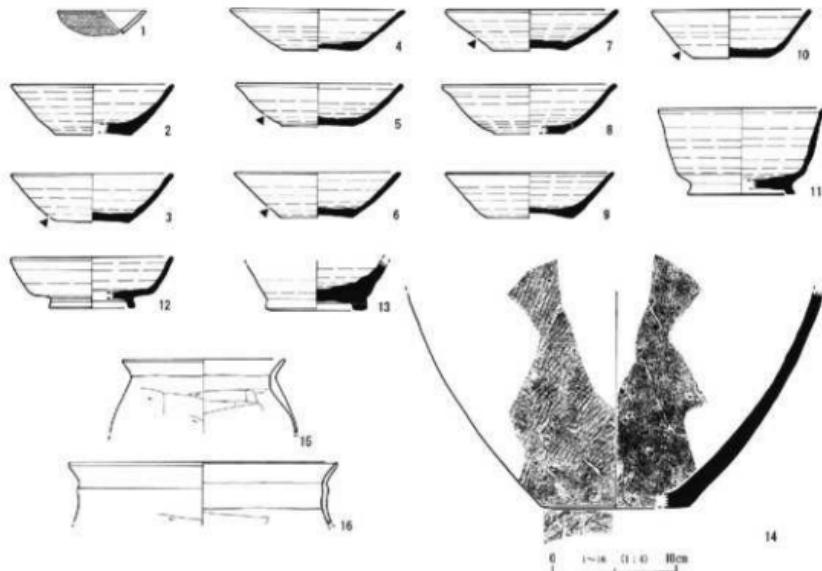
(14) 14号住居址 (第145・146図、写真図版十四)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-63.64、ナ-63.64Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態はほぼ東西方向に長い長方形を呈すると考えられる。規模は北壁5.43m・南壁4.34m(残存)・東壁3.34mで、壁高さは北壁で最大12cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は18.58m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床は西側部分が特に硬質であり、全体では貼床が1~9cmの厚さで貼られていた。壁溝は南東コーナー部で短く検出された。規模は幅12~21cm・深さ2~4cmを測る。ピットは掘り方検出時も含めて7カ所確認された。規模はP1が径67cm・深さ14cm、P2が径72cm・深さ11cm、P3が径34cm・深さ24cm、P4が径34cm・深さ5cm、P5が径43cm・深さ5cm、P6が径67cm・深さ9cm、P7が径39cm・深さ22cmを測る。



第145図 H145号住居址及び出土遺物実測図



第146図 H14号住居址出土遺物実測図

No.	器別	器種	法 規		成形・形態・文様			備考	出土位置
			口徑(ミ)	法規(ミ)	内 面	外 面			
1	灰陶器	盆	—	—	凸輪	凸輪	凸輪	凸輪実測	Ⅲ区
2	黑漆器	盆	13.1	6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転系切口	回転実測	Ⅲ区
3	黑漆器	盆	12.1	5.9	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ 底部左回転系切口	完全実測	Ⅳ区
4	漆器	盆	14.1	6.8	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転系切口	完全実測	Ⅲ・Ⅳ区
5	漆器	盆	12.5	5.8	3.5	ロクロナデ 水擗	ロクロナデ 底部左回転系切口 水擗	完全実測	Ⅳ区
6	漆器	盆	14.0	6.0	3.2	ロクロナデ 水擗	ロクロナデ 底部左回転系切口 水擗	完全実測	Ⅳ区
7	漆器	盆	12.4	5.9	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転系切口	完全実測	Ⅳ区
8	漆器	盆	14.1	6.8	3.9	ロクロナデ 水擗	ロクロナデ 底部左回転系切口 水擗	完全実測	Ⅳ区
9	漆器	盆	12.5	6.8	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転系切口	完全実測	Ⅳ区
10	漆器	盆	12.9	6.1	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転系切口, 縦切口(方向不明)	完全実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区
11	黑漆器	高台盆	13.4	8.6	6.9	ロクロナデ	ロクロナデ 右沿回転系切口(方向不明) 一付高台	回転実測	Ⅱ・Ⅳ区
12	黑漆器	高台盆	13.1	6.8	4.0	ロクロナデ 水擗	ロクロナデ 付高台 水擗	回転実測	Ⅲ区
13	黑漆器	長脚盆	—	9.2	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ 底部角切口→付高台	回転実測	Ⅰ・Ⅱ区
14	黑漆器	盆	—	12.0	(11.2)	ハフナデ	タクナ	回転実測	和室カマド隣土2
15	土製器	甕	13.0	—	(15.9)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	Ⅲ区
16	土製器	甕	21.6	—	(2.0)	口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	Ⅱ区
17	土製器	甕	4.9	2.1	2.0				Ⅱ区
18	土製器	甕	4.1	1.6	1.2				Ⅱ区
19	土製器	甕	3.6	1.4	1.1				Ⅱ区
20	漆器	素 材	現存半縁大底	縁大底	縁大底	重 量	所 在		住上位層
20	不明	鉢	(6.1)	(0.8)	(0.7)				Se
21	刀子	鉢	(6.0)	(1.20)	(0.6)				pl. free

第86表 H14号住居址出土遺物観察表

カマドは北壁西寄りに造られている。煙道部は長く伸びず、燃焼部が住居址壁よりも飛び出すタイプである。袖は検出されなかつたが、袖構築時に石を入れたと考えられるピットが2箇所確認された。規模は径が30~33cm・深さ7~9.5cmを測る。火床面はあまり硬質化しておらず、焼土の厚みは4cmを測る。また、本址は北壁東側で焼土の広がりが検出された。この焼土も上面の硬質化はしていなかった。

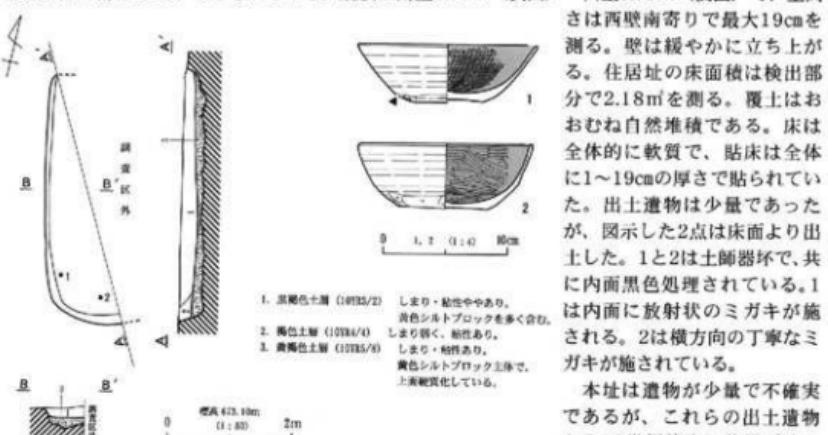
出土遺物は覆土中のもの多かった。1は灰釉陶器皿の口縁部破片である。2~10は須恵器壺である。いずれも底部回転糸切り離しが行われている。11と12は須恵器高台壺である。11は見込みが深いタイプで、12が浅いタイプである。13は須恵器壺の底部であり、底部回転糸切り離しの後高台を貼付している。14は須恵器壺の底部から胴部下半である。外面に敲き目を残す。15は小型の土師器甕であり、口縁部から胴部である。頸部が「く」の字に屈曲する。16は土師器甕で頸部が「コ」の字に屈曲するいわゆる「武藏甕」と呼ばれるものである。17~19は土製品の土錘である。いずれも完形品でありほぼ床面上から出土した。20と21は鉄製品である。21は刀子と考えられるが、20は不明である。

本址は平面形態も不自然であり、調査当初に2軒の住居址の重複とも考えられたが、西側に広がる硬質面の下から、東側から続く床が調査区外まで連なる事、また掘り方時も顕著な掘り方の異なりが確認できなかつた事から1軒の住居址として報告した。本址の帰属時期は、図示した出土遺物から8世紀後半と考えられる。

(15) H15号住居址 (第147図、写真図版十六)

本住居址は、調査地点B区中央である二-59Grに位置する。残存状態は住居址東側が調査区外となり、南西コーナー部分が検出されたのみである。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は南壁0.97m(検出)・西壁3.78m(検出)で、壁高さは西壁南寄りで最大19cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.18m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質で、貼床は全体に1~19cmの厚さで貼られていた。出土遺物は少量であったが、図示した2点は床面より出土した。1と2は土師器壺で、共に内面黒色処理されている。1は内面に放射状のミガキが施される。2は横方向の丁寧なミガキが施されている。



第147図 H15号住居址及び出土遺物実測図

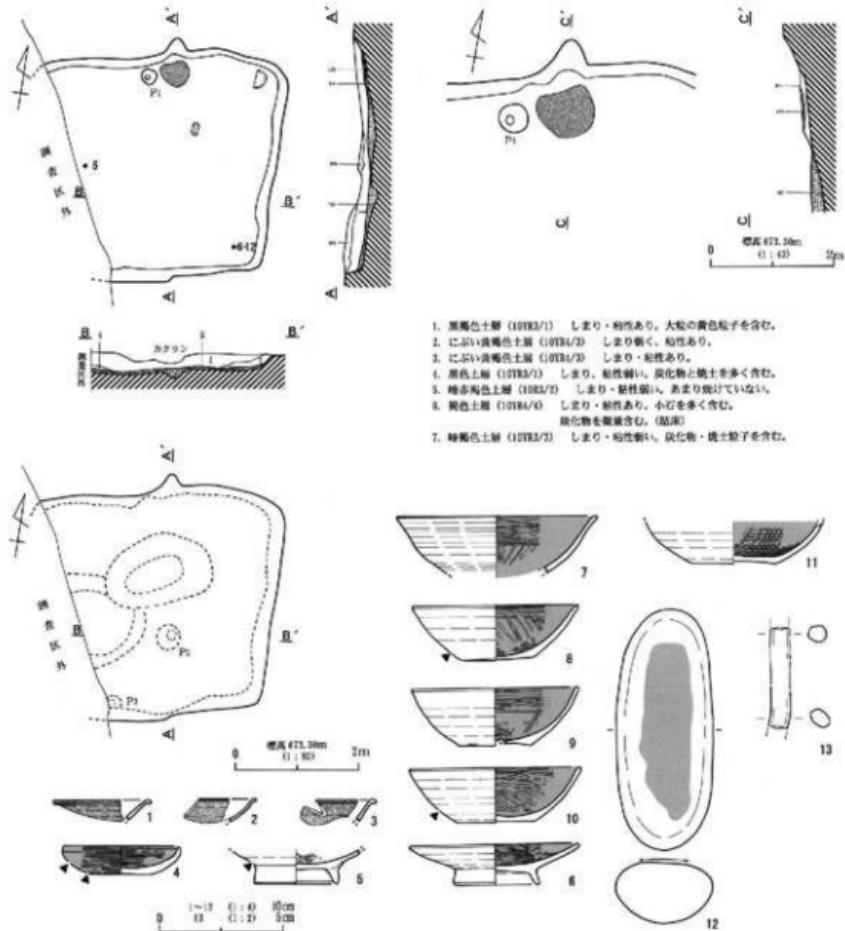
No.	種別	器種	住居	成形・調整・文様		備考	出土位置
				内面	外面		
1	土師器	壺	H15号	14.5 5.5 4.6	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ→底部右側糸切り→底部外周手持ちハラケグリ	完全実測 床地
2	土師器	壺	H15号	14.0 7.0 5.4	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ→底部右側糸切り→底部外周手持ちハラケグリ	完全実測 床地

第87表 H15号住居址出土遺物観察表

(16) H16号住居址 (第148図、写真図版十四・十五)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-6465、ナ-65Grに位置する。残存状態は南西コーナーが調査区域外となる。H17・19号住居址と重複関係にあり、本址が一番新しい。

形態は方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。住居址の主軸方位はN-9°-Wを測る。規模は北壁3.82m(検出)・南壁2.38m(検出)・東壁3.15mで、壁高さは南壁で最大29cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は9.95m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で2層に分かれる。床はカマド前が特に硬く、貼床は全体に1~11cmの厚さで貼られていた。ピットは3カ所



第148図 H16号住居址及び出土遺物実測図

確認された。規模はP1が径26cm・深さ8cm、P2が径42cm・深さ11cm、P3が径24cm・深さ13cmを測る。

カマドは北壁に検出され火床部等が検出された。煙道部は住居址壁より僅かに飛び出す形態で、壁面より36cm出ていた。火床部の焼け込みは弱く、硬質化もしていないかった。

本址からの出土遺物は覆土中からの出土であるが比較的多かった。1~3は灰陶陶器皿か碗の口縁部破片である。4は土師器皿としたが、カララケのような形態である。内外面丁寧なミガキと黒色処理されている。5は土師器皿である。6は土師器皿でほぼ完形である。7~11は土師器皿でいずれも内面ミガキで黒色処理が施されている。12は磨り石、13は鉄製品であるが種別は不明である。

本址はこれらの出土遺物より10世紀前半に位置づけられる。

No.	構 室	器 類	寸 法		成 形・調 球・文 横		備 考	生土位置	
			口径(外)×底径(内)×厚	高さ	内 面	外 面			
1	灰陶陶器	皿	—	—	—	黒釉	陶片実測		
2	灰陶陶器	皿	—	—	—	黒釉	陶片実測	IV区ホリ方	
3	灰陶陶器	皿	—	—	—	黒釉	陶片実測		
4	土師器	皿	9.0	4.3	2.3	ミガキ-黒色處理	完全丸窓	I区	
5	土師器	皿	—	6.0	(2.7)	ミガキ	直筒形輪轍あり(方向不明)→付高台	完全丸窓 摩耗	0cm B区
6	土師器	皿	13.6	7.0	3.3	ミガキ-黒色處理	直筒形輪轍へラギズリ→付高台	完全丸窓	13cm IV区
7	土師器	皿	16.1	—	(4.6)	ミガキ-黒色處理	円軌道痕	B区	
8	土師器	皿	13.2	5.8	4.4	ミガキ-黒色處理	直筒形輪轍あり(方向不明)	完全丸窓 摩耗	B区
9	土師器	皿	12.4	5.8	4.6	ミガキ-黒色處理	直筒形輪轍あり	円軌道痕	1~II区
10	土師器	皿	13.3	6.0	4.3	ミガキ-黒色處理	直筒形輪轍あり(方向不明)	完全丸窓	B区
11	土師器	皿	—	6.7	(3.0)	ミガキ-黒色處理	直筒形輪轍あり(方向不明)	円軌道痕	I区
12	磨石	安山岩	19.0	7.80	1.90	—	直面に磨り面	半土袋	
13	不明	鉄	(4.10)	(0.80)	(0.70)	—	—	IV区	

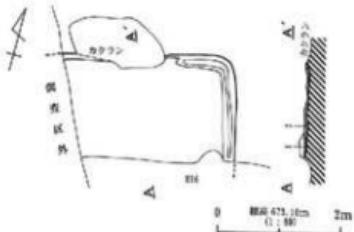
第88表 H16号住居址出土遺物観察表

(17) H 17号住居址 (第149図、写真図版15)

本住居址は、調査地点B区中央であるト-64、ナ-64Grに位置する。残存状態は南側をH16号住居址にまた西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁2.70m(検出)・東壁1.60m(残存)で、壁高さは北壁側で最大15cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.94m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であり、貼床は1~5cmの厚さで貼られていた。壁溝は北東コーナーで確認され、規模は幅18~24cm・深さ2~5cmを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく、土師器片1点と武藏甕と呼ばれる土師器片1点が出土したのみである。よって本址の所産時期は不明である。



1. 黒褐色土層 (10103/1) しまり・粘性あり。
2. 黄褐色土層 (10103/2) 黄色シルトブロック含む。
3. 黄褐色土層 (10103/3) しまり・粘性あり。こまかな、
黒色土ブロックを多く含む。

第149図 H17号住居址実測図

(18) H 18号住居址 (第150図、写真図版17)

本住居址は、調査地点B区中央であるテ-64.65Grに位置する。残存状態は住居址の東側のほとんどが調査区域外となり、住居址南西コーナーのみ検出された。

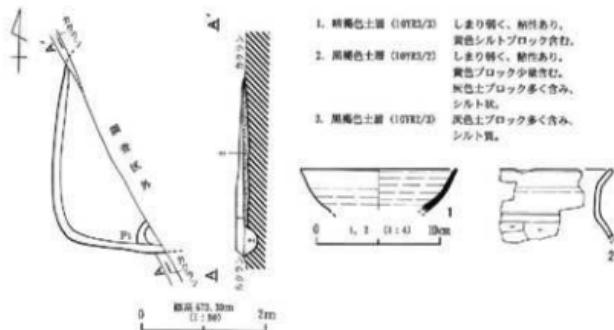
No.	構 室	器 類	寸 法		成 形・調 球・文 横		備 考	生土位置	
			口径(外)×底径(内)×厚	高さ	内 面	外 面			
1	須彌壇	甕	12.0	—	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	IV区
2	須彌壇	甕	—	—	—	11壁ココナデ 回転ヘラギズリ	11壁ココナデ 回転ヘラギズリ	回転実測	IV区

第89表 H18号住居址出土遺物観察表

形態は方形と考えられる。規模は南壁1.60m（検出）・西壁2.74m（検出）で、壁高さは南壁で最大26cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.06m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は軟質であったが、貼床は1~6cmの厚さで貼られていた。ピットは1箇所のみ確認された。規模はP1が径47cm・深さ18cmを測る。

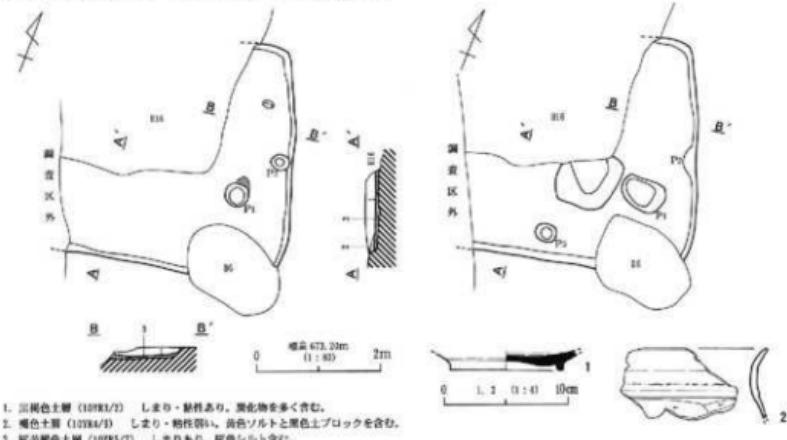
出土遺物は覆土中から少量出土した。1は須恵器壺、2は土師器甕で、頸部が「コ」の字になるいわゆる武藏甕のタイプである。

本址からの出土遺物は少なく所産時期は不確定であるが、図示した甕の形態より9世紀代に位置づけられると考えられる。



第150図 H18号住居址及び出土遺物実測図

(19) H19号住居址 (第151図、写真図版十六)



第151図 H19号住居址及び出土遺物実測図

本住居址は、調査地点B区中央であるテ-65.66、ト-65.66Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外、北側がH16号住居址に削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.54m（残存）・南壁3.41m（残存）・東壁3.45mで、壁高さは北壁で最大16cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で6.26m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は中央部分が硬質であった。貼床は1~12cmの厚みで貼られている。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径40cm・深さ18cm、P2が径30cm・深さ11cm、P3が径35cm・深さ9cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的少なく、図示した遺物も2点に止まった。1は須恵器高台壺の底部部分で、底部は回転糸切り巻しの後高台を貼付している。2は土師器甕で、頭部が「コ」の字状になるいわゆる「武藏甕」と呼ばれる甕である。

本址は出土遺物が少なく、図示した遺物もいずれも覆土中からのため、所産時期は不明である。

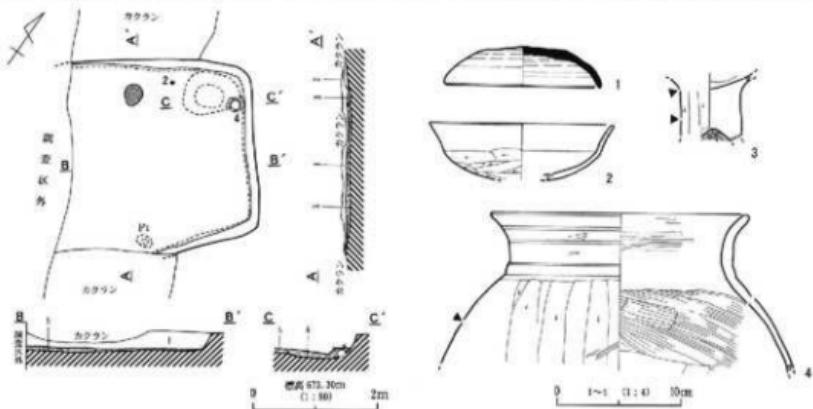
No.	種別	目録	法 量		成 形・調 整・天 塗		考	坐 地
			DIN(底面周囲)×高さ	内 面	外 面			
1	須恵器	高台壺	-	9.2 (1.5)	クロナデ	クロナデ→底部回転糸切り(方向不明) 一升巣合	回転糸	Ⅲ区
2	土師器	甕	-	-	1) 2) ニタデ→脚部ヘタナデ 1) 2) ニタデ→脚部ヘタナデ	脚部ヘタナデ	脚部ヘタナデ	Ⅲ区

第90表 H19号住居址出土遺物観察表

(20) H20号住居址 (第152図、写真図版十八)

本住居址は、調査地点B区中央であるツ-68.69Grに位置する。残存状態は住居址西壁が調査区域外となる。

形態は東西方向に長い長方形を呈する。カマドは北壁に造られていたと考えられる。規模は北壁2.80m（検出）・南壁1.62m（残存）3.24m（推定）・東壁2.47mで、壁高さは北東コーナーで最大32cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の長軸方位はN-56°-Eを示す。住居址の床面積は検出部分で8.02m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。床面はカマド周辺を中心に硬質であり、貼床は1~11cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め1カ所確認された。規模



1. 黒褐色土層 (D1013/2) しまりあり、5cm大の織多板に覆入。

2. 褐赤褐色土層 (D1013/1) 無土ブロック・小石混入。

3. 带褐色土層 (D1013/4) 大底面でカチカチに覆入。

4. 黒褐色土層 (D1013/2) 小石・岩色帶微少量含む。

5. 带褐色土層 (D1013/4) 小石・黄褐色粒子多量含む。

第152図 H20号住居址及び出土遺物実測図

はP1が径28cm・深さ12cmを測る。また、カマド東脇で貯蔵穴と考えられる掘り込みが掘り方時に確認された。東西方向に長軸を持ち、形態は不整形である。規模は長軸90cm・短軸67cm・深さ21cmを測る。

カマドは北壁に構築されていたと考えられるが、北壁側に火床部と考えられる焼土塊が検出されたのみである。この火床部は上面良好焼けて硬質化しており、焼土の厚みは6cmを測る。

本址からの出土遺物は少なかったが4点を図示した。1は須恵器蓋で、天井部にヘラケズリを施す。2は土師器坏で、床面から3cm浮いた状態で出土した。3は土師器高坏脚部の破片で、脚部の内面に黒色処理が施されている。4は土師器蓋で、東壁際に口縁部を上にして置かれたような状態で出土した。転用台とも考えられる。口縁部には強いナデによる沈線状の段が巡る。

本址はこれらの出土遺物より、7世紀前半に位置づけられると考える。

No.	種別	基準	住 庫		成 形・調 球・文 線		備 考	出土位置
			内 面	外 面	内 面	外 面		
1	須恵器	蓋 口径33.2cm・底径26.8cm	口クロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ・天井部斜面ヘラケズリ	完全丸窓 外面に自然剥離付	窓区	
2	土師器	坏 12.6 12.6 (4.5)	摩耗著しく剥離できない	口縁コロナゲ・底部ヘラケズリ	回転実施 摩耗著しい	3cm 1 区		
3	土師器	蓋 —	(5.5) 井戸ヘラナゲ・脚部ヘラケズリ・黑色處理	ヘラケズリ	回転実施	3cm		
4	土師器	蓋 20.8	(12.0) 口縁コロナゲ・底えガキ・脚部ヘラナゲ	口縁コロナゲ・脚部ヘラケズリ・えガキ	完全実施 摩耗	3cm		

第91表 H20号住居址出土遺物観察表

(21) H21号住居址 (第153図、写真図版十九)

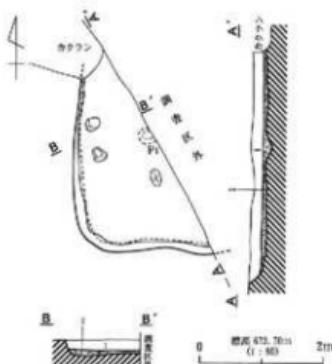
本住居址は、調査地点B区南側であるス-75.76、セ-75.76Grに位置する。残存状態は北東側が調査区域外となり、住居址の南西コーナー部分の検出のみに止まった。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁2.04m(検出)・西壁2.60m(残存)で、壁高さは南西コーナー一部で最大21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

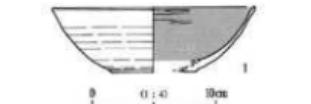
住居址の床面積は検出部分で3.60m²を測る。覆土は自然堆積で単層である。床は全体的に軟質であり、貼床は1~6cmの厚みで確認された。

ピットは掘り方検出時に1箇所検出され、規模はP1が径25cm・深さ10cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示可能なものは1の土師器坏のみであった。1は内面黒色処理を施し、底部は回転糸切り離しである。本址の帰属時期は出土遺物が少なく不明である。



1. 黒褐色土層 (10033/2) 軟質灰青色ブロック複数混入。
2. 塗褐色土層 (10033/1) 黄色ローム粒子多量に混入。



第153図 H21号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	基 標	住 庫		成 形・調 球・文 線		備 考	出土位置
			内 面	外 面	内 面	外 面		
1	土師器	坏 16.3 6.8 5.1	ミガキ・黒色処理	ロクロナゲ・底部回転糸切り(方向不明)	部分剥離			

第92表 H21号住居址出土遺物観察表

(22) H22号住居址 (第154図, 写真図版二十)

本住居址は、調査地点B区南側であるサ-80.81Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる為、住居址西側のみの検出である。

形態は隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は南壁0.90m(検出)・西壁2.92mで、壁高さは南壁で最大27cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で1.51m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、貼床は2~14cmの厚さで貼られていた。

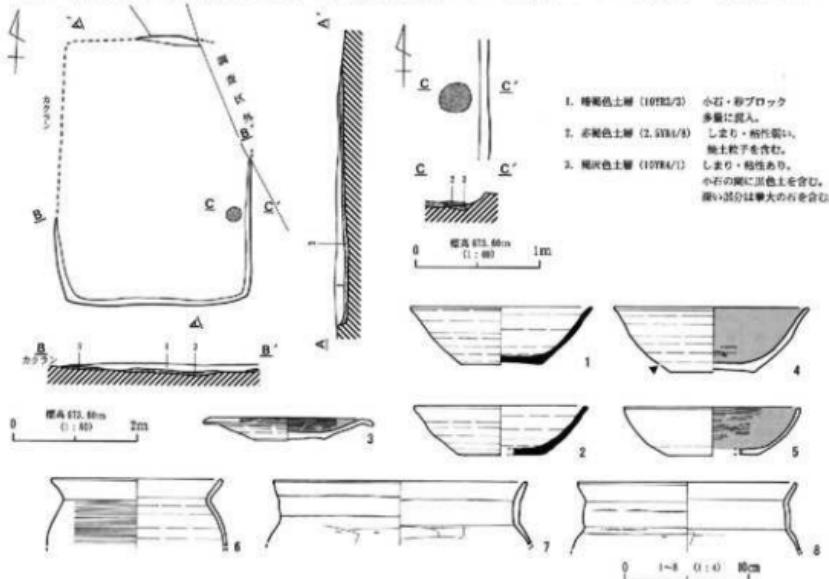
本址からの出土遺物は非常に少なく

覆土中からの出土であった。出土した土器は平安時代に帰属すると考えられる須恵器壺片1点、須恵器甕片3点、土師器甕片2点であった。本址の帰属時期は出土遺物が少なく不明である。

(23) H23号住居址 (第155図, 写真図版二十)

本住居址は、調査地点B区南側であるシ-78.79、ス-78.79Grに位置する。残存状態は北東コーナーが調査区域外、北西コーナーがカクランにより削平されている。

形態は南北方向に長い長方形を呈する。規模は北壁1.06m(残存) 2.10m(推定)・南壁2.91m・



第154図 H22号住居址実測図

西壁1.32m（残存）4.10m（推定）・東壁2.66m（検出）で、壁高さは西壁中央で最大10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は推定部分で11.48m²を測る。覆土はおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~9cmで貼られていた。

本址のカマドは検出できなかったが、東壁より中央で焼土範囲が確認された。焼土の硬質化等は観察できなかったが、円形でカマド火床部のようであった。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1は須恵器坏で底部回転糸切りである。2は須恵器坏であるが生焼けのような状態で、色調が橙色を呈する。3は上師器の皿で高台部分は欠損している。4と5は土師器杯でいずれも内面黒色処理されている。6は口クロ成形の土師器甕である。7と8は土師器甕で頭部が「コ」の字状に屈曲するいわゆる「武藏甕」と呼ばれるタイプの甕である。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	基種	法量 〔容積/底面積×高さ〕	成形・調整・文様		備考	出土位置
				内面	外面		
1	須恵器	坏	14.6 6.4 4.6	口クロナデ	ロクロナデー底部右側糸切り	完全実測 摩耗	Ⅲ区
2	須恵器	坏	14.0 7.0 1.0	ロクロナデ	ロクロナデー底部四軒糸切り(方角小切)	回転実測	Ⅲ区
3	土師器	皿	13.6 -	(1.8) ミガキ-黒色處理	ロクロナデー底部右側糸切りハラケズリ	完全実測	Ⅲ区
4	土師器	杯	15.6 6.8 5.2	ミガキ-黒色處理	ロクロナデー底部糸切り	完全実測 摩耗	Ⅲ・IV区
5	土師器	杯	14.2 7.0 3.8	ミガキ-黒色處理	ロクロナデー底部右側糸切り	回転実測 摩耗	Ⅰ区
6	土師器	甕	13.8 --	(5.4) ロクロナデ	ロクロナデー側面糸切り	回転実測	Ⅰ区
7	土師器	甕	20.4 -	(5.1) 口縁ヨコナデ-削落ヘナナデ	ロヨコナデー削落ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
8	土師器	甕	17.6 -	(5.5) 口縁ヨコナデ-削落ヘナナデ	ロヨコナデー削落ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区

第93表 H23号住居址出土遺物觀察表

(24) H24号住居址 (第156図、写真図版二十二)

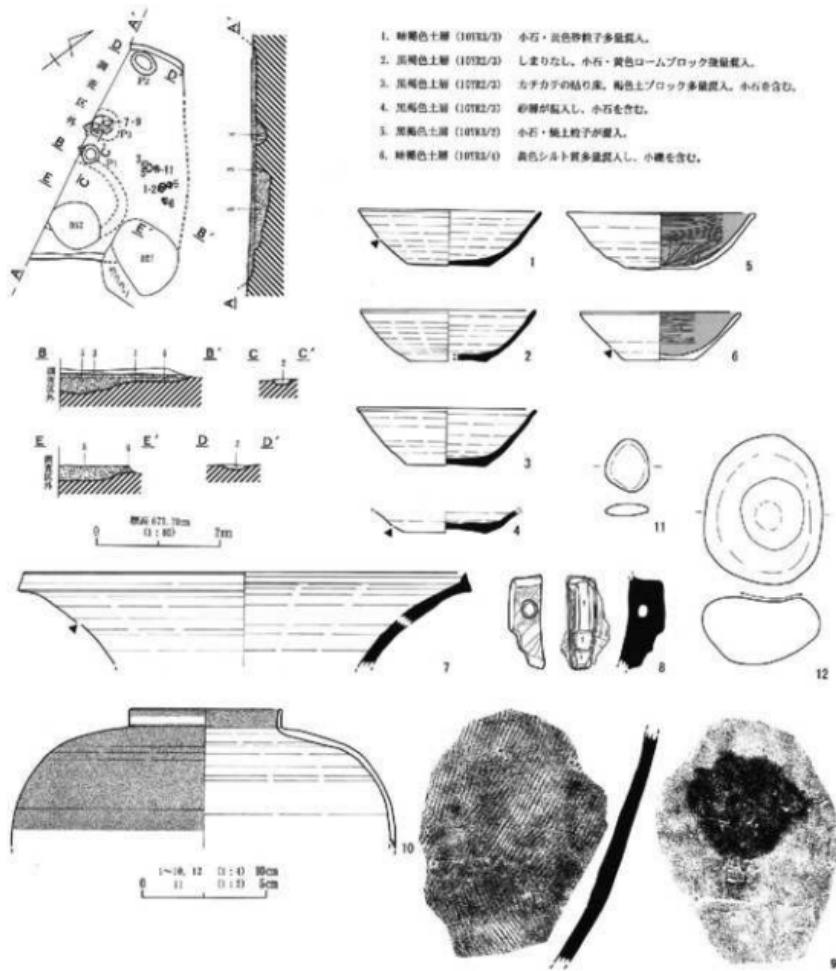
本住居址は、調査地点B区南であるス-78.79Grに位置する。残存状態は西側半分が調査区域外、東側がカクランにより削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.66m（残存）・南壁1.21m（残存）で、壁高さは南壁最大8cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.98m²を測る。覆土はおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~11cmで貼られていた。ピットは掘り方時の検出も含め3箇所が確認された。規模はP1が径30cm・深さ8cm、P2が径44cm・深さ9cm、P3が径47cm・深さ22cmを測る。また、本址は床下土坑と考えられる掘り込みが確認された。形態は円形で、規模は長軸130cm・短軸110cm・深さ21cmを測る。

出土遺物は床面を中心に多く出土した。1~4は須恵器坏でいずれも底部回転糸切り離しを施す。1と2は床面上からの出土である。5と6は土師器杯で、いずれも内面丁寧なミガキが施され黒色処理されている。7は須恵器甕の口縁部である。口唇部に顕著な面取りを施す。8は器種不明の須恵器であり、器厚6cmほどの胴部と考えられる部分に三段の段を形成し、中央に焼成前の孔を穿孔している。本品は在

No.	種別	基種	法量 〔容積/底面積×高さ〕	成形・調整・文様		備考	出土位置
				内面	外面		
1	須恵器	杯	14.7 6.5 4.5	ロクロナデ	ロクロナデー底部右側糸切り	完全実測 摩耗	0cm
2	須恵器	杯	14.2 6.1 4.1	ロクロナデ	ロクロナデー底部糸切り	回転実測 摩耗	0cm
3	須恵器	杯	14.4 6.8 4.6	ロクロナデ	ロクロナデー底部右側糸切り	回転実測 摩耗	4cm
4	須恵器	杯	- 6.5 (1.8)	ロクロナデ	ロクロナデー底部右側糸切り	完全実測	7cm
5	土師器	杯	15.2 5.8 4.5	ミガキ-黒色處理	ロクロナデー底部右側糸切りハラケズリ	完全実測	0~3cm
6	土師器	杯	13.0 3.6 3.8	ミガキ-黒色處理	ロクロナデー底部糸切り	完全実測	0cm
7	須恵器	甕	36.4 -	7.5 ロクロナデ	ロクロナデー	回転実測	2cm P
8	須恵器	甕	- -	ヘラナデ	ヘラケズリ ヘナナデ	破壊実測	
9	須恵器	甕	- -	タタキ	タタキ ナデ	仮木 二次利用	2cm P
10	灰陶陶器	灰陶甕	11.2 -	11.1 施釉	ロクロナデ	回転実測	7.5cm
No.	種別	基種	法量 〔容積/底面積×高さ〕	内面	外面	備考	出土位置
11	石	石材	2.10 1.80 0.50	2.92	全体に磨らか		3cm
12	石	石室石岩	12.00 9.60 5.50	800.00	正面に凹有り		

第94表 H24号住居址出土遺物觀察表



第156図 H24号住居跡及び出土遺物実測図

地のいわゆる須恵器四耳壺の突起部分とも形態が異なり、敢えて類例を指摘すれば、石川県二ッ梨横川1号窯などで見られる双耳瓶の耳と類似する。なお、横川1号窯は8世紀中葉に比定されている。9は須恵器壺の胴部破片であるが、内面に顯著な磨り面が存在する（拓本濃い部分）。観等の転用の可能性がある。10は灰釉陶器短頸壺の一部である。口縁部から肩部に掛けて顯著な釉が確認できる。11は磨石である。12は凹石であり、窪んだ中央部分では磨り面も見られた。

本址はこれらの出土遺物より、9世紀前半に位置づけられる。

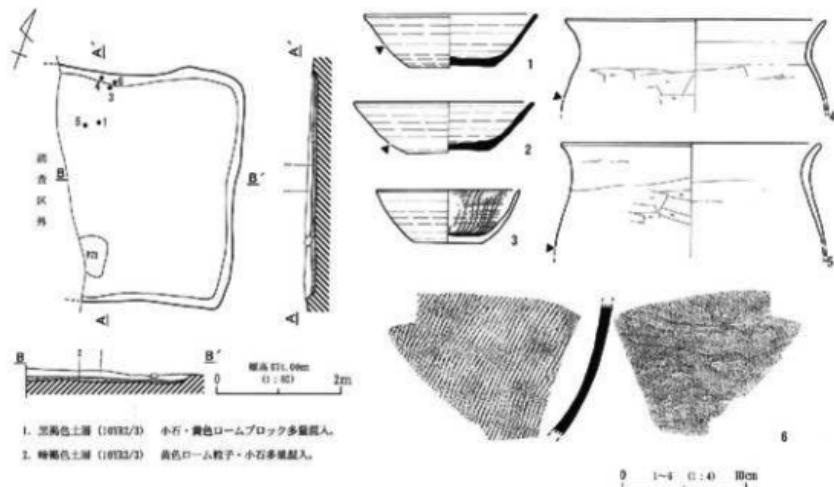
(25) H25号住居址 (第157図、写真図版二十一)

本住居址は、調査地点B区南側であるキ-89、ク-88.89Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。規模は北壁2.90m(検出)・南壁2.18m(検出)・東壁3.63mで、壁高さは南壁で最大12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で8.76m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~6cmで貼られていた。

出土遺物は覆土中からと北壁縁から、まとまって多く出土した。1と2は須恵器壺であり、底部回転系切り離しが行われている。3は土師器壺である。内面に見込み部から放射状の暗文が施されている。口径が小振りで器高が高く、内面のミガキ等を考えるといわゆる「甲斐型壺」の影響を受けた壺と考えられる。4と5は土師器甕で、いずれも武藏甕と呼ばれるタイプのものである。6は須恵器甕である。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられると考える。



第157図 H25号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	寸法		成形・焼成・文様		備考	出土位置
			内面	外面	内面	外面		
1	須恵器	壺	14.0 6.2 4.3	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ→底部丸回転系切り	火摩	完全光面	-1cm II区
2	須恵器	壺	14.0 6.5 4.1	ロクロナデ 火摩	ロクロナデ→底部丸回転系切り	火摩	完全光面	I・II・III区
3	土師器	壺	11.6 5.4 4.3	ミガキ一絞文	ロクロナデ→底部丸回転系切り	火摩	完全光面 摩新	2.5cm III区
4	土師器	甕	21.0 — (7.20)	(11縫コナデ→側面ハラナデ)	(11縫コナデ→側面ハラナデ)	火摩	回転光面	10cm III区
5	土師器	甕	21.0 — (9.0)	(11縫コナデ→側面ハラナデ)	(11縫コナデ→側面ハラナデ)	火摩	回転光面	2cm III区
6	須恵器	甕	— — —	当貝模→ハラナデ	タタキ	粘土	粘土	2cm

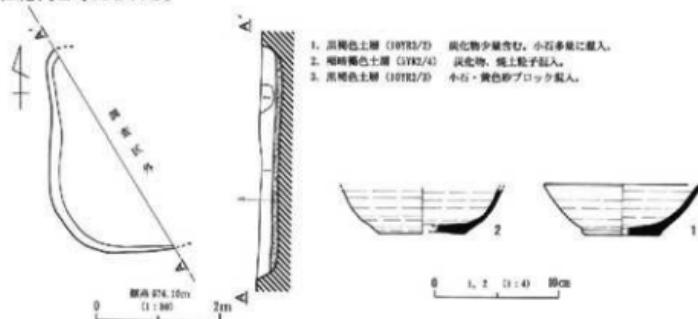
第95表 H25号住居址出土遺物観察表

(26) H26号住居址 (第158図、写真図版二十一)

本住居址は、調査地点B区南側であるカ-89、キ-88,89Grに位置する。残存状態は東側2/3が調査区域外となる。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁1.46m(検出)・西壁3.10mで、壁高さは西壁で最大21cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で2.59m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは6~11cmで貼られていた。

出土遺物は覆土中から出土したが、少なく、図示できるものは2点のみであった。1と2は須恵器壺でいずれも底部回転系切り離しが施されている。本址の所産時期はこれらの遺物より不確実ではあるが、8世紀代と考えられる。



第158図 H26号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	寸法	材質			備考	出土位置
			内面	外面	文様		
1	須恵器	坪 12.6 (6.2)	4.1 ロクロナデ	火摩	ロクロナデ→底部回転系切り離し	火摩	回転系底
2	須恵器	坪 — (5.8)	5.8 (2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転系切り離し	火摩	回転系底

第96表 H26号住居址出土遺物観察表

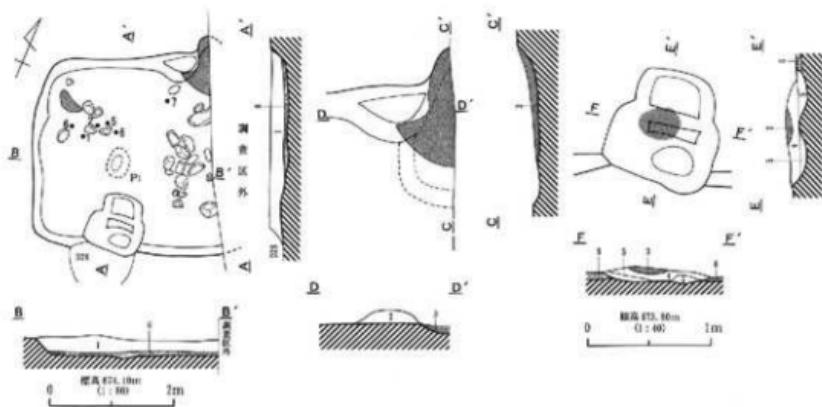
(27) H27号住居址 (第159図、写真図版二十四)

本住居址は、調査地点B区南であるク-85.86、ケ-85.86Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。D28号土坑とH28号住居址と重複関係にあり、新しい方よりD28号土坑→H27号住居址→H28号住居址となる。

形態は東西方向に長い長方形を呈すると考えられる。カマドは北壁に造られている。住居址の主軸方位はN-22°-Wを測る。規模は北壁2.50m(検出)・南壁2.98m(検出)・西壁2.66mで、壁高さは北壁で最大22cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で7.60m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であるが、図にも示したように拳大から人頭大の川原石が多く床面より浮いた状態で検出された。床は全体的に硬質で、特にカマド周辺は硬かった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~8cmで貼られていた。ピットは掘り方時の検出も含め、1箇所が確認された。規模はP1が径46cm・深さ3cmを測る。

本址のカマドは北壁中央に造されていた。煙道部は住居址壁よりあまり飛び出さないタイプで、煙道の長さは57cmを測る。袖は左袖のみの検出で、暗褐色土を構築土としていた。火床部は燃焼部から全体に広がっており、炭化物を多量に含むが硬質化はしていなかった。また、本址は南壁際に焼土塊が検出された。焼土下は不定形の土坑状掘り込みが検出され、深さは14cmを測る。

出土遺物は礫群に混じって多く出土した。1は須恵器蓋であり天井部は回転ヘラケズリを施す。2は



1. 黄褐色土層 (107B2/2) 黄色砂質ブロック多量に混入し、小石を含む。

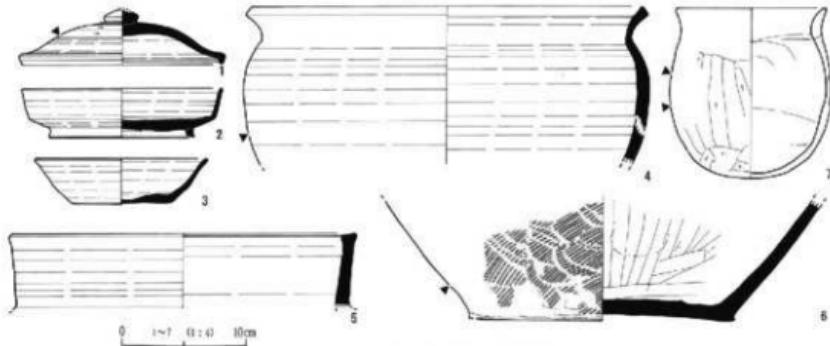
2. 墓褐色土層 (107B2/4) 黄色ローム粒子多量に混入し、炭化物微少含む。

3. ぶい赤褐色土層 (STR1/0) 烧土・炭化物多量に混入。

4. 黄褐色土層 (107B2/3) 烧土ブロック少量含み、炭化物を含む。

5. 黄褐色土層 (107B2/2) 炭化物少量含む。

6. 墓褐色土層 (107B2/3) 小石・黄色砂質ブロック混入。



第159図 H27号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量		成形・調節・文様			考	出土位置
			上側面	下側面	内面	外	面		
1	酒器	壺	16.0	2.8	(4.0)	ロクロナデ 自然断材着	ロクロナデ→天井唐破軸へラケズリ→ツミキ粘付	完全実相	13.5cm
2	酒器	高台壺	16.2	11.7	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ→底座切削系切り後 規則ハラケズリ→高台	回転実相	14cm
3	酒器	壺	13.8	8.0	3.6	ロクロナデ 火捺	ロクロナデ→ 底座切削(未切り方向不明) 丸棒	回転火捺 一部実相	N区
4	酒器	壺	32.4	—	(12.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転火捺	II区
5	酒器	壺	27.8	—	(6.0)	ロクロナデ 自然断材着	ロクロナデ 自然断材着	回転実相	3.4cm
6	酒器	壺	—	21.4	(9.7)	ロクロナデ	前縁ハラキ 砂呑ナデ	完全実相	12.5~16cm (II)
7	土鍋	小鉢型	13.1	7.0	13.6	ロクロコナデ→ 削削へラケズリ→底部へラケズリ	ロクロコナデ→削削→底部へラナデ	完全実相 壁斜 斜面	9cm

第97表 H27号住居址出土遺物観察表

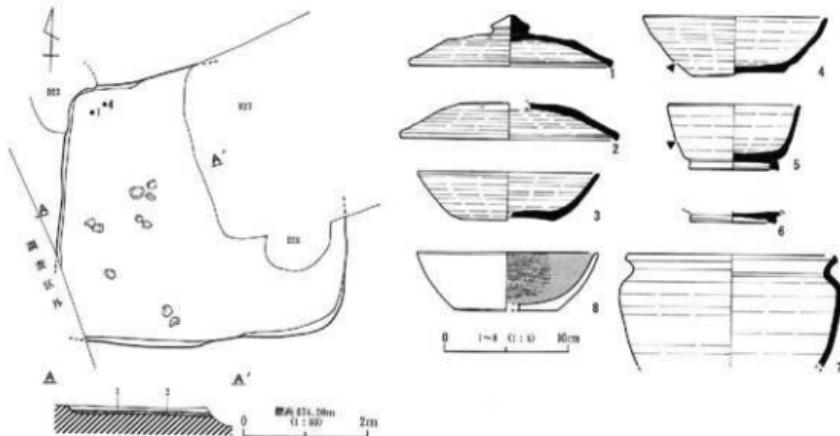
須恵器高台壺で、床面より14cm浮いた状態で出土した。3は須恵器壺で覆土中の出土である。一部胎土が赤化している。4は須恵器の広口壺と考えられる。5は須恵器の広口の甕か壺と考えられる。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部に面取りがある。6は須恵器甕の底部から胴部下半である。底部内面には当て具痕と考えられる跡が顕著に残る。7は土師器の小型甕でカマド前面の床面上から出土した。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半の所産時期が考えられる。

(28) H28号住居址 (第160図、写真図版二十二・二十三)

本住居址は、調査地点B区南であるク-86、ケ-85.86.87Grに位置する。残存状態は南西コーナーが調査区域外に、東側がH27号住居址によって削平されている。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.92m(残存)・南壁3.96m(残存)4.43m(推定)・西壁2.73m(検出)3.92m(推定)・東壁1.66m(残存)で、壁高さは西壁で最大12cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で11.57m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~7cmで貼られていた。



1. 黒褐色土器 (H282/2) 磁粒子少、小石多量混入。

2. 黒褐色土器 (H283/3) 小石多量混入。

第160図 H28号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	算 算	法 線			底 形・ 高 度・ 実 横			圖 号	出土位置
			U断面	北側側面断面	東	西	外	内		
1	須恵器 壺	16.1	3.0	4.1	ロクロナデ	火拂	ロクロナデ→火拂側面断面へラケズリ→ つまら點付 火拂	完全実測	16m B区 D23 H27-E16	
2	須恵器 壺	17.4	—	13.9	ロクロナデ	火拂	ロクロナデ→火拂側面断面へラケズリ→火拂	回転実測	8m	
3	須恵器 壺	14.6	7.4	5.8	ロクロナデ	火拂	ロクロナデ→ 内凹側面角切り(方向不明) 火拂	回転実測	8m	
4	須恵器 壺	14.9	7.6	4.8	ロクロナデ	火拂	ロクロナデ→底盤が側面切り 大き →付西台 火拂、自然剥離付面	完全実測 一部未測	1m H27-E16	
5	須恵器 高台壺	16.7	7.2	8.2	ロクロナデ		ロクロナデ→底盤が側面切り 大き →付西台 火拂、自然剥離付面	完全実測	8m	
6	須恵器 長柄瓶?	—	6.9	0.90	ロクロナデ		底盤表面→回転ヘラケズリ→付轟骨 自然剥離付面	完全実測	8m	
7	須恵器 壺	17.0	—	0.60	ロクロナデ		ロクロナデ 自然剥離付面	回転実測	8m	
8	土師器 壺	14.6	8.2	4.7	ミガキ	黒色磨拭	底盤半持ちヘラケズリ	回転実測 外面実測	8m	

第98表 H28号住居址出土遺物実測表

出土遺物は櫻土を中心多く出土した。1と2は須恵器蓋で、1はD23号土坑とH27号住居址から出土した破片と接合関係にある。3と4は須恵器坏である。いずれも底部回転糸切り離してある。4はH27号住居址出土の破片と接合関係にあるが、本体の大きな破片は床面より1cmほど浮いた状態で出土している。5は須恵器の高台坏である。口縁部が直立気味に立ち上がる小振りのタイプである。6は器厚が薄く、須恵器の小型の長頸壺の底部部分と考えられる。周辺部を丁寧に打ち欠いていることから何らかの転用の可能性がある。7は須恵器の広口壺である。8は土師器坏で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。

本址はこれらの遺物より、8世紀後半の所産時期が考えられる。

第2節 挖立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址 (第161図、写真図版二十五)

本址は、調査地点A区中央部であるC-19.20、D-18.19.20Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。また、H3号住居址とF2号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址が一番新しい。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-8°-Wを示す。規模は桁行4.46m (P1～P3)・梁行2.08m (P1～P4)で、桁行柱間は2.14～2.32mを測る。柱穴の形態はいずれもほぼ方形である。ピットの規模はP1が径91cm・深さ55cm、P2が径112cm・深さ72cm、P3が径150cm・深さ56cm、P4が径84cm・深さ53cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。また、P1からP2の間にはいわゆる布掘り状の掘り込みが検出された。

本址よりの、出土遺物は図示した礫が一点出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(2) F2号掘立柱建物址 (第161図、写真図版二十五)

本址は、調査区A区中央部であるD-18.19Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN°を示す。規模は桁行3.65m (P1～P3)・梁行1.64m (P1～P4)で、桁行柱間は1.75～1.90mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ27cm、P2が径48cm・深さ15cm、P3が径64cm・深さ22cm、P4が径77cm・深さ29cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址よりの出土遺物はなく、よって本址の帰属時期も不明である。

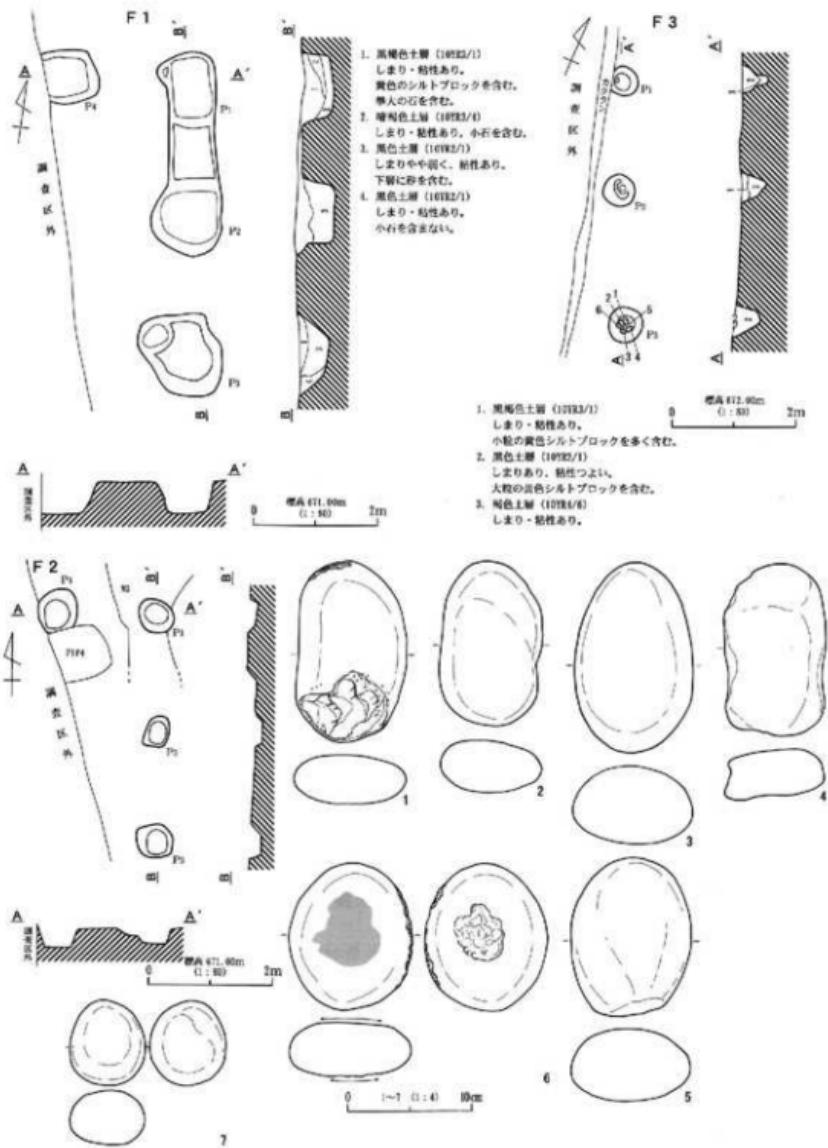
(3) F3号掘立柱建物址 (第161図、写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるラ-17.18Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は南北に長い側柱式建物址と考えられる。軸方位はN-24°-Wを示す。規模は桁行3.90m (P1～P3)で、桁行柱間は1.70～2.20mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径48cm・深さ27cm、P2が径52cm・深さ43cm、P3が径57cm・深さ47cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

No.	種別	種類	柱(柱頭)直径(横)×柱頭高(横)	成形・構造・文様				備考	出土位置
				内	外	内	外		
5	須恵器	蓋	—	—	当貝版→ナゲ	自然輪付器	崩落タタキ	折本	F12 P3
No.	種別	種類	柱(柱頭)直径(横)×柱頭高(横)	内	外	内	外	備考	出土位置
1	縞み物石	安山岩	完形	14.6	8.9	4.0	790.00	所見	出土位置
2	縞み物石	輝石安山岩	完形	13.2	8.3	4.3	620.00		F3 37.5cm
3	縞み物石	溶結凝灰岩	完形	15.3	9.6	6.5	1110.00		F3 36.5cm
4	縞み物石	輝石安山岩	完形	13.7	8.2	3.8	700.00		F3 41cm
5	縞み物石	溶結凝灰岩	完形	12.7	9.6	5.8	840.00		F3 32.5cm
6	縞み物石	溶結凝灰岩	完形	11.8	9.8	4.4	610.00	下面に擦り痕	F3 37.5cm
7	縞	輝石安山岩	6.8	6.1	4.6	231.91			F1

第99表 掘立柱建物址出土遺物観察表



第161図 F 1~3号掘立柱建物址及び出土遺物実測図

本址からの出土遺物は、図示したようにP3より6点の編み物石と考えられる礫群がまとまって出土した。またP2より土師器壺片1点、武藏甕と呼ばれる土師器甕片1点が出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(4) F 4号掘立柱建物址 (第162図、写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるモ-32.33、ヤ-32.33Grに位置する。残存状態は良好であったが、ピットの間隔は不揃いであった。T2号特殊遺構とH9号住居址と重複関係にあるが、本址が一番新しい。

形態は南北方向に長軸を持つ1間×2間の側柱式建物址である。輪方位はN-5°-Wを示す。ピット間には囲まれた面積は8.75m²を測る。規模は桁行3.50m (P2～P4)・梁行2.50m (P1～P2)で、桁行柱間は1.31～2.19m・梁行柱間は2.42～2.50mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径23cm、P2が径29cm・深さ14cm、P3が径24cm・深さ18cm、P4が径28cm・深さ21cm、P5が径29cm・深さ15cm、P6が径20cm・深さ32cm、P7が径32cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より出土遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

(5) F 5号掘立柱建物址 (第162図、写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるヤ-31Grに位置する。形態は残存状況から柵列的な柱列とすべきかもしれない。

形態は南北方向に柱列を検出した。輪方位はN-13°-Wを示す。規模は2.70m (P1～P3)で、ピット間は1.26～1.44mを測る。形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径43cm・深さ24cm、P2が径45cm・深さ19cm、P3が径40cm・深さ19cmを測る。

本址からの出土遺物は、P3より内面黒色処理を施した土師器壺片が1点出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(6) F 6号掘立柱建物址 (第163図、写真図版二十五)

本址は、調査区B区北側であるモ-30、ヤ-30.31Grに位置する。形態は残存状況から柵列的な柱列とすべきかもしれない。

形態は東西方向に柱列を検出した。輪方位はN-81°-Eを示す。規模は2.97m (P1～P3)で、ピット間は1.39～1.58mを測る。形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径51cm・深さ41cm、P2が径52cm・深さ24cm、P3が径48cm・深さ23cmを測る。

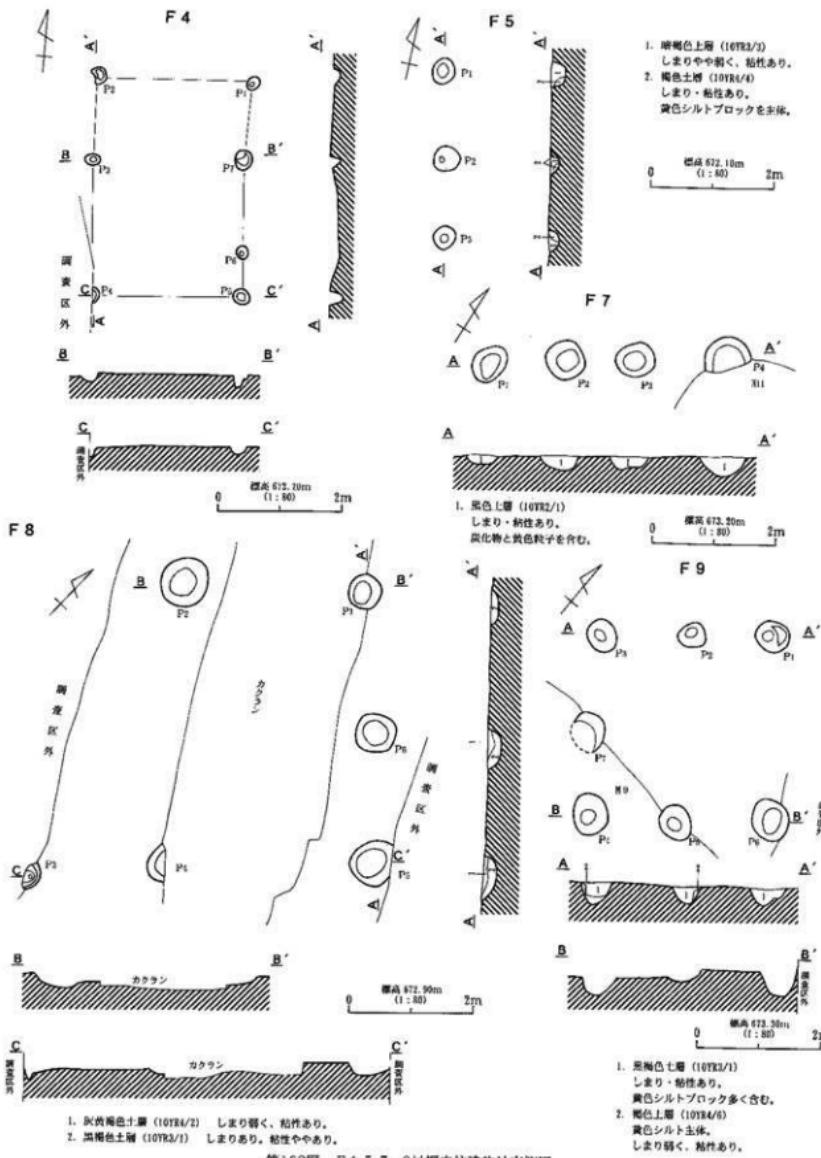
本址からの出土遺物は、P1より内面黒色処理を施した土師器壺片が2点と上師器甕片が出上したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(7) F 7号掘立柱建物址 (第162図、写真図版二十五)

本址は、調査区B区南側であるナ-61.62、ニ-62Grに位置する。形態は残存状況から柵列的な柱列とすべきかもしれない。

形態は東西方向に柱列を検出した。輪方位はN-55°-Eを示す。規模は3.87m (P1～P4)で、ピット間は1.09～1.52mを測る。形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径64cm・深さ18cm、P2が径62cm・深さ26cm、P3が径63cm・深さ24cm、P4が径75cm・深さ35cmを測る。

本址からの出土遺物は、P4より古墳時代に帰属する土師器壺片が1点出土したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



第162図 F 4・5・7～9号掘立柱建物址実測図

(8) F 8号掘立柱建物址 (第162図、写真図版二十六)

本址は、調査区B区中央部であるヌ-57.58.59、ネ-58Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。また、H13号住居址と重複関係にあり、本址が新しい。

形態は東西方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-44°-Wを示す。規模は桁行5.49m (P3～P5)・梁行4.44m (P1～P5)で、桁行柱間は2.15～3.34mを測る。柱穴の形態はいずれもほぼ円形である。ピットの規模はP1が径55cm・深さ17cm、P2が径80cm・深さ23cm、P3が径46cm・深さ30cm、P4が径63cm・深さ18cm、P5が径76cm・深さ26cm、P6が径69cm・深さ24cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址からの出土遺物はP3より上飾器片3点が出土したのみある。よって本址の帰属時期は不明である。

(9) F 9号掘立柱建物址 (第162図、写真図版二十六)

本址は、調査区B区南側であるツ-66.67、テ-66Grに位置する。残存状態は良好であった。M9号溝状遺構と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は東西方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-39°-Wを示す。ピットに囲まれた面積は8.97m²を測る。規模は桁行2.97m (P4～P6)・梁行3.02m (P1～P6)で、桁行柱間は1.39～1.58mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径55cm・深さ29cm、P2が径44cm・深さ27cm、P3が径55cm・深さ38cm、P4が径68cm・深さ34cm、P5が径60cm・深さ41cm、P6が径70cm・深さ39cm、P7が径66cm・深さ19cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より出土遺物はなく、よって本址の帰属時期も不明である。

(10) F 10号掘立柱建物址 (第163図、写真図版二十六)

本址は調査区B区中央部であるセ-76、ゾ-75.76Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-8°-Wを示す。規模は桁行6.61m (P2～P5)・梁行2.59m (P1～P2)で、桁行柱間は1.99～2.33mを測る。柱穴の形態はいずれも隅丸の方形である。ピットの規模はP1が径105cm・深さ38cm、P2が径113cm・深さ41cm、P3が径92cm・深さ25cm、P4が径74cm・深さ20cm、P5が径68cm・深さ28cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。また、P1からP2の間にはいわゆる布掘り状の掘り込みが検出された。

本址からの出土遺物は図示できなかったが、須恵器坏・蓋・甕片・上飾器坏・甕片等が出土した。これらはいずれも奈良・平安時代に帰属する土器片である。しかし、本址の時期は不明である。

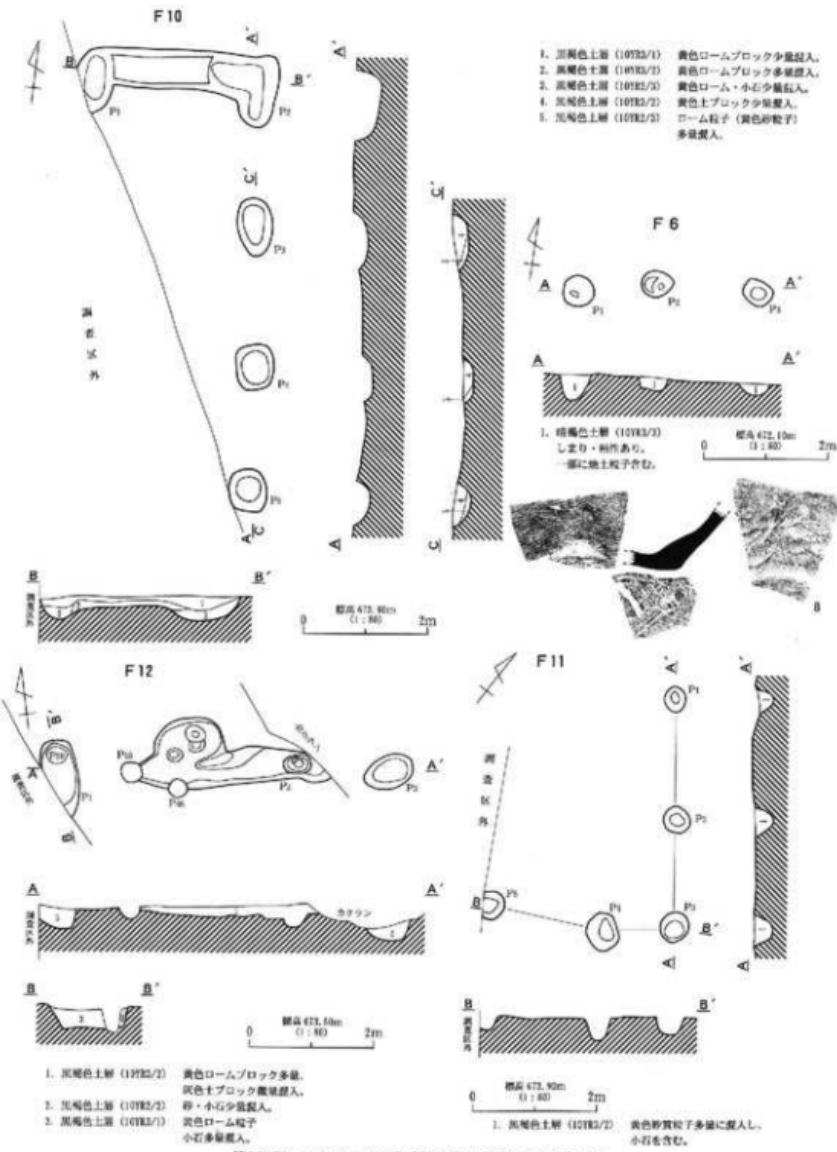
(11) F 11号掘立柱建物址 (第163図、写真図版二十六)

本址は、調査区B区南端であるク-87.88Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となり、ピットの配列も不規則である。

形態は南北方向に長い側柱式建物址である。軸方位はN-37°-Wを示す。規模は桁行3.70m (P1～P3)・梁行3.05m (P3～P5)で、桁行柱間は1.75～1.95m、梁行柱間は1.07～1.98mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径42cm・深さ30cm、P2が径44cm・深さ33cm、P3が径48cm・深さ32cm、P4が径62cm・深さ35cm、P5が径45cm・深さ26cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。本址より、出土遺物はP2とP3から須恵器甕片1点ずつが出士したのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(12) F 12号掘立柱建物址 (第163図)

本址は、調査区B区南側であるゾ-73.74、タ-73.74Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外と



第163図 F6~12号掘立柱遺物址及び出土遺物実測図

なる。形態は東西方向に柱列を検出した。軸方位はN-84°-Wを示す。規模は5.36m (P1~P3) で、ピット間は1.02~1.52mを測る。形態はいずれも不整形である。ピットの規模はP1が径125cm・深さ33cm、P2が径45cm・深さ22cm、P3が径81cm・深さ34cmを測る。本址の出土遺物は順恵器甕があった。

第3節 土 坑

(1) D 2号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区A区のD-15Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は隅丸の方形である。規模は長軸0.70m (検出)・短軸0.87m・深さ40cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(2) D 3号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区A区のD-14、E-14Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は長軸1.18m (検出)・短軸0.60m (検出)・深さ34cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) D 4号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区B区中央のハ-53.54Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-31°-Eを示す。規模は長軸2.40m・短軸2.06m・深さ45cmを測る。本址からの出土遺物は図示した黒曜石の石核が1点出土したのみである。

(4) D 5号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区B区中央部のテ-65.66、ト65.66Grに位置する。残存状態は良好である。H19号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。形態は梢円形で、長軸方位はN-72°-Wを示す。規模は長軸1.68m・短軸1.12m・深さ16cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点があつたのみである。

(5) D 6号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区中央部のツ-67Grに位置する。残存状態は南側をカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-34°-Wを示す。規模は長軸1.30m・短軸0.87m (検出)・深さ11cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(6) D 7号土坑 (第164図、写真図版二十七)

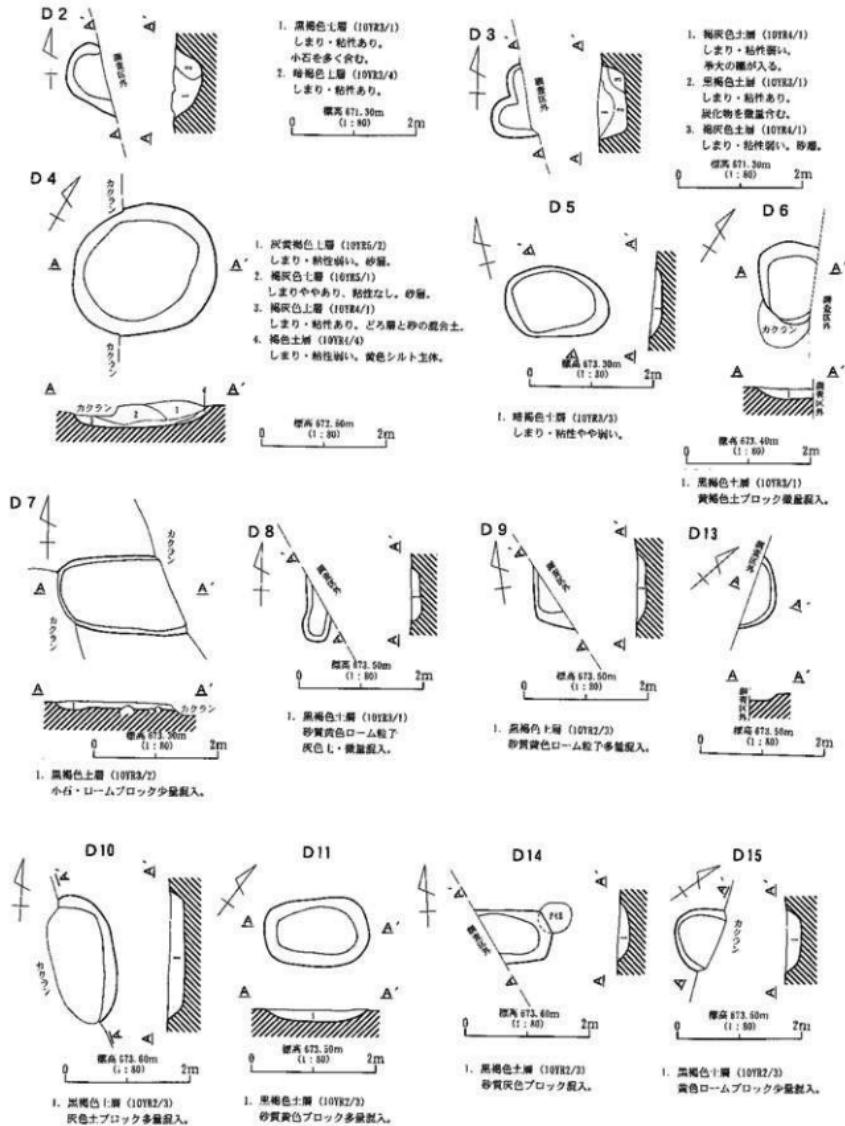
本址は、調査区B区南側のツ-68Grに位置する。残存状態は東側と西側をカクランによって削平されている。形態は隅丸方形で、長軸方位はN-90°-Wを示す。規模は長軸1.83m (残存)・短軸1.24m・深さ13cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(7) D 8号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のタ-70Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外となる。形態は不整形で、長軸方位はN-6°-Eを示す。規模は長軸0.68m (残存)・短軸0.44cm (残存)・深さ16cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(8) D 9号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区B区南側のタ-71Grに位置する。残存状態は北側が調査区域外となる。形態は方形である。規模は長軸1.22m (検出)・短軸0.40m (検出)・深さ17cmを測る。本址からの出土遺物は図



第164図 D2~11・13~15号土坑実測図

示した須恵器高台壺がある。口クロ成形の後、底部は回転糸切り離しのあと、高台を貼付している。
本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、奈良・平安時代と考えられる。

(9) D 10号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区B区南側のゾ-72.73Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-13°-Wを示す。規模は長軸2.08m(残存)・短軸1.00m(残存)・深さ29cmを測る。

本址の出土遺物は覆土中より須恵器片、土師器壺・甌片が出土した。図示した須恵器円面壺は脚全体の1/8~1/6程が残存し、長方形の透窓が確認できる。透窓が等間隔とすると6~7個と推定出来る。腹部はほとんど残存していない。内外面に自然釉の付着が見られる。本硯はこれらの特徴から「圓足円面鏡」の範疇に含まれるものと考えられる。本址はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、平安時代の所産と考えられる。

(10) D 11号土坑 (第164図、写真図版二十七)

本址は、調査区B区南側のゾ-74Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸1.65m・短軸1.12m・深さ15cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器壺片、土師器甌片が少量あったのみである。

(11) D 13号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のタ-74Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は円形と考えられ、規模は長軸1.20m(検出)・短軸0.42m(検出)・深さ10cmを測る。本址より出土遺物は須恵器壺片、土師器片が出土したのみである。

(12) D 14号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のゾ-74.75、タ-74.75Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は楕円形である。規模は長軸1.00m(検出)・短軸0.83m・深さ17cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(13) D 15号土坑 (第164図)

本址は、調査区B区南側のゾ-74Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は不明で、長軸方位はN-28°-Wを示す。規模は長軸1.04m(残存)・短軸0.73m(残存)・深さ27cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器壺片、土師器片等があった。図示した遺物は須恵器蓋の端部で返りの弱いタイプである。

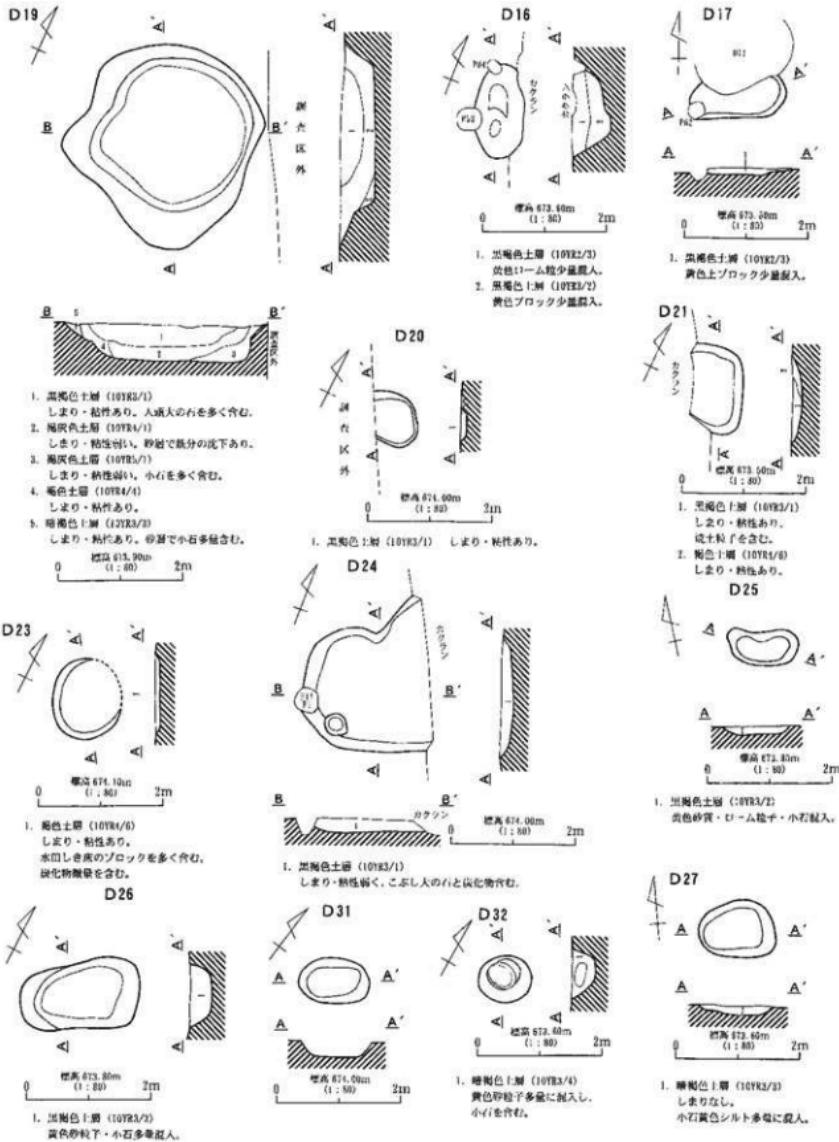
(14) D 16号土坑 (第165図、写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のゾ-73Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形であり、底面はテラスとピット状になる。規模は長軸1.50m・短軸0.80m・深さ62cmを測る。

本址より出土遺物は、須恵器蓋片1点・壺片3点があったのみである。

(15) D 17号土坑 (第165図)

本址は、調査区B区南側のゾ-74Grに位置する。残存状態は北側をD 11号土坑により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-85°-Eを示す。規模は長軸1.54m・短軸0.62m・深さ6cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



第165図 D 16・17・19・21・23~27・31・32号土坑実測図

(16) D 19号土坑 (第165図、写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のケ-84.85、コ-84Grに位置する。残存状態は良好である。形態は底面は円形で、長軸方位はN-25°-Wを示す。規模は長軸3.30m・短軸3.10m・深さ59cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した須恵器坏や青磁片があった。4は須恵器長頸壺の頸部である。5は須恵器坏の底部、6と7は須恵器高台坏の底部である。13は龍泉窯系の青磁碗の底部である。14は中世常滑の片口鉢で2/3程が残存している。白色を基調に薄い橙色が入る。15は常滑の壺底部と考えられ。本址はこれらの出土遺物から、所産時期は中世で13世紀代を中心とする時期が考えられる。

(17) D 20号土坑 (第165図、写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のコ-85Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は不整形で、長軸方位はN-61°-Wを示す。規模は長軸1.00m（検出）・短軸0.75m・深さ12cmを測る。

本址より出土遺物は、須恵器甕片1点と須恵器坏片1点が出土したのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(18) D 21号土坑 (第165図、写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のゾ-72、タ-72Grに位置する。残存状態は西側がカクランにより削平されている。形態は長方形で、長軸方位はN-24°-Wを示す。規模は長軸1.40m・短軸0.82m（残存）・深さ16cmを測る。出土遺物は図示した8の土師器甕があった。底部から胴部下半で、外面は削りを施す。

(19) D 23号土坑 (第165図、写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のケ-85.86、コ-85.86Grに位置する。残存状態は良好である。形態は楕円形で、長軸方位はN-22°-Wを示す。規模は長軸1.28m・短軸1.10m・深さ10cmを測る。

本址の出土遺物は、須恵器甕片2点・坏片3点、土師器甕片4点が出土したのみである。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、不確実であるが平安時代と考えられる。

(20) D 24号土坑 (第165図、写真図版二十八)

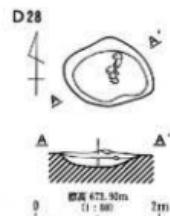
本址は、調査区B区南側のケ-87Grに位置する。残存状態は東側がカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-26°-Wを示す。規模は長軸2.48m（残存）・短軸2.10m・深さ21cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片、土師器甕片の他に、図示した12.16.17の龍泉窯系の青磁碗が出土している。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、中世で13世紀代と考えられる。

(21) D 25号土坑 (第165図)

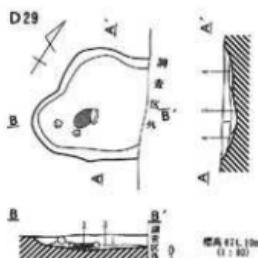
本址は、調査区B区南側のコ-83.84、サ-83.84Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-77°-Wを示す。規模は長軸1.10m・短軸0.54m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点があつたのみである。

(22) D 26号土坑 (第165図、写真図版二十八)

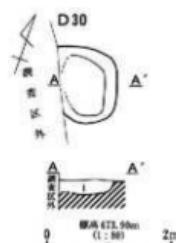
本址は、調査区B区南側のケ-84、コ-83.84Grに位置する。残存状態は良好である。形態は長方形で、長軸方位はN-59°-Wを示す。規模は長軸1.90m・短軸1.02m・深さ38cmを測る。本址より出土遺物は無く、本址の帰属時期は不明である。



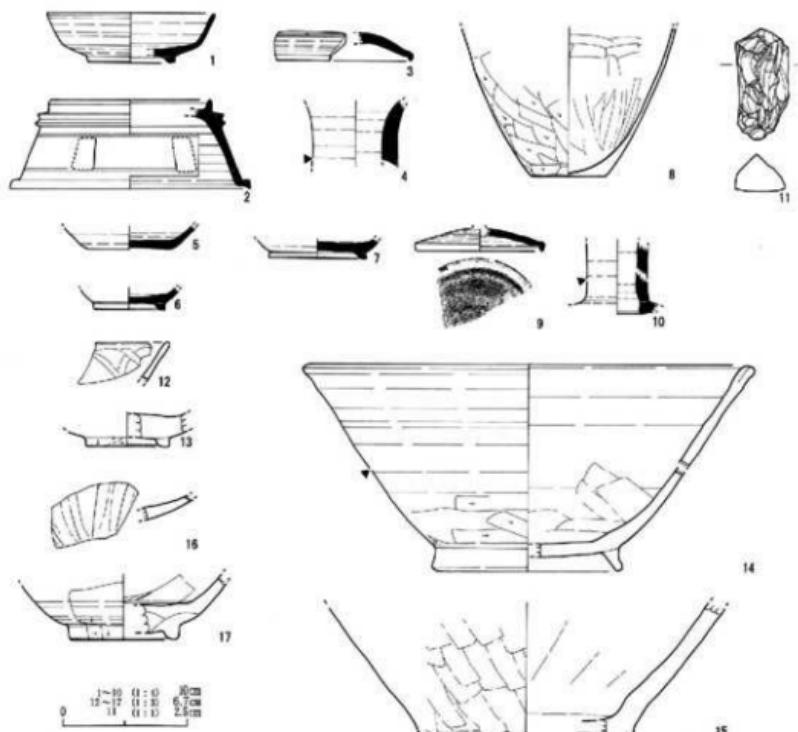
1. 黒褐色土層 (D1032/1)
炭化物・炭化粒子多量混入。
燒土粒子微量含む。
2. 棕褐色土層 (D1032/2)
しまり・粘性あり。
炭化物微量含む。下層に軽粉の沈下あり。



1. 黑褐色土層 (D1032/3) 黄色砂質シルト多く含む。炭少量混入。
2. 棕褐色土層 (D1032/4) 炭化物を含む。
3. 黑褐色土層 (D1032/5) しまり・粘性あり。炭化物焼土粒子含む。
4. 黑褐色土層 (D1032/6) しまり・粘性あり。炭化物・小心を少量含む。



1. 黑褐色土層 (D1032/7)
黄色シルト多量に含み小石が混在。



第166図 D28~30号土坑及び出土遺物実測図

(23) D 27号土坑 (第165図、写真図版二十八)

本址は、調査区B区南側のス-79Grに位置する。残存状態は良好である。形態は隅丸方形で、長軸方位はN-89°-Wを示す。規模は長軸1.20m・短軸0.92m・深さ15cmを測る。

本址からの出土遺物は土師器片2点が出土したのみである。

(24) D 28号土坑 (第166図、写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のク-86、ケ-86Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-87°-Wを示す。規模は長軸1.45m・短軸1.10m・深さ21cmを測る。本址は2層に分かれ、1層中に炭化物を多量に含んでいた。

本址からの出土遺物は、図示した須恵器蓋と長頸壺がある。10の須恵器長頸壺は土坑底面より出土した。これらの出土遺物から、本址は平安時代に帰属すると考えられる。

(25) D 29号土坑 (第166図、写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のキ-88Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は不整形である。長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸1.85m(検出)・短軸1.78m・深さ17cmを測る。本址は2層上面に多量の炭化物と焼上が検出された。

本址からの出土遺物は須恵器片1点・土師器片4点のみである。D 28号土坑と形態や覆土の状況が似ていることから、所産時期は同じく平安時代に帰属すると考えられる。

(26) D 30号土坑 (第166図、写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のコ-84、サ-84Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は方形で、長軸方位はN-26°-Wを示す。規模は長軸1.20m・短軸0.90m(検出)・深さ19cmを測る。本址より出土遺物はなく、本址の帰属時期は不明である。

No.	種別	基盤	法縫 〔基盤 縫合部 縫合部〕	内 容	成形・評定・文様		備考	出土位置	
					内 容	外 面			
1	須恵器	壺合环	13.5	7.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ→透感凹輪切口→付高台 火拂	透感火拂	D9
2	須恵器	円筒根	12.8	19.3	7.1	ロクロナデ	自然輪付着 或は3条を施した浅溝をしる自然輪付着	透感火拂 透かしは等間隔に あるものと想定すると6~7	D10
3	須恵器	直	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ→井型凹輪根へラケズリ	透感火拂	D15
4	須恵器	直根壺	-	-	(5.3)	ロクロナデ	自然輪付着	透感火拂	D19-I区
5	須恵器	坪	-	-	6.6	(1.9) ロクロナデ	ロクロナデ→透感凹輪根へラケズリ	透感火拂	D19-II区
6	須恵器	高台坪	-	-	5.8	(1.6) ロクロナデ	火拂	ロクロナデ→透感凹輪根へラケズリ	D19-IV区
7	須恵器	臺合坪	-	2.8	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ→透感凹輪根切り→付高台 →付高台 火拂	透感火拂	D19
8	I 須恵器	直	-	6.0	(11.9) ハラナデ		面部ヘラケズリ 透感ヘラケズリ	透感火拂	D21
9	須恵器	直	10.2	-	(1.6) ハラナデ		ロクロナデ→透感凹輪根へラケズリ	透感火拂 ハラナデ有り	D28
10	須恵器	折腰壺	-	-	(5.7)	ロクロナデ	自然輪付着	透感火拂	0cm D28
12	青磁	直	-	-	(2.5)	施釉	施釉 透け文	横川支那 越後 13C	D24-II区
13	青磁	直	-	5.0	(2.1)	施釉	底部切り離し腹付高台 同然へラケズリ 施釉 透け文?	透感火拂 施釉 梶谷 13C	D19 III区
14	青磁	片口鉢	27.0	11.4	12.3	ロクロナデ	高脚ナデ	透感火拂 高脚 こね体 透感凹輪切口付高台 ナデ	D19-I ~ IV区 13C中
15	青磁	直	-	-	(7.9)	ロクロナデ	自然輪?	透感火拂 常滑	D19-II ~ IV区
16	青磁	-	-	-	(1.6)	施釉	施釉 透け文	透感火拂 高脚 13C	D24-IV区
17	青磁	直	-	-	6.6	(3.9) ロクロナデ	高脚 透脚 透け文	透感火拂 高脚 透け文 透脚 透け文	D24-II区
18	器種	青磁	既存半	最大径	最大幅	施釉半	透感半	透感見	出土位置
11	剖片	馬蹄石	-	2.2	1.0	0.8	1.51	-	D4

第100表 土坑出土物観察表

(27) D 31号土坑 (第165図、写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のク-88Grに位置する。残存状態は良好で、形態は橢円形である。長軸方位はN-52°-Eを示す。規模は長軸1.11m・短軸0.72m・深さ24cmを測る。

本址からの出土遺物は須恵器片1点、土師器壺片1点があつたのみで、本址の帰属時期は不明である。

(28) D 32号土坑 (第165図、写真図版二十九)

本址は、調査区B区南側のス-79Grに位置する。H24号住居址と重複関係にあり、本址の方が新しい。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-60°-Eを示す。規模は長軸0.85m・短軸0.76m・深さ34cmを測る。また、本址は底面より浮いた状態で、大型の河原礫が検出された。

本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

第4節 溝状遺構

(1) M 1号溝状遺構 (第167・169図、写真図版三十)

本址は、調査区A区中央のC-18.19,D-16.17.18,E-15.16.17.18Grに位置する。残存状態は西側と東側が調査区域外となる。H3号住居址・M3号溝状遺構と重複関係にあるが、本址が一番新しい。

形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ11.5m(検出)・幅98~200cm・深さ5~48cmを測る。

本址からの遺物は、幅広い時期のものが出土した。1は須恵器蓋で、つまみ部がやや扁平となっている。2は須恵器壺、3は須恵器の高台壺である。4は灰釉陶器壺の肩部の破片と考えられる。釉が多い量に付着している。5は土師器壺で、器厚の薄さなどからいわゆる「武藏壺」と呼ばれるものである。6は土師器鉢である。成形技法や形態は須恵器と同じであるが、色調と焦斑の存在から土師器とした。7は磨き石と考えられる。8は在地前山焼の陶器であり、皿と考えられる。本址は多様な時期の遺物が出土する事、又曇土中に水田耕作土が混入していた事から、所産時期は近世と考えられる。

(2) M 2号溝状遺構 (第167図、写真図版三十)

本址は、調査区A区中央のD-15、E-15Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ1.72m(検出)・幅57~71cm・深さ6~27cmを測る。本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) M 3号溝状遺構 (第167・169図、写真図版三十)

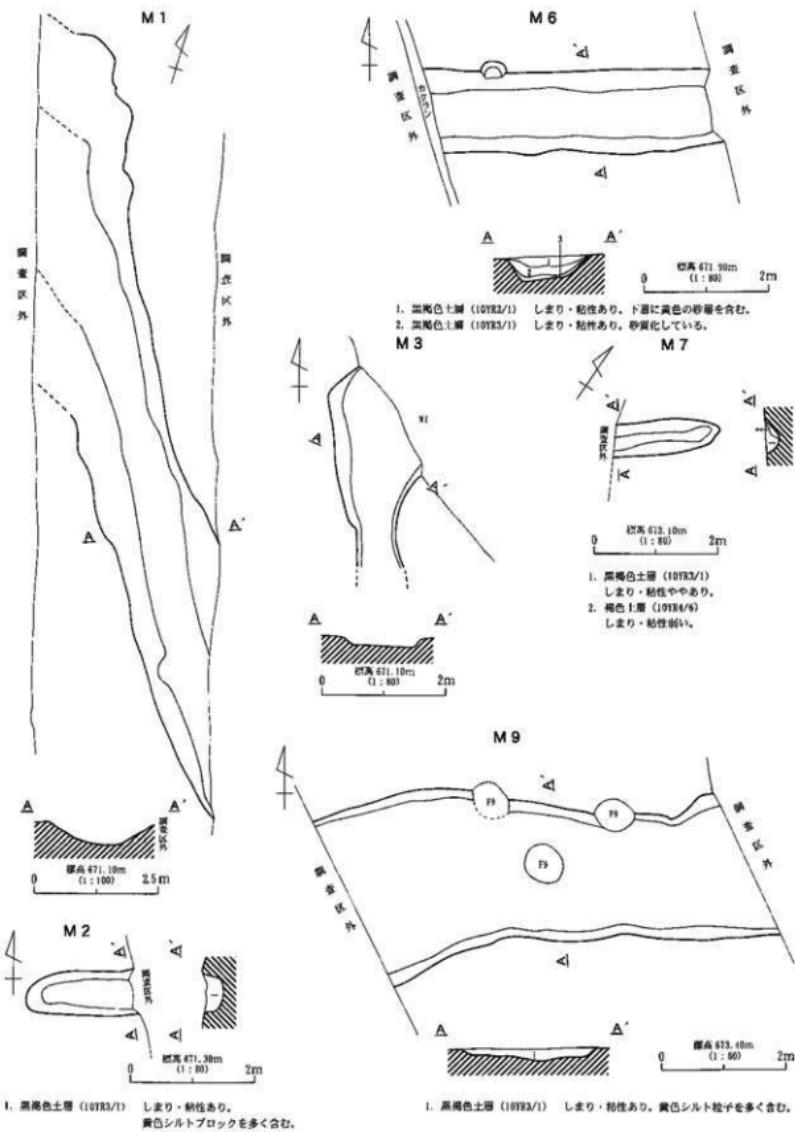
本址は、調査区A区中央のD-18.19Grに位置する。残存状態はM1号溝状遺構により削平されている。H3号住居址やF1号掘立柱建物址と重複関係にあるが、本址の方が新しい。

形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ2.70m(検出)・幅64~200cm・深さ7~26cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した土師器壺がある。口縁部が内湾するタイプで、底部が肥厚している。特徴から古墳時代中期末から後期初頭に帰属する壺と考えられるため、H3号住居址からの混入品と考えられる。よって本址の帰属時期は不明である。

(4) M 5号溝状遺構 (第168・169図、写真図版三十)

本址は、調査区B区のホ-45~46Grに位置する。残存状態は西側は調査区域外となる。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ8.00m(検出)・幅0.8~1.35m・深さ2~21cmを測る。本址からの出土遺物は土師器壺片、須恵器壺・壺片、不明鉄製品があつたのみで



第167図 M1~3.6.7.9号溝状造構造測図

あり、本址の帰属時期は不明である。

(5) M 6 号溝状遺構 (第167・169図、写真図版三十)

本址は、調査区B区北側のラ-16.17、リ-16.17Grに位置する。残存状態は西側と東側は調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。覆土は自然堆積で、規模は長さ4.45m(検出)・幅1.06~1.36m・深さ27~39cmを測る。

本址からの出土遺物は図示した17の須恵器高台壺、18の須恵器壺底部、19の打製石斧があつたが、帰属時期は不明である。

(6) M 7 号溝状遺構 (第167図、写真図版三十)

本址は、調査区B区中央のナ-62、ニ-62Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ1.70m(検出)・幅0.35~0.56m・深さ10~21cmを測る。

本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(7) M 4 号溝状遺構 (第168・169図、写真図版三十)

本址は、調査区B区北側のフ-48~51、ヘ-45~49、ホ-44~46Grに位置する。残存状態は西側と東側は調査区域外となる。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、北端で東側にL字に屈曲する。溝底面は逆台形を呈する。溝底面で流水の痕跡は確認できなかった。規模は長さ25.40m(検出)・幅1.55~2.00m・深さ3~61cmを測る。覆土は上層に砂層が堆積していた。

本址からは多様な遺物が出土した。13は縹文土器深鉢の底部～胴部で、底部には継代痕が付いている。10は縁釉陶碗で底部が残存し、覆土中より出土した。胎土は濃い鼠色である。11は龍泉窯系の青磁碗で、外面に連弁文が施されている。12は東濃系の山茶碗で底部のみ残存していた。本址はこれらの遺物より、13世紀代の所産時期が考えられる。

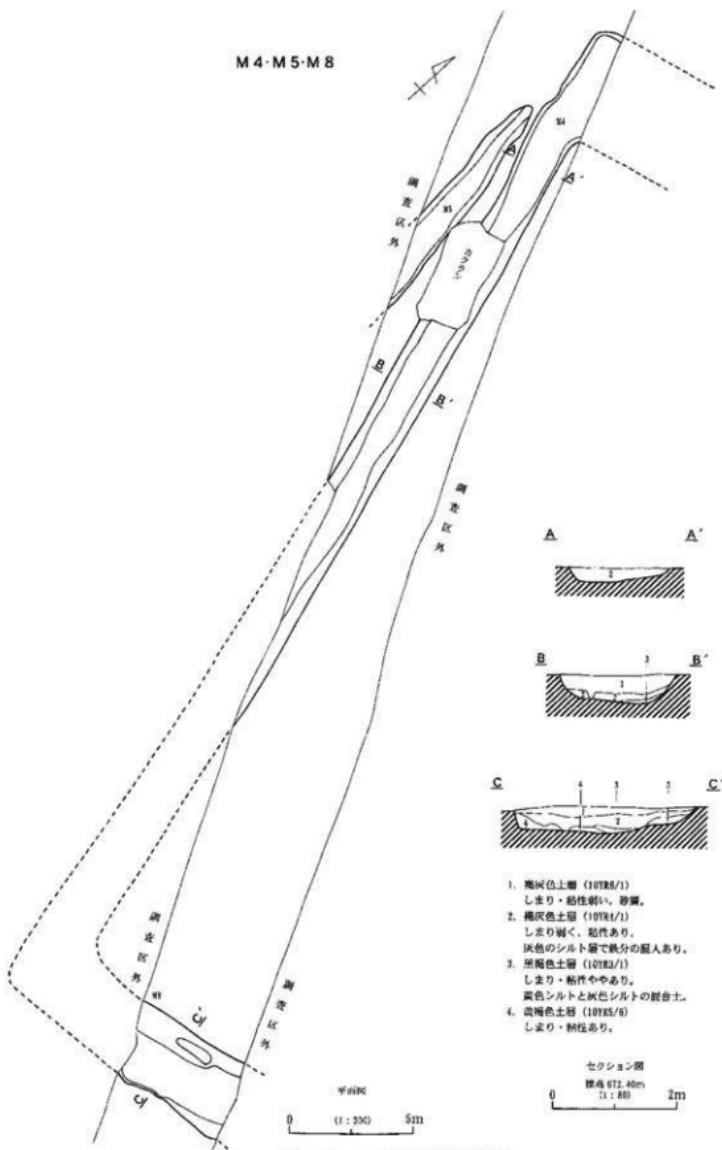
(8) M 8 号溝状遺構 (第168・169図、写真図版三十一)

本址は、調査区B区中央のノ-54、ハ-54Grに位置する。残存状態は東側と西側は調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ4.60m(検出)・幅2.80~3.25m・深さ30~49cmを測る。

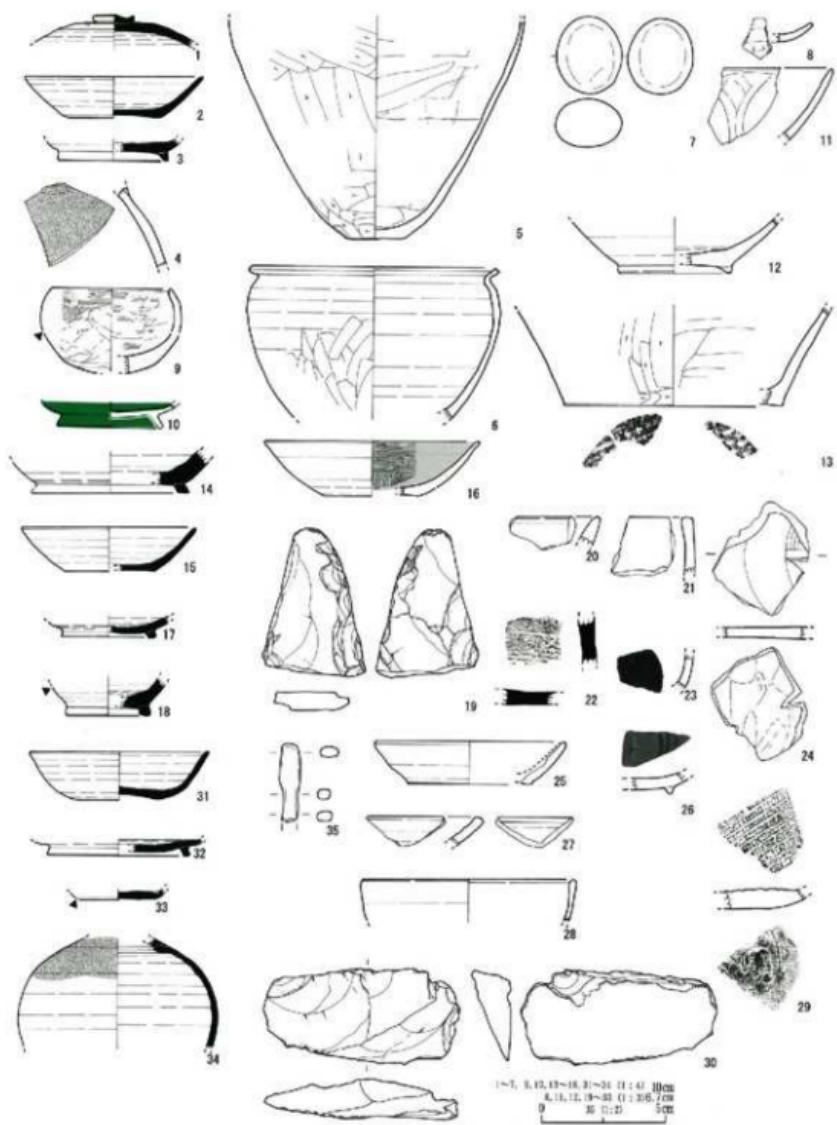
本址からの出土遺物は、時期の多様なものが出土した。20は尾張系の山茶碗の口縁部で、13世紀前半の時期が考えられる。21は土鍋片の口縁部でやや内湾する。22は須恵器のおろし皿で刻みが入る。23は在地産の碗か德利で近世末の所産である。24は土鍋の底部である。25はカワラケで、胎土は白色で良く精錬されていた。26は伊万里染め付け碗で、18世紀末から19世紀前半の資料である。27は唐津の盛り鉢と考えられる。28は在地前山焼と考えられる丸碗である。29は古瀬戸前期様式のおろし皿であり、底部は回転糸切り離しが行われている。30は打製石斧である。

このように本址からは多様な遺物が出土しているが、中世所産の遺物が主体を占めることと、近世の陶磁器類はいずれも覆土上層からの出土であることを考え合わせると、本址の所産時期はM4号溝状遺構と同じく中世と考えられる。

また、本址の性格であるが、第168図に示したようにM4号溝状遺構とM8号溝状遺構はその検出位置からコの字状に繋がる可能性がある。この推定を裏付けるものとして、覆土の酷似と出土遺物の種類の共通があげられる。もしこの推定が可能であれば、M4号とM8号は中世館跡の堀の可能性が指摘できる。なお、コの字に囲まれた一辺は内側で約38m、溝外側で45mを測る。M8号とM4号の溝底面の海拔は671.90mと671.80mで、42m離れて10cmの差異であった。



第168図 M 4.5.8号溝状遺構実測図



第169図 M1.3~6.8.9号溝状墓構出土遺物実測図

(9) M9号溝状遺構 (第167図、写真図版三十)

本址は、調査区B区南側のツ-67、テ-67、ト-67Grに位置する。残存状態は西側と東側は調査区域外となる。F9号掘立柱建物と重複関係にあり、本址の方が古い。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ6.40m(検出)・幅1.94~2.94m・深さ9~19cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土中から多く出土した。31は須恵器壺である。32は須恵器高台壺の底部であり、回転糸切り離しが行われている。33は須恵器壺の底部、34は須恵器長頸壺の肩部であり、自然釉が付着している。

本址はこれらの出土遺物より、奈良・平安時代の所産と考えられる。

No.	種別	器種	計量			成形・調製・文様		備考	出土位置
			口徑(φ)	底径(Φ)	厚さ(δ)	内面	外面		
1	須恵器	壺	-	3.3	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ・井戸縁回転ヘラケズリ→つまみ筋付	完全実測	M1
2	須恵器	片	14.2	7.0	3.5	ロクロナデ 火棒	ロクロナデ・底部山型輪糸切り火棒	回転実測	M1
3	須恵器	高台壺	-	8.9	(1.7)	ロクロナデ 火棒	ロクロナデ・底部山型輪糸切り(方向不明)→付高台 火棒	回転実測	M1
4	火被陶器	兼	-	-	-	ヨコナデ	施釉	破片実測	M1
5	上筋器	要	-	4.6	(17.4)	ヘラナデ	腹部ヘラケズリ 施釉ヘラケズリ	回転実測 庫施	M1
6	下筋器	林	20.2	-	(12.2)	ロクロナデ	ロクロナデ→削ドサ或ヘラナデ	回転実測	M1
8	陶器	在地盤	-	-	(1.1)	ロクロナデ 全面施釉	ロクロナデ 底部山型輪糸切り	破片実測 蔵山?	M1
9	土師器	甕	9.6	-	(6.7)	ヘラナデミガキ	ヘラナデミガキ	回転実測	M3
10	鉢形陶器	碗	-	8.5	(1.9)	施釉	底部回転ヘラケズリ・付高台・施釉	回転実測	M4-B16
11	青磁	碗	-	-	(4.6)	施釉	施釉 文	破片実測 青磁 13C	M4-E16
12	陶器	山茶碗	-	6.8	(3.0)	ロクロナデ 底部ナデ	ロクロナデ 施釉無切り付高台 ナデ	回転実測 青磁	M4-B1区
13	陶器	深鉢	-	17.6	(7.9)	ヘラナデ	側面ヘラケズリ 施絹無代償	回転実測	M4-1区下層
14	須恵器	壺	-	12.7	(3.4)	ロクロナデ 自然輪付着	ロクロナデ・付高台	回転実測	M5
15	須恵器	片	14.4	7.3	3.3	ロクロナデ 火棒	ロクロナデ・底部山型輪糸切り 火棒	回転実測	M5
16	土師器	片	17.2	7.6	4.4	3ガキ・半色追焼	底部山型輪糸切り	回転実測	M5
17	須恵器	高台壺	-	7.6	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ・底端右輪糸切り 付高台 大棒	回転実測	M6
18	須恵器	壺	-	6.5	(3.1)	ロクロナデ	付高台・自然輪付着	回転実測	M6
20	陶器	山茶碗	-	-	(1.9)	ロクロナデ 自然輪付着?	ロクロナデ	破片実測 尾側 13C前半	M4-B1区
21	陶器	土瓶	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	破片実測	M4-E1区
22	須恵器	おろし舟	-	-	-	きざみ入る	ナデ	石本	M4-B1区
23	陶器	箱形桶利	-	-	(2.1)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実測 在地 近世純 18C末~19C	M4-B1区
24	陶器	土鍋	-	-	-	ナデ	ナデ	破片実測	M8
25	土師器	かわらけ	11.5	7.4	2.5	-	底部回転糸切り	回転実測 未確認	M4-B1区
26	陶器	染竹瓶	-	-	(1.0)	施釉	施釉	破片実測 サイ万量 18C末~19C初・規	M8
27	陶器	もり鉢?	-	-	(1.0)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実測 青磁	M8
28	陶器	丸鉢	12.9	-	(2.5)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	回転実測 在地山川近世純	M4-E1区
29	陶器	おろし舟	-	-	(1.0)	ナデ→ハ扶工具できみ	底部山型輪糸切り ナデ	破片実測 古瀬戸 13C 前部破壊	M8
31	須恵器	片	14.4	6.4	3.8	ロクロナデ 火棒	ロクロナデ	回転実測	M4-B1区
32	須恵器	高台壺	-	11.5	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ・底端回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	M4-1区
33	須恵器	片	-	6.1	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ+	完全実測	M4-B1区
34	須恵器	長颈壺	-	-	(8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ 自然輪付着	回転実測	M4-B1区
No.	器種	素材	発存率	最大長	最大幅	最大厚	底 級	所 見	出土位置
7	唐	砂質變灰岩	6.2	3.3	3.0	126.36			M1
19	打製石斧	輝石安山岩	(8.8)	(5.1)	(1.2)	(68.47)	刃部欠損		M6
30	打製石斧	砂質砂岩	5.7	11.7	2.4	141.02			M4-E1区
35	小刀	灰	(3.2)	(0.9)	(0.4)				M5

第101表 溝状遺構出土遺物観察表

第5節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構 (第170図、写真図版三十一)

本址は、調査区A区中央のD-15.16Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北に長軸を持つ不整形で、規模は長軸1.26m・短軸0.86m・深さ15cmを測る。覆土は上層が良く焼けており、2層上面は特に焼けている。

本址からの出土遺物は、図示した3の須恵器四耳壺と5の敲石のみであった。敲石は上面が窪むほどに敲き痕があった。本址の帰属時期は不明である。

(2) T2号特殊遺構 (第170図、写真図版三十一)

本址は、調査区B区北側のモ-31.32、ヤ-32Grに位置する。残存状態は良好である。形態は方形で、規模は北壁2.25m・南壁2.46m・東壁2.81m・西壁2.90mを測る。面積は6.85m²で、長軸方位はN-16°-Wを測る。壁はなだらかに立ち上がり、壁高さは東壁で最大15cmを測る。遺構底面は鉄分が沈下したような赤褐色の硬質化した土で、全体に凹凸が激しかった。

本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(3) T3号特殊遺構 (第170図、写真図版三十一)

本址は、調査区B区南側のコ-82Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北に長軸を持つ不整形で、規模は長軸1.95m・短軸1.33m・深さ12cmを測る。覆土は上層が良く焼けている。

本址からの出土遺物は図示した須恵器類があった。1は須恵器蓋であり、つまみは扁平である。2は須恵器高台坏で、口縁部が直立気味に立ち上がり、身が深いタイプの坏である。4は須恵器蓋の肩部であり、濃い緑色の自然釉が流れるほどかかっている。

本址はこれら出土遺物より奈良・平安時代に帰属すると考えられる。

(4) T4号特殊遺構 (第171図、写真図版三十二)

本址は、調査区B区南側のコ-82.83.84、サ-82.83.84Grに位置する。残存状態は東側と西側が調査区域外となる。また、北側と南側は顯著な掘り込みを持たず、地山面となる。

本址の特徴は北東側に土坑を伴う硬質面の広がりが確認されたことである。この硬質面の広がりは南北8.02m・東西5.47mの広がりで、特に焼土を伴う土坑周辺は硬質化していた。この焼土を伴う土坑は規模が長軸1.83m・短軸1.75m・深さ15cmを測る。焼土は2箇所に分かれており、周辺部から人頭大の川原石が散乱した状態で検出された。しかし、焼土はいずれもカマド火床部のように硬質化はしていないかった。

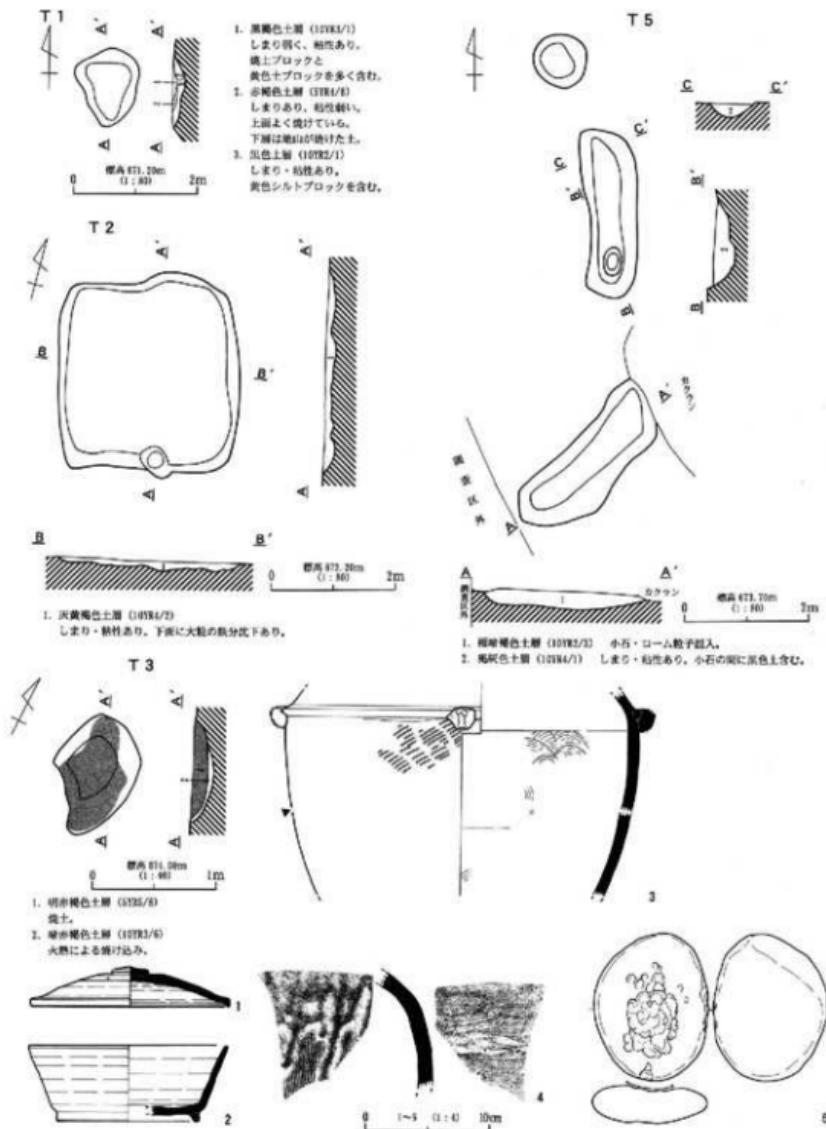
本址からの出土遺物は、6の須恵器蓋と7の須恵器高台坏がある。8は土師器坏で内面黒色処理されている。9~11は須恵器蓋である。9は肩部に自然釉が付着している。11は外面が赤化している。

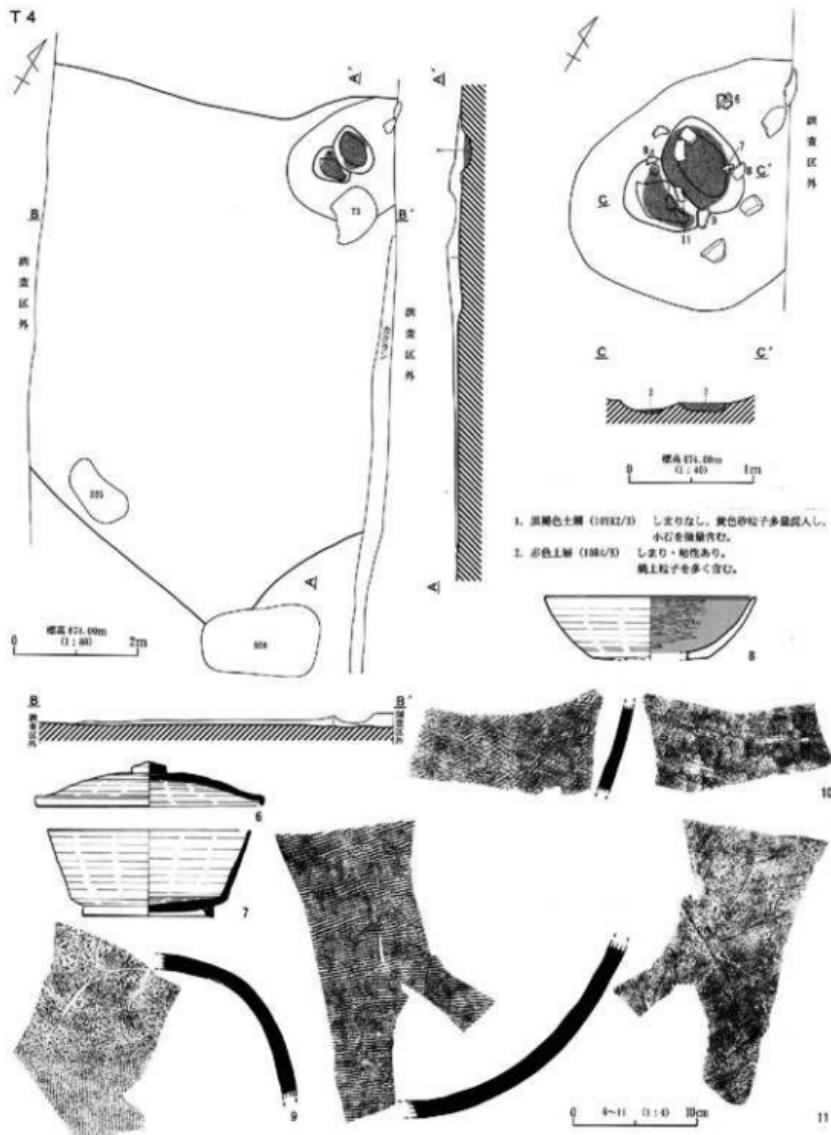
T3号とT4号は検出のレベルこそ差があるが、検出位置が近接する事、形態や出土遺物が似通っている事など、性格を特定できないが同一の性格を有する遺構と考えられる。

(5) T5号特殊遺構 (第170図、写真図版三十一)

本址は、調査区B区南側のシ-78.79.80Grに位置する。残存状態は良好である。本址は3つの土坑状の遺構が連なるように検出され、その配列が併に関連性を示唆するため一つの遺構として扱った。各掘り込みの形態は、北から円形の土坑で径91・深さ11cm。中央の土坑が楕円形で、長軸2.68m・短軸0.75cm・深さ39cm。南端が楕円形で、規模が長軸2.75m・短軸0.95m・深さ31cmを測る。

本址からの出土遺物はなく、所産時期も不明である。

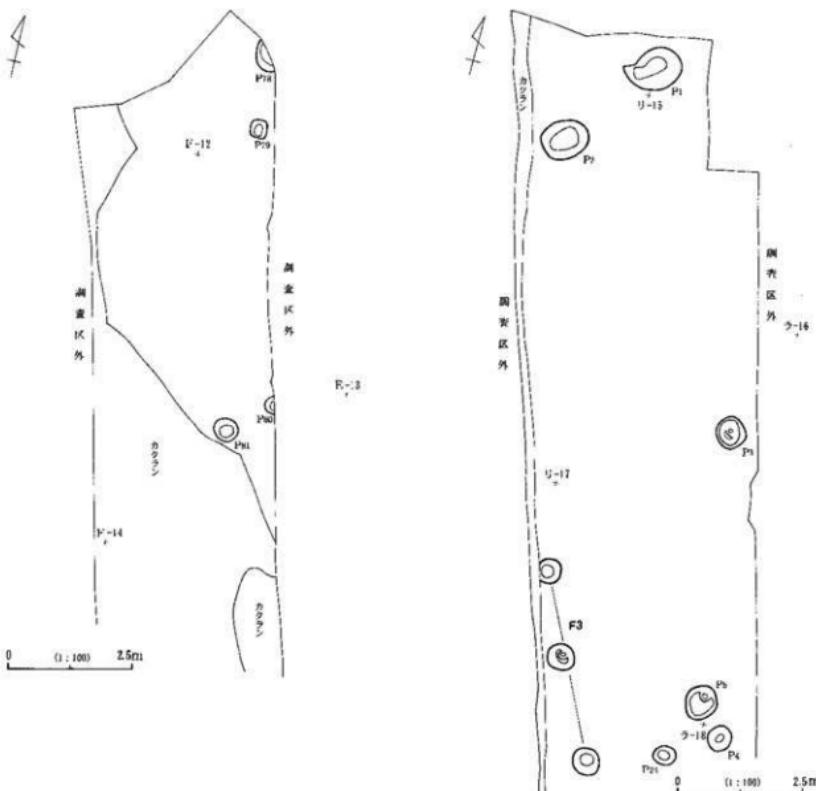




第171図 T4号特殊造構及び出土遺物実測図

No	種別	基 標	法 量	成 形・調 整・文 繖				備 考	出 し 位 置
				山形県地図	山形県地図	内 面	外 面		
1	須恵器	蓋	16.0	2.9	3.2	U1クロナデ	ロクロナデ 大井部四輪ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測 表面作業	T3-I 16
2	須恵器	蓋台环	16.0	11.5	6.1	U1クロナデ	ロクロナデ 底部四輪ヘラケズリ→U高台	回転実測	T3-I 15
3	須恵器	四耳壺	-	-	(16.4)	タタキ・輪帶貼付→耳貼付	ヨコナデ 自然輪付着	回転実測	T1
4	須恵器	要	-	-	-	タタキ	難付着	拓本	T3-II 16
6	須恵器	蓋	18.2	2.8	3.6	U1クロナデ	ロクロナデ 大井部四輪ヘラケズリ→つまみ貼付 火拂	完全実測	T4-0cm
7	須恵器	高台环	16.3	10.6	6.9	U1クロナデ 火拂	ロクロナデ 底部四輪ヘラケズリ→U高台	回転実測	T4 1cm
8	土器類	环	17.0	9.4	(5.1)	ミガキ・黑色處理	底板手持カタケズリ	回転実測	T4 2cm
9	須恵器	要	-	-	-	タタキ	自然輪付着	拓本	T4 -2.5~3cm
10	須恵器	後	-	-	表面痕	タタキ (格子)	拓本	T4 3cm	
11	須恵器	要	-	-	ナデ	タタキ	拓本	T4-II< 2cm	
16	熊	粘	魚 材	残存	最大長	島大柄	島大厚	重 量	所 見
5	鐵石	磁灰岩	11.8	9.2	3.0	335.54			出土位置
									T1

第102表 特殊遺構出土遺物観察表



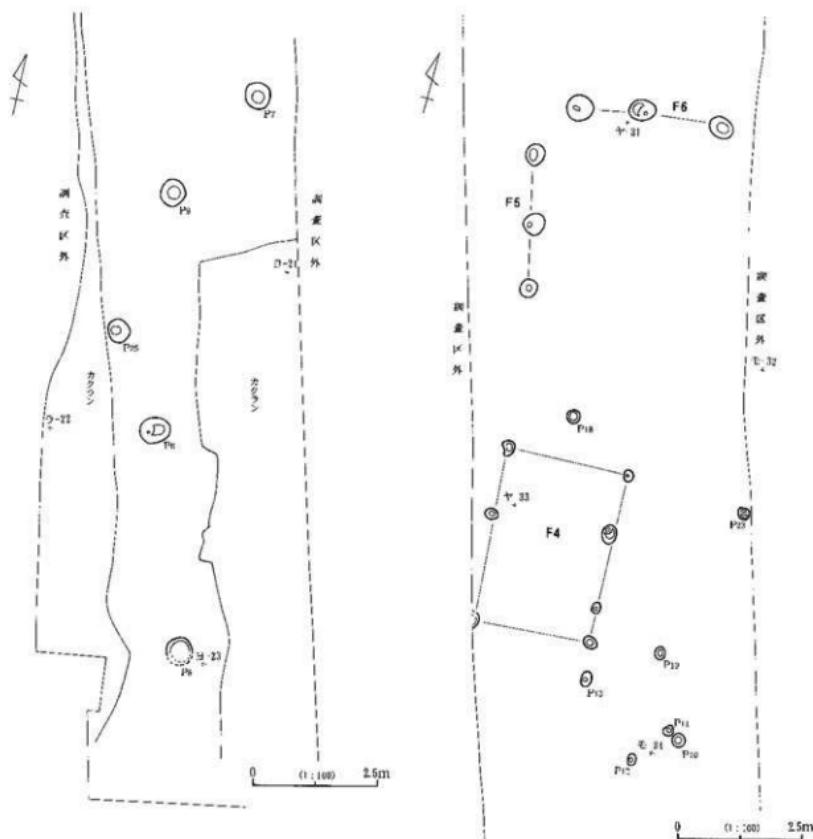
第172図 ピット実測図 (1)

第6節 ピット群 (第172~176図)

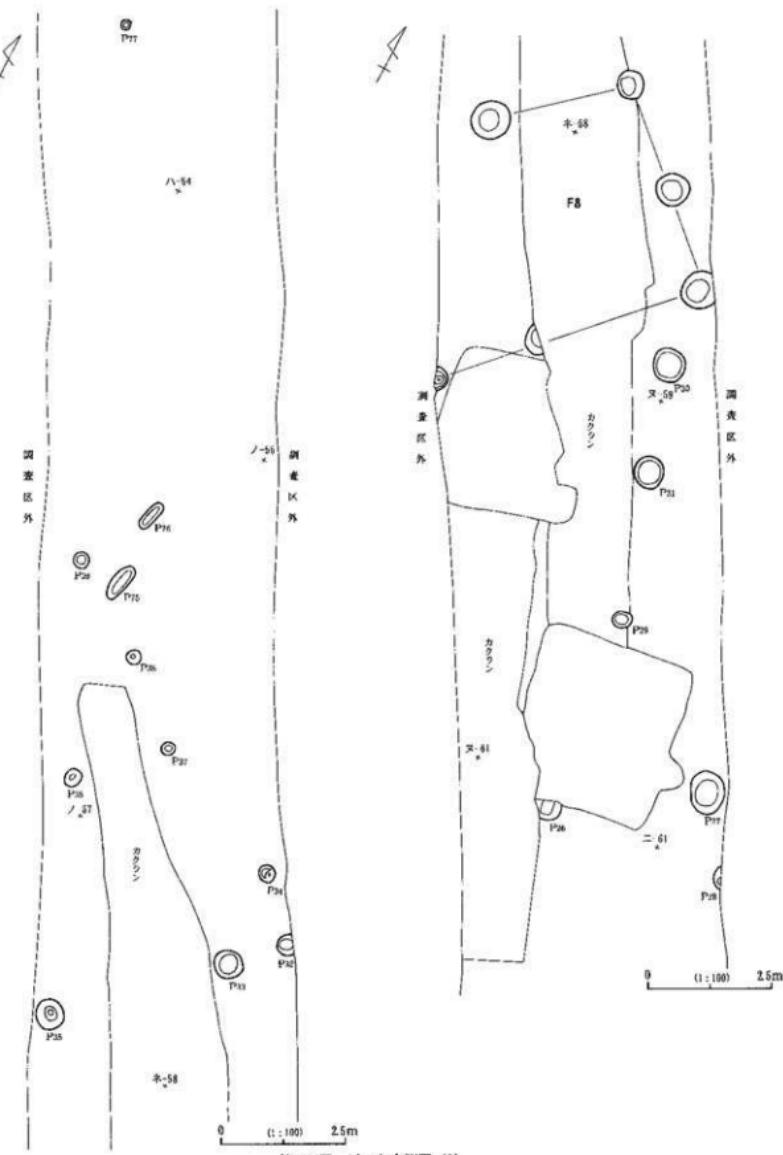
本遺跡の単独ピットは市道遺跡のように偏在することなく、調査区全体において検出された。先に述べたM4号溝状遺構とM8号溝状遺構に囲まれた空間を、中世館跡の可能性があると述べたが、この囲まれた空間からは、中世と考えられる単独ピットは検出されなかった。

形態円形が主体で、梢円形と不整形がそれに続く。規模は径50cm内外のものが多かった。また、顯著な柱痕は確認できなかった。

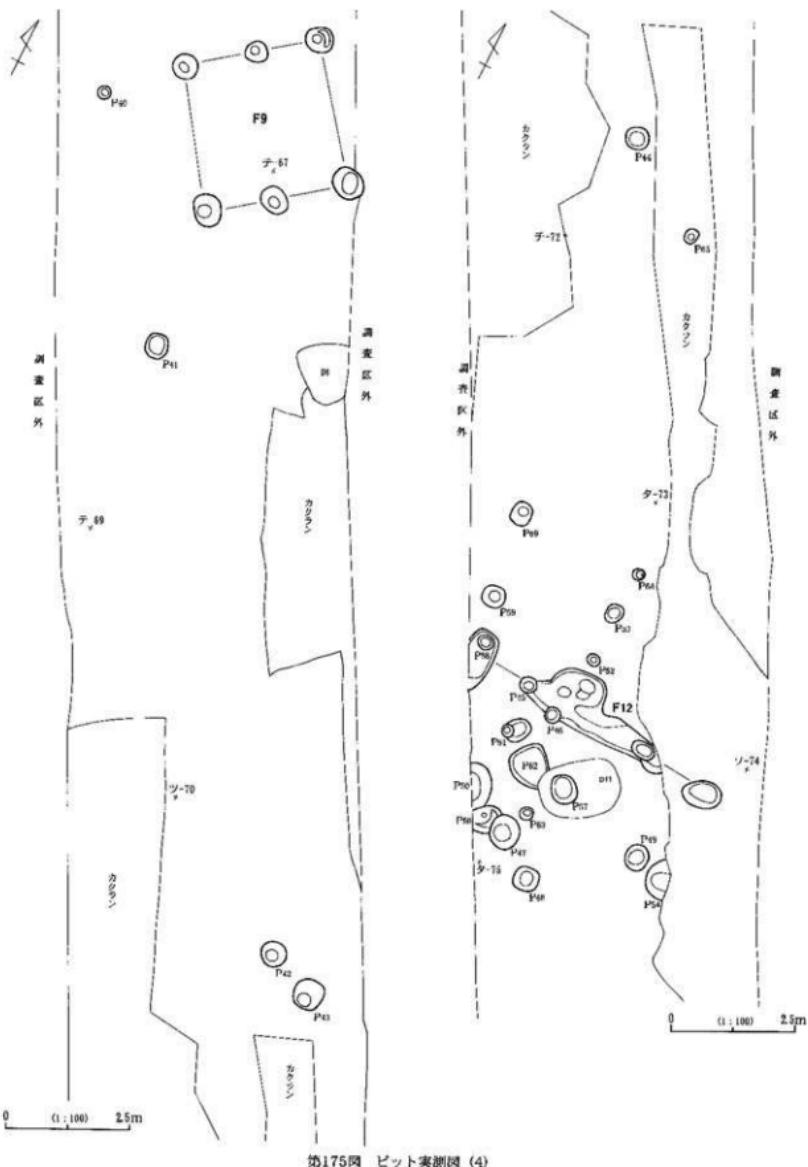
単独ピットからの出土遺物は図示できるものはなかったが、上器片として土師器壺・坏、須恵器壺・甕等が19基のピットから出土した。出土品の帰属時期は古墳時代～平安時代のものであった。なお、一覧表には覆土等から判断した時代を記載してある。



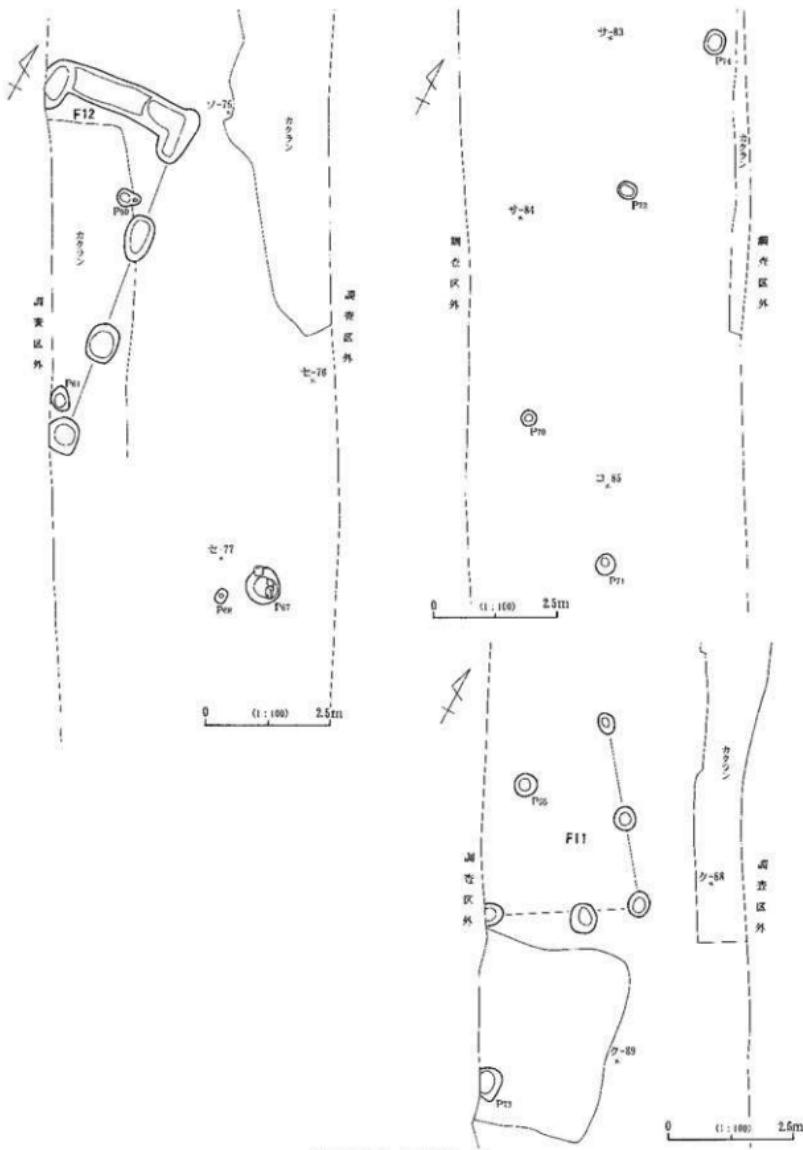
第173図 ピット実測図 (2)



第174図 ピット実測図 (3)



第175図 ピット実測図 (4)



第176図 ピット実測図 (5)

遺構名	出土位置	長径×短径×深さ	形態	覆土	時代	重複関係
P1	ウ・リ-15	115×80×59.5	不規形	黒褐色土(10YR3/1)	古代	
P2	リ-15	93×77×27	楕円形	*	*	
P3	ラ-15	66×57×40 (テラス32)	*	*	*	土師器 (古墳)
P4	ヨ-18	32×48×42	円形	*	*	土師器
P5	ヨ-17	68×60×22 (テラス15)	楕円形	黄褐色土	*	土師器
P6	ロ-31	61×49×30 (テラス24)	*	黒褐色土	*	
P7	ヨ-20	52×49×36	円形	*		共生叢
P8	ヨ-23	55×(26)×12	楕円形?	*		H8を切る
P9	ヨ-20	52×50×28.5	円形	*		上層器質 (古墳)
P10	メ-33	27×27×12	*	黒灰褐色土 しまり・粘性強い。ローム粒子多。	中世	
P11	*	22×19×14	*	褐灰色土	*	
P12	モ-34	22×16×3	楕円形	*	*	
P13	モ-33	33×23×7.5	*	*	*	
P14						P4に重複
P15						*
P16						*
P17						*
P18	モ-33	26×22×13	円形	褐灰色土	中世	
P19	モ-33	27×24×11	楕円形?	*	*	
P20						P4に重複
P21						*
P22						*
P23	メ-32	23×22×6 (テラス8)	方形	褐灰色土		
P24	ヨ-18	46×38×18.5	楕円形	黒色土 黄色シルトブロック含	古代	
P25	ヨ-21	47×44×23.5	円形	黑色土	*	
P26	ニ-61	55×(10)×27	楕円形?	*	*	
P27	ナ-60	82×67×35.5	楕円形	*	*	土師器
P28	ナ-60-61	(43)×(17)×15.5	-	*		
P29	ニ-60	37×22×27	楕円形	褐灰色土 黄色シルトブロック含	中世?	
P30	ニ-3-58	67×62×18.5	円形	黑色土	古代	上層器質
P31	ニ-59	63×56×18	*	*	*	鉢
P32	メ-37	40×(33)×31.5	楕円形?	褐灰色土	中世	
P33	メ-3-57	61×55×23.5	円形	*	*	
P34	キ-56	34×31×25 (テラス16)	*	*	*	
P35	メ-37	60×54×41.5	*	泥色土	古代	
P36	メ-56	36×31×26.5	楕円形	褐灰色土	中世	
P37	キ-56	27×27×7.5	円形	*	*	
P38	メ-56	30×28×9	*	*	*	
P39	メ-56	34×30×21	*	*	*	
P40	メ-67	30×30×14.5	*	褐灰色土 黄色シルトブロック含	*	
P41	メ-68	50×40×13	楕円形	黒褐色土 黄色シルクブロック含	*	
P42	メ-70	52×47×20	円形	黒褐色土(10YR3/1) 黑色土ブロック少含		
P43	タ-チ-70	60×60×30.5	*	*		
P44	タ-71	46×36×13.5	*	*		
P45	タ-71	35×32×20	*	*		
P46	ソ-タ-74	32×32×19	*			須勢器
P47	ソ-74	69×69×16.5	楕円形	黒褐色土(10YR2/3) 新黒褐色ブロック含	土師器	
P48	ソ-74-75	53×50×14.5	円形	黒褐色土(10YR3/1) 新黒褐色ブロック含		
P49	ソ-74	30×45×18.5	*	黒褐色土(10YR3/1) 黑色ロームブロック少含		

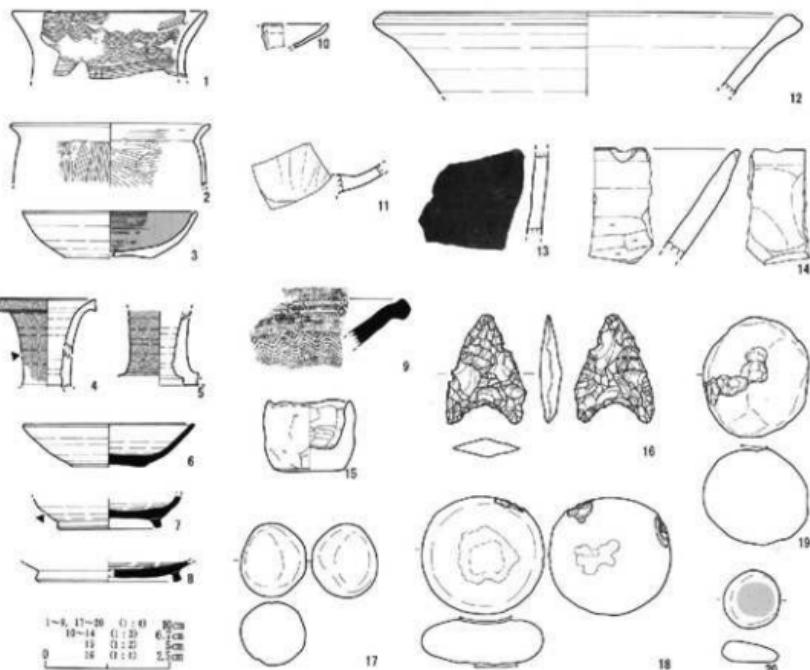
第103表 ピット計測表(1)

遺構名	出土位置	長径×短径×深さ	形態	覆土	時代	重複関係
P50	フ-74	92×(42)×36		黒褐色土(10YR2/3) 砂質黃色ブロック含		下部鉢
P51	*	55×42×12	小壺形	黒褐色土(10YR2/3) 黄色土ブロック少含		土師器類(占塹)
P52	ソ-73	28×23×20	円筒			
P53	*	38×32×21	楕円形			
P54	ソ-74	80×(48)×23	*	黒褐色土(10YR2/3) 黄色ロームブロック少含		遺坐跡蓋・土師器
P55	ケ-87-88	48×41×31	楕円形			
P56	タ-74	(60)×54×37	楕円形	黒褐色土(10YR3/1) 砂質黃色ブロック含		
P57	ソ-74	60×55×18	円筒			上部鉢
P58	タ-73-74	36×29×21	楕円形			
P59	タ-73	46×46×21.5	円筒			土師器
P60	ソ-75	47×34×25	不整形	黒褐色土(10YR3/2) 黄色土ブロック少含		
P61	ソ-76	19×31×21	楕円形	*	*	
P62	ソ・タ-74	(88)×26×9	*	*	*	下部器
P63	ソ-74	31×26×19	*	黒褐色土(10YR3/2) 塗色土ブロック少含		
P64	ソ-73	24×21×24	円筒			
P65	ソ-71	31×25×14	楕円形			
P66						P12に重複
P67	ス-76-77	74×68×21	円筒	黒褐色土(10YR2/3) 淡色土ブロック少含		
P68	ス-76	30×24×19.5	楕円形	*	*	
P69	タ-73	48×42×27	*	黒褐色土		古代
P70	コ-84	30×30×12	円筒	褐灰色土		
P71	ケ-85	42×38×19	*	黒褐色土		古代
P72	コ-83	40×26×15	楕円形	黒褐色土(10YR3/2) 淡色砂質土含		
P73	タ-89	70×(43)×34	不整形			衝撃破壊(口縁), 上部器内(内部)
P74	コ-82	46×43×12	リ, 形			
P75	/-55	77×35×16	楕円形			
P76	/-55	60×34×15.5	*			
P77	ハ-53	18×15×13	方形			
P78	E-11	(73)×(24)×26	*			
P79	H-11	39×34×9.5	楕円形			
P80	E-13	(34)×(18)×11	*			
P81	E-13	18×34×29	円筒			

第104表 ピット計測表(2)

第7節 遺構外出土遺物 (第177・178図)

本遺跡からの遺構外出土遺物は調査区域により偏りがあった。まず第一の集中区はミ-40Gr付近に検出された黒色土帶である。この黒色土は幅約10m・深さ30cmほどの広がりがあり、南北方向に伸



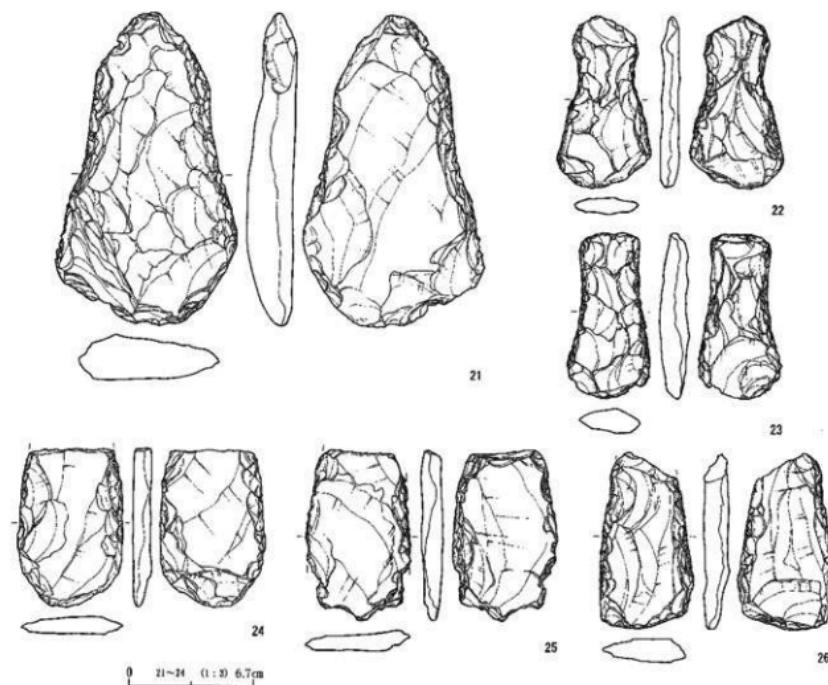
第177図 遺構外出土遺物実測図(1)

No.	種別	器種	法量	成形・調査・文様		備考	出土位置	
				内面	外面			
1	分生	甕	15.6	—	(5.4) 2ガ牛	口縁陶柱状灰→周縁部絞糸灰(火口上)	田舎鬼窓	Z
2	上脚部	甕	16.1	—	(5.6) 口縁ヨコナデ→口縁から側部ハケ目	口縁ヨコナデ→側面ハケ目	田舎鬼窓	Z
3	下脚部	甕	14.1	7.3	3.8 王字→黑色處理	底面赤色	田舎鬼窓	Z
4	灰輪陶器	灰輪壺	7.8	—	(7.1) 灰輪	灰輪	田舎鬼窓	ト-61
5	灰輪陶器	灰輪壺	—	—	(6.0)	自然輪	田舎鬼窓	Z
6	灰輪陶器	甕	13.8	5.9	3.1 ロクロナデ	ロクロナデ 瓦端陶輪系切り	田舎鬼窓 ハラ記号有り	タ-74
7	須恵器	高台坪	—	8.2 (2.0)	ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 瓦端赤色り縁陶輪ヘラケズリ→高台坪 火拂	完全火窓	テ-87
8	須恵器	高台坪	—	11.6 (1.8)	ロクロナデ 火拂	ロクロナデ 瓦端赤色り縁陶輪ヘラケズリ→高台坪 火拂	田舎鬼窓	ト-64
9	須恵器	甕	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ→堅縁波状文	丸木	Z
10	白磁	盤	—	—	(1.0) 花模	花模	磁片火窓 12C-13C	モ-36
11	青磁	瓶	—	—	(1.0) 花模	花模 蓬背文	磁片火窓 磁片 13C	ク-96
12	陶器	こね跡	25.6	—	(5.0) ロクロナデ	ロクロナデ 口縁部が鉄輪ヘラケズリにより焼	六葉坪 13C 中 古茶園床	タ-96
13	陶器	在地裏	—	—	(5.1) ロクロナデ 薙輪	ロクロナデ 薙輪	田舎鬼窓 在地 薙木	タ-59
14	陶器	山形網	—	—	—	ロクロナデ→ハラケズリ 自然輪付茎 茎口ヘラ脱工具によりカズリ取り	磁片火窓 13C 前半 田舎白石西利用地蔵藏前	ク-86
15	土器器	手捏	3.2	2.8	2.8 ナデ ヘウナデ	ナデ	田舎鬼窓	モ-33

第105表 遺構外出土遺物観察表(1)

びていた。この黒色土からは図示した21~26のような「石鎌」と呼ばれる大型の打製石斧や、試掘段階の出土であるが、1の箱清水式の甕が出土している。これらの事から、この黒色土帯では弥生後期段階に何らかの活動が行われたと推測できる。

次の集中区は調査区南端の部分である。この周辺からは12.14といった中世陶器類や、11の青磁片が出土した。D19号上坑は中世の所産と考えられており、遺構外の出土遺物も13世紀代を示すものが多く、この一帯が13世紀を中心とする中世期の活動エリアであったことが予想できる。



第178図 遺構外出土遺物実測図(2)

No.	器種	本材	残存率	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置
16	石器	黒曜石	2.2	1.5	0.4	0.90			Z
17	器	輝石安山岩	3.9	5.3	5.1	195.45			Z
18	器	輝石安山岩	9.5	9.8	3.7	496.24			Z
19	器	輝石安山岩	9.6	8.4	7.7	670.00	正面に細打痕		サ 82
20	器	輝石安山岩	4.7	4.5	1.7	46.04	正面に磨り面		手 67
21	打製石斧	輝石安山岩	18.7	10.9	2.6	580.00	正面・裏の刃部付近に使用による磨滅度		ム 37
22	打製石斧	砂質砂岩	10.3	5.6	1.1	71.09	正面に自然面のこも、刃部付近に使用による磨滅度		ム 39
23	打製石斧	砂質砂岩	9.9	4.9	1.6	83.00	正面に自然面のこも		Z
24	打製石斧	輝石安山岩	(0.5)	(6.3)	(1.1)	(103.00)	裏面欠損、刃部に使用による磨滅度 全体に剥離が不明瞭		モ 33
25	打製石斧	輝石安山岩	(10.0)	(6.2)	(1.2)	(110.00)	正面・切部ともに欠損 全体に剥離が不明瞭		リ 15
26	打製石斧	砂質砂岩	(10.6)	5.6	(1.4)	(98.00)	前面欠損 正面に使用による磨滅度		リ 41

第106表 遺構外出土遺物観察表(2)



辻遺跡A地区より噴火した浅間山を望む



辻遺跡A地区調査区全景（北より南佐久方向を望む）



辻遺跡B地点調査区全景



辻遺跡B地点調査区近景



H1号住居址全景



H1号住居址遗物出土状况



H2号住居址遗物出土状况



H2号住居址全景



H3号住居址全景



H3号住居址カマド全景



H3号住居址遺物出土状況



H3号住居址カマド掘り方全景



H3号住居址掘り方全景



H4号住居址全景



H15号住居址全景



H7号住居址全景



H7号住居址掘り方



H7号住居址遺物出土状況



H7号住居址カマド全景



H7号住居址カマド付近遺物出土状況



H7号住居址カマド全景



H7号住居址カマド掘り方



H6号住居址全景



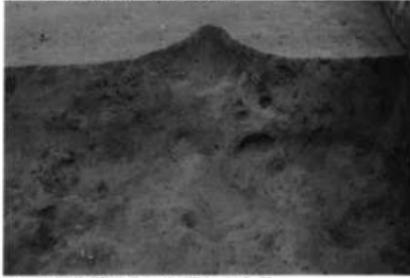
H6号住居址掘り方全景



H6号住居址遺物出土状況



H6号住居址カマド全景



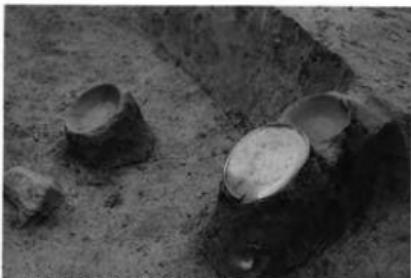
H6号住居址カマド掘り方全景



H8号住居址全景



H8号住居址遗物出土状况



H8号住居址遗物出土状况



H11号住居址全景



H11号住居址掘り方全景



H9号住居址全景



H9号住居址掘り方全景



H9号住居址カマド全景



辻遺跡遺構検出状況



H9号住居址カマド掘り方全景



H10号住居址全景



H10号住居址掘り方全景



H10号住居址遺物出土状況



H10号住居址カマド全景



H10号住居址カマド掘り方全景



H12号住居址全景



H12号住居址掘り方全景



H12号住居址カマド全景



H13号住居址セクション



H13号住居址掘り方全景



H13号住居址カマド全景



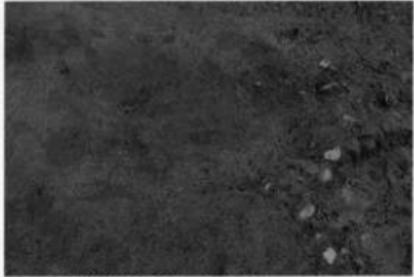
H13号住居址全景



H14号住居址全景



H14号住居址No.1カマド全景



H14号住居址No.2カマド全景



H14号住居址掘り方全景



H16号住居址カマド全景



H16号住居址全景



H17号住居址全景



H15号住居址全景



H15号住居址掘り方全景



H19号住居址掘り方全景



H19号住居址全景



H18号住居址全景



H18号住居址掘り方全景



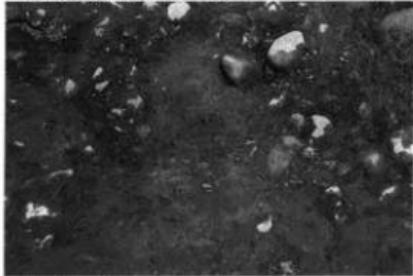
H20号住居址全景



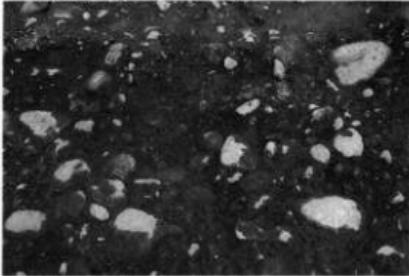
H20号住居址掘り方全景



H20号住居址遺物出土状況



H20号住居址カマド全景



H20号住居址カマド掘り方全景



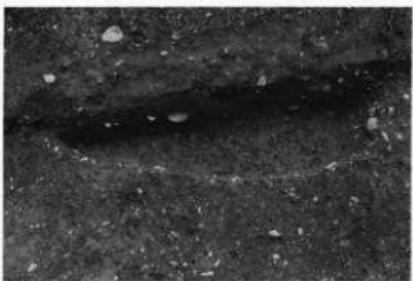
H21号住居址全景



H21号住居址掘り方全景



H22号住居址全景



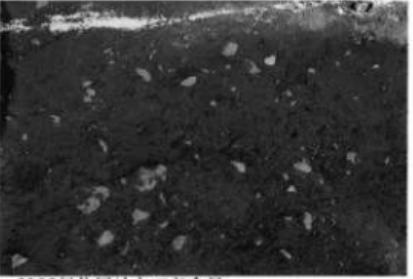
H22号住居址掘り方全景



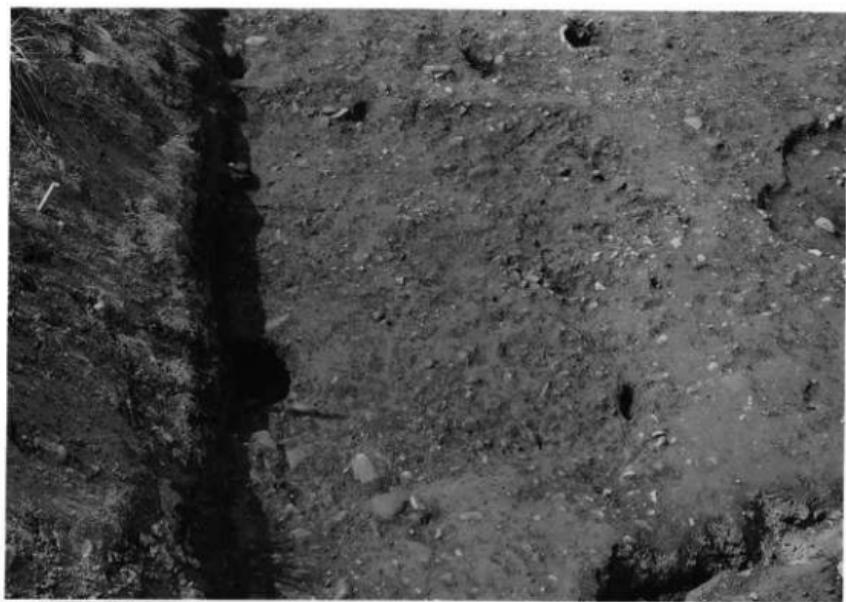
H23号住居址全景



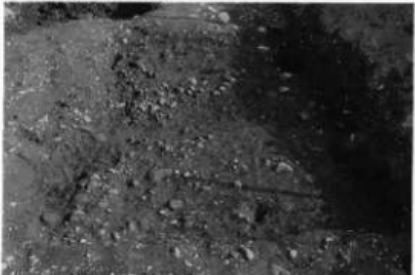
H23号住居址掘り方全景



H23号住居址カマド全景



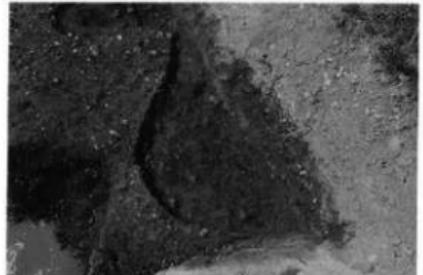
H25号住居址全景



H25号住居址掘り方全景



H25号住居址カマド全景



H26号住居址全景



辻遺跡調査風景



H24号住居址全景



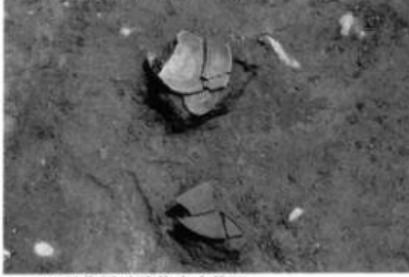
H24号住居址掘り方全景



H24号住居址遺物出土状況



H24号住居址遺物出土状況



H28号住居址遺物出土状況



H28号住居址全景



H28号住居址掘り方全景



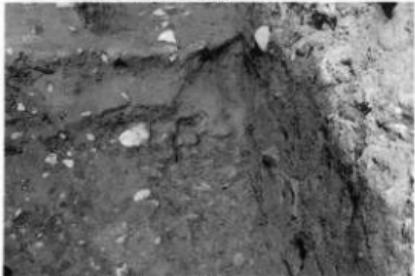
H27号住居址全景



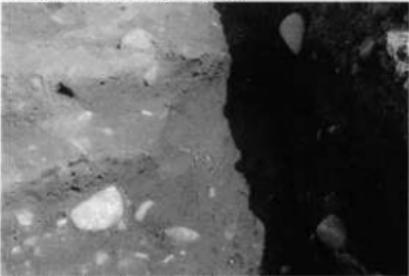
H27号住居址掘り方全景



H27号住居址遺物出土状況



H27号住居址カマド全景



H27号住居址カマド掘り方全景



F1号掘立柱建物址全景



F2号掘立柱建物址全景



F3号掘立柱建物址全景



F3号掘立柱建物址遗物出土状况



F4号掘立柱建物址全景



F5号掘立柱建物址全景



F6号掘立柱建物址全景



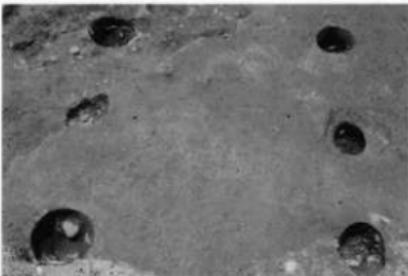
F7号掘立柱建物址全景



F 10号掘立柱建物址全景



F 8号掘立柱建物址全景



F 9号掘立柱建物址全景



F 11号掘立柱建物址全景



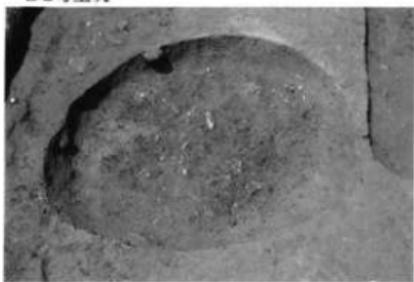
辻遺跡調査風景（南端）



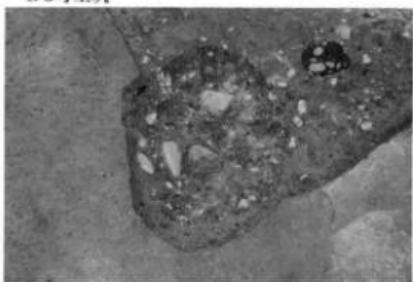
D2号土坑



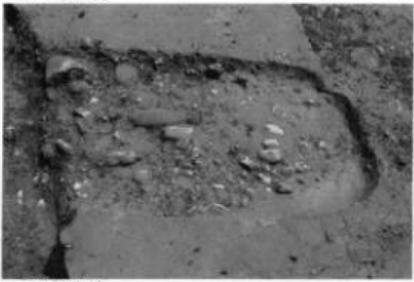
D3号土坑



D4号土坑



D5号土坑



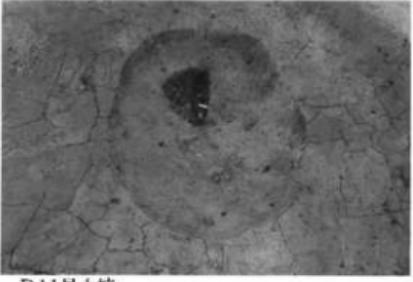
D7号土坑



D9号土坑



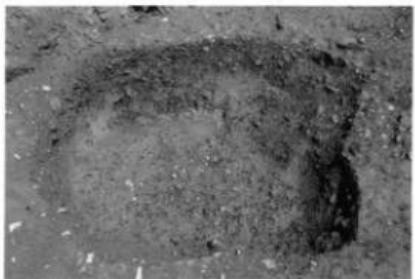
D10号土坑



D11号土坑



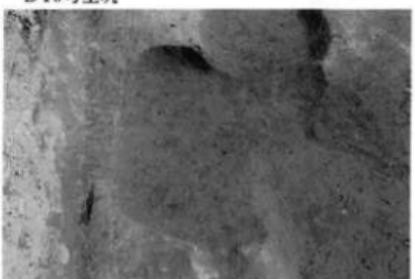
D16号土坑



D19号土坑



D20号土坑



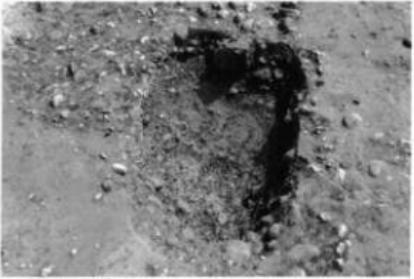
D21号土坑



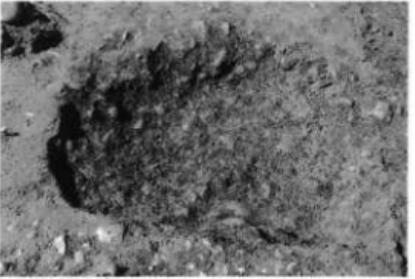
D23号土坑



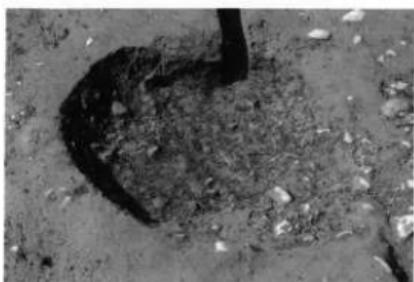
D24号土坑遗物出土状况



D26号土坑



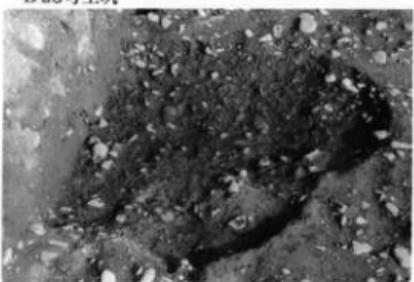
D27号土坑



D28号土坑



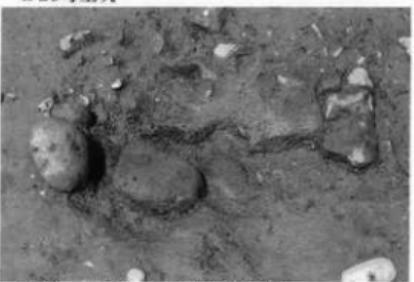
D29号土坑



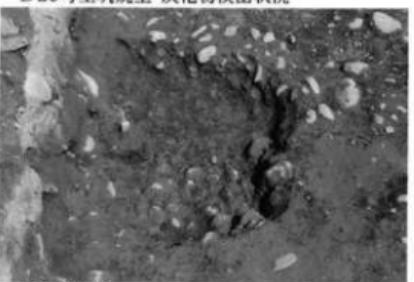
D29号土坑



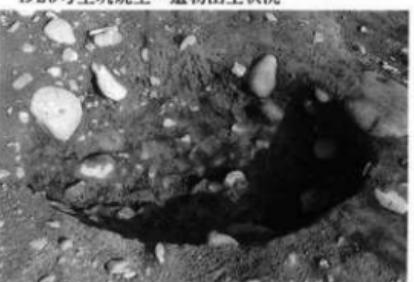
D29号土坑烧土·炭化物检出状况



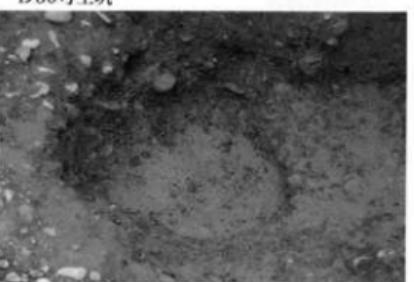
D29号土坑烧土·遗物出土状况



D30号土坑



D31号土坑



D32号土坑



M1号溝状遺構



M2号溝状遺構



M3号溝状遺構



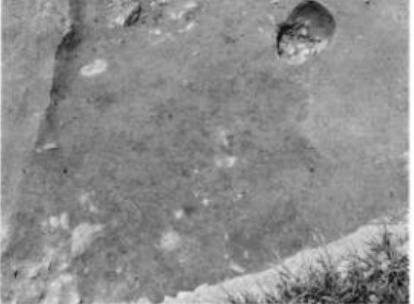
M4・5号溝状遺構



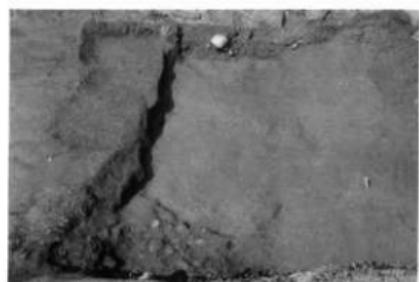
M6号溝状遺構



M7号溝状遺構



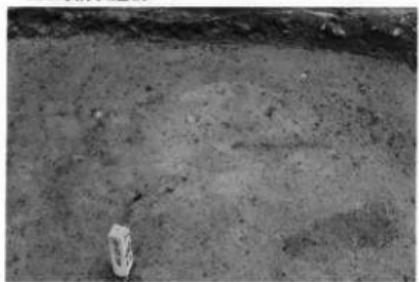
M9号溝状遺構



M8号溝状遺構



T1号特殊遺構掘り方



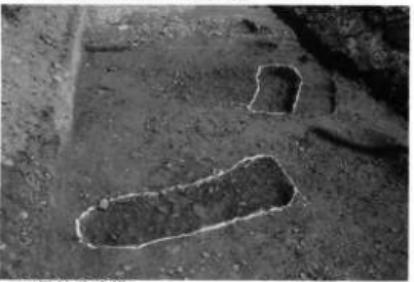
T1号特殊遺構焼土検出範囲



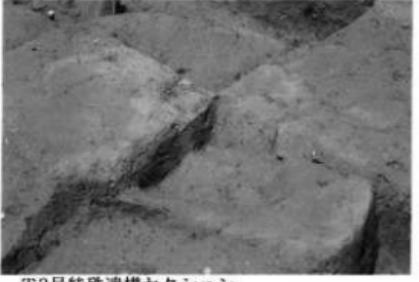
T1号特殊遺構焼土半裁状況



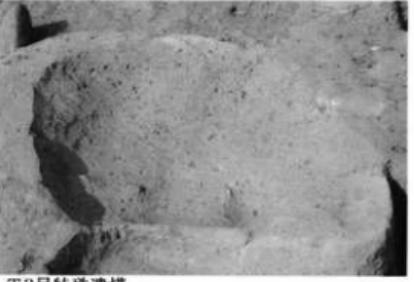
T2号特殊遺構



T5号特殊遺構



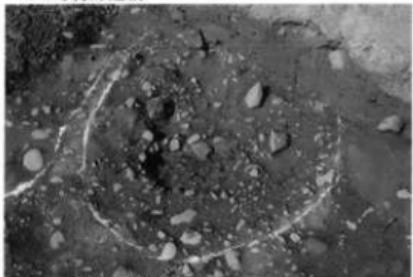
T3号特殊遺構セクション



T3号特殊遺構



T4号特殊遺構



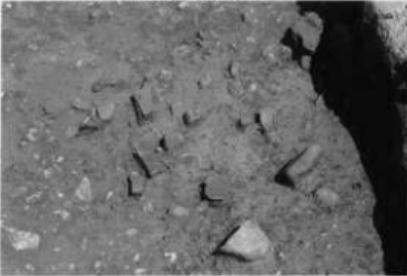
T4号特殊遺構範囲



T4号特殊遺構焼土完掘状況



T4号特殊遺構焼上セクション



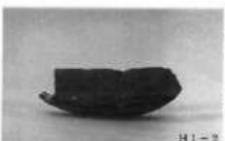
T4号特殊遺構



H1-3



H1-1



H1-2



H1-4



H2-5



H2-6



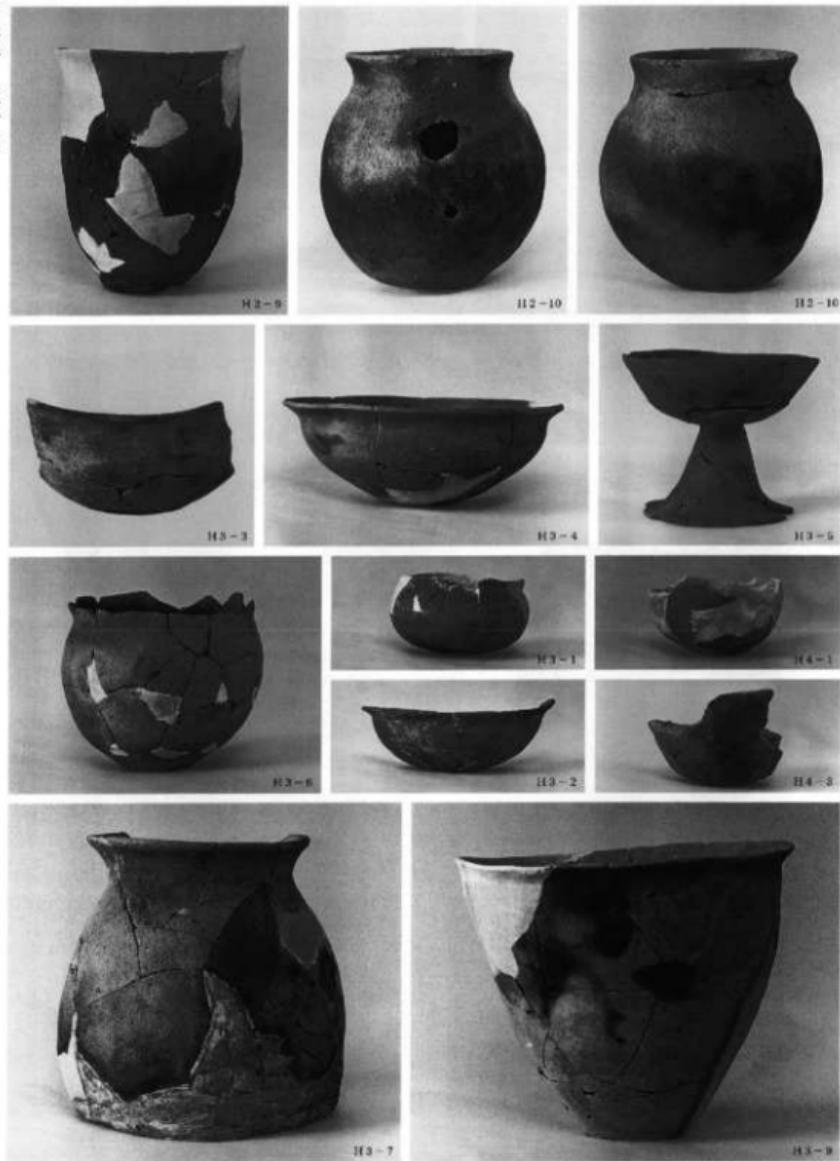
H2-7

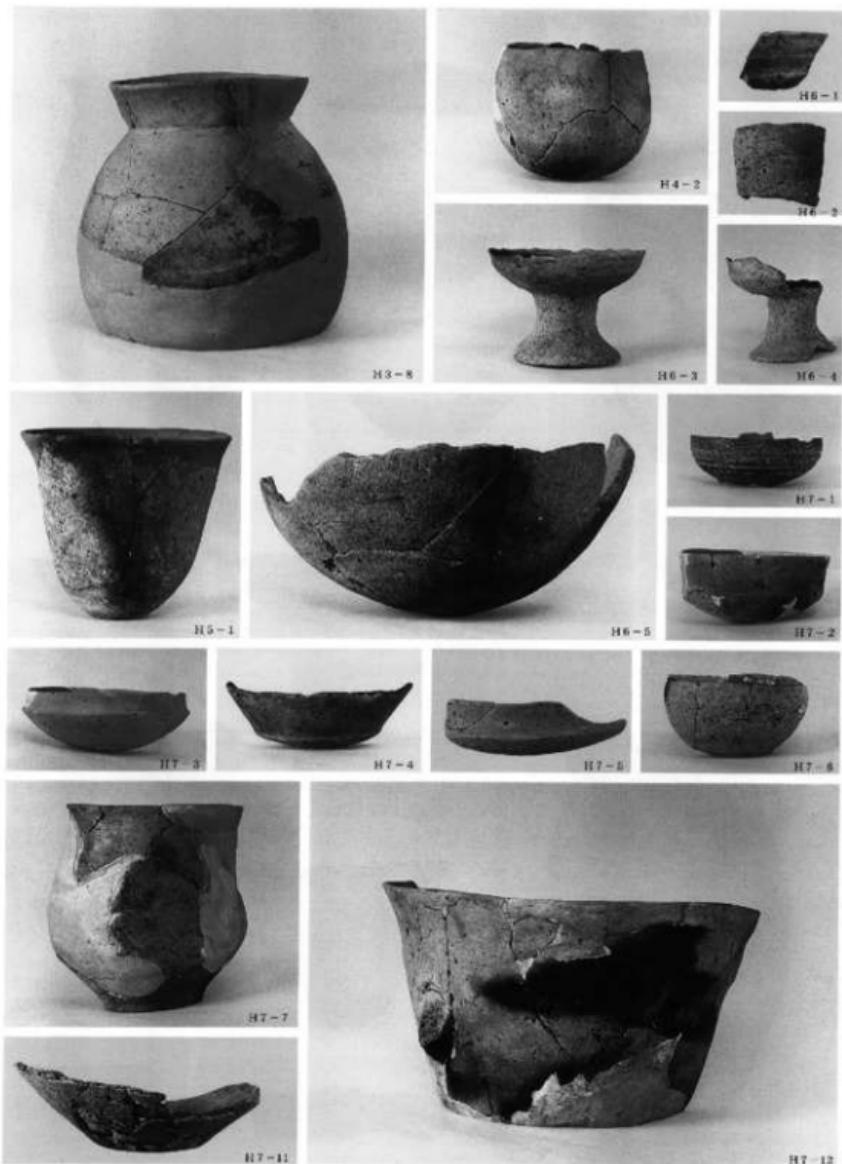


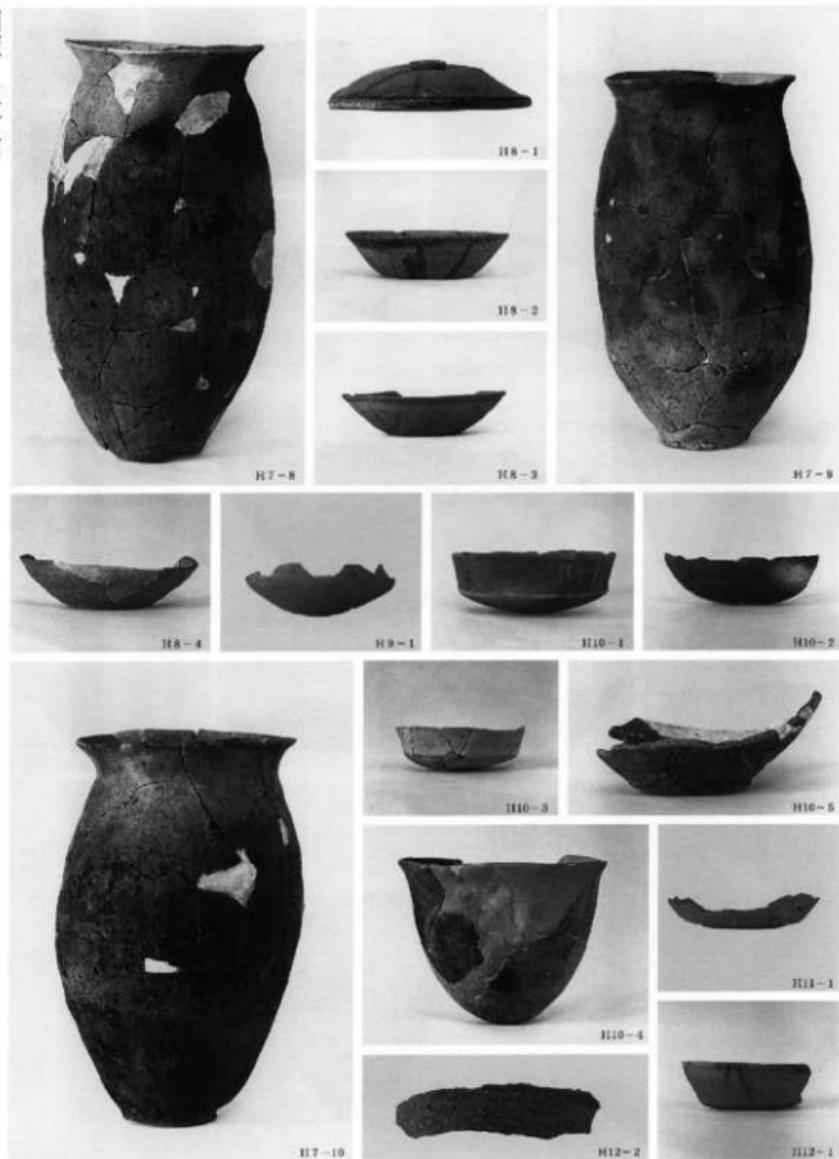
H2-8

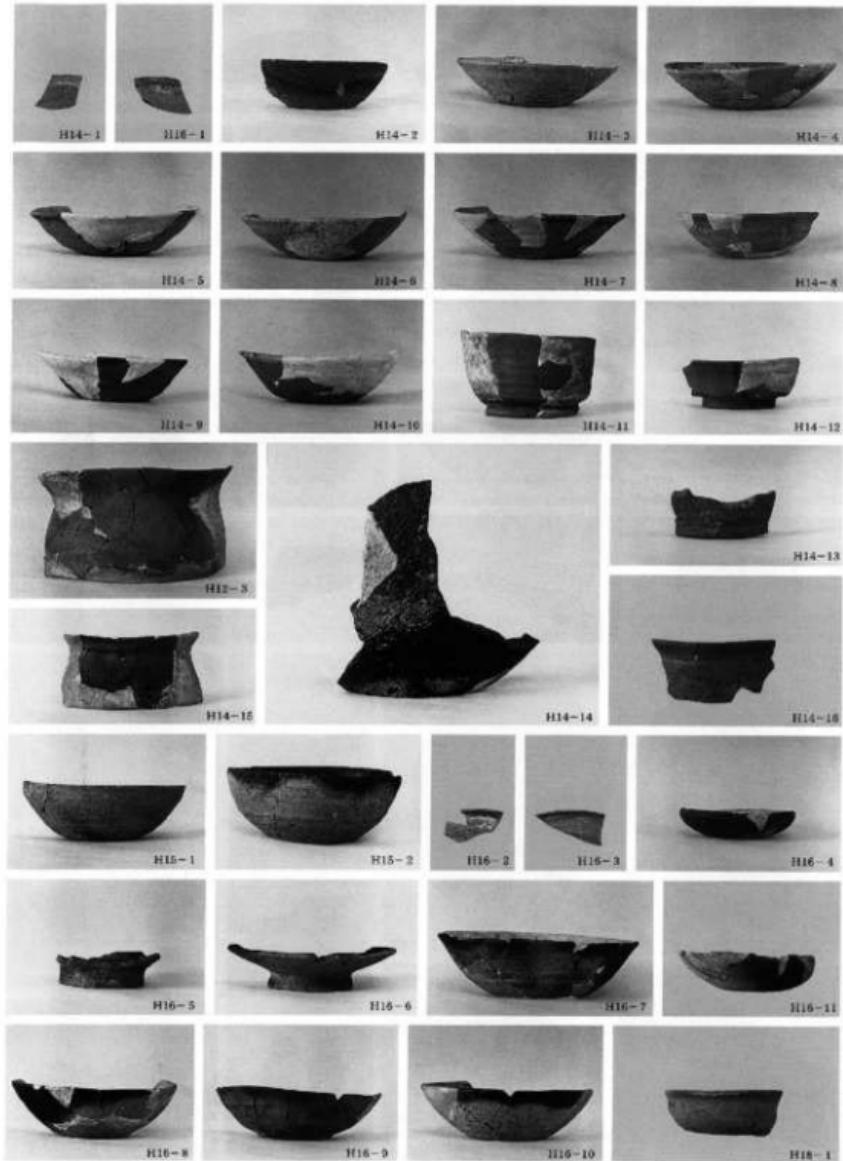


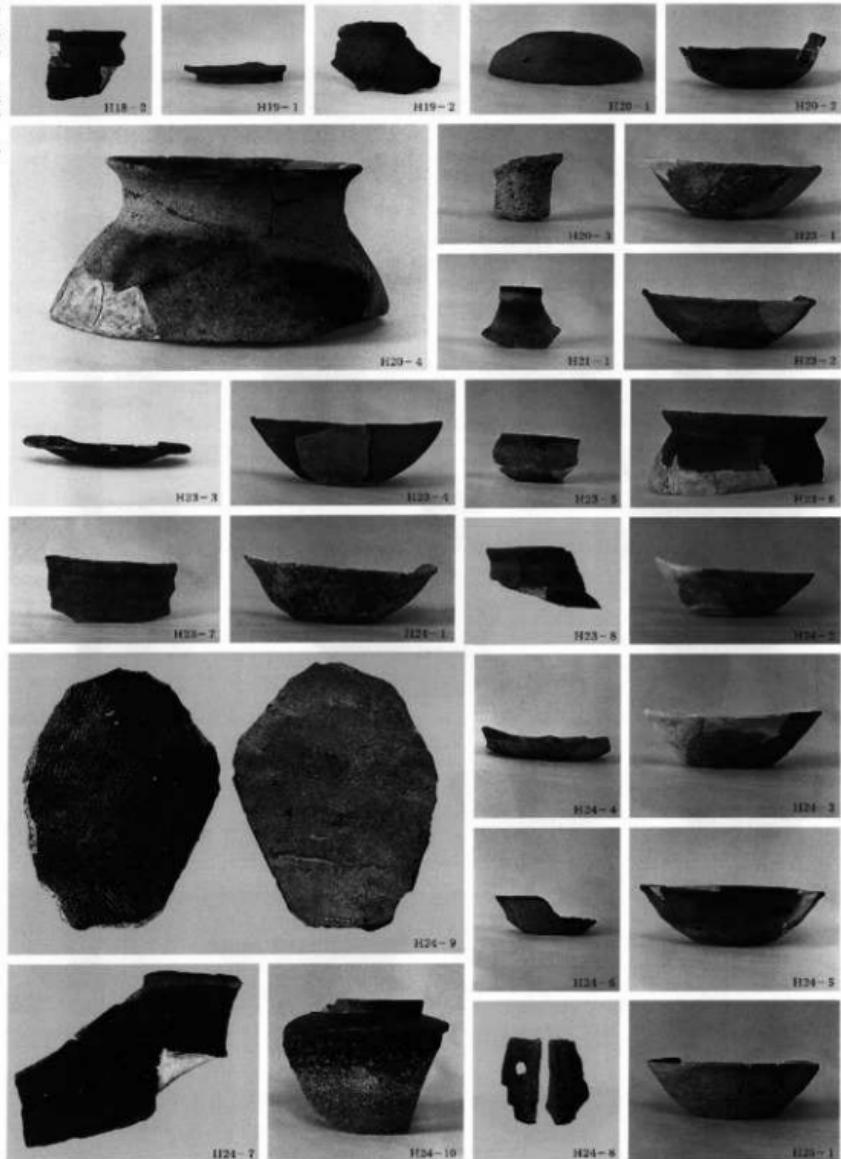
H2-11

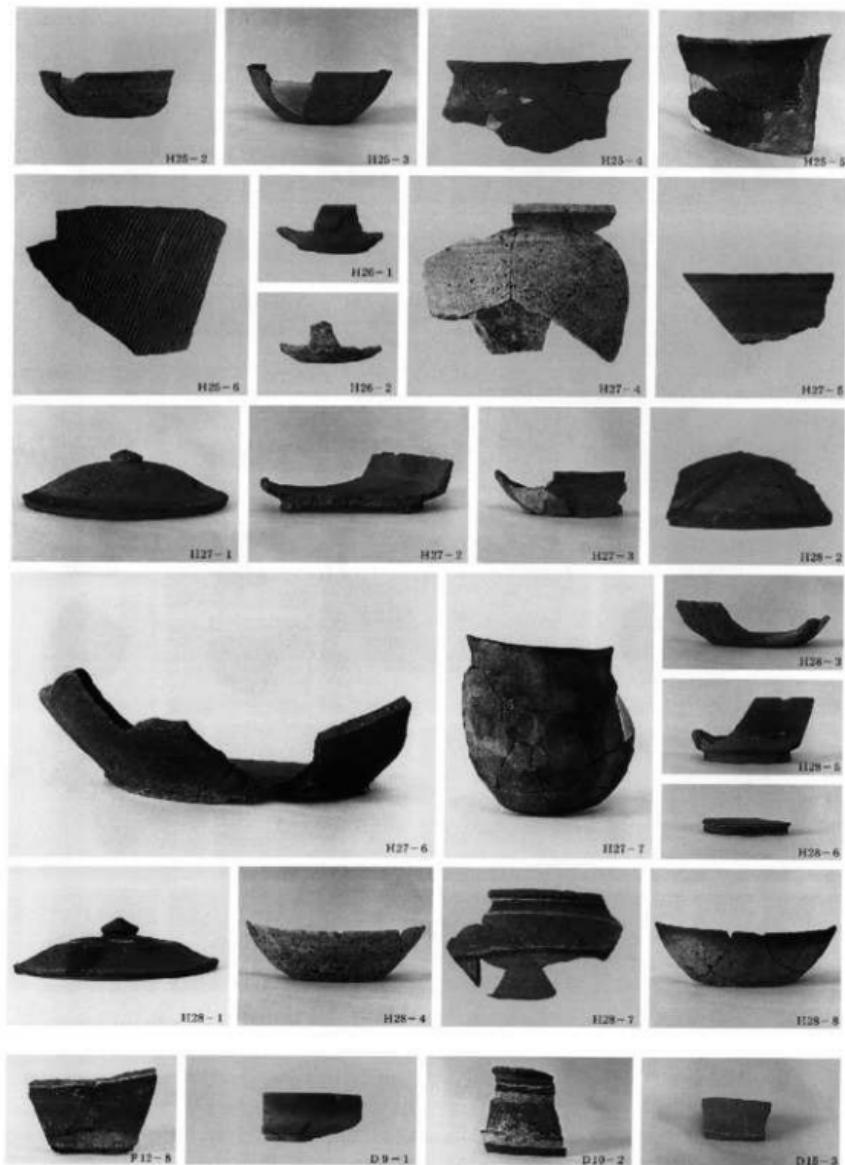


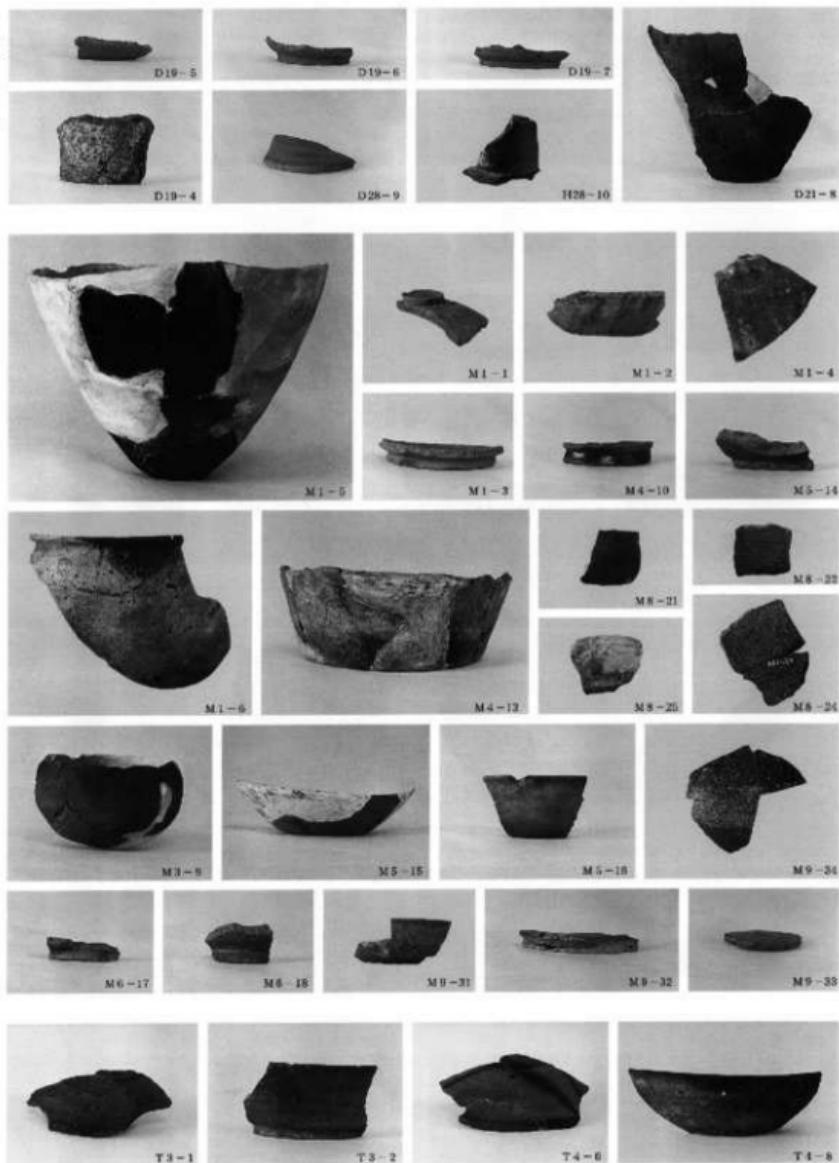


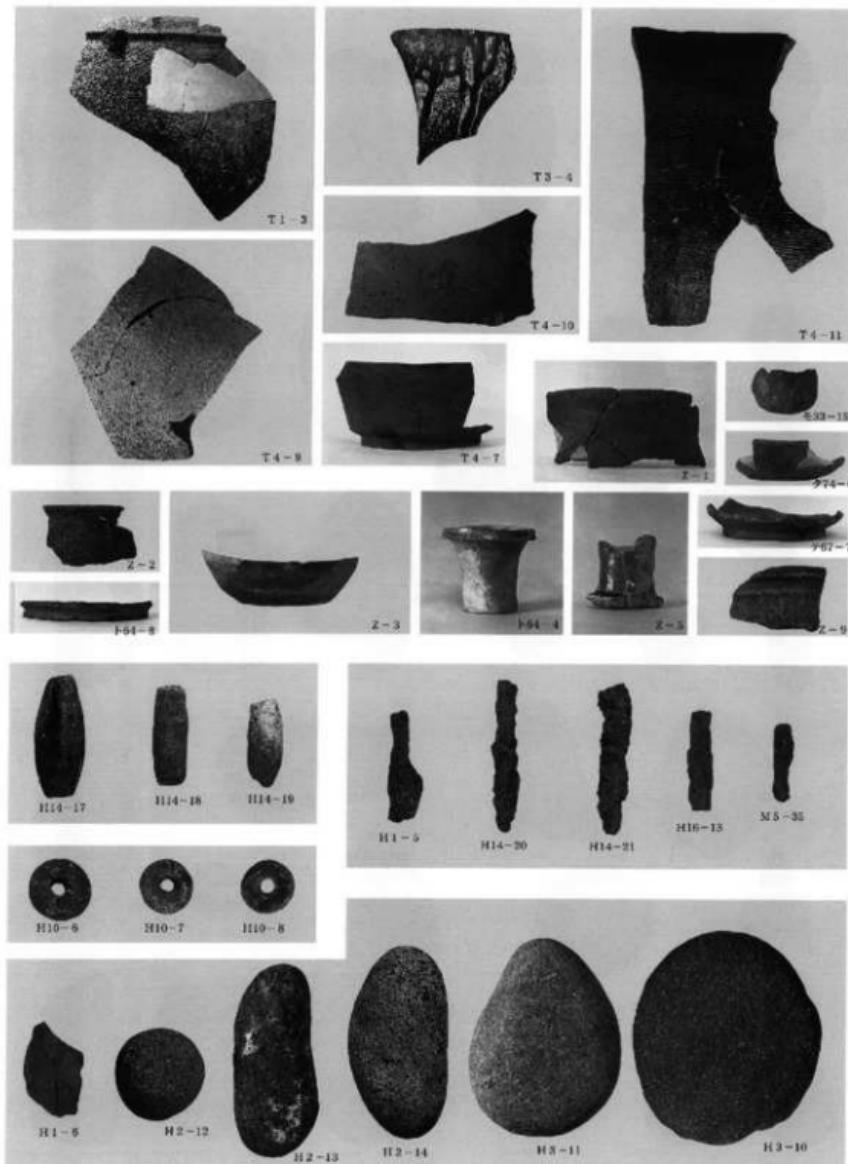


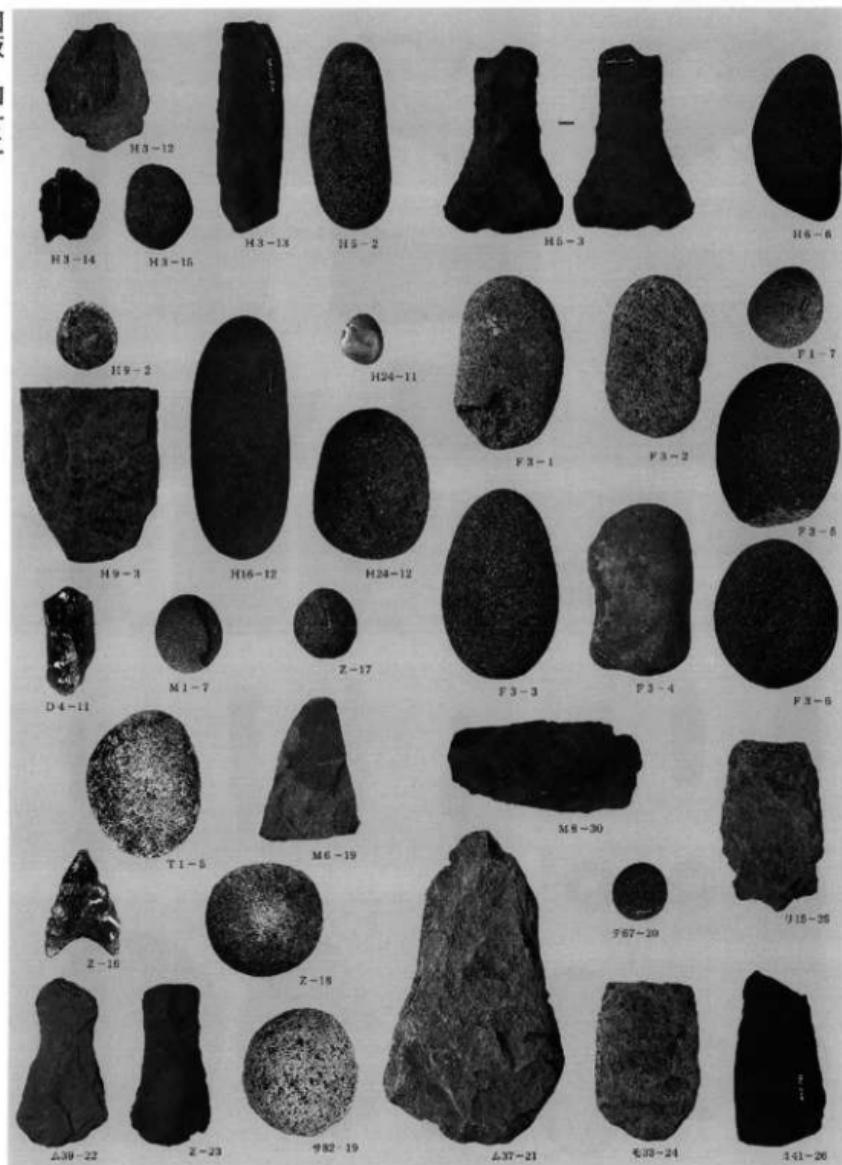




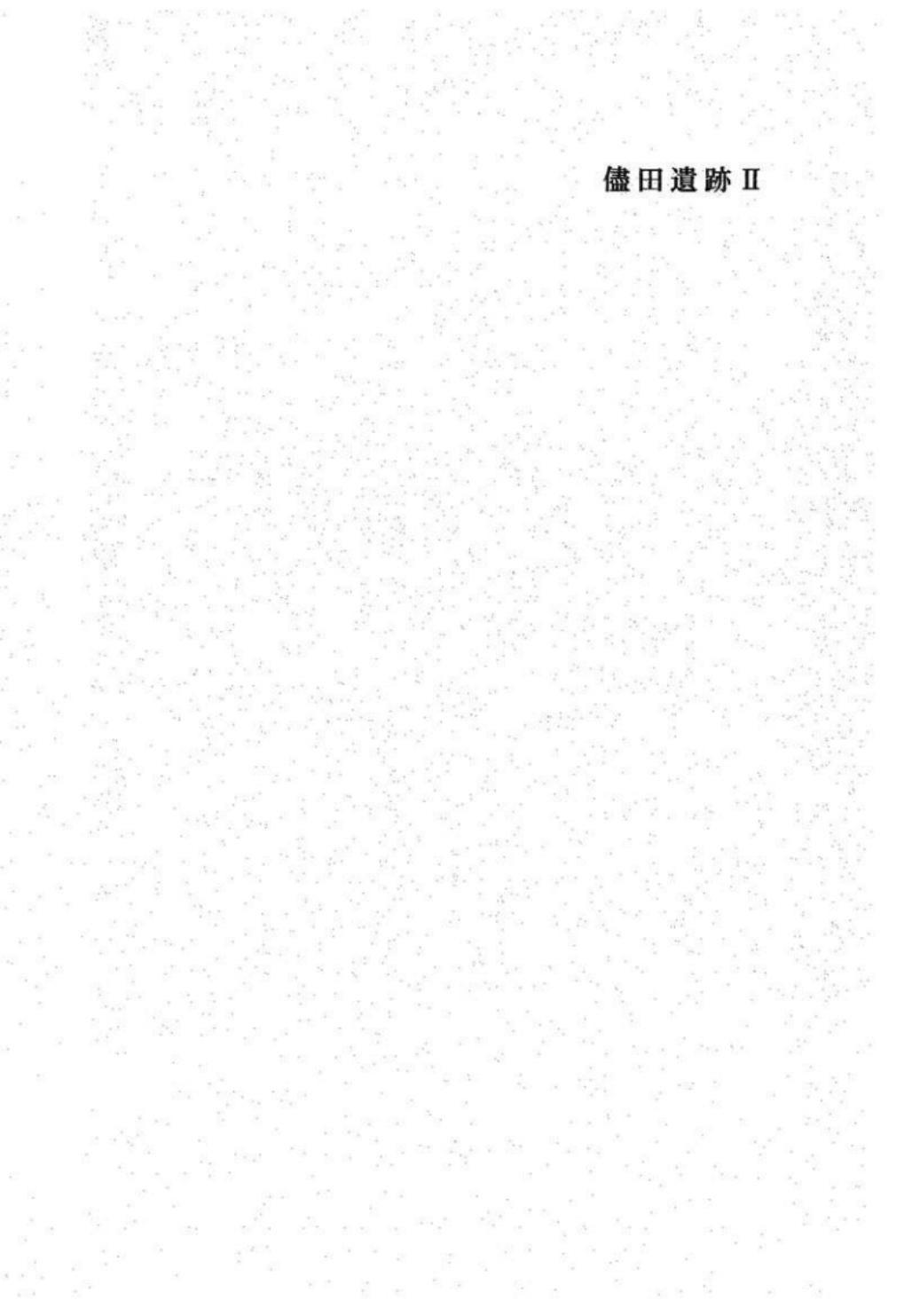








儘田遺跡Ⅱ



第V章 優田遺跡II

第1節 積穴住居址

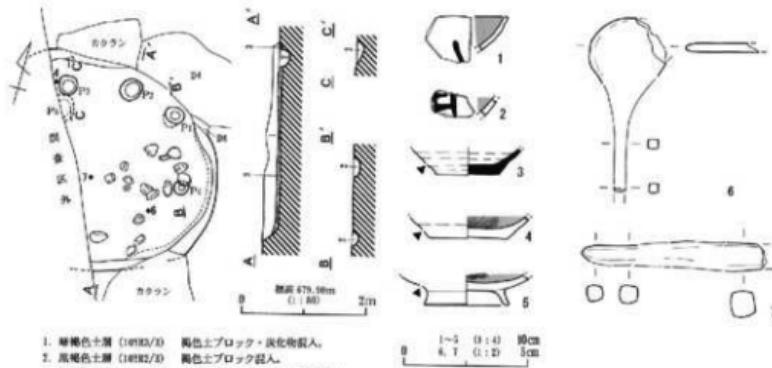
(1) 1号住居址 (第179図、写真図版三)

本住居址は、調査地点C区南端であるチ-111.112、ツ-111.112Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は梢円形か卵円の方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.36m(残存)・南壁0.97m(残存)・東壁2.07m(残存)で、壁高さは南壁で最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は5.83m²を測る。覆土はおむね自然堆積で単層であったが、床面に人頭大の礫が散らばって多く出土した。床は全体に軟質で、貼床が1~7cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認された。規模はP1が径31cm・深さ15cm、P2が径35cm・深さ16cm、P3が径33cm・深さ15cm、P4が径25cm・深さ11cm、P5が径43cm・深さ11cmを測る。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1と2は土師器壺の口縁部と体部で、いずれも外面に墨書が確認できる。墨書の判読は不明である。3は須恵器壺の底部で、回転式切り離しが行われている。4は土師器壺、5は土師器の碗である。いずれも内面黒色処理されている。6と7は鉄製品である。6は平らな部分を持ち、「匙」のようにも見られるが不確実である。7は釘と思われる。

本址はこれらの出土遺物より9世紀後半と考えられる。



第179図 H1号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	基盤	柱	柱		成形・調理・文様			備考	出土位置
				柱頭部	柱脚部	内	外	内		
1	土師器	柱	-	-	-	ミガキ-黑色処理	ロクロナデ	墨書き	鏡片尖形	
2	土師器	柱	-	-	-	ミガキ-黑色処理	ロクロナデ	墨書き	鏡片尖形	
3	須恵器	柱	-	5.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ	底部右回転式切り	完全実施	底部尖形
4	土師器	柱	-	6.4	-	ミガキ-黑色処理	ロクロナデ	底部右回転式切り	完全実施	
5	土師器	柱	-	5.8	-	ミガキ-黑色処理	ロクロナデ	村高台	完全実施	6cm
6	鉄	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	所見	出土位置
7	釘?	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔		10cm
8	鉄?	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔	鍔		14cm

第107表 H1号住居址出土遺物観察表

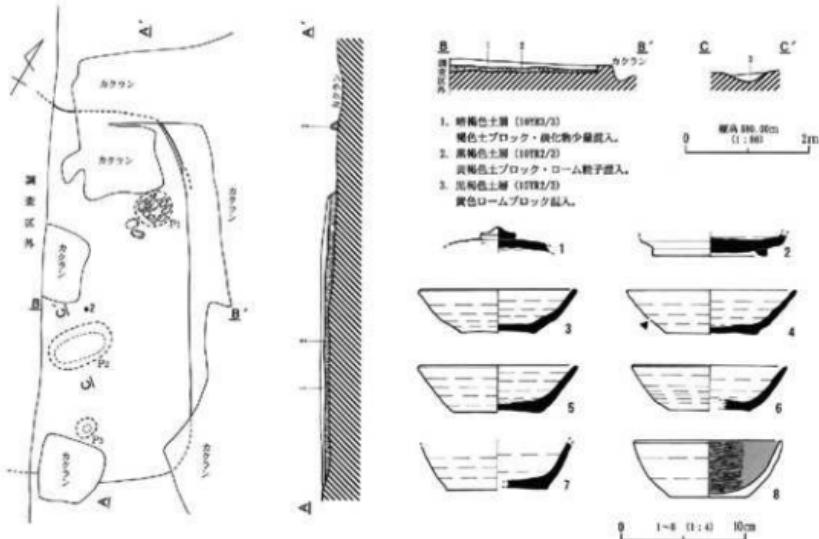
(2) 2号住居址 (第180図、写真図版三)

本住居址は、調査地点C区南端であるタ-113.114、チ-113.114Grに位置する。残存状態は住居址西側が調査区域外、北壁と南壁もカクランにより削平されている。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁1.70m(残存)・南壁2.25m(残存)・東壁5.58mで、壁高さは北東コーナーで最大5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で13.37m²を測る。住居址の主軸方位はN-30°-Wを測る。覆土は非常に薄く、おおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~13cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時に3カ所確認され、規模はP1が径60cm・深さ35cm、P2が径104cm・深さ15cm、P3が径35cm・深さ6cmを測る。また、P1からはまとまって川原石が検出された。これらの礫は大きさも形態も統一性がなく、また使用痕等は確認できなかった。

出土遺物は覆土中からの出土である。1は須恵器蓋の天井部分で、扁平な宝珠形を呈する。2は須恵器高台壺の底部である。3~7は須恵器壺で、いずれも底部回転糸切り離しである。8は土師器壺で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。

本址はこれらの出土遺物より8世紀後半に位置づけられる。



第180図 H2号住居址及び出土遺物実測図

No.	施設名	移築	法 築			成 形・調 燥・文 標			考 察	出土地點
			D	B	A	内 面	外 面			
1	須恵器 壺	否	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	完全実績	西区	
2	須恵器 高台壺	否	-	9.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部右回転糸切り→外側回転ヘラケズリ+付西台	完全実績 选择実績	西区	
3	須恵器 壺	新	12.8	6.0	3.5	ロクロナデ 火葬	ロクロナデ 成形底面糸切り(方向不明) 火葬	回転実績 1/4残存	西区	
4	須恵器 壺	新	13.7	7.6	3.5	ロクロナデ 火葬	ロクロナデ 成形右回転糸切り 火葬	完全実績 底部実績	西区	
5	須恵器 壺	新	12.8	7.4	3.7	ロクロナデ 火葬	ロクロナデ 成形右回転糸切り 火葬	回転実績 1/4残存	西区	
6	須恵器 壺	新	12.6	6.4	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ 成形右回転糸切り(方向不明)	回転実績 1/4残存	西区	
7	須恵器 壺	新	-	8.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 痕跡面ヘラ切り	回転実績 底部1/2残存	西区	
8	土師器 壺	新	12.0	6.2	4.5	ミガキ+黒色施錆	ロクロナデ 痕跡糸切り	回転実績 2/3残存	西区	

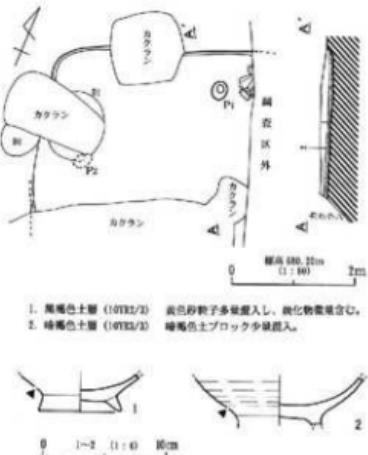
第108表 H2号住居址出土遺物観察表

(3) H3号住居址 (第181図、写真図版四)

本住居址は、調査地点C区南端であるス-117.118、セ-117.118Grに位置する。残存状態は東側を調査区域外に、南側をカクランにより削平されている。D1.2号土坑と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.08m(検出)・西壁2.54m(残存)で、壁高さは北壁東寄りで最大14cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は7.85m²を測る。覆土は非常に浅かったがおおむね自然堆積である。床は軟質で、貼床は全体に4~7cmの厚さで貼られていた。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径32cm・深さ12cm、P2が径31cm・深さ22cmを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土から出土した土師器碗2点を図示した。いずれも底部付近のみの残存である。本址は出土遺物が少なく、所産時期は不明である。



第181図 H3号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	部種	計画	成形・調整・文様			備考	生土位置
				日本古史跡研究会基準	内面	外面		
1	土師器	碗	—	丸底	—	ロクロナデ	ロクロナデ 付西面	完全実測
2	土師器	碗	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ 付西面(巻台欠損)	完全実測

第109表 H3号住居址出土遺物観察表

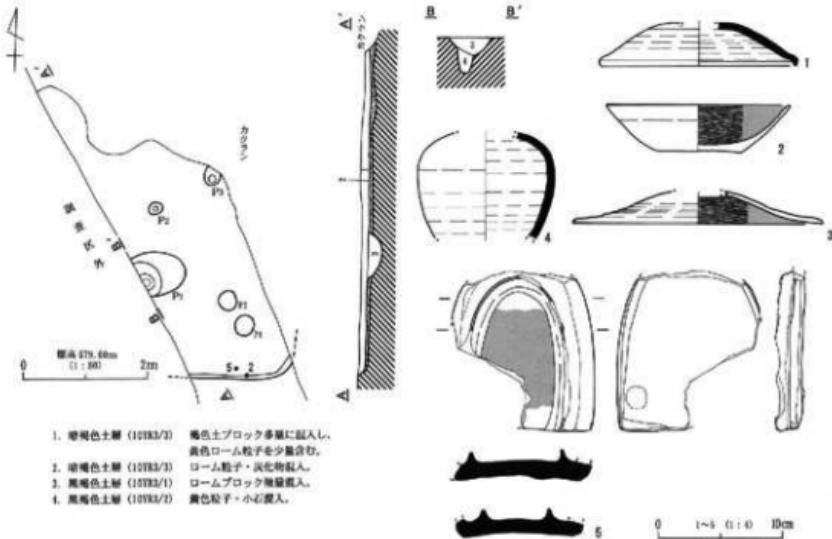
(4) H5号住居址 (第182図、写真図版四)

本住居址は、調査地点C区南であるツ-109.110、テ-109.110Grに位置する。残存状態は南東コーナー側を残して、西側が調査区域外、北側がカクランとなる。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南壁1.46m(検出)・東壁0.35m(残存)で、壁高さは南壁側で最大8cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で7.42m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であったが、貼床は全体に貼られており、厚さは1~8cmを測る。ピットは3カ所確認された。規模はP1が径124cm・深さ57cm、P2が径25cm・深さ8cm、P3が径26cm・深さ5cmを測る。P1が主柱穴だとすると、本址の規模は大型であることが予想される。

本址からの出土遺物は少なく5点を図示した。1は須恵器蓋で僅かに返りが見られる。2は土師器壺で、内面丁寧なミガキと黒色処理を施している。3は大型の土師器蓋とした。内面丁寧なミガキと黒色処理が施されている。4は須恵器壺の肩部から副部であり、自然軸が付着している。5は須恵器の風字硯で貼床内より出土した。形態は二重の堤がめぐる特異な形で、中央の墨を擦る「陸」の部分は非常になめらかになり使い込まれている。また、内側の堤の部分には、墨と思われる付着物が確認できる。裏面は手前側に一箇所「脚」の貼付痕が確認でき、全体には自然軸が付着している(巻頭カラーリンク)。本品は風字硯としては、佐久平で初めての出土となった。かつて、形態は全国的に見て現在までの類例として、山形県天童市に所在する中袋遺跡の性格不明遺構から出土した風字硯があるのみである。今回の出土例は儘田遺跡の性格を考える上でも、非常に貴重な資料である。

本址は特色ある出土遺物があったが、量は少なく遺構の時期決定は難しい。しかし、風字硯が9世紀代から増えること、3の大型の土師器蓋は8世紀代に帰属が求められるが、9世紀前半の所産時期の可能性があると考えたい。



第182図 H5号住居址及び出土遺物実測図

No.	層別	跡種	法 墓 ○(検出面) △(未検出面)	成 田・調 査・文 標		備 考	出土位置	
				内 面	外 面			
1	直立部	壁	15.8	—	ロクロナダ	天井剥離軋へラケギリ 火拂	回転実測 口縁1/3残存	
2	土壌部	坪	14.9	8.8	7.8	ミ型キ-黒色處理	ロクロナダ	完全実測 4/5残存 -5cm 小リ方
3	土壌部	壁	20.2	—	ミガキ-黒色處理	ロクロナダ	回転実測 口縁1/3残存	
4	直立部	長方形	—	—	ロクロナダ	ロクロナダ	回転実測 1/4残存	
5	直立部	扇字形	12.8	10.8	2.4	—	重量207.1kg -4cm 小リ方	

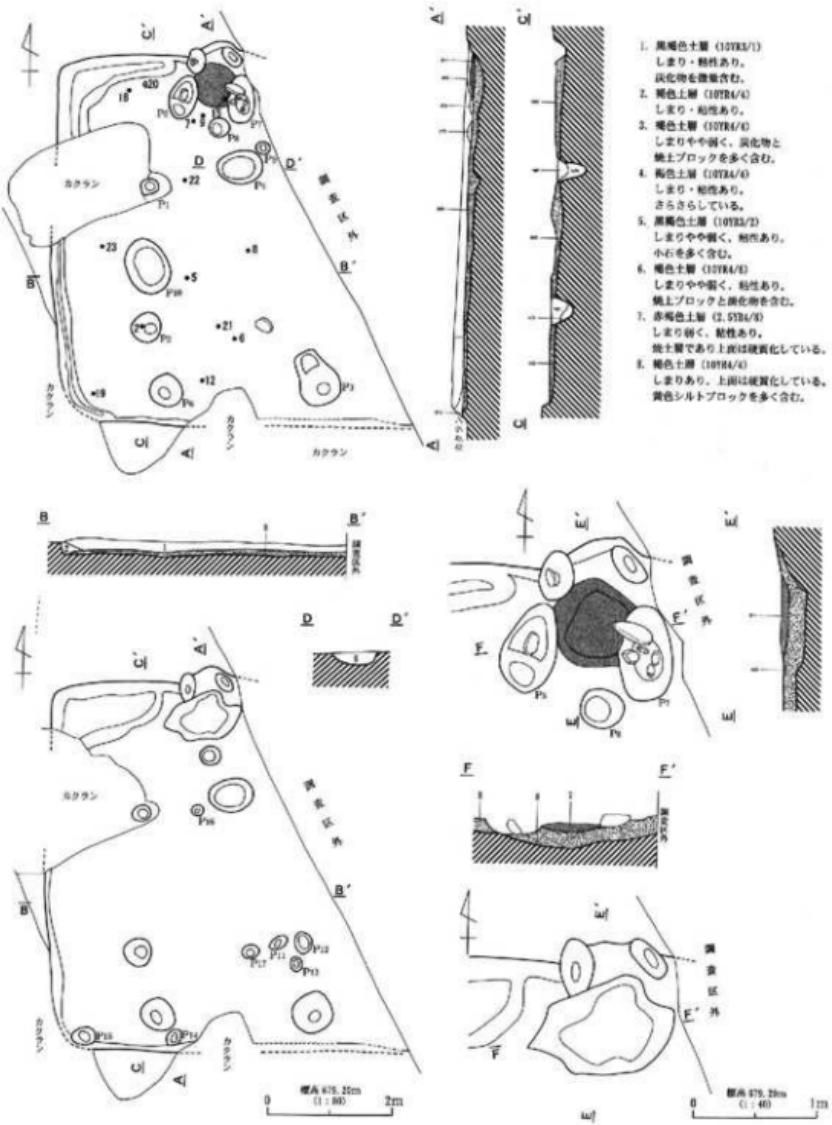
第110表 H5号住居址出土遺物観察表

(5) H 6号住居址 (第183-184図, 写真図版五)

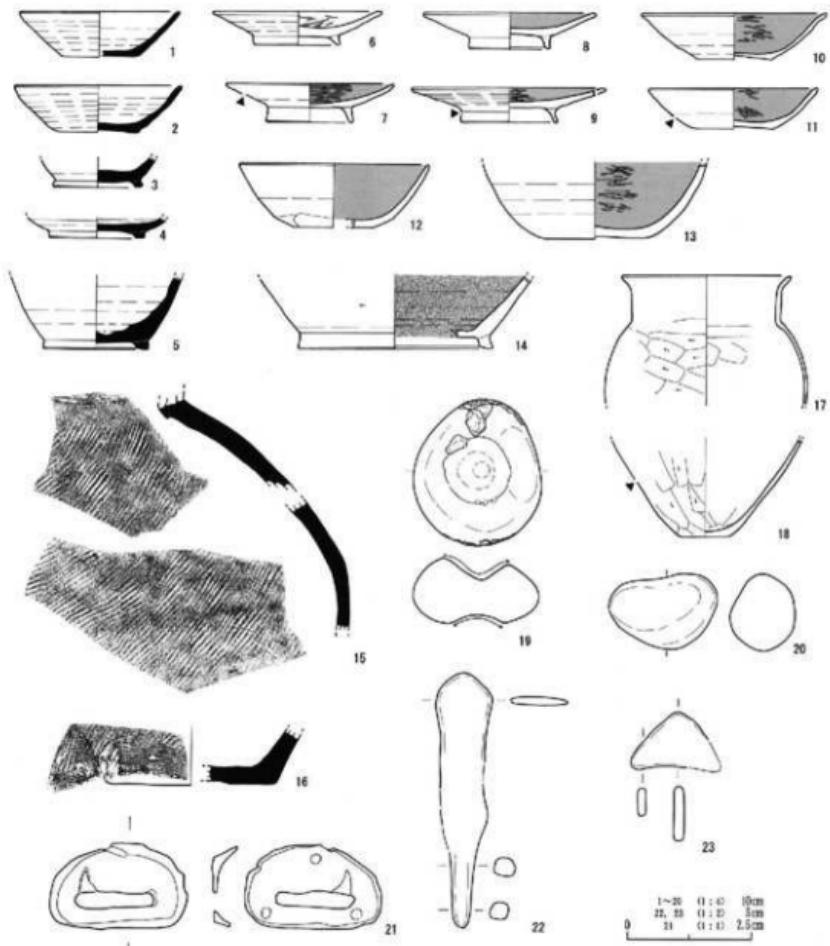
本住居址は、調査地点C区北側であるノ-93.94、ハ-93.94Grに位置する。残存状態は住居址の東側が調査区域外となり、南壁はカクランにより削平されていた。

形態は東西に長い長方形と考えられる。カマドは北壁に造られている。規模は北壁2.93m（検出）・南壁5.42m（検出）・西壁5.35mで、壁高さは南壁で最大13cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で23.22m²を測る。住居址の主軸方位はN°を示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は硬質であり、特にカマド付近が硬かった。貼床は1~9cmの厚さで貼られていた。壁溝は住居址北西コーナーから西壁にかけて検出された。形態は断面U字形で、規模は幅20~68cm・深さ1~17cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め17箇所確認された。P1とP2は主柱穴、P5とP7はカマド袖構築時のピットと考えられる。規模はP1が径30cm・深さ46cm、P2が径50cm・深さ37cm、P3が径92cm・深さ47cm、P4が径73cm・深さ19cm、P5が径73cm・深さ18cm、P6が径56cm・深さ50cm、P7が径75cm・深さ20cm、P8が径35cm・深さ26cm、P9が径23cm・深さ16cm、P10が径90cm・深さ9cm、P11が径30cm・深さ13cm、P12が径36cm・深さ10cm、P13が径22cm・深さ8cm、P14が径30cm・深さ16cm、P15が径39cm・深さ11cm、P16が径19cm・深さ14cm、P17が径28cm・深さ27cmを測る。本址の掘り方はほぼ平坦であったが、北西コーナー部が壁溝を拡幅するように一段深く広く掘り広がっていた。

1. 黒褐色土層 (10YR3/1)
しまり・粘性あり。
炭化物を微量含む。
2. 黄色土層 (10YR4/4)
しまり・粘性あり。
3. 墓土層 (10YR4/6)
しまりやや弱く、炭化物と
焼土ブロックを多く含む。
4. 海色土層 (10YR4/0)
しまり・粘性あり。
さらさらしている。
5. 黑褐色土層 (10YR3/2)
しまりやや弱く、細粒あり。
小石を多く含む。
6. 鹿色土層 (10YR4/6)
しまりやや弱く、粘性あり。
焼土ブロックと炭化物を含む。
7. 赤褐色土層 (2.5YR4/0)
しまり弱く、粘性あり。
焼土層であり上部は焼成化している。
8. 楊色土層 (10YR4/0)
しまりあり。上部は焼成化している。
黄色ルートブロックを多く含む。



第183図 H6号住居址実測図



第184図 H6号住居址出土遺物実測図

本址のカマドは北壁に造られていた。袖構築壁と火床部が残存していた。煙道部は壁よりもあまり飛び出さないタイプであった。袖部は構築時の作業面として手前と奥側に4箇所の掘り込みが検出された。いずれも楕円形の土坑状を呈し、深さは20cm前後を測る。カマド掘り方は火床部下の貼床を剥がすと、不整形の掘り込みが確認された。

本址からの出土遺物は多く、床面やピット内から出土した。1と2は須恵器壺である。2はピット内から出土した。3は須恵器壺の底部である。4は須恵器高台壺の底部で、5は須恵器壺としたが、在地の須恵器としては胎土が白っぽく、一見灰釉陶器に見間違える品である。黒い噴出物が器面にある。

6~9は土師器皿で、6以外は内面黒色処理されている。10~12は土師器壺で、いずれも内面ミガキと黒色処理が施されている。13は土師器の鉢と考えられる。内面黒色処理されている。14は灰釉陶器壺の底部であり、内面に施釉がされている。底部外側は良く磨れており、何かしらの二次利用の可能性がある。15と16は須恵器壺で17と18は土師器壺でいわゆる「武藏窯」のタイプである。19は粗石で両面に敲打の跡がある。20は一部ミガキと考えられる擦れがある。21は銅製帶金具の丸輪で、長方形の窓と内面に留め金が折れた状態が確認できる。22と23は鉄製品で、22は鐵鎌と考えられるが確証を得ない。

本址はこれらの出土遺物から9世紀後半に位置づけられる。

名	種別	器種	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置
			口(内) 直径(外) cm	底(内) 厚 mm	内 面	外 面		
1	須恵器	坪	13.0	6.0 (3.6)	ロクロナデ 火燐	ロクロナデ 旋部凹軸系切り(方向不明) 火燐	四輪穴周 1/4残存	II区
2	須恵器	坪	13.5	6.5 3.7	ロクロナデ 大神	ロクロナデ 底部凹軸系切り 火燐	完全火燐 4/5残存	27cm
3	須恵器	塗	-	7.5	ロクロナデ	ロクロナデ 付高台	四輪穴周 底部3/4残存	
4	須恵器	高台坪	-	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部凹軸系切り+付高台	完全火燐 旋部火燐	
5	須恵器	重	-	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	四輪穴周 火燐1/2残存	7cm
6	土師器	高台壺	13.6	7.0 2.7	ロクロナデ	ロクロナデ 付高台	完全火燐 火燐2/3残存	0cm
7	土師器	高台壺	13.5	7.0 3.1	ロクロナデ ミガキ+黒色處理	ロクロナデ 付高台	完全火燐 火燐火燐	3cm
8	土師器	高台壺	14.0	6.5 2.9	ロクロナデ ミガキ+黒色處理	ロクロナデ 付高台	完全火燐 火燐	0cm
9	土師器	高台壺	15.7	7.8 (2.8)	ミガキ+黒色處理	ロクロナデ 付高台	四輪穴周 3/4残存	2cm
10	土師器	坪	15.0	5.8 3.7	ミガキ+黒色處理	ロクロナデ	四輪穴周 1/3残存	II区
11	土師器	坪	13.6	6.6 3.2	ミガキ+黒色處理	ミガキ 底部火燐	完全火燐 底部火燐	II区
12	土師器	坪	15.3	6.4 3.1	ミガキ+黒色處理	ロクロナデ 底部火燐	四輪穴周 1/3残存	1cm
13	土師器	鉢	-	8.6	ミガキ+黒色處理	ロクロナデ	四輪穴周	
14	灰釉陶器	壺	-	15.6	ロクロナデ 施釉	ミクロナデ 付高台 施底スレ	四輪穴周	
15	須恵器	鉢	-	-	一	平行タキ	四輪穴周	4cm
16	須恵器	壺	-	13.8	-	平行タキ→火燐	四輪穴周 底部1/4残存	II区
17	土師器	壺	13.6	-	一	火燐	四輪穴周	III区
18	土師器	壺	-	4.2	一	火燐ナデ	火燐	
19	粗石	壺	44	残存高 内径 外径 底大深 重 量	4.4 11.7 10.2 5.4 750.00	円錐 5.1×0.3(正) 4.5×0.0(裏) 四輪 1.6(0.7) 壁 正・裏面にくぼみ L・下端部に敲打痕	四輪穴周	出土位置
20	不明	角形宝山壺	-	8.7 6.1 5.5	350.00		4.5cm	
21	金具(丸輪)	銅	次項	2.8 1.7			3.5cm	
22	鉄鎌?	鉄	-	10.2 2.3 0.7			6cm	
23	不明	鉄	-	2.2 3.6 0.4			1cm 2cm	

第111表 116号住居址出土遺物観察表

(6) H7号住居址 (第185図、写真図版四)

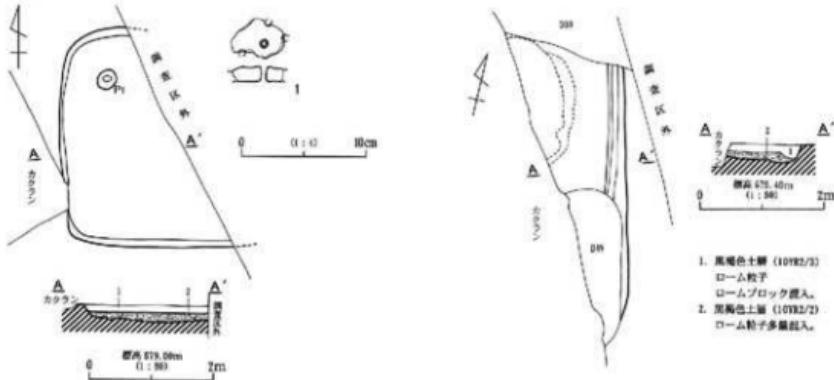
本住居址は、調査地点C区北側であるハ-91.92、ヒ-91.92Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.83m(検出)・南壁2.62m(検出)・西壁3.08mで、壁高さは南壁中央で最大16cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の主軸方位はN°を測る。住居址の床面積は検出部分で5.79m²を測る。覆土はおおむね自然堆積で単層である。床は全体的に軟質であった。貼床は8~21cmの厚みで貼られている。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径31cm・深さ7cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示してきた遺物は1点のみであった。1は土師器壺の底で4つの穴が確認できる。本址は出土遺物が少なく所産時期は不明である。

名	種別	器種	法量		成形・調整・文様		備考	出土位置
			口(内) 直径(外) cm	底(内) 厚 mm	内 面	外 面		
1	土師器	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	四輪穴周 壁部 II区

第112表 H7号住居址出土遺物観察表



1. 黒褐色土層 (10TR2/2)
しまり・粘性あり。
白色シルトブロック含む。
2. 白褐色土層 (10TR3/4)
しまり・粘性あり。
白色シルトブロックと白色土の混合。

第185図 H7.8号住居址及び出土遺物実測図

(7) H 8号住居址 (第185図、写真図版六)

本住居址は、調査地点C区南側であるチ-109.110、ツ-109.110Grに位置する。残存状態は西側がカクラン、北側がD30号土坑によって削平されている。

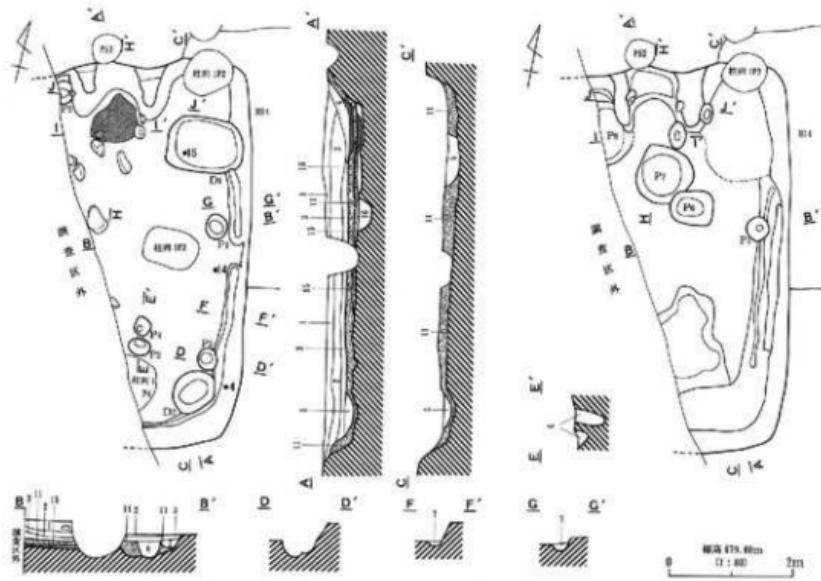
形態は不明である。規模は東壁4.08m(残存)で、壁高さは東壁で最大12cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で3.01m²を測る。覆土はおおむね自然堆積であった。壁溝は東壁側で検出され、規模は幅25~35cm・深さ3~7cmを測る。

本址からの出土遺物は図示できるものではなく、須恵器片2点、土師器片2点が出土したのみである。よって本址の所産時期は不明である。

(8) H 9号住居址 (第186~187~188図、写真図版六・七)

本住居址は、調査地点C区南側であるナ-104.105.106、ニ-104Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。また、H14号住居址と1号柱列と重複関係にあり、本址が一番古い。

形態は南北方向に長い方形を呈すると考えられる。北壁にカマドが造られている。住居址の主軸方位はN-13°-Wを測る。規模は北壁3.02m(検出)・南壁1.27m(検出)・東壁5.87mで、壁高さは南東コーナー部で最大39cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で12.24m²を測る。覆土は自然堆積であり、床は全体的に硬質であった。貼床は1~25cmの厚みで貼られており、特にカマド周辺の北側を中心に床の張り替えが確認でき、古い貼床に伴うようにカマド火床部も検出された。壁溝は東壁と南壁で検出された。規模は幅32~54cm・深さ1~12cmを測る。ピットは掘り方検出時も含め8箇所検出された。P6~8は床下土坑の可能性がある。規模はP1が径42cm・深さ27cm、P2が径35cm・深さ26cm、P3が径35cm・深さ22cm、P4が径31cm・深さ51cm、P5が径37cm・深さ16cm、P6が径70cm・深さ27cm、P7が径93cm・深さ15cm、P8が径90cm・深さ18cmを測る。また本址は床を切り込むように2箇所の土坑が検出された。D1は住居址の北壁よりから検出され、形態は長方形である。規模は長軸122cm・短軸86cm・深さ32cmを測る。D2号土坑は住居址の南東コーナー部にあり、形態は楕円形である。規模は長軸75cm・短軸60cm・深さ19cmを測る。本址の掘り方



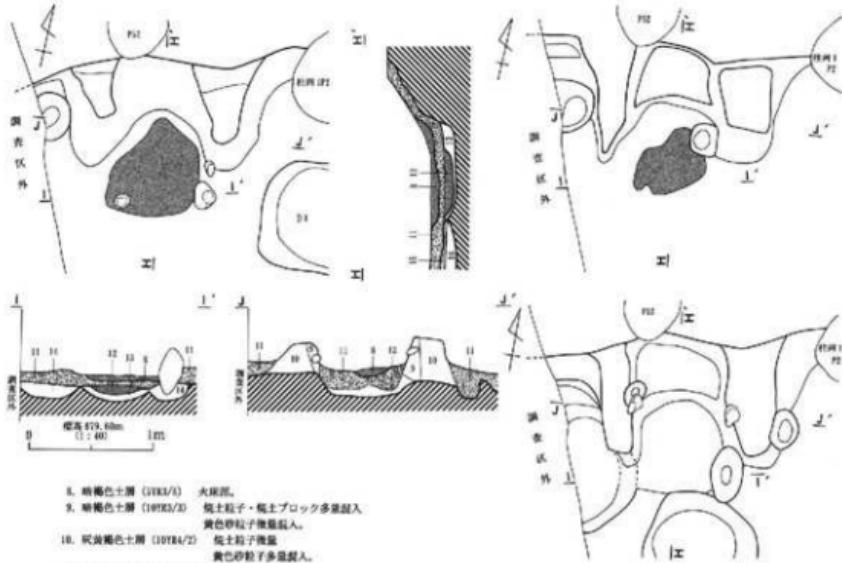
- 黒褐色土層 (10033/2) 砂を多く含み、炭化物少量混入。
- 黒褐色土層 (10032/2) 炭化物・ローム粒子混入。
- 黒色土解 (10032/1) 炭化物多量、ローム粒子少量混入。
- にE53 黒褐色土層 (10033/4) 灰土ブロック、炭化物・ロームブロック混入。カマド壁面。

- 黒褐色土層 (10033/3) 炭化物・ロームブロック混入。
- 黒褐色土層 (10032/1) 炭化物・砂粒子少量混入。
- 黒褐色土層 (10032/2) 炭化物・ローム粒子少量混入。
11. 黒褐色土層 (10033/4) ローム粒子多量に混入。

第186図 H19号住居址実測図

No.	種別	計得	法基 L:南北 W:東西 H:高さ	成形・調査・文様		考	出土状況	
				内面	外面			
1	窓枠	直	17.2	—	ロクロナデ 大棒	ロクロナデ 水棒	回転実測 1/4塊市 IV区	
2	窓枠	直	15.8	—	ロクロナデ 大棒	ロクロナデ 大井部斜面ヘラケズリ 水棒	回転実測 1/4塊市 I・IV区 21°傾斜	
3	窓枠	坪	13.1	8.2	3.6	ロクロナデ 大棒	ロクロナデ 脊部斜面ヘラケズリ 水棒	完全実測 灰塗泥壁 I・II区
4	窓枠	坪	13.0	8.0	3.6	ロクロナデ 大棒	ロクロナデ 脊部斜面ヘラケズリ 水棒	完全実測 灰塗泥壁 30.5cm IV区
5	窓枠	坪	13.8	7.4	3.6	ロクロナデ 大棒	ロクロナデ 脊部斜面(各切方向不明) 水棒	回転実測 1/2塊市 II区 カマド
6	上棟柱	坪	—	—	ミガキ→黒色處理	ロクロナデ 剥離	側片実測 II区	
7	上棟柱	磚	—	—	ナデ	ナデ	完全実測 P4	
8	上棟柱	坪	15.0	7.4	4.8	ミガキ→黒色處理	ロクロナデ 破壊ヘラケズリ	回転実測 口壁 L/3残存
9	上棟柱	坪	15.0	8.2	4.0	ミガキ→黒色處理	ロクロナデ 破壊ヘラケズリ	回転実測 1/3残存
10	下棟柱	壁	20.8	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測 II区	
11	下棟柱	壁	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ 平行タキ	回転実測 窓部 L/3残存 I・II区	
12	下棟柱	實	—	—	ロクロナデ 既日痕	ロクロナデ 平行タキ	回転実測 II区	
13	排水渠	實	24.4	18.2	(19.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 16cm I・II・IV区
No.	種別	計得	法基	既存空隙	最大長	最大幅	高さ	所
14	軸	軸	—	欠損	9.9	3.8	2.7	出土状況
15	鷹合具	鋼	丈	丈	2.0	4.2	—	26cm
16	石脚	黒曜石	—	—	3.3	1.0	1.1	目前穴あり。厚度約10cm D1
					2.78			III区

第113表 H19号住居址出土遺物観察表

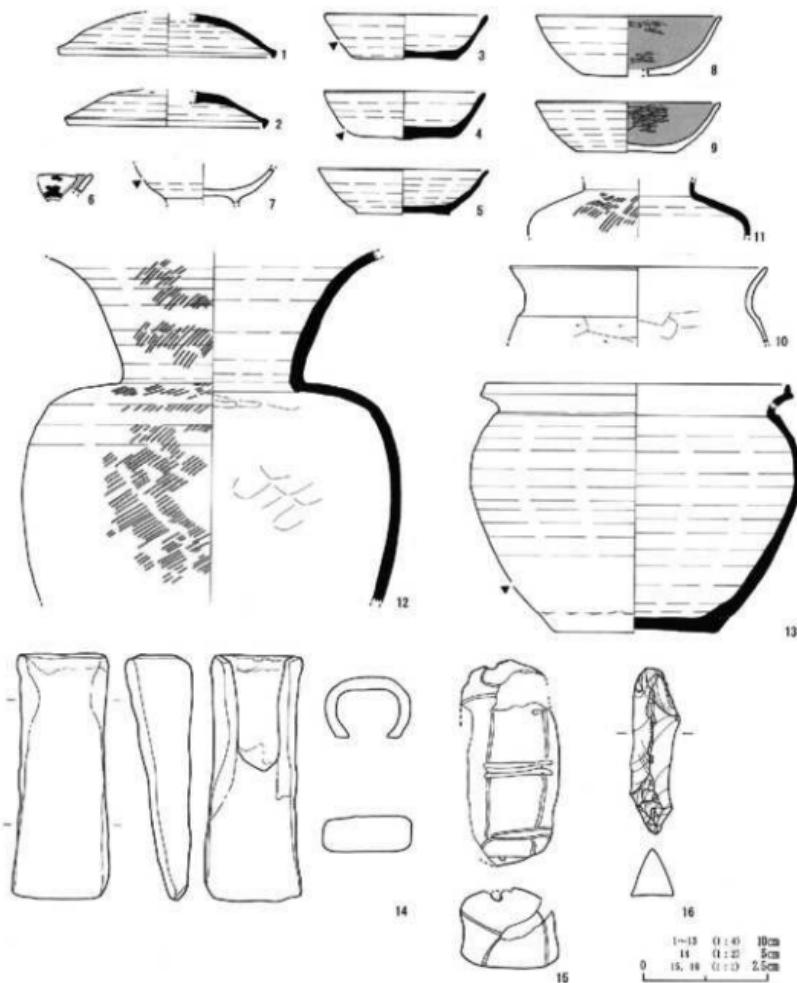


第187図 H19号住居跡カマド実測図

は、南壁際が一段低く掘り込まれておらず、土坑状を呈する。

カマドは北壁の中央部に造られている。袖と火床部が確認された。煙道部は住居址壁よりも飛び出さないタイプのものであり、燃焼部と煙道部の部分には貼床と同じ土が構築土として使われていた。袖は地山を僅かに掘り残し、その上に灰黄褐色の土を構築土として使用していた。袖の芯材として川原石等は使われていなかった。袖の規模はいずれも41~45cmの高さがあった。火床部は先にも述べたが、2面検出された。上面の火床面は床の構築土の上に造られており、上面は良く焼けて硬質化していた。下面の火床部も掘り込み面の上に構築土がある。下面の火床面も表面は硬質化が見られ、よく焼けていた。いずれも焼土の厚みは8cmを測る。カマド掘り方は焚口部に一箇所ピットが検出された。径45cm・深さ12cmを測る。

本址からの出土遺物は比較的多く、覆土やカマドから出土した。1と2は須恵器の蓋である。いずれもつまみ部は欠損するが、返りの部分はやや内湾気味に屈曲する。3~5は須恵器壺である。いずれも底部回転系切り離しが行われている。6は土師器壺で内面黒色処理されている。外面に墨書が確認できるが、判読できない。8と9は土師器壺で、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。10は土師器壺で、いわゆる「武藏壺」と呼ばれるタイプの壺で、口縁部は「コ」の字状に屈曲する。11は須恵器壺の肩部と考えられる。外面に敲きが確認できる。12は須恵器で大型の壺と考えられる。胴部は平行タタキが行われ、口縁部はタタキ目をナデによりすり消している。13は須恵器広口の壺であり、胴部はロクロ成形である。口唇部は上方に向つまみ出したような形状である。14は鉄斧であり、住居址覆土中の床面から25cm浮いた状態で出土した。ただ、本址は調査当初に重複するH14号住居址と新旧完形を逆に調査してしまった為、本鉄斧は出土位置からH14号住居址の遺物とも考えられる。な



第188図 H14号住居址出土遺物実測図

お、H14号住居址床面からは20cm程浮いた状態である。鉄斧の形状は装着部分の鉄を丸く曲げて納める形態である。15は青銅製の刀装具と考えられる。D1号土坑から出土した。形態から鞘尻部分の可能性がある。沈線による区画の紋様があり、目釘の穴が1箇所確認できる。なお、表面には黒漆を塗装したような痕跡が確認できる。16は黒曜石の石錐と考えられる。

本址はこれらの遺物から、8世紀後半の所産が考えられる。

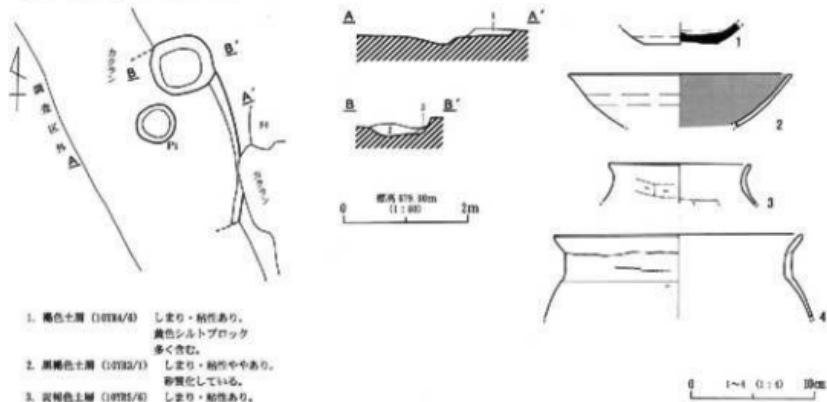
(9) H10号住居址 (第189図、写真図版八)

本住居址は、調査地点C区北側であるハ-93.94、ヒ-93.94Grに位置する。残存状態は西側がカクランにより削平されており、東壁のみの検出である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は東壁3.12m(残存)で、壁高さは東壁で最大12cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は確認されなかった。ピットは1箇所確認され、規模はP1が径62cm・深さ10cmを測る。また、北東コーナー部に貯藏穴と考えられる土坑が検出された。形態は隅丸の方形で、規模は長軸100cm・短軸90cm・深さ30cmを測る。

本址からの出土遺物は少なく、図示した遺物はすべて貯藏穴から出土した。1は須恵器壺の底部である。2は土師器壺か皿の口縁部で、内面黒色処理が施されている。3は土師器の小型甕の口縁部である。4は土師器甕で口縁部が「コ」の字状に屈曲する。

本址の所産時期は遺物は少量であるが、図示したこれらの遺物から9世紀後半と考えられる。



第189図 H10号住居址及び出土遺物実測図

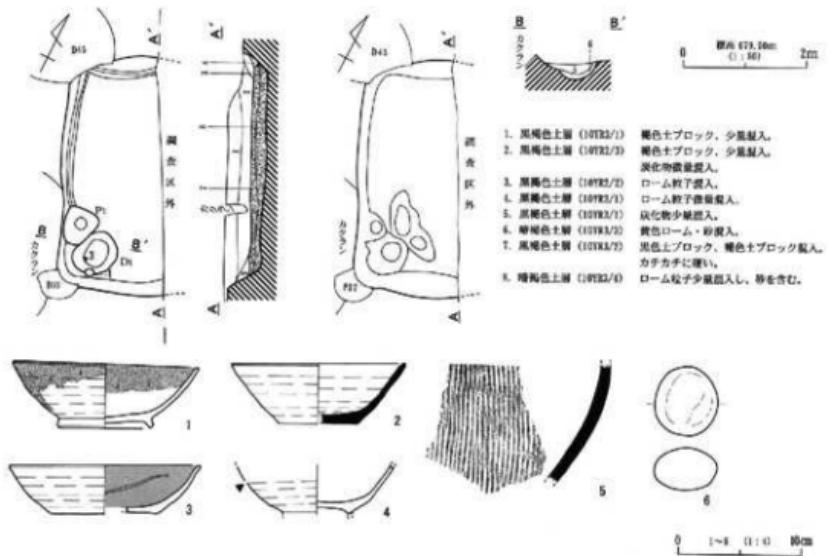
No.	種別	基標	法線	成形・調整・文様		参考	出土位置
				内面	外面		
1	須恵器	壺	—	ムク	ロクロナデ	ロクロナデ	東部右側斜角部
2	土師器	盤	18.0	—	ロクロナデ 黒色施釉	ロクロナデ	東部右側斜角部
3	土師器	甕	11.4	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	東部右側斜角部
4	土師器	甕	20.0	—	ヘラナデ	ヘラケズリ	東部右側斜角部

第114表 H10号住居址出土遺物観察表

(10) H11号住居址 (第190図、写真図版八)

本住居址は、調査地点B区中央であるナ-102.103Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる他は良好である。重複関係は本址が一番古い。

形態は方形を呈する。規模は北壁1.14m(検出)・南壁1.64m(検出)・西壁3.32mで、壁高さは南壁中央で最大34cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.92m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは3~26cmで貼られていた。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径58cm・深さ24cmを測る。また、住居址の南西コーナー部には円形の土坑が検出された。規模は長軸74cm・短軸60cm・深さ29cmを測る。本址の掘り方は、住居址南西コーナーが不整形の掘り込みがなされていた。



第190図 H11号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法量	成形・調整・文様			備考	出土位置
				口幅(径)×底面幅×高さ	内面	外面		
1	灰釉陶器	壺	15.0 7.7 9.2	ロクロナデ 裂縫(ハケ)	ロクロナデ 裂縫(ハケ)付高台	定型実測	0cm	
2	須恵器	环	14.2 6.4 6.8	ロクロナデ	ロクロナデ	同上	1/2既存	未
3	土師器	壺	15.4 8.4 8.9	黑色処理 焼文	ロクロナデ	同上	1/3既存	-14cm D1
4	土師器	壺	- - -	ロクロナデ	ロクロナデ スズ付着 付高台	定型実測		
5	須恵器	壺	- - -	ヲサ	平行タキ	破損実測		
6	器種	素 材	残存部 最大長 最大幅 最大厚 重量		所見			出土位置
6	磨き石	火山岩	5.4 5.1 3.4 127.72					

第115表 H11号住居址出土遺物観察表

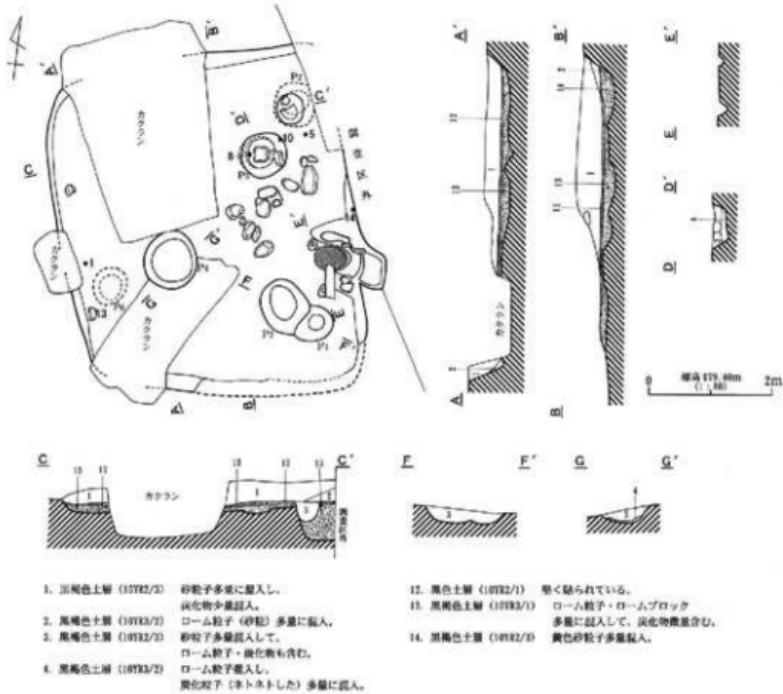
本址からの出土遺物は、覆土から出土した。1は灰釉陶器壺でD1号土坑脇の床面から出土した。口縁部を一部欠損する他は完形である。釉はハケ塗りである。2は須恵器環である。焼成が甘いのか黒斑が付いたようになっている。3は土師器壺で内面黒色処理が行われ、暗文風のミガキが施されている。4は土師器壺で、内面は黒く、外面に煤のような付着部があり、燈明皿等の使用が考えられる。5は須恵器壺の破片であり、外面タタキが施されている。6は磨き石である。

本址はこれらの中から、9世紀後半の所産時期と考えられる。

(11) H12号住居址 (第191-192図、写真図版九)

本住居址は、調査地点C区中央であるナ-101.102、ニ-101.102、ヌ-101.102Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外、北西側がカクランにより削平されている。

形態は方形を呈する。カマドは東壁に造られている。住居址の主軸方位はN-16°-Wを測る。規模は北壁1.46m(検出)3.73m(推定)・南壁0.60m(検出)4.20m(推定)・西壁4.76m(推定)・東壁3.70m(推定)で、壁高さは南壁中央で最大60cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で21.23m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であった。

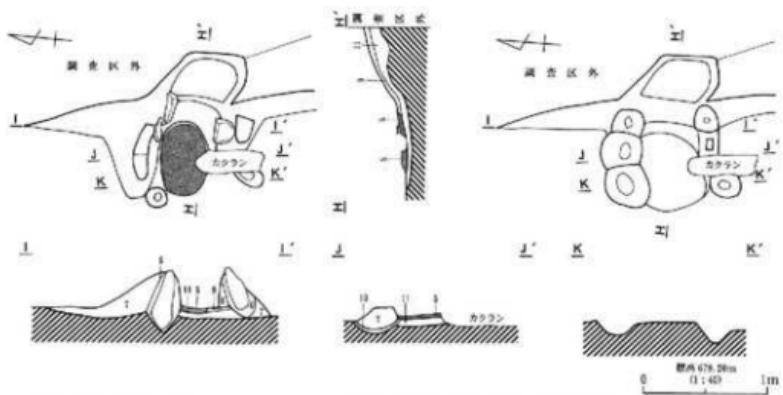


第191図 H12号住居址実測図

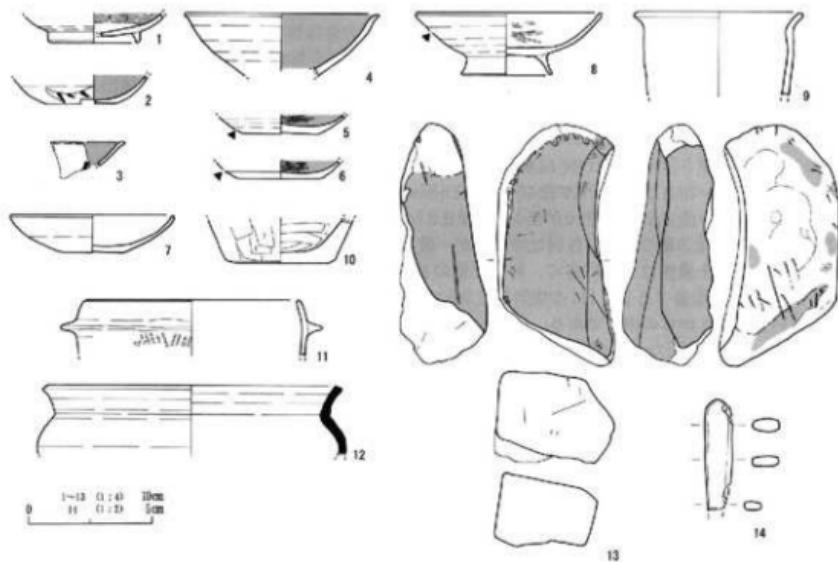
貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~30cmで貼られていた。また、床面には人頭大の礎が多く出土した。ピットは6箇所検出された。各ピットの検出位置に規則性はなかった。ピットの規模はP1が径66cm・深さ18cm、P2が径50cm・深さ56cm、P3が径80cm・深さ30cm、P4が径91cm・深さ28cm、P5が径72cm・深さ26cm、P6が径60cm・深さ25cmを測る。

カマドは東壁やや南寄りで検出された。カマドの主軸方位はN-89°-Eを測る。袖・火床部・煙道部が検出された。煙道部は住居址壁よりやや飛び出すタイプで、煙道長さは55cmである。袖は芯材として川原石を縦に立て、その周りを純い赤褐色土で構築している。袖の高さは34~37cm残存していた。火床部は良く焼けており、上面は硬質化していた。焼土の厚みは5cmを測る。カマド掘り方は袖部下にそれぞれ構築材の石を立てたと考えられるピットが検出された。形態はいずれも円形が連続した状態で、規模は径19~37cm・深さ5~20cmを測る。

出土遺物は覆土中や床面から多く出土した。1は灰釉陶器碗で西壁際から出土した。内面に施釉が施されているが、施釉方法は確定できない。2と3は土師器壺である。いずれも外面に墨書が確認できるが判読はできない。4~6は土師器壺で、いずれも内面黒色処理されている。7は土師器壺である。8は土師器碗である。9は土師器の小型壺で口縁部の屈曲が弱い。10は土師器壺の底部と考えられる。11は土師器の羽釜で外面にハケ目が残る。12は須恵器の広口壺の口縁部である。13は砥石で3面に研磨があり、一面には刃物傷のような痕跡がある。14は鉄製品で種別は不明である。



3. 暗赤褐色土層 (5183/3) 灰灰泥。
 4. 黑褐色土層 (5183/3) 灰化物・黃色砂粒子少量混入。
 5. にぶい赤褐色土層 (5183/3) 黄色砂粒子
 ローム・乾土多量に含む。
 6. 暗暗赤褐色土層 (5183/4) 乾土粒子多量に混入し、
 灰・灰化物少微量。



第192図 H12号住居址カマド及び出土遺物実測図

No	種別	器種	法量	成形・調理・文様				備考	出土位置
				内面	背面	侧面			
1	灰陶器	碗	- 7.4	- ロクロナデ 施加	リクリナデ 底部回転ヘラケズリ・付高付	回転実施	2cm		
2	土師器	杯	- 5.6	- ミガキ・黑色處理	ロクロナデ 施加回転ホルマリ	回転実施 武部1/3焼造	P3		
3	土師器	杯	-	- 3 ガキ・黑色處理	ロクロナデ 磨擦	鏡片丈削			
4	土師器	杯	15.6	-	黑色處理	ロクロナデ	回転実施 口縁1/8焼存		
5	土師器	杯	- 6.0	- ミガキ・黑色處理	ロクロナデ 底部回転ホルマリ(方向不明)	完全実施 底部2/3焼存	1cm		
6	土師器	杯	- 7.0	- ミガキ・黑色處理	ロクロナデ 施加右回転ホルマリ	完全実施			
7	土師器	杯	13.2 4.8	3.0	ロクロナデ	リクリナデ	P6		
8	土師器	碗	15.0 7.3	8.0	ミガキ	ロクロナデ 付高台	完全実施	-15cm P5	
9	土師器	碗	13.6	-	ナデ	ナデ	回転実施	里口カリ方	
10	土師器	甕	- 8.6	- ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実施	16cm		
11	土師器	甕	17.2	-	ナデ	ハケ付	回転実施	II区	
12	須恵器	甕	23.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実施		
13	砾石	素 材	残存量	最大長	最大幅	底大厚	重 量	所 見	出土位置
13	砾石	砂岩	19.3	9.5	7.1	1424.42	トに表面と側面使用	0cm	
14	不明	素 材	(4.4)	1.1	0.6			0cm	

第116表 H12号住居址出土遺物観察表

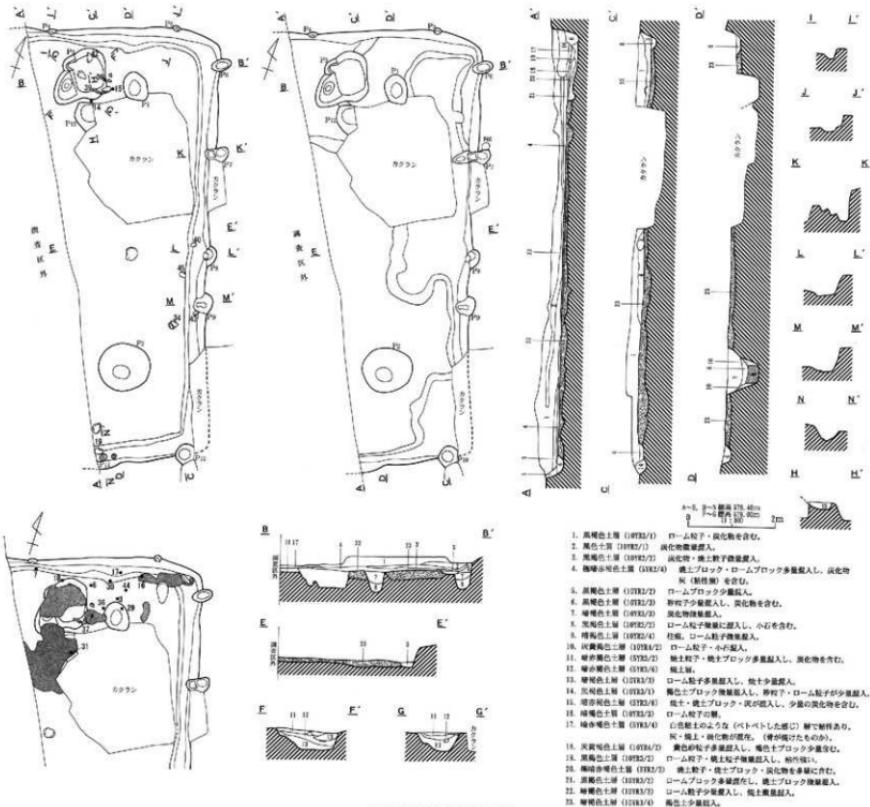
本址はこれらの出土遺物から10世紀前半に位置づけられると考えられる。

(12) H13号住居址 (第193・194・195図、写真図版十・十一)

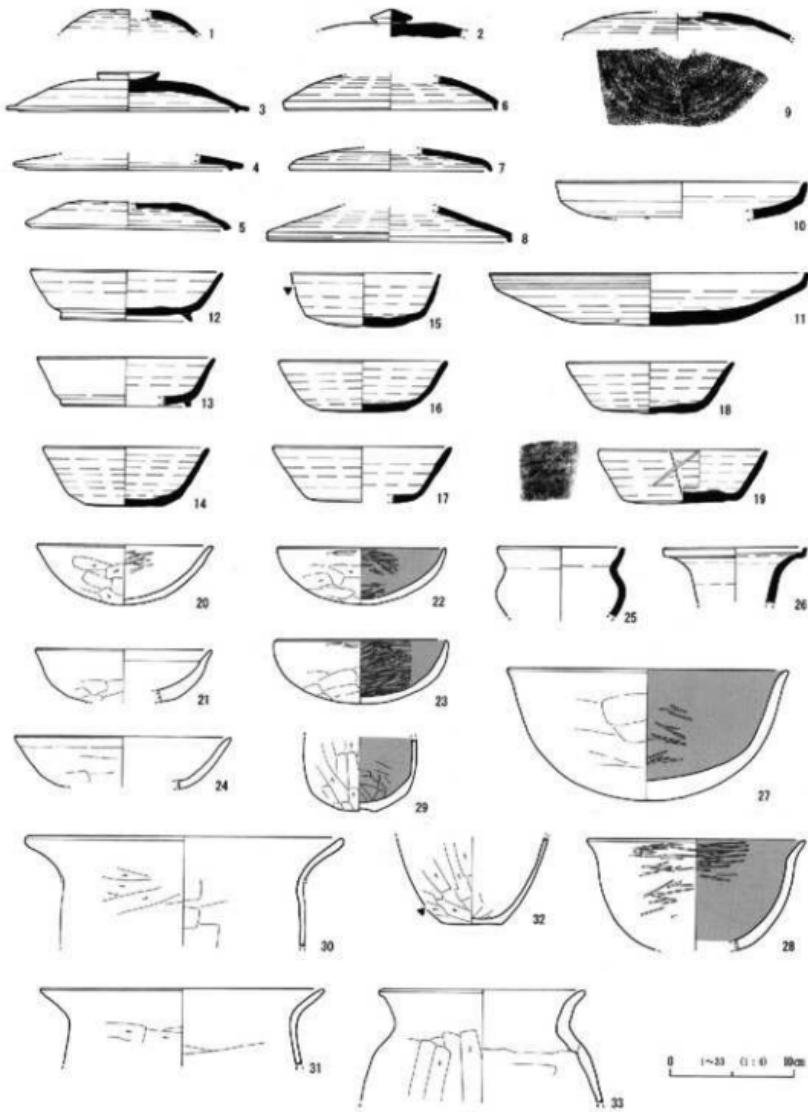
本住居址は、調査地点C区中央であるヌ-99.100.101、ヌ-99.100Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは今回の調査では検出されなかったが、P3周辺には焼土と粘土が大量に検出されたことから、北壁側に造られていたと考えられる。規模は北壁4.42m（検出）・南壁2.46m（検出）・東壁9.20m（推定）で、壁高さは東壁で最大40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で30.04m²を測り、壁長から推定すると住居址全体の規模は100m²に近い、超大型の竪穴住居址の可能性がある。住居址の主軸方位はN-15°-Wを測る。覆土はおおむね自然堆積であったが、1層中に炭化物を含む間層がある。床は全体的に硬質で、特に住居址北側が硬かった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは1~22cmで貼られている。壁溝は検出された壁に全周しており、形態は逆台形である。規模は幅21~58cm・深さ2~19cmを測る。ピットは12カ所確認された。P2は主柱穴、P4~P10は壁柱穴と考えられる。またP3は貯蔵穴的な位置である。規模はP1が径70cm・深さ53cm、P2が径118cm・深さ86cm、P3が径152cm・深さ47cm、P4が径24cm・深さ26cm、P5が径17cm・深さ26cm、P6が径46cm・深さ68cm、P7が径50cm・深さ58cm、P8が径47cm・深さ50cm、P9が径46cm・深さ59cm、P10が径48cm・深さ27cm、P11が径17cm・深さ7cm、P12が径60cm・深さ15cmを測る。本址の掘り方は、住居址中央部が一段高くなる掘り方で、段差は4~7cm程を測る。

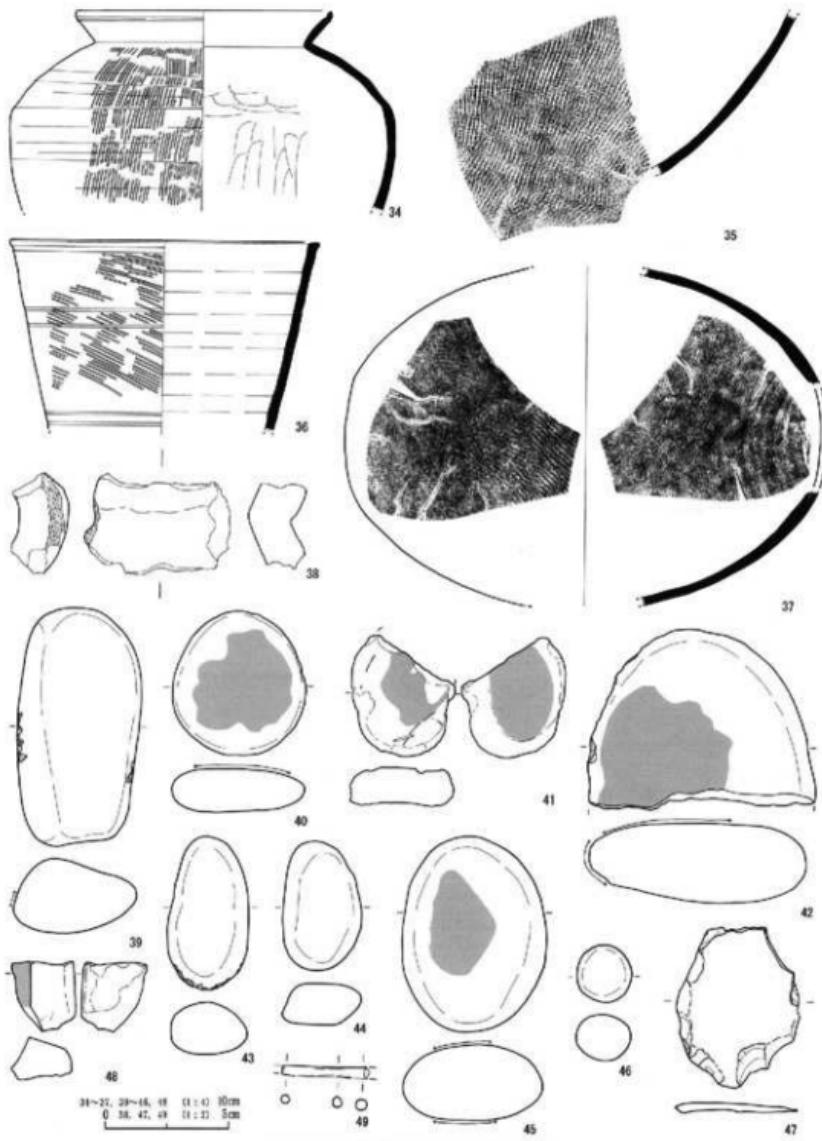
本址からの出土遺物は非常に多く、特に北壁のP3から北東コーナーにかけての床面上から出土した。1~9は須恵器蓋である。1は古墳時代以来の須恵器蓋の形態で、天井部が丸くヘラケズリが行われている。P1からの出土である。2は宝珠形のつまみが付くタイプで、覆土中からの出土である。3はつまみ部が環状となる形態の蓋で、返りも端部ではなく内面側にある。これらのタイプは西毛地域の秋間窯址群や藤岡窯址群を中心に製作されたと考えられている。4は3と同じく内面に返りがあるものである。5は返りがなく端部に面取りが施されている。6~8は端部が「く」の字に屈曲するタイプであるが、端部の形状はいずれも違う。9は内面に當て具痕の痕跡が残る。10と11は須恵器の盤或いは皿で、11は大型品である。いずれも覆土中からの出土であり、残存部も少ない。12と13は須恵器の高台杯である。14~19は須恵器杯である。いずれもロクロ成形で底部はヘラ切りであるが、18のみ回転ヘラ切りである。また、16は他のものに比して赤化している。19は体部外面に焼成前のヘラ記号「X」がある。20~24は土師器杯であり、いずれも7世紀代に出現していくタイプのものである。22と23は内面ミガキが施され黒色処理されている。25は須恵器の小型の広口壺、26は須恵器の長頸壺の口縁部と考えられる。27と28は土師器鉢である。いずれも内面ミガキと黒色処理が施されている。29~33は土師器甕で、33は器厚があり外縁縱方向の削りが施されており、古墳時代以来の



第193図 H13号住居跡実測図



第194图 H13号住宅出土遗物实测图(1)



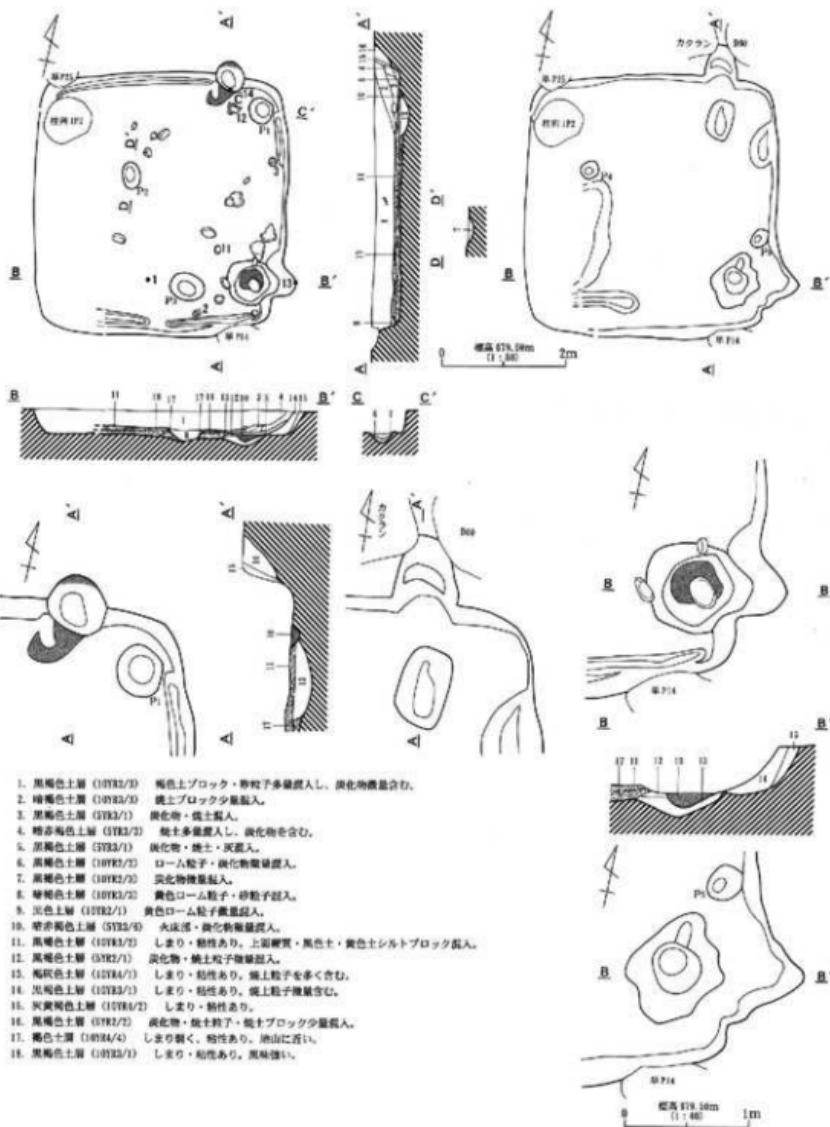
第195图 H113号住宅出土遗物实测图(2)

No.	種別	器種	法 線		成形・調査・文様				備考	出土位置	
			上部斜面	底部	内 面	外 面	底	内			
1	須恵器	盃	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 大井部四輪ヘラケズリ	回転実測 1/4残存	P1			
2	須恵器	盃	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部四輪ヘラケズリ	回転実測	IV区			
3	須恵器	盃	19.5	-	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部四輪ヘラケズリ	完全実測 4/5残存	3.5cm P1			
4	須恵器	盃	18.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 1/7残存	P3			
5	須恵器	盃	16.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部四輪ヘラケズリ	回転実測 1/5残存	P1			
6	須恵器	盃	17.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 1/3残存	10cm			
7	須恵器	盃	16.2	-	ロクロナデ	ロクロナデ 大井部四輪ヘラケズリ	回転実測	IV区			
8	須恵器	盃	19.6	-	ロクロナデ	ロクロナデ	同軸実測 1/8残存	茎灰			
9	須恵器	盃	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部四輪ヘラケズリ	回転実測	IV区			
10	須恵器	盤(口底)	20.4	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部四輪ヘラケズリ	回転実測 1/5残存	IV区			
11	須恵器	盤(口底)	26.0	-	ロクロナデ	ロクロナデ 底部四輪ヘラケズリ	回転実測	I・IV区			
12	須恵器	高台片	15.6	10.6	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ 既成四輪ヘラケズリ+付高台	回転実測 1/4残存	1.5cm あり方		
13	須恵器	高台片	14.1	10.4	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ 既成四輪ヘラケズリ+付高台	回転実測 1/4残存	4.5cm		
14	須恵器	片	13.4	8.6	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底部八角切り	回転実測 1/5残存	-6cm ホリカ		
15	須恵器	片	12.0	6.2	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ 底部八角切り	回転実測 3/4残存	2cm ホリカ		
16	須恵器	片	13.6	6.9	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部八角切り	完全実測 完形	1.4cm		
17	須恵器	片	14.4	8.6	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 1/5残存	15cm		
18	須恵器	片	13.6	7.9	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ 底部八角切り	完全実測 2/5残存	0cm		
19	須恵器	片	13.6	9.1	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ 底部八角切り	完全実測 3/4残存	0cm		
20	土師器	片	14.2	-	4.8	ミガキ	ヘラケズリ	回転実測 1/2残存	IV区		
21	土師器	片	14.2	-	ナダ	ヘラケズリ+ナダ	回転実測 1/5残存	I・II区			
22	土師器	片	13.6	-	4.6	ミガキ+黑色乳頭	ロミミガキ 体部八角ケズリ	同軸実測 1/3残存	P3 IV区		
23	土師器	片	14.0	-	5.1	ミガキ+黑色乳頭	ロミミガキ 体部八角ケズリ+ナダ	回転実測 1/2残存	P1 III区		
24	土師器	片	17.4	-	-	ナダ	ヘラケズリ+ナダ	回転実測 1/2残存	IV区		
25	須恵器	壺	10.4	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 口縁1/4残存	I・II区		
26	須恵器	壺	11.6	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 口縁1/4残存	IV区		
27	土師器	壺	22.6	-	-	ミガキ+黑色乳頭	ヘラケズリ+ナダ	同軸実測 1/4残存	P3 II区		
28	土師器	壺	17.6	-	-	ミガキ+黑色乳頭	ヘラケズリ+ミガキ	回転実測 口縁1/5残存	P3		
29	土師器	壺	-	-	-	ヘラケズリ+黑色乳頭	ヘラケズリ	回転実測 武藏2/3残存	3cm		
30	土師器	壺	23.6	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	完全実測 口縁1/5残存	8cm		
31	土師器	壺	22.8	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転実測 1/1残存	0cm		
32	土師器	壺	-	4.8	-	ヘラナダ	ヘラケズリ	完全実測 唇部完形	P1 II区		
33	土師器	壺	16.6	-	-	ヘラケズリ	ヘラケズリ	回転実測 1/1残存	P3		
34	須恵器	壺	20.4	-	-	ロクロナデ 当真痕	ロクロナデ 平行タタキ	回転実測 口縁1/4残存	10cm IV区		
35	須恵器	壺	-	-	-	ナダ	平行タタキ	新実測	IV区		
36	須恵器	瓶	25.0	-	-	ロクロナデ	平行タタキ	回転実測 口縁1/6残存	9~15cm P3		
37	須恵器	瓶	-	-	-	ロクロナデ 当真痕	ロクロナデ 平行タタキ	回転実測	5cm		
38	土製品	羽口	外部6.0 内径2.6	-	-	ナダ	ナダ ノ付蓋		IV区		
No.	種別	基材	残存高	底面長	底面幅	底面深	重量	所見		出土位置	
39	磁石	砂岩	19.0	10.0	6.8	1570.00	表面に滑石痕、無釉有り(上半部少白色)			>20cm P3	
40	磁石	安山岩	11.5	10.8	3.5	560.00	正面上に凹凸			16cm	
41	磁石	白板岩	9.7	8.2	3.6	50.84	上部欠損			10cm	
42	骨器	鹿角製削骨	(14.4) (18.0)	(6.5)	(2140.00)	下部欠損正面に擦り跡(骨石の機械削)左側の削離は使用のためか不明			17cm P3		
43	骨器	鹿角安山岩	12.2	6.5	4.3	430.00	下端部に擦打痕			11cm	
44	骨器	角閃石安山岩	10.3	6.4	3.6	360.00				8cm	
45	磁石	隕石安山岩	15.6	11.7	6.3	1660.00	正・裏面に擦り跡			6cm	
46	磁石	安山岩	4.6	4.4	3.7	51.00				1cm	
47	陶片	砂質泥岩	6.5	4.9	0.4	13.48	摩耗痕有り			11cm	
48	磁石	砂岩	(5.6)	5.1	3.4	98.54				1cm	
49	磁石	粘土	(3.6)	(0.5)	(0.5)					IV区	

第117表 H13号件居住址出土遺物観察表

伝統的な甕の成形である。30と31は器厚が薄く、外面の削りも横方向となるいわゆる「武藏甕」の範疇に含まれるものと考える。34と35は須恵器甕で、34は橙色の生焼けのようである。いずれもも平行タタキが施されている。36は須恵器の甕と考えられる。外面に2条1单位の沈線がめぐる。自然釉が内外面に付着する。37は須恵器の横瓶であり、外面は平行タタキである。濃い深緑の釉が多量に付着している。38は土製の羽口で一部に鉄分の付着が見られる。39~47は石器類で、48は砥石である。49は鉄製品である。

本址はこれらの出土遺物から、8世紀前半に位置づけられる。



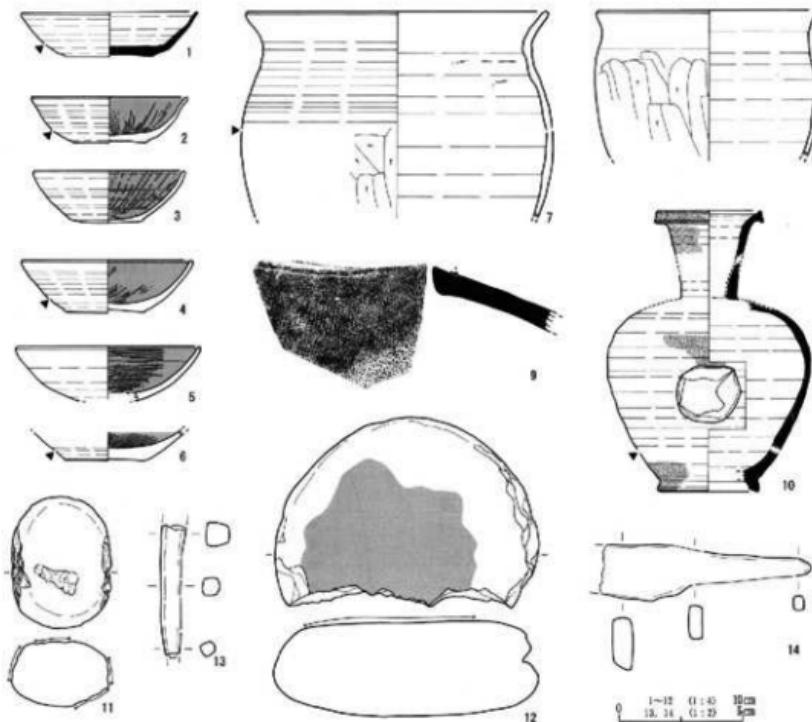
第196図 H14号住居址実測図

(13) H14号住居址 (第196・197図、写真図版十二・十三)

本住居址は、調査地点C区中央であるト-104.105、ナ-104.105Grに位置する。残存状態は良好であるが、先でも述べた通り西側1/4がH9号住居址と重複関係にあり、当初に新旧関係を誤って掘り込んだ事から、本址の西壁部分が確認できなかった状態となっている。

形態は方形を呈する。カマドは北壁東よりと南東コーナーに造られている。住居址の主軸方位はN-10°-Wを測る。規模は北壁3.65m・南壁3.52m（推定）・西壁3.70m（推定）・東壁3.72mで、壁高さは北壁で最大37cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で14.93m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質であり、特に東側カマド周辺にかけて硬質であった。貼床は住居址全体に施されており、厚みは4~18cmで貼られていた。壁溝は北壁と南壁の一部で検出された。規模は幅11~20cm・深さ3~9cmを測る。また、床面からは拳大の礫が散らばった状態で検出された。ピットは掘り方検出時も含め、5カ所確認された。規模はP1が径43cm・深さ18cm、P2が径42cm・深さ12cm、P3が径56cm・深さ24cm、P4が径31cm・深さ22cm、P5が径29cm・深さ18cmを測る。本址の掘り方はほぼ平坦であったが、西側部分が一段掘り下がっていた。

カマドは北壁東よりと南東コーナーの2箇所で確認された。残存状況から最終の使用カマドは南東コーナーのカマドと考えられる。北壁のカマドは火床部と煙道部が確認されたのみである。煙道部は



第197図 H14号住居址出土遺物実際図

No	種別	番号	法 管			成 形・調 整・文 標			備考	出土位置
			寸法	底面	高さ	内 面	外 面			
1	須恵器	环	14.2	7.0	3.8	ロクロナゲ 火床	ロクロナゲ 瓢箪形石回転丸切り 大厚	光今実測	1cm I・II・III区	
2	土師器	环	12.6	5.8	3.7	ミガキ一黑色處理	ロクロナゲ 瓢箪形石回転丸切り 大厚	光今実測	0cm	
3	土師器	环	12.3	5.9	4.2	ミガキ一黑色處理	ロクロナゲ 成部手打ちラケヅリ	完全実測	1.5cm Ⅳ区	
4	土師器	环	13.7	6.4	(4.2)	ミガキ一黑色處理	ロクロナゲ 瓢箪形石回転丸切り→ヘラナゲ	光今実測	0cm	
5	土師器	环	14.8	-	4.3	ミガキ一黑色處理	ロクロナゲ	完全実測	0cm	
6	土師器	环	-	-	(2.5)	ミガキ(鉛附状)一黑色處理	ロクロナゲ 底部鉛条巻切り 南吉斜削(?)	光今実測	I・II・IV区	
7	土師器	甕	21.3	-	(16.5)	ロクロナゲ	ロクロナゲ 腹下平部小ラケヅリ	完全実測	I・IV区	
8	土師器	甕	18.2	-	(11.7)	ロクロナゲ	ロクロナゲ 腹部小ラケヅリ	完全実測	I・II区	
9	須恵器	甕	-	-	ヨコナゲ	須部自然輪付器	タキ	折本	I区	
10	須恵器	長頸壺	8.4	8.2	-	ロクロナゲ 頸部自然輪付器	ロクロナゲ 頸部自然輪付器	円軸実測	I・II・III区	
11	器種	未 M	残存有	最大長	最大幅	最大厚	重 量	所 見	出土位置	
11	敲石	角岡石安山岩		10.5	8.0	5.3	520.00	正・裏・両側面に敲打痕	2cm	I区
12	台石	安山岩	(1.2)	21.1	(7.7)	(7.7)	(3570.00)	正・裏・中央部分に被燒痕有り 正面に墨り面(台石の鑑定度)	0cm	
13	釘々	鐵		(5.3)	(6.0)	(1.0)			0cm	
14	刀子	铁		(8.4)	2.3	(0.8)			17cm 方マト	

第118表 H14号住居址出土遺物観察表

壁よりもやや飛び出すタイプで、規模は長さ65cmを測る。火床部はあまり硬くなく、表面は硬質化していなかった。南東コーナーのカマドも火床部と煙道部の検出であったが、火床部周辺にはカマドの袖構築材と考えられる礫が散乱した状態であった。煙道部は壁よりも僅かに飛び出すタイプで、規模は長さ53cmを測る。火床面の表面はやや硬く、焼上の厚みは11cmを測る。また、本址のカマドには黒褐色土と灰褐色土上の構築土が、火床部と煙道部下に使用されていた。

出土遺物は覆土中から多く出土した。1は須恵器環である。床面より1cm浮いた状態で出土した。2~6は土師器環である。いずれも内面黒色処理されている。2と3は内面に放射状の暗文がある。7と8は土師器甕である。いずれもロクロ成形のいわゆる「ロクロ甕」と呼ばれるものである。9は須恵器甕の肩部である。10は灰釉陶器とすべきか、須恵器とすべきか、迷った品である。今回は須恵器としたが、いわゆる「原始灰釉」の可能性も指摘できる。器種は長頸壺である。ほとんどが細かな小片となって出土した。色調は暗赤褐色で底に釉がかかっている。胴部中央には焼成後に開けたと考えられる孔がある。頸部の内面が欠損していて、2段接合なのが不明である。11は敲石で両側面に敲き痕がある。12は台石で、中央にすり面が確認できる。13と14は鉄製品で、13は釘、14は刀子の柄の部分と考えられる。

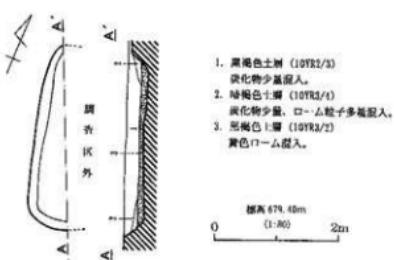
本址の所産時期はこれらの出土遺物より、9世紀の後半と考えられる。

(14) H15号住居址 (第198図、写真図版十四)

本住居址は、調査地点C区中央である二-100Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となり、住居址の西壁のみの検出である。

形態は方形を呈すると考えられる。規模は南北0.60m(検出)・西壁2.72mで、壁高さは南北で最大15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で0.85m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に軟質である。貼床は住居址全体に施されており、厚みは2~13cmで貼られていた。

本址からの出土遺物は、覆土中より土師器环3点と須恵器甕片1点が出土したのみであり、よって本址の帰属時期も不明である。



第198図 H15号住居址実測図

(15) 16号住居址 (第199図、写真図版十五)

本住居址は、調査地点B区中央であるN-55.56、A-55.56Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外、北側がカクランによって削平されている。

形態は東西方向に長い長方形を呈する。カマドは東壁に造られている。住居址の主軸方位はN-50°Wを測る。規模は北壁0.87m(残存)・南壁1.00m(残存)・西壁0.91m(残存)・東壁2.85m(残存)で、壁高さは東壁で最大28cmを測る。壁はながらに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は8.83m²を測る。覆土は3層に分かれるが、第3層が砂層で水の影響を受けたような堆積状況であった。床は全体に硬質で、貼床が1~17cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、2カ所確認された。規模はP1が径30cm・深さ6cm、P2が径41cm・深さ46cmを測る。

カマドは東壁の中央に造られており、袖部・煙道部・火床部が残存していた。煙道部は僅かに住居址壁よりも飛び出すタイプで、長さは24cmを測る。袖部は焚口側に大型の川原石を2本立て、黒色土と黄褐色土で構築していた。火床部は小さく、また硬質化も確認できなかった。

本址からの出土遺物は、覆土中とカマドから多く出土した。1と2は土師器壺である。1は内面黒色処理とミガキが施されている。3は須恵器の平瓶と考えられるが、不確実である。カマド内より出土した。4~6は土師器壺である。4と6はいわゆる「ロクロ窓」と呼ばれるもので、顯著なロクロ成形が施されている。5は内外面に細かなハケ目が残り、口唇部もつまみ上げたような特異な形態を呈する。山梨や伊勢地方といった外来の形態と考えられる。7は敲石、9は未製品の打製石斧と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、10世紀の所産時期と考えられる。

No.	種別	器種	法 量		成 形・倒 熟・文 様		備 考	出土位置	
			上部	下部	内 面	外 面			
1	土師壺	环	14.5	6.5	4.6	丸ガリ 風呂処理	ロクロナデ 底部回転削り切	完全表面 3/4残存	下層
2	土師器	环	12.1	4.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転削り切	部分表面 2/3残存	下層
3	須恵器	平瓶	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	無標示	カマド
4	土師器	甕	17.8	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転尖端	上層1/5残存 1区
5	土師器	甕	15.8	—	—	ハケ目	ハケ目	同上	同上
6	土師壺	甕	14.8	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ→ハケゼリ	部分表面	1区 カマド
7	器 特	素 材	疗行	最大径	最大高	重 量	所 足	出土位置	
7	敲石	石岩	—	18.4	6.8	3.8	800.00	上端部側に敲打痕 下端部は敲打による剥離	0cm
8	石核	黑曜石	—	3.0	2.8	1.9	15.78	全體に風化している 前面に3ヶ所の剥離痕	0cm
9	打所(未製品)	砂質岩	—	11.3	5.1	1.3	106.46		1cm

第119表 H16号住居址出土遺物検索表

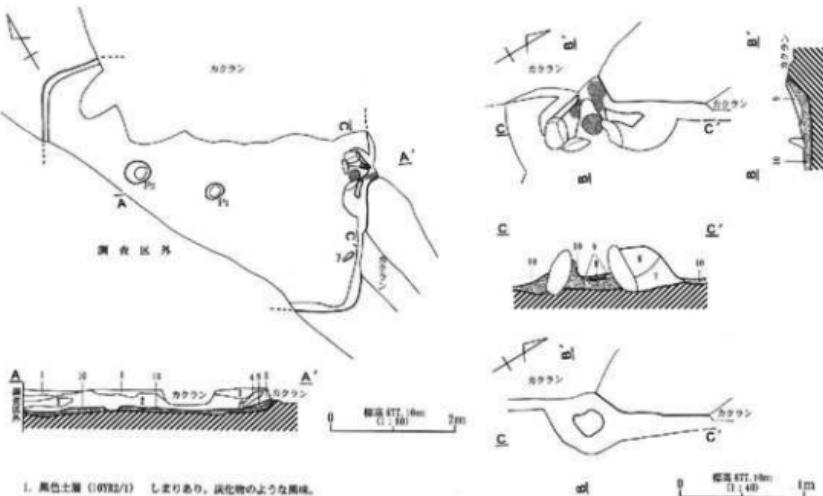
(16) 17号住居址 (第200図、写真図版十六)

本住居址は、調査地点B区北端であるB-49.50、C-49.50Grに位置する。残存状態は住居址東側が調査区域外となる他は良好である。

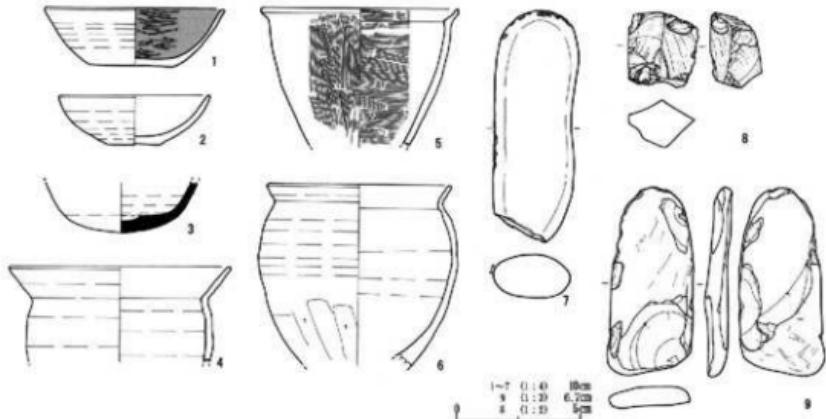
形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。住居址の主軸方位はN-15°-Wを測る。規模は北壁2.50m(検出)・南壁3.31m・西壁3.12m・東壁1.05m(検出)で、壁高さは南壁で最大65cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で9.81m²を測る。覆土は非常に厚かったが、おおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に1~11cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁の一部に確認され、規模は幅30~49cm・深さ3~8cmを測る。ピットは3カ所確認され、P1~P2は主柱穴と考えられる。規模はP1が径49cm・深さ9cm、P2が径59cm・深さ7cm、P3が径35cm・深さ4cmを測る。

カマドは北壁に造られ、袖と火床部が検出された。煙道部はごく僅かに壁よりも張り出すタイプで、長さは45cmを測る。袖は大型の川原石と褐灰色土で構築されており、高さは22~35cm残存していた。火床部は硬質化するほどに焼けていた。

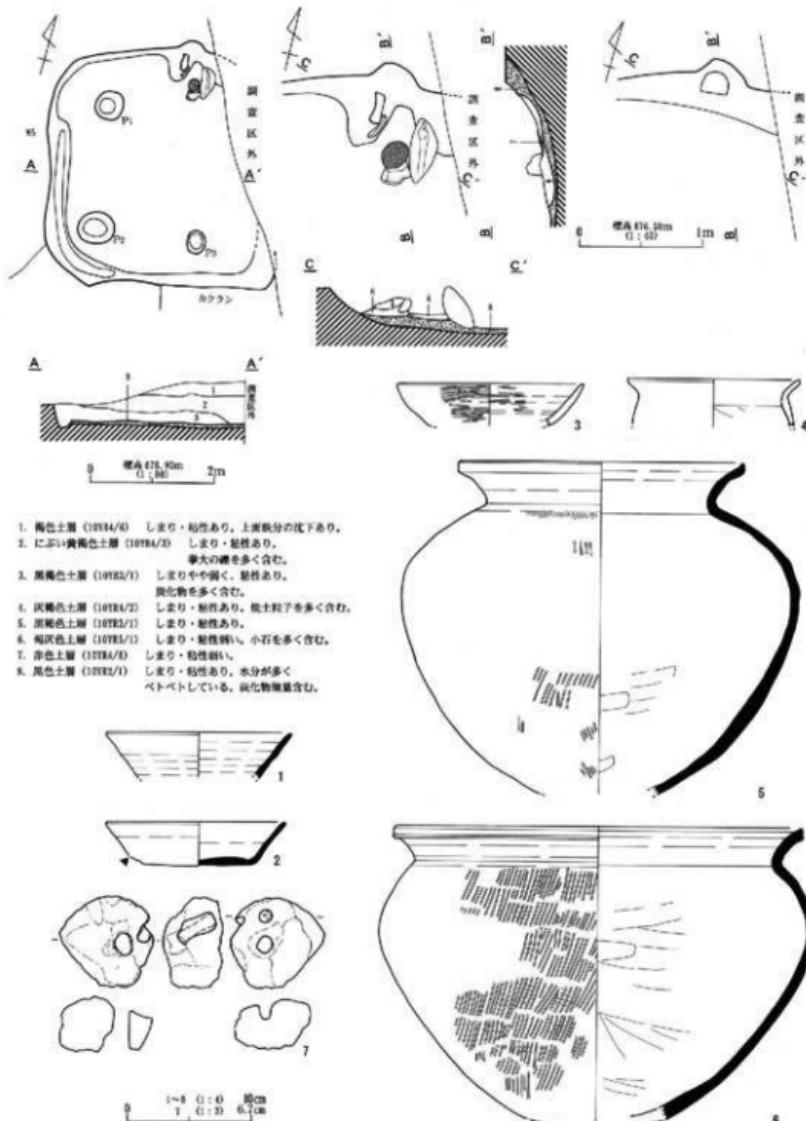
本址からの出土遺物は、覆土中からの出土がほとんどであった。1と2は須恵器壺である。2は底部回転ヘラ切りが行われている。3は土師器壺である。内外面に粗いミガキを施す。4は土師器の小型甕の口縁部である。5は須恵器の甕で、全体に焼成が弱く軟質感のある焼き上がりとなっている。6



1. 黒色土層 (10YR3/1) しまりあり。炭化物のような斑塊。
 2. 黄色土層 (10YR4/4) しまり・粘性あり。砂を多く含む。
 3. 深灰色土層 (10YR3/1) しまり・粘性なし。
 砂質でレンズ状を呈する。
 4. 單褐色土層 (10YR3/3) しまり・粘性あり。全体に水 ingress した様な土層。
 5. 單褐色土層 (10YR3/3) しまり・粘性あり。施土粒子数多めに含む。
 6. 黑灰褐色土層 (10YR3/3) しまり・粘性あり。
 黄色シルトの施土化した土。
1. 黒色土層 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱い。小石を多く含む。
 2. 赤色土層 (9YR4/9) 大概固め。カマドの火灰層は弱く。
 焼土の被覆はみられない。
 3. 黄色土層 (10YR4/4) しまり・粘性弱い。燒土多く含む。
 10. 三層褐色土層 (10YR3/1) しまり・粘性あり。上面が破質化している。
 カマド面に施土粒子。



第199図 H16号住居址及び出土遺物実測図



第200図 H17号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法 番		成 形・調 究・文 種			備 考	出土位置
			内面	背面	外 面				
1	須恵器	环	15.0	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転丸潤 口縁1/2残存	II区	
2	須恵器	环	14.5	9.1	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ 回転切欠き	完全丸潤	II区
3	土師器	环	15.0	—	ミガキ	ミガキ	回転丸潤	II区	
4	土師器	環	14.0	—	ヘラナデ	ヘラナデ	回転丸潤 口縁1/2残存	II区	
5	須恵器	環	23.0	—	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ 平行タタキ	回転丸潤	I・II区	
6	須恵器	環	33.0	—	ロクロナデ ヘラナデ	ロクロナデ 平行タタキ	回転丸潤	I・II区	
30	器種	石 材	既存	既存	既存	既存	既存	既存	出土位置
7	不明	白色輕石	—	—	5.4	5.6	3.6	22.84	II区

第120表 H17号住居出土遺物観察表

は須恵器の広口壺である。外面は平行タタキ目で、内面はナデが施されている。7は軽石で造られた石製品である。貫通した孔と穿孔途中の孔が確認できるが、用途は不明である。

本址はこれらの出土遺物から、8世紀前半の所産時期と考えられる。

(17) H18号住居址 (第201図、写真図版十八)

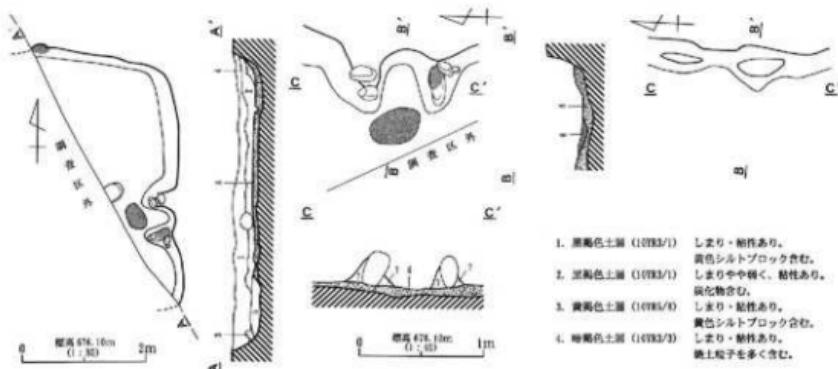
本住居址は、調査地点A区南端であるL-32.33, M-32Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外になり、他は良好である。

形態は方形を呈すると考えられる。カマドは東壁に造られていた。住居址の主軸方位はN-89°-Eを測る。規模は北壁2.06m(検出)・東壁3.63mで、壁高さは東壁で最大31cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。住居址の床面積は3.78m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体に硬質で、貼床は全体に4~17cmの厚さで貼られていた。

カマドは東壁にあり、袖と火床部が検出された。煙道部は住居址壁よりも飛び出さないタイプである。袖は川原石を芯材として、黒褐色土によって覆われていた。火床部上面はよく焼けており、硬質化していた。焼土の厚みは5cmを測る。

本址からの出土遺物は非常に少なく、覆土から須恵器片8点と土師器壺の小片が多数出土したのみであった。なお、この土師器壺の小片はいわゆる「武藏壺」と呼ばれる形態の壺である。

本址は出土遺物が少なく、所産時期は不明である。



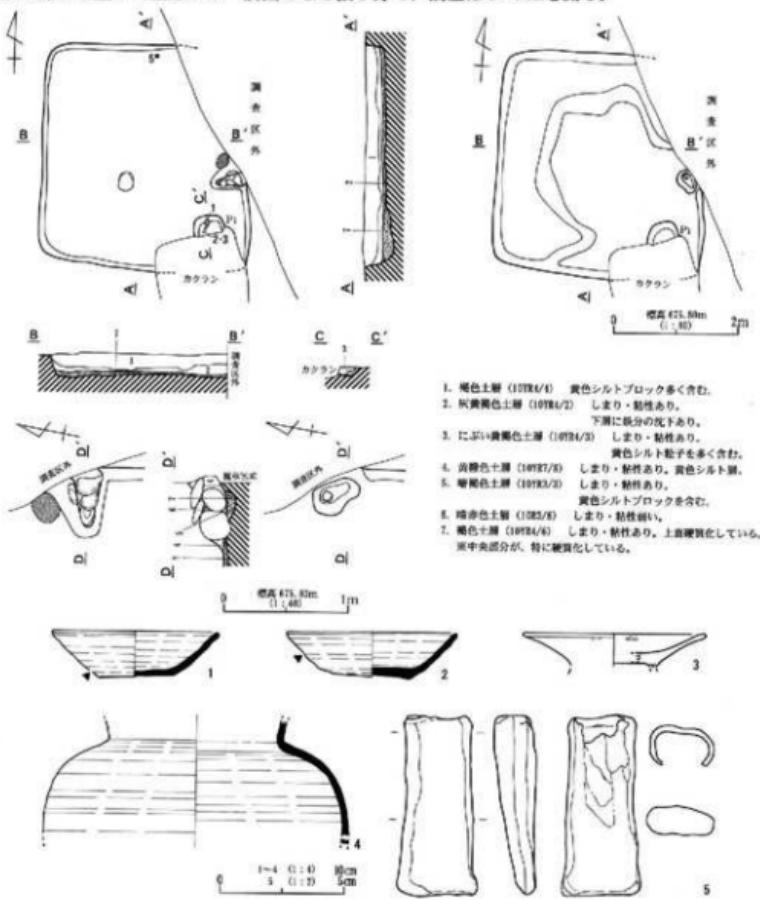
5. 黒褐色土層 (10cm/2) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含む。
6. 黄褐色土層 (5cm/6) しまり・粘性あり。上面よく焼けている。

第201図 H18号住居址実測図

(18) H19号住居址 (第202図、写真図版十八・十九)

本住居址は、調査地点A区中央であるM-28.29、N-28.29Grに位置する。残存状態は北東コーナー側が調査区域外となる。

形態は方形を呈する。カマドは東壁に造られている。規模は北壁2.00m (検出)・南壁3.22m (推定)・西壁3.18m・東壁1.74m (検出)で、壁高さは東壁で最大30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で9.41m²を測る。覆土はおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、特に住居址中央が硬かった。貼床は全体に貼られており、厚さは2~13cmを測る。ピットは1カ所確認された。規模はP1が径50cm・深さ16cmを測る。検出位置より貯蔵穴の可能性がある。住居址の掘り方は北壁と西壁際のみ一段低くなる掘り方で、段差は4~9cmを測る。



第202図 H19号住居址及び出土遺物実測図

カマドは右袖と火床部のみ検出された。大型の川原石を立て、その上に扁平な石を乗せて袖としていた。高さは35cmを測る。火床部は小さく、焼け方もあまり強くなかった。

本址からの出土遺物は少なく、5点を図示した。1と2は須恵器壺である。1は底部回転糸切り離しの後、手持ちヘラケズリを施しているようにも観察できるが、摩耗が激しく確証を得ない。2は生焼けのような橙色をした須恵器である。3は土師器の皿である。高台部分が欠損していたが、欠損後に平らに削り二次利用の可能性がある。4は須恵器の壺で、胴部から頸部の部分である。5は鉄製品の斧で、柄を装着する部分はくるむような形態である。北壁際床面より出土した。

本址はこれらの出土遺物から、9世紀前半に位置づけられると考える。

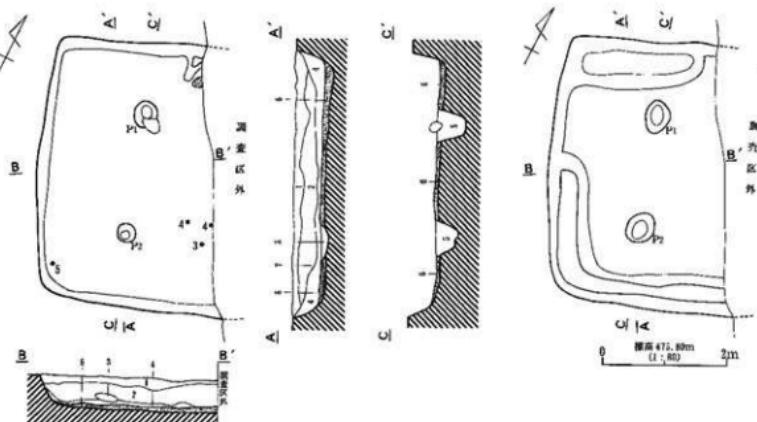
No.	種別	縦幅	横幅	厚さ	成形・調査・文様		備考	出土位置
					内面	外面		
1	須恵器	坪	13.5	6.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底部回転糸切り→手持ちヘラケズリ(?)	完全実測 -8cm P1
2	須恵器	坪	13.9	6.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測 -13.5cm ホリカ
3	土師器	高台皿	14.8	6.5	2.6	2.6cm	ミガキ	円転実測 13.5cm IV区
4	須恵器	壺	-	-	(9.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	II・III・IV区
5	器種	斧	7.2	3.2	1.7		所見	出土位置 0cm

第121表 H19号住居址出土遺物観察表

(19) H20号住居址 (第203-204図、写真図版十七)

木住居址は、調査地点A区北側であるP-23.24、Q-23.24Grに位置する。残存状態は住居址の東側が調査区域外となる他は、良好である。

形態は方形を呈する。カマドは北壁に造られている。規模は北壁2.30m(検出)・南壁2.84m(検出)・西壁4.00mで、壁高さは北壁で最大48cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。住居址の床面



1. にじいろ黄褐色土層 (10YR2/0)
しまり・粘性あり。下層に礫質の鉄分沈下。

2. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
しまり・粘性あり。小石を含む。

3. 黄褐色土層 (10YR4/4)
しまり・粘性あり。黄色シルト粒子を多く含む。

4. 黒褐色土層 (10YR1/1)

しまり・粘性強い。燒け粒子と黄色粒子を多く含む。

5. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)

しまり・粘性弱い。小石を含む。

6. 黄褐色土層 (10YR5/6)

しまり・粘性あり。小石を少量含む。

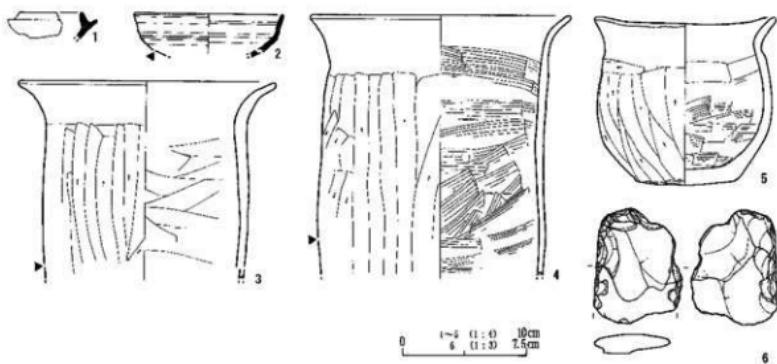
7. 黑色土層 (10YR1/1) しまり・粘性あり。

第203図 H20号住居址実測図

積は検出部分で9.97m²を測る。住居址の主軸方位はN-24°-Wを示す。覆土はおおむね自然堆積である。床は硬質であり、特に住居址中央が硬かった。貼床は1~14cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め、2箇所確認された。P1とP2は主柱穴と考えられる。規模はP1が径44cm・深さ21cm、P2が径32cm・深さ27cmを測る。本址の掘り方は中央部はほぼ平坦であったが、北壁側が一段下がり、南西コーナーから南壁にかけては一段上がった掘り方であった。

カマドは北壁側に造られていた。左袖と火床部のみの検出であった。袖は黄色土により構築され、火床部は小さく表面の硬質化も見られなかった。

本址からの遺物は覆土を中心に出土した。1は須恵器坏身の破片である。2は須恵器高杯の坏部と考えられ、外面に自然釉が付着している。3と4は土師器甕で、口縁部があまり屈曲しないタイプの甕で、外面は縦方向のヘラケズリが施される。5は土師器の小型甕である。6は打製石斧の一部と考えられる。本址の所産時期は、これらの遺物から不確実ではあるが、7世紀後半に位置づけられる。



第204図 H20号住居址出土遺物実測図

No.	種別	器種	寸 厘			底 形・調 整・文 样			費 号	出土地點
			内 面	外 面	文 样					
1	須恵器	坏	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉付	破片	Ⅳ区	
2	須恵器	高杯	12.0 11.0 (3.4)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	自然釉付	凹輪尖削	Ⅴ区	
3	土師器	甕	20.7	— (15.8)	口縁ヨコナデ→胸部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胸部ヘラケズリ	自然釉付	凹輪尖削	9cm	
4	土師器	甕	21.0	— (21.0)	口縁ヨコナデ→胸部ヘラナデ	口縁ヨコナデ・胸部ヘラケズリ	自然釉付	凹輪尖削	2~3cm	
5	土師器	小型甕	14.5 7.5 13.4	—	口縁ヨコナデ→胸部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胸部ヘラケズリ	自然釉付	完全尖削 摩耗	16cm IV区	
No.	器種	素 材	角存半	絶大長	高 大	絶大厚	素 色	所 見		出土位置
6	打製石斧	砂質砂岩	6.8	6.2	1.3	43.67		下部欠損		Ⅰ区

第122表 H20号住居址出土遺物観察表

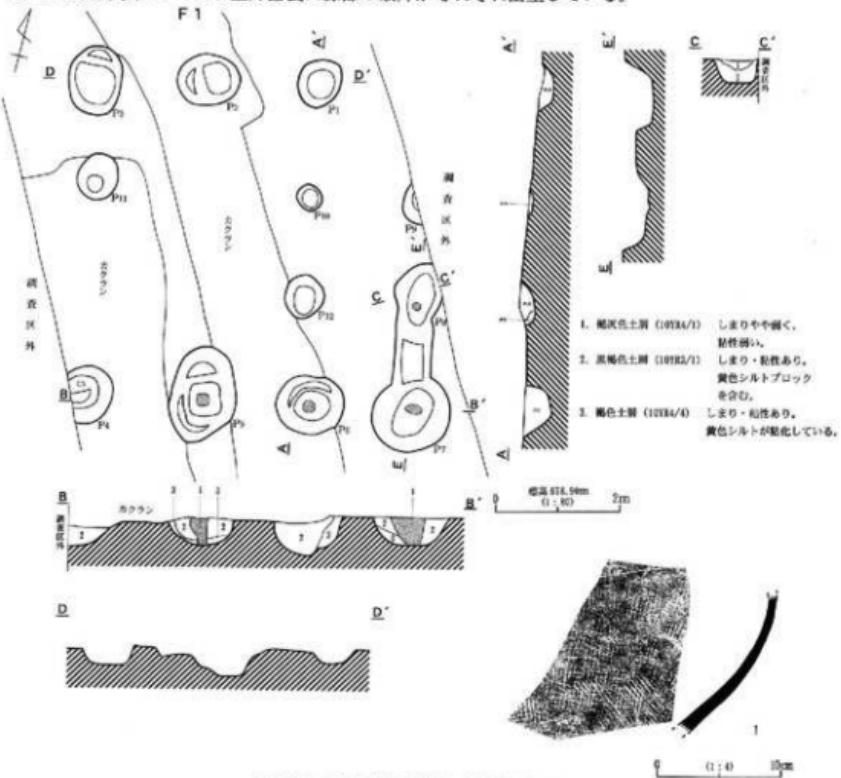
第2節 挖立柱建物址

(1) F1号掘立柱建物址 (第205図、写真図版二十)

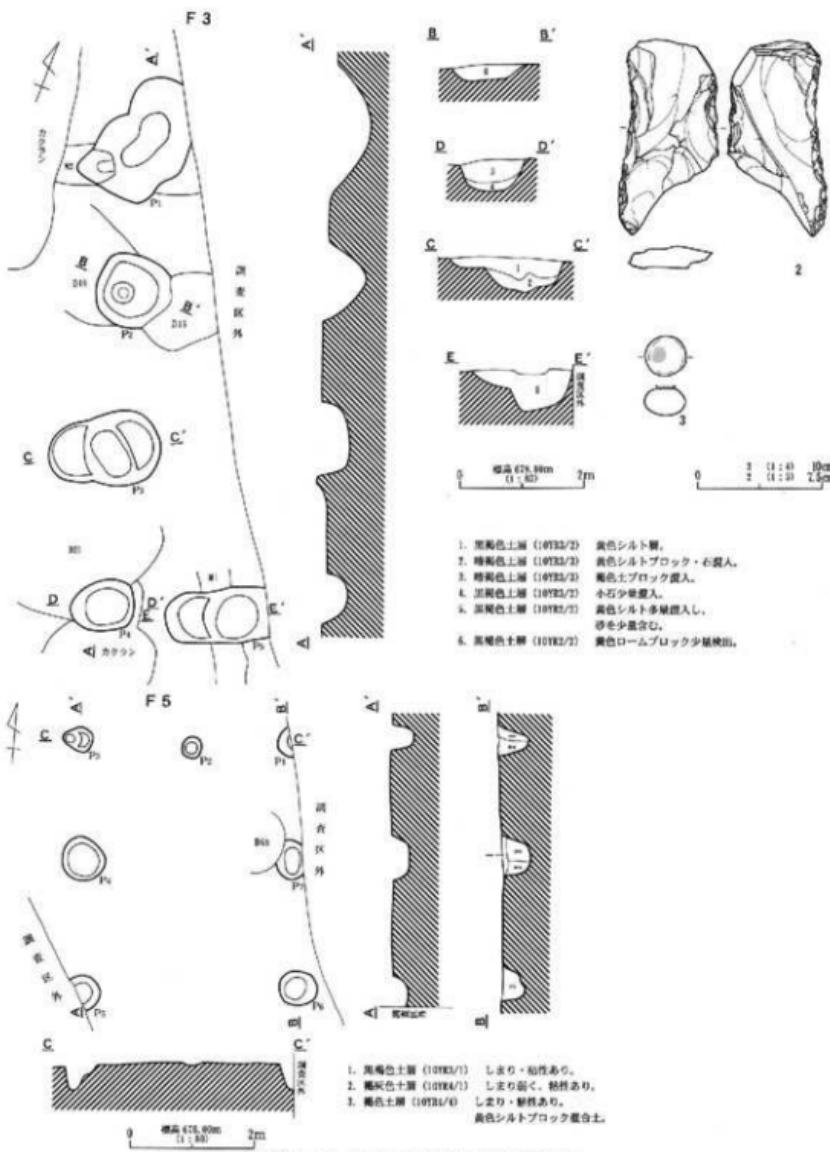
本址は、調査地点C区北側であるヒ-90.91、フ-89.90.91、ヘ-90Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。また、掘立柱建物址内もカクランにより柱列が確認できなかった部分がある。

形態は東西方向に長い3間×3間の総柱式建物址と考えられる。軸方位はN-12°-Wを示す。規模は桁行5.30m (P4～P7)・梁行5.03m (P3～P4)で、桁行柱間は1.67～1.93m・梁行柱間は1.65～1.82mを測る。ピット間に囲まれた面積は26.66m²を測る。柱穴の形態はいずれも円形もしくは梢円形である。P7～P8の間には布壠状にピット間が連結していた。ピットの規模はP1が径81cm・深さ27cm、P2が径100cm・深さ43cm、P3が径110cm・深さ33cm、P4が径102cm・深さ30cm、P5が径154cm・深さ61cm、P6が径110cm・深さ55cm、P7が径122cm・深さ48cm、P8が径77cm・深さ39cm、P9が径66cm・深さ30cm、P10が径43cm・深さ7cm、P11が径74cm・深さ27cm、P12が径68cm・深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP5とP7で、P5～P8まではピット底面に円形もしくは方形の非常に硬質化した面が確認された。

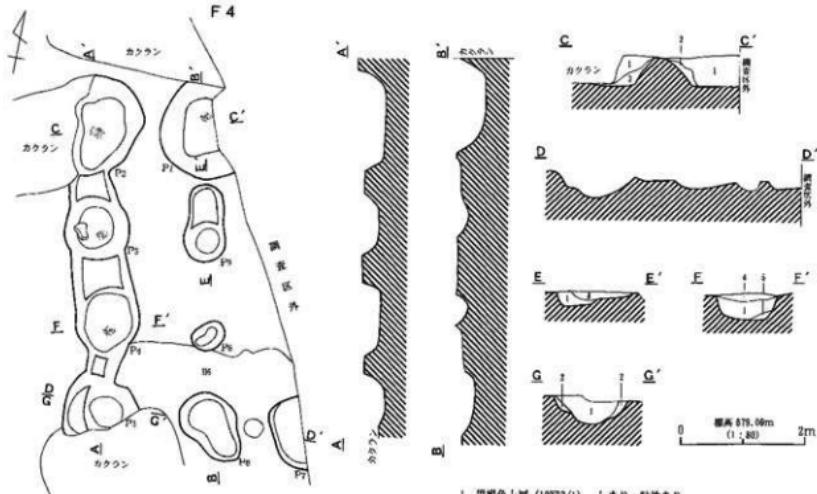
本址からの出土遺物は図示した1の須恵器甕の他に、P3より須恵器甕片、P6より土師器甕片、P7より土師器甕片、P8より土師器甕口縁部の破片がそれぞれ出土している。



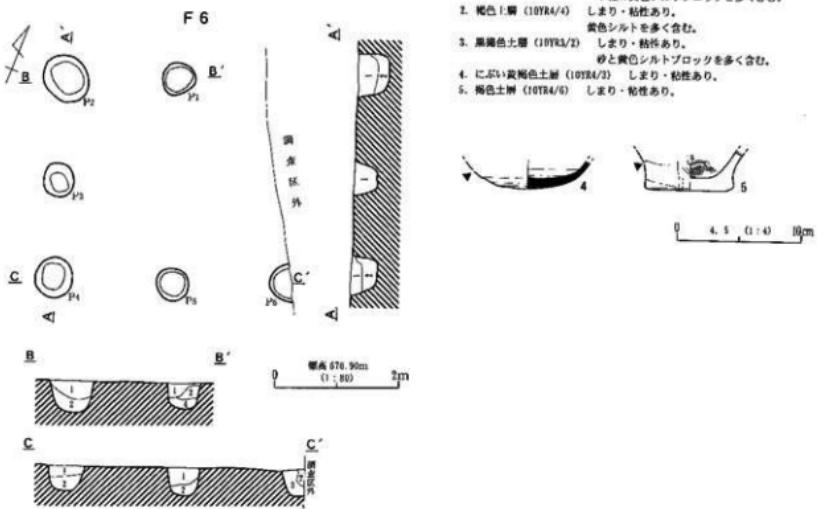
第205図 F1号掘立柱建物址及び出土遺物実測図



第206図 F 3・5号圓柱建物址及び出土遺物実測図



1. 黒褐色土層 (10Y3/1) しまり・粘性あり。
小粒の黄色シルトブロックを多く含む。
2. 黄色土層 (10Y4/4) しまり・粘性あり。
黄色シルトを多く含む。
3. 黒褐色土層 (10Y3/2) しまり・粘性あり。
砂と黄色シルトブロックを多く含む。
4. にぶい 黃褐色土層 (10Y4/3) しまり・粘性あり。
5. 黄色土層 (10Y4/6) しまり・粘性あり。



1. 黑褐色土層 (10Y3/1) しまり・粘性あり。
黄色シルトブロック含む。
2. 黑褐色土層 (10Y3/1) しまりやや粗く、粘性あり。
1層よりしまり少ない。黄色シルト多い。
3. 黑色土層 (10Y2/1) しまり・粘性あり。
4. 黄褐色土層 (10Y3/6) しまり・粘性あり。黄色シルト主様。

第207図 F4・6号標立柱跡物址及び出土遺物実測図

これら土師器の特徴は奈良・平安時代のものであり、本址の帰属時期は奈良時代以降と考えられる。

(2) F 3号掘立柱建物址 (第206図、写真図版二十)

本址は、調査地点C区中央部であるタ-112、ナ-110.111.112Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。

形態は南北方向に長い3間以上の側柱式建物址である。軸方位はN-17°-Wを示す。規模は桁行7.20m (P1~P4)・梁行2.10m (P4~P5)で、桁行柱間は2.16~2.44mを測る。柱穴の形態はいずれも橢円形である。ピットの規模はP1が径208cm・深さ58cm、P2が径120cm・深さ52cm、P3が径180cm・深さ52cm、P4が径104cm・深さ42cm、P5が径162cm・深さ62cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址の出土遺物は図示した石器2点の他、P1より土師器内黒坏片、P2より須恵器坏片と土師器内黒坏片、P3より須恵器壺片・坏片、P4は須恵器坏片7点と土師器坏片6点、P5は須恵器壺片1点と土師器片5点がそれぞれ出土したのみである。これらの出土遺物より、本址の帰属時期は平安時代以降と考えられるが、不確実である。

(3) F 4号掘立柱建物址 (第207図、写真図版二十一)

本址は、調査地点C区中央部であるノ-93、ハ-92.93.94、ヒ-92.93Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。また、H6号住居址と重複関係にあり、本址の方が古い。

形態は東西方向に長い、3間以上の縦柱式建物址である。規模は桁行4.44m (P2~P5)・梁行3.22m (P5~P7)で、桁行柱間は1.26~1.62m・梁行柱間は1.49~1.73mを測る。柱穴の形態はいずれも円形を基調とするが不整形である。ピットの規模はP1が径100cm・深さ53cm、P2が径110cm・深さ51cm、P3が径105cm・深さ40cm、P4が径102cm・深さ36cm、P5が径120cm・深さ44cm、P6が径124cm・深さ17cm、P7が径120cm・深さ17cm、P8が径55cm・深さ19cm、P9が径123cm・深さ24cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかったが、P1~P4までは柱の重みがかかったと考えられる、ピット底面に非常に硬質化した円形の部分が検出された。

本址より出土遺物は2点図示した。4は須恵器壺か横瓶の破片である。5は形態から弥生中期以前の壺か、壺の底部と考えられる。内外面ミガキが施されている。この他にはP5より須恵器坏片2点、内面黒色処理した土師器坏片が出土している。しかし、いずれも小片であり、遺構の帰属時期を確定するには至らなかった。

(4) F 5号掘立柱建物址 (第206図)

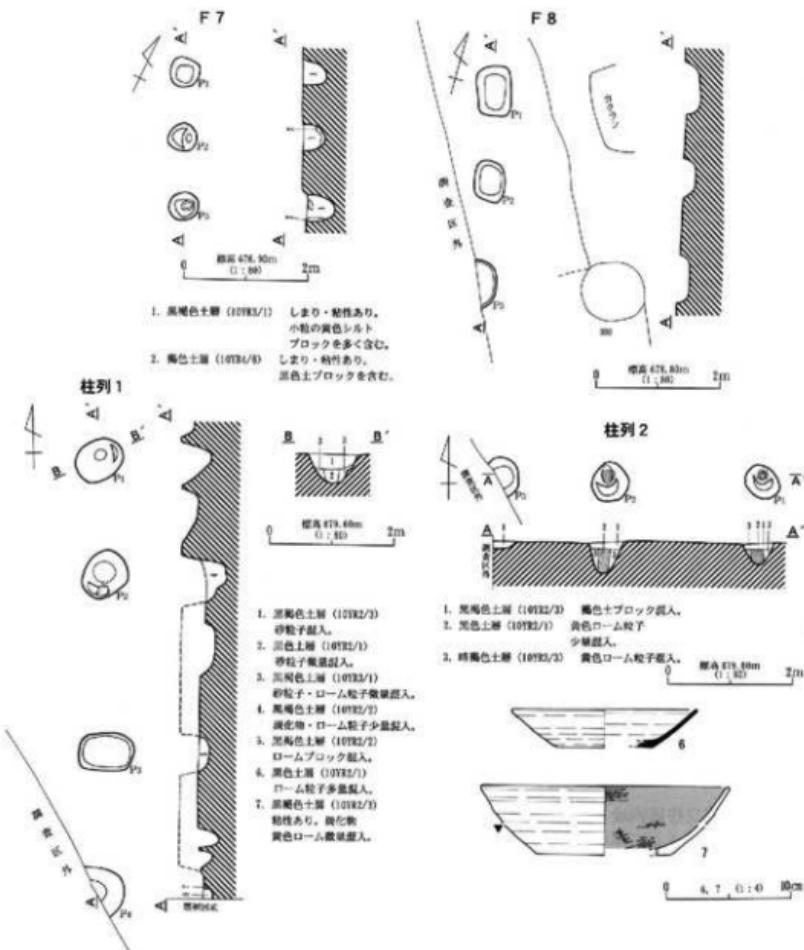
本址は、調査地点A区中央部であるL-30.31、G-30.31、M-30.31Grに位置する。残存状態は良好であったが、東西側が調査区域外となる。

形態はほぼ方形で、2間×2間の側柱式建物址である。軸方位はN-6°-Wを示す。ピット間に囲まれた面積は13.60m²を測る。規模は桁行4.03m (P3~P5)・梁行3.38m (P1~P3)で、桁行柱間は1.88~2.03m・梁行柱間は1.59~1.79mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径50cm・深さ50cm、P2が径35cm・深さ5cm、P3が径49cm・深さ47cm、P4が径70cm・深さ33cm、P5が径57cm・深さ25cm、P6が径63cm・深さ38cm、P7が径63cm・深さ45cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物を図示できるものはなかったが、P2から武藏壺と呼ばれる土師器壺片、P4からは古墳時代の土師器壺片と武藏壺片が、それぞれ出土している。本址の帰属時期は不明である。

(5) F 6号掘立柱建物址 (第207図、写真図版二十一)

本址は、調査地点A区中央部であるO-25.26、P-25.26Grに位置する。残存状態は良好であったが、



第208図 F7・8号側立柱遺物址、1・2号柱列址及び出土遺物実測図

東側が調査区域外となる。

形態は東西方向に長軸を持つ、2間×2間以上の側柱式建物址である。規模は桁行3.80m (P4～P6)・梁行3.21m (P2～P4)で、桁行柱間は1.80～1.90m・梁行柱間は1.51～1.70mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径54cm・深さ43cm、P2が径80cm・深さ51cm、P3が径56cm・深さ48cm、P4が径68cm・深さ45cm、P5が径54cm・深さ45cm、P6が径60cm・深さ45cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物で図示できるものはなかったが、P2から土師器費片、P4からは古墳時代の土師

器壺片8片が、それぞれ出土している。本址の帰属時期は不明である。

(6) F 7号掘立柱建物址 (第208図、写真図版二十一)

本址は、調査地点A区北側であるP-24.25Grに位置する。残存状態は良好であった。東側が調査区域外となり、掘立柱建物址の可能性があるため、掘立柱建物址とした。

規模は2間以上の側柱式建物址である。規模は桁行2.15m (P1~P3) で、桁行柱間は1.05~1.10mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径47cm・深さ39cm、P2が径47cm・深さ38cm、P3が径47cm・深さ47cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物はなく、本址の帰属時期も不明である。

(7) F 8号掘立柱建物址 (第208図、写真図版二十二)

本址は、調査地点C区北側であるヒ-92.93Grに位置する。残存状態は良好であった。西側が調査区域外となり、掘立柱建物址の可能性があるため、掘立柱建物址とした。

規模は2間以上の側柱式建物址である。規模は桁行1.37m (P1~P3) で、桁行柱間は1.43~1.64mを測る。柱穴の形態はいずれも方形である。ピットの規模はP1が径77cm・深さ27cm、P2が径65cm・深さ24cm、P3が径80cm・深さ21cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址より出土遺物はなく、本址の帰属時期も不明である。

(8) 1号柱列址 (第208図)

本址は、調査地点C区中央であるナ-104.105.106Grに位置する。残存状態は重複遺構が多く、不良であった。

規模は3間以上の柱列である。規模は7.00m (P1~P4) で、柱間は1.88~2.90mを測る。柱穴の形態は方形と円形である。ピットの規模はP1が径78cm・深さ48cm、P2が径78cm・深さ72cm、P3が径88cm・深さ20cm、P4が径90cm・深さ19cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址の出土遺物はP1から出土した6の須恵器壺があり、底部回転糸切り離しである。本址の帰属時期は出土遺物も少なく、不明である。

(9) 2号柱列址 (第208図)

本址は、調査地点C区南側であるト-106、ナ-106Grに位置する。残存状態は良好であった。西側が調査区域外となる。

規模は2間以上の柱列である。規模は4.14m (P1~P3) で、柱間は1.67~2.47mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径60cm・深さ36cm、P2が径64cm・深さ51cm、P3が径63cm・深さ14cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはP1とP2である。

本址からの出土遺物は図示した7の土師器壺がP2より出土しているが、他にはなく、本址の帰属時期も不明である。

名	種別	器種	法 準	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様			備 考	出 土 段 期
				内 面		外 面		
1	壁塗器	甕	—	—	ココナデ	タタキナーナデ	板本	F1-P5
4	漆器	甕	—	5.0	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ 直縁右山輪ハラ切り	F4-P5
5	甕	甕	7.1	(3.3)	ミガキ	網部ヘナナーナギキ 底部ヘラクゼリミガキ	完全発掘	F4-P1
6	漆器	甕	14.9	7.6	3.1	リクロナデ	ロクロナデ 沢山輪糸切り(左のみ下輪)	初期
7	土師器	甕	28.0	10.8	3.5	ミガキ+朱色處理	ロクロナデ 沢山輪糸切りケズリ	中期
8	陶器	石	石	石	石	石	石	出土地質
2	打撃石斧	磨製石器	(11.8)	(5.9)	(1.5)	(103.71)	下部欠損	F3-P1
3	磨石	磨石	3.2	3.2	2.3	24.31	正面に崩り面	F3-P3

第123表 掘立柱建物址及び柱列出土遺物観察表

第3節 土 坑

(1) D 1号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南端のセ-117.118Grに位置する。残存状態は中央部分をカクランにより削平されている。形態は橢円形と考えられ、長軸方位はN-12°-Wを示す。規模は長軸1.18m・短軸0.78m（残存）・深さ37cmを測る。本址からの出土遺物は、土師器壺片2点のみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(2) D 2号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南端のセ-117.118Grに位置する。残存状態は北側をカクランによって削平されている。形態は不明である。規模は長軸0.53m（残存）・短軸0.60m・深さ28cmを測る。本址からの出土遺物は土師器壺片4点、土師器壺片2点である。よって本址の帰属時期は不明である。

(3) D 4号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南側のチ-111、ツ-111Grに位置する。残存状態は良好である。形態は不整形で、長軸方位はN-74°-Wを示す。規模は長軸2.07m・短軸1.10m・深さ17cmを測る。

本址からの出土遺物は、図示した2点である。1は土師器壺で、内面黒色処理がされている。2は土師器碗の底部であり、高台が貼付する。本址の帰属時期はこれらの遺物から、平安時代と考えられる。

(4) D 5号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南側のチ-111、ツ-111Grに位置する。残存状態は北側がカクランによって削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.63m・短軸1.42m・深さ12cmを測る。本址より出土遺物は、4点を図示した。3~5は土師器壺である。いずれも内面ミガキと黒色処理が施されている。6は白磁碗である。本址からの出土遺物は時代差があり、遺構の所産時期は不明である。

(5) D 6号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

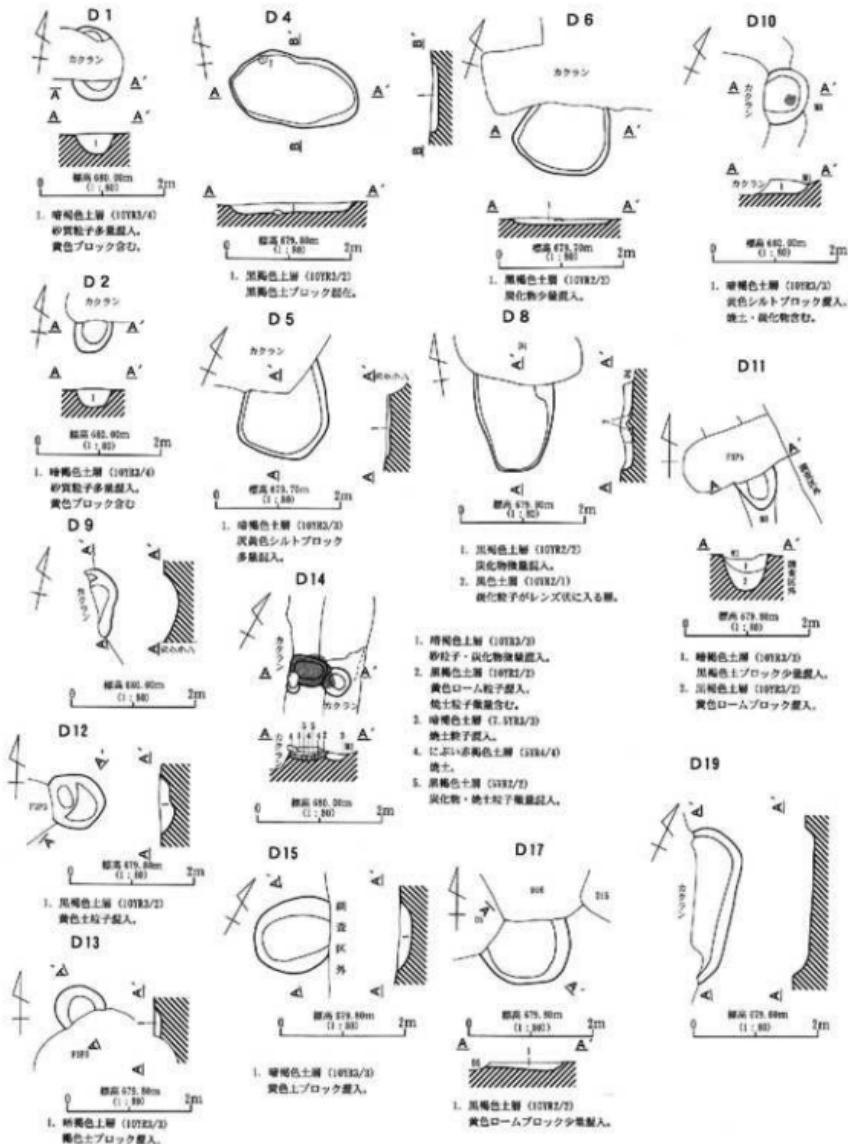
本址は、調査地点C区南端のツ-111Grに位置する。残存状態は北側がカクランによって削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.10m（残存）・短軸1.54m・深さ13cmを測る。本址より出土遺物は、2点を図示した。7は土師器壺であり、内面ミガキと黒色処理されている。8は土師器碗で、内面ミガキと黒色処理が施されている。

(6) D 8号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南端のチ-111.112、ツ-111.112Grに位置する。残存状態は北側がカクランにより削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-4°-Eを示す。規模は長軸1.63m（残存）・短軸1.25m・深さ18cmを測る。本址より出土遺物は図示できるものがなかったが、内面黒色処理の土師器壺や須恵器壺、特に須恵器四耳壺片などが出土している。本址の帰属時期はこれらの遺物より、平安時代と考えられる。

(7) D 9号土坑 (第209図, 写真図版二十二)

本址は、調査地点C区南端のソ-115Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は不整形である。規模は長軸1.12m（残存）・短軸0.38m（残存）・深さ26cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器片2点、土師器片5点などがある。



第209図 D 1.2.4~6.8~15.17.19号土坑実測図

(8) D 10号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のゾ-114.115Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は円形で、規模は長軸0.88m（残存）・短軸0.69m・深さ25cmを測る。土坑底面に焼土範囲が検出された。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(9) D 11号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南側のタ-112Grに位置する。残存状態はM1号溝状遺構とF 3号掘立柱建物址と重複関係にある。形態は梢円形と考えられ、規模は長軸0.70m（残存）・短軸0.57m・深さ54cmを測る。本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(10) D 12号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は西側がF 3号掘立柱建物址により削平されている。形態は円形で、長軸方位はN-57°-Wを示す。規模は長軸0.95m・短軸0.90m・深さ30cmを測る。本址より出土遺物は、図示した9の土師器皿がある。内面ミガキと黒色処理が施されている。本址の帰属時期は遺物の出土量が少なく、不明である。

(11) D 13号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は南側をF 3号掘立柱建物址に削平されている。形態は円形で、規模は長軸0.78m・短軸0.51m・深さ18cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(12) D 14号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のセ-115、ゾ-115Grに位置する。残存状態は東側をカクランにより削平されている。形態は梢円形が二つ連結したような形で、規模は長軸1.00m・短軸0.45mと0.46m・深さ14cmと16cmを測る。また、本址の西側の底面には焼土が厚く検出された。本址より出土遺物は図示できるものがなかったが、土師器片3点、須恵器片1点、灰釉陶器片などがあった。

(13) D 15号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長梢円形で、長軸方位はN-45°-Eを示す。規模は長軸1.24m（検出）・短軸1.16m・深さ30cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

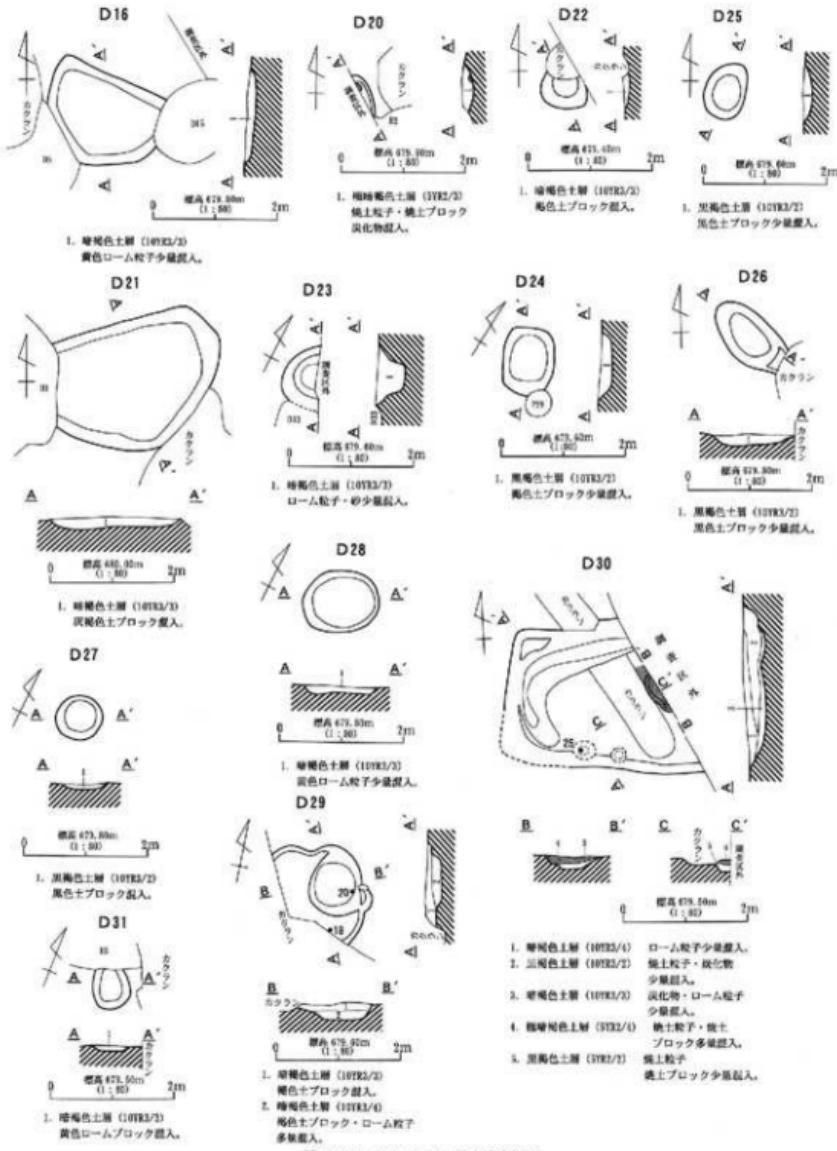
(14) D 16号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区南端のチ-110.111Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は不整形である。規模は長軸1.95m（残存）・短軸1.48m・深さ16cmを測る。

本址より出土遺物は図示できるものはなかったが、須恵器片、須恵器壺片、土師器片等が出士した。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より不確実ではあるが、平安時代と考えられる。

(15) D 17号土坑 (第209図, 写真図版二十三)

本址は、調査地点C区南端のチ-111Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。形態は円形で、規模は長軸1.48m・短軸1.06m（残存）・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は図示した2点があり、10は土師器片で、内面ミガキと黒色処理が施されている。11は土師器碗の底部付近で、内面は黒色処理とミガキが施されている。



第210図 D16.20~31号土坑実測図

(16) D 19号土坑 (第209図)

本址は、調査地点C区南側のチ-109.110、ツ-109.110Grに位置する。残存状態は南側がカクランによって削平されている。形態は細長い楕円形と考えられ、規模は長軸2.48m・短軸0.76m（残存）・深さ30cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(17) D 20号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区南側のチ-113Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は楕円形で、規模は長軸0.75m（検出）・短軸0.17m（検出）・深さ7cmを測る。覆土中に焼土と炭化物が含まれる。本址より出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

(18) D 21号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区南側のチ-112Grに位置する。残存状態は西側をH1号住居址により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-73°-Eを示す。規模は長軸2.90m（残存）・短軸2.08m・深さ22cmを測る。本址より須恵器壺片2点、土師器壺片4点が出土しており、帰属時期はこれらの出土遺物から不確実ではあるが、平安時代と考えられる。

(19) D 22号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区南側のチ-109Grに位置する。残存状態は北側をカクランにより削平されている。形態は円形で、規模は長軸0.81m・短軸0.68m（残存）・深さ6cmを測る。

本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(20) D 23号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のツ-107、テ-107Grに位置する。残存状態は東側半分が調査区域外となる。形態は円形で、規模は長軸1.05m・短軸0.58m（検出）・深さ42cmを測る。

本址からの出土遺物は、内面黒色処理を施した土師器壺片4点、須恵器壺片1点などがあり、帰属時期はこれらの遺物より、平安時代と考えられる。

(21) D 24号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のテ-107.108Grに位置する。残存状態は南側を単独ピットに削平されている。形態は方形で、長軸方位はN-30°-Wを示す。規模は長軸1.08m・短軸0.82m・深さ22cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器壺片2点、土師器壺片2点があり、帰属時期は不明である。

(22) D 25号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のト-107Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-25°-Eを示す。規模は長軸0.92m・短軸0.65m・深さ11cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器壺片1点のみで、帰属時期は不明である。

(23) D 26号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のテ-106.107、ト-106Grに位置する。残存状態は東側が削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-48°-Wを示す。規模は長軸1.40m（残存）・短軸0.75m・深さ19cmを測る。本址からの出土遺物は武藏壺と呼ばれる土師器壺片1点と、内面黒色処理が施された土師器壺片4点があるのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(24) D 27号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区中央のト-105Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、規模は長軸0.75m・短軸0.70m・深さ11cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片2点、内面黒色処理した土師器坏片4点、土師器甕片1点があつたのみであり、遺構の帰属時期は不明である。

(25) D 28号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区中央のト-105Grに位置する。残存状態は良好である。形態は梢円形である。土坑の長軸方位はN-50°-Eを示す。規模は長軸1.20m・短軸1.00m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器坏片1点、須恵器甕片、内面黒色処理した土師器坏片があつたのみである。よって本址の帰属時期は不明である。

(26) D 29号土坑 (第210図、写真図版二十四)

本址は、調査地点C区南側のト-108Grに位置する。残存状態は南側がカクランにより削平されている。形態は不整形で、規模は長軸1.38m・短軸1.10m・深さ26cmを測る。本址からの出土遺物は図示した9点がある。12と13は灰釉陶器皿である。14は土師器の高台付皿であり、体部に「用」と読める墨書がある。15も同じく土師器高台付きの皿である。内面黒色処理とミガキが施されている。16は須恵器坏の底部である。17は須恵器坏で、底部回転糸切り離しを施す。18~20は須恵器甕で、18は赤化している。19は胴部に隆帯を貼付している。21は蔽石である。本址はこれらの出土遺物から、平安時代の所産と考えられる。

(27) D 30号土坑 (第210図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のト-108.109Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長方形で、長軸方位はN-86°-Wを示す。規模は長軸3.20m(検出)・短軸2.40m・深さ30cmを測る。本址の底面にはピットと壁溝のような遺構が検出された。ピットの規模は西側が径40cm・深さ55cm、東側が径26cm・深さ34cmを測る。また、本址の底面には焼土塊と炭化物が検出された。

本址からの出土遺物は多く、13点を図示した。22~27は須恵器坏である。22のみ高台を貼付している。いずれも底部は回転糸切り離しである。28~31は土師器坏であり、いずれも内面黒色処理されている。31は内面に螺旋状の暗文が施されている。32は土師器の小型甕である。33は土師器の蓋であり、天井部に扁平な宝珠のつまみが付く。また焼成後あけられたと考えられる孔がある。34は須恵器甕の口縁部である。本址はこれらの出土遺物から、8世紀後半から9世紀前半の所産時期が考えられる。

(28) D 31号土坑 (第210図)

本址は、調査地点C区南側のト-110Grに位置する。残存状態は北側が削平されている。形態は梢円形で、長軸方位はN-25°-Wを示す。規模は長軸0.65m(残存)・短軸0.60m・深さ14cmを測る。

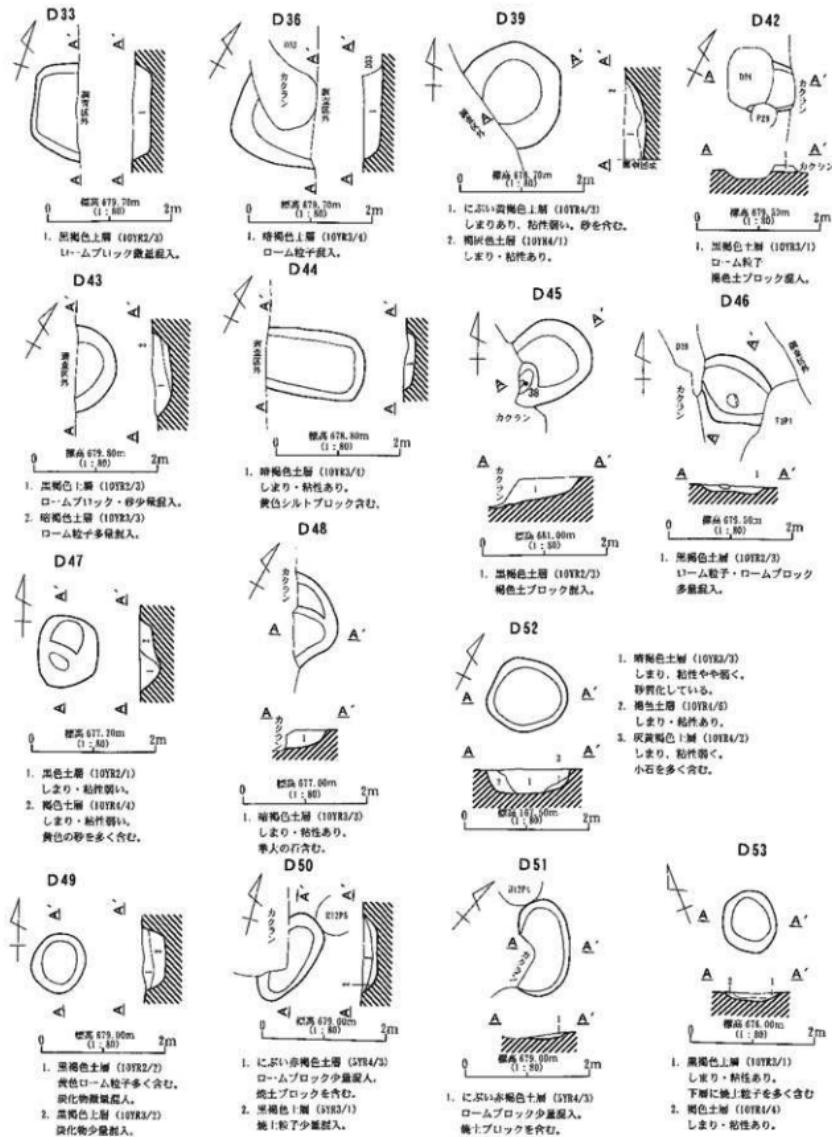
本址からの出土遺物は須恵器甕片1点のみで、遺構の帰属時期は不明である。

(29) D 33号土坑 (第211図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のト-108Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は方形で、規模は長軸1.58m・短軸0.76m・深さ9cmを測る。本址より出土遺物は須恵器坏片1点、内面黒色処理の土師器坏片4点、土師器甕片2点があつたが、帰属時期は不明である。

(30) D 36号土坑 (第211図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のト-110Grに位置する。残存状態は北側がカクランにより削平されて



第211図 D33.36.39.42~53号土坑大削面図

いる。形態は不整形で、規模は長軸1.50m・短軸1.40m・深さ21cmを測る。本址の出土遺物は図示した35の土師器壺があるが、出土遺物が少なく帰属時期は不明である。

(31) D 39号土坑 (第211図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区中央のホ-90Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は円形で、長軸方位はNを示す。規模は長軸1.70m・短軸1.57m・深さ38cmを測る。本址より須恵器壺片1点、須恵器壺片2点、内面黒色処理した上師器壺片2点が出土しており、不確実であるが本址の帰属時期は、平安時代と考えられる。

(32) D 42号土坑 (第211図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区中央のテ-107Grに位置する。残存状態は西側がD 24号土坑により削平されている。形態は稍円形と考えられ、規模は長軸0.80m(残存)・短軸0.80m・深さ16cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(33) D 43号土坑 (第211図)

本址は、調査地点C区南側のニ-104Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は円形と考えられ、規模は長軸1.38m・短軸0.66m(残存)・深さ24cmを測る。本址からの出土遺物は2点を図示した。36は土鍋の胸部破片である。37は須恵器の大型の盤か、或いは皿である。やや生焼け気味である。本址の帰属時期は出土遺物が少なく、不明である。

(34) D 44号土坑 (第211図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区北側のフ-92Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は長方形で、長軸方位はN-73°-Eを示す。規模は長軸1.60m(検出)・短軸1.08m・深さ23cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(35) D 45号土坑 (第211図、写真図版二十五)

本址は、調査地点C区南側のナ-102Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。形態は稍円形で、長軸方位はN-54°-Eを示す。規模は長軸1.50m(残存)・短軸1.20m・深さ32cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した38の須恵器長頸壺がある。胴部付け根から口縁部下までの破片で、内外面に自然釉が付着している。本址の所産時期は出土遺物が少なく、不明である。

(36) D 46号土坑 (第211図、写真図版二十五)

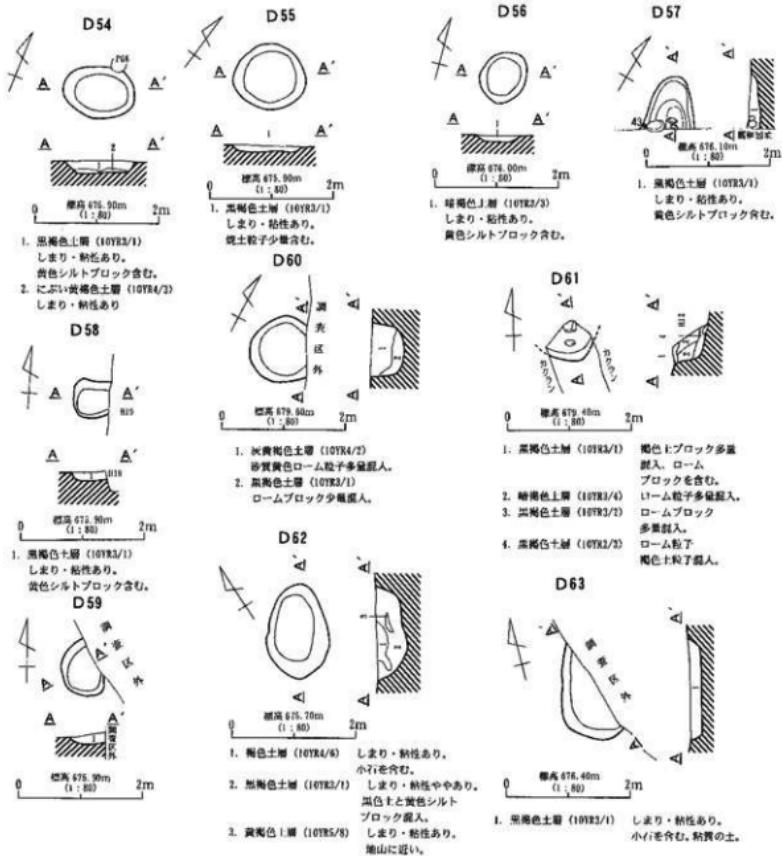
本址は、調査地点C区南端のチ-110Grに位置する。残存状態は東西を別遺構により削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-64°-Wを示す。規模は長軸1.12m(残存)・短軸1.07m・深さ15cmを測る。本址の出土遺物は須恵器壺片2点、土師器壺片2点、土師器壺片1点があったのみである。よって本址の帰属時期は、不明である。

(37) D 47号土坑 (第211図、写真図版二十六)

本址は、調査地点B区南側のヲ-56Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN-18°-Eを示す。規模は長軸1.16m・短軸1.00m・深さ33cmを測る。本址からの出土遺物は土師器壺片1点、武藏甕と呼ばれる土師器甕片5点が出土したのみであり、本址の帰属時期は不明である。

(38) D 48号土坑 (第211図、写真図版二十六)

本址は、調査地点B区南側のシ-54Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されてい



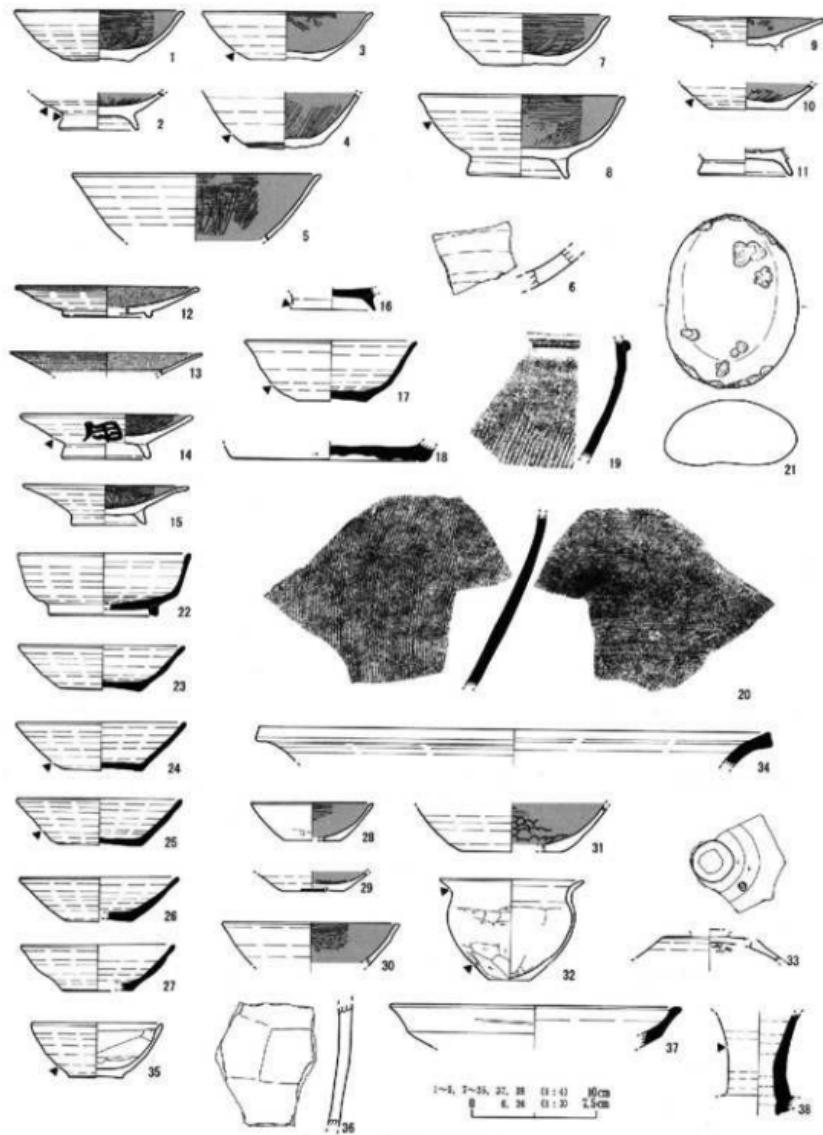
第212図 D54~63号土坑実測図

る。形態は不整形で、規模は長軸1.53m・短軸0.72m・深さ38cmを測る。本址からの出土遺物は、須恵器壺片1点があったのみで、帰属時期は不明である。

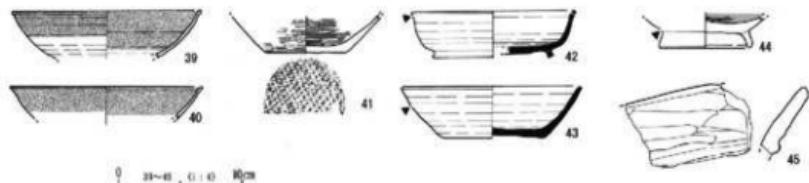
(39) D49号土坑 (第211図)

本址は、調査地点C区中央のニ-101Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、長軸方位はN°を示す。規模は長軸0.95m・短軸0.87m・深さ37cmを測る。

本址からの出土遺物は、図示した39.40の灰釉陶器碗の2点がある。いずれも口縁部のみの残存である。この他には図示できなかったが、内面黒色処理された土師器壺片7点と須恵器壺片2点がある。本址の帰属時期はこれらの出土遺物より、不確実であるが平安時代と考えられる。



第213圖 土坑出土遺物尖測圖 (1)



第214図 土坑出土遺物実測図 (2)

(40) D50号土坑 (第211図、写真図版二十六)

本址は、調査地点C区中央のニ-101Grに位置する。残存状態は北西側をカクランにより削平されている。形態は楕円形で、規模は長軸1.50m・短軸0.67m・深さ27cmを測る。本址からの出土遺物は内面黒色処理された土師器壺片1点、土師器甕片4点があつたのみである。本址の帰属時期は出土遺物が少なく、不明である。

(41) D51号土坑 (第211図、写真図版二十六)

本址は、調査地点C区中央のニ-102Grに位置する。残存状態は北西側をカクランにより削平されている。形態は楕円形で、長軸方位はN-40°-Wを示す。規模は長軸1.52m・短軸0.82m（残存）・深さ20cmを測る。本址からの出土遺物は内面黒色処理された土師器壺片1点、土師器甕片2点があつたのみである。よって本址の帰属時期は、不明である。

(42) D52号土坑 (第211図、写真図版二十六)

本址は、調査地点B区北側のC-48Grに位置する。残存状態は上面をM5号溝状遺構により削平されている。形態は円形で、規模は長軸1.30m・短軸1.20m・深さ53cmを測る。本址からの出土遺物は図示した縄文土器があり、底部のみの残存であったが、底部に網代痕が明瞭につく。出土遺物が少なく、土坑の帰属時期は不明である。

(43) D53号土坑 (第211図、写真図版二十六)

本址は、調査地点A区南側のM-30.31、N-30.31Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、規模は長軸1.00m・短軸0.87m・深さ16cmを測る。本址からは武藏甕と呼ばれる土師器甕片が多く出土したが、土坑の帰属時期は不明である。

(44) D54号土坑 (第212図、写真図版二十六)

本址は、調査地点A区南側のN-29.30Grに位置する。残存状態は良好で、形態は楕円形である。長軸方位はN-82°-Eを示す。規模は長軸1.18m・短軸0.85m・深さ18cmを測る。本址からは武藏甕と呼ばれる土師器甕片が多く出土したが、土坑の帰属時期は不明である。

(45) D55号土坑 (第212図、写真図版二十六)

本址は、調査地点A区南側のN-29Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形である。規模は長軸1.14m・短軸1.05m・深さ13cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した42の須恵器高台壺がある。本址の帰属時期は出土遺物が少なく、不明である。

(46) D 56号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のL-32Grに位置する。残存状態は良好である。形態は円形で、規模は長軸0.84m・短軸0.70m・深さ15cmを測る。本址からの出土遺物は武藏甕と呼ばれる上師器甕片4点、土師器坏片1点があつたのみであり、帰属時期は不明である。

(47) D 57号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のL-33Grに位置する。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は不整形で、規模は長軸0.84m（検出）・短軸0.90m・深さ33cmを測る。本址からの出土遺物は、図示した須恵器坏が1点あるのみである。底部は回転糸切り離しが行われている。本址の出土遺物は少量で、帰属時期は不明である。

(48) D 58号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のN-29Grに位置する。残存状態は東側をH19号住居址に削平されている。形態は不整形で、長軸方位はN-87°-Eを示す。規模は長軸0.58m（残存）・短軸0.60m・深さ21cmを測る。本址より出土遺物は上師器坏片1点のみであり、遺構の帰属時期も不明である。

(49) D 59号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点A区南側のN-28Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸0.92m（残存）・短軸0.64m・深さ23cmを測る。本址からの出土遺物は武藏甕の土師器甕片が7点、須恵器坏片1点のみであり、遺構の帰属時期も不明である。

(50) D 60号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点C区中央のト-104Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は円形である。規模は長軸1.06m・短軸0.92m（検出）・深さ54cmを測る。本址より出土遺物は、図示した44の土師器碗があつたのみである。内面は黒色処理されている。本址の帰属時期は出土遺物も少なく、不明である。

(51) D 61号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点C区中央のニ-102Grに位置する。残存状態は南東側を残してカクランにより削平されている。形態は不明である。規模は長軸0.75m（残存）・短軸0.68m（残存）・深さ57cmを測る。本址より出土遺物は、図示した45の縄文土器深鉢の口縁部破片があつた。口縁部は波頭状となる。本址の帰属時期は不明である。

(52) D 62号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点A区北側のQ-22Grに位置する。残存状態は良好である。形態は梢円形で、規模は長軸1.53m・短軸1.02m・深さ52cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

(53) D 63号土坑 (第212図、写真図版二十七)

本址は、調査地点B区北側のC-47、D-47Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。形態は梢円形である。規模は長軸1.52m（検出）・短軸0.87m（検出）・深さ25cmを測る。本址より出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

No.	種別	器種	法号	成形・調整・文様			備考	出土位置
				内面	外面	裏面		
1	土師器	坪	13.6	5.7	4.1	ミガキ→黒色處理	ロクロナデ 武部心回転糸切り	完全実測 D4 2cm
2	土師器	輪	-	6.5	(3.0)	ミガキ→黒色處理	ロクロナデ	完全実測 D4
3	土師器	坪	13.7	5.7	3.8	ミガキ・黒色處理	底面部糸切り(方向不明)・付高台	完全実測 摩耗 D5
4	土師器	坪	-	5.9	(4.4)	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 底面部糸切り	完全実測 D5
5	土師器	坪	20.0	-	(5.4)	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転実測 D5
6	土師器	輪	-	(2.5)	ロクロナデ 施錫	ロクロナデ 施錫	破片実測 D5	
7	土師器	坪	13.7	6.9	4.3	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 番縁有糸切り	完全実測 D6
8	土師器	輪	16.7	4.2	6.5	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	完全実測 D6
9	土師器	輪	12.6	-	(2.0)	ミガキ・黒色處理	底面部糸切り(方向不明)・付高台	四輪実測 D12
10	土師器	坪	-	6.4	(2.2)	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 底面部糸切り	完全実測 D17
11	土師器	坪	-	7.6	(2.2)	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 底面部糸切り(方向不明)	完全実測 D17
12	火薬壺	坪	14.8	7.2	2.4	施錫	ロクロナデ 施錫糸切り・付高台	四輪実測 D29
13	火薬壺	坪	15.5	-	(1.7)	施錫	ロクロナデ 施錫	四輪実測 D29
14	火薬壺	坪	13.9	7.1	3.6	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 番縁糸切り・付高台	完全実測 番縁有り 周 D29 少-10%
15	土師器	坪	13.5	6.0	3.2	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 武部糸切り・付高台	完全実測 D29
16	重底盤	高台坪	-	6.9	(1.8)	施錫	底面部糸切り・付高台	完全実測 D29
17	重底盤	坪	13.9	5.6	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ 底面部糸切り	完全実測 D29
18	重底盤	輪	-	15.7	(1.5)	ナデ	削削ヘラケズリ	回転実測 悪感剥離 D29 5cm
19	重底盤	輪	-	-	-	タクキ→ヨガナデ	タクキ	折本 D29
20	重底盤	坪	-	-	-	当島瓶→ヘラナデ	和本	D29 13cm
22	重底盤	高台坪	13.9	8.8	3.0	ロクロナデ 火薬	ロクロナデ 火薬	回転実測 D30
23	重底盤	坪	13.5	6.4	3.6	ロクロナデ 火薬	ロクロナデ 番縁糸切り 火薬	完全実測 D30
24	重底盤	坪	13.8	6.3	3.8	ロクロナデ 火薬	ロクロナデ 番縁糸切り 火薬	完全実測 D30
25	重底盤	坪	13.3	6.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 底面部糸切り	完全実測 D30 - 40cm
26	重底盤	坪	12.8	5.3	3.5	ロクロナデ 火薬	ロクロナデ 大火薬	完全実測 D30
27	重底盤	坪	12.4	5.6	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ 底面部糸切り	回転実測 D30
28	土師器	坪	9.8	4.4	3.0	ミガキ・黒色處理	ミガキ・黒色處理	回転実測 D30
29	土師器	坪	-	3.0	(1.6)	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ 武部糸切り	完全実測 番縁有り D30
30	土師器	坪	14.2	-	(3.4)	ミガキ・黒色處理	ロクロナデ	回転実測 D30
31	土師器	坪	-	8.0	(3.8)	施錫等・黒色處理	ロクロナデ 直落手持ちヘラケズリ	四輪実測 D30
32	土師器	小型坪	11.6	2.0	8.0	ロクロナデ→施錫から底盤へナデ	ロクロナデ 直落手持ちヘラケズリ	回転実測 D30
33	土師器	蓋	-	(2.5)	ミガキ	ロクロナデ	大井型回転ヘラケズリ→まみ駄付	完全実測 大井型に使われる穿孔有り D30
34	重底盤	坪	41.5	-	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 D39
35	土師器	坪	10.7	4.4	4.4	ヘラナデ	ロクロナデ	底面部糸切り
36	圓盤	上蓋	-	-	-	ナデ	ナデ	D43
37	重底盤	盤	23.4	-	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測 D43
38	重底盤	長削巻	-	(8.1)	ロクロナデ	自然棘付巻	ロクロナデ 自然棘付巻	完全実測 D45 5cm
39	重底盤	輪	15.3	-	(3.8)	ロクロナデ 施錫	ロクロナデ 施錫	四輪実測 D49
40	重底盤	輪	15.4	-	(2.6)	施錫	施錫	四輪実測 D49
41	網文	實	-	6.6	(3.1)	ミガキ	底盤ヘラケズリ→ミガキ 底盤網代復有り	回転実測 D62
42	重底盤	高台坪	13.2	9.7	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ 番縁糸切り ・付高台	回転実測 D65
43	重底盤	坪	14.5	8.0	4.1	ロクロナデ 火薬	ロクロナデ 番縁糸切り 火薬	完全実測 D57 5cm
44	土師器	輪	-	7.5	(2.6)	ミガキ・黒色處理	底面部糸切り(方向不明)・付高台	完全実測 D60
45	織錆	深鉢	-	-	-	ナデ	ナデ・織錆付	四輪実測 加賀利川 D61
46	刃物	刺	材	4cm	4cm	最大長 最大幅 最大厚	所見	出土位置
21	鍔石	角閃石安山岩	-	13.8	10.7	5.4	976.00 上・下の錠刃、正爪に鍔打痕	D29

第124表 上坑出土遺物観察表

第4節 特殊遺構

(1) T1号特殊遺構 (第215図、写真図版二十九)

本址は、調査地点C区中央のツ-108.109、テ-108.109Grに位置する。残存状態は南側をD30号土坑とカクランにより削平されている。D29.30.36号土坑と重複関係にあり、本址が一番古い。形態は不整形であるが、南北方向に長く、南側が一段深くなっている。規模は北側壁が1.66m（残存）、東側壁が1.32m（残存）、深さは12cmを測る。覆土は4層に分かれるが、焼土と炭化物が混入する1層が他の層を掘り込むように堆積していた。また、深い部分には扁平な川原石が散乱するように底面から検出された。遺構底面にはピットが確認され、形態は方形で、規模は長軸83cm・短軸46cm・深さ10cmを測る。

本址からは図示した1～3の遺物がある。1は土器部品で、内面黒色処理が施されている。2は須恵器の胴部破片で、外面は平行タタキが施されている。3は須恵器甕の底部と考えられ、内面は当て具痕が僅かに残る。これらの出土遺物から本址は平安時代の所産と考えられるが、遺構の性格については不明である。



第215図 T1号特殊遺構及び出土物実測図

No.	種別	計測	計量 (108.6/8) (108.6/2) 108.6/2 (108.6/8)	成形・測量・文様			基準	出土位置
				内	外	三		
1	土器部 品	外	15.9 — (L8)	— (CLD)	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	日輪丸切	
2	須恵器 甕	裏	— —	—	ハラナデ	タタキ	馬本	
3	須恵器 甕	裏	— 18.8 (L8)	当具組→ナデ	ナデ	ナデ	日輪丸切 赤瓦	

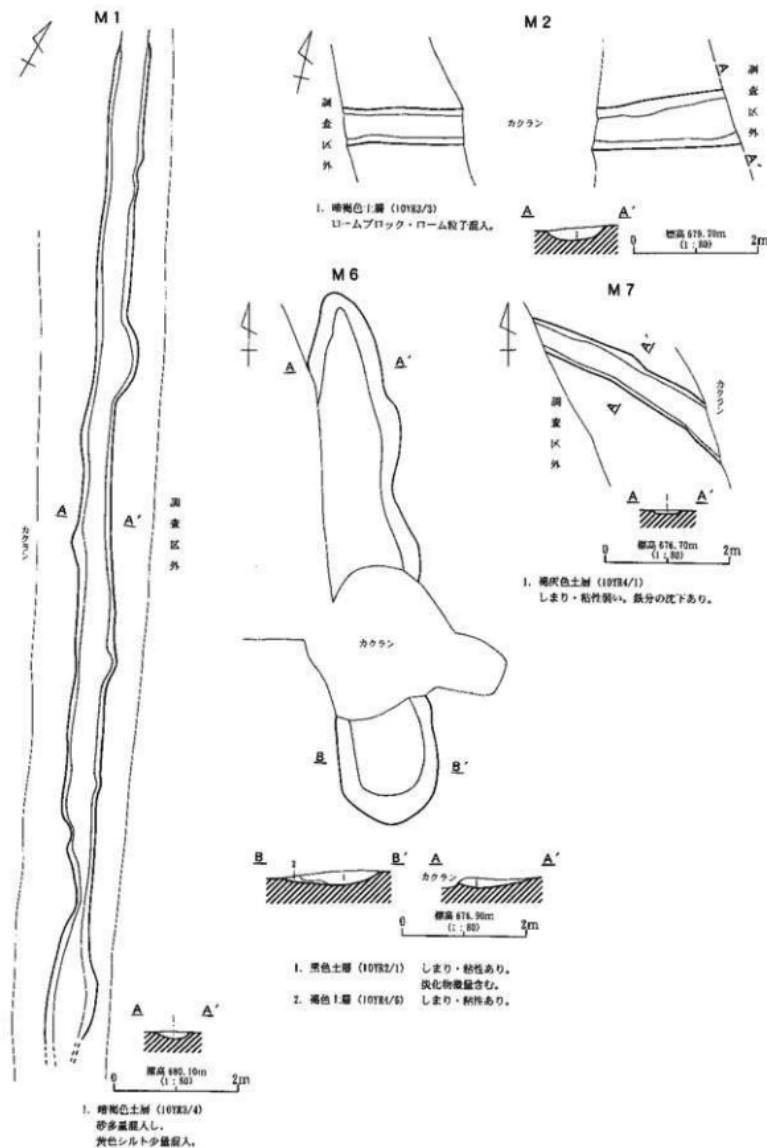
第125表 T1号特殊遺構出土遺物観察表

第5節 溝状遺構

(1) M1号溝状遺構 (第216図、写真図版二十八)

本址は、調査地点C区南端のゾ-113.114.115、タ-111.112.113Grに位置する。残存状態は南北側が自然と浅くなり、消滅している。

形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は浅いU字形を呈する。規模は長さ16.30m（検出）・幅20～78cm・深さ3～15cmを測る。



第216図 M 1,2,6,7 号溝状遺構測図

本址からの出土遺物は内面黒色処理した土師器坏片1点、須恵器坏片4点、須恵器壺片3点があつたのみであり、所産時期は不明である。

(2) M2号溝状遺構 (第216図)

本址は、調査地点C区南側のチ-110、ツ-110.111Grに位置する。残存状態は東西が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面はU字形を呈する。規模は長さ6.20m(検出)・幅52~90cm・深さ1~17cmを測る。本址からの出土遺物は須恵器壺片1点、須恵器坏片2点、土師器坏片4点であった。出土遺物が少量で、帰属時期も不明である。

(3) M4号溝状遺構 (第217図、写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のヲ-55.56、ン-54.55.56、A-53.54.55、B-53.54Grに位置する。残存状態は東西方向が調査区域外となる。

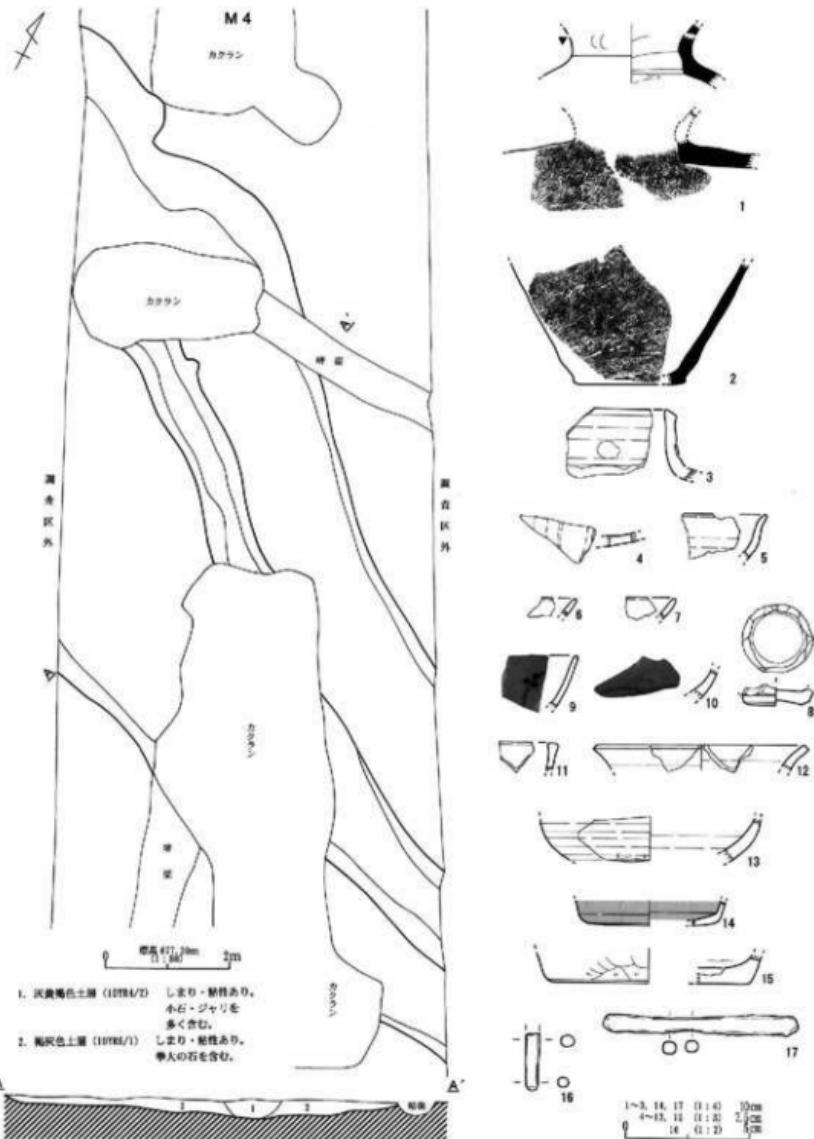
形態は南東から北西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ13.0m(検出)・幅4.77~6.02m・深さ6~39cmを測る。また、本址は溝中央部分に幅0.70~1.42mの新たに掘り込まれた溝状遺構がある。この部分が新たに掘り直した溝なのか、幅広い溝状遺構と別遺構なのかは判断がつかなかつたが、中央の細い溝からは染め付け碗等が出土した。

本址からの出土遺物は比較的多く、また時代幅のある遺物が出土した。1は須恵器横瓶の口縁部から肩部である。2は須恵器壺の底部付近で、外面平行タタキが施されている。3は灰釉陶器の短頸壺の口縁部と考えられる。釉が付着している。4は青磁碗の体部の破片で、連弁文が施されている。5は古瀬戸の天目茶碗の口縁部である。6と7はいずれも古瀬戸の灰釉碗と考えられる。8は古瀬戸大窯の天目茶碗底部で、故意的な打ち欠きが見られる。9と10は染め付け碗である。11から13は在地前山焼の製品と考えられる。14はカワラケのようであるが、確証を得ない。15は土鍋の底部付近である。16と17は鉄製品である。

本址はこれらの出土遺物より中世から近世にかけての遺構で、堆積土の中に流水を示す部分もあることから、一時は流路となっていたと考えられる。

名	種別	沿 線	法 量	成 形・装 簡・文 標		備 考	出土地		
				内 面	外 面				
1	須恵器	横瓶	-	-	ナデ	タタキ	四輪実測	I・II区	
2	須恵器	壺	-	9.0 (9.8)	ナデ	側部タタキ→底部外周へラケズリ 底部タタキ	四輪実測	II区	
3	灰釉陶器	壺	-	-	自然輪付肩	自然輪付肩	破片実測	II区	
4	青磁	碗	-	(0.9)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉 蓋弁文	破片実測 蓋弁文	I区	
5	陶器	大目茶碗	-	(2.7)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実測 古瀬戸 連岡	17C前半	
6	陶器	灰釉陶	-	(...)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実測 古瀬戸・美濃	I区	
7	陶器	灰釉碗	-	(...)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	破片実測 古瀬戸・美濃	I区	
8	陶器	大目茶碗	-	4.0 (1.0)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 底部心回転ヘラケズリ	完全実測 古瀬戸 大窯 15C中か16C E・Ⅲ	I区	
9	陶器	臼付碗	-	-	(3.2)	梅花	破片実測 伊万里	II区	
10	陶器	臼付碗	-	-	(1.9)		4期後半~5期 18C後半		
							成片実測 伊万里		
							4期後半~5期 18C後半		
11	陶器	鋤?	-	(1.8)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	成片実測 前山 寺門	I区	
12	陶器	碗?	12.9	(1.6)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉	14期後半~5期 18C後半	II区	
13	陶器	碗?	-	(2.7)	ロクロナデ 施釉	ロクロナデ 施釉 (つけがけ)	成片実測 前山 近世	II区	
14	陶器	かわらけ片	-	10.0 (2.0)	黒色處理	黒色處理	成片実測	II区	
15	陶器	土鍋	-	12.2 (1.8)	ナデ	底部と表部外周へラケズリ~ヘラナデ	四輪実測	I区	
No.	器 働	素 材	理 作	底人丸	底人丸	底大厚	重 量	所 見	出土地
16	不明	鉄	-	(2.3)	(0.6)	(0.5)			II区
17	不明	鉄	-	15.7	1.5	1.4			I区

第126表 M4号溝状遺構出土物観察表



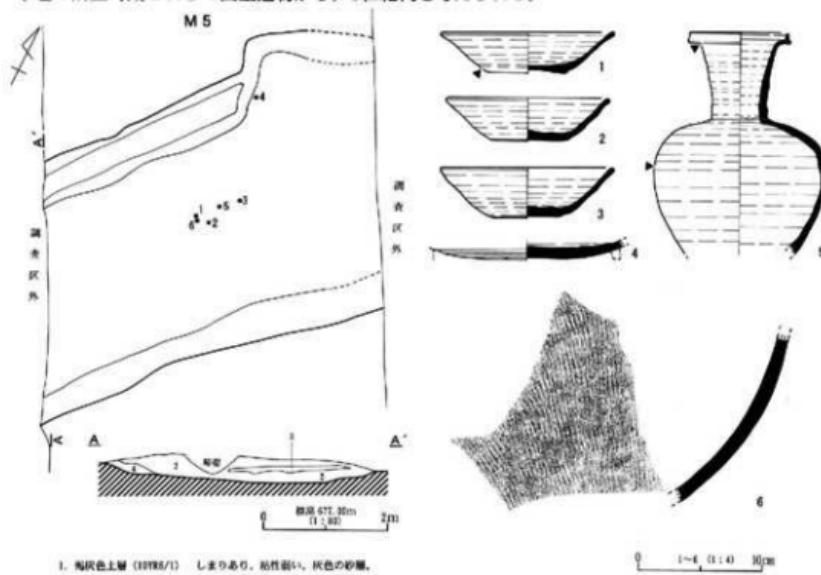
第217図 M4号溝状遺構及び出土遺物実測図

(4) M5号溝状遺構 (第218図、写真図版二十八)

本址は、調査地点B区北側のB-49、C-48.49.50、D-49Grに位置する。残存状態は東西端が調査区域外となる。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ5.60m(検出)・幅3.70~4.75m・深さ19~31cmを測る。覆土は間層に灰色の砂層をレンズ状に含む。

本址からの出土遺物は6点を図示した。1~3は須恵器坏で、いずれも底部回転糸切り離しが行われている。4は須恵器の高台坏で、高台部が欠損している。底部が高台よりも飛び出す。いわゆる東海湖西産の「出尻底タイプ」の坏に似ている。5は須恵器壺であり底部を欠損する。6は須恵器壺胴部の破片である。

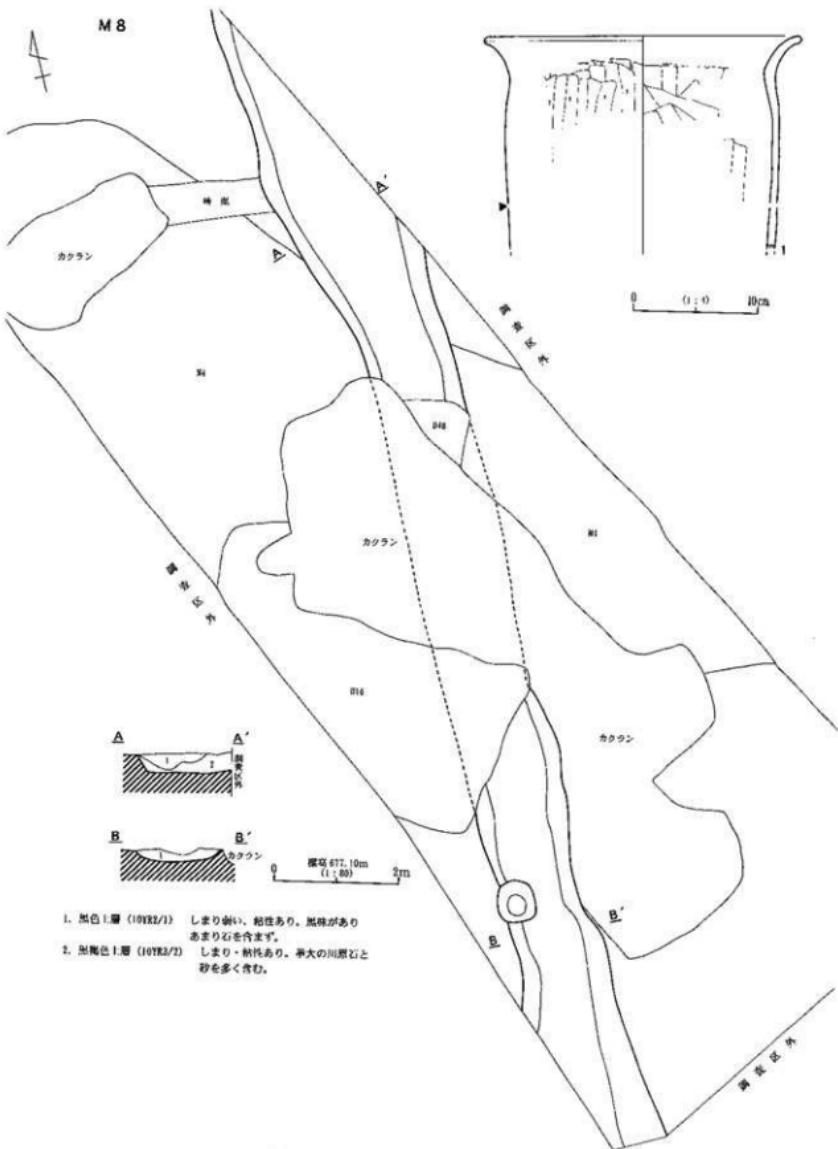
本址の所産時期これららの出土遺物から、8世紀代と考えられる。



第218図 M5号溝状遺構及び出土遺物実測図

No.	種別	跡種	法 庫	成 形・調 型・文 横			備 考	出土位置
				内 面	外 面	記 号		
1	須恵器	坏	14.1 口回転・火拂	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り	完全実測	0cm
2	須恵器	坏	13.2 口回転・火拂	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り	完全実測	0cm
3	須恵器	坏	14.0 口回転・火拂	ロクロナデ	ロクロナデ	底部糸切り	完全実測	2cm
4	須恵器	高台坏	— — (1.5)	ロクロナデ	標準回転ヘラケズリ→火拂(高台欠損)	火拂欠損	2cm	
5	須恵器	壺	8.0 — (17.90)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	完全実測	0cm
6	須恵器	壺	— — —	日輪底→ナデ	タキ	—	軽本 実測	1.5cm

第127表 M5号溝状遺構出土遺物観察表



第219図 M8号溝状遺構及び出土物実測図

(5) M 6号溝状遺構 (第216図、写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のA-52.53、B-51.52.53Grに位置する。残存状態は良好であるが、南北側は遺構が浅くなるのが検出できなかった。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は緩やかな皿状を呈する。規模は長さ8.57m（検出）・幅1.16～1.57m・深さ6～24cmを測る。覆土は自然堆積で炭化物が少量含まれる。

本址からの出土遺物は図示できるものは無かったが、古墳時代後期の特徴を持つ土師器壺片が多く出土した。これらの出土遺物から不確実ではあるが、本址の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。

(6) M 7号溝状遺構 (第216図、写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のB-51.52、C-51Grに位置する。残存状態は西端が調査区域外、東側がカクランにより削平されている。形態は東西方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ3.25m（検出）・幅0.45～0.54m・深さ3～12cmを測る。

本址からの出土遺物はなく、帰属時期も不明である。

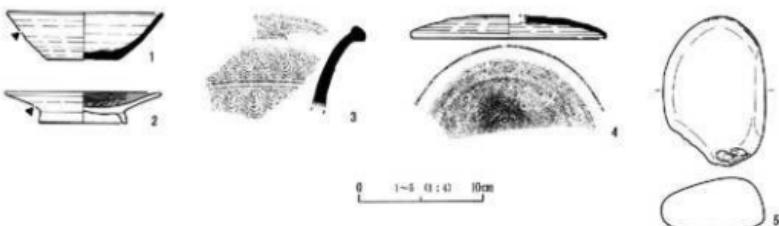
(7) M 8号溝状遺構 (第219図、写真図版二十八)

本址は、調査地点B区中央のシ-53～57Grに位置する。残存状態は南北端が調査区域外となる。H16号住居址、D48号土坑、M4号溝状遺構と重複関係に本址が一番古い。形態は南北方向に伸びる溝状遺構で、溝底面は逆台形を呈する。規模は長さ16.36m（検出）・幅1.20～1.80m・深さ7～33cmを測る。覆土中には一部砂層が混じる部分があり、拳大の川原石も多く含む。

本址からの出土遺物は、図示した1の土師器壺があった。口縁部はあまり屈曲せず、外面は継方向のケズリが施されている。本址の帰属時期は、不確実であるが古墳時代と考えられる。

No.	種 別	基 標	法 算	成 形・調 整・文 雕		備 考	出 土 位 置	
				内 面	外 面			
1	土師壺	壺	25.5	—	口縁ヨコナデ→斜張ヘラケズリ	口縁ヨコナデ→斜張ヘラケズリ	同軸実測	Ⅱ区

第128表 M8号溝状遺構出土遺物観察表



第220図 ピット出土遺物実測図

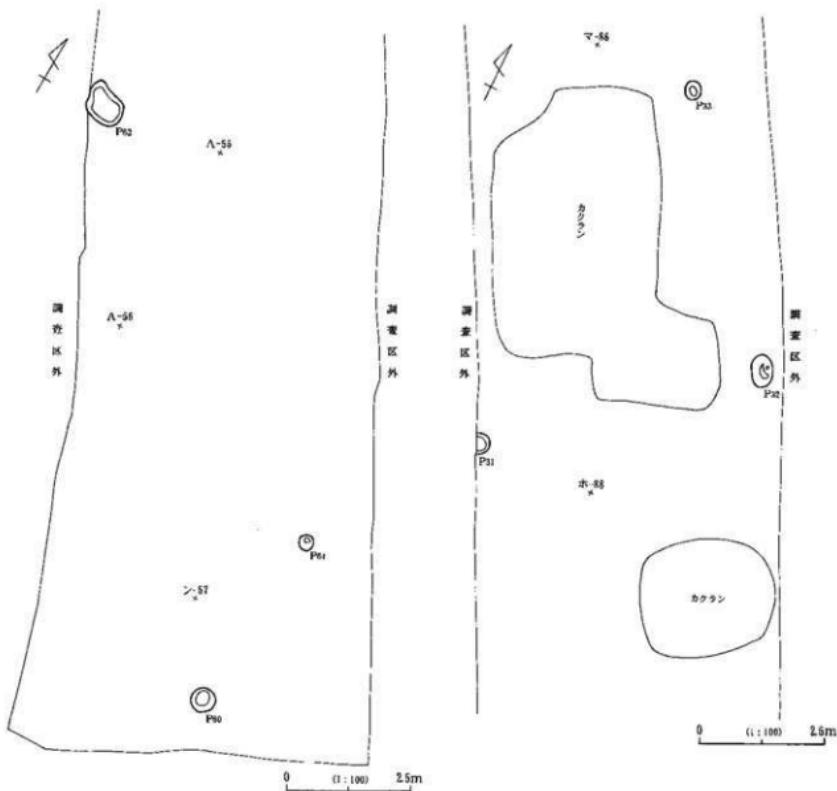
No.	種 別	基 標	法 算	成 形・調 整・文 雕		備 考	出 土 位 置
				内 面	外 面		
1	土師壺	壺	12.7 12.9 2.8	ロクロナデ	口クロナデ 斜部右斜板角切り	完全実測	P22 0cm
2	土師壺	高台壺	12.6 7.2 2.5	ミギナ-黒色斑理	ロクロナデ 斜部右斜板角切り 付高台	完全実測	P22
3	土師壺	壺	— — —	自然輪付壺	青磁淡灰鉄5本1短Jを北面で区切る	沿木	P22
4	土師壺	壺	— 15.6 (1.80)	ロクロナデ	ロクロナデ 天井部斜面ヘラケズリ ヘラ縁有り? 自然輪付壺	同軸実測 差み有り	P42
No.	基 標	基 材	残存部	最大径	最大深	基 量	出 土 位 置
5	壺	角鉄右山型		11.9	8.2	4.4	同上
				840.00			P88 10cm

第129表 ピット出土遺物観察表

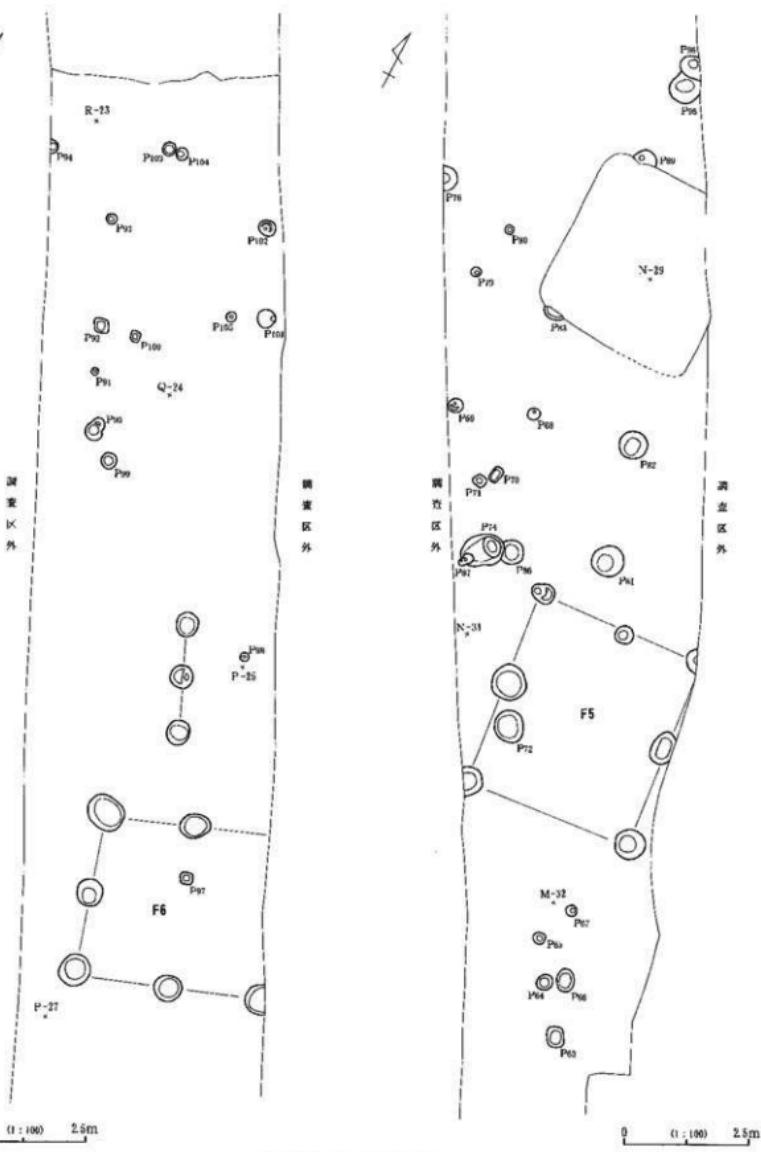
第6節 ピット群 (第220~224図)

儘田遺跡IIから検出された単独ピットは96個であり、先に述べた市道遺跡や辻遺跡とは異なり、ピットの検出数は少なかった。しかし、調査地点C区のト-105Gr付近では大型の円形ピットがいくつか検出され、その配置から掘立柱建物址や或いは柱列を推定出来そうなものもいくつかあったが、調査範囲が道路幅という制約もあり、図中で図示するまでには至らなかった。その他のピットはいずれも小型の円形状で、深さはいずれも浅かった。

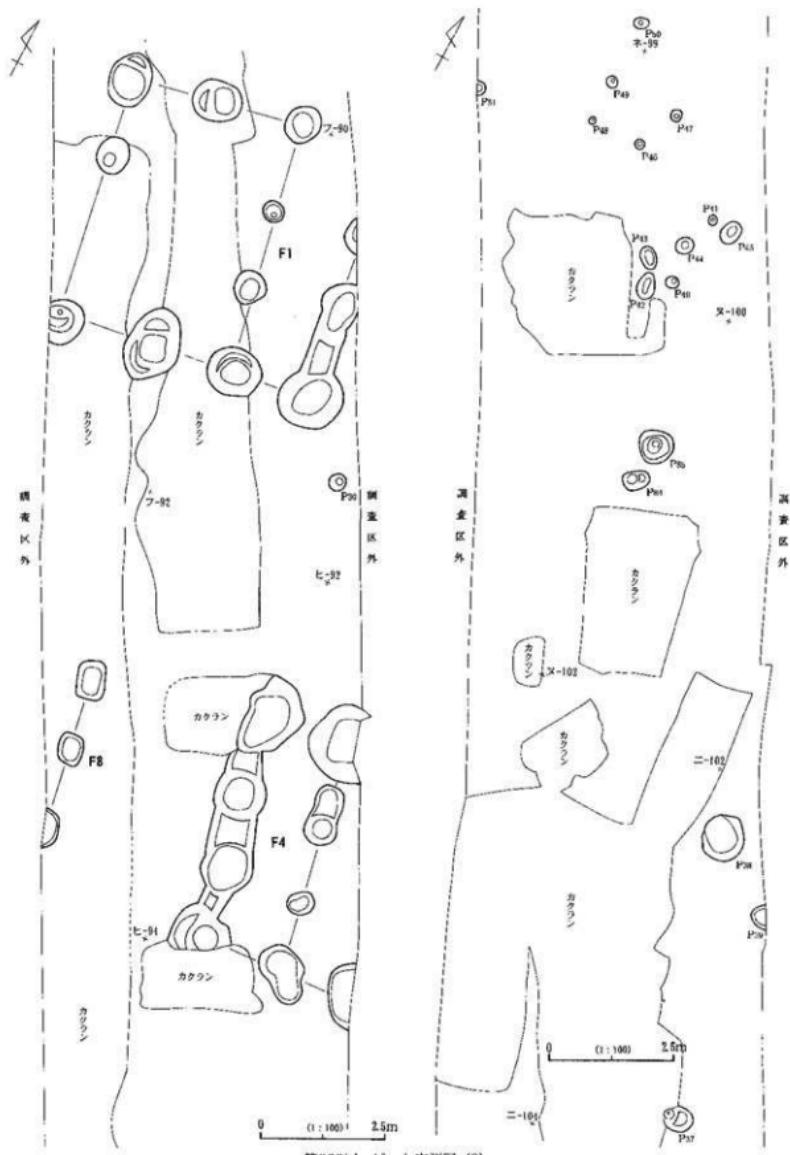
ピットから出土した遺物として5点を図示したが、3点はP22からの出土である。1は須恵器壺でピット底面より出土している。2は土師器の高台付きの皿で、内面は黒色処理されている。3は須恵器壺の口縁部で、櫛描の波状文が描かれている。4はP42から出土した須恵器蓋であり、つまみ部が欠損している。内面にヘラ記号状の傷があるが、焼成前のものである。5は敲石で先端に敲打の跡がある。



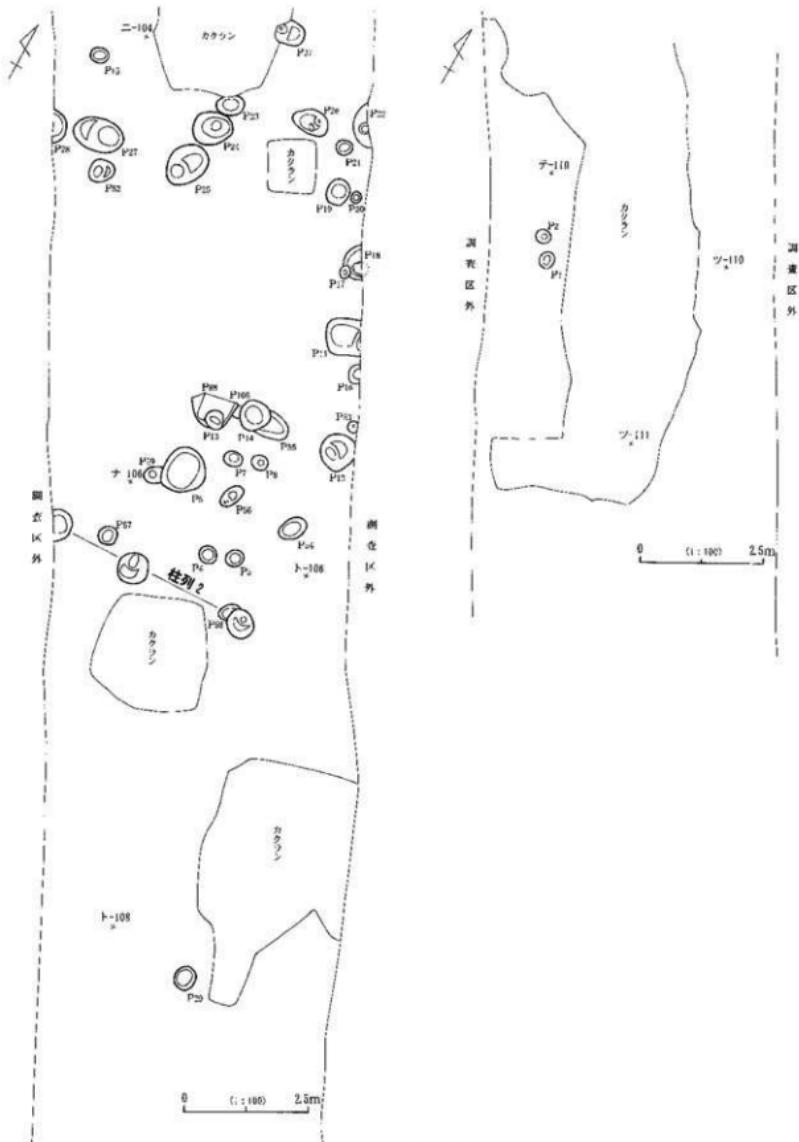
第221図 ピット実測図(1)



第222図 ピット実測図 (2)



第223図 ピット実測図 (3)



第224図 ピット実測図 (4)

遺構名	出土位置	長径×短径×深さ	形態	層 土	出土遺物	時代	遺構関係
P1	ツ-110	33×30×17	円形	黒褐色土 (10YR3/2) 小石少含	土師器等		
P2	*	32×28×21	*	*			
P3							柱列2に重複
P4	ト-106	37×34×18.5	円形	黒褐色土 (10YR2/3) 黄色1~2ムブロック含	土師器 (内窓)		
P5	*	37×32×14	*	*			前部窓跡・坪
P6	ト-105	92×85×10.5	楕円形	1) 示し 黒褐色土 (10YR4/3) ブーム粒子多含 2) 黑褐色土 (10YR2/3) ロームブロック少含 3) 黄褐色土 (10YR4/3) ロームブロック多含 4) 黑褐色土 (10YR2/2) ロームブロック無含	土師器等、 灰褐色瓦等 (内窓)		
P7	*	40×32×14	円形	粘褐色土 (10YR3/3) ローム粒子多含			
P8	*	33×32×18	*	*			遺跡露窓
P9							柱列2に重複
P10							*
P11	ト-104	(72)×72×39 (テラス24)	長方形?	黒褐色土 (10YR3/2) 黄色1~2ムブロック多含	土師器等、灰褐色瓦		
P12	ト-105	70×70×29 (テラス22)	円形	黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子多含			10.28に切られる
P13	*	40×38×40	*	黒褐色土 (10YR2/1) 17~ム粒子少含	土師器等		
P14	*	60×60×15.5	*	*			土師器等、壁、灰褐色瓦等 (口袖)
P15	二-104	35×33×7	*	時雨色土 (10YR3/3) 黄色ブロック・ローム粒子含	土師器等、 灰褐色瓦等、坪、灰褐色		
P16	ト-104-105	38×(24)×20	円形?	時雨色土 (10YR3/3) 砂少含	上階窓 (内窓)、灰褐色瓦		
P17	ト-104	28×22×20	円形	時雨色土 (10YR3/3) ローム粒子多含			
P18	*	70×(37)×20	-	*			
P19	*	55×47×15.5	円形	粘褐色土 (10YR3/3) 砂少含	遺跡露窓、土師器等		
P20	*	25×23×7	*	*			遺跡露窓
P21	ト-103-104	34×31×8.5	*	黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子多含	上階窓 (内窓)、灰褐色		
P22	ト-103	7×17×33	円形?	1) 黒色1 (10YR2/1) 砂・ローム粒子少含 2) 黑褐色土 (10YR3/1) 砂少含	土師器等 (内窓)、灰褐色 遺跡露窓・壁 (10.28)		
P23	ト-104	66×39×23	楕円形	粘褐色土 (10YR3/3) ローム粒子多含	土師器等 (内窓)、壁		
P24							柱列1に重複
P25	ナ-104	94×73×19 (テラス28)	*	1) 黒褐色土 (10YR2/3) 砂・ローム粒子少含 2) 黑褐色土 (10YR2/1) 砂少含	土師器等 (内窓)・壁 灰褐色瓦		
P26	ナ-104-105	72×50×50 (テラス41)	*				土師器等 (内窓)
P27	ナ-2-105	102×66×37	*	1) 黒褐色土 (10YR3/1) 17~ム粒子少含 2) 黑褐色土 (10YR2/1) 砂少含	遺跡露窓、土師器等		
P28	ニ-104	(67)×(28)×30	-	時雨色土 (10YR3/2) 黄色ブロック多含			
P29	チ-108	48×43×13	楕円形				上階窓 (内窓)
P30	ヒ-91	35×35×36	円形	時雨色土、しまりあり			
P31	ホ-88	46×(26)×21	-	粘褐色土、しまりあり			
P32	ヘ-87	64×15×50 (テラス34)	楕円形				
P33	ホ-85-86	36×33×26.5	*	*			
P34							
P35							
P36							
P37	ナ-103	58×50×43 (テラス17)	楕円形	時雨色土 (10YR3/3) 黄色ロームブロック少含	遺跡露窓・坪		
P38	ナ-102	(92)×(85)×32	*	1) 黑褐色土 (10YR3/1) 黄色1ム粒子多含 2) 黑褐色土 (10YR3/2) 黄色ロームブロック・ローム粒子含	灰褐色瓦等 土師器等・壁		10.2に切られる
P39	*	(47)×(29)×18	-	黑褐色土 (10YR3/2) 砂・黄色ローム粒子少含			
P40	メ-95	25×23×34	円形	施灰色土	土師器等 (内窓)	中世	
P41	*	19×16×20.5	*	*	土師器等 (内窓)	*	
P42	ヌ-99-100	53×34×23	楕円形	黑褐色土	灰褐色瓦等	古氏	
P43	ヌ-99	47×32×24.5	*	*	上階窓 (内窓)、灰褐色瓦等		

第130表 ピット剖面調査 (1)

遺物名	出土位置	長径×短径×深さ	形態	土	出土遺物	時代	重複関係
P44	ニ-99	38×32×14	楕円形	黒褐色土			
P45	*	48×36×20	*	*			
P46	*	19×19×27	円形	黒褐色土		中世	
P47	*	24×21×26	*	*		*	
P48	ニ-99	14×14×19.5	*	*			
P49	*	26×21×31.5	楕円形	*		*	
P50	ニ-98	30×23×27	*	*		*	
P51	ニ-99	28×(19)×11	-	*		*	
P52	テ-104	50×48×23 (テラス10)	円形		土師器灰・甕(古墳)、 漆器容器		
P53	ト-105	23×(20)×25	円形?	褐灰色土	漆器解体・环、 土師器式罐	中世	
P54	*	58×40×19	楕円形	*		*	
P55	*	(47)×44×17	楕円形?	*		*	P14に切られる
P56	*	52×31×24 (テラス17)	楕円形	*	漆器解体	*	
P57	ト-106	31×30×11	円形	*	土師器甕	*	
P58	*	(36)×(25)×9	楕円形				柱列2に切られる
P59	ト-105	(33)×36×17	楕円形				P6に切られる
P60	ヲ-57	50×48×31	円形				
P61	ン-56	32×28×40	*	褐色土 しらりぬい		不明	
P62	A-55	90×64×22	不整形	栗褐色土 しまり・粘性あり	L脚器式罐・环、 漆器甕・甕	古代	
P63	L-32	44×34×12	楕円形	*		*	
P64	*	33×32×12	円形	黒褐色土	土師器式罐		
P65	*	25×25×12	*	*			
P66	*	49×36×20	楕円形	*	土師器式罐 (削出)		
P67	I.-31-33	22×22×11	円形	*	L脚器甕 (内巻)		
P68	N-29	24×24×13.5	*	*			
P69	N-29-30	30×28×30	*	*			
P70	N-30	35×21×5	長方形	*			
P71	*	24×24×14.5	方形	栗褐色土 烧土粒子含			
P72	M-31	66×58×34	楕円形	1) 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性あり 2) 褐褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性あり 砂化している			
P73						P5に変更	
P74	N-30	88×64×47 (テラス39)	楕円形	1) 黑褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性あり 2) 明青褐色土 (10YR6/8) しまり・粘性あり	土師器式罐	P87に切られる	
P75						P5に変更	
P76	O-29	48×(28)×24		栗褐色土			
P77						P5に変更	
P78						*	
P79	N-29	20×20×11	円形	栗褐色土	土師器式罐・环		
P80	*	18×18×7	*	*	土師器甕 (古墳)		
P81	M-29	64×60×24	*	1) 黑褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含 2) 褐褐色土 (10YR5/6) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含			
P82	M-30	47×43×41	*	1) 黑褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり。黄色シルトブロック含 2) 黄褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり			
P83	N-29	(46)×(20)×21	-	黒褐色土		H19に切られる	
P84	ニ-2-100	56×41×38 (テラス28)	不整形	黑褐色土 黄色シルトブロック含			
P85	*	70×68×41	円形	褐色土	土器	中世	
P86	M-N-30	48×42×23	*	黒褐色土	土師器甕	古代	P74に切られる
P87	N-30	32×20×43 (テラス28)	不整形	*	*		
P88	ト-105	91×(64)×39	*	1) に青褐色土 (10YR5/8) しまり・粘性あり 2) 黑褐色土 (10YR5/6) しまり・粘性あり 砂化している 3) 黑褐色土 (10YR3/1) しまり・粘性あり 2層より差強	漆器容器、 土師器式罐		H14・P13に切られる

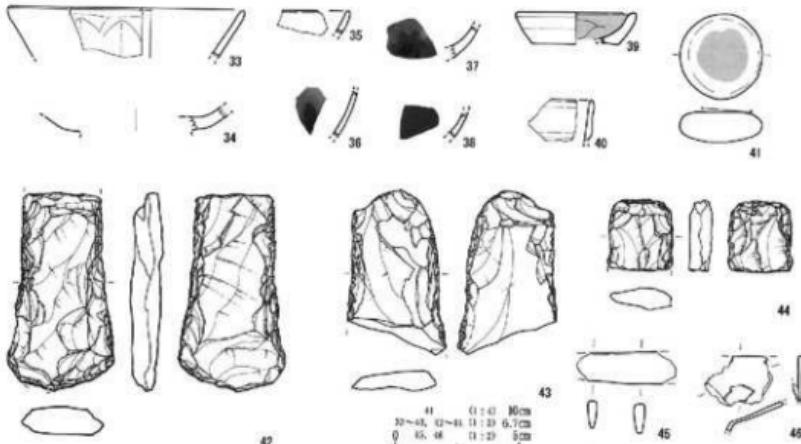
第131表 ピット計測表 (2)

遺構名	出土位置	長径×幅径×深さ	形態	土	出土遺物	時代	遺物關係
P89	N-2N	50×(30)×41	円筒?	黒褐色土	土師器		H19に切られる
P90	Q-24	43×38×29 (テラス25)	不整形	*			
P91	*	15×15×7	円筒	*			
P92	Q-23	30×37×42	方形容	*			
P93	*	22×20×14	円筒	*			
P94	R-23	28×(18)×10	*	*			
P95	N-28	60×54×36	楕円形容	*	土師器裏	古代	P96に切られる
P96	*	45×(40)×36	円筒	*	土師器裏	*	
P97	O-26	26×25×57	方形容	黒褐色土			
P98	P-24	18×18×24	円筒	三河色土			
P99	Q-24	32×32×7	*	*			
P100	Q-23	21×18×10	方形容	黒褐色土			中世
P101	P-23	38×36×25	楕円形容	褐色土	土師器裏	?	
P102	P-Q-23	34×31×22	円筒	*			
P103	Q-22	28×35×16	*	黒褐色土 土上模子付	土師器裏		
P104	*	24×24×12	*	*	土師器裏		
P105	P-23	19×19×26	*	黒褐色土			
P106	b-105	420×(17)×21	-				P14-P88に切られる

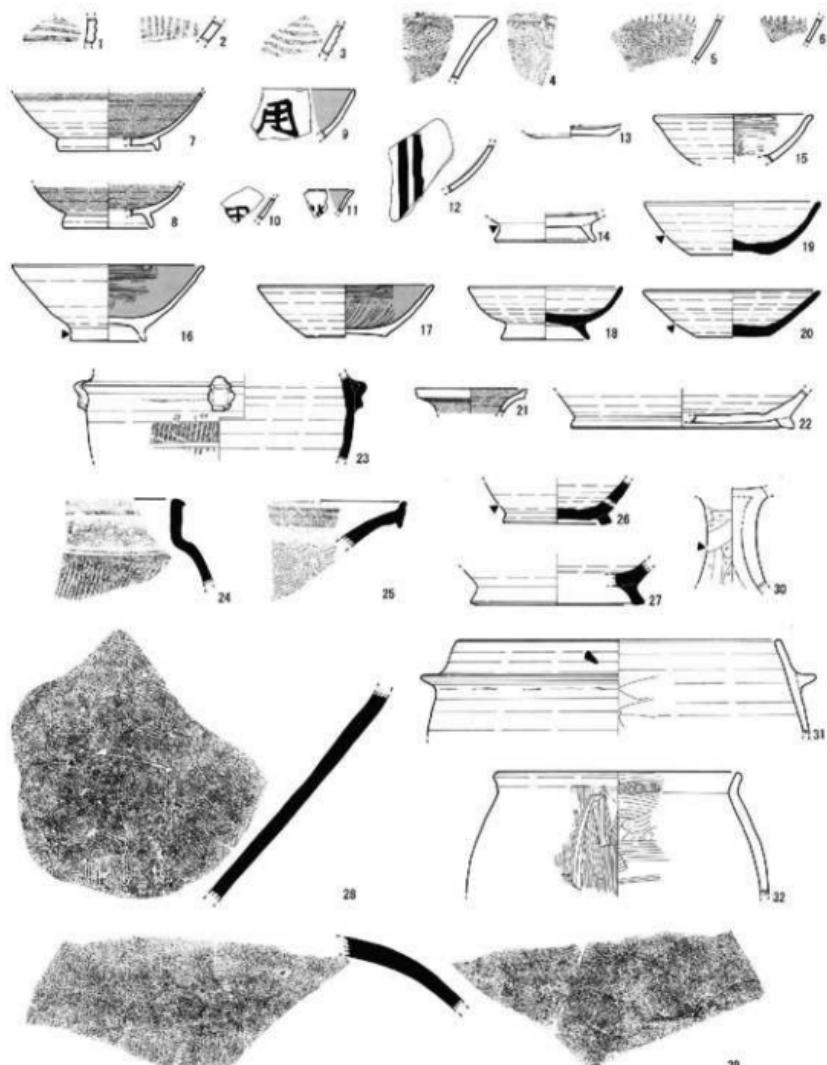
第132表 ピット計測表(3)

第7節 遺構外出土遺物 (第225・226図)

本遺跡からは多くの遺構に伴わない遺物も出土した。特に1~3の縄文土器や、4~6の弥生土器でも中期以前の資料も検出された。7と8は灰釉陶器碗で、内外面に釉を施している。9~11は土師器壺でいずれも墨書が確認できる。9は「用」判読できる。10は「田」とも考えられるが本遺跡は「用」が2点出土していることから、「用」の可能性がある。11と12は判読不明である。13と15は土師器壺である。17は土師器壺で、内面黒色処理されている。19と20は須恵器壺であり、いずれも底部回転系切り離しである。18は須恵器の高台付き壺である。24は須恵器の広口壺の口縁部と考えられる。23は須恵器の四耳壺の胴部破片で耳部とそれをつなぐ隆帯が残存する。21と22は灰釉陶器でありいずれも壺の口縁部と底部と考えられる。31は土師器の羽釜で、不確実であるが一部に墨痕が確認できる。33と34は青磁罐である。39はカワラケで内面黒色処理されている。42~44は打製石斧の欠損品であり、調査区B区中央からいずれも出土した。



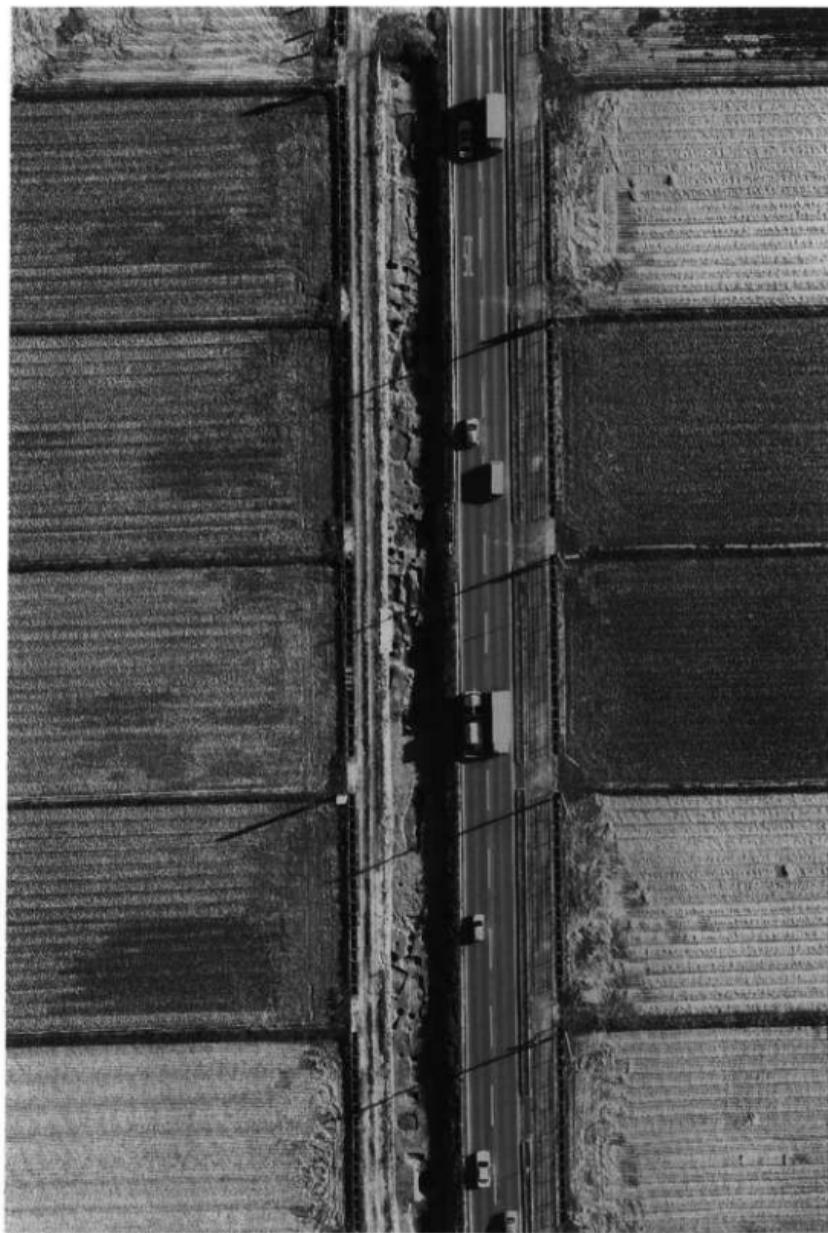
第225図 遺構外出土遺物実測図(1)



第226图 遗址出土实物示意图 (2)

No.	種別	因書	法書	成形・調理・文様				備考	出土位置
				内面		外面			
1	縦文	深鉢	-	-	-	-	-	紀本 前期?	チ-111
2	縦文	深鉢	-	-	-	-	-	紀本	ハ-54
3	縦文	深鉢	-	-	-	-	-	紀本	リ-23
4	縦文	要	-	-	-	-	-	紀本 前期	ア-35
5	横文	盃	-	-	-	-	-	紀本 葵林	ア-65
6	井字	束	-	-	-	-	-	紀本	ア-64
7	火被御器	両	-	7.8 (4.7)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪 底部凹軸条切り(方向不明)→付高台	四輪実面	セ-115	
8	火被御器	両	-	7.2 (3.5)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪(切り離し→付高台 施繪)	四輪実面	セ-115	
9	土師器	环	-	-	ミガキ→黑色處理	-	破片実面 磁器「用」	ア-	
10	土師器	环	-	-	ミガキ→黑色處理	-	破片実面 磁器有り	チ-108	
11	土師器	环	-	-	ミガキ→黑色處理	-	破片実面 磁器(字体不明)	ビ-53	
12	土師器	环	-	-	ミガキ→黑色處理	-	破片実面 磁器(字体不明)	チ-108	
13	土師器	环	-	5.8 (0.9)	ミガキ→黑色處理	高脚右側;各切り	完全実測 二次利用? 摺摩	チ-105	
14	土師器	曲	-	8.1 (2.4)	ミガキ→黑色處理	底部凹軸条切り→付高台	完全実測	ハ-92	
15	土師器	环	12.8	- (3.8)	ミガキ	ロクロナダ	四輪実面	チ-111	
16	土師器	曲	13.4	6.1	6.1	ミガキ→黑色處理	ロクロナダ	四輪実面	チ-108
17	土師器	环	14.2	6.4	4.3	ミガキ→黑色處理	ロクロナダ 凹軸(凹軸条切り(方向不明))→付高台	四輪実面	チ-108
18	須恵器	舟形杯	12.4	7.0	4.2	ロクロナダ	ロクロナダ	四輪実面	チ-108
19	須恵器	环	13.7	6.8	4.2	ロクロナダ	ロクロナダ 武部加輪条切り(方向不明)→付高台	四輪実面	チ-113
20	須恵器	环	14.3	5.8	3.7	ミクロナダ	ロクロナダ 凹軸右側条切り	完全実測	チ-108
21	灰被御器	長頭帶	9.0	-	(2.0)	施繪	ミクロナダ	四輪実面	チ-108
22	灰被御器	束	-	17.8	(3.2)	ミクロナダ	ロクロナダ 施繪ナ-付高台	四輪実面	チ-113
23	須恵器	四口盃	-	-	(6.9)	ロクイナダ	ロクロナダ タキヨコナダ→施繪	四輪実面	チ-108
24	須恵器	束	-	-	-	ナダ	ミクロナダ 施繪ナ-耳鉢付	紀本	シ-61
25	須恵器	束	-	-	-	ヨコナダ	自然輪付茎	紀本	チ-113
26	須恵器	束	-	8.8	(3.4)	ミクロナダ 自然輪付茎	ロクロナダ 自然輪付茎 底部凹軸条切り(方向不明)→付高台	四輪実面	シ-60
27	須恵器	董	-	14.0	(3.6)	ミクロナダ	ミクロナダ 付高台 自然輪付茎 施繪付茎	四輪実面	シ-62
28	須恵器	束	-	-	-	ヨコ窓ニナダ	タクタクニナダ	紀本 大利開か?	チ-105
29	須恵器	董	-	-	-	ヘラナダ	ヘラケズリ	紀本	シ-50
30	土師器	高杯	-	-	(8.2)	ナダ(ナダ)	ヘラケズリ	完全実測 磁器	ア-33
31	土師器	羽釜	26.2	-	(7.7)	ロクロナダ→ハケナダ	ロクロナダ 施繪付	紀本 完全有り	シ-36
32	土師器	董	30.0	-	(9.9)	ヘラナダ	ヘラナダ	四輪実面	チ-108
33	青磁	曲	14.2	-	(3.0)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪 運弁文	四輪実面 運弁	シ-101
34	青磁	曲	-	-	(1.0)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪	四輪実面 運弁	シ-101
35	陶器	丸形?	-	-	(1.5)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪	破片実面 古代瓦 大室2期	ア-54
36	陶器	染付碗	-	-	(2.0)	-	-	破片実面 伊万里 4周後半~5周 18C後半	ア-54
37	陶器	染付碗	-	-	(2.2)	-	-	破片実面 伊万里 4周後半~5周 18C後半	ア-54
38	陶器	灰釉丸瓶	-	-	(1.6)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪	破片実面 前山 遊作	セ-94
39	土師器	かわらけ	7.2	5.2	1.9	ミガキ→黑色處理	底茎系切りニナダ	四輪実面 平安	シ-56
40	陶器	こしきびね	-	-	(2.5)	ロクロナダ 施繪	ロクロナダ 施繪	破片実面 河戸・美濃 18C後半 江戸	チ-105
41	器種	素 材	飛行車	施繪人	施繪人	最大幅 幅大厚	底茎	所見	出上保
42	石	海石安山岩	-	6.8	6.6	2.5	162.00	平面に塵り面	ア-52
43	打型石	砂岩	(1.17)	6.3	(1.8)	(156.00)	基盤と刃の面が欠損	-	ア-54
44	打型石	砂岩	(9.8)	3.9	1.4	(34.53)	下側欠損	-	ア-53
45	刀子	鉄	(4.2)	(3.8)	(1.3)	(30.28)	下半部欠損	-	ア-54
46	不明	鉄	(4.0)	(1.3)	(0.6)	-	-	-	ア-55
			(2.7)	(2.0)	(0.2)	-	-	-	チ-114

第133表 遺構外出土遺物観察表



伊勢田遺跡II航空写真（上が南）



儘田遺跡II調査A区



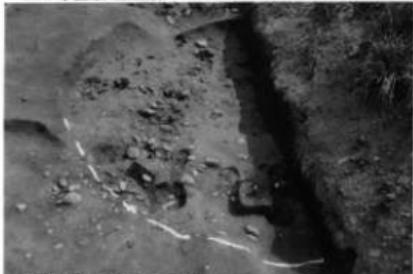
儘田遺跡II調査B区



儘田遺跡II調査C区



H1号住居址全景



H1号住居址掘り方全景



H1号住居址遺物出土状況



H2号住居址全景



H2号住居址掘り方全景



H3号住居址全景



H5号住居址全景



H5号住居址掘り方全景



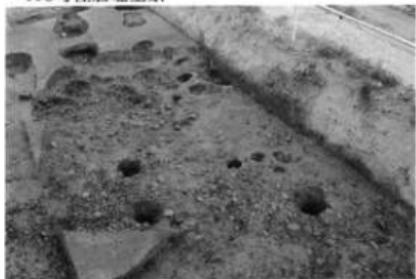
H7号住居址全景



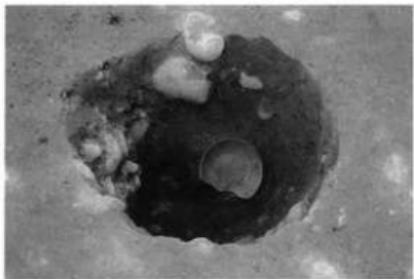
H7号住居址掘り方全景



H6号住居址全景



H6号住居址掘り方全景



H6号住居址遺物出土状況



H6号住居址カマド全景



H6号住居址カマド掘り方全景



H8号住居址全景



H8号住居址掘り方全景



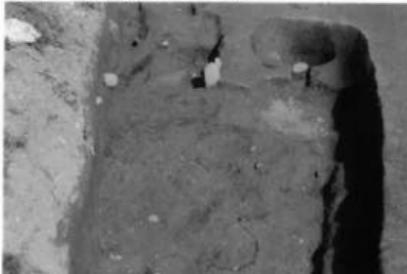
H9号住居址No.1カマド全景



H9号住居址No.2カマド全景



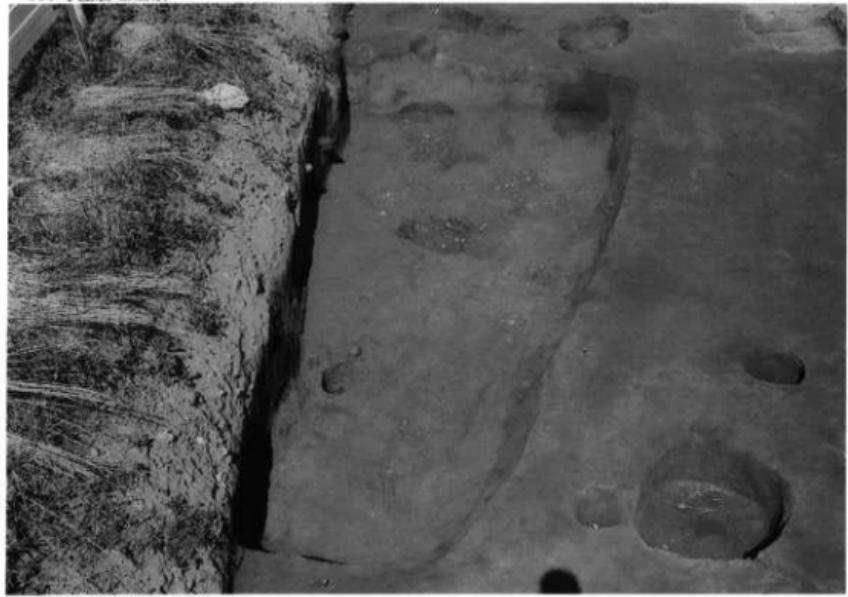
H9号住居址カマド掘り方



H9号住居址床検出状況



H9号住居址全景



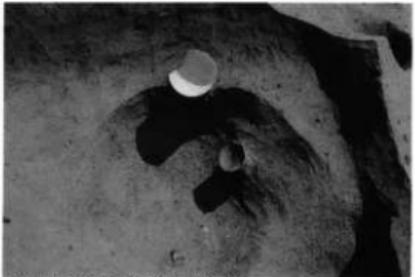
H9号住居址掘り方全景



H11号住居址全景



H11号住居址掘り方全景



H11号住居址遺物出土状況



H10号住居址全景



H12号住居址全景



H12号住居址掘り方全景



H12号住居址遺物出土状況



H12号住居址カマド全景



H12号住居址カマド掘り方全景



H13号住居址全景



H13号住居址掘り方全景



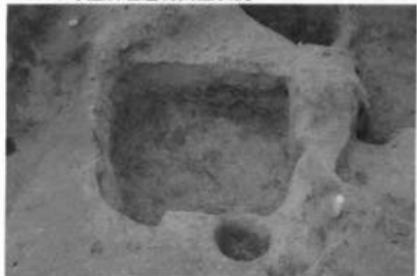
H13号住居址遺物出土状況



H13号住居址遺物出土状況



H13号住居址遺物出土状況



H13号住居址内土坑



H13号住居址壁ピット検出状況



H14号住居址全景



H14号住居址掘り方全景



H14号住居址遺物出土状況



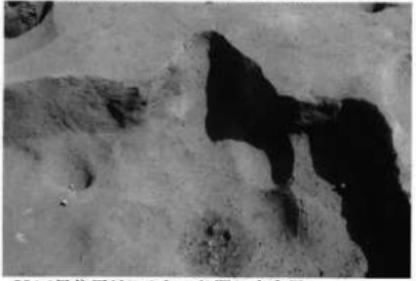
H14号住居址No.1カマド全景



H14号住居址No.1カマド掘り方全景



H14号住居址No.2カマド全景



H14号住居址No.2カマド掘り方全景



H15号住居址全景



H15号住居址掘り方全景



H16号住居址全景



H16号住居址カマド全景



H16号住居址カマド掘り方全景



H16号住居址掘り方全景



儲田遺跡Ⅱ調査風景



H17号住居址全景



H17号住居址覆土堆積状況



H17号住居址掘り方全景



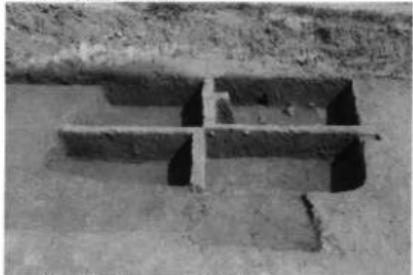
H17号住居址カマド全景



H17号住居址カマド全景



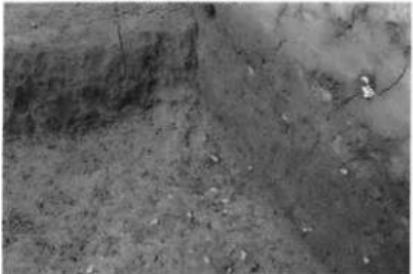
H20号住居址全景



H20号住居址覆土堆積状況



H20号住居址掘り方全景



H20号住居址カマド全景



H20号住居址遺物出土状況



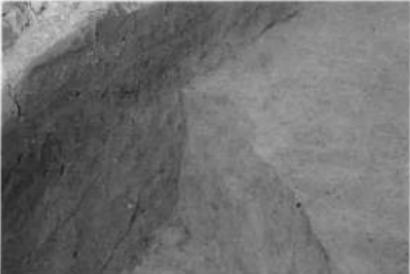
H18号住居址全景



H18号住居址掘り方全景



H18号住居址カマド全景



H18号住居址焼土検出状況



H19号住居址カマド全景



H19号住居址全景



H19号住居址掘り方全景



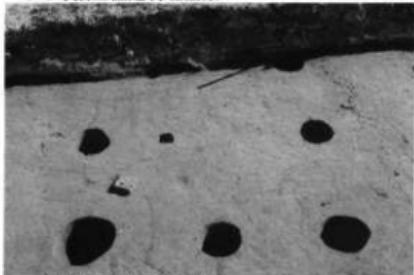
F 1号掘立柱建物址全景



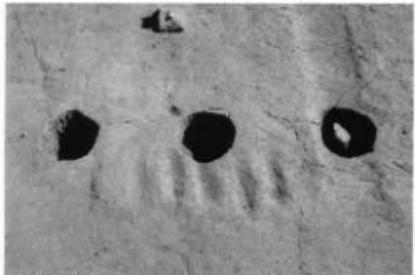
F 3号掘立柱建物址全景



F4号掘立柱建物址全景



F6号掘立柱建物址全景



F7号掘立柱建物址全景



F8号掘立柱建物址全景



櫻田遺跡Ⅱより野沢中学校方面を望む



D1号土坑



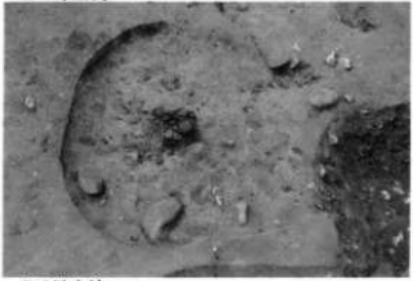
D2号土坑



D4号土坑



D5号土坑



D6号土坑



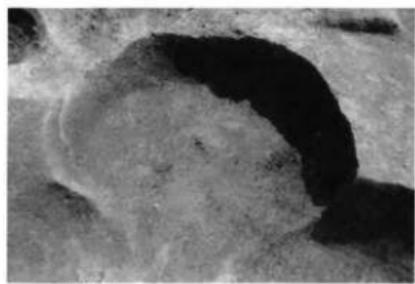
D6号土坑遗物出土状况



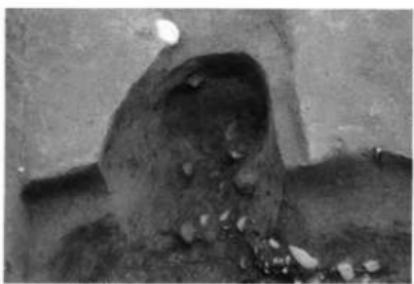
D8号土坑



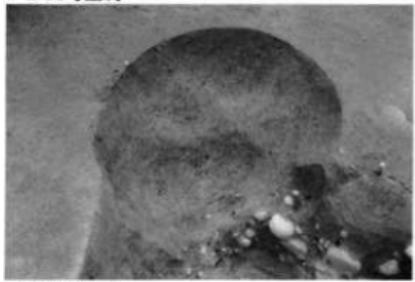
D9号土坑



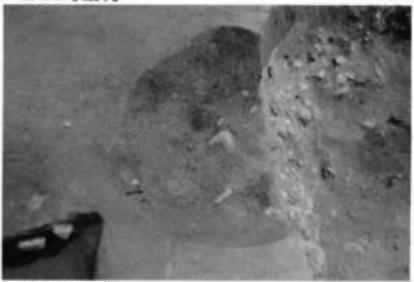
D10号土坑



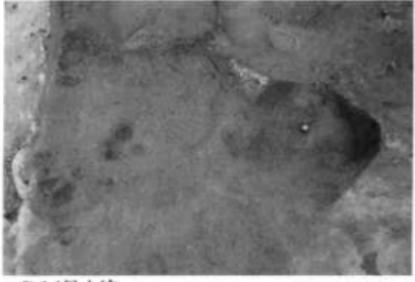
D11号土坑



D12号土坑



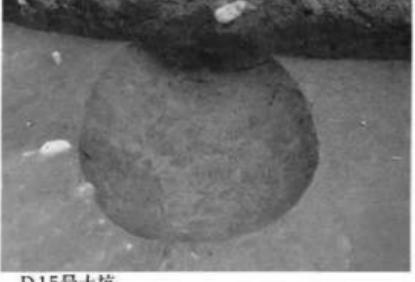
D13号土坑



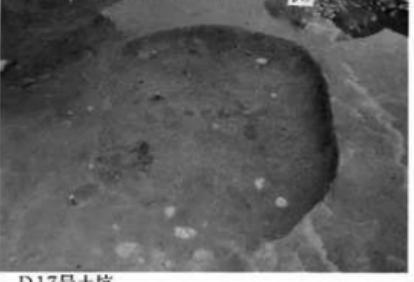
D14号土坑



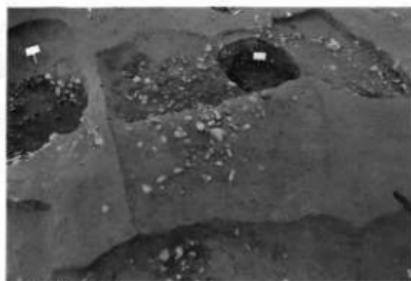
D14号土坑出土情况



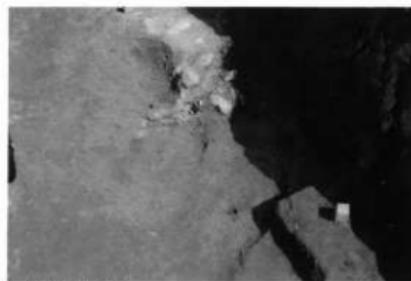
D15号土坑



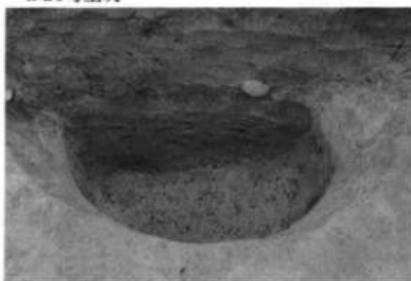
D17号土坑



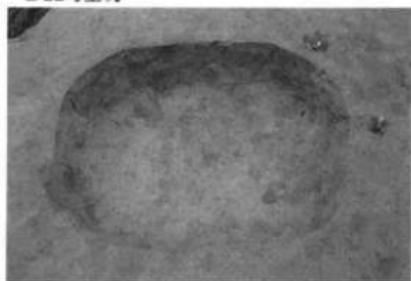
D21号土坑



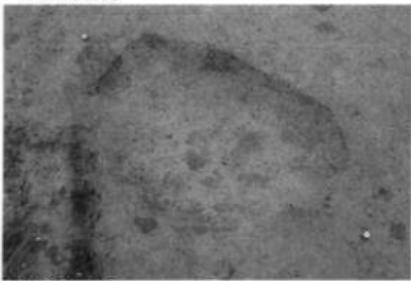
D22号土坑



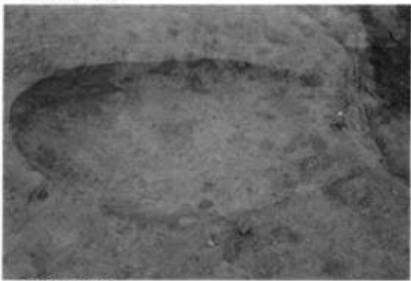
D23号土坑



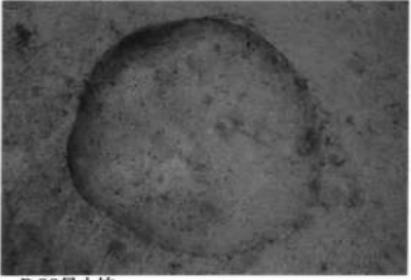
D24号土坑



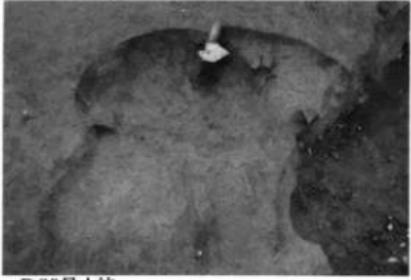
D25号土坑



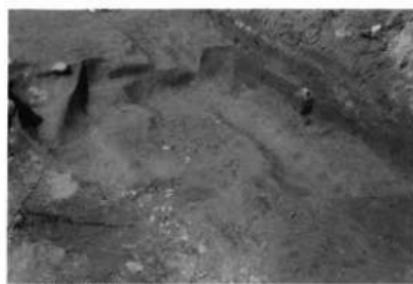
D26号土坑



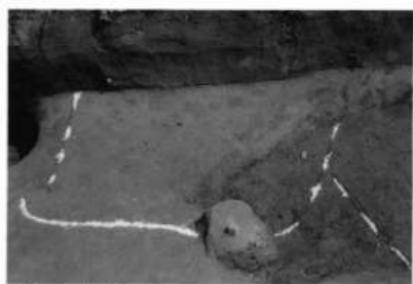
D28号土坑



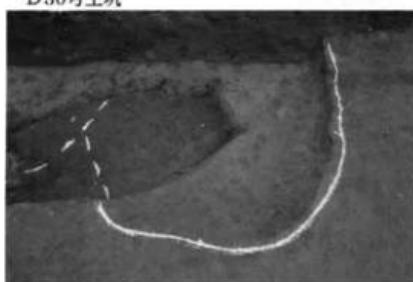
D29号土坑



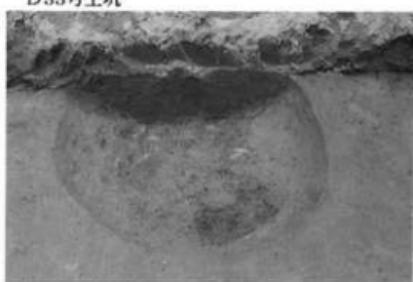
D30号土坑



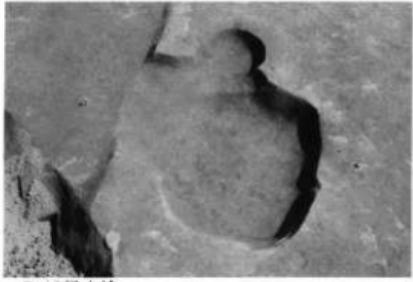
D33号土坑



D36号土坑



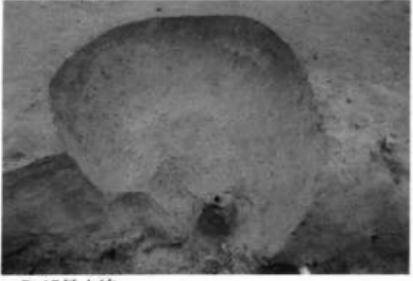
D39号土坑



D42号土坑



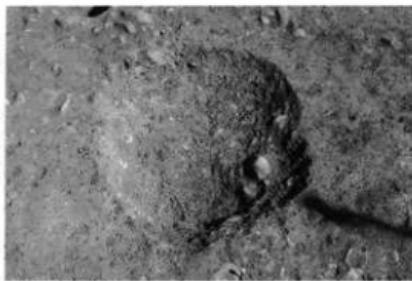
D44号土坑



D45号土坑



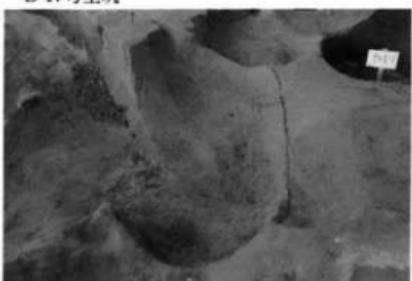
D46号土坑



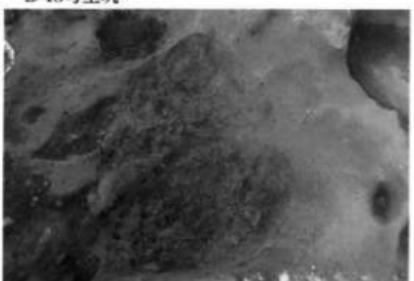
D47号土坑



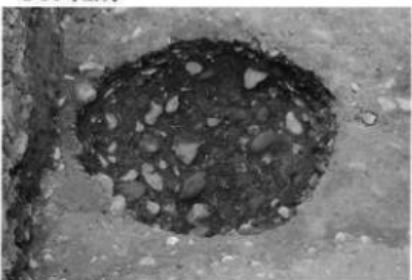
D48号土坑



D50号土坑



D51号土坑



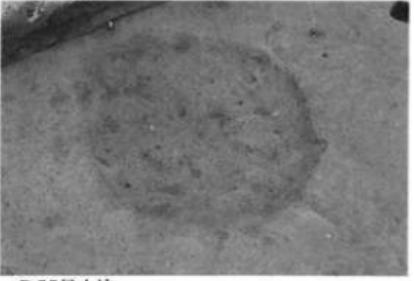
D52号土坑



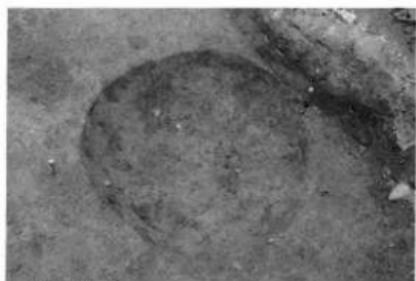
D53号土坑



D54号土坑



D55号土坑



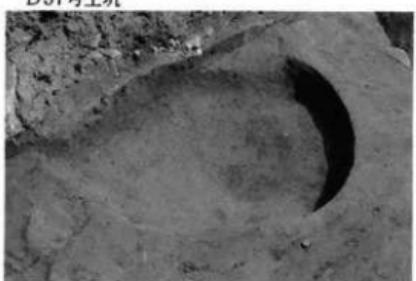
D56号土坑



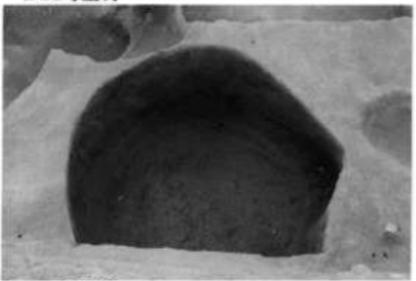
D57号土坑



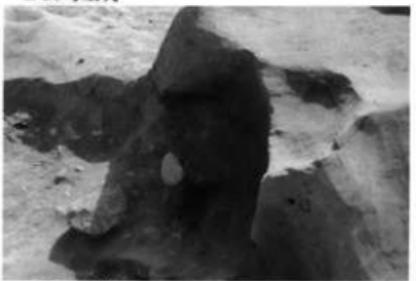
D58号土坑



D59号土坑



D60号土坑



D61号土坑



D62号土坑



D63号土坑





T1号特殊遺構



T1号特殊遺構燒土檢出狀況



T1号特殊遺構

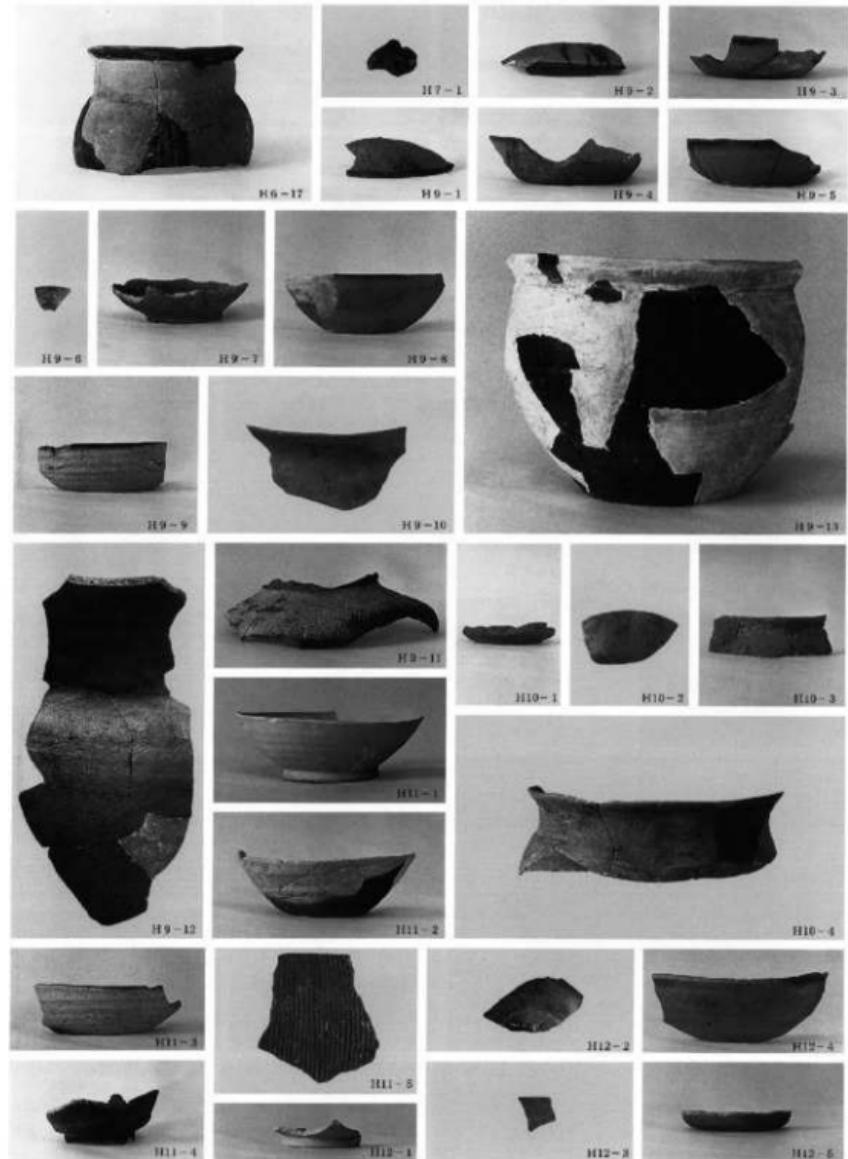


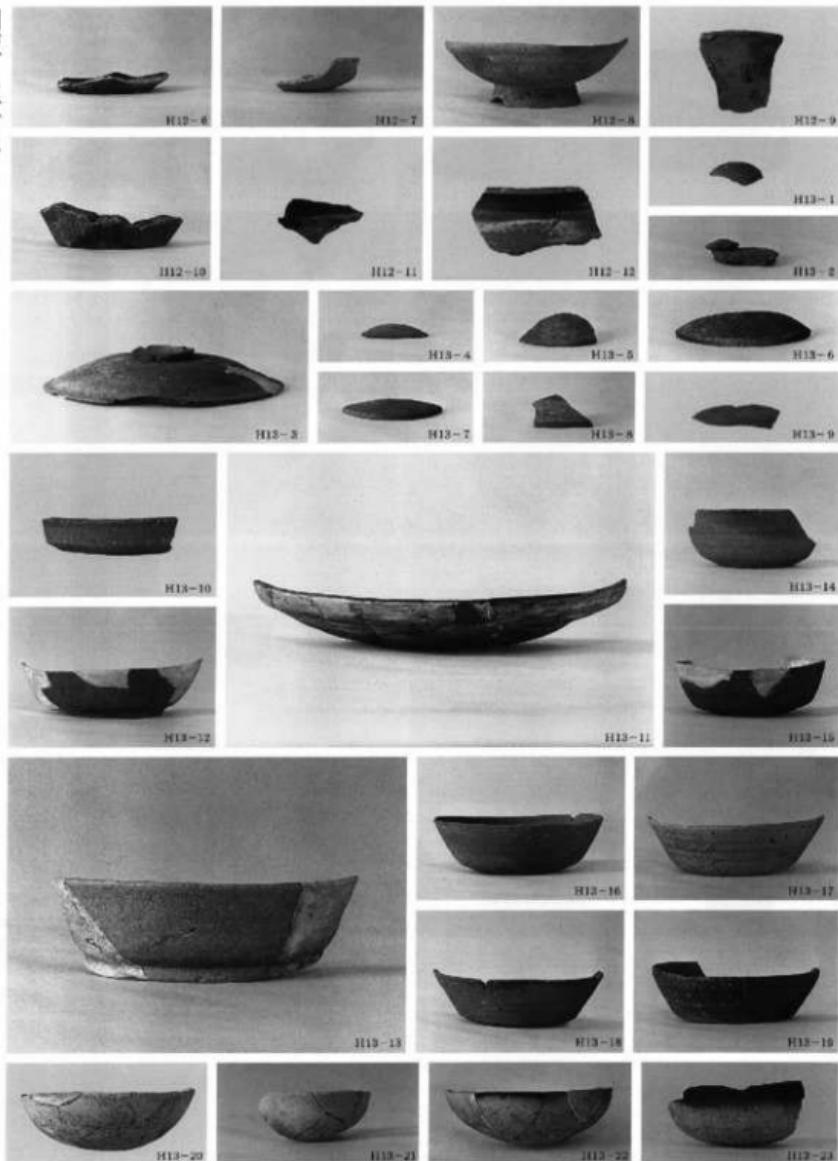
儲田遺跡Ⅱ調查狀況

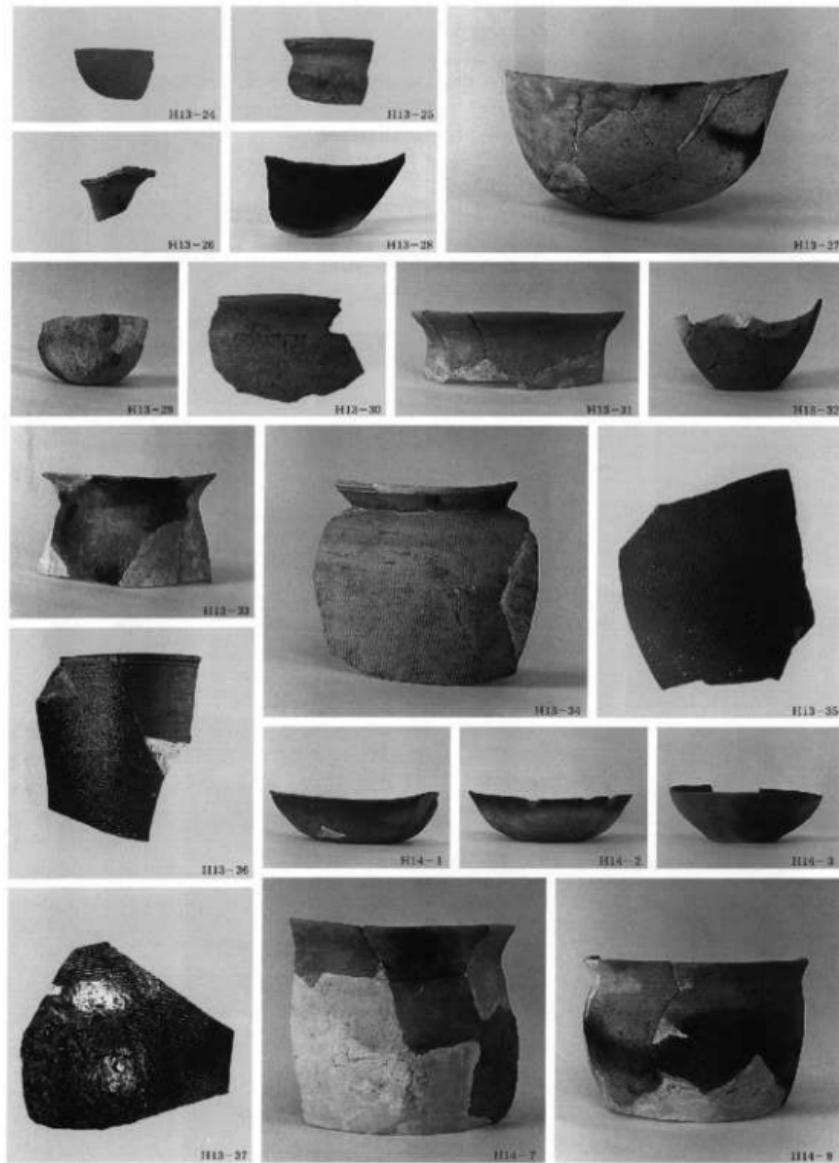


H13号住居址壁柱穴檢出狀況

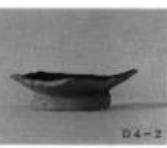


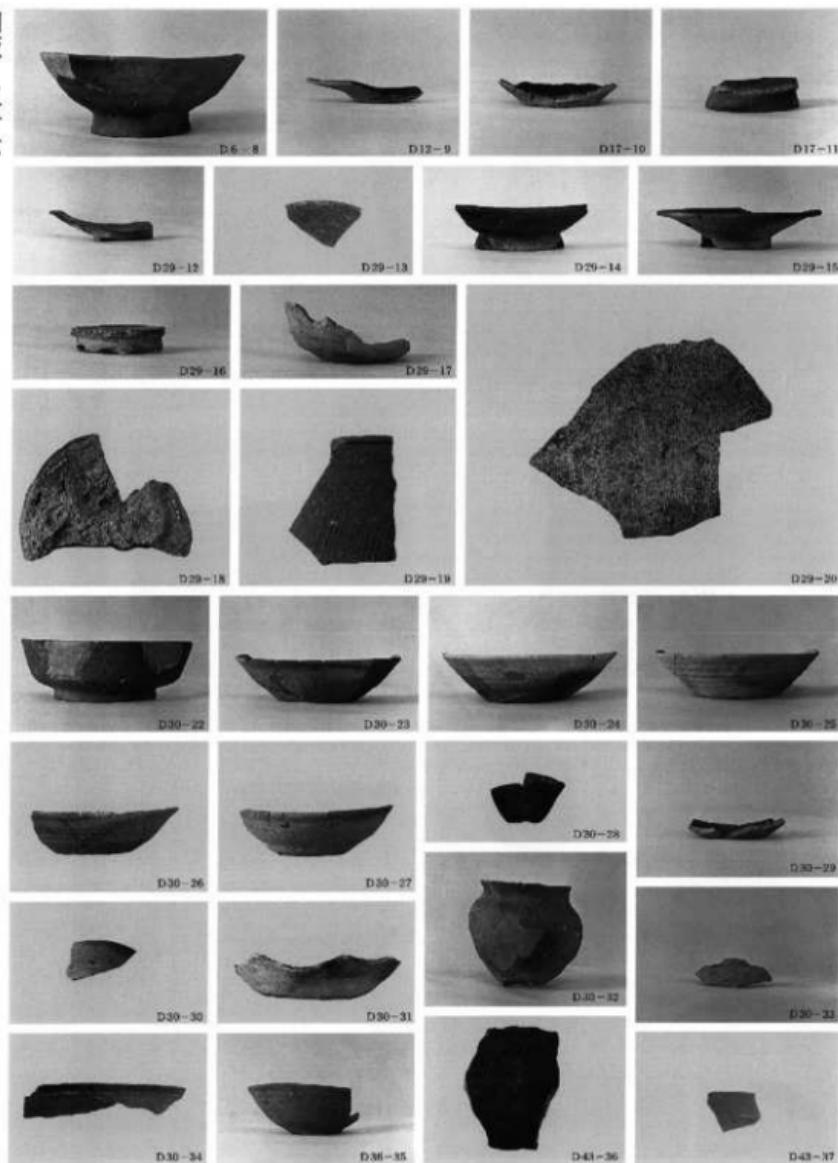


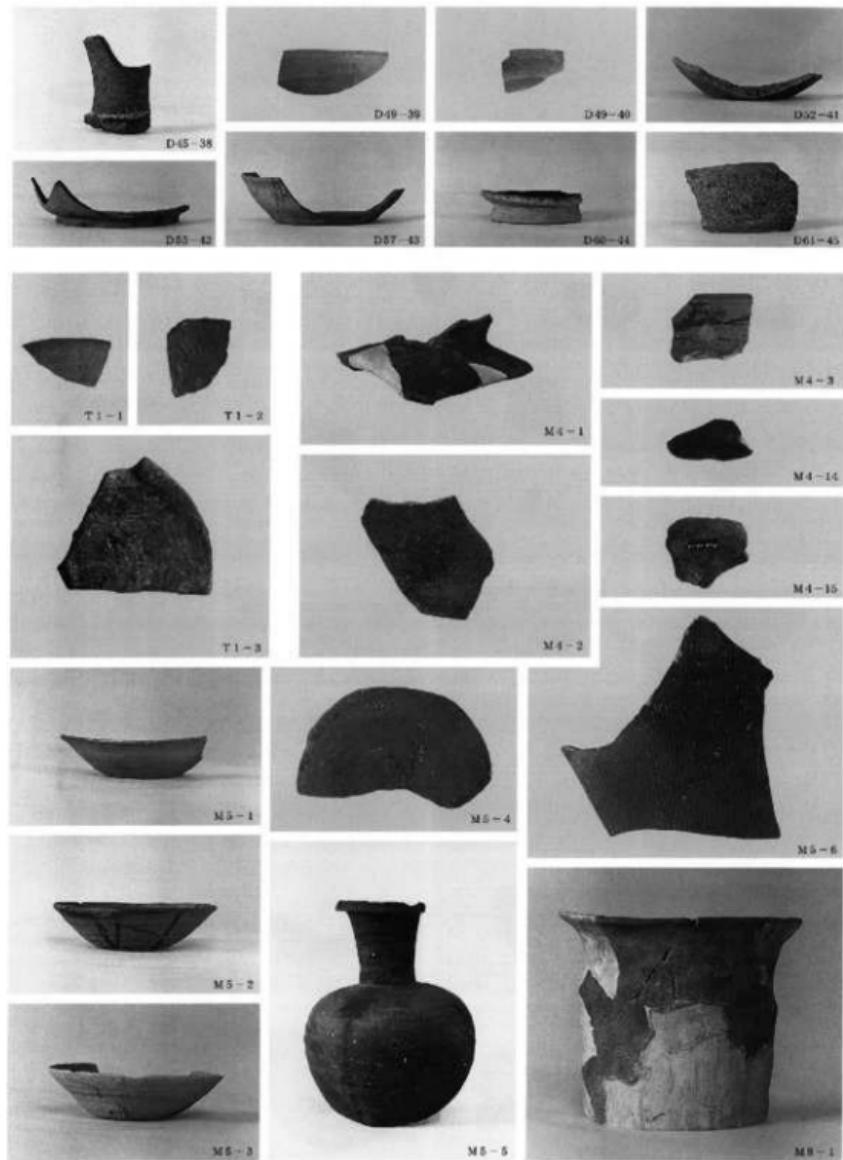


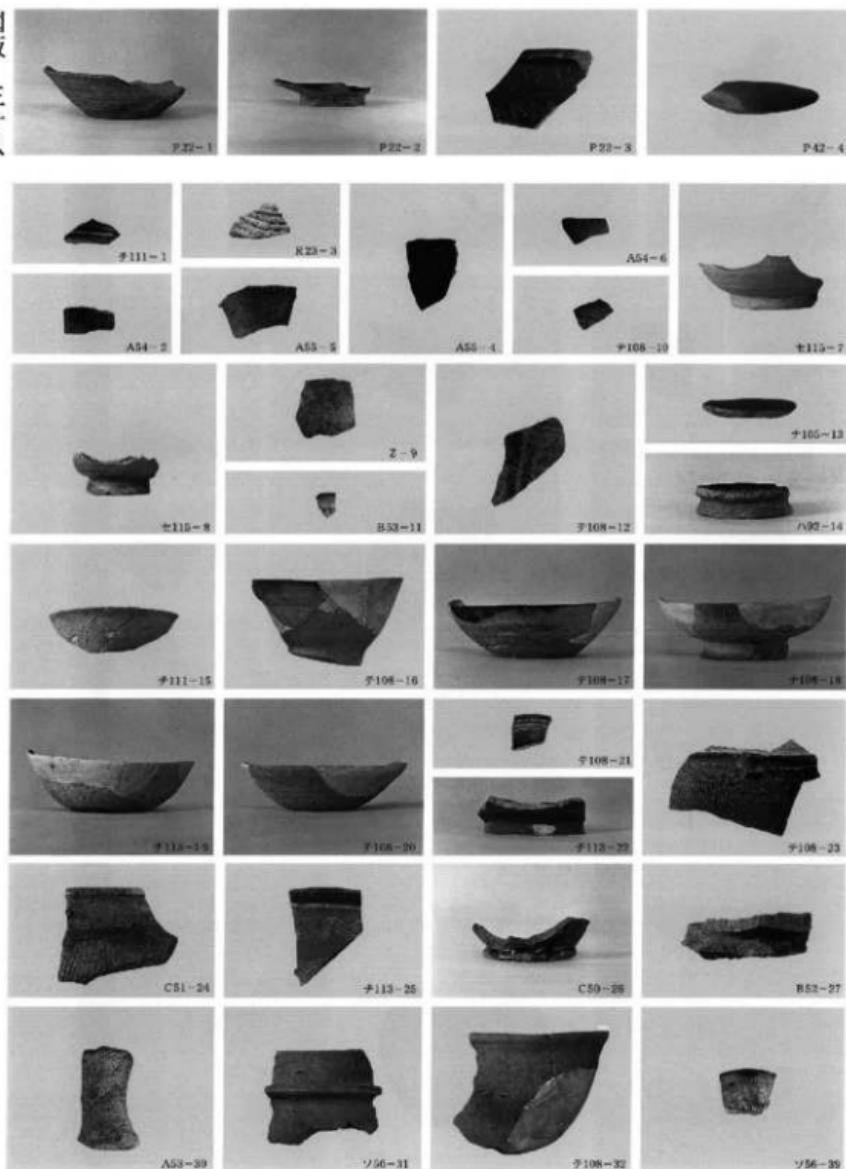


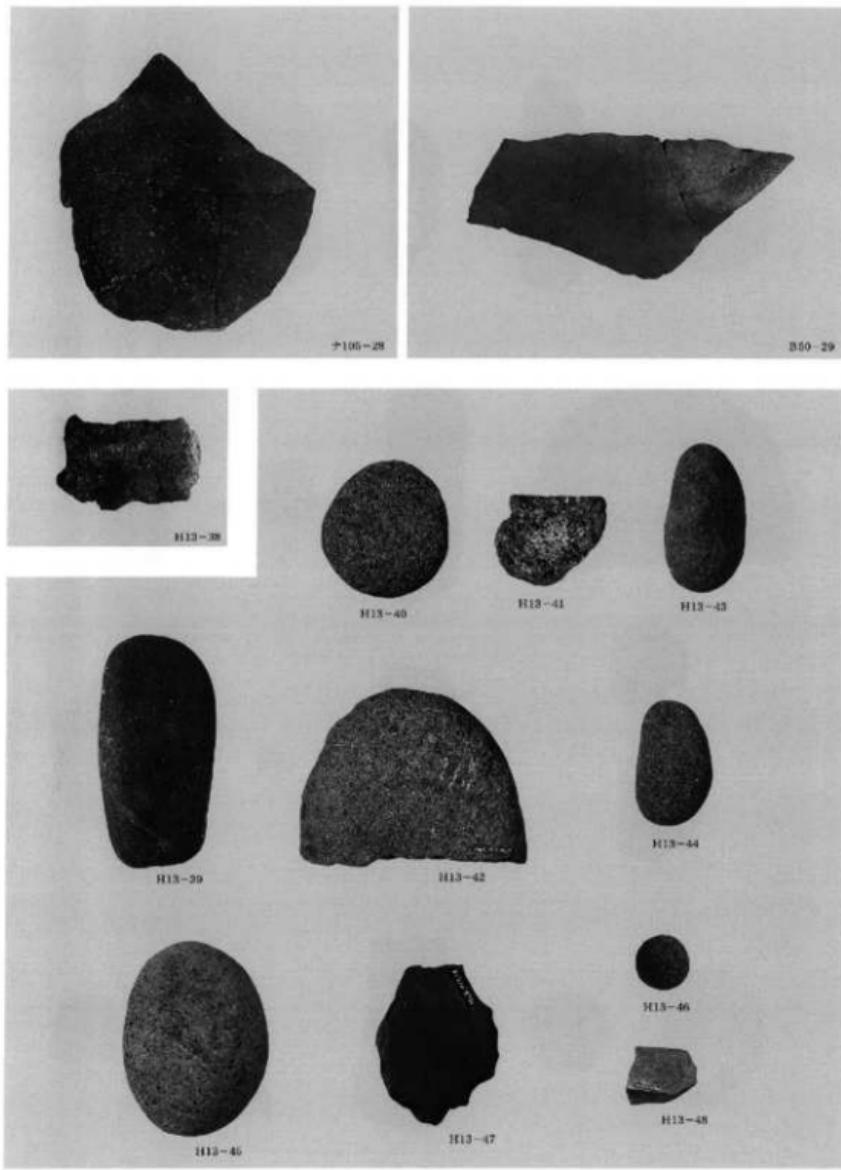


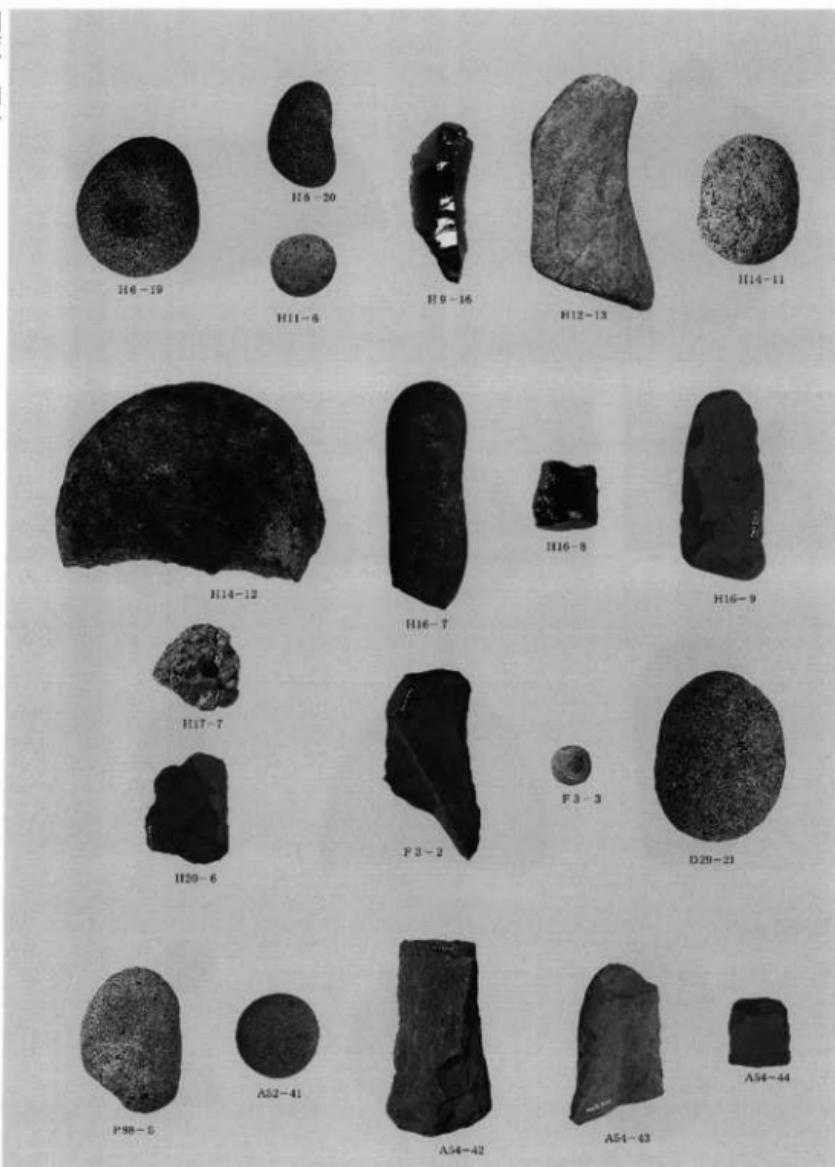


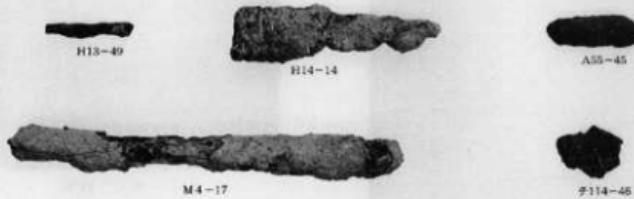
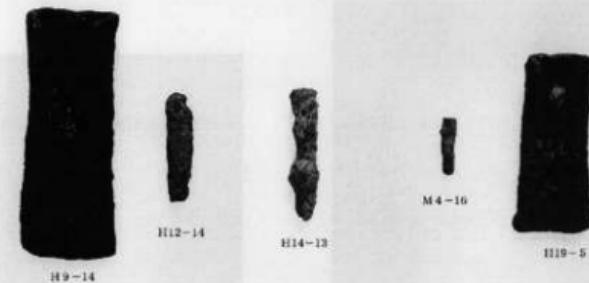
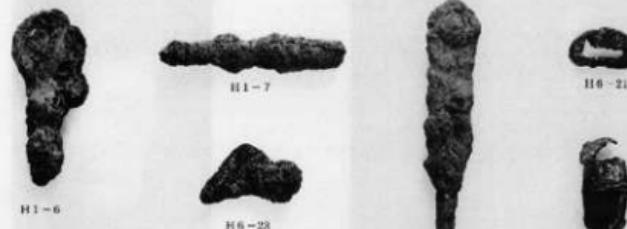


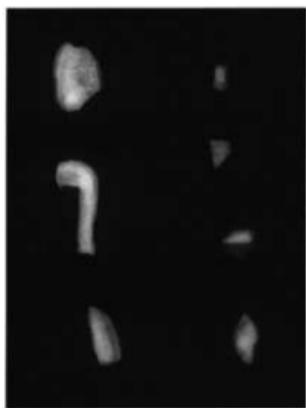












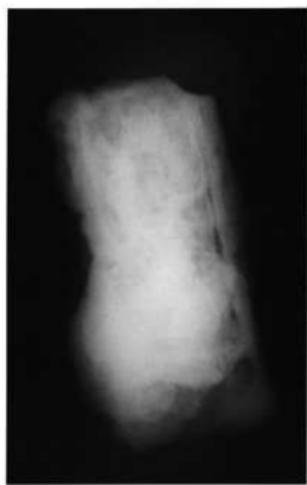
H 6 No.21 丸粒



H 9 No.15 銅金具



H 9 No.14 鉄斧



H 9 No.5 鉄斧

西 裏 遺 跡

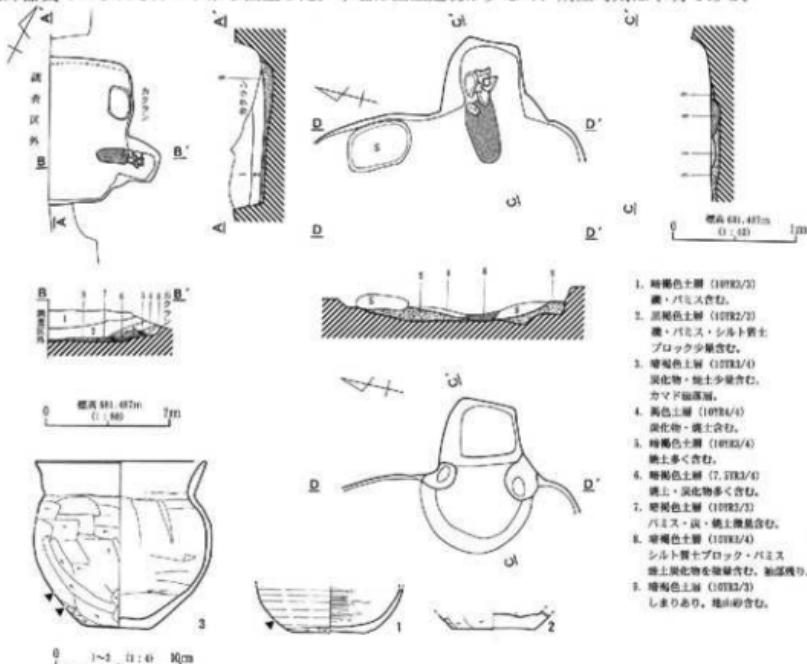
第VI章 西裏遺跡

第1節 積穴住居址

(1) 1号住居址 (第227図、写真図版一・二)

本住居址は、調査地点A区であるq-162.163Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。形態は方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.26m(検出)・南壁0.86m(検出)・東壁2.02mで、壁高さは南壁で最大25cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。住居址検出部分の床面積は2.66m²を測る。床は全体に軟質で貼床が2~18cmの厚さで貼られていた。カマドは東壁南より造られており、燃焼部が住居址壁より飛び出すタイプである。煙道部長さは60cmを測る。火床部は梢円形で良くなじけており、焼土の厚みは7cmを測る。

出土遺物は覆土とカマドから出土した。1は土師器壺であり、内面ミガキが施されている。2とは土師器甕でいずれもカマドから出土した。本址は出土遺物が少なく、所産時期は不明である。



第227図 H1号住居址及び出土遺物実測図

No.	種別	器種	法 規 (山形石 光脚柄 脚部厚)	成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		圖 考	生 土 位 置
				内 面	外 面		
1	土師器	壺	—	5.9 (3.6)	ミガキ	ロクロナデ→底部刮削軸系切り→ 底部周辺舟形ヘラケズリ	完全充満 1区
2	土師器	甕	—	6.7 (1.5)	ナデ	脚部ヘラケズリ→脚部ヘラケズリ	完全充満 カマド
3	土師器	小形甕	13.6 13.3	5.5 13.3	11.9 コナデ→脚部から底部へナナデ	口縁コナデ→底部ヘラケズリ→ 底部ヘラケズリ	完全充満 新闢 カマド

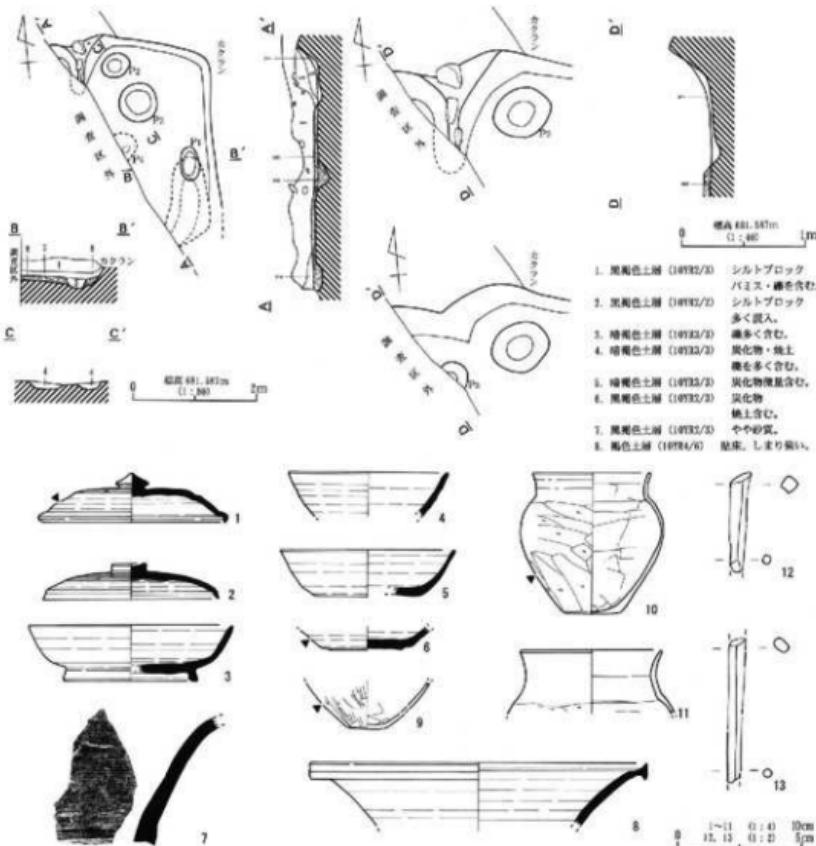
第134表 H1号住居址出土遺物観察表

(2) 2号住居址 (第228図、写真図版二・三)

本住居址は、調査地点A区であるr-159.160、s-159.160Grに位置する。残存状態は住居址西側が調査区域外となる。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁2.55m(検出)・東壁2.98mで、壁高さは北壁で最大28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。住居址の床面積は検出部分で4.26m²を測る。覆土は単層でおおむね自然堆積である。床は全体的に硬質で、貼床は全体に2~12cmの厚さで貼られていた。ピットは掘り方検出時も含め5カ所確認され、規模はP1が径53cm・深さ17cm、P2が径46cm・深さ11cm、P3が径62cm・深さ11cm、P4が径47cm・深さ21cm、P5が径26cm・深さ9cmを測る。

カマドは北壁に造られており、右袖のみ検出された。袖は暗褐色土により構築されており、高さは25cm残存していた。



第228図 H2号住居址及び出土遺物実測図

出土遺物は覆土中から比較的多く出土した。1と2は須恵器蓋であり、つまみ部が1は宝珠、2はリング状を呈する。3は須恵器高台付の付きである。4~6は須恵器壺であり、5と6は底部回転糸切り離してある。7と8は須恵器甕でありいずれも口縁部である。9~11は土師器甕である。12と13は鉄製品で釘と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、8世紀後半に位置づけられる。

No.	種別	形種	法量 印加量/底面厚	成形・調整・文様		備考	出土位置		
				内面	外面				
1	須恵器	蓋	15.3 2.7	つまみ 3.9	ロクロナヂ 自然糊付着	ロクロナヂ→底部右回転ヘラケズリ+つまみ貼付 火拂	完全実測	I・II区	
2	須恵器	蓋	15.2 2.3	つまみ 2.8	ロクロナヂ	ロクロナヂ→大舟型回転ヘラケズリ+つまみ貼付	完全実測		
3	須恵器	高台付	16.4 10.8	4.5	ロクロナヂ	ロクロナヂ→底部回転糸切り(方向不明)→回転ヘラケズリ+村高台	回転実測	I区ホリ方	
4	須恵器	壺	12.8 —	0.60	ロクロナヂ 火拂	ロクロナヂ 火拂	回転実測	I区	
5	須恵器	壺	14.1 8.2	3.7	ロクロナヂ 火拂	ロクロナヂ 底部糸切り	回転実測	I区	
6	須恵器	壺	— 5.6	0.10	ロクロナヂ	ロクロナヂ→底部右回転糸切り	完全実測		
7	須恵器	甕	— —	—	ロクロナヂ	ロクロナヂ	断面		
8	須恵器	甕	27.2 —	0.51	ロクロナヂ	ロクロナヂ 自然糊付着	回転実測	P2	
9	土師器	甕	— 3.2	0.7	ヘラナヂ	側部ヘラケズリ→側ミガキ→底部ヘラケズリ	完全実測		
10	土師器	小型甕	9.6 —	4.8	11.3	口縁ロコナヂ→側部から底部ヘラナヂ	ロコナヂ 火拂ヘラケズリ	完全実測	
11	土師器	小型甕	11.4 —	—	(G.1)	ロコナヂ→側部ヘラナヂ	ロコナヂ→側部ヘラケズリ	回転実測 厚絶	I区
12	鉄	釘	— (4.0)	—	—	—	—	出土位置	
13	鉄	釘	— (G.6)	0.4	—	—	—	I区	

第135表 H2号住居址出土遺物観察表

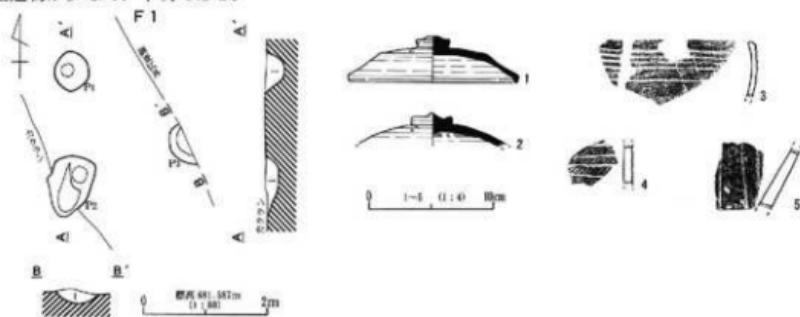
第2節 堀立柱建物址

(1) F 1号堀立柱建物址 (第229図、写真図版三)

本址は、調査地点A区であるq-160.161、r-160.161Grに位置する。残存状態は東側が調査区域外となる。規模は桁行1.80m (P2~P3)・梁行1.70m (P1~P2)を測る。

ピットの形態は円形もしくは梢円形である。ピットの規模はP1が径63cm・深さ33cm、P2が径98cm・深さ40cm、P3が径70cm・深さ22cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものは無い。

本址からの出土遺物は、図示した1と2の須恵器蓋と3~5の綱文土器がある。本址の所産時期は出土遺物が少なく、不明である。



1. 帯横糸土層 (10W3/6) バニス・シルト質ブロック含む。
第229図 F1号堀立柱建物址及び出土遺物実測図

No	種別	若用	法量			成形・調節・文様			備考	出土位置
			山形地盤(柱頭部)		内面	外面				
1	圓底型	蓋	13.5	つまみ 2.5	3.7	ロクロナデ 火拂	ロクロナデ→火井漆面松葉ケズリ →つまみ駒付 火拂	完全実測		
2	圓底型	蓋	—	つまみ 2.6	12.6	ロクロナデ	ロクロナデ→火井漆面松葉ケズリ →つまみ駒付	完全実測	P2	
3	鏡文	蓋	—	—	—				伝本	
4	鏡文	鉢?	—	—	—				伝本	
5	鏡文	鉢	—	—	—				伝本	

第136表 F1号掘立柱建物址出土遺物観察表

第3節 土坑

(1) D 1号土坑 (第230図、写真図版四)

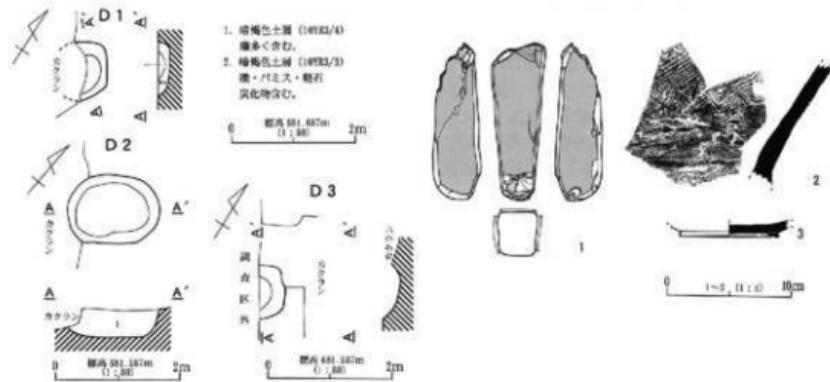
本址は、調査地点A区のp-164Grに位置する。残存状態は西側をカクランにより削平されている。規模は長軸0.96m(残存)・短軸0.34m(残存)・深さ24cmを測る。本址より出土遺物は無かった。

(2) D 2号土坑 (第230図、写真図版四)

本址は、調査地点A区のq-162Grに位置する。残存状態は西側をカクランによって削平されている。形態は梢円形である。規模は長軸1.48m・短軸1.10m・深さ50cmを測る。本址からの出土遺物は図示した砥石があった。

(3) D 3号土坑 (第230図)

本址は、調査地点A区のr-160.161Grに位置する。残存状態は西側が調査区域外となる。規模は長軸0.86m(残存)・短軸0.43m(検出)・深さ38cmを測る。本址より出土遺物は無かった。



1. 暗褐色土層 (10YR3/4) 小穀を含む。

第230図 土坑及び遺構外出土遺物実測図

No	種別	若用	法量			成形・調節・文様			備考	出土位置
			山形地盤(柱頭部)		内面	外面				
2	圓底型	蓋	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ→タキヌメ→波状文	伝本	Z.	
3	圓底型	高合併	—	8.0	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ→底面出脚へうじり→付高合	伝本	Z.	
4	鏡種	本材	残存部	最大長	最大幅	最大厚	重量	所見		出土位置
5	砥石	錐形尖山型	—	12.6	4.3	3.5	—		D2	

第137表 土坑及び遺構外出土遺物観察表



西裏遺跡遺構檢出狀況



西裏遺跡全景



H1號住居址覆土堆積狀況



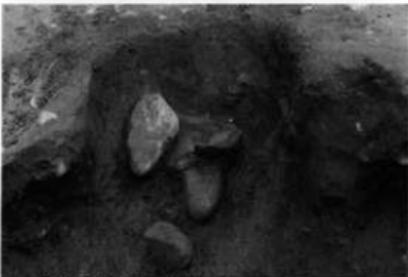
西裏遺跡調查風景



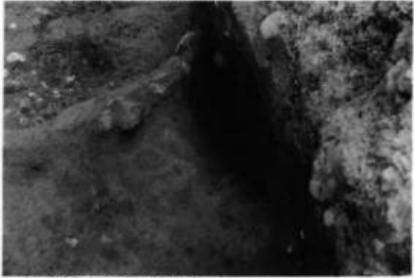
H1号住居址全景



H1号住居址掘り方全景



H1号住居址カマド全景



H2号住居址カマド全景



H2号住居址カマド掘り方全景



H2号住居址全景



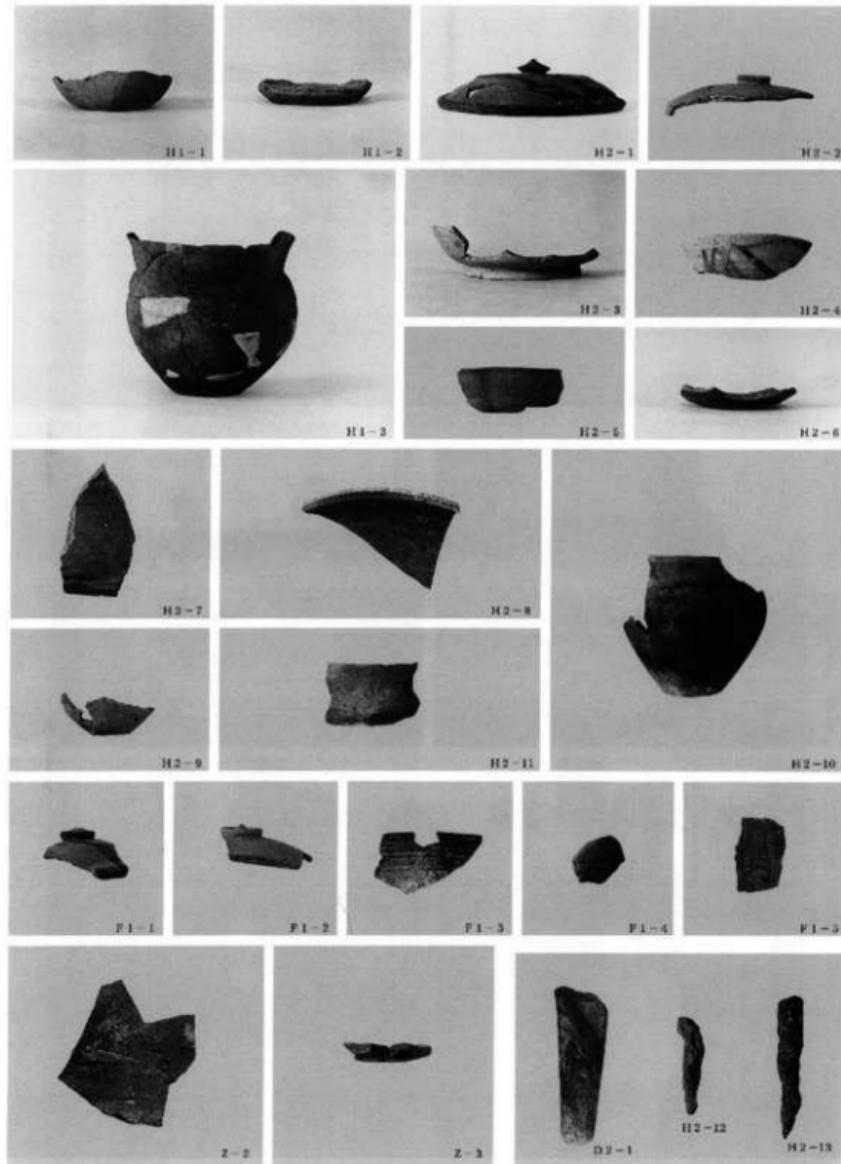
F1号掘立柱建物址全景



D1号土坑



D2号土坑





4車線化工事が完了した国道141号（南佐久郡方面を望む）



整理作業風景

化 学 分 析

第VII章 化学分析及び調査成果

土器内面付着物の材質分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1.はじめに

市道遺跡Ⅲの調査では、内面に付着物が付着した土器が出上した。ここでは、これら付着物の材質を検討するために顕微型赤外分光分析(FT-IR分析)および蛍光X線分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、古墳時代の住居跡(H54、第86図-5)から出土した土器内面付着物である。

付着物は、光沢のある暗褐色(10YR 3/3)の厚さ約400μm前後の付着物である。

分析は、この付着物を同定するために顕微型の赤外分光分析を行った。また、この付着物の無機成分を調べるために蛍光X線分析を行った。各分析の試料採取と分析方法は以下の通りである。

赤外分光分析の測定試料は、付着物表面において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光㈱製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

蛍光X線分析は、各付着物の典型的な部分について直接X線を照射して点分析した。測定は、X線分析顕微鏡(株堀場製作所製XGT-5000Type II)を用いた。測定条件は、X線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500secである。なお、定量計算は、標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

図1の上段に、生漆とともに、各試料の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は吸光度(Abs)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹) : カイザー)である。なお、スペクトルは、ノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。表1には、生漆の吸収位置とその強度を示す。

測定の結果、生漆のピークとほぼ一致したことから、漆と同定される。なお、採取片は、多少厚さにバラツキが見られることから、縮みしわなどは見られないものの漆容器であった可能性が考えられる。

表1 生漆の位置とその強度

吸収No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
位置(cm ⁻¹)	2925	2854	1711	1631	1452	1354	1271	1219	1084	984
強度	0.5446	0.4411	0.3764	0.3115	0.3256	0.2942	0.3341	0.3230	0.2686	0.2203

なお、付着物の蛍光X線分析による無機成分を表2に示すように、鉄Feを4%程度しか含まないことから、ベンガラなどの赤色顔料などは含まれていない(図1の下段)。

表2 上器内面付着物の化学組成 (FP法による半定量分析結果)

測定試料	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	Total
土器内面の付着物(H54,№13)	21.36	38.45	5.43	1.39	27.84	1.22	4.31	100.00

4. おわりに

古墳時代の住居跡(H54、第86図-5)から出土した土器内面付着物について、顕微型赤外分光分析(FT-IR分析)および蛍光X線分析を行い、材質分析を検討した。その結果、漆と同定され、容器として利用された上器と予想された。なお、鉄含有量が低いことから、ベンガラとしての赤色顔料は混和されていないことが分かった。

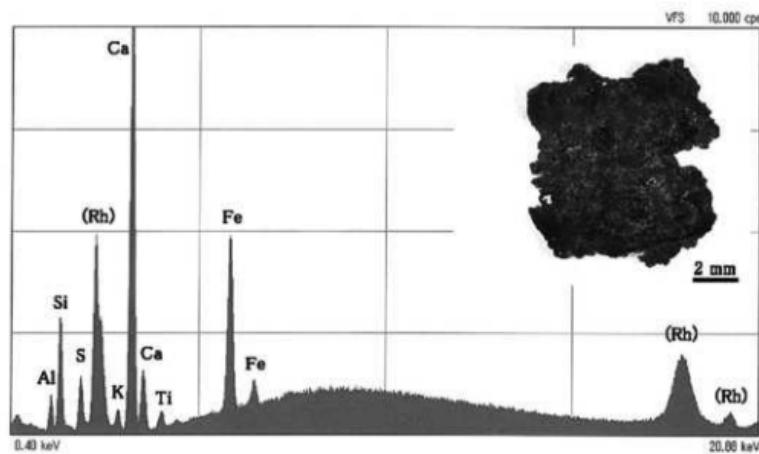
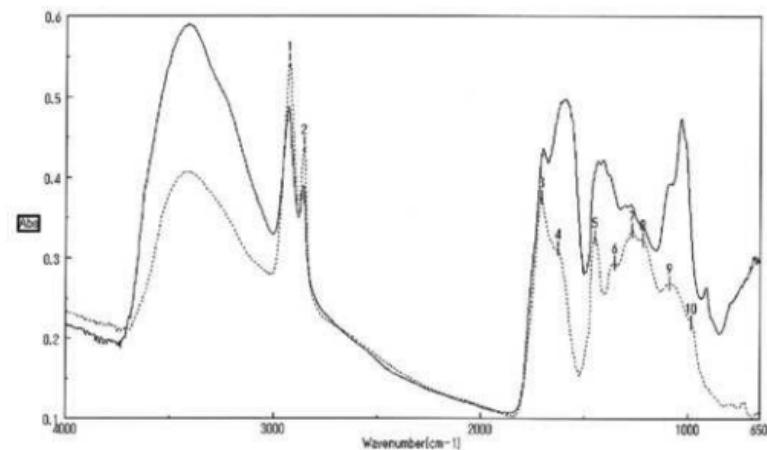


図1 赤外吸収スペクトル図（上段）および蛍光X線スペクトル図（下段）
上段：縦軸が吸光度（Abs）、横軸が波数（Wavenumber (cm⁻¹)；カイザー）
下段：縦軸が強度（cps）、横軸がエネルギー（KeV）

市道遺跡Ⅲから出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. 試料と方法

炭化種実の検討は、抽出済みで袋に乾燥保存された合計3試料について行った。試料が出土した遺構名/区・層は、H8/床面(№7)、H55/V区、H51/Ⅲ区である。

2. 出土した炭化種実および形態記載

H8/床面(№7)：不明炭化物が1個である。上面観は長径6.1mm、短径5.1mm程度の楕円形。側面観は概ね半円形。内部は炭化物のようであるが、表面には砂礫などが付着しており、状態は悪い。種実の可能性を否定はできないが、その判別は困難である。

H55/V区：カキノキ？炭化種子が1個である。カキノキは、炭化状態が良いと光沢があり、カキノキ独特の指紋状の紋様が認められる。試料は、表面の状態が悪く、そのような特徴は見られない。長さ14.1mm、幅9.2mm程度の扁平な楕円形であり、大きさ・外形からカキノキの可能性が考えられた。

H51/Ⅲ区：モモ炭化核の破片が2片であるが、完形1個分に満たない(1/2個分位か)。表面に不規則な溝状の穴が認められる。

3. 考察

同定されたのは、H51/Ⅲ区から出土したモモのみであった。モモは栽培植物であり、明らかな利用植物と考えられる。H55/V区から出土した種実は、カキノキ炭化種子の可能性が考えられたが、カキノキであるとすれば栽培植物である。H8/床面(№7)から出土した炭化物は、種実か否か判別しかねた。



図版1 出土した炭化種実（スケールは1,2が1cm、3が1mm）

1,2.モモ、炭化核、H51/Ⅲ区

3.カキノキ？、炭化種子、H55/V区

4.不明、炭化物、H8/床面(№7)

市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体同定

黒澤一男（パレオ・ラボ）

1. 対象試料および方法

長野県佐久市にある市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体について同定をおこなった。同定は現生標本との比較によりおこなった。

2. 同定結果および考察

市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体について同定した結果を以下に述べる。なお詳しい出土内容および歯の計測値については、表1・2に示す。

表1 市道遺跡Ⅲ検出動物遺体

遺構	出土位置	種名	部位	状態	備考
H19	カマド	大型陸獣	四肢骨？	破片	
H27	カマド	大型陸獣	四肢骨？	破片	
H27	II区	不明	不明	破片	
H37	カマド	大型陸獣	不明	骨幹部破片	
H43	IV区	不明	不明	破片	
H43		大型陸獣	四肢骨	破片	
H45	IV区	大型陸獣	肋骨？	破片	
H54	カマド	不明	不明	破片	
H57	II区	大型陸獣	不明	骨幹部破片	
H57	V区	大型陸獣	不明	骨幹部破片	
Ta25	IV区	不明	不明	破片	
D25		ウマ	遊離歯		左上顎第1切歯～第3切歯、第2前臼歯～第3後臼歯 右上顎第1切歯～第3切歯、第2前臼歯～第3後臼歯 左下顎第1切歯～第3切歯、第2前臼歯～第3後臼歯 右下顎第1切歯～第3切歯、第2前臼歯～第3後臼歯

※「大型陸獣」としているものには、家畜（ウマ、ウシ）の可能性も考えられる。

[D25]

D25からはウマの遊離歯（No.631）が出土している。この遊離歯には一部、頸骨片が付着しており、その状態は風化し、脆弱になっている。そのような状態ではあるが、下顎上顎の切歯と臼歯すべてが検出されている。臼歯の全歯高（歯根中心部と咬合面中心部の直接距離；久保和士・松井章1999）の計測をおこなった結果（表2）、およそ4～5才程度の若い成獣個体と推定される。また犬歯が検出されていないが、付着している骨の残存状況から考えると、犬歯が残らなかった可能性も考えられるので雌雄の判別は困難である。

表2 市道遺跡Ⅲ検出ウマの全歯高計測値

		第2前臼歯 P2	第3前臼歯 P3	第4前臼歯 P4	第1後臼歯 M1	第2後臼歯 M2	第3後臼歯 M3
上顎	左	49.2	計測不可	61.0	61.0	(70.3)	(64.8)
	右	49.9	70.4	63.2	63.0	70.5	(63.7)
下顎	左	41.7	(66.3)	(74.5)	(68.1)	(70.7)	(66.4)
	右	41.5	(66.5)	(73.2)	(66.9)	72.4	(64.5)

※()付きの計測値は、歯根部が破損しているため、周囲の形状より中心部を推定しての計測値である。

【そのほか】

そのほか8遺構より11試料の骨片が検出されている。H19カマド、H27カマド、H37カマド、H57 II区とV区より検出されている骨片は、骨幹の緻密質部分で、その厚さが厚いことからウシやウマの家畜も含めた大型陸獣のものと考えられる。いずれにおいても破片化しており、動物種や部位の同定にはいたらない。

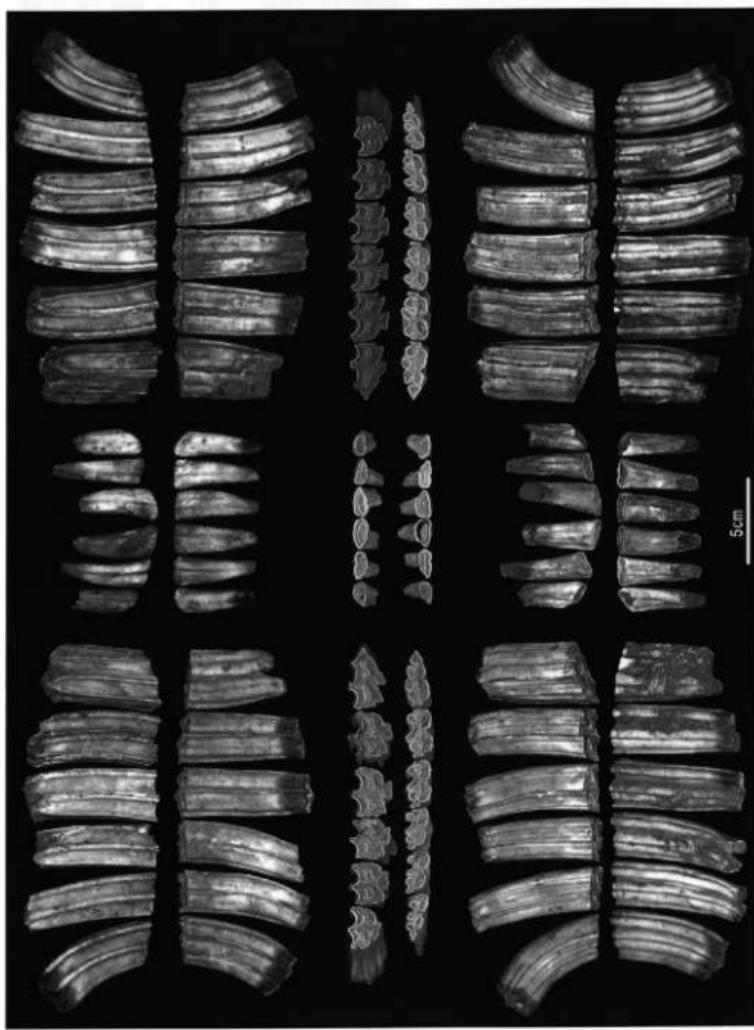
3.まとめ

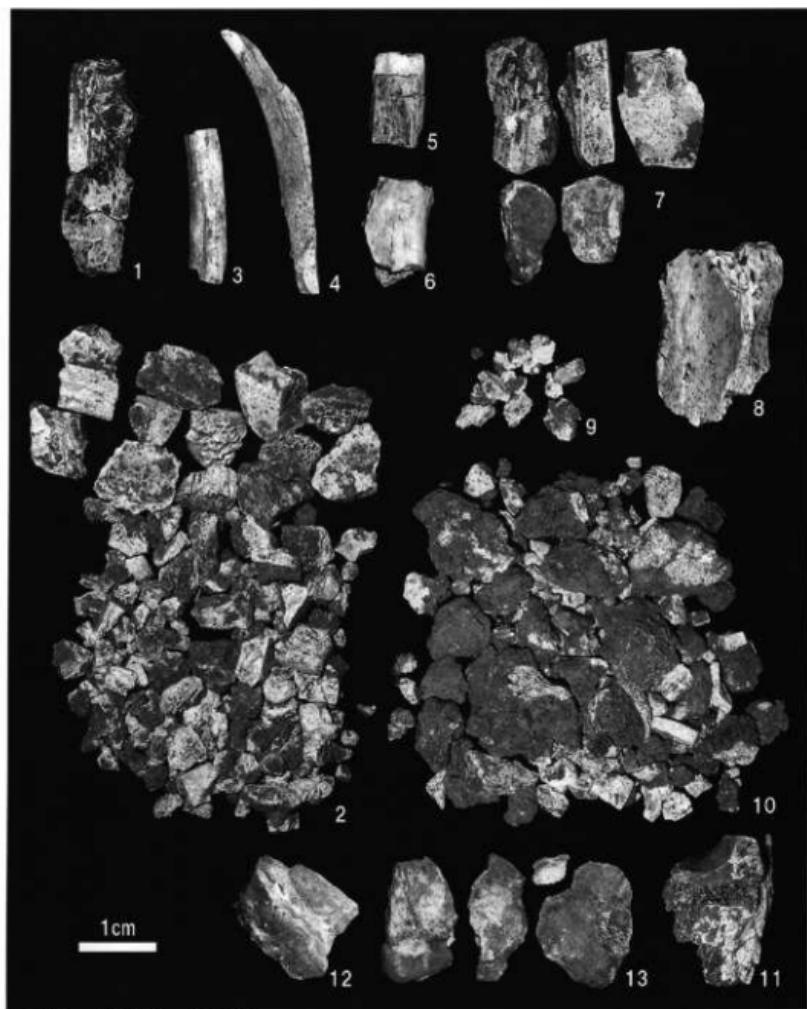
市道遺跡Ⅲから出土した動物遺体を同定した結果、ウマが1個体いたことは明らかになった。またそれらは4~5才程度の成獣であった。そのほかのものは、残存状態が悪く、破片化していることから同定にはいたらず、詳細な検討は不可能である。

引用文献

久保和士・松井章(1999)第9章家畜〈その2—ウマ・ウシ〉、西本豊弘・松井章編「考古学と動物学」、169-208.

圖版1 市道遺跡III D25出土ウマ
(上段 : 外側面, 中段 : 吻合面, 下段 : 内側面)





図版2 市道遺跡III出土骨片

- | | | |
|------------|-------------|----------|
| 1・2H19 カマド | 3H57 II区 | 4H37 カマド |
| 5H57 V区 | 6H45 IV区 | 7H43 IV区 |
| 8H54 カマド | 9・10H27 カマド | |
| 11H27 II区 | 12Ta25 IV区 | |

市道遺跡Ⅲから出土した炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは、古墳時代中期から平安時代後期の焼失竪穴住居跡4軒から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

当遺跡は、野沢平の沖積微高地に立地し、古墳時代中期から平安時代後期および中世の集落址が検出されている。このような立地環境の集落地では、古墳時代中期から平安時代後期にどのような建築材を利用していたのかを知る目的で、焼失竪穴住居跡の炭化材樹種調査が実施された。

2. 試料と方法

同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、横断面の特徴で分類群を特定できる試料はこの段階で同定を決定した。それ以外の試料は、材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、材組織を走査電子顕微鏡で拡大して観察を行ない同定した。

走査電子顕微鏡用の試料は、横断面は手で割り、接線断面と放射断面は各方向に沿って片刃の剃刀を当て軽く弾くように割り、この3断面を5mm角以下の大さに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、佐久市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を表1に示し、表2では住居跡ごとの検出樹種を集計した。

H19の4点からは、コナラ節(2点)とクヌギ節(2点)が検出された。

H27の15点は、コナラ節14点と微破片のためにコナラ節またはクリとした1点が検出された。樹種同定用試料は出土した炭化材の一部分であるが、20年輪以上を含む破片が多かった。また試料16は、加工痕?が見られ、試料17・18・21は柾目板状の破片であった。

H51の13点はコナラ節10点、保存が悪く広葉樹としか判らなかったものが1点、保存が悪く同定不可が1点、ススキ属の集積した試料が1点であった。

H47の4点は、すべてクヌギ節であった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

(1)コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版1 1a-1c(H47-7) 2a(H19-30)

年輪の始めに大型の管孔が主に1層配列し、その後は孔口が円形で厚壁の小型管孔が単独で放射状に配列し、接線状・網状の柔組織が顯著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單穿孔、チロースがある。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状のものがある。

クヌギ節は落葉広葉樹で、クヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帶～温帶の山野や人里に普通で、二次林にも多い。

(2)コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1
3a(H27-16) 4a(H51-14)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、急または徐々に径を減じ、晩材部では孔口が多角形で薄壁の小型管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。接線断面と放射断面は、前述のクヌギ節と同様である。

コナラ節は落葉広葉樹で暖帯～温帯の山地や人里に生育し、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

(3)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 5a(H19-29)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に分布する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。横断面の管孔配列はコナラ節と類似しているが、クリは広放射組織が出現しない。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(4)コナラ属 *Quercus*

やや小型の管孔と広放射組織があることが観察されたが、小破片で保存も悪いため、1年輪の管孔配列などは不明である。従って、広放射組織を持つコナラ節・クヌギ節・アカガシ亜属を含めるコナラ属の同定に留まった。

(5)コナラ節またはクリ *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* or *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

晩材部は小型管孔が火炎状に配列する環孔材で、放射組織は単列である。非常に小さな破片であるため、広放射組織の有無は確認できなかった。従って、広放射組織を含むコナラ節の可能性もあるので、クリまたはコナラ節の同定に留めた。

(6)広葉樹 broad-leaved tree

保存が悪いために、管孔が有ることしか確認できなかった試料である。

(7)ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版1 6a(H51-12)

直径約5mmの草本性の稈が、同一方向に多数集積した塊状のものであった。保存の良い一本の稈の横断面を観察した結果、個々の維管束が散在する不整中心柱で、稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた小さな維管束が1～2層並んでいる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ（茅）と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られるススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。

4. 考察

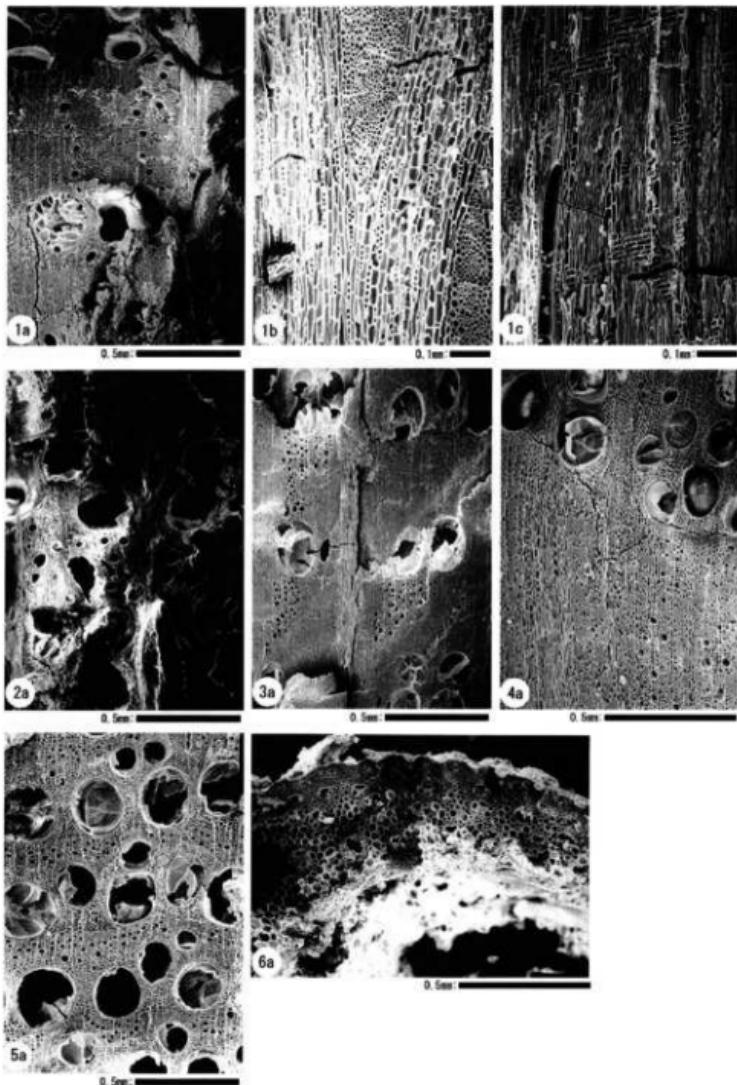
古墳時代中期～平安時代後期の焼失堅穴住居跡4軒から出土した炭化材の樹種は、コナラ節が多く、次にクヌギ節が多かった(表2)。コナラ節は3軒から共通して検出された。またH27のコナラ節は、放射方向の径(放射径)が3cmほどの破片に、年輪数が20～40年輪あるものが多く見られ、加工痕のある炭化材や、柾目板状の破片であることから、比較的樹齢が多い原本を加工して利用していたと想定される。コナラ節の樹種が豊富に生育しており、入手が容易であったのではないだろうか。

表1 市道遺跡Ⅲの竪穴住居跡(古墳中期～平安後期)出土炭化材樹種同定結果一覧

出土遺構	試料	樹種	備考(横断面形状・年輪数など)
H19	29	コナラ節	柾目状の破片 ぬか目材 放射径2.6cmで36年輪あり
	30	クヌギ節	板目状の破片 放射径1.2cmで9年輪あり
	31	クヌギ節	分割材? 放射径3.0cmで15年輪あり
	32	コナラ節	推定φ4cmの 芯持ち丸木破片
H27	16	コナラ節	柾目状の破片 片端に加工痕?あり 放射径3.2cmで37年輪あり
	17	コナラ節	柾目板状の破片 放射径3.1cmで34年輪あり
	18	コナラ節	柾目板状の破片 放射径2.0cmで21年輪あり
	19	コナラ節orクリ	微破片
	20	コナラ属	小破片で保存悪い
	21	コナラ節	柾目板状の破片 放射径1.3cmで17年輪あり
	22	コナラ節	放射径0.8cmで9年輪あり
	23	コナラ節	放射径1.9cmで17年輪あり
	24	コナラ節	放射径3.5cmで26年輪あり
	25	コナラ節	放射径2.0cmで23年輪あり
	26	コナラ節	放射径1.4cmで19年輪あり
	27	コナラ節	板目板状の破片 放射径0.7cmで10年輪あり
	28	コナラ節	放射径3.5cmで22年輪あり
	29	コナラ節	放射径2.5cmで31年輪あり
	30	コナラ節	放射径3.4cmで40年輪あり
H51	3	コナラ節	分枝部を含む破片 放射径3.5cmで12年輪あり
	4	コナラ節	節部を含む芯持ち破片
	5	コナラ節	放射径1.2cmで9年輪あり
	6	コナラ節	板目状破片
	7	コナラ節	放射径3.5cmで25年輪あり
	8	コナラ節	放射径2.5cmで9年輪あり
	9	コナラ節	放射径1.2cmで15年輪あり
	10	コナラ節	φ4cm芯持ち丸木 13年輪あり
	11	同定不可	保存悪いため
	12	スキ属	φ0.5cmの幹(茎)が同一方向に多数集積。その下位に樹皮らしきものあり
	13	コナラ節	薄破片
	14	コナラ節	分割材? 放射径1.8cmで6年輪あり
	15	広葉樹	保存悪いため
H47	5	クヌギ節	放射3.0cmで10年輪あり
	6	クヌギ節	放射径4.0cmで17年輪あり
	7	クヌギ節	放射径3.5cmで18年輪あり
	8	クヌギ節	放射径3.0cmで15年輪あり

表2 住居跡ごとの検出樹種集計

検出樹種	占墳中期～平安後期の住居跡				合計
	H19	H27	H51	H47	
クヌギ節	2			4	6
コナラ節	2	13	10		25
コナラ節ORクリ		1			1
コナラ属		1			1
広葉樹			1		
ススキ属			1		1
同定不可			1		1
合計	4	15	13	4	36



図版1 市道遺跡Ⅲの堅穴住跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真
 1a-1c:クヌギ節(H47-7) 2a:クヌギ節(H19-30) 3a:コナラ節(H27-16)
 4a:コナラ節(H51-14) 5a:クリ(H19-29) 6a:スキ属(H51-12)
 a:横断面 b:接線断面 c:放射断面

市道遺跡Ⅲの放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur Lomtatidze・Inez Jorjoliani・藤根 久

1. はじめに

長野県佐久市の市道遺跡Ⅲと辻遺跡より検出された土器付着物について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5697	市道遺跡Ⅲ 遺構:D-41 遺物:第117図-24	試料の種類:土器付着物・内面(おこげ) 状態:dry カビ:有	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH ^a
PLD-5698	辻遺跡 遺構:I-12 遺物No:第131図-10	試料の種類:土器付着物・外側(煤化) 状態:dry カビ:有	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDII

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1 \delta$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

曆年較正

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal3.10(較正曲線データ:INTCAI.04)を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲

であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
PLD 5697	-29.26 ± 0.15	1100 ± 20	895AD(26.4%)920AD 945AD(41.8%)985AD	890AD(95.4%)990AD	1099 ± 21
PLD-5698	-27.65 ± 0.16	1260 ± 20	690AD(59.5%)750AD 760AD(8.7%)775AD	670AD(93.1%)780AD 790AD(2.3%)810AD	1262 ± 22

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された。

遺構D41から出土した土師器内黒杯の内面付着物（PLD-5697）は、古代の遺物であるが、暦年代較正の結果、 1σ 暦年代範囲において945-985 cal AD(41.8%)、 2σ 暦年代範囲において890-990 cal AD(95.4%)であり、 2σ 暦年代範囲において9世紀末～10世紀末であった。

一方、辻遺跡の遺構H2から出土した土師器壺外面付着物（煤類;PLD-5698）は、古墳時代であるが、暦年代較正の結果、 1σ 暦年代範囲において690-750 cal AD(59.5%)、 2σ 暦年代範囲において670-780 cal AD(93.1%)であり、 2σ 暦年代範囲において7世紀末～8世紀末であった。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmle, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

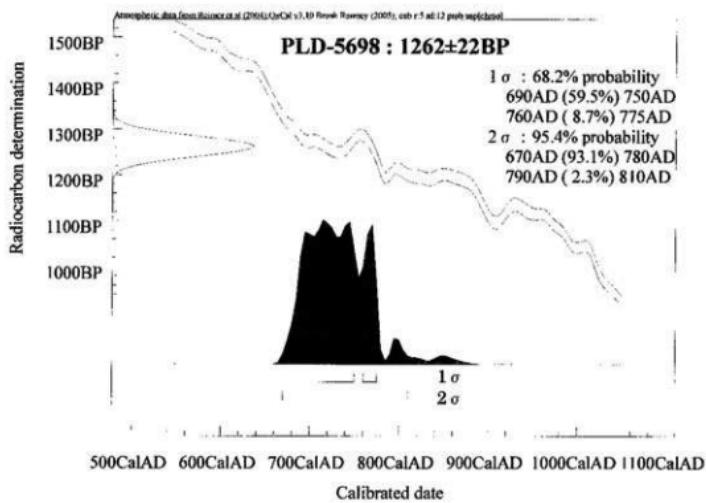
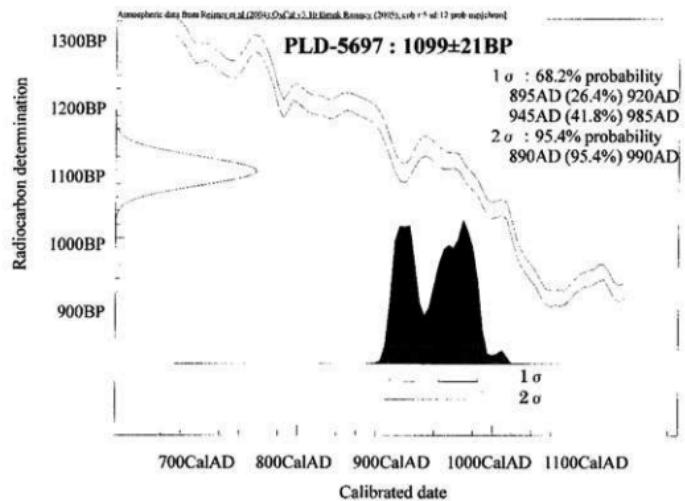
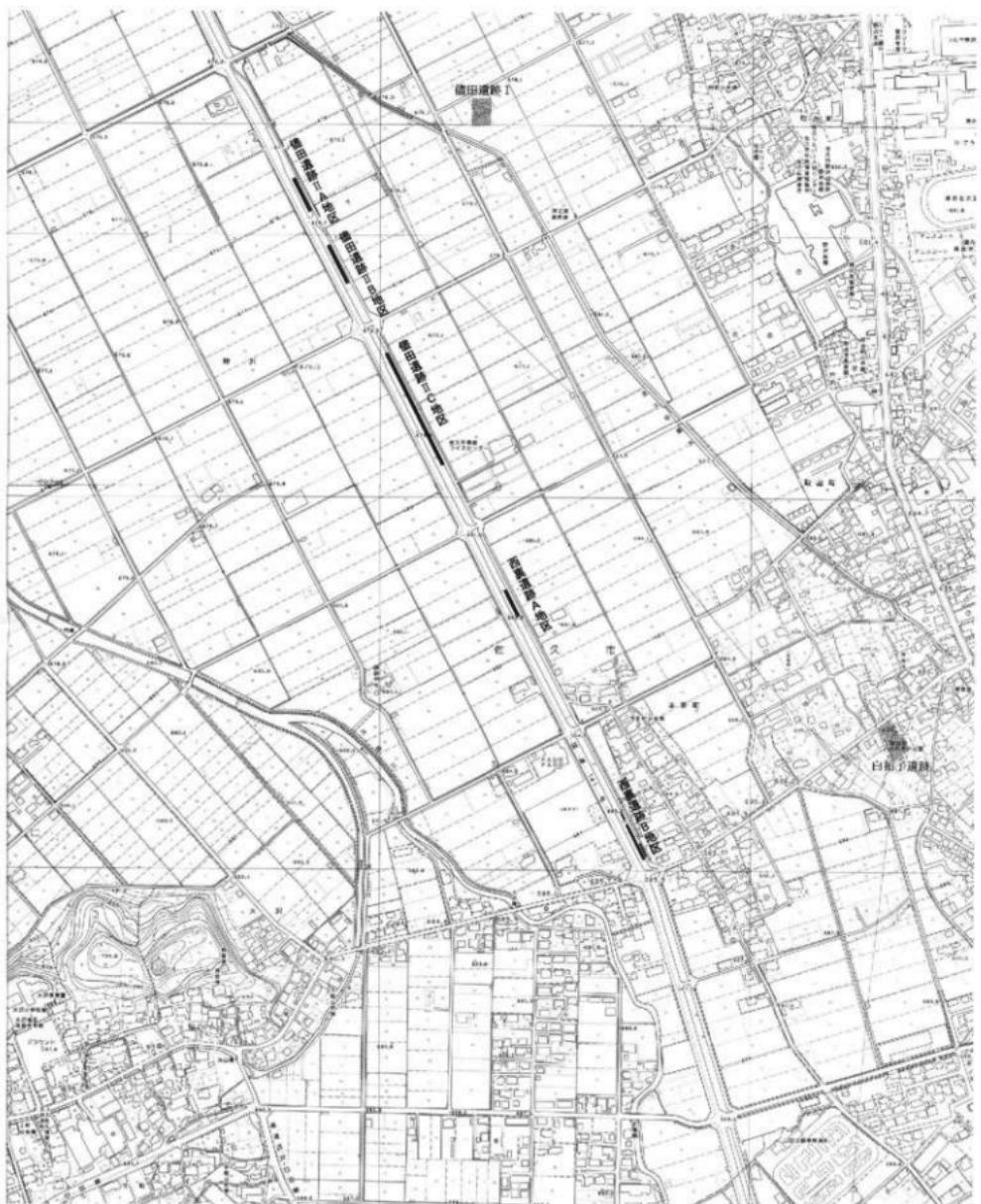
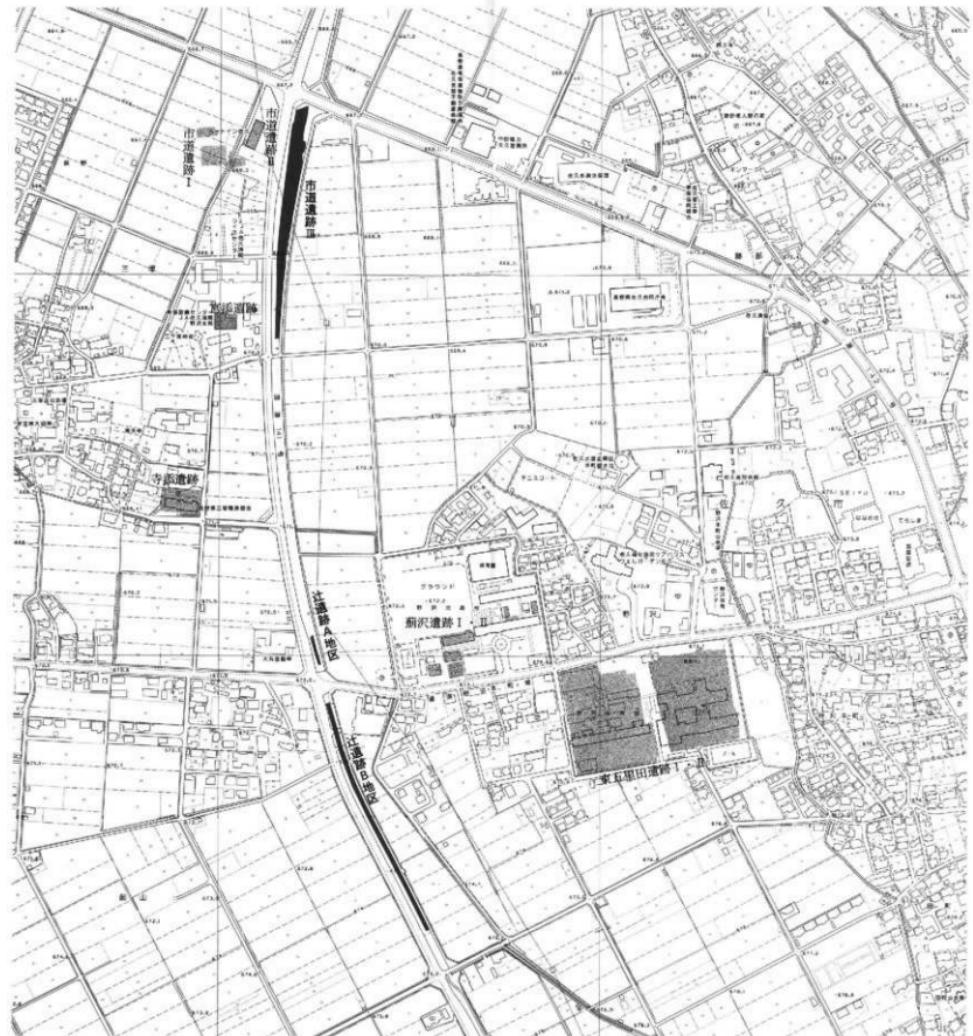


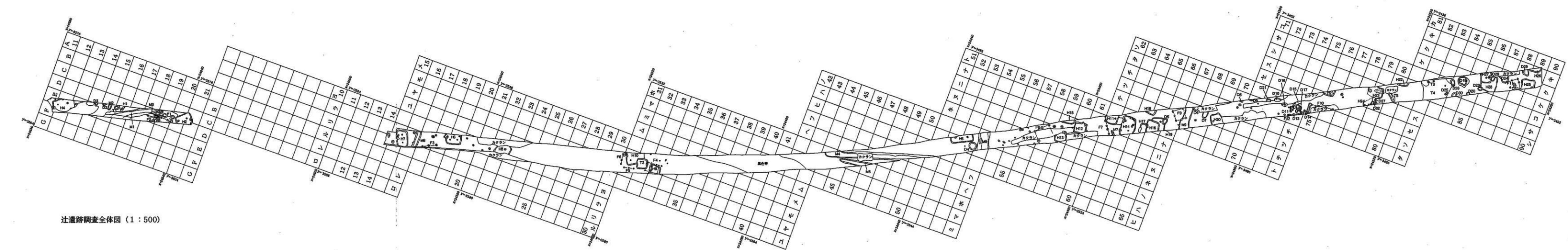
図1 暦年較正結果

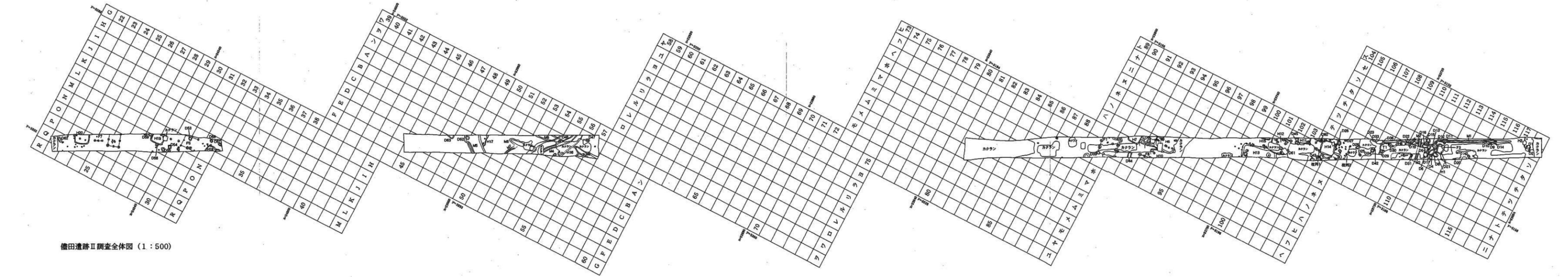


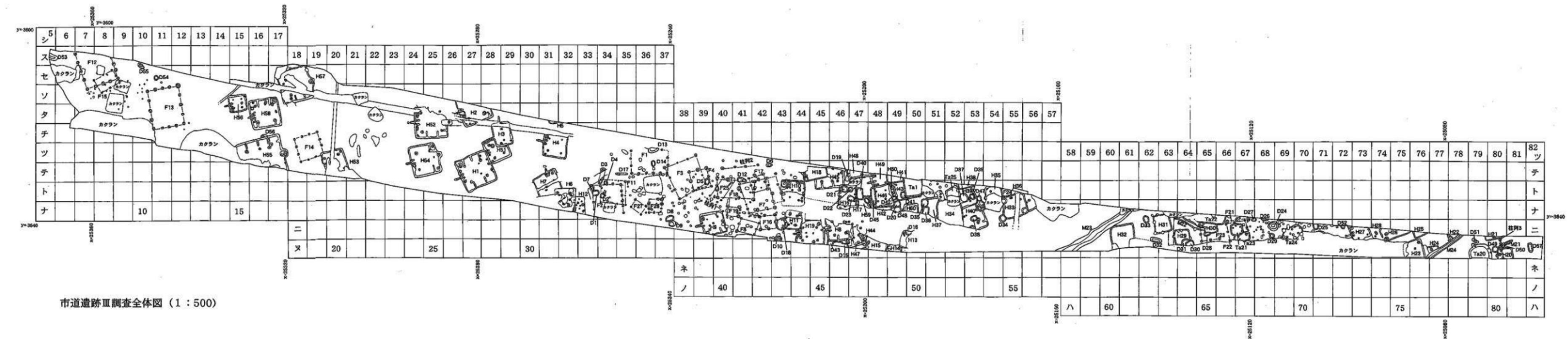
塙田遺跡Ⅱ・西夷遺跡調査位置図（1：5,000）

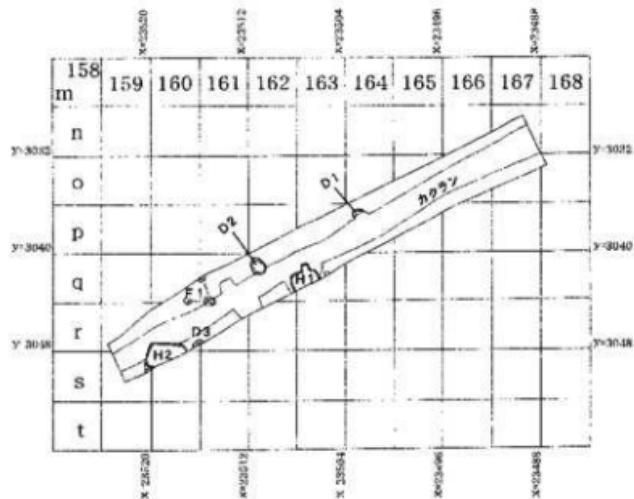


市道跡Ⅲ・古道跡調査位置図（1：5,000）









西浦遺跡調査全体図（1：500）

報告書抄録

書名	市道遺跡Ⅲ 让遺跡 儀田遺跡Ⅱ 西裏遺跡
ふりがな	いちみちいせき つじいせき ままだいせき にしらいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第148集
編著者名	宮沢一明
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2008.3.19
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	三千束遺跡群 市道遺跡Ⅲ (1MⅢ) 中道遺跡群 让遺跡 (NTJ) 儀田遺跡Ⅱ (MaⅡ) 西裏遺跡群 西裏遺跡 (HNU)
遺跡所在地	佐久市跡部・三塚・野沢・本新町
遺跡番号	417 412 424 491
経度	市道遺跡Ⅲ 138°27'34" 让遺跡 138°27'37" 儀田遺跡Ⅱ 138°27'53"
緯度	市道遺跡Ⅲ 36°13'37" 让遺跡 36°13'17" 儀田遺跡Ⅱ 36°12'50"
調査期間	2005.9.9~2006.12.1 (現場) 2006.12.2~2008.3.19 (整理)
調査面積	市道遺跡Ⅲ 5195m ² 让遺跡 2911m ² 儀田遺跡Ⅱ 2319m ² 西裏遺跡 656m ²
調査原因	国道141号改良工事
種別	聚落址・散布地
主な時代	古墳時代～中世
遺跡概要	遺構 整穴住居址・壁穴状造構116軒(古墳～中世) 捕立柱建物址47棟 土坑137基 漢状造構20本 特殊造構6基 遺物 繩文土器(加曾利型) 弥生土器(猪清水) 上師器 須恵器 古製品 鉄製品 石製模造品(臼玉・劍・有孔) 灰釉陶器 緑釉陶器 円面鏡 扇字鏡 青銅製品(輪足金具・丸軸) 青磁 白磁 古漁戸 東漁系山鏡 近世陶磁器類 馬骨
特記事項	本発掘調査は佐久市域の南側に広がる沖積低地「野沢平」において南北3kmに及ぶトレンチ調査を行ったような状況となり、今まで不明瞭であった沖積地の遺跡範囲についてわざわざながら状況が把握できた。結果4遺跡において古墳時代から中世に及ぶ集落が検出され、佐久平では初めての出土となる「扇字鏡」等の特殊資料も出土した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第148集

市道遺跡Ⅲ 辻遺跡

儘田遺跡Ⅱ 西裏遺跡

2008年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハライニング術
